

黒潮あたる鹿児島島の海

内之浦漁港に氷揚げされる魚たち

小枝 圭太・畑 晴陵
山田 守彦・本村 浩之

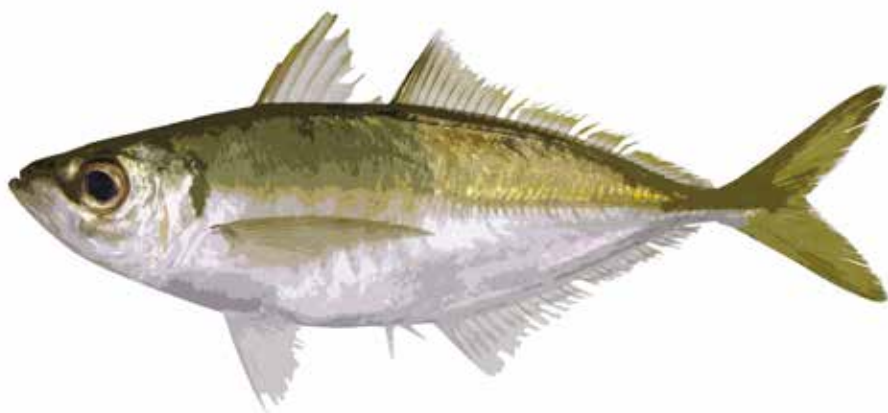






黒潮あたる鹿児島島の海
内之浦漁港に氷揚げされる魚たち

小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之



まえがき

本著を作成するに至った経緯について、述べたいと思う。

私が初めて内之浦漁港を訪問したのは2013年秋であった。当時、私は沖縄の琉球大学に所属しており、その翌年度からお世話になることになる鹿児島大学総合博物館（その時点では未定）の見学のため、鹿児島市内に滞在していた。琉球大学に入学してから魚と本格的に関わるようになった私にとって、鹿児島市内でみられた魚は温帯性の種ということで新鮮味はあるものの、研究対象というよりはむしろ、美味しそうという印象が強かったように思う。そんな折、同博物館所属の学生から内之浦漁港の存在をきかされた。市内からは遠く離れるものの、定置網がたくさん入り、小さいものから大きいもの、温帯性の魚から熱帯性の魚まで様々な魚がとれる市場があるというのである。私のフライトは翌日の夕方迫っていたが、当時、博士課程だった目黒昌利さんに無理をいって車を出してもらい、早朝発の弾丸ツアーで内之浦漁港へ連れて行ってもらうことになった。本書の編著者である畑 晴陵くん（当時、学部4年生）と高知大学から同じく博物館を訪問していた三澤 遼くん（当時、修士課程）も同乗して、初めての桜島フェリーに乗り、白む夜道を走る約3時間で内之浦漁港に到着した。市場の方たちは、突然現れた奇妙な人間たちに邪険にすることなく、商品であるはずの魚たちを快く提供してくださった。漁獲されていた魚たちも噂に違わず充実していて、私の収集欲が一気に燃え上がったのを今でも覚えている。興味をくすぐるたくさんの魚たちに加え、私の研究対象であるハタンボ科魚類も数多く水揚げされているのも嬉しい発見だった。優しい市場の方々、面白い魚たち、たくさんのハタンボ。私は鹿児島で暮らすことになったなら、ここを市場調査の中心にしようと心に決めたのであった。今にして思えば、あの弾丸ツアーがなければ、内之浦漁港の魅力にここまで惚れ込むこともなかったかもしれない。

2014年度から晴れて私は日本学術振興会特別研究員（PD）として鹿児島大学総合博物館に所属することとなった。鹿児島市内は便利の良い街で、移動はもっぱら自転車や市電のため、学生のほとんどは車をもっていない。私は鹿児島に引っ越したら内之浦へ通おうと心に決めていたので、沖縄で乗り回したオンボロ愛車を連れてきていた。決めていた通り、私は引っ越した月から毎月1回以上は内之浦漁港を訪ねるようになった。というのも、私はハタンボ科魚類の分類の研究と並行して、生活史の研究をしていたのだが、この研究のためには毎月まとまった数の標本を集める必要があったためである。所属していた鹿児島大学総合博物館の本村浩之先生の研究室は、離島などでのフィールド調査がとても多く、ひと月の半分以上も出張に出ていることはざらであった。そんな日々の中でも、何とか出張の合間をみつけては、ハタンボを集めるため、また博物館としての魚類コレクションの充実を図るために市場へと通い続けた。



■ 初めて訪問した内之浦漁港。魚の量と多様性に圧倒された（右手前が筆者、その奥に畑くん）

内之浦を訪れる際は前夜のうちに到着し、漁港のすぐそばに車を止めて車内で一泊するようにしていた。というのも、水揚げの日の早朝に大学を出発して、水揚げに参加し、大学に戻って夜まで持ち帰った魚を標本にする、という行程はとてつもなく体力を消耗し、危険なほどの睡魔に襲われるからである。車中泊をしていた理由として、研究費があまり潤沢ではなかったこともあるが、なにより内之浦漁港の水揚げが始まるタイミングが毎日違うため、動き始めるギリギリまで睡眠がとれることが大切であった。内之浦の町にとっては経済的に何ひとつ貢献しない面倒な奴でしかなかっただろう。冬には車のなかであっても凍えるほど寒くなるので、羽毛布団と寝袋に湯たんぽやカイロまで持参して乗り切った。翌日にはどんな魚が採れるのか、ただただそれが楽しみであった。

はじめの1年はほとんど一人で内之浦に通っていたが、2年目になると前出の畑くんが同行してくれるようになった。先にも書いたが私は沖縄の海でカラフルな魚たちと関わっていたためか、温帯の魚や銀色の魚に関する知識がとにかく不足しており、どの魚を標本として持ち帰るべきかチンプンカンプンであった。どれほど私が魚を理解していなかったかというと、タカベ科のタカベという魚を存在すら知らず、ササムロだと勘違いして拾っていたほどである。温帯の魚や銀色の魚に詳しい彼の加入で標本の集まりは飛躍的に進んだと思う。また、お喋り好きの私にとって、片道3時間を越える長時間運転中に話し相手がいるということは、大変ありがたかった。

3年目になり、鹿児島大学総合研究博物館に所属できる最後の年となった。ここで初めて、2人のあいだで図鑑作成の話がでた。図鑑を作るとなると、これまで以上に網羅的に魚を集める必要がでてくる。これまで集めた魚たちは、市場に並ばないようないわゆる“雑魚”がほとんどで、市場に並ぶような価値のある魚たちはほとんど集めておらず、マダイやタチウオといった超が付くほどメジャーな魚たちですら標本にしていなかった。それもそのはず、それまではこぼれた魚を餌として狙うサギたちさながらに、ウロウロと選別場所の周囲で様子を伺ったり、ちょこっとお手伝いをしては魚を頂戴していたのである。このような背景から最後の1年は市場で魚を購入することも多くなり、仲買さんたちとの交流も増えた。最後の半年は、穴埋め作業のように「これがないと図鑑として恥ずかしい種リスト」を片手に漁港を探し回った。こうして2017年春、鹿児島を離れるのと同時に、内之浦漁港に通う私の3年間が終了した。

この3年間で、市場の方々の協力もあり約2,000点もの標本を集めることができた。これに加え、私が通うようになる以前に研究室のOBさんたちが収集した標本や、2003年から定期的に内之浦漁港に通っていたいおワールドかごしま水族館の山田守彦さんからも貴重な標本の数々を提供していただけたことで、最終的には3,000点を越える標本を内之浦漁港で集めることができた。このなかには500種を越える魚類が含まれており、鹿児島海でよくみられる魚たちはもちろん、普通は寒い海に棲む魚から暖かい海に棲む魚、浅い海の魚から深い海の魚まで多種多様な魚種が得られている。こんな魚がなんで定置網に！というような極めて稀な種や、なんでこの魚がここで採れるの！？というようなこれまで分布が確認されていなかった種も数多く含まれていた。さらに、これまでに集めた標本を確認してみると、日本からの分布記録のないヒメジ科ウミヒゴイ属の標本が含まれていることが分かった。採集日は2013年10月10日、前述の私が初めて内之浦漁港を訪問した日に気付かず採集していたのである。自身で採取したものにそれほど貴重なものが含まれていたことを見逃していたとは、研究者として恥ずかしい限りではあるが、この機会に本種の詳細な形態を示したうえで、新たな標準和名の提唱もおこなった。定置網では幅広い魚種が得られるとはいえ、1カ所の漁港においてこれほど多種多様な魚類が採集されたことは本当に驚きである。

いざ、この図鑑をまとめるにあたり、本にするには集まった魚種がそれでもまだ不十分なのではないかとも考えた。また、ただか3年間、回数にして50回も通っていない「ぼつと出」の人間が、このような形で内之浦漁港の魚について語って良いのだろうかと考えることもあった。しかし通っているうちに、船や漁港の方たちに話しかけてもらえるようになり、珍しい魚があったよ！と教えてもらえたり、魚の購入に融通をきかせていただいたり、とても親切にいただいた。こうした方々へのささやかな恩返しのため、そして集めた魚たちに成仏してもらうため、さらには鹿児島には内之浦漁港というとんでもなく面白い市場があるのだ、ということの世界に向けて発信するため、ここで一度、内之浦漁港で確認された魚たちを報告したいと思う。おそらく、ここで紹介した魚たちは、内之浦漁港に実際に現れる魚たちのうちのまだ一部なのであろう。今後、さらなる面白い魚たちがこの漁港に現れることを心待ちにしている。また、南日本沿岸の魚類の理解への一助となるため、可能な限り多くの写真と詳細な解説を執筆した。稚拙ながら本書を通じて、一人でも多くの方々が魚や海、自然の面白さに今以上の関心を抱いてもらえることを期待したい。

最後に、毎回の車中泊に文句も言わず付いて来てくれるだけでなく、膨大な文量の原稿を書き上げてくれた畑晴陵くん、稀少な写真や標本の数々を提供して下さったいおワールドかごしま水族館の山田守彦さん、経済的、精神的なサポートをいただき、また、図鑑として出版の機会を与えて下さった本村浩之先生に、この場を借りて感謝いたします。

小枝圭太 2017年11月16日

目次

まえがき	2	イットウダイ科	110	ヒメジ科	324
目次	4	ヒウチダイ科	114	ハタンポ科	339
調査の概要	5	マツカサウオ科	116	チョウチョウウオ科	344
内之浦湾の概要	6	マトウダイ科	117	キンチャクダイ科	352
内之浦漁港	7	ウミテング科	118	カワビシャ科	355
定置網漁業の流れ	8	ヘラヤガラ科	119	ゴンベ科	356
魚類の体	9	ヤガラ科	120	タカノハダイ科	357
凡例	10	サギフエ科	122	アカタチ科	359
ヌタウナギ科	11	ヨウジウオ科	123	スズメダイ科	360
ネコザメ科	12	ボラ科	125	シマイサキ科	364
オオセ科	14	トウゴロウイワシ科	126	タカベ科	367
ジンベエザメ科	15	ナミノハナ科	128	ユゴイ科	368
トラフザメ科	16	サヨリ科	129	インダイ科	369
ネズミザメ科	17	トビウオ科	131	イスズミ科	371
オナガザメ科	20	ダツ科	140	カゴカキダイ科	374
トラザメ科	21	サンマ科	142	メジナ科	376
タイワンザメ科	22	ハチ科	143	イボダイ科	378
ドチザメ科	23	メバル科	144	エボシダイ科	380
メジロザメ科	25	フサカサゴ科	148	ツバメコノシロ科	383
シュモクザメ科	33	オニオコゼ科	158	ベラ科	386
ツノザメ科	35	ハオコゼ科	163	ブダイ科	389
カスザメ科	36	イボオコゼ科	164	トラギス科	393
ウチワザメ科	37	ホウボウ科	166	ワニギス科	395
シビレエイ科	38	コチ科	172	ミシマオコゼ科	396
アカエイ科	39	セミホウボウ科	180	イソギンポ科	399
ツバクロエイ科	46	アカメ科	182	ネズツボ科	402
マダラトビエイ科	47	スズキ科	183	ハゼ科	404
トビエイ科	49	ホタルジャコ科	184	マンジュウダイ科	405
ソトイワシ科	51	ハタ科	186	アイゴ科	407
ウツボ科	52	キントキダイ科	199	ツノダシ科	409
ホラアナゴ科	58	テンジクダイ科	204	ニザダイ科	410
ウミヘビ科	59	アマダイ科	221	マカジキ科	416
アナゴ科	64	ムツ科	222	カマス科	418
ハモ科	68	コバンザメ科	223	タチウオ科	423
クズアナゴ科	71	スギ科	227	サバ科	426
ニシン科	72	シイラ科	228	ヒラメ科	437
カタクチイワシ科	80	ギンカガミ科	230	ダルマガレイ科	442
ネズミギス科	85	アジ科	232	カレイ科	447
ゴンズイ科	86	ヒイラギ科	262	ササウシノシタ科	448
ムネエソ科	87	シマガツオ科	268	ウシノシタ科	453
シャチブリ科	88	ハチビキ科	270	モンガラカワハギ科	456
エソ科	89	フエダイ科	271	カワハギ科	458
ハダカイワシ科	94	タカサゴ科	283	ハコフグ科	467
クサアジ科	95	マツダイ科	289	フグ科	473
フリソデウオ科	96	クロサギ科	290	ハリセンボン科	491
チゴダラ科	98	イサキ科	293	マンボウ科	494
サイウオ科	99	イトヨリダイ科	304	引用文献	498
アシロ科	101	タイ科	308	標準和名索引	510
アンコウ科	102	フエフキダイ科	315	学名索引	514
カエルアンコウ科	104	ニベ科	320	謝辞	518
アカグツ科	107	キス科	323	編者・著者紹介	519

調査の概要

鹿児島大学総合研究博物館では「鹿児島県魚類多様性調査プロジェクト」の一環として毎年、島嶼域を中心とした魚類相調査をおこなっている。2008年～2009年には屋久島の調査をおこない、同島から標本に基づく初記録374種を含む951種を報告した(Motomura and Matsuura, 2010)。2010年～2011年には地理的に屋久島と県本土の間に位置する三島村(硫黄島、竹島、昭和硫黄島)の調査をおこない、414種を報告した(本村ほか、2013)。2011年～2014年には奄美群島の最南端に位置する与論島において調査をおこない697種を報告した(本村・松浦、2014)。また、宇治群島や奄美群島の与路島・請島において初めてとなる魚類採集調査もおこない、それぞれ148種と89種を報告した(Motomura et al., 2016; Koeda et al., 2016a)。さらに2017年末には屋久島に隣接する口永良部島における魚類相調査の成果を報告し(木村ほか、2017)、2018年春にはこれまでの奄美群島における調査の包括的報告もなされる予定である。

本博物館では、これら島嶼域における魚類相調査と並行して鹿児島県本土における魚類標本の収集をおこなっており、その一環として薩摩半島頰娃からは147種を報告した(岩坪・本村、2016)。さらに先日、鹿児島湾内から収集した494種を掲載した図鑑「火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類」が出版された(岩坪・本村、2017)。

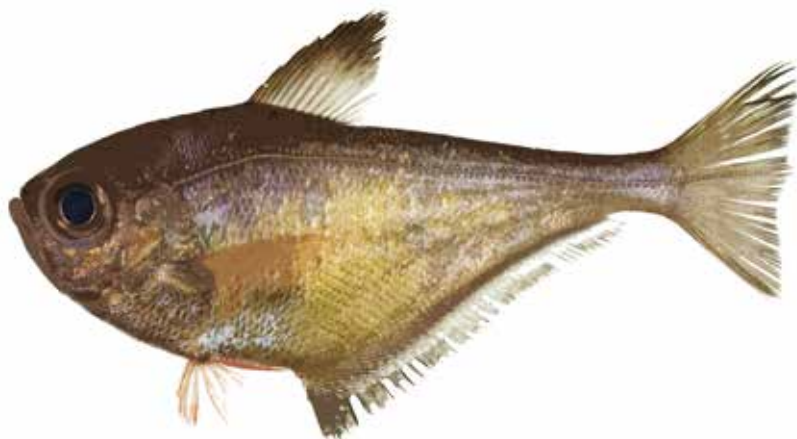
これら薩摩半島と鹿児島湾においては魚類に関する報告がなされたものの、大隅半島のとりわけ太平洋沿岸の魚類に関する報告はない。大隅半島太平洋沿岸は南から流れる黒潮が接近し、暖かい海水が運び込まれることにより豊かな漁場となっている。内之浦漁港は、大隅半島太平洋沿岸に位置する内之浦湾で漁獲された魚がおもに水揚げされ、本博物館では、2008年以降この漁港において魚類収集調査を継続的におこなってきた。

本調査によってシログネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba*、コンゴウテンジクダイ *Ostorhinchus fleurieu*、アカネヒメジ *Upeneus guttatus* などが、日本初記録などによって新標準和名が提唱され(畑ほか、2012a; Motomura et al., 2012; 吉田・本村、2015)、ハシナガアナゴ *Oxyconger leptognathus*、ユキフリソデウオ *Zu cristatus*、センネンダイ *Lutjanus sebae*、リュウキュウハタンポ *Pempheris adusta* など数多くの魚種が種の分布北限を更新する記録や分布の空白を埋める記録として報告された(小枝ほか、2015; 小枝・本村、2015; 畑ほか、2017a)。また、サクヤヒメジ *Upeneus itoui* は今回の調査によって得られた標本に基づいて新種として記載された(Yamashita et al., 2011)。

本調査によって、内之浦漁港で水揚げされる魚類から140科525種が記録された。本書ではこれら全種をカラー写真で紹介する。上記のすでに出版済の種に加え、本書ではロケットヒメジ(新称) *Parupeneus janseni* が日本初記録として掲載されている。また、本書ではスダレヤライイシモチ *Cheilodipterus intermedius*、オオグチイシチビキ *Aphareus rutilans* などを九州沿岸からの初記録として、さらにドタバカ *Carcharhinus obscurus*、ホシダルマガレイ *Bothus myriaster* やケショウフグ *Arothron mappa* などを鹿児島県本土からの初記録として掲載した。

本書では内之浦漁港にごく普通に水揚げされる種については概ね網羅されていると思うが、依然として数多くの魚種が記録できていないであろう。また野外での採集調査等をほとんどおこなっておらず、本書にもこれらを含めていないため、内之浦湾の魚類相を十分に解明したとはいえない。本書を基礎資料として、今後、野外での魚類採集調査を含めたさらなる調査が期待される。

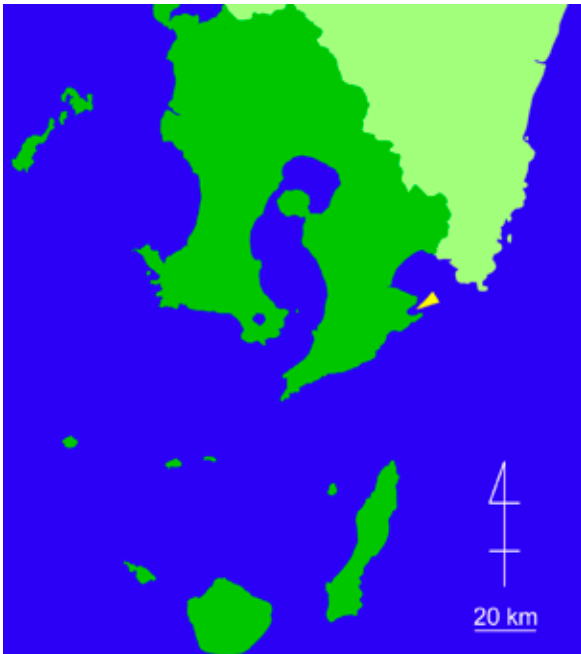
小枝圭太



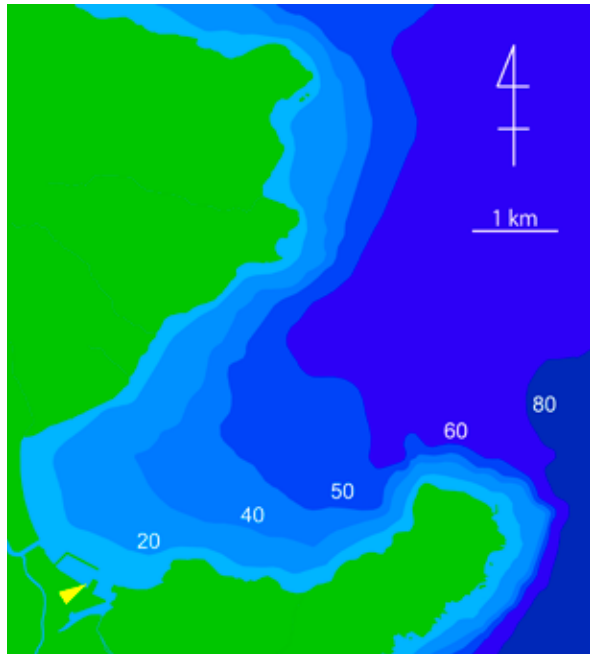
内之浦湾の概要

内之浦湾は鹿児島県東部の大隅半島太平洋沿岸にある湾である（31°16′～19′N、131°04′～07′E）。湾口は北東方向に開いており、志布志湾の南東端に面している。湾の北岸と南岸は山がせり出すように迫っており、湾奥部である西岸には平野が広がる。この平野を南北に分断するように叶岳があり、この上からは内之浦湾を一望することができる。また、この叶岳の北側と南側を沿うように広瀬川と小田川が流れ、湾奥部に流れ込んでいる。湾の南側の山の上には、JAXA（宇宙航空研究開発機構）のロケット発射場があり、小型人工衛星打ち上げ用固体燃料ロケットのイプシロンなどの打ち上げに利用されている。

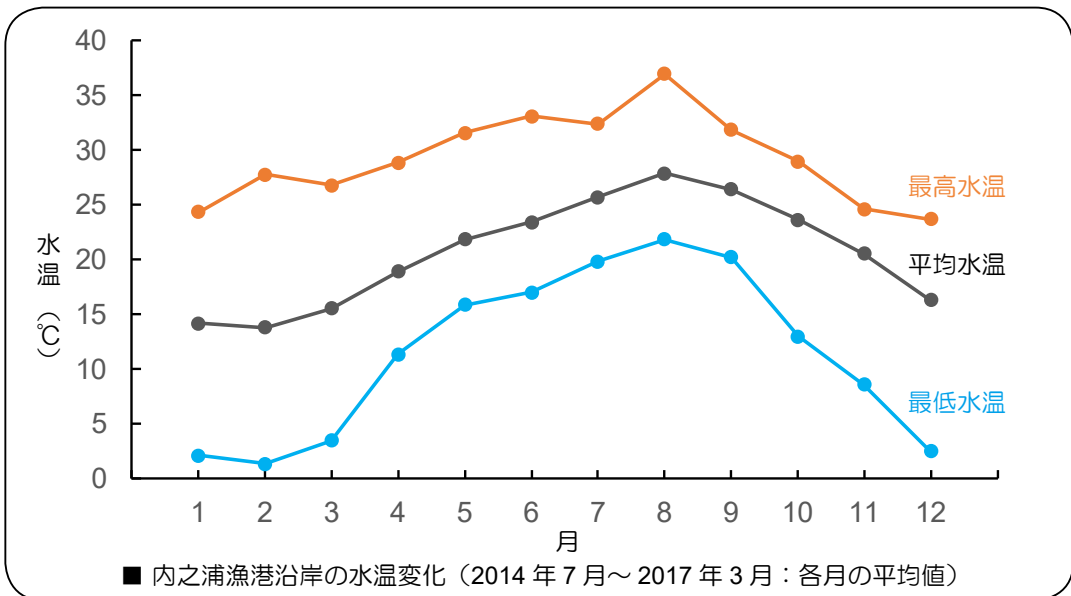
内之浦湾の湾口の幅は約3 km、奥行は約3.5 km。最も深い湾口部では水深約60 mの場所もあり、湾奥ほど浅くなっている。沿岸部における平均水温は8月に27.8℃と最も高く、2月に13.8℃と最も低い（2014年7月～2017年3月にかけて毎日朝夕2回計測した値の月平均）。最高水温は夏場に30℃を越え、最低水温は冬場に5℃を下回る。夏季は月毎の最低水温と最高水温の差が小さく、冬季はその差が大きい。



■ 鹿児島県内における内之浦湾の位置（黄色の矢印）



■ 内之浦湾の水深分布（色が濃い場所ほど深い）



■ 内之浦漁港沿岸の水温変化（2014年7月～2017年3月：各月の平均値）

内之浦漁港の概要



■ 叶岳山頂付近から望む内之浦湾。海岸沿い右に見えるのが内之浦漁港。中には養殖用のイカダが浮かぶ

内之浦漁港は内之浦湾の湾口に立地している。おもな漁法は定置網で、湾内6カ所に定置網が設置されており、設置場所の水深は深い網で50m程度、浅い網で25m程度。また、内之浦湾内の定置網以外にも内之浦湾の南に位置する岸良や船間の港で水揚げされた定置網の漁獲物が持ち込まれることもある。

定置網の網揚げ（1日の間に網のなかに入った魚を回収する作業）は日の昇らない早朝から始まる（次のページに写真を掲載）。船で定置網を設置した場所まで行き、網に入った魚たちが最後にたまる場所であるハコ網に入った魚を回収する。ハコ網といっても非常に大きいので、少しずつ網を寄せて魚たちを集めていき、集まったところを長い柄のついた網やクレーンをつかって船槽や船の活魚槽に移していく。

船が港に戻ると、水揚げ（魚を船から陸にあげる）が開始される。開始時間は季節によって異なり、夏場は日出時間が早いので開始時間も早く5時半～6時、冬場は日出時間が遅いため、7時頃である。

水揚げされた魚のうち、活魚や大型の魚は直ちに計量されて市場に並ぶ。残りの小型・中型の魚は選別台で、まとまった数が採れる重要種（マアジやヤマトカマスなど）、まとまった数は採れないが価値の高い種（ヘダイやカゴカキダイなど）、価値が低く養殖魚の餌料となる種（クロホシイシモチやキンメモドキなど）、利用できない・危険なため投棄される種（ハチやハコフグなど）に分けられる。重要種や価値の高い種は箱ごとや個体ごとに重さを計量され、市場に並んで番号が振られたのち、入札制によるセリにかけられる。

内之浦漁港のおもな漁獲物は定置網漁によるものであるが、柵網（小型の定置網）や刺網、巻網、釣りによる漁獲物の水揚げもある。また、ブリの養殖もさかんにおこなわれている。



■ 岸良の定置網



■ 船間の定置網

定置網漁業の流れ



① 網揚げは夜明け前から始まる



② 2艘以上の船でハコ網を狭めていく



③ ハコ網に集めた魚を網やクレーンで船に移す



④ 港に戻り、船の魚を水揚げする



⑤ 選別台で手際よく魚をより分けていく



⑥ 大量に漁獲された魚はまとめて氷水に漬けられる

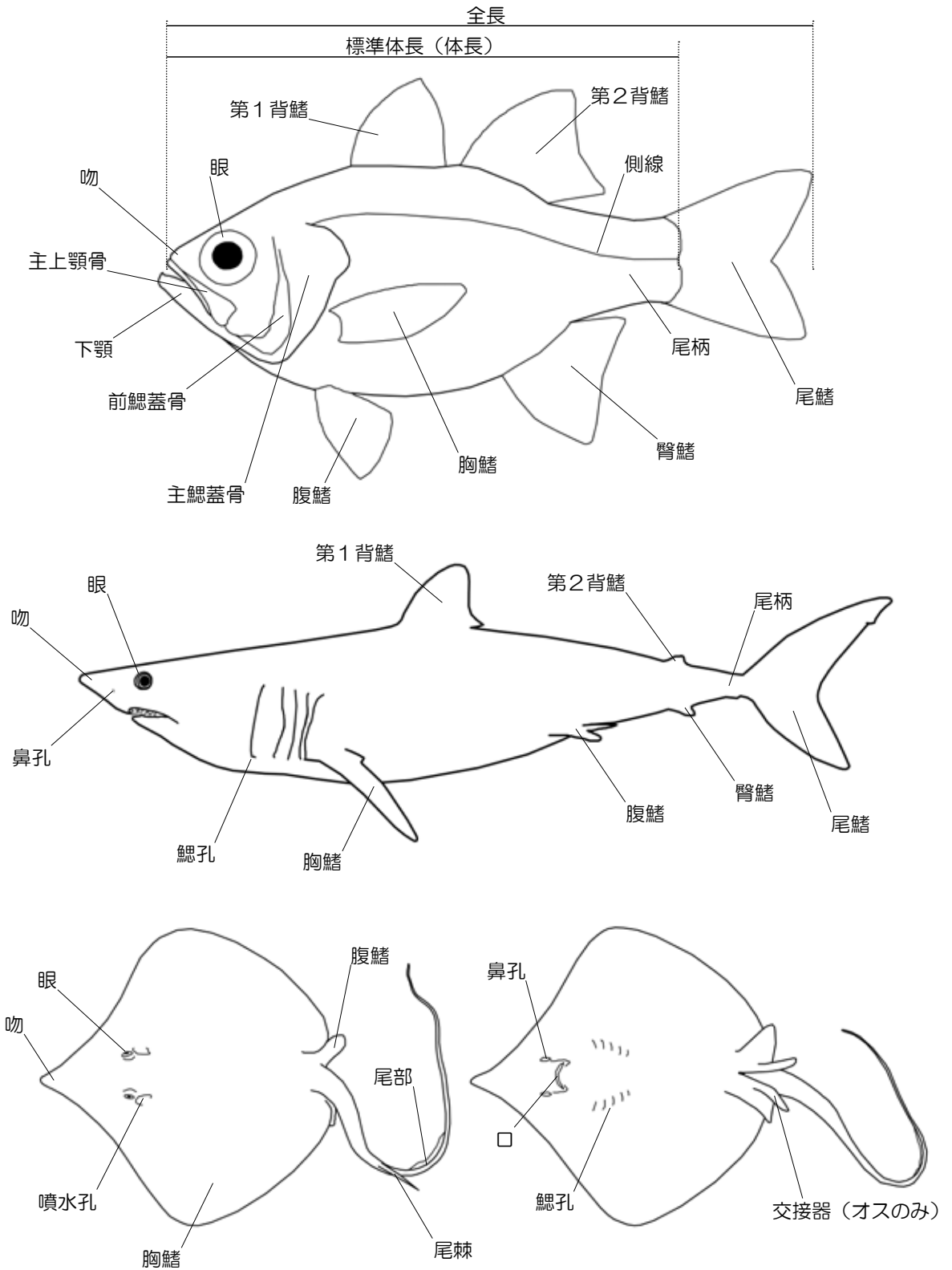


⑦ おおまかな大きさ・種ごとにまとめて計量する



⑧ 市場に並べて、入札かけられる

魚類の体



凡例

- ① 対象種の日と科の和名および科の学名
- ② 対象種の属の和名
- ③ 対象種の学名。属名と種小名の二語（亜種の場合は三語）、学名の命名者、および記載年。括弧付きは、原記載（新種発表時）以降に属名が変わったことを示す。
- ④ 対象種の標準和名
- ⑤ 内之浦漁港における対象種の珍しさ。本著を作成するにあたり、編者4名の主観により★1～5を決定した。

（おおまかな基準）


- ★ ごく普通で水揚げ量も多い
- ★★ 普通だが水揚げは多くない
- ★★★ やや珍しい・季節性が強い
- ★★★★ 非常に稀で数個体を確認
- ★★★★★ 極めて稀

- ⑥ 対象種の写真。全て内之浦漁港で得られた魚の写真である。ほとんどの写真は水揚げされた当日に撮影されたものである。冷凍を経た標本は、なるべく冷凍前の写真も示した。雌雄や成長段階、鮮度が異なるものは可能な限り多くの写真を掲載した。標本の処理と撮影方法は本村（2009）に準拠した。

① アンコウ目 アンコウ科 LOPHIIDAE


② キアンコウ属 *Lophius litulon* (Jordan, 1902)

④ キアンコウ ⑤ 珍しさ ★★★★★




⑦ ■ キアンコウ *Lophius litulon* KAUM-I. 98086, 297.2 mm SL


⑧ 【解説】 体長は最大で1 mほどに達し、アンコウより大型に成長する。アンコウに似るが、口腔内に白色斑がないことで識別される。これら2種は市場では区別されずにアンコウとして流通する。幼魚は各雄が大きく、浮遊生活を送る。北海道から九州沿岸に広く分布する。生息水深や分布域もアンコウとほぼ同じ。体表がめるめるでまな板の上では捌きづらいため、蒸したアンコウに水を入れ、回転させながら捌く「蒸し切り」や雪の上で解体する「雪中切り」といった独特の手法がある。内之浦漁港ではアンコウと比べると水揚げ量がかなり少なく、確認例は2例のみ。（小枝圭次）



⑨ ■ キアンコウの腹面 (KAUM-I. 98086)



⑩ ■ キアンコウの口内 (KAUM-I. 98086)



⑪ ■ 水揚げされたキアンコウ (2007年2月20日撮影)

- 103 -

- ⑦ 写真の説明。標準和名、学名、標本番号、サイズ（標準体長はSL、全長はTLと表記）、性（オス・メス；雌雄が明らかなものに限って記載）の順に示した。標本番号は博物館における写真個体の登録番号で、KAUM-I.は鹿児島大学総合研究博物館の機関略号。標本の残っていない写真には末尾に撮影の年月日を付した。
- ⑧ 対象種の解説。科や種の形態や色彩の特徴、近縁種との比較、生態、一般的な生息環境、国内外での分布、漁獲や水揚げ、内之浦を中心とした利用方法、食味などを記載。末尾に執筆者を付した。これらの記載には益田ほか（1984）、岡村・尼岡（1997）、山田ほか（2007）、中坊（2013）などを参考にしつつ、最新の知見や著者らの経験を加えた。引用文献はまとめて巻末に掲載した。和名の由来は主に榮川（1982）を参考にした。
- ⑨ 特記すべき写真。著しく縦扁する魚種では背側と腹側の両方の写真を示した。また、同一種が2標本以上得られている場合は、なるべく成長段階や雌雄の異なる標本の写真を示した。
- ⑩ 同定や雌雄の判断に必要な情報として、体の一部を拡大した写真を示した。
- ⑪ 現場での同定の一助となるため、水揚げされた場所や市場に並んだものを撮影した写真などを可能な限り示した。現場で撮影した写真には末尾に撮影の年月日を付した。

又タウナギ属 *Eptatretus burgeri* (Girard, 1855)**又タウナギ** 珍しさ ★★★■ 又タウナギ *Eptatretus burgeri* KAUM-I. 71446, 392.5 mm TL

【解説】又タウナギ科魚類は口が裂孔状で、その両側に3対のひげがある。体にはヌタ腺とよばれる粘液腺が並ぶ。眼は痕跡的で皮膚の下に埋没する。本種は体が薄茶色、外鰓孔が6対で、互いによく離れていることで同属他種と識別できる。上下の顎はないが、口内には左右にひらく歯が2列ならぶ。多くの場合、水揚げ時にも生きており、刺激をあたえると防御のために体の何倍もの体積になる粘液を出す。国内では本州から九州の日本海・太平洋沿岸域、瀬戸内海、東シナ海大陸棚から大陸棚縁辺域に広く分布する。韓国では高級食材として用いられ、日本から輸出もされている。国内では秋田県や新潟県、長崎県で食用として利用される。歯ごたえがある身は生食すると旨味が強い（平坂 寛氏、私信）。内之浦を含む鹿児島県では食用にされていない。（小枝圭太）



■ 又タウナギの頭部（KAUM-I. 71446）

ネコザメ属 *Heterodontus japonicus* Miklouho-Maclay & Macleay, 1884

ネコザメ 珍しさ ★★★★★



■ ネコザメ *Heterodontus japonicus* KAUM-I. 68414, 217.1 mm TL, メス



■ ネコザメ *Heterodontus japonicus*, オス (2013年4月19日撮影)

【解説】ネコザメ科魚類は第1・2背鰭前部に棘があることが特徴。頭部は太く短い、吻部は短く、鼻孔付近は豚鼻状。体には幅の広い褐色横帯が約8条あり、その間には細い褐色横帯がある。同属のシマネコザメ(本書未掲載)は、この暗色横帯が10本前後と多く、また尾柄が長いことでネコザメと識別される(仲谷、2016)。本種は最大で全長1.2mほどになる。浅瀬に生息し、水深100m以浅の岩礁や海藻の生えた海底に生息する。見た目の通りおとなしい性格で、日中は海底で動かず、じっとしていることが多い。産卵期は春から夏。臼状の歯でサザエや甲殻類などの硬い殻を割って食べる習性がある。国内では新潟県以南の日本海、東シナ海沿岸域、岩手県以南の太平洋沿岸域、瀬戸内海、小笠原諸島に分布する。内之浦漁港では全長20cm程度の小型2個体と全長約1mのオスの大型1個体がそれぞれ得られている。(小枝圭太)



■ 水揚げ直後のネコザメ *Heterodontus japonicus* (2013年4月19日撮影)

オオセ属 *Orectolobus japonicus* Regan, 1906

オオセ 珍しさ ★★★★★



■ 飼育されたオオセ *Orectolobus japonicus* (2007年2月19日撮影)

【解説】オオセ属は世界に10種が知られているが、日本には本種のみが分布している。全長1.1mほどのサメで、性格はおとなしい。頭部は縦扁し、側面に5～8本の扁平な皮質突起がある。下顎には皮弁がない。第1背鰭起部は腹鰭基底中央付近にある。臀鰭は小さく、第2背鰭よりも後方にあり、尾鰭下葉とほぼ接する。体には大きな暗色鞍状斑や複雑な明暗色の斑紋が散在し、迷彩模様となる。胎生で、約1年の妊娠期間ののちに約20個体を出産する。夜行性で、日中は岩陰などでじっと休み、夜に魚類を捕食する。浅海の砂底、岩礁、サンゴ礁域に生息する。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、九州北岸、沖縄舟状海盆、奄美大島からの記録がある。内之浦では2007年2月に全長約1mの個体が漁獲され、いおワールドかごしま水族館で約1年間に渡り飼育されていた。(小枝圭太)



■ オオセの頭部には扁平な皮質突起がたくさんある(2007年2月19日撮影)

ジンベエザメ属 *Rhincodon typus* Smith, 1828

ジンベエザメ 珍しさ★★★★

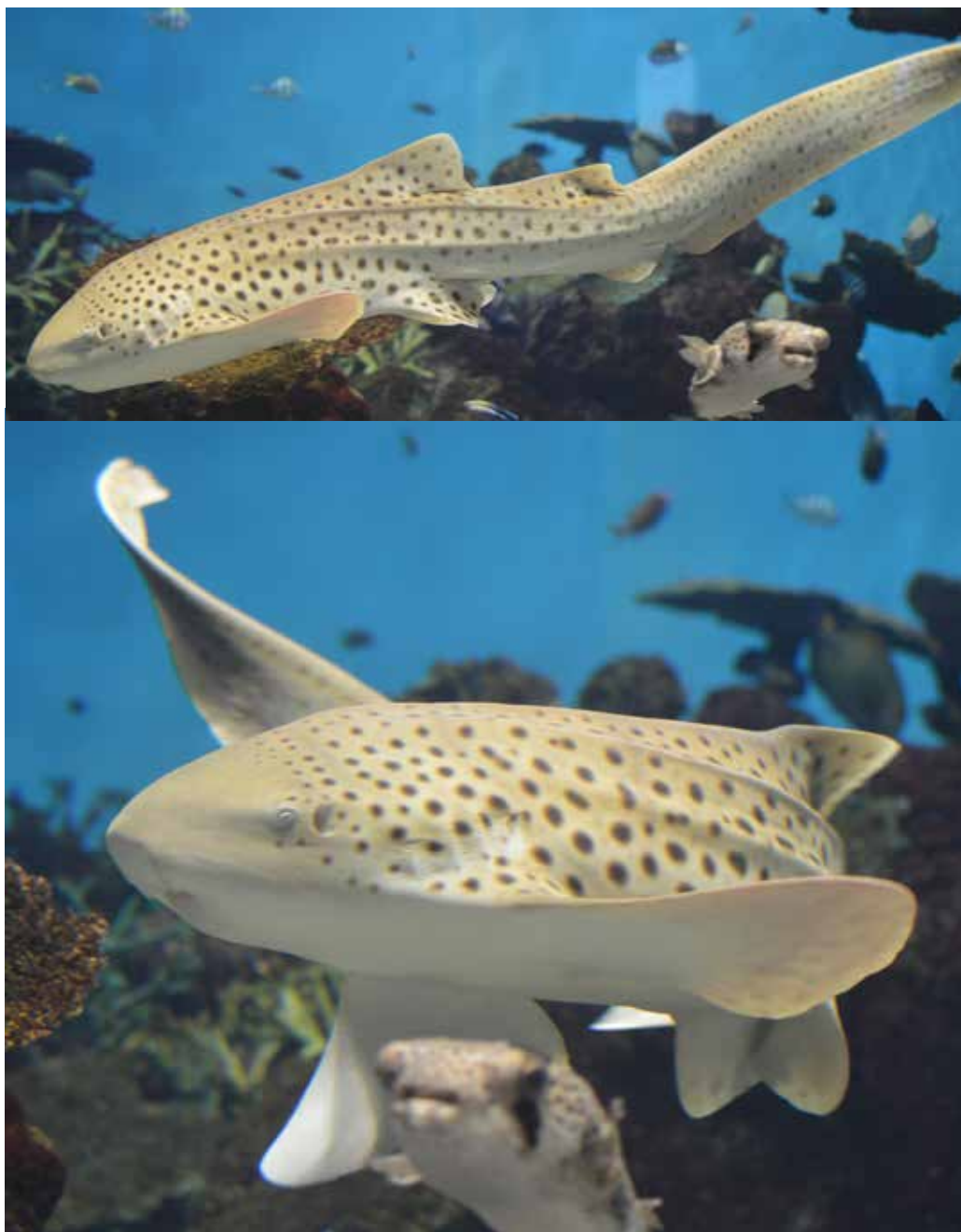


■ 定置網のなかのジンベエザメ *Rhincodon typus* (2009年9月9日撮影)

【解説】言わずと知れた世界最大の魚類で、最大で全長 20 m に達するというが、目視による記録がほとんどであり真偽は不明。実測値の最大記録は 18.8 m という。体は背側が青紫色で多数の小白斑および細い白色の横縞が存在する。この模様が基平の柄に似ていることが和名の由来とされる。美しい模様と巨大な体、おとなしい性格から人気者であり、水族館での展示も積極的におこなわれているが、本種の生態については謎が多い。最大幅が 1.5 m にもなる大きな口で海水を一気に吸い込み、鰓耙で濾して食べる。基本的には小型甲殻類やプランクトンなどを食べるが、サンゴや魚類の産卵期にあわせて回遊してそれらの卵を食べたり、イワシやサバなどの小型魚を捕食することもある。本種の繁殖様式は長いあいだ不明であったが、1995 年に台湾の東岸沖で捕獲された全長 10.6 m、体重 16 t のメスの子宮内から 300 個体以上の産まれる直前と思われる胎仔が得られたことで、本種が卵生ではなく胎生であることが明らかになった（仲谷、2016）。しかし今もなお、胎仔を抱えた親魚の記録はこの 1 例に限られており、本種がどこでどのように出産しているかといった生態については謎が多い。台湾で得られた 300 個体の胎仔のうち 15 個体は生きていたため、複数の水族館がその飼育を試みた。このうち飼育開始時には全長 70 cm、800 g だった個体は、3 年後には全長 3.7 m、体重 350 kg まで成長したと記録されている。外洋の表層で確認されることが多いが、水深 1,900 m からの記録もある。沿岸域やサンゴ礁域にも稀に出現し、ダイバーたちの憧れとなっている。また、本種がプランクトンの豊富な場所に現れることから、本種が出現するとマグロ・カツオ類の群れが近いとされ、これらを対象とした漁業の指標魚にもなっている。地中海を除く全世界の熱帯～温帯域に分布し、日本においても国内のほぼ全域から記録されている。鹿児島県内の定置網にも稀に入り、小型の個体はいおワールドかごしま水族館で飼育・展示されることもある。内之浦漁港では定置網に毎年 1～3 個体が入るが、その巨大すぎる体からその場で放流されるため、水揚げはなく、もちろん標本も残っていない。（小枝圭太）

トラフザメ属 *Stegostoma fasciatum* (Hermann, 1783)

トラフザメ 珍しさ ★★★★★



■ 飼育中のトラフザメ *Stegostoma fasciatum* (いおワールドかごしま水族館で展示中の個体)

【解説】尾鰭が非常に長く、尾鰭長は体長とほぼ等しい。黄褐色の体に小暗色斑が全体に散在する。全長は最大で2.5 m。おもに貝類を捕食し、甲殻類や魚類も食べる。おとなしい性格で、海底に静止していることが多い。大きな尾鰭をゆっくりと振り、優雅に泳ぐ。卵生で粘着性の付着糸をもつ卵殻を海底に産みつける。一度に産む卵の数は4個以下。浅海の砂泥底、岩礁域、サンゴ礁域に生息する。これまで国内では新潟県佐渡、千葉県館山湾、土佐湾および宮古諸島から散発的に記録されており、鹿児島県では薩摩半島での1例につづく2例目の記録となる。この個体は、2017年現在もいおワールドかごしま水族館で飼育されている。意外にも臭みがまったくなく、刺身でも美味というが(下瀬 環氏、私信)、本種を食す機会はほとんどないであろう。(小枝圭太)

ホホジロザメ属 *Carcharodon carcharias* (Linnaeus, 1758)

ホホジロザメ 珍しさ ★★★★★



■ ホホジロザメ *Carcharodon carcharias* の顎部標本（2007年1月24日撮影）



■ ホホジロザメの顎部標本。広げた口は1 mほどになるであろうか。5 cm ほどの巨大な歯が並び

【解説】全長 6.4 m に達する非常に大型のサメで、イタチザメやオオメジロザメ（本書未掲載）と並び最も危険な種のひとつである。世界中で数多くの被害例がある。どっしりとした紡錘形の体に、非常に幅広い鰓孔をもつ。尾鰭は美しい三日月形で、瞬間的に時速 25 km ものスピードで泳ぐことができる。体の背側は灰青色または灰褐色で、腹面は白色。色の境界が非常に明瞭であることが特徴である。奇網という特殊な組織をもち、これにより体温を周囲の水温より 10 ~ 15℃ほど高く保つことができる。主として海産哺乳類を捕食するが、他のサメ類や大型硬骨魚類、クジラ類の死体も餌とする。メスは 1.5 m ほどの胎子を 2 ~ 14 個体産む。パニック映画のモデルとなったことにより、危険なサメとして認知され、過度な駆除がおこなわれた。その結果、現在では個体数が世界的に減少しており、絶滅の危機に瀕している。飼育が困難な種であり、世界中の水族館で展示が試みられてきたが、長期飼育に成功した例はない。おもに沿岸から沖合の表層に生息するが、水深 1,200 m もの深さまで深く潜ることもある。卵食タイプの胎生で、子宮内の胎子に新たに産み出した卵を食べさせて育てる。全世界の亜熱帯から寒冷帯域に広く分布する。内之浦では 1992 年に大型個体が入網した記録があり、新聞でも大々的に報道された（西日本新聞、1992）。現在では顎部骨格のみが残されている。（小枝圭太）

アオザメ属 *Isurus oxyrinchus* Rafinesque, 1810

アオザメ 珍しさ ★★★★★



■ アオザメ *Isurus oxyrinchus* KAUM-I. 44882, 820.0 mm TL, オス



■ アオザメの頭部。いかにも凶暴なサメといういで立ちの吻、眼、口をしている (KAUM-I. 44882)

【解説】全長 4 m に達する大型のサメで、生時は体が青く輝いてとても美しい。吻は細長く、先端は鋭く尖る。胸鰭が短い。尾柄が著しく細く、マグロ類などの高速遊泳魚と似た紡錘形の体をもつ。ナイフのように鋭く尖った歯をもち、その縁はなめらか。非常に活動的でサメ類最速の時速 35 km で泳ぐことができ、この運動能力を活かして空中ヘジャンプ行動をすることも知られている。この生態もあり、大西洋ではスポーツフィッシングの対象種となっている。外洋性の種であり、おもに沖合の表層域に棲むが、水深 700 m ほどまで潜ることもある。内之浦湾のような沿岸の内湾環境に出現することは稀であろう。全世界の温帯～熱帯域に広く分布し、小型個体は北緯 30 度以北の温帯域に多い。大型個体は熱帯海域を含む北太平洋において大きな南北回遊をすることも知られている。ホホジロザメと同様に卵食タイプの胎生で、一度に 25 個体ほどの子を産むことが知られる。日本を含む一部地域ではフカヒレとしての利用を含めた漁業資源となっている。ただし、成長、成熟が遅く、繁殖力も極めて低いため、近年のスポーツフィッシングや漁業による乱獲で本種資源の減少が懸念されている (Ribot-Carballal et al., 2005)。内之浦湾では全長 80 cm 程度の小型個体が 2 個体得られている。(小枝圭太)



■ アオザメ *Isurus oxyrinchus* KAUM-I. 97493, 821.5 mm TL, オス



■ 水揚げ直後のアオザメは体が青く輝く (KAUM-I. 97493, 821.5 mm TL)



■ アオザメの吻はよく尖る。歯は細く尖り、鋭く内側に向かう (2017年1月11日撮影)

オナガザメ属 *Alopias pelagicus* Nakamura, 1935

ニタリ 珍しさ ★★★



■ ニタリ *Alopias pelagicus* KAUM-I. 54904, 1600.0 mm TL

【解説】全長約 6 m に達する大型のサメだが、尾鰭が著しく長く、全長の 1/3 を越える。長い尾鰭で標的の魚を叩いて気絶させ、捕食することが知られている（仲谷、2016）。おもに外洋の表層から少なくとも水深 150 m に生息するが、ときおり沿岸域にも出現する。胎生であり、1 個体のメスが孕む胎仔が 2 個体と少なく繁殖力が低いため漁獲圧の影響を受けやすい。海外では、近年の乱獲による本種資源の減少が懸念されており、国際自然保護連盟 (IUCN) の危急種に指定されている (Reardon et al., 2009)。インド・太平洋の亜熱帯および熱帯域を中心に分布する。国内では北海道を除くほとんどの海域から記録されており、内之浦漁港では最もよくみられる大型のサメ類である。（小枝圭太）



■ ニタリの頭部 (KAUM-I. 54904)



■ 水揚げされたニタリ (2011年12月17日撮影)

ナガサキトラザメ属 *Halaelurus buergeri* (Müller & Henle, 1838)**ナガサキトラザメ** 珍しさ ★★★■ ナガサキトラザメ *Halaelurus buergeri* KAUM-I. 69100, 540.6 mm TL, メス

【解説】全長 60 cm ほどの小型種であり、腹鰭、臀鰭および尾鰭が互いによく分離する、体側に明瞭な黒点が散在することで、他の日本産トラザメ科魚類と識別される。性格はおとなしく、歯も小さい。卵生だが、卵を体内である程度成長させた後に産卵する特殊な産卵生態が知られる。卵は卵殻とよばれる硬い殻に被われており、前後の紐状の突起を岩や海藻などに絡みつかせることで海底に固定される。水深 85 ~ 210 m に生息し、110 m 前後に多いとされるが、内之浦では水深 40 m 以浅から得られている。国内では北海道から九州南岸までの太平洋沿岸域と九州西岸、沖縄島、東シナ海大陸棚から斜面域にかけて広く分布する。内之浦漁港では比較的好くみられるサメで、最大全長に近い 54 cm から小型の 15 cm までの個体が幅広く得られている。卵をもったメスが多い傾向がある。食味は不明だが、食用として利用されることはほとんどないと思われる。近年、ナガサキトラザメ属を含む複数の属をトラザメ科 Scyliorhinidae ではなく Pentanchidae (科の和名なし) に含めるむきがある。(小枝圭太)



■ ナガサキトラザメ KAUM-I. 35937, 474.0 mm TL, メス

■ ナガサキトラザメの卵殻
(KAUM-I. 35937 から得られた)

タイワンザメ属 *Proscyllium habereri* Hilgendorf, 1904**タイワンザメ** 珍しさ ★★★★★■ タイワンザメ *Proscyllium habereri* KAUM-I. 86387, 655.0 mm TL, メス

【解説】黄褐色の体に黒色斑が散在することでナガサキトラザメと一見すると似ているが、第1背鰭が腹鰭より前方に位置することで明瞭に区別される。また、タイワンザメはより黒点が小さく、密に分布している。おなじタイワンザメ科のヒョウザメ（本書未掲載）とは黒色斑点の数により識別されるが、その他の形態に違いがなく、これらが単一種であるという見解もある。最大でも65 cm程度の小型のサメ類で、性格はおとなしい。卵生であることが知られる。内之浦漁港では約13 km南に位置する船間港沖で漁獲された2個体が得られたのみで、水産資源として利用されることはない。多くは水深100～120 mの大陸棚斜面域に生息する。日本、朝鮮半島南岸、濟州島、中国の東シナ海南部～ベトナムの南シナ海沿岸、台湾およびジャワ島北西部と西太平洋の東アジアを中心に分布する。国内では高知県伊布利・柏島、九州太平洋沿岸から南岸および東シナ海の中・南部から記録されている。（小枝圭太）

■ タイワンザメ *Proscyllium habereri* KAUM-I. 98945, 631.0 mm TL, メス

エイラブカ属 *Hemistriakis japonica* (Müller & Henle, 1839)**エイラブカ** 珍しさ★★■ エイラブカ *Hemistriakis japonica* KAUM-I. 15978, 416.1 mm TL, メス■ エイラブカ *Hemistriakis japonica* KAUM-I. 74756, 258.2 mm TL, オス

【解説】全長 1 m ほどの小型のサメで、性格は比較的小となしい。体は灰色で明瞭な模様がない（稀に暗色斑点が散在する）などの特徴がシロザメに似るが、両顎の歯が刃状に尖ることで識別される。歯の切れ味がするどいため、この特徴を指で確認する際は注意が必要。胎生だが胎盤はなく、子宮内に胎仔数と同じだけの子宮隔壁を形成する。最高齢は 15 歳と推定されている。本種の生息水深は 25 ~ 730 m とされるが、沖縄諸島近海や東シナ海では深く、瀬戸内海や紀伊水道では浅い場所から採集されている傾向がある。内之浦湾においては、水深 50 m 以浅に設置された定置網によって多く漁獲される。内之浦漁港では比較的良好にみられるサメ類であり、成魚から全長 20 cm ほどの幼魚まで幅広いサイズが得られている。おもに練製品の原料として利用されている。（小枝圭太）



■ エイラブカの歯は鋭い（2003年11月5日撮影）

ホシザメ属 *Mustelus griseus* Pietschmann, 1908**シロザメ** 珍しさ ★★★■ シロザメ *Mustelus griseus* KAUM-I. 89431, 345.7 mm TL, オス

【解説】全長1 mほどの小型のサメで、性格はおとなしい。体に白色斑点がない。エイラブカに似るが、両顎の歯が敷石状で尖らず、歯を指で触れるとツルツルしていることで区別できる。胎生で、胎仔が全長150 mmに成長する妊娠中期に胎盤が形成される。子宮内には胎仔数と同じだけの子宮隔壁が形成される。交尾期は6～8月と推定されており、妊娠期間は10ヵ月。おもに甲殻類と小型魚類を捕食する。水深20～260 mの大陸棚縁辺から斜面域に生息する。日本近海の外に、朝鮮半島南岸・西岸、渤海、黄海、台湾、中国の東シナ・南シナ海沿岸といった東アジアに分布する。国内では北海道と東北地方の日本海沿岸を除く海域に広く分布する。本種はサメ類の中では肉質がよく、美味な方であることから生食や練製品の原料となり、市場価値も比較的高い。エイラブカとならんで鹿児島県では食用として最もよく利用されるサメのひとつで、共に「ふか」と呼ばれる。場所によっては数十から数百個体が1日に漁獲されることもあるほど。内之浦ではたまにみられる程度で多くはない。(小枝圭太)

ホシザメ属 *Mustelus manazo* Bleeker, 1855**ホシザメ** 珍しさ ★★★■ ホシザメ *Mustelus manazo* KAUM-I. 71261, 682.0 mm TL, メス

【解説】全長1 mほどの小型のサメで、性格はおとなしい。体は全体に細く、サメ特有の筋肉の力強さがなく、やや貧相な体つきをしている。両顎の歯は扁平でシロザメと同様にツルツルしている。体に白色斑点が散在することが特徴だが上に示した写真のように不明瞭な個体もある(次ページに写真を示した個体は白色斑点がある)。両顎の歯は敷石状で尖らない。エイラブカと同様に胎生で子宮内に隔壁をもつ。交尾期は7月前後で、妊娠期間は10ヵ月。胎仔数は最大16個体で、その数は親魚の大きさに伴い増加することが知られる。日本近海や朝鮮半島全沿岸、渤海、黄海、台湾、中国の東シナ海・南シナ海沿岸、ベトナムなど東アジアを中心に分布する。生息水深は38～575 mとされるが、沖縄諸島近海や東シナ海では深く、深海漁業で混獲される一方で、日本本土近海では内之浦漁港のような沿岸域の浅い場所から採集される傾向がある。本種の肉はシロザメに似て良質であることから、生食や練製品の原料とされる。ただし、沖縄島沖で採集した個体を湯引きした後、酢味噌和えて食したところ、アンモニア臭が強くと味であった。食すには鮮度がとりわけ重要な魚種であるのかもしれない。(小枝圭太)



■ 水揚げされたホシザメ *Mustelus manazo* (2005年3月11日撮影)

メジロザメ属 *Carcharhinus brachyurus* (Günther, 1870)

クロヘリメジロザメ 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたクロヘリメジロザメ *Carcharhinus brachyurus*, 780 mm TL (2007年1月24日撮影)

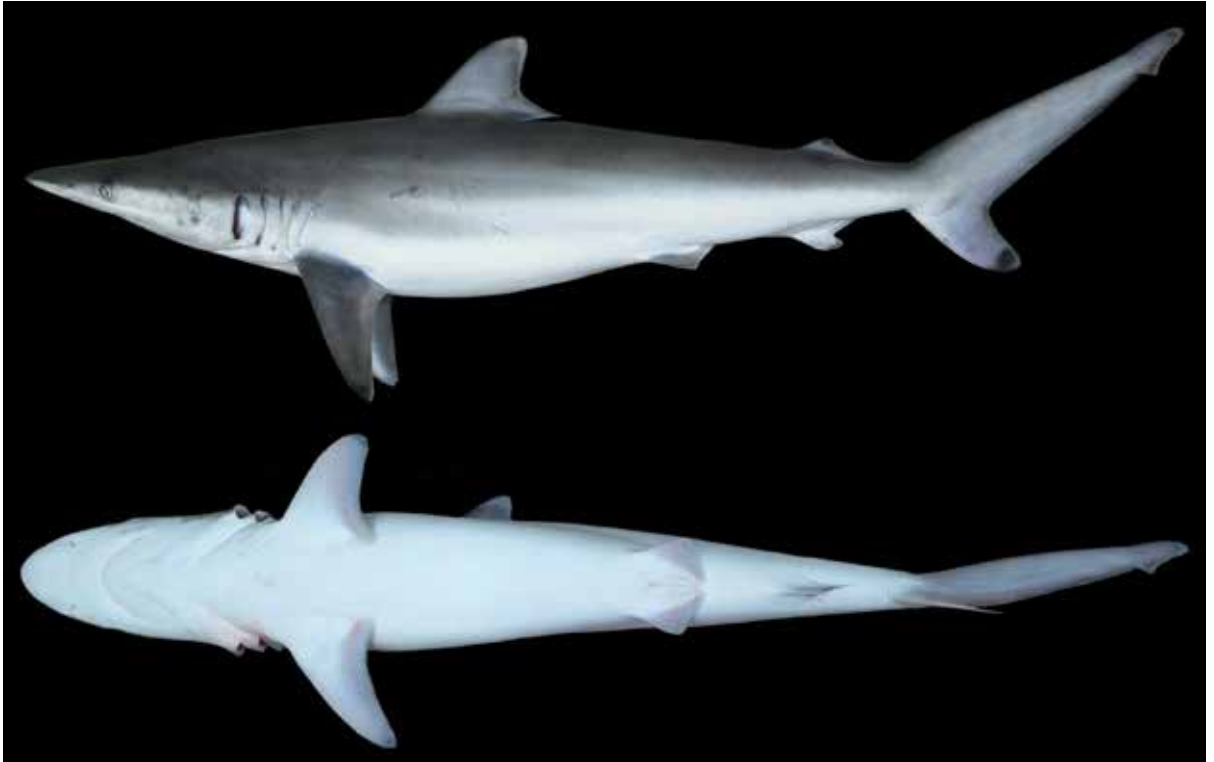
【解説】全長3 mに達する中型のサメで、性格はやや攻撃的。吻は短く、丸い。眼は丸い。各鰭の縁辺は淡く黒い程度で、目立った黒色や白色域がないことが特徴。上顎前部の歯が湾曲し、鉤状であることが特徴。沖合の表層に生息し、水深100 m以浅に多い。全長60～70 cmで生まれ、オスは2.3 m、メスは2.5 mで成熟することが知られている。全世界の温帯域を中心に生息し、国内では鹿島灘、房総半島東岸、相模湾、新潟県柏崎沖、有明海、九州太平洋沿岸から南岸から記録がある。回遊性で春～夏に北上し、秋～冬になると南下するという。温帯域としては南に位置する内之浦漁港においても、推定全長78 cmの個体が2007年の冬に漁獲されている。ただし、記録はこの1例に限られており、標本も残っていない。(小枝圭太)



■ クロヘリメジロザメの頭部 (2007年1月24日撮影)

メジロザメ属 *Carcharhinus brevipinna* (Valenciennes, 1839)

ハナザメ 珍しさ ★★★

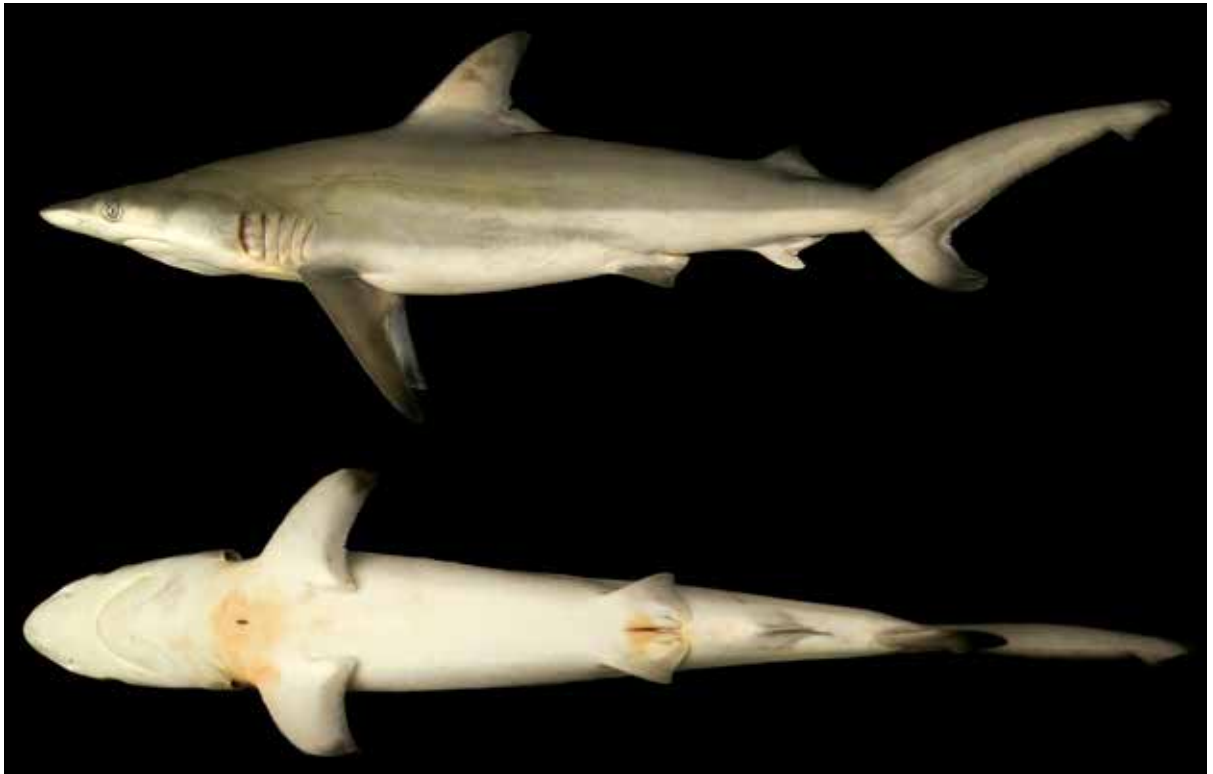


■ ハナザメ *Carcharhinus brevipinna* KAUM-I. 31526, 930.0 mm TL, オス

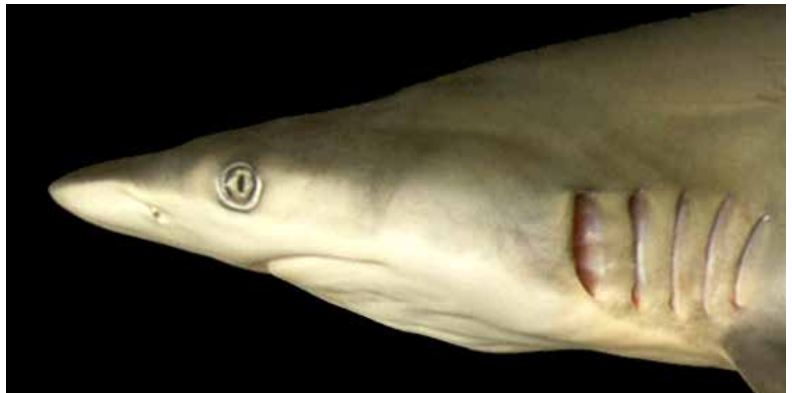
【解説】全長3 mほどになる中型のサメである。吻が長くのびて尖ることや尾鰭後縁が黒くないことなどでカマストガリザメによく似るが、第1背鰭がやや低く、第1背鰭と第2背鰭の間の長さがやや長いことで区別される。本種は成長により鰭先端の黒色斑の出現部位が変わることが知られ、各鰭の黒色斑の有無が重要な同定形質となるメジロザメ科魚類のなかでも種の同定が難しい種である。本種は東部太平洋を除く全世界の熱帯～温帯域に分布し、地中海には分布しないとされていたが、地中海と紅海を繋ぐスエズ運河の開通とともに地中海へと移入した魚種として知られる。本種のように紅海から地中海へと分布を広げた事例は「レセブシアン移動」と呼ばれ、地中海の在来生態系にとっての脅威となっている。ちなみに紅海は地中海より海面が高いため、地中海から紅海への移動は非常に少ない。本種は国内では相模湾から九州南岸の太平洋沿岸と天草灘、琉球列島に分布し、通常30 m以浅の沿岸域で見られる。内之浦漁港ではしばしば漁獲されるが、標本としては写真の1個体が得られたのみ。山下ほか(2012)でツマグロとして報告された標本(KAUM-I. 31526)は本種に再同定された。(小枝圭太)



■ 水揚げされたハナザメ
(2007年1月24日撮影)

メジロザメ属 *Carcharhinus limbatus* (Valenciennes, 1839)**カマストガリザメ** 珍しさ ★★★★★■ カマストガリザメ *Carcharhinus limbatus* KAUM-I. 30436, 752.0 mm TL, オス

【解説】全長 2.6 m ほどになる中型のサメである。吻が長くのびて尖ることや尾鰭後縁が黒くないことなどでハナザメによく似る（識別方法はハナザメのページを参照）ことに加え、成長に伴い特徴が変化するため識別が難しい。幼魚では鰭の先端が全て黒いが、成魚では鰭の黒斑を欠く。胎生だが、バージニアの水族館で飼育中のメス個体が、オスのいない水槽で胎子を妊娠していた例が報告されており、単為生殖が可能な種である可能性が示されている（Chapman et al., 2008）。大型個体のオスと妊娠していないメスの群れ・妊娠したメスの群れ・小型個体の群れでそれぞれ別群を形成することが知られる。水深 2 ~ 70 m の大陸棚や島棚沿岸の表層域に生息し、日本では有明海、天草灘、鹿児島湾、内之浦湾、琉球列島から記録がある。世界中で漁獲されるサメ類であり、水産重要種となっているが、スポーツフィッシングの対象種ともなっており、近年では個体数の減少が懸念されている。ただし、日本では個体数は多くなく、食用にされることもほとんどない。内之浦における採集例も稀。山下ほか（2012）でツマグロとして報告された標本（KAUM-I. 30436）は本種に再同定された。この個体は、腹部に胎盤の痕が残っており、出産後、長くは経過していないものと推察される。（小枝圭太）

■ カマストガリザメの頭部
(KAUM-I. 30436, 752.0 mm TL)

メジロザメ属 *Carcharhinus macloti* (Müller & Henle, 1839)

ホコサキ

珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたホコサキ *Carcharhinus macloti*, 850 mm TL, オス (2006年3月23日撮影)

【解説】全長1 mほどの小型のサメである。体は細く、第2背鰭起部が臀鰭基底中央部より後方にある。上顎前部の歯の先端がまっすぐであること、またその基部が大きな鋸歯状であることが特徴。沿岸域に生息する。インド・太平洋の広域に分布し、西太平洋では日本近海の外に台湾、中国の浙江省の東シナ海沿岸～ベトナムの南シナ海沿岸およびフィリピンに生息する。国内では鹿島灘と九州南岸からの記録があるが、採集例が極めて少なく、生態学的情報も少ない種である。鹿児島県においては山下ほか(2012)により指宿市から報告がある。内之浦漁港では2009年1月に全長85 cmのオスが漁獲されたことがあるのみで、非常に稀。標本は残されていない。(小枝圭太)

メジロザメ属 *Carcharhinus obscurus* (Lesueur, 1818)**ドタバカ** 珍しさ ★★★★★■ ドタバカ *Carcharhinus obscurus* KAUM-I. 63124, 921.0 mm TL, オス

【解説】全長 4 m ほどになる大型のサメであり、大型個体は潜在的に危険であると考えられているが、人を攻撃した例は少ない。胸鰭が長い。よく似たガラパゴスザメ（本書未掲載）とは背鰭が低いこと、および第 2 背鰭の後葉が長いことにより識別される。また、クログリザメ（本書未掲載）ともよく似るが、第 1 背鰭起部が胸鰭内角のほぼ直上に位置することで識別される（クログリザメでは明瞭に後ろに位置する）。胎生である。大型個体は一度の摂餌で自分の体重の 1/10 以上の餌を食べることもあるとされる（Hussey et al., 2009）。妊娠期間は非常に長く、約 2 年と推定されているが、メスはオスの精子を貯めておくことができるという。内之浦で採集された 2 個体（KAUM-I. 31525、全長 99 cm と KAUM-I. 63124、全長 92 cm）は、本種としては小型であり、いずれも腹部に胎盤の痕が残っていたことから、出生後、長くは経過していないと推察される。日本では房総半島



■ ドタバカの背面と腹面（KAUM-I. 63124）

東岸、相模湾、和歌山県南部町、大阪湾、有明海、天草灘、琉球列島、小笠原諸島（稀）から記録されており、内之浦湾から得られた標本は鹿児島県からの標本に基づく初めての記録となる。なお山下ほか（2012）でツマグロとして報告された内之浦湾産の標本（KAUM-I. 31525）は本種に再同定された。（小枝圭太）



■ 水揚げされたドタバカ（KAUM-I. 63124）

メジロザメ属 *Carcharhinus plumbeus* (Nardo, 1827)

メジロザメ (ヤジブカ)

珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたメジロザメ (ヤジブカ) *Carcharhinus plumbeus* (2017年8月9日撮影)

【解説】全長 2.5 m ほどになる中型のサメである。第1背鰭起部が胸鰭基部後端のほぼ真上に位置することが特徴。表層付近から水深 280 m までに生息し、湾口や河口、港、砂泥質の浅い湾内やサンゴ礁域にも出現する。胎生である。本種にはメジロザメ・ヤジブカと2つの和名があるが、標準和名としてどちらを用いるかについて結論がでていないため本書でも両和名を併記した。2017年8月に内之浦湾で漁獲された個体は、推定全長 50 cm ほどと本種としては小型であり、出生後、長くは経過していないものと推察される。全世界の熱帯～温帯海域に分布し、国内のほぼ全域から記録があるが記録の多い種ではない。(小枝圭太)



■ メジロザメ (ヤジブカ) の頭部 (2017年8月9日撮影)

メジロザメ属 *Carcharhinus tjtjtjt* (Bleeker, 1852)**スミツキザメ** 珍しさ★★■ スミツキザメ *Carcharhinus tjtjtjt* KAUM-I. 71258, 629.0 mm TL, オス

【解説】全長 1.2 m ほどの小型のサメであり、大型種が多いメジロザメ科のなかでは、とりわけ小さい種である。体は灰色で、第 2 背鰭の先端のみが黒いことが特徴。スミツキザメに用いられていた *Carcharhinus dussumieri* は太平洋に分布しないことが明らかになり、近年、*C. tjtjtjt* へと学名が変更された（古川ほか、2014）。胎生であることが知られる。稀な種ではないが、比較的、知見に乏しい。大陸棚や島棚周辺の水深 170 m 前後までの底近くに生息し、国内では、土佐湾から九州南岸の太平洋沿岸および有明海から知られる。小笠原諸島や琉球列島からも記録はあるが稀。鹿児島県本土では数多く漁獲され、さつま揚げなどの練り物の原料として利用される。内之浦漁港でも比較的好くみられるサメである。（小枝圭太）

■ 水揚げされたスミツキザメ *Carcharhinus tjtjtjt* (2005年12月14日撮影)■ スミツキザメの頭部
(2005年12月14日撮影)

イタチザメ属 *Galeocerdo cuvier* (Péron & Lesueur, 1822)

イタチザメ 珍しさ ★★★★★

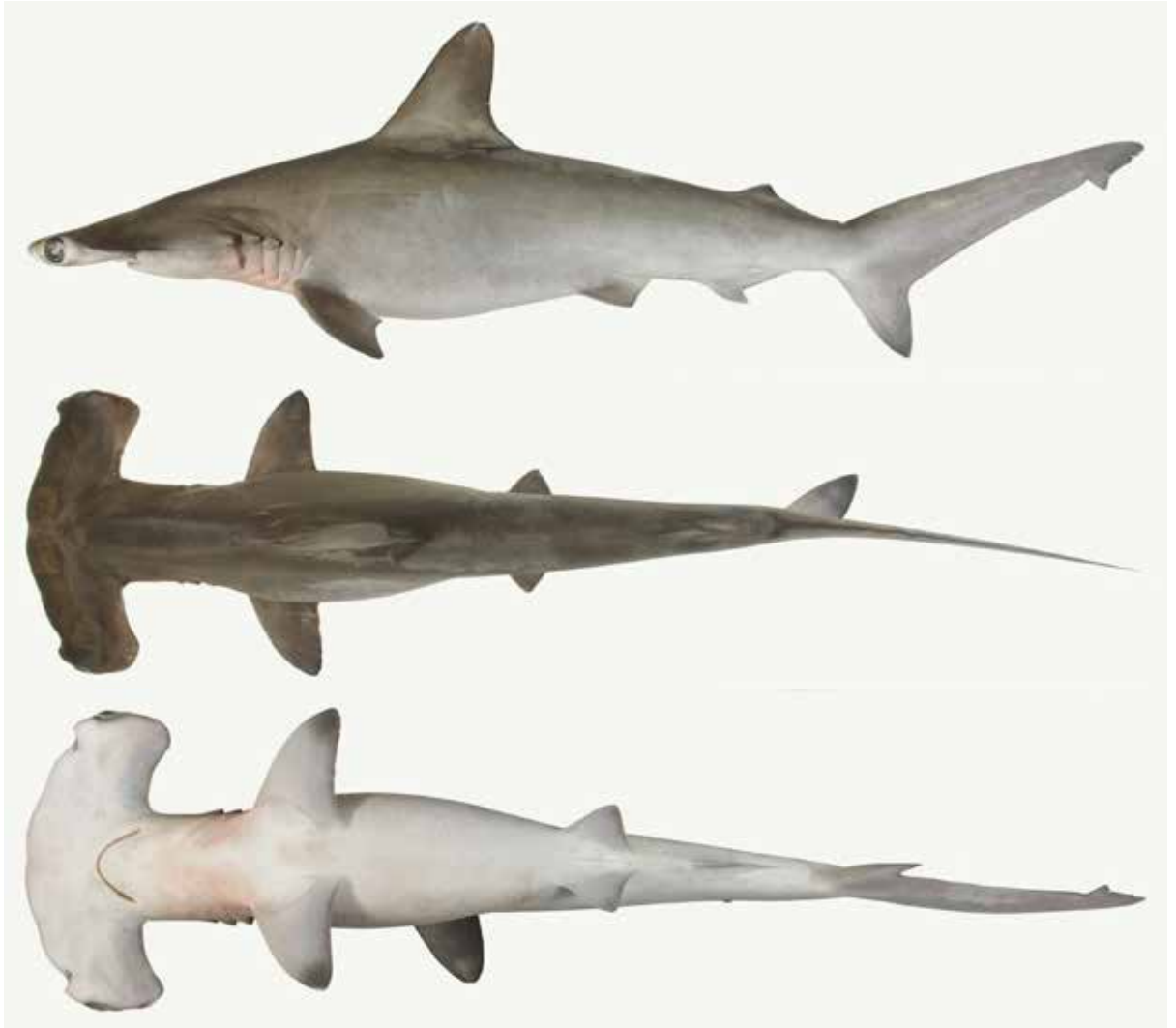


■ イタチザメ *Galeocerdo cuvier* KAUM-I. 63213, 2600.0 mm TL

【解説】全長 5 m を越える非常に大型のサメである。体から尾鰭にかけて美しい縞模様があり、メジロザメ科魚類としては非常に特徴的である。魚類をはじめ、無脊椎動物やウミガメ類などの海産爬虫類、鳥類、哺乳類だけでなくビニール袋や金属片などの人間活動によって生じた産業廃棄物でさえも捕食する。この何でも口に入れる凶暴な性格に加え、沿岸性で遭遇率が比較的高いことから、最も危険なサメの 1 種といえる。全世界の熱帯から亜熱帯域を中心に分布しているため、これらの海域ではとりわけ注意が必要。サーフィン中に被害に遭う事例が多く報告されているが、これは餌となるアザラシなどの鰭脚類と誤認して襲われたものであると考えられている。実際にサーフボード上でパドルリングする人の姿を水中から見ると、そのシルエットは鰭脚類が泳ぐ姿とよく似ている。内之浦漁港からは全長 2.6 m (KAUM-I. 63213) の個体と全長 88 cm (KAUM-I. 73134) の小型個体が 2 個体得られている。(小枝圭太)



■ イタチザメの幼魚 (KAUM-I. 73134, 880.0 mm TL, オス)

シュモクザメ属 *Sphyrna lewini* (Griffith & Smith, 1834)**アカシュモクザメ** 珍しさ ★★★■ アカシュモクザメ *Sphyrna lewini* KAUM-I. 82858, 756.0 mm TL, オス

【解説】全長 4 m に達する大型のサメである。頭部が T 字状である特徴をもつシュモクザメ科魚類のなかで、本種は頭部前縁中央が丸みを帯び、凹みがあることが特徴。和名である「シュモク」は鐘をたく木槌である撞木に由来する。その特徴的な頭部の形状から、本科魚類の英名である「ハンマーヘッドシャーク」と呼ばれる人気者である。性格はやや荒いが、人を襲った例は多くない。魚類、甲殻類、頭足類などを捕食し、とりわけ海底に棲む生物を特徴的な頭部を使って摂餌することが知られている。与那国島では春になると数百個体から成る大群が出現することから (Koeda et al., 2016b)、同島のダイビングの名物となっている。内之浦漁港では全長 70 cm 前後の小型個体が複数得られているが、全長 3 m ほどの大型個体が漁獲されたこともある。(小枝圭太)



■ 漁獲された大型のアカシュモクザメ (2004年10月27日撮影)

シュモクザメ属 *Sphyrna zygaena* (Linnaeus, 1758)

シロシュモクザメ 珍しさ ★★★★★

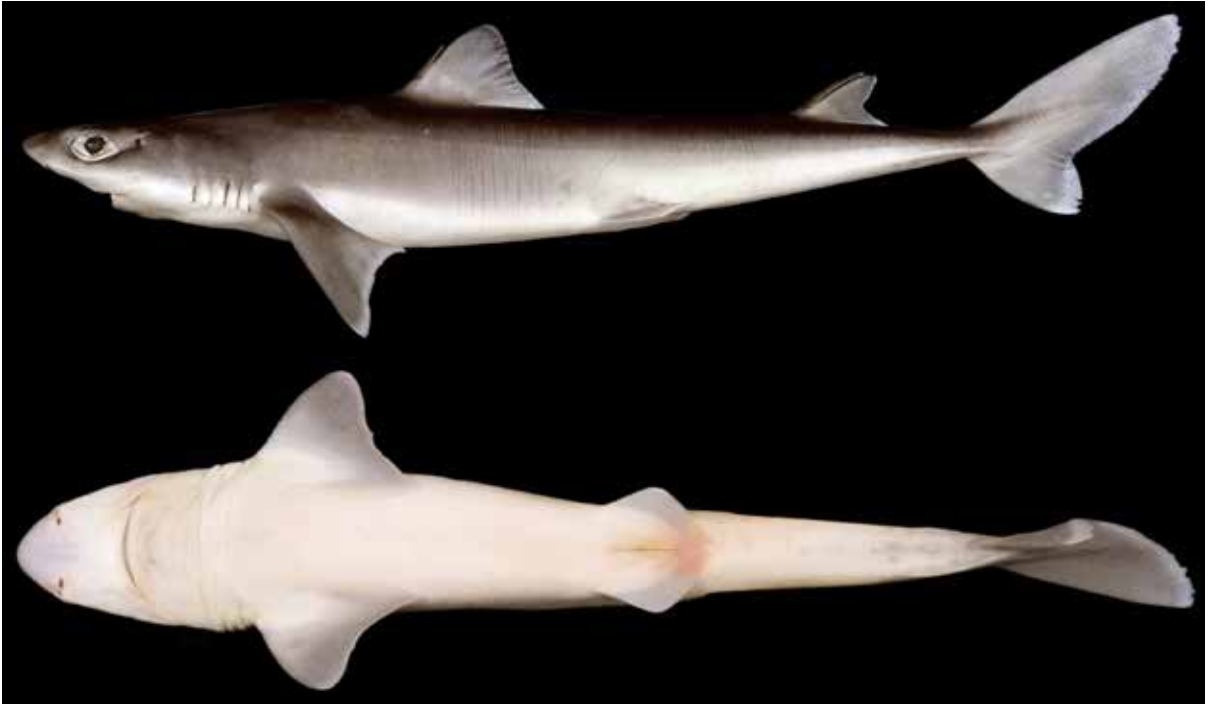


■ 水揚げされたシロシュモクザメ *Sphyrna zygaena* (2007年4月5日撮影)



■ シロシュモクザメの頭部 (2007年4月5日撮影)

【解説】アカシュモクザメに似るが、頭部前縁が丸みをおび、その中央部が凹まないことで識別される。シュモクザメ科はへその緒と胎盤により胎仔へと栄養が供給される母体依存型胎生であり、機能的には哺乳類の胎盤と同じである。本種は沿岸や外洋の表層から少なくとも水深 139 m までに生息し、国内のほぼ全域に分布するが、西日本ではアカシュモクザメが多く、東日本ではシロシュモクザメが多い傾向があるようである。積極的に食用にされることはないが、練り物の原料となることはある。血抜きを完全にしないと血中の尿酸による酸味がするため、生食するには注意が必要 (平坂 寛氏、私信)。内之浦漁港では 2007 年 4 月に全長約 1.5 m と全長約 1 m の 2 個体が得られたのみで、頻りに漁獲されるアカシュモクザメと比較すると、その数はかなり少ない。(小枝圭太)

ツノザメ属 *Squalus brevirostris* Tanaka, 1917**ツマリツノザメ** 珍しさ ★★★★★■ ツマリツノザメ *Squalus brevirostris* KAUM-I. 29099, 492.0 mm TL, メス

【解説】 全長 1 m ほどの小型のサメである。ツノザメ科魚類は第 1・2 背鰭に棘があることが特徴。性格はおとなしいが、餌があると食欲に食いつく。ツノザメ科魚類は分類学的に極めて混乱しており、日本国内に何種が生息しているかすら正確には分かっていない。

本種はフトツノザメ（本書未掲載）によく似ており、吻部がより短いことで区別されるとされる。しかし、この違いはわずかであり、識別がとて難しい。生時、眼はエメラルドグリーンに輝き美しい。卵黄依存型の胎生で同時に 1～4 個体の胎仔をもつ。サメ類として遊泳力は低い。水深 100～640 m に生息し、内之浦湾のように最大でも水深 60 m 程度の浅い内湾環境に出現することは稀といえる。本種をはじめとするツノザメ科魚類〔特にアブラツノザメ（本書未掲載）〕は、肝臓に含まれる肝油を目的として漁獲されていた歴史があるが、アイザメ科魚類（本書未掲載）と比較するとその含有量が少ないために近年では国内において積極的な漁獲はおこなわれていない。ただし、ツノザメ科魚類は肉質がよく、臭みが少ないため、ヨーロッパなどでは英名である「ドッグフィッシュ」の名でスープやフリット（揚げ物）として広く食用にされている。ポルトガルで本科魚類のスープを食したが、やはりサメ類特有のアンモニア臭を感じた。内之浦漁港では確認が 1 例だけと極めて稀。（小枝圭太）

■ 水揚げされたツマリツノザメ *Squalus brevirostris* KAUM-I. 29099（2010 年 3 月 8 日撮影）

カスザメ属 *Squatina japonica* Bleeker, 1858

カスザメ 珍しさ ★★★



■ カスザメ *Squatina japonica* KAUM-I. 73144, 652.0 mm SL, メス

【解説】体は前部が幅広で、尾部に向かって細くなる。エイのような強く縦扁した体をもつが、鰓孔は体側に開いているため、れっきとしたサメの仲間である。大きく広がった胸鰭をもつ独特の形から英名では「エンジェルシャーク」と呼ばれる。吻部に短いひげがあり、歯は意外に鋭い。背側は灰白色で褐色斑が密に並ぶ。水深20～200 m前後の砂泥や砂底域に生息し、エイのように砂に潜って動かない。雌雄のペアで行動することが多いようである。底生性魚類や甲殻類、軟体類をおもに捕食する。練り物の原料に利用されることがある。刺身も悪くないが、ムニエルや煮付など火を通して食べると美味（平坂 寛氏、私信）。内之浦漁港では全長1 mほどの個体が稀に水揚げされる。基本的には利用されず投棄されている。（小枝圭太）



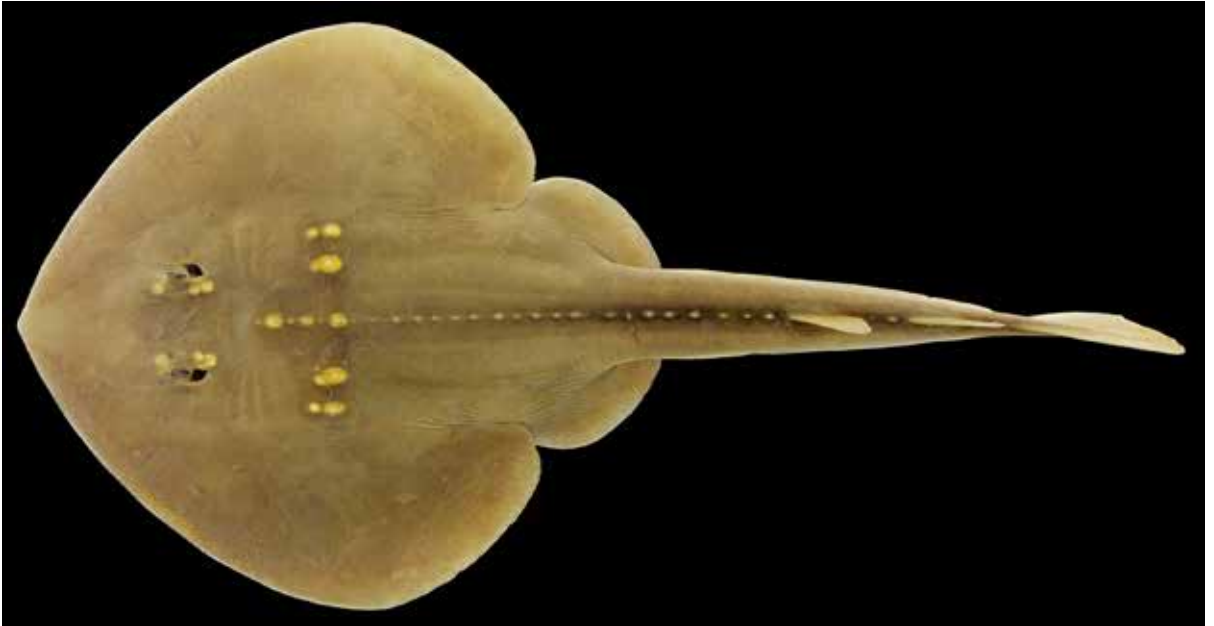
■ カスザメの腹面（KAUM-I. 73144）



■ 水揚げされたカスザメ（2015年5月19日撮影）



■ 水揚げされたカスザメ（2016年6月10日撮影）

ウチワザメ属 *Platyrhina tangi* Iwatsuki, Zhang & Nakaya, 2011**ウチワザメ** 珍しさ ★★★■ ウチワザメ *Platyrhina tangi* KAUM-I. 94339, 488.9 mm TL, メス

【解説】ウチワザメ科魚類は尾柄部が太く、尾鰭をもつ。サメの名をもつが鰓孔が腹側に開くためエイの仲間である。スペード型の体と太い尾柄は、まさにうちわのようである。全長は最大でも70 cmほどで、大きくはない。吻端から胸鰭にかけて丸いこと、また吻端が尖ることシビレエイ科と異なる。本科は日本に2種が分布しており、オニノウチワ（本書未掲載）とは頭部と背部の棘が淡色で囲まれることにより識別できる。尾柄に棘がないため刺される心配はない。内之浦湾で漁獲された2個体はいずれも妊娠しており、全長54 cmの個体が全長約15 cmの卵黄を吸収し終えた胎子を9個体、全長49 cmの個体が全長約9 cmの卵黄をもつ胎子を6個体それぞれ孕んでいた。沿岸の岩礁に近い砂底に生息している。食用にされることはほとんどなく、内之浦漁港においても投棄されている。（小枝圭太）



■ ウチワザメの腹面 (KAUM-I. 94339)



■ 卵黄がないウチワザメの胎子 (KAUM-I. 80368, 143.2 mm TL)



■ 卵黄が残るウチワザメの胎子 (KAUM-I. 94340, 88.6 mm TL)

シビレエイ属 *Narke japonica* (Temminck & Schlegel, 1850)

シビレエイ 珍しさ ★★★



■ シビレエイ *Narke japonica* KAUM-I. 73188, 347.0 mm TL, オス

【解説】シビレエイ科魚類は頭部と胸鰭の間に重箱状に重なった多角形の発電器官をもち、50～60Vの電気を発生させることができる。発生させた電気により無脊椎動物や小魚を麻痺させて捕食する攻撃行動のほか、捕食者に襲われた際の防御行動にも用いる。内之浦漁港で水揚げされた写真の個体は、空気中で体が収縮したためか、多角形の集合体である発電器官が体表に浮き出ている。尾柄に棘がないため刺される心配はないが、水揚げされた個体であっても、素手で触れると感電する恐れがあるので扱いには注意が必要。水深155mまでの砂底に生息し、本州から九州の日本海・東シナ海・太平洋沿岸に広く分布する。本種の鰭や背部の肉はアンモニア臭さやクセがなく美味だが、発電器官は生食するとブニュブニュした食感でうま味もないという（平坂、2017）。なお、近年の研究で従来のシビレエイ科が3科に分けられたことに伴い、それぞれの科の和名をシビレエイ科 Narkidae、台湾シビレエイ科 Narcinidae、ヤマトシビレエイ科 Torpedinidae とすることが示された（萬代ほか、2017）。（小枝圭太）

アカエイ属 *Hemirhynchus akajei* (Müller & Henle, 1841)**アカエイ** 珍しさ★★■ アカエイ *Hemirhynchus akajei* KAUM-I. 30225, 672.0 mm TL

【解説】エイといえばアカエイのことかと思われるほど代表的な種である。体盤幅は最大で 90 cm 程度。尾部に鋸歯をもつ強力な棘があり、毒腺ももつことから刺されると極めて危険である。また、水揚げ時にも生きていることもあり、取り扱いには細心の注意が必要。餌を探すとき以外は基本的に砂に潜っており、眼と噴水孔を砂から出してじっと動かない。攻撃性はないため、基本的にこちらから手を出さない限りは刺されることはない。ごく浅い砂浜などにも普通に生息するため、気付かずに踏みつけてしまうことが多くの事故の原因になっている。浅い場所で多い種ではあるものの、水深 800 m の深い場所の砂底域でも記録されている。国内では琉球列島をのぞくほぼ全域に分布する。エイ類のなかでは、水揚げ量が安定していることから市場価値が比較的高い。煮物や揚げ物のほか、練り物やエイヒレ（鰭をみりん・醤油・砂糖などに漬けて干したもの）などの原料となる。ただし、鮮度が低下すると肉中のアンモニアやトリメチルアミンオキシドのため臭くなる。内之浦漁港では利用されておらず投棄されることがほとんどである。（小枝圭太）



■ アカエイの幼魚 (KAUM-I. 82844, 255.0 mm TL, オス)

アカエイ属 *Hemitrygon izuensis* (Nishida & Nakaya, 1988)

イズヒメエイ 珍しさ ★★★★★



■ イズヒメエイ *Hemitrygon izuensis* KAUM-I. 103595, 898.0 mm TL, メス

【解説】アカエイに似るが、尾部腹正中線の皮褶が白いことで識別される。沿岸域の水深 10 ~ 60 m に生息する。アカエイと同様に尾部に強力な棘があり、刺されると長時間にわたり出血が止まらないため、取り扱いには注意が必要。本種は伊豆半島沿岸から採集された標本に基づき新種として記載された。房総半島以南の太平洋沿岸、有明海、九州西岸に分布するとされ、鹿児島県では鹿児島湾から荻原ほか（2009）により報告された。内之浦漁港では非常に稀で、2013 年と 2017 年にオスとメス 1 個体ずつが得られている。食用にはされず、アカエイと同様に投棄されているものと考えられる。（小枝圭太）

アカエイ属 *Hemirhynchus laevigata* (Chu, 1960)**シロエイ** 珍しさ ★★★★★

■ シロエイ *Hemirhynchus laevigata* KAUM-I. 69072, 539.3 mm TL, オス

【解説】アカエイに似るが、噴水孔の後縁が黄色くない、体盤腹面縁辺が黄色味のある暗色である、尾部に小さなツブ状突起が密在しないことなどにより識別される。アカエイほど大きくならず、体盤幅は最大でも40 cm程度。本種は60 m以浅の砂泥底に生息する。小型個体は夏季に沿岸の浅場、冬季に深場へ移動する。メスは体盤幅29 cm以上で受精卵や胎子をもつ一方、オスでは体盤幅20 cm以上からクラスパー（交尾器）が長くなることが知られている（Furumitsu et al., 2010）。内之浦漁港で水揚げされた写真のオス個体は体盤幅24 cmであり、クラスパーも長いことから、成熟しているものと思われる。本種はこれまで国内では長崎県五島灘、橘湾、有明海、熊本県牛深からのみ記録されており、本報告は鹿児島県および九州太平洋沿岸からの初めての記録となる。（小枝圭太）

アカエイ属 *Hemitrygon* sp.

アリアケアカエイ

珍しさ ★★★



■ アリアケアカエイ *Hemitrygon* sp. KAUM-I. 62289, 271.6 mm TL, オス

【解説】アカエイに似るが、体盤腹面に小さな窪みがあることが特徴。アカエイほど大きくならず、体盤幅は最大でも 50 cm 程度。アカエイとは遺伝的に異なることが示され、標準和名が提唱されたが（古満・山口、2010）、未だ学名は決定していない。水深 3 ~ 60 m に生息する。本種は有明海ではアカエイとともに頻りに漁獲される普通種で、煮付などで食用とされている。これまで本種は長崎県野母崎、有明海、熊本県牛深、鹿児島県笠沙など九州西岸および鹿児島湾からのみ記録されていた。内之浦湾からも標本（KAUM-I. 62289、全長 27 cm）が得られたことにより、本種が九州西岸から太平洋沿岸にかけて広く分布することが示された。

（小枝圭太）



■ アリアケアカエイの体盤腹面の窪み
（KAUM-I. 62289）

カラスエイ属 *Pteroplatytrygon violacea* (Bonaparte, 1832)**カラスエイ** 珍しさ ★★★★★■ カラスエイ *Pteroplatytrygon violacea*, オス (2005年4月7日撮影)

【解説】体は台形に近い扇形で、吻端は平坦。背部正中線に皮褶がないことが特徴。体盤幅は最大で80 cm。水深381 m以浅に生息する。アカエイ科の多くは沿岸域で着底しているような底生性の生活を送るが、本種はそのなかでも珍しく外洋の表層域を遊泳することが多い。マグロ類を対象とした沖合の延縄漁で本種の大型個体が多量に混獲されるという。内之浦湾のような内湾性の環境で得られることは稀。世界中の熱帯～温帯域に分布し、国内では北海道から高知県以布利の太平洋沿岸、若狭湾以南の日本海沿岸、鹿児島県笠沙および琉球列島、九州ーパラオ海嶺から記録されている。内之浦漁港での採集例は、体盤幅50 cm程度の1個体に限られる。これは九州太平洋沿岸からの初めての記録といえるが、写真による記録のみで標本は残っていない。(小枝圭太)



■ カラスエイの腹面 (2005年4月7日撮影)

マダラエイ属 *Taeniurops meyeri* (Müller & Henle, 1841)

マダラエイ 珍しさ ★★★★★



■ マダラエイ *Taeniurops meyeri* KAUM-I. 78168, 520.6 mm TL, オス

【解説】体盤幅 2 m にも達する大型のエイで、日本に分布する底生性のエイ類では最大の種である。体盤背面は灰色で、まだら状の暗色斑が散在する。温帯～熱帯の岩礁およびサンゴ礁域の砂底域に生息する。1 m 以上の大型個体がサンゴ礁域によく出現することから、ダイビングでも人気がある。とりわけ、夜間には大型個体が多くみられる。攻撃的ではなく、潜って近づいても逃げることはほとんどないが、刺激されると尾の毒針を振り回すことがあり、死亡例もあるので注意が必要。内之浦湾では定置網に入ることがあるが、多くの場合はその場で逃がすため（大きすぎることと食用とされないため）、水揚げされることは稀である。本報告で得られた個体（KAUM-I. 78168、体盤長 28 cm）は、定置網に入った大型個体から生まれた直後のものであった。（小枝圭太）

アカエイ属 *Telatrygon zugei* (Müller & Henle, 1841)**ズグエイ** 珍しさ ★★★★★■ ズグエイ *Telatrygon zugei*, オス (2004年3月25日撮影)

【解説】体はスぺード形で、吻の先が突出しよく尖る。尾部上下の正中線に皮褶があることが特徴。温帯から熱帯の水深3～60 mに生息する。国内では和歌山県南部以南の太平洋沿岸と島根県隠岐、長崎県からの記録があるが鹿児島県内では稀。種小名は和名のズグエイに因む。最大でも体盤幅33 cmと小型な種であるため、食用としての価値が低く、あまり利用されないものと思われる。内之浦漁港では体盤幅25 cm程度のオスの水揚げが確認されているが、標本は残っていない。(小枝圭太)

■ ズグエイの腹面 *Telatrygon zugei* (2004年3月25日撮影)

ツバクロエイ属 *Gymnura japonica* (Temminck & Schlegel, 1850)**ツバクロエイ** 珍しさ ★★★■ ツバクロエイ *Gymnura japonica* KAUM-I. 73143, 284.0 mm TL, メス

【解説】ツバクロエイ科魚類は体が凧のように横長の菱形をしており、体盤幅が体盤長よりはるかに長いことが特徴。本種は体盤幅 1.8 m にも達する大型のエイである。い同じツバクロエイ科のうち日本に分布するオナガツバクロエイ（本書未掲載）とは尾部が短いことや体盤背面に黒色斑点が散在することにより識別可能である。また、オナガツバクロエイは体盤幅 1 m を越えるまでには成長しない。ツバクロエイは水深 108 m 以浅の砂泥底に生息し、数 m の浅場にも体盤幅 1 m を越える大型個体が出現する。砂を被り、マットのようにじっと動かないが、近づくと大きな鰭を勢いよく動かし、泳ぎ去る。鰭をはばたかせながら優雅に泳ぐ姿はとても美しい。尾柄には小さいながらも毒針があるので注意が必要。鹿児島県上甕島では全長 114 cm の大型の個体がアカハタの大型個体を餌として丸呑みにしていたことが報告されている（小枝・本村、2017）。刺身、エイヒレ、揚げもの、煮つけともに美味という（平坂 寛氏、私信）。内之浦漁港では大型個体の水揚げはなく、体盤幅 20 ~ 40 cm の小型個体のみがしばしばみられる。（小枝圭太）



■ ツバクロエイの腹面 (KAUM-I. 73143)

マダラトビエイ属 *Aetobatus narinari* (Euphrasen, 1790)**マダラトビエイ** 珍しさ ★★★★★■ マダラトビエイ *Aetobatus narinari* KAUM-I. 74738, 1620.0 mm TL, メス

【解説】体盤幅 2 m を越える大型のエイであり、体盤背面には青白色斑点が散在することが特徴。従来、マダラトビエイ属魚類はトビエイ科に含まれていたが、White and Naylor (2016) によりマダラトビエイ科として別科とされた。水深 1 ~ 60 m の岩礁・サンゴ礁域に生息し、単独あるいは群れで優雅に泳ぐ姿はダイビングや水族館でも人気が高い。肉食性で餌となる貝類や甲殻類、魚類を海底で探す。ポリポリと海底付近で何かをほお張る姿を自然下でもみることができ、人が近づくと優雅に泳ぎ去る。いおワールドかごしま水族館では 3 ~ 8 月にかけて水槽内で出産がみられた。産まれた直後の体盤幅は 50 ~ 60 cm ほど。内之浦漁港では定置網に入ることがあるが、多くの場合はその場で逃がすため（大きすぎることと食用とされないため）、水揚げされることは稀であり、写真の 1 個体のみが得られている。（小枝圭太）



■ マダラトビエイの腹面 (KAUM-I. 74738)

マダラトビエイ属 *Aetobatus narutobiei* White, Furumitsu & Yamaguchi, 2013

ナルトビエイ 珍しさ ★★★



■ ナルトビエイ *Aetobatus narutobiei* KAUM-I. 71418, 810.0 mm TL, メス

【解説】体盤幅 1.5 m にもなる大型のエイで、吻が尖り、背鰭が腹鰭の間に位置すること、体が一様に暗褐色であることが特徴。沿岸域や河口域に生息する。国内では秋田県男鹿以南の日本海・東シナ海沿岸、神奈川県江の島以南の太平洋沿岸に分布し、近年、日本近海、とくに有明海や瀬戸内海で個体数が劇的に増加しているとされる。有明海では個体数が増加した本種によるアサリの食害がおこっており、駆除もおこなわれているほど。鮮度が落ちるとアンモニア臭が強く、食用にむかない。鮮度が良いものは刺身や揚げ料理で食べられるが、独特の筋線維が残る（平坂 寛氏、私信）。内之浦漁港での個体数は多くはない。（小枝圭太）



■ ナルトビエイの腹面（KAUM-I. 71418）

イトマキエイ属 *Mobula mobular* (Bonnaterre, 1788)**イトマキエイ** 珍しさ ★★★★★■ イトマキエイ *Mobula mobular* KAUM-I. 65943, 2155.0 mm TL, オス

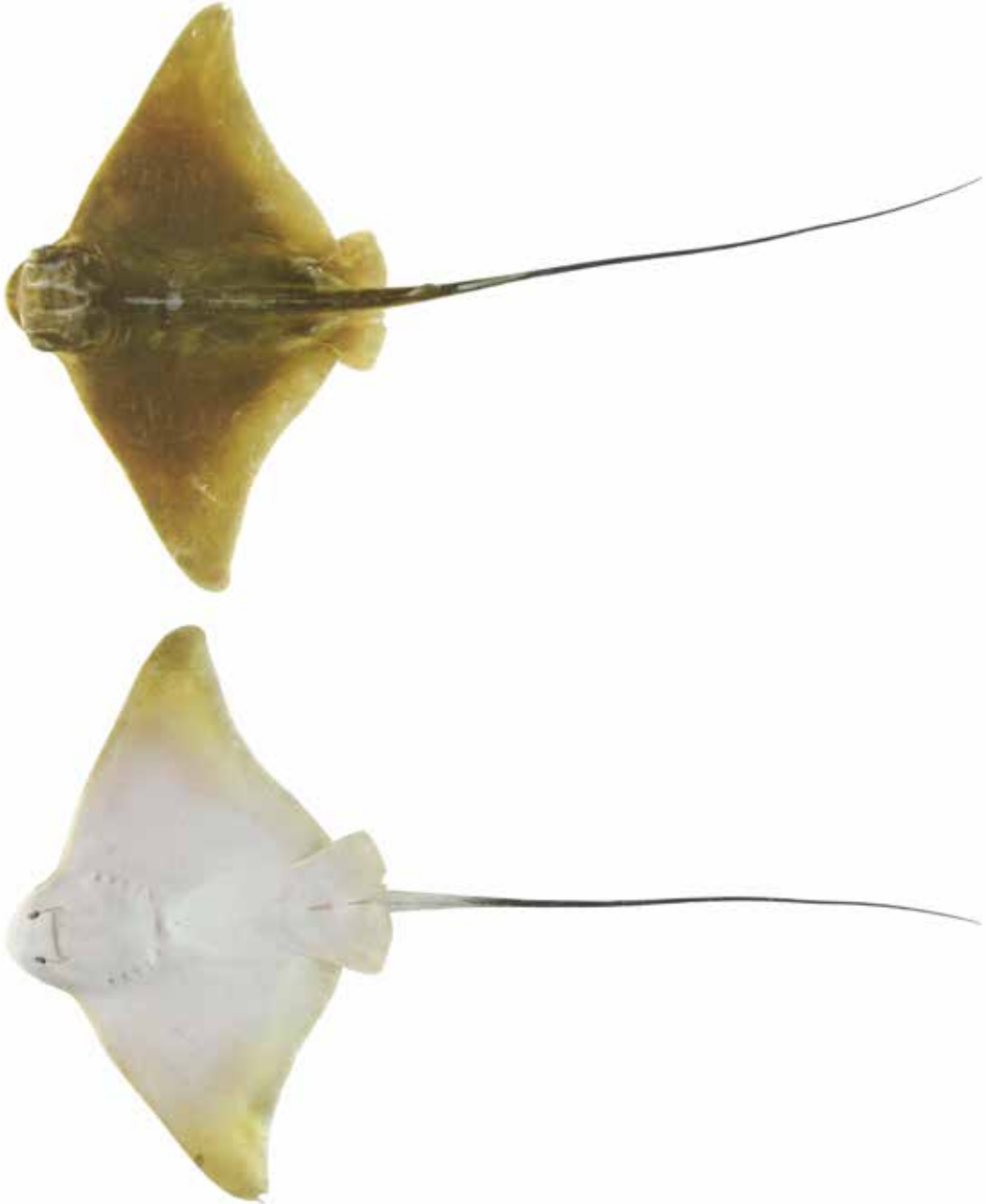
【解説】体盤幅 3 m を越える大型のエイである。ただし、マンタとして有名なオニイトマキエイやナンヨウマンタ（いずれも本書未掲載）が体盤幅 5 m を越えることと比較するとやや小型である。イトマキエイは日本産イトマキエイ属として唯一、尾部に棘をもつことで容易に識別される。本属魚類は空中へジャンプすることや、数千個体から成る大群を作ることなどが知られるが、本種においてもそのような生態をもつかは不明。沿岸～外洋域の表層・中層に生息する。国内では琉球列島を除くほとんどの海域に広く分布する。内之浦漁港で水揚げされた個体は体盤幅約 150 cm のオスで、本種としては小型であった。トビエイ類は総じて不味であり、食用として利用されることはほとんどない。鹿児島県笠沙での方言はロッキード。（小枝圭太）



■ イトマキエイの腹面（KAUM-I. 65943）

トビエイ属 *Myliobatis tobijei* Bleeker, 1854

トビエイ 珍しさ ★★★

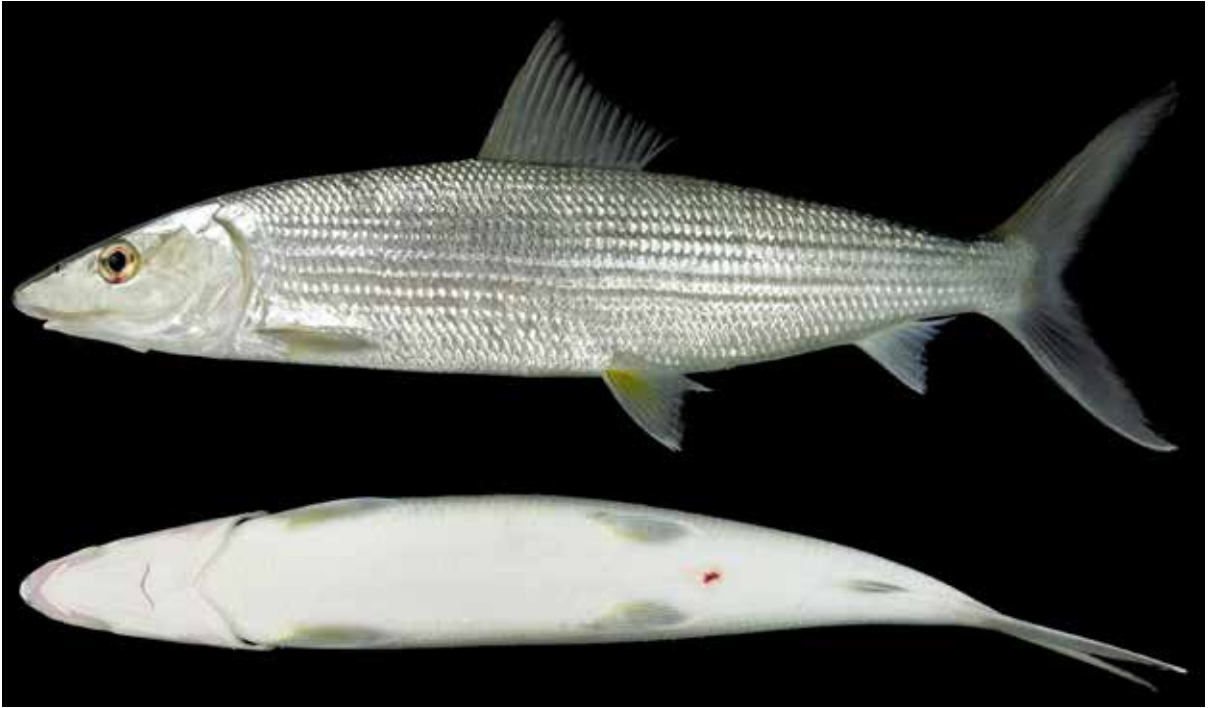
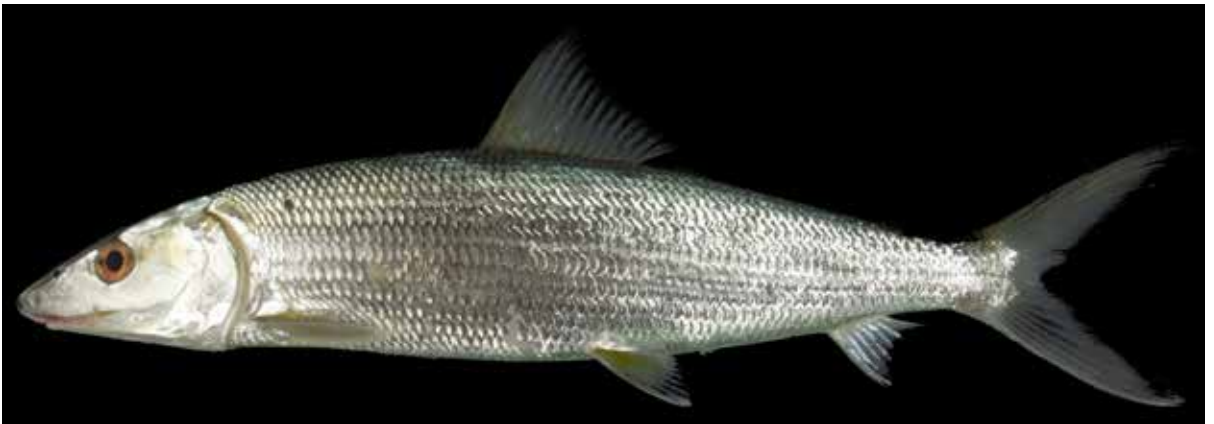


■ トビエイ *Myliobatis tobijei* KAUM-I. 82841, 413.1 mm TL, メス

【解説】体盤幅 80 cm 程度の小型のエイ類である。比較的似たナルトビエイとは吻端が丸いことや背鰭が腹鰭よりはるか後方に位置すること、口の上縁が切れ込まないことなどで識別できる。トビエイ科魚類としては活動性が低く、海底にじっとしていることが多いといわれる。尾部に棘があり、刺されると激痛に苦しむ。卵胎生で 6 ~ 9 月ごろに胎仔を出産することが知られている。底生性の甲殻類や魚類、貝類を中心に捕食する。比較的沿岸性で多くは水深 60 m 以浅に生息している。鹿児島県では海沿いを歩いていると、本種が水際を悠然と泳ぐ姿をみることもある。国内ほぼすべての海域に分布しているが、近年、有明海などで個体数が爆発的に増加しているナルトビエイと比較するとやや数が少ない。(小枝圭太)

ソトイワシ属 *Albula koreana* Kwun & Kim, 2011

ソトイワシ 珍しさ★★★★

■ ソトイワシ *Albula koreana* KAUM-I. 80897, 294.6 mm SL■ ソトイワシ *Albula koreana* KAUM-I. 34311, 299.0 mm SL

【解説】体は円筒形に近いが、やや側扁し、一様に銀白色を呈する。千葉県以南に広く分布する。稚魚は透明で、柳の葉の様な形態をしたレプトセファルス幼生期を過ごすことが知られており、同様の稚魚期をもつウナギ目魚類との類縁性が指摘されている。最大で体長 80 cm に達する。鹿児島県本土においては稀な魚である。砂底域に多く生息し、汽水域にも進入する。引きが強く、釣りの対象魚として人気が高い。ただし、身が柔らかく、加熱すると崩れやすいうえに小骨が多いことから、食用魚としての需要は低い。(畑 晴陵)



■ ソトイワシの頭部 (KAUM-I. 80897)

ウツボ属 *Gymnothorax isingteena* (Richardson, 1845)

ニセゴイシウツボ

珍しさ ★★★★★



■ ニセゴイシウツボ *Gymnothorax isingteena* KAUM-I. 45419, 1040.0 mm TL

【解説】最大で1.8 mに達する大型のウツボ科魚類で、薄灰色や白色の体に黒色斑が散在することが特徴。一部の黒色斑は接続して円状や蹄状となる。熱帯から亜熱帯のサンゴ礁域や港のなかなど浅場に生息し、体長1 mを越える大型個体が水際からも見ることができる。一度、住処を選ぶとしばらくは移動しないのか、漁港内で数ヶ月に渡って観察され続けたこともある。気性は荒く、穴から顔を出し、口を大きく開いて威嚇する。特徴的な体色から水族館で展示されることも多いが、水槽内では巨大な体をくねらせて泳ぎ回る姿がみられることもある。このように泳ぎ回る姿を野外でみることは、ほとんどない。八丈島、伊豆半島以南の太平洋沿岸、鹿児島県南さつま市、屋久島、口永良部島、琉球列島、南大東島に分布する。内之浦漁港で水揚げされた写真の個体は中村ほか（2017）により九州沿岸域からの初めて記録として報告された。沖縄県では食用として市場に並ぶ数少ないウツボ科魚類であるが、他の地域ではほとんど利用されていない。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶウツボ *Gymnothorax kidako*
(2017年1月11日撮影)

ウツボ属 *Gymnothorax kidako* (Temminck & Schlegel, 1846)**ウツボ** 珍しさ★★■ ウツボ *Gymnothorax kidako* KAUM-I. 71426, 694.0 mm TL

【解説】最大で80 cmほどのウツボ科魚類で、黄色やオレンジ色の体に不明瞭な暗色横帯があること、臀鰭に明瞭な白色縁をもつことなどにより他種と識別される。気性が荒く、触れようとしたものに噛みついてくる習性がある。歯が鋭く、噛まれると深い傷が残るため、扱いには注意が必要。釣れることもあるが、体表はぬめりが強く、体をよじるため掴みづらいうえ、掴んだ手に噛みつこうとする。釣り針を取る際などは、無理をせず糸を切った方が良好だろう。沿岸の岩礁域に生息する。穴から顔を出していることもあるが、ウツボ科としては珍しく岩などに寄り添うようにしている姿をよくみかける。国内では岩手県以南の太平洋沿岸と島根県以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、屋久島、口永良部島、奄美大島、慶良間諸島から記録されているが、琉球列島では稀。本種は食用として利用する地域とそうでない地域での扱いの差が大きい。唐揚げや干物などで食べられることが多く、美味。内之浦漁港でも一定の水揚げがあり、「きだか」と呼ばれ、選別されてキロ単価200～300円ほどで取引されている。(小枝圭太)



■ ウツボの頭部 (KAUM-I. 71426)

ウツボ属 *Gymnothorax minor* (Temminck & Schlegel, 1846)

アミウツボ 珍しさ ★★★★★



■ アミウツボ *Gymnothorax minor* KAUM-I. 74759, 401.0 mm TL

【解説】最大で60cmほどのウツボ科魚類で、吻が鈍く丸いこと、前上顎骨中央部に歯がないこと（稀にある）、白色の体に14～22本の横帯があること、その一部が不明瞭であることが特徴。よく似たクルマウツボ（本書未掲載）は体の横帯が12～14本で、明瞭であることで本種と識別される。水深100m前後のやや深場に生息する。ウツボ科魚類としては珍しく、泥地で穴から顔を出す様子がしばしばみられる。新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県外房以南の太平洋沿岸、大阪湾、瀬戸内海（稀）に分布する。内之浦漁港では全長38～40cmの個体が水揚げされているが、体も小さく、食用として利用されることはない。（小枝圭太）



■ アミウツボの頭部（KAUM-I. 74759）

ウツボ属 *Gymnothorax pseudothyrsoides* (Bleeker, 1853)**アミメウツボ** 珍しさ ★★★■ アミメウツボ *Gymnothorax pseudothyrsoides* KAUM-I. 82839, 663.9 mm TL

【解説】全長1 m程度になるウツボ科魚類で、薄黄色の体に細い網目状の線状紋をもつことが特徴。ウツボ属魚類の同定には体色の模様が重要であることが多い。本種と同様に網目状の線状斑をもつ種としてナミウツボ（本書未掲載）があげられるが、本種と比較して線状紋が太いことで識別される。気性が荒く、触れようとしたものに噛みついてくる習性がある。釣れることもあるが、体表はぬめりが強く、体をよじるため持ちづらいうえ、掴んだ手に噛みつくようとする。本種を陸上で掴もうとした際、ぬめりで手が滑り、落ちた先の足の指を噛まれたことがあるが、切り傷はとても深いうえによく腫れた。生体の扱いには細心の注意が必要。サンゴ礁域や内湾域、河口域などに生息し、和歌山県以南の太平洋沿岸域と山口県日本海沿岸、口永良部島（木村ほか、2017）、沖縄島、与那国島（Koeda et al., 2016）に分布している。小枝・本村（2017）により種子島から標本に基づき初めて記録されたが、種子島では個体数が多く、ごく普通にみられる種である。内之浦漁港での水揚げは稀であり、食用とされることもない。（小枝圭太）



■ アミメウツボの頭部（KAUM-I. 82839）

タケウツボ属 *Strophidon sathete* (Hamilton, 1822)

オナガウツボ 珍しさ ★★★★★



■ オナガウツボ *Strophidon sathete* KAUM-I. 60817, 1455.0 mm TL

【解説】全長 3 m にも達する大型のウツボ類だが、ニセゴイシウツボなどと違い体が細いため、大きいという印象はない。同属のタケウツボとは、吻が丸いこと、眼の後下方に頭部側線管孔があることで識別される。写真の標本 (KAUM-I. 60817) は体高が全長の 3.8% と本種としては高かったものの、総脊椎骨数が 286 であったことにより、本種に同定された。本種の体高は生息環境など何らかの要因により個体変異が著しい可能性がある。体は濃い灰色あるいは茶色で、臀鰭より前の腹面は白い。内湾の泥底域に生息し、ウツボ科としては珍しく泥地に穴を掘って顔を出している姿がダイバーなどにより目撃されている。国内での記録が駿河湾、和歌山県日ノ岬・田辺湾・串本、高知県須崎、沖縄島からに限られる珍しい種であり、鹿児島県を含む九州沿岸域からの本種の採集記録はない。内之浦漁港で水揚げされた写真の個体は、九州沿岸からの初めての記録となる。(小枝圭太)



■ オナガウツボの頭部 (KAUM-I. 60817)

タケウツボ属 *Strophidon ui* Tanaka, 1918**タケウツボ** 珍しさ ★★★★★■ タケウツボ *Strophidon ui* KAUM-I. 20726, 2655.0 mm TL

【解説】全長 1.5 m 程度とされるウツボ類だが、内之浦で得られた標本は 2.5 m 以上の大型の個体であった。体は非常に細長く、頭部は小さい。同属のオナガウツボとは、吻が尖ることと眼の後下方に頭部側線管孔がないことにより識別されるとされるが、これらが同種であるとする見解もあるようである（波戸岡、2013a）。体は焦げ茶色で、臀鰭より前の腹面は白い。内湾の泥底域に生息するとされるが、記録が少なく、生態学的な知見も不足した種である。国内での成魚の記録は和歌山県田辺湾と土佐湾からに限られ、この他には葉形仔魚が駿河湾と九州南西部沖から得られているのみ。内之浦で得られた写真の個体は本種成魚の九州沿岸からの初めての記録となるとともに、本種の九州太平洋沿岸からの初めての記録となる。（小枝圭太）



■ タケウツボの頭部 (KAUM-I. 20726)

アサバホラアナゴ属 *Dysomma anguillare* Barnard, 1923

アサバホラアナゴ 珍しさ ★★★



■ アサバホラアナゴ *Dysomma anguillare* KAUM-I. 61526, 357.9 mm TL

【解説】体は細長く、体背面から体側上部は焦げ茶色を呈し、体側下部から体腹面は白色。眼は小さく、口裂中央上方に位置する。内之浦湾では定置網によって時折漁獲されるが、細く、肉量が少ないため、食用として利用されることはないものと思われる。本種の標準和名は長らくメクラアナゴとされてきたが（例えば Uematsu et al., 1990 ; 岡村、1997）、差別用語を含んでおり標準和名として不適切であるとして、2007年に魚類学会により現在のものに改称された。（畑 晴陵）



■ アサバホラアナゴの頭部
(KAUM-I. 61526)

タツウミヘビ属 *Brachysomophis cirrocheilos* (Bleeker, 1857)

モヨウタツウミヘビ

珍しさ ★★★★★



■ モヨウタツウミヘビ *Brachysomophis cirrocheilos* KAUM-I. 82706, 1060.0 mm TL

【解説】体は乳白色を呈し、体背面は焦げ茶色。暗色横帯が多数ある。胸鰭が大きく、頭長（吻端から胸鰭基底先端までの長さ）の16%以上。体は細長く、尾部（肛門から尾鰭後端までの長さ）は全長の51%以上。両顎には鋭い円錐歯が多数あり、両唇には多数の髭をそなえる。砂泥底に生息し、巣穴を掘って潜る。最大で全長1.6 mに達する大型種。インド・西太平洋に広く分布するが、日本における記録は極めて少なく、これまで和歌山県白浜町（池田・中坊、2015）、高知県土佐清水市以布利と愛媛県愛南町御荘、沖縄島（三浦、2012）などから記録があるに過ぎず（波戸岡、2013a）、本報告は本種の九州沿岸における初めての記録である。内之浦湾においても極めて稀であり、2015年5月19日に水揚げされた写真の個体（KAUM-I. 82706）が確認されたのみ。（畑 晴陵）



■ モヨウタツウミヘビの頭部（KAUM-I. 82706）

ウミヘビ属 *Ophichthus altipennis* (Kaup, 1856)

ホタテウミヘビ 珍しさ★★



■ ホタテウミヘビ *Ophichthus altipennis* KAUM-I. 71251, 621.0 mm TL

【解説】体側上半部は茶色がかった黒色を呈し、下半部は白色。個体によっては不明瞭な斑紋がある場合がある。背鰭は高く、前部は黒色を呈する。上顎歯は円錐状を呈し、鋭い。砂底や砂泥底に生息し、巣穴を掘って頭だけ外に出していることが多い。本種に適用される学名は *Pisodonophis zohistius* Snyder, 1901 とされることが多かった（例えば西田ほか、2008；富山、2013）。しかし、波戸岡（2013a）においては、*Ophichthus altipennis*、*P. zohistius*、さらに *O. intermedius* Regan, 1905 がいずれも同一の種であるとされ、これらのうち最も記載年の古い *O. altipennis* をホタテウミヘビに適用すべきとしている。ホタテウミヘビは内之浦湾においては定置網において時折漁獲されるが、食用となることはなく、捨てられるか養殖餌料となることがほとんど。焼いて食すと意外に美味。（畑 晴陵）



■ ホタテウミヘビの頭部 (KAUM-I. 71251)



■ ホタテウミヘビ KAUM-I. 62426, 426.1 mm TL

ウミヘビ属 *Ophichthus machidai* McCosker, Ide & Endo, 2012

マチダウミヘビ

珍しさ ★★★★★

■ マチダウミヘビ *Ophichthus machidai* KAUM-I. 6869, 547.5 mm TL

【解説】体側上部は黄土色を呈し、下半部は黄色がかかる。体はウミヘビ科としては太く、短い。イナカウミヘビ（本書未掲載）に類似するが、胸鰭が長く、両顎とほぼ同長かそれよりも長いこと（イナカウミヘビでは胸鰭が両顎よりも短い）、鋤骨歯が中央部で2列になること（1列）、脊椎骨数が150～161（126～132）であることにより識別される。McCosker et al. (2013) によって記載されたばかりの種であり、写真の個体（KAUM-I. 6869）を含む2個体の内之浦湾産標本がパラタイプに指定されている。日本と台湾からのみ記録されており（McCosker et al., 2013; Ho et al., 2015）、日本国内では内之浦湾のほか、高知県黒潮町と紀伊水道から記録されている。台湾においては底曳網によって頻繁に漁獲されるが（Ho et al., 2015）、内之浦湾においては上記のパラタイプ以外得られていない。（畑 晴陵）



■ マチダウミヘビの頭部（KAUM-I. 6869）

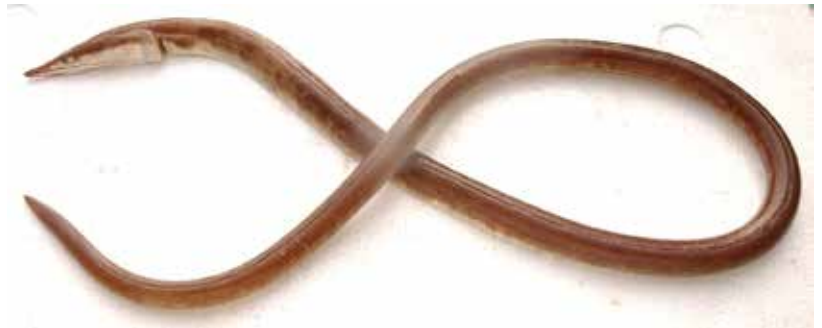
ダイナンウミヘビ属 *Ophisurus macrorhynchos* Bleeker, 1852

ダイナンウミヘビ 珍しさ★★



■ ダイナンウミヘビ *Ophisurus macrorhynchos* KAUM-I. 68889, 1490.0 mm TL

【解説】口は大きく裂け、両顎は細長い。両顎には犬歯状歯をそなえる。体側上半部は焦げ茶色を呈し、下半部は銀白色。体は非常に細長く、全長 1.4 m に達する。水深 500 m 以浅の砂底・砂泥底域に生息する。水底に巣穴を掘り、頭だけを出していることが多い。日本国内においては北海道から九州南岸にかけて広く分布するが、琉球列島と小笠原諸島からは記録されていない。東アジア固有種とみられるが、本種の日本国外の分布域に関する詳細は不明である（波戸岡、2013b）。南日本においては夜釣りの外道として有名であるほか、島根県においてはアカアマダイ（本書未掲載）を対象とした延縄漁業の混獲物として最も多く漁獲されることが知られるが、全く利用されていない（森脇ほか、2012）。内之浦湾においても時折定置網によって水揚げされるが、利用されることはなく、投棄される。（畑 晴陵）



■ ダイナンウミヘビ
(2008年1月15日撮影)

ミナミホタテウミヘビ属 *Pisodonophis cancrivorus* (Richardson, 1848)

ミナミホタテウミヘビ

珍しさ ★★★



■ ミナミホタテウミヘビ *Pisodonophis cancrivorus* KAUM-I. 6868, 603.9 mm SL

【解説】ホタテウミヘビに似るが、歯は鈍く、顆粒状を呈することで識別できる。海水域のほか、河口の汽水域にも進入する。全長 10 cm ほどの若魚が高知県浦ノ内湾の干潟の泥中深さ 15 ~ 20 cm から得られた例もある（佐藤ほか、2007）。なおミナミホタテウミヘビ属 *Pisodonophis* の和名はかつて、ホタテウミヘビ属とされてきたが、ホタテウミヘビの帰属がウミヘビ属 *Ophichthus* に変更されるにともない、ホタテウミヘビがホタテウミヘビ属に属さない、という事態が生じたため、*Pisodonophis* 属の和名はミナミホタテウミヘビ属に変更された（波戸岡、2013b）。内之浦湾においては時折定置網によって漁獲されるが、食用に供されることはない。（畑 晴陵）



■ ミナミホタテウミヘビの頭部（KAUM-I. 6868）

ゴテンアナゴ属 *Ariosoma anago* (Temminck & Schlegel, 1846)

ハナアナゴ 珍しさ ★★★★★



■ ハナアナゴ *Ariosoma anago* (2006年9月27日撮影)

【解説】体側上半部は明るい茶褐色を呈し、体腹面は白色。臀鰭外縁は明瞭に黒色に縁取られる。オオシロアナゴとの異同に関しては、オオシロアナゴを参照。学名 *Ariosoma anago* は長らくゴテンアナゴに適用されてきたが、ハナアナゴに適用すべきものであることが明らかにされている。しかし、従来ハナアナゴに適用されてきた *Conger anagoides* Bleeker, 1853 を用いるべき種やゴテンアナゴに適用すべき学名に関しては研究が続けられている (Smith, 1989 ; 波戸岡, 2013c)。一般的に水深 150 m 付近に多く生息するが、内之浦湾においては水深 40 m に設置された定置網により得られている。内之浦湾においては稀な種であり、2006年9月27日に得られた個体の写真が確認されたのみ。(畑 晴陵)



■ ハナアナゴの頭部 (2006年9月27日撮影)

ゴテンアナゴ属 *Ariosoma majus* (Asano, 1958)

オオシロアナゴ 珍しさ ★★



■ オオシロアナゴ *Ariosoma majus* KAUM-I. 63154, 433.7 mm TL

【解説】体側上半部は明るい茶褐色を呈し、体腹面は白色。臀鰭は細く黒色に縁取られる。近縁のハナアナゴとは、臀鰭外縁が幅広いことで識別できるとされるが、色彩以外の差異は乏しく、これら2種を同種とみる向きもある (波戸岡, 2013c)。千葉県以南の南日本に分布し、全長 50 cm 程度に成長する。内之浦湾では定置網によって全長 40 cm 未満の小型個体が頻りに漁獲されるが、肉量が乏しいため、ほとんど市場に出荷されることはない。(畑 晴陵)



■ オオシロアナゴの頭部

ゴテンアナゴ属 *Ariosoma meeki* (Jordan & Snyder, 1900)

ゴテンアナゴ 珍しさ ★



■ ゴテンアナゴ *Ariosoma meeki* KAUM-I. 63772, 334.5 mm TL

【解説】体側上半部は明るい褐色を呈し、体腹面は銀色。眼の後方に上下で1対の暗褐色斑がある。東シナ海では水深65～160 m、土佐湾では水深20～30 mから得られているが（波戸岡、2013c）、内之浦湾においては水深25～40 mに設置された定置網によって頻繁に漁獲される。最大で全長60 cm程度まで成長するが、内之浦湾で漁獲されるものは35 cm未満の小型個体がほとんどで、体が半透明の稚魚も得られている。小型個体に関しては肉量が少ないため、食用とされることは稀で、ほとんどが養殖魚の餌料となる。（畑 晴陵）



■ ゴテンアナゴの稚魚（KAUM-I. 71456, 171.7 mm TL）

クロアナゴ属 *Conger erebennus* (Jordan & Snyder, 1901)

ダイナンアナゴ 珍しさ ★★★★★



■ ダイナンアナゴ *Conger erebennus* KAUM-I. 71267, 814.0 mm TL

【解説】体は暗紫褐色を呈し、腹側は白色がかかる。全長 1.2 m ほどに成長する大型種。クロアナゴと比較して稀な種であり、九州沿岸においては博多と内之浦湾からのみ記録されているものの (Jordan and Snyder, 1901; Kanazawa, 1958; 本研究)、クロアナゴとの混同も少なからずあるものと思われる。水深 100 m 以浅におもに生息するが、与論島南東沖の水深 600 m から得られた記録もある (日比野、2014)。魚類や甲殻類をおもな餌とし、胃からはシャコ類やナマコ類など底生生物、魚類ではハゼ類、ネズッコ類など底生性の魚種が多くみつかると (秋山、2015)。クロアナゴと同様、東京湾で漁獲される個体の約 95% がメスの記録がある。発生後 5 年で全長 70 cm に成長し、11 歳以上の個体も知られている (片山ほか、2015)。内之浦湾においては水深 40 m 以浅に設置された定置網により稀に漁獲されるが、クロアナゴと同様、利用されることはほとんどないものと思われる。(畑 晴陵)

クロアナゴ属 *Conger jordani* Kanazawa, 1958

クロアナゴ 珍しさ ★★



■ クロアナゴ *Conger jordani* KAUM-I. 71438, 542.3 mm TL



■ クロアナゴ *Conger jordani* KAUM-I. 63156, 431.6 mm TL

【解説】体は黒みがかった茶色を呈し、腹面は白色。全長 1.4 m ほどに成長し、日本産アナゴ科魚類の中でも最大級。魚類や甲殻類をおもな餌とし、胃からはカタクチイワシやマアジ、サバ類などの遊泳性魚類が多く見ついている（秋山、2015）。雌雄で異なる群れを形成するらしく、東京湾においては漁獲される 99% 以上がメスであることが知られている（片山ほか、2015）。青森県以南に広く分布し、内之浦湾においても全長 20 cm ほどから 1 m ほどの個体が定置網で頻繁に漁獲される。マアナゴなどと比較して食味の評価は高くなく、内之浦においても市場に出荷されることなく投棄され、サギ類の餌となっていることも多い。東京湾などにおいてはゲームフィッシングの対象魚とされることもある（秋山、2015）。（畑 晴陵）

ギンアナゴ属 *Gnathophis heterognathos* (Bleeker, 1858)

ギンアナゴ 珍しさ ★★★



■ ギンアナゴ *Gnathophis heterognathos* KAUM-I. 62486, 284.1 mm TL

【解説】体側上部は淡い茶褐色を呈し、体色中央部は銀色。一般的に水深 150 m 以深に生息するとされるが、内之浦湾では全長 30 cm 程度の小型個体が水深約 40 m に設置された定置網により散発的に漁獲される。小型個体では肉量が少なく、内之浦においては漁獲されても食用となることはほとんどなく、養殖餌料に用いられる程度と思われる。（畑 晴陵）



■ ギンアナゴ *Gnathophis heterognathos* KAUM-I. 98020, 275.9 mm TL

ハモ属 *Muraenesox bagio* (Hamilton, 1822)

スズハモ 珍しさ ★★★



■ 水揚げされたスズハモ *Muraenesox bagio* (2013年1月7日撮影)

【解説】最大で2 mを越えるが、水揚げされるものの多くは1 m前後である。ハモとよく似ており、一見しての識別は困難である（識別方法はハモを参照）。国内では北海道釧路以南の太平洋沿岸と山口県日本海沿岸、東シナ海南部大陸棚域に分布する。美味ではあるが、ハモと比べると旨味が少なく、やや劣るため価値も低いという。練り物の材料として人気が高く、内之浦漁港で水揚げされたものの多くは需要の高い京都に出荷される。（小枝圭太）



■ 水揚げされた食べごろサイズのハモ属 *Muraenesox* (2012年1月24日撮影)

ハモ属 *Muraenesox cinereus* (Forsskål, 1775)

ハモ 珍しさ ★

■ ハモ *Muraenesox cinereus* KAUM-I. 12743, 590.3 mm TL

【解説】最大で2 mを越えるが、内之浦漁港で水揚げされるものの多くは1 m前後である。よく似たスズハモとは、肛門前側線孔数が40～47と多いこと（スズハモでは33～39）、肛門より前方の背鰭軟条数が66～78と多いこと（47～59）、胸鰭の内側が暗灰色であること（紅色）などで識別される。水深120 m以浅の砂地に生息し、海底に体の大部分を埋めて顔だけ出している姿が確認されている。沿岸域で産卵することが知られる。葉形仔魚は秋にシラス網に入ることがある。インド・西太平洋に分布し、国内でも青森県から鹿児島県にかけての日本海・東シナ海・太平洋沿岸および東シナ海大陸棚上と広く知られる。京料理には欠かせない食材であり、京都市内の鮮魚店では日本各地で漁獲されたハモが販売されている。小骨が多く、骨切りという下処理（約3 cmにつき25筋もの包丁を入れる）が必要であり、これには熟練の技術と専用の包丁が必要とされる。味は淡白でありながら旨味が強い。京都では、夏前ものは脂が少なく身が柔らかいため、湯引きしたものに梅肉を添えてさっぱりと、秋ものは脂がのって身がしっかりするため、鍋物などにして食べるのが一般的。本種は生命力が強く、水がなくとも長く生存することができる。この生態が海から遠く離れた京都で本種を食す文化が発展した理由である。内之浦漁港では最大体長に近い大型個体から1 mほどの食べごろの個体まで幅広く水揚げがあるが、大きすぎて大味なものを除き、多くを京都に送っている。ただし大型の個体も上質な練物の材料として重宝される。ちなみに、ハモのように標準和名が2文字で構成される種は日本産魚類で27種が知られ、このうち内之浦からは、ハモのほか、イラ、クエ、スギ、スマ、ダツ、ハチ、ブリ、ボラ、ムツ、モロの11種が得られている。（小枝圭太）

ハシナガアナゴ属 *Oxyconger leptognathus* (Bleeker, 1858)

ハシナガアナゴ 珍しさ ★★★★★



■ ハシナガアナゴ *Oxyconger leptognathus* KAUM-I. 74761, 277.0 mm TL



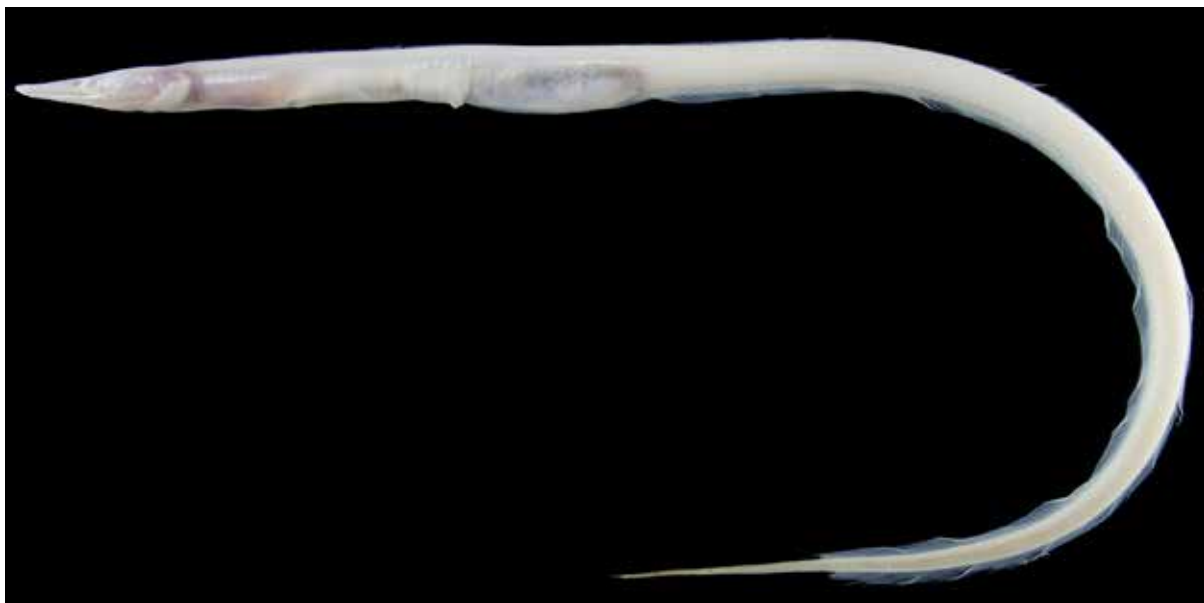
■ ハシナガアナゴ *Oxyconger leptognathus* KAUM-I. 83920, 258.4 mm TL

【解説】最大で60 cmほどのハモの仲間だが、ハモやスズハモとは似ても似つかない。体は短く、吻がよく尖り、肛門が体の中央より後方にあるのが特徴。体は銀白色で、背鰭の外縁は暗色に縁どられる。眼が大きく、歯が鋭い。国内では相模灘、熊野灘、土佐湾、長崎県佐世保で底曳網漁により水深244 ~ 308 mから混獲されることが知られるが、これ以外の海域からの記録はなく、内之浦漁港で水揚げされた写真の2個体（KAUM-I. 74761, 全長28 cmとKAUM-I. 83920, 全長26 cm）は鹿児島県および九州南岸からの初めての記録として報告された（畑ほか、2017a）。また、内之浦湾の水深は最大でも60 m程度であり、深海性の本種の採集水深としては非常に浅い。

(小枝圭太)



■ ハシナガアナゴの頭部 (KAUM-I. 74761, 277.0 mm TL)

イトアナゴ属 *Saurenchelys cancrivora* Peters, 1864**イトアナゴ** 珍しさ ★★★★★■ イトアナゴ *Saurenchelys cancrivora* KAUM-I. 107725, 524.7 mm SL

【解説】 吻部は長く、口裂が大きく、細長いハモの様な形態をしている。胸鰭がない。体は一様に乳白色。各鰭は白色半透明であるが、臀鰭と背鰭の後部と尾鰭のみ黒色。翼状骨歯に歯がある。日本国内においては極めて稀な種であり、従来は和歌山県、愛媛県、長崎県からのみ記録されていた（波戸岡、2013d）。写真の個体は2017年6月に定置網によって得られたものであり、鹿児島県における本種の標本に基づく初めての記録となる。本種に限らず本科魚類は全国的に漁獲されることは少なく、世界的にも稀なものが多い。一部の種では仔稚魚のみが知られ、成魚の形態が未だ謎に包まれているものすらあるなど、分類学的混乱が著しい。（畑 晴陵）

■ イトアナゴ *Saurenchelys cancrivora* KAUM-I. 107725, 524.7 mm SL

ウルメイワシ属 *Etrumeus micropus* (Temminck & Schlegel, 1846)

ウルメイワシ 珍しさ★



■ ウルメイワシ *Etrumeus micropus* KAUM-I. 110114, 146.5 mm SL(上), KAUM-I. 71259, 198.1 mm SL(下)

【解説】体は銀白色を呈し、体背面から体側上部にかけて、生時は鮮やかなエメラルドグリーンを呈するが、死後は水色に変化し、時間の経過とともに紫がかった青色に変化する。幼魚では体は半透明で体背面は明るい茶褐色を呈し、体側中央に銀色縦帯がはいる。体は円筒形。腹鰭起部は背鰭基底後端よりも後方に位置する。眼は大きく、厚い脂瞼に被われ、これにより眼が潤んだように見えることからウルメイワシと呼ばれる。日本国内では、北海道南部から大隅諸島にかけての各地に分布するが、太平洋沿岸に多い。マイワシやカタクチイワシと比較して沿岸性が強い。寿命は2歳ほどと考えられており、最大で体長25cmほどに達する。千葉県銚子沖から九州太平洋沿岸にかけての海域において、10月から7月にかけて産卵をおこなう(真田ほか、1994; 高須賀ほか、2016)。ウルメイワシの学名は長らく *Etrumeus teres* とされ、世界中の暖海に広く分布するとされてきたが(例えば Whitehead et al., 1985; 青沼・柳下、2013)、ウルメイワシは東アジアに固有の種であり、*E. micropus* を適用すべきであることが提唱されている(Randall and DiBattista, 2012)。内之浦湾においては定置網によって大量に漁獲される。鹿児島県近海においては秋季に稚魚が多数漁獲され、しらす干しに加工される。(畑 晴陵)



■ ウルメイワシ *Etrumeus micropus* KAUM-I. 31349, 135.6 mm SL



■ ウルメイワシ *Etrumeus micropus* KAUM-I. 31350, 143.8 mm SL

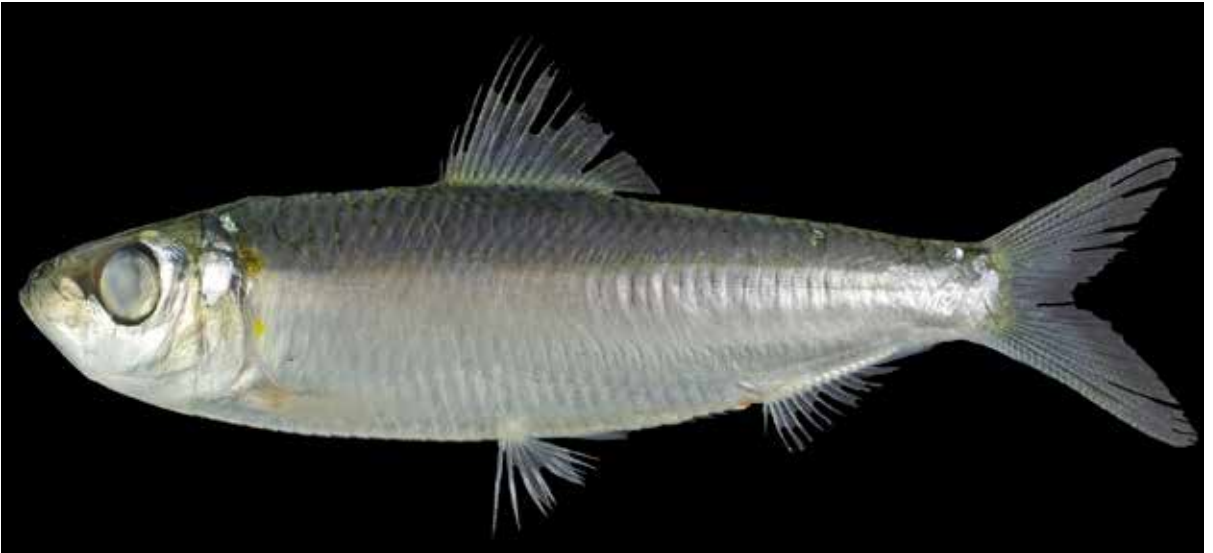


■ ウルメイワシ *Etrumeus micropus* KAUM-I. 73162, 134.0 mm SL

ミズン属 *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Rüppell, 1837)

ミズン 珍しさ ★★★★★

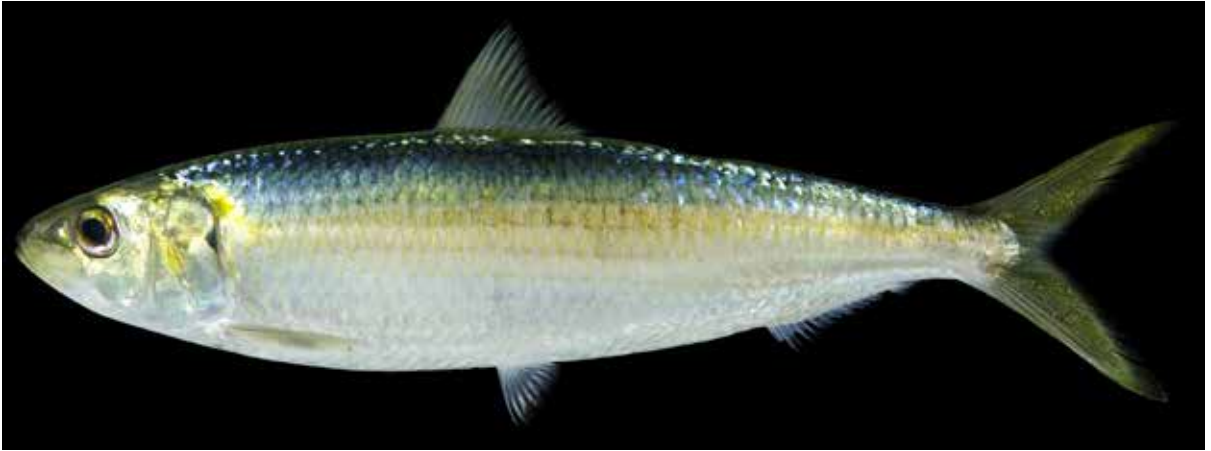
【解説】体側は銀白色を呈し、体背面から体側上部にかけては黒色。生時、体側上部は水色から緑色を呈し、鰓蓋後方から尾柄にかけてエメラルドグリーンの細い縦帯がはいる。鰓蓋後方に2つの橙色の斑点がはいる。尾鰭は灰色。体は側扁する。アフリカ東岸からサモアにかけてのインド・西太平洋の熱帯域に広く分布する。ハワイにも1970年代に移入が確認されている(Williams and Clarke, 1983)。日本国内では小笠原諸島、鹿児島県内之浦湾、種子島、奄美群島、および沖縄県から標本に基づいて記録されており、内之浦は分布の北限(青沼・柳下, 2013; 畑, 2014; Hata et al., 2015; 畑ほか, 2017b)。繁殖海域の北限とされる沖縄島(Oka and Miyamoto, 2015)では大量に漁獲され、釣りの対象にもなっている。これらの地域においては食用または釣り餌として重用されるが、内之浦湾を含む鹿児島県本土では極めて稀な魚である。(畑 晴陵)



■ ミズン *Herklotsichthys quadrimaculatus* KAUM-I. 53423, 86.2 mm SL

コノシロ属 *Konosirus punctatus* (Temminck & Schlegel, 1846)**コノシロ** 珍しさ ★★★★★■ コノシロ *Konosirus punctatus* KAUM-I. 98138, 224.0 mm SL■ コノシロ *Konosirus punctatus* KAUM-I. 10946, 81.8 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面は暗色。体側上部は青緑色を呈し、成魚では小黒色斑が10列ほど縦に並ぶ。鰓蓋後方に瞳孔大の黒色斑がはいる。背鰭最後軟条は糸状に伸長する。北西太平洋固有種。日本国内においては北海道以南に分布するが、琉球列島と小笠原諸島からは記録されていない。最大で体長26 cm程度に達する。泥底に生息し、泥を口に含んでは出し、そのなかに棲む小動物を食べる。産卵期は春から夏にかけて、各個体が複数回産卵をおこなうことが知られている。また、産卵は日没から深夜にかけておこなわれるものと推測されている(桑谷ほか、1956)。記録されている最小成熟個体の全長は129 mm。雌雄で異なる群れを形成しているらしく、漁獲個体の性比が偏ることが知られる(吉田ほか、1978)。マイワシなどと同様に、長期的に漁獲量が大きく増減することが知られている(黒田ほか、2002)。幼魚は「シンコ」、「コハダ」と称され、関東地方で非常に人気があり、酢締めにして寿司ネタに供される。鹿児島県内では成魚も食用にされる。岡山県沿岸においては、筋肉に含まれる脂肪が秋季に多くなり、この時期が旬とされる(萱野、2011)。内之浦湾では稀に漁獲される。なお、「コノシロ」の呼称は内之浦漁港においてはカタボシワシに対して用いられる。(畑 晴陵)

サツパ属 *Sardinella lemuru* Bleeker, 1853**カタボシイワシ** 珍しさ★■ カタボシイワシ *Sardinella lemuru* KAUM-I. 73155, 222.4 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面から体側上部は青みがかった黒色。鰓蓋上部に黒色斑を、鰓蓋上方に黄色斑をそれぞれ有する。尾鱗は鮮やかな黄緑色を呈し、黒色に縁取られる。体は円筒形に近く、やや側扁する。サツパ属の中でも最大級の種であり、最大記録は笠沙から得られた個体の体長 236.3 mm である（大森、2007）。オーストラリア西岸から日本にかけて広く分布する。日本国内においては相模湾から種子島にかけて分布し、トカラ列島以南の琉球列島における正確な記録はない。かつて、東シナ海から日本近海にかけては極めて稀な魚だったが、1980年代から1990年代にかけて東シナ海における漁獲量が増加したことが報告され（山田・高柳、1997；山田ほか、2007）、近年では日本においても各地から報告が相次いでいる（例えば山田・工藤、2011；門脇ほか、2015；畑・本村、2017a）。鹿児島県本土においても近年急速に個体数を増やしつつあるようで（財団法人鹿児島市水族館公社、2008）、鹿児島県近海における産卵群が消滅したマイワシとの関係性も検討の必要があるものと思われる。カタボシイワシは内之浦湾においても体長 20 cm 以上の大型個体が定置網によって頻繁かつ大量に漁獲される。小骨が多く、脂肪分に乏しいため食用魚としての利用法が確立されておらず、時として市場に出荷されることもあるが市場価値は低く、現在は養殖魚の餌料に供されることがほとんど。近年では本種の有効利用に向け、練り製品原料などに向けての研究がなされている（みなと新聞、2015）。（畑 晴陵）



■ カタボシイワシ KAUM-I. 56759, 207.3 mm SL



■ カタボシイワシ KAUM-I. 94338, 110.0 mm SL



■ カタボシイワシ KAUM-I. 73964, 234.0 mm SL



■ カタボシイワシ KAUM-I. 82757, 107.3 mm SL

サツパ属 *Sardinella melanura* (Cuvier, 1829)

オグロイワシ 珍しさ ★★★★★



■ オグロイワシ *Sardinella melanura* KAUM-I. 12710, 82.1 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体側上部は緑がかかった水色を呈するが、死後、時間の経過とともに緑色が淡くなる。体側上部に細い暗色縦帯が2～3列はいる。尾鰭両葉後端に黒色斑がはいる。体は著しく側扁する。アフリカ東岸からフレンチポリネシア、日本にかけてのインド・太平洋に広く分布する。日本国内では和歌山県以南の太平洋沿岸、小笠原諸島、および琉球列島に分布する。体長13 cm程度に達する。鹿児島県では稀な種であり、内之浦湾のほか、鹿児島湾、坊津町、種子島、および徳之島から散発的に記録されている (Motomura et al., 2001a ; 荻原、2007 ; 畑・本村、2011 ; 畑ほか、2016a)。(畑 晴陵)



■ オグロイワシ KAUM-I. 1477, 74.6 mm SL



■ オグロイワシ KAUM-I. 24407, 95.0 mm SL

サツパ属 *Sardinella zunasi* (Bleeker, 1854)**サツパ** 珍しさ ★★★■ サツパ *Sardinella zunasi* KAUM-I. 71419, 121.4 mm SL■ サツパ *Sardinella zunasi* KAUM-I. 97882, 100.1 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面から体側上部は緑がかった黒色。鰓蓋後方に黒色斑がある。体側上部に1本の黒色縦帯がある（不明瞭なこともある）。尾鰭は黄緑色。体長13 cmに達する。ピーター大帝湾から香港、台湾にかけて分布し、国内においては北海道から九州南岸にかけて広く分布する。産卵期は春から夏にかけて。産卵は夕刻におこなうものと考えられている。冬季は深場へ移動することが知られる（田北、1966）。瀬戸内海では多数が漁獲され、岡山県においては「ままかり」と呼ばれ酢漬けや寿司、焼き料理で親しまれている。種小名は中国地方における本種の呼称である「つなし」、「ずなし」に由来するが、これらの呼称はコノシロに対しても用いられる（西松、2017）。内之浦湾における漁獲は稀であり、養殖餌料としてを除き、利用はされていない。（畑 晴陵）

マイワシ属 *Sardinops melanostictus* (Temminck & Schlegel, 1846)

マイワシ 珍しさ★★

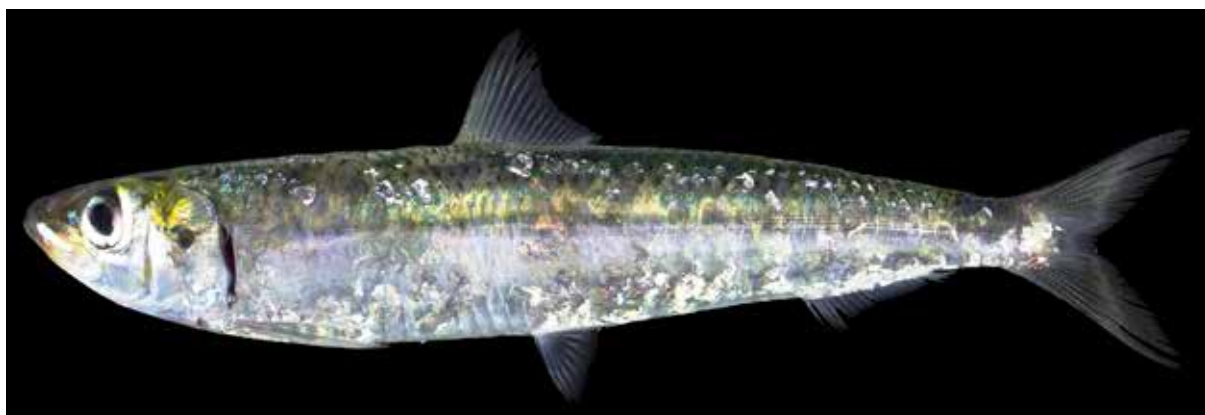


■ マイワシ *Sardinops melanostictus* KAUM-I. 31348, 158.6 mm SL

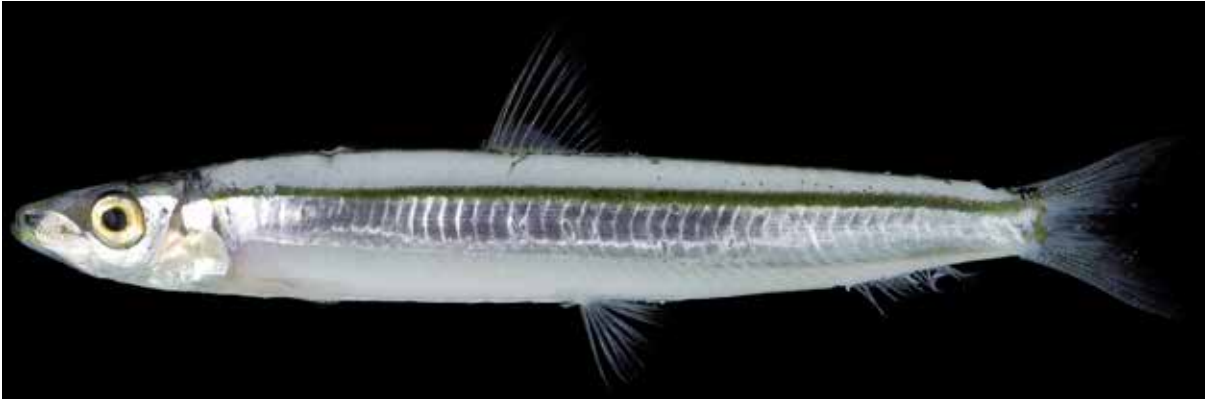


■ マイワシ *Sardinops melanostictus* KAUM-I. 80890, 156.1 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面から体側上部は黒色。生時は緑色がかかるが、死後は青みが強くなり、時間の経過とともに青みが薄くなる。体側には1列から3列の黒色斑が並ぶ。北西太平洋固有種。日本国内では、北海道から種子島にかけて分布する。1980年代後半から1990年代前半にかけては鹿児島県本土南方から種子島近海にかけての海域において多くの個体が産卵をおこなっていたことが確認されていたが、その後、急激に減少し、近年では産卵は鹿児島県本土沿岸以北に限られる（松岡ほか、2002；松岡、2008）。近年の内之浦湾においては、量は少ないものの、体長15 cm程度の個体が定置網や巻網によって頻繁に漁獲される。（畑 晴陵）



■ マイワシ *Sardinops melanostictus* KAUM-I. 98062, 180.5 mm SL

キビナゴ属 *Spratelloides gracilis* (Temminck & Schlegel, 1846)**キビナゴ** 珍しさ ★■ キビナゴ *Spratelloides gracilis* KAUM-I. 73986, 78.7 mm SL■ キビナゴ *Spratelloides gracilis* KAUM-I. 10949, 40.3 mm SL

【解説】体は半透明を呈し、体側中央に銀色縦帯がはいり、その上方に細い黒色縦帯がはいる。体側上部は生時、エメラルドグリーンを呈するが、死後青色、さらに水色に変化し、時間の経過とともに乳白色となる。体は細長い円筒形。体長 11 cm 程度に成長する。インド・西太平洋に広く分布し、日本国内では鹿島灘・隠岐以南に分布する。産卵は周年にわたっておこなわれるが、盛期は春から初夏にかけてであり、冬の産卵は少ない。卵は粘着性沈性卵であり、水深 10 ~ 20 m の砂底に産み付けられる（水田、2001；櫻井、2007）。寿命は約 1 年と見積もられているが（津野・柳川、2010a, b）、尾叉長 115 mm、2 歳近くとみられる個体が大隅諸島から報告されている（厚地、2003）。メスがオスよりも大きく成長することが知られる（小澤ほか、1989）。鹿児島県内では毎年 1,500 ~ 2,000 トン程度が漁獲され、特に甑島や種子島などにおいて多獲される。食用としての利用のほか、釣り餌としても重要である。内之浦湾においても定置網によって多数が漁獲されるものの、専門に漁獲する漁法は展開されていない。（畑 晴陵）



■ キビナゴの頭部（KAUM-I. 73986, 78.7 mm SL）

台湾アイノコイワシ属 *Encrasicholina heteroloba* (Rüppell, 1837)

シロガネアイノコイワシ

珍しさ ★★★



■ シロガネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* KAUM-I. 97899, 62.5 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* KAUM-I. 110108, 61.8 mm SL

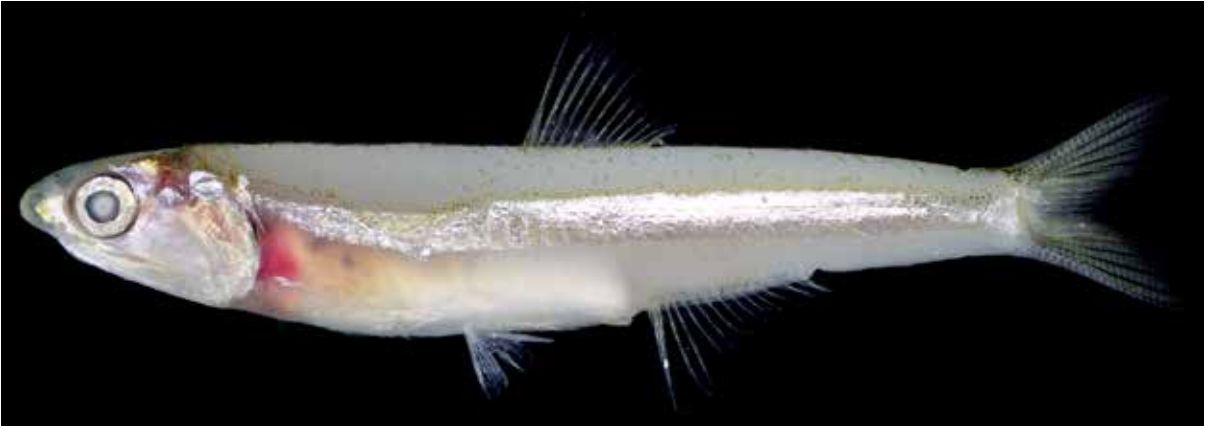
【解説】体は半透明で乳白色を呈し、体側中央に銀色の縦帯がはいる。体腹縁に鋭い稜鱗を複数有する。最大で体長 7.9 cm に達する。紅海からサモア、日本にかけてのインド・西太平洋に広く分布する。日本においては極めて稀な魚であり、土佐湾、鹿児島県内之浦湾、笠沙、奄美大島からのみ報告されている（畑ほか、2017c）。日本からは、畑ほか（2012a）により、内之浦湾から得られた個体に基づき初めて確認され、同時に標準和名シロガネアイノコイワシが提唱された。本種に適用すべき学名は長らく *Encrasicholina devisi* (Whitley, 1940) とされてきたが、Hata and Motomura (2016a) により、*E. heteroloba* とすべきことが明らかとされた。熱帯海域では発生後 88 ~ 108 日、体長約 4.5 cm で成熟し、周年産卵をおこなうことが知られる (Wongratana et al., 1999; Andamari et al., 2002)。内之浦湾における詳細な生態は不明であるが、秋から冬にかけて大量に定置網に入ることがある。東南アジアにおいては多量に漁獲され、マグロ類の釣り餌として利用されるほか、乾燥させて食用に供されるが、身が硬いうえに脂肪分に乏しい。内之浦においては食用にされることはなく、もっぱら養殖餌料に用いられる。（畑 晴陵）



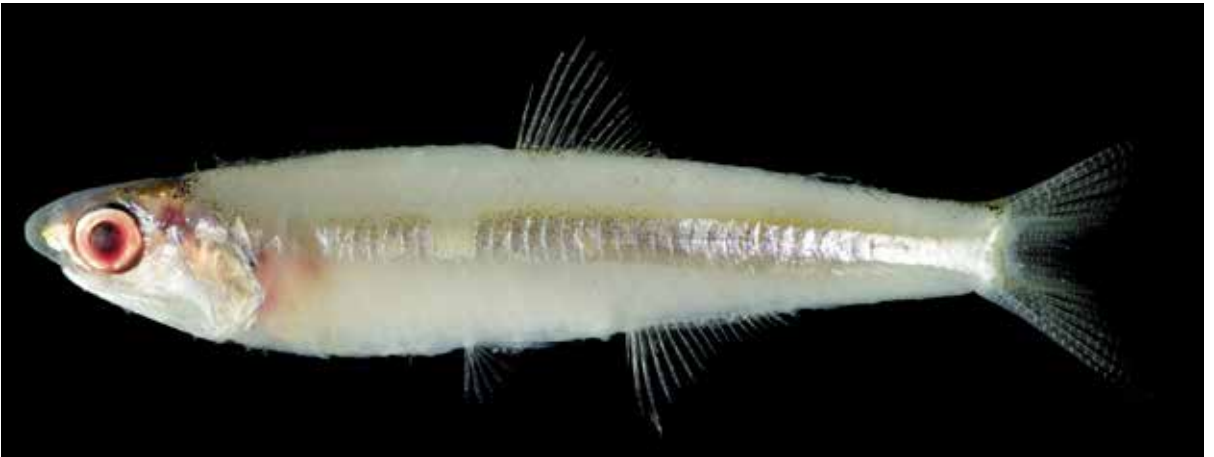
■ シロガネアイノコイワシ KAUM-I. 97897, 61.1 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ KAUM-I. 97896, 59.0 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* KAUM-I. 97889, 64.5 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* KAUM-I. 65993, 51.6 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ KAUM-I. 94389, 70.9 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ KAUM-I. 97885, 65.5 mm SL



■ シロガネアイノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* KAUM-I. 97896, 59.0 mm SL

台湾アイノコイワシ属 *Encrasicholina punctifer* Fowler, 1938

台湾アイノコイワシ

珍しさ ★★★★★



■ 台湾アイノコイワシ *Encrasicholina punctifer* KAUM-I. 97878, 61.8 mm SL (上), KAUM-I. 97880, 55.4 mm SL (下)

【解説】半透明乳白色の体に銀色の縦帯がはいり、カタクチイワシの幼魚や、シロガネアイノコイワシに酷似するが、口が小さく、上顎後端が前鰓蓋骨前縁に達しない。外洋の表層から水深 100 m 付近にかけて大きな群れで遊泳し、動物プランクトンを餌とする。東南アジアの島嶼域や東シナ海においては大量に漁獲され、食用に供される。従来はインド・太平洋に広く分布するとされてきたが（例えば Whitehead et al., 1988; Wongratana et al., 1999）、紅海・ペルシャ湾に分布するものは *E. gloria*、その他のインド洋に分布するものは *E. intermedia* とされ、台湾アイノコイワシの分布は太平洋とプーケット島に限られることが明らかにされている（Hata and Motomura, 2016b）。分布密度は濃淡が激しいものの、日本南方からマリアナ諸島、オーストラリアにかけての西太平洋における個体数は非常に多いことが知られ（田中・小澤, 2000）、流れ藻に集まるツムブリやギンガメアジなどのアジ科魚類、イスズミ類やオヤビッチャ、アミモンガラ（本書未掲載）、さらにはクロトガリザメ（本書未掲載）などの胃からは本種の稚魚が大量に見つかっており、これら魚類の重要な餌生物であることが知られる（木村ほか, 1998）。閉鎖性が強く、水深の浅い内之浦湾では稀であるが、大量に定置網に入ることもある。日本国内においては神奈川県茅ヶ崎市、二宮町、静岡県沼津市静浦、愛知県、和歌山県、山口県瀬戸内海沿岸、徳島県穴喰町、宮崎県延岡市、鹿児島県本土、奄美大島、沖縄島、西表島、および沖ノ島島から記録がある（Hata and Motomura, 2016b）。（畑 晴陵）



■ 台湾アイノコイワシ
(2007年10月5日撮影)

カタクチイワシ属 *Engraulis japonica* Temminck & Schlegel, 1846**カタクチイワシ** 珍しさ ★■ カタクチイワシ *Engraulis japonica* KAUM-I. 77500, 117.2 mm SL■ カタクチイワシ *Engraulis japonica* KAUM-I. 77501, 111.6 mm SL

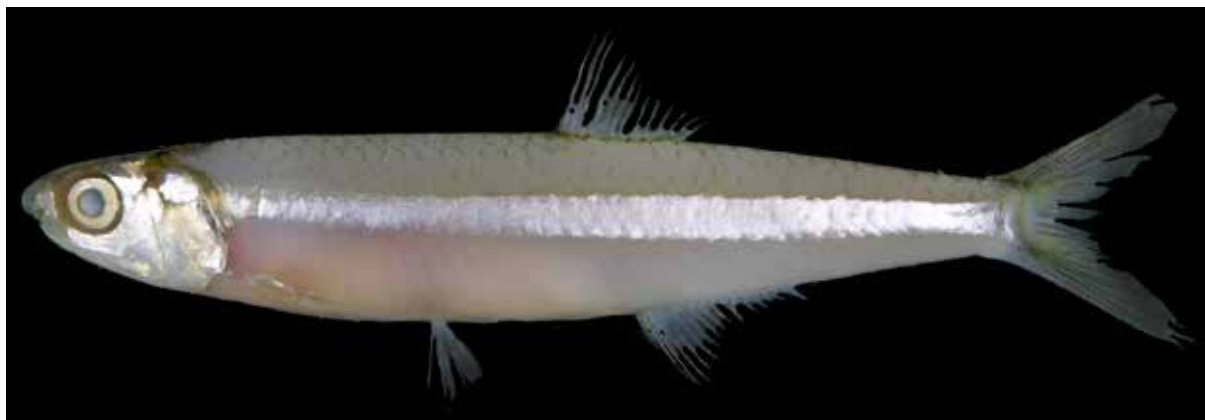
【解説】体は銀白色を呈し、体背面は青みがかった黒色。幼魚の体色は半透明で、体側中部に銀色縦帯を有し、その上方に細い黒色縦帯がはいる。最大で体長 15 cm に達する。日本国内においては小笠原諸島・琉球列島を除く日本各地に広く分布し、各地で漁獲される。稚魚は瀬戸内海から九州南岸にかけて多く漁獲され、しらす干しやちりめんじゃこに加工される。食用のほか、多くの魚類の餌生物としても非常に重要であり、カツオ釣りの撒き餌としても重用される。他のイワシ類と同様に、資源量が長期的にかつ大規模な増減を見せることが知られ、カタクチイワシの資源動向は、マイワシやウルメイワシのものと逆位相。すなわちカタクチイワシが増えれば、マイワシとウルメイワシが減少する、といった関係性があることが示されている（水産総合研究センター、2004；大下、2009）。内之浦湾では通年にわたり定置網に頻繁に漁獲される。（畑 晴陵）

■ カタクチイワシ *Engraulis japonica* KAUM-I. 82759, 50.0 mm SL

インドアイノコイワシ属 *Stolephorus indicus* (van Hasselt, 1823)

インドアイノコイワシ

珍しさ ★★★★★



■ インドアイノコイワシ *Stolephorus indicus* KAUM-I. 21323, 160.9 mm SL



■ 冷凍前のインドアイノコイワシ (KAUM-I. 21323, 160.9 mm SL)

【解説】体は生時半透明を呈し、体側中央に銀色の縦帯がはいる。死後、体は乳白色となる。体は円筒形を呈する。体腹縁に鋭い稜鱗を複数有する。本属の最大種で、最大で体長 15 cm 以上に達する。アフリカ東岸からフレンチポリネシア、日本にかけてのインド・太平洋に分布し、日本国内では和歌山県、土佐湾、鹿児島県本土、および琉球列島から記録がある (Kamohara, 1952; Nishishimamoto, 1963; 畑・本村, 2011; 池田・中坊, 2015)。東南アジアでは大量に漁獲され、食用に供される。また、マグロ類の釣り餌としても利用される (Baldwin, 1977)。インドネシアから輸入されるちりめんじゃこは、本種が多くの割合を占めると思われる。しかし、内之浦を含む鹿児島県本土各地では極めて稀であり、利用されていない。(畑 晴陵)



■ インドアイノコイワシの頭部 (KAUM-I. 21323)

ネズミギス属 *Gonorynchus abbreviatus* Temminck & Schlegel, 1846

ネズミギス 珍しさ ★★★★★

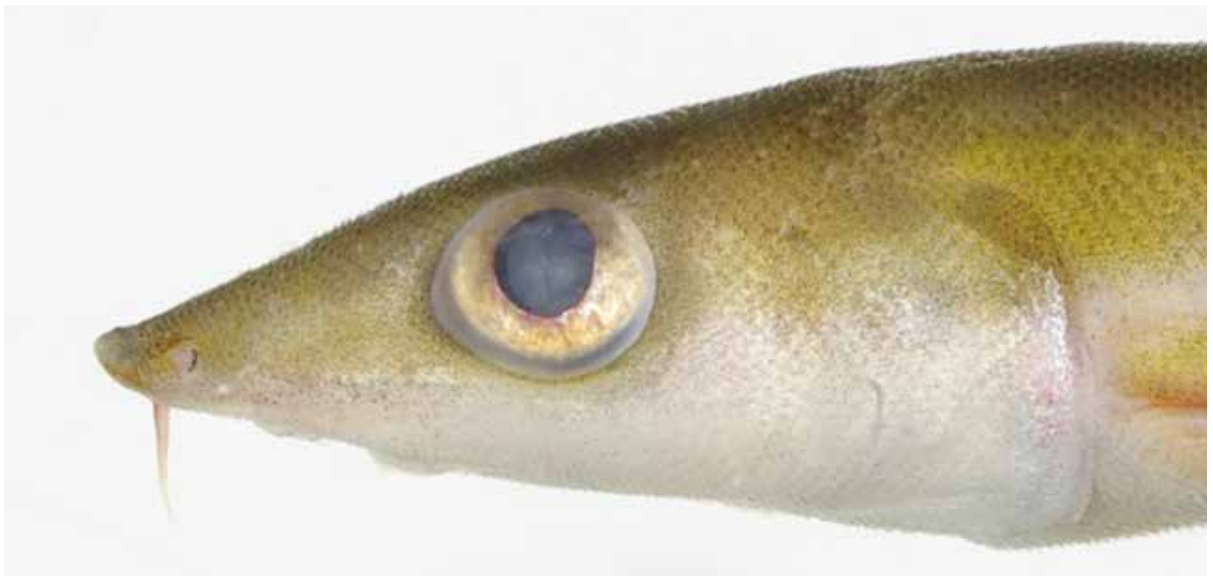


■ ネズミギス *Gonorynchus abbreviatus* KAUM-I. 60139, 144.0 mm SL

【解説】全長は最大でも 30 cm ほどで、体は細長くロケット状。吻は尖る。眼が大きく、口は下位に位置し、吻の腹面に 1 本のひげがあることから、和名のとおりネズミのような顔つきをしている。体は背側半分が明るい茶色で腹側が白色。背鰭、胸鰭、腹鰭、尾鰭の先端は黒い。水深 50 ~ 200 m の砂泥底に分布し、国内では新潟県~九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、青森県~九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海（稀）、九州-パラオ海嶺に広く分布する。多くの場合、底曳網などで混獲され、定置網で漁獲される例は稀と考えられる。内之浦漁港では、標本となった 1 個体 (KAUM-I. 60139, 体長 14 cm) の他に、生きた状態で持ち帰られた 1 個体が確認されている。(小枝圭太)



■ 冷凍前のネズミギス *Gonorynchus abbreviatus* (KAUM-I. 60139, 144.0 mm SL)



■ ネズミギスの頭部 *Gonorynchus abbreviatus* (KAUM-I. 60139, 144.0 mm SL)

ゴンズイ属 *Plotosus japonicus* Yoshino & Kishimoto, 2008

ゴンズイ 珍しさ ★★★



■ ゴンズイ *Plotosus japonicus* KAUM-I. 98144, 200.8 mm SL



■ ゴンズイ *Plotosus japonicus* KAUM-I. 60808, 129.6 mm SL

【解説】体側上部は茶褐色を呈し、体腹面は白色。体側上部に細い縦帯が2本はいる。背鰭と胸鰭の棘は鋭く、毒腺を有しており、刺されると激しく痛む。集団フェロモンを分泌し、幼魚は「ゴンズイ玉」と称される密度の高い群れを形成する。日本近海においては房総半島以南の太平洋沿岸、能登半島以南の日本海・東シナ海沿岸に広く分布し、内之浦湾においても個体数は多いものと思われるが、漁獲されることは多くない。これは、本種がおもに岩礁に生息し、定置網や刺網が多く展開される開けた水域に出現することが少ないためと思われる。かつては琉球列島を含むインド・西太平洋に広く分布するとされてきたが、九州以北のものと沖縄諸島以南のものは互いに別種であるとされ、従来（インド・西太平洋に広く分布するとされてきた）ゴンズイに対して用いられてきた学名 *Plotosus lineatus* は後者に対して適用され、前者は *P. japonicus* として新種記載される一方で、従来用いられてきた標準和名「ゴンズイ」は前者に対して適用され、後者に対しては新たにミナミゴンズイが提唱された（Yoshino and Kishimoto, 2008）。内之浦湾では漁獲されても利用されず、捨てられることが多い。（畑 晴陵）



■ ゴンズイ *Plotosus japonicus* KAUM-I. 57293, 118.0 mm SL

キュウリエソ属 *Maurolicus japonicus* Ishikawa, 1915**キュウリエソ** 珍しさ ★★★★★

■ キュウリエソ *Maurolicus japonicus* KAUM-I. 83720, 39.8 mm SL (上), KAUM-I. 83721, 37.8 mm SL (下)

【解説】体は銀色を呈し、体背面は暗い茶褐色。体側下部には腹鰭前方に2列、腹鰭後方に1列の発光器が並ぶ。体からキュウリの様な臭いがすることから、この名がつけられた (Ishikawa, 1915)。日周鉛直移動をおこなう。日本海南西部においては、昼間は水深 140 ~ 220 m に生息し、夜間は一時的に水面付近まで移動し、カイアシ類やオキアミを捕食とすることが知られる (内田ほか, 1992; 久保田・佐藤, 2014a, b)。同海域においては産卵期が春と秋の2回盛期を迎え、金平糖のような小棘を多数そなえた独特の形状の卵を生む (久保田・佐藤, 2014)。また、約1年で成熟し、寿命は20ヵ月ほどであることが知られている (由木, 1982)。日本近海においてはその生物量は膨大なものであることが知られており (西村, 1959)、ハタハタ (本書未掲載) やカレイ類、マス類などの重要な餌生物であるほか、時折大量に海岸に打ち上げられることがある (久保田・佐藤, 2013)。内之浦湾においては極めて稀に定置網に入る。食用とはされない。(畑 晴陵)



■ 冷凍前のキュウリエソ
(2015年2月27日撮影)

シャチブリ属 *Ateleopus* sp.

シャチブリ属の一種

珍しさ ★★★★★



■ シャチブリ属の一種の稚魚 *Ateleopus japonicus* KAUM-I. 36173, 137.3 mm TL

【解説】 シャチブリ科の魚は頭部が丸く、ゼリー状でぶよぶよしている。そのため英名では「ゼリーノーズフィッシュ」と呼ばれる。体は側扁し、尾部が非常に長い。大きいものは1 mを越える。内之浦湾で得られた本科魚類の稚魚は、腹鰭が糸状に長く伸長していることから、伸長しないヒョウモンシャチブリ属やオオシャチブリとは異なり、シャチブリ属であると判断した。日本産のシャチブリ属として、シャチブリ、シログチシャチブリの2種が知られるが、これらの初期生活史における形態の違いは明らかになっていないため、内之浦産の標本がどちらの種であるかは不明である。シャチブリ属魚類は水深100 m以深の砂泥底に生息することから、内之浦湾のような比較的浅い環境で採集されることは稀であろう。

(小枝圭太)



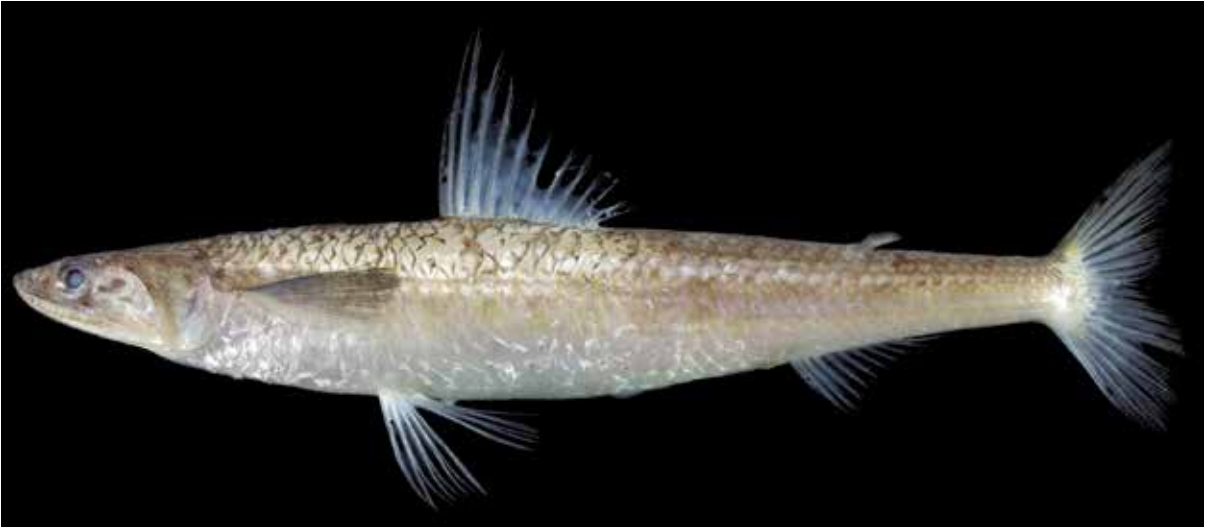
■ シャチブリ属の一種の頭部 (KAUM-I. 36173, 137.3 mm TL)

マエソ属 *Saurida gracilis* (Quoy & Gaimard, 1824)**マダラエソ** 珍しさ ★★★★★■ マダラエソ *Saurida gracilis* KAUM-I. 43927, 156.3 mm SL

【解説】尾鰭に斑状の暗色斑がはいり、体側には多数の暗色横帯がはいる。インド・太平洋に広く分布し、日本国内においても相模湾以南の太平洋沿岸から報告がある。琉球列島のサンゴ礁域では最も普通にみられるエソ科魚類である。内之浦湾における漁獲は稀で、写真の個体（KAUM-I. 43927）が得られているのみであるが、これは本種が内之浦湾において稀であることのみならず、礁池や礁湖の砂底に多く生息するため、定置網には入りにくいと思われる。漁獲されても食用とされることはほとんどないと思われる。（畑 晴陵）

マエソ属 *Saurida macrolepis* Tanaka, 1917**マエソ** 珍しさ ★■ マエソ *Saurida macrolepis* KAUM-I. 89416, 203.9 mm SL

【解説】体は円筒形。体背面は茶褐色を呈し、体腹面は白色。尾鰭上縁は一様に褐色か、不明瞭な黒色斑が並ぶ。尾鰭下縁は白色。側線有孔鱗数は46～49。水深100m以浅の砂泥底に多く生息し、満2歳で成熟し、産卵は春から夏にかけておこなわれる（山田、1997a；山田・柳下、2013a）。カワハギ、カナガシラ（本書未掲載）、およびアナゴ類など底生魚をおもな餌とする（徳留、1976）。内之浦湾においては定置網により多獲される。かまぼこの高級原料として知られ（児玉ほか、2017）、漁獲された個体のほとんどが、薩摩揚げなど練り製品に加工される。身近且つ水産業上重要な種である一方で本種に適用すべき学名は長らく不明であり、たびたび *Saurida undosquamis* とされてきたが、Inoue and Nakabo (2006) によってマエソに適用すべき学名は *S. macrolepis* であることが確認されたうえ、*S. undosquamis* は東インド洋から東南アジア、オーストラリアに分布し、マエソとは側線有孔鱗数が50～53であることなどによって識別されることが示された。（畑 晴陵）



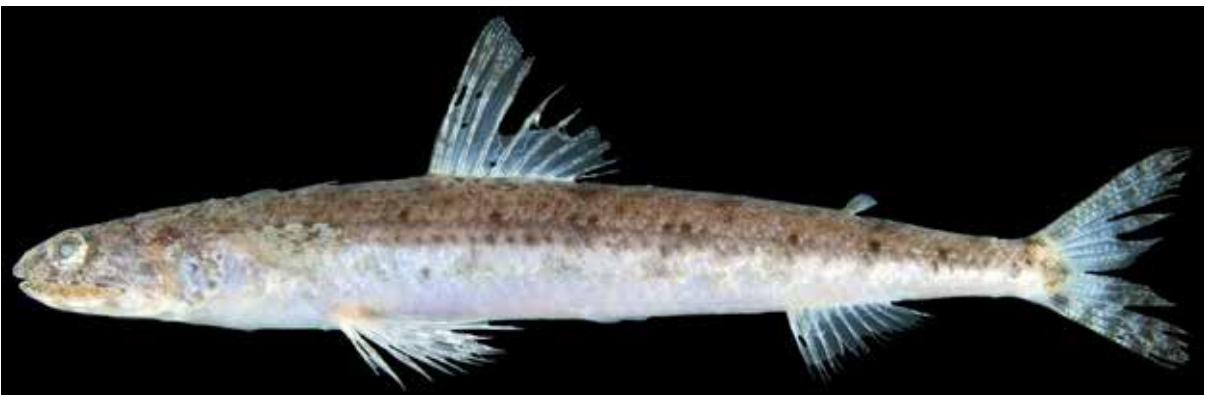
■ マエソ *Saurida macrolepis* KAUM-I. 89417, 159.4 mm SL



■ マエソ *Saurida macrolepis* KAUM-I. 6987, 172.8 mm SL

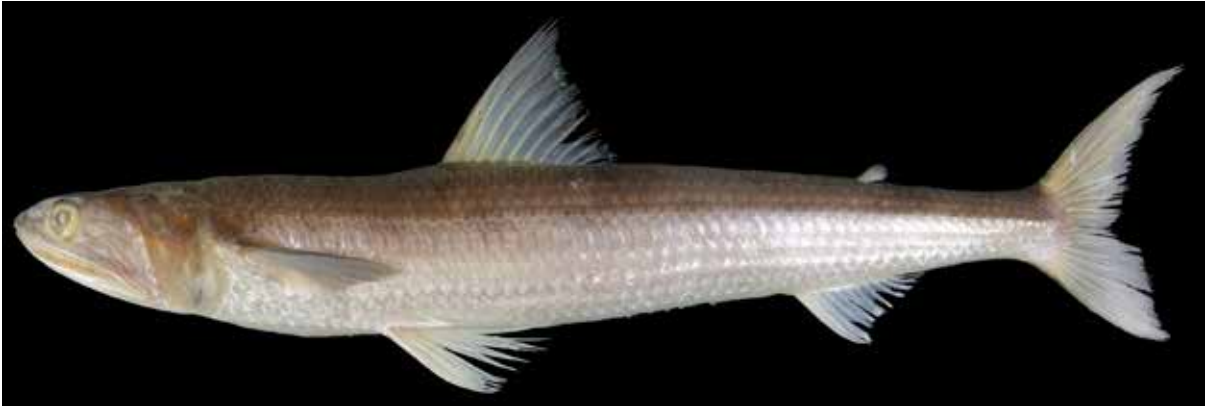
マエソ属 *Saurida nebulosa* Valenciennes, 1850

ウチウミマダラエソ 珍しさ ★★★★★



■ ウチウミマダラエソ *Saurida nebulosa* KAUM-I. 7554, 119.0 mm SL

【解説】尾鰭にまだら状の斑点がはいる。同属のマダラエソに類似するが、ウチウミマダラエソの体には横帯がなく、褐色斑が散在すること（マダラエソでは横帯がはいる）、胸鰭が短く、腹鰭基底後端を越えないこと（マダラエソでは越える）などにより識別される。濁りのある内湾の砂泥底を好んで生息するとされ、そのことからこの標準和名がつけられたが（鈴木ほか、1995）、岩礁域にも出現する（佐藤、2001）。内之浦湾においては大型定置網によって漁獲されていることから、砂泥底から得られたものと思われる。日本近海においては稀な種であり、内之浦湾においても、山田・柳下（2013a）によって報告された写真の個体（KAUM-I. 7554）が得られているのみ。（畑 晴陵）

マエソ属 *Saurida wanieso* Shindo & Yamada, 1972**ワニエソ** 珍しさ ★★★■ ワニエソ *Saurida wanieso* KAUM-I. 40444, 427.0 mm SL, メス■ ワニエソ *Saurida wanieso* KAUM-I. 6866, 340.9 mm SL, オス

【解説】体は円筒形。体背面は茶褐色を呈し、体腹面は白色。尾鰭上縁は一様に褐色を呈し、下縁は黒色。側線有孔鱗数は 54 ~ 56。成熟したオスは背鰭が糸状に伸長する。マエソと同じく、水温 18 度付近の水域を好む（山田、1997b）。他のエソ類と同様、高級かまぼこの原料として利用される。しかし、産卵期である夏季に漁獲されたワニエソから作られたかまぼこは、「火戻り」と呼ばれ、弾力の減衰を起こしやすいことが知られている（宮崎ほか、2015）。日本国内においては福島県と若狭湾から九州南岸にかけての太平洋・日本海沿岸、瀬戸内海にかけての幅広い海域から知られ、内之浦湾においても定置網によって時折漁獲されるが、その量はマエソよりもはるかに少ない。（畑 晴陵）

■ ワニエソの頭部
(KAUM-I. 40444)

アカエソ属 *Synodus fuscus* Tanaka, 1917**スナエソ** 珍しさ ★★★★★■ スナエソ *Synodus fuscus* KAUM-I. 63146, 154.5 mm SL

【解説】体側上部には不明瞭な赤褐色斑が散在するほか、目立った模様がない。胸鰭は短く、背鰭起部と腹鰭起部を結んだ線に達しない。内之浦湾においては稀。一般的に水深 100 m 付近に生息するとされるが、内之浦湾においては水深 40 m に設置された定置網により複数個体が漁獲されている。内之浦湾では底生性の魚種が他の海域よりも浅い水深で得られる例が散見される（ギンアナゴ、カスミサクラダイ、インドオキアジ、ツノウシノシタなど）。こうした種は、水深の深い志布志湾から、砂泥底環境の連続した内之浦湾に進入してくるものと思われる。（畑 晴陵）

アカエソ属 *Synodus jaculum* Russell & Cressey, 1979**オグロエソ** 珍しさ ★★★★★■ オグロエソ *Synodus jaculum* KAUM-I. 45390, 88.3 mm SL

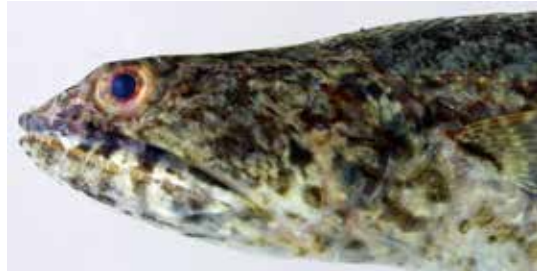
【解説】体に赤色斑が並び、尾柄部に黒色斑がはいる。サンゴ礁と砂地の境目付近に多く生息する。サンゴ礁のない内之浦湾では稀であり、写真の 1 個体（KAUM-I. 45390）が定置網により漁獲されたのみである。本種は Russell and Cressey (1979) によりオーストラリア・グレートバリアリーフから得られた個体に基づき記載された。また、Moyer and Sano (1985) により、伊豆諸島三宅島から得られた 2 個体に基づき日本における分布が初めて確認され、同時に和名オグロエソが提唱された。その後、本種は相模湾以南の日本各地から報告されているが、鹿児島県本土における記録は乏しく、写真の個体が畑ほか（2017d）によって報告されたのみ。（畑 晴陵）



■ オグロエソの頭部（KAUM-I. 45390）

アカエソ属 *Synodus ulae* Schultz, 1953**アカエソ** 珍しさ★★★★■ アカエソ *Synodus ulae* KAUM-I. 77504, 234.5 mm SL

【解説】体は円筒形。体背面から体側上部にかけては茶褐色を呈し、体側には細い茶褐色横帯が多数はいる。生時は体側上部に青色縦帯が現れることもある。浅海域の岩礁や砂底に生息し、昼間は潜砂して餌の近づくのを待つこともある。本科魚類はフグ毒の解毒が可能であるとされ（吉野、2008）、フグ類を餌とすることもある。内之浦湾における漁獲は比較的稀。内之浦における食用利用はほとんどないものと思われる。（畑 晴陵）



■ アカエソの頭部（KAUM-I. 77504）

オキエソ属 *Trachinocephalus trachinus* (Temminck & Schlegel, 1846)**オキエソ** 珍しさ★★★★■ オキエソ *Trachinocephalus trachinus* KAUM-I. 44876, 83.7 mm SL

【解説】吻部が極めて短く、臀鰭基底が長い。体は黄色を呈し、細い青色縦帯が多数はいる、鰓蓋に黒色斑がある。仔魚の腹部には6個の腹腔色素胞が並ぶ。砂底に潜り、近くを通る魚を捕食する。全長15 cm未満の小型個体では魚類、エビ類、およびアミ類をおもな餌とするが、成長に伴い魚類に対する依存度が高くなり、全長20 cm以上の個体では餌のほとんどが魚類とワタリガニ類に占められることが知られている（洪野ほか、1996）。鹿児島県においては本土各地から報告があるものの（例えば Snyder, 1912；財団法人鹿児島市水族館公社、2008）、岸近くの浅所に多く生息するため、内之浦湾のようにやや沖合に設置された定置網に入ることは少ない。堤防釣りなどによって得られる。食用とされることは稀。（畑 晴陵）

ソコハダカ属 *Benthoosema pterotum* (Alcock, 1890)

イワハダカ 珍しさ ★★★★★



■ イワハダカ *Benthoosema pterotum* KAUM-I. 12717, 36.5 mm SL

【解説】体は乳白色半透明を呈し、体側には発光器が並ぶ。本種を含むハダカイワシ科魚類の多くは、鱗が非常に剥がれやすいことが和名の由来となっている。また、本科魚類の多くは餌となるプランクトンを追って日周鉛直移動をおこない、本種も昼間は水深 200 m 付近に多く、夜間は水深 10 m 付近まで上昇することが知られる。最大水深の大きい鹿児島湾においては多獲されるものの、浅海域の広がる内之浦湾において漁獲されることは少ないが、定置網に大量に入ることが稀にある。体長 15 cm 以上に達するハダカイワシ（本書未掲載）など、本科の大型種は高知県など一部地域で食用とされるものもあるが、イワハダカに関しては最大でも体長 5 cm 程度と小型であり、食用とされることはほとんどないものと思われる。（畑 晴陵）



■ 水揚げされた多量のイワハダカ（2011年12月17日撮影）

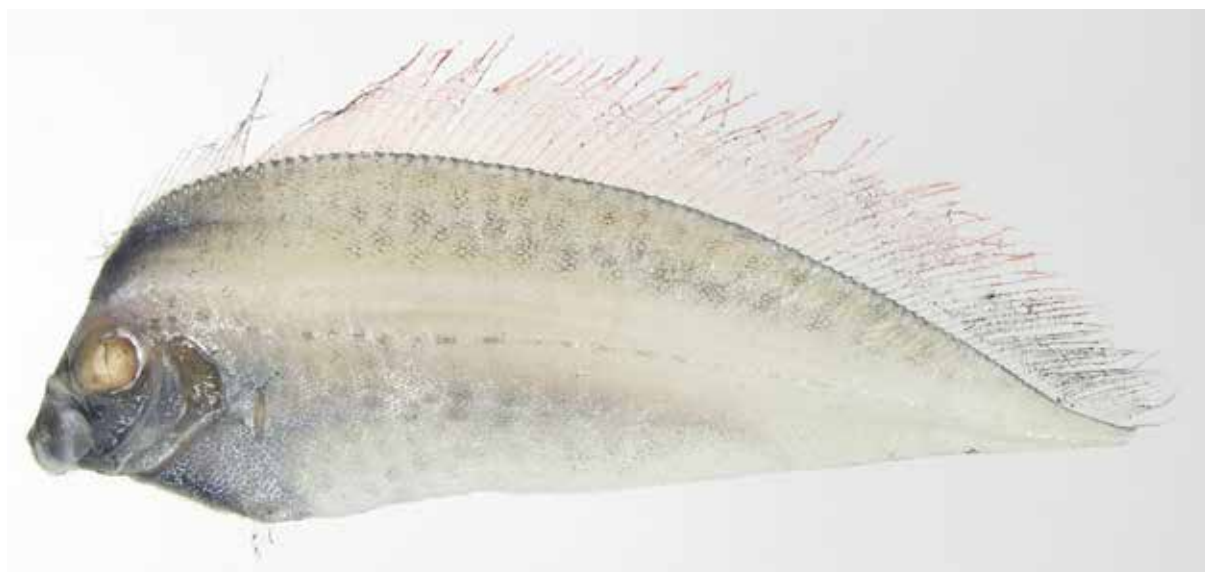
ヒメクサアジ属 *Metavelifer multiradiatus* (Regan, 1907)**ヒメクサアジ** 珍しさ ★★★★★

■ ヒメクサアジ *Metavelifer multiradiatus* KAUM-I. 74772, 114.6 mm SL

【解説】体は著しく側扁する。成魚では背鰭第6棘が糸状に伸長する。体は淡い黄褐色を呈し、不明瞭な焦げ茶色の横帯が複数ある。背鰭軟条部基底に眼状斑がある。幼魚の体は正円形に近く、小黑斑が散在する。体長30 cmほどに成長する。非常に珍しい魚であり、内之浦湾においては畑ほか（2016b）によって報告された写真の個体が知られているのみ。鹿児島県内においては、内之浦湾のほか、笠沙、坊津における分布が畑ほか（2016b）によって報告されている。生態等についても不明な点が多い。稀少なため知名度が低く、利用されることはほとんどないと思われるが、大型個体は市場に水揚げされることもある。（畑 晴陵）

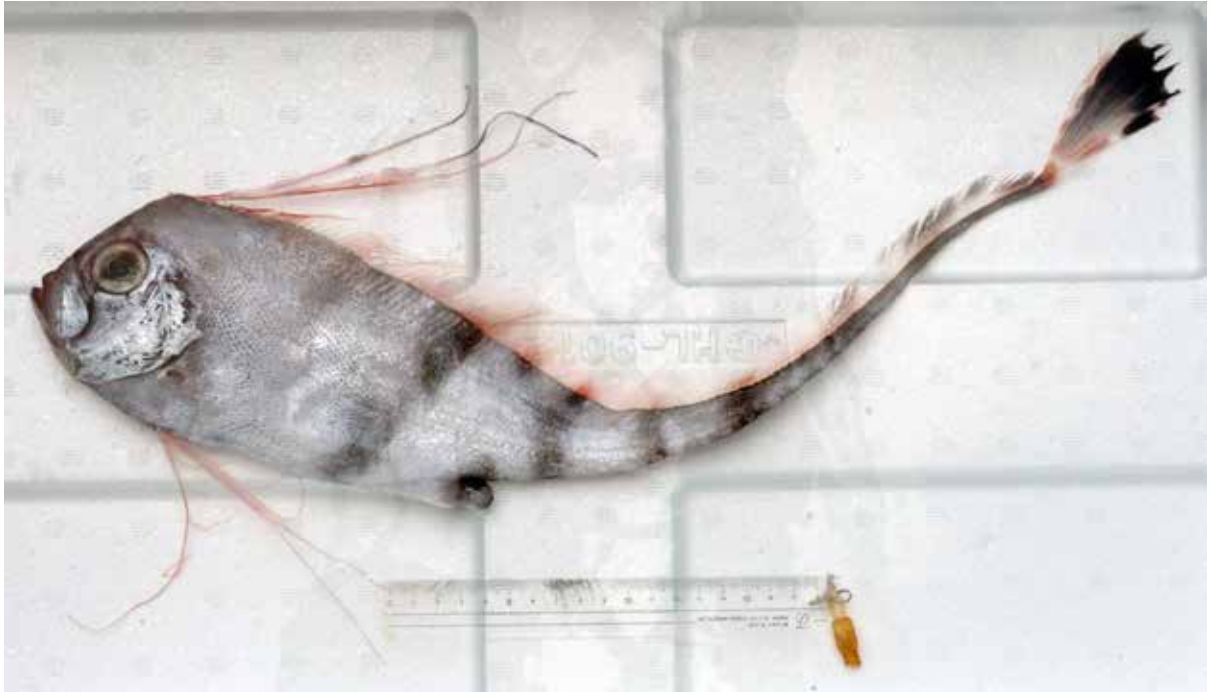
フリソデウオ属 *Desmodema polystictum* (Ogilby, 1898)

フリソデウオ 珍しさ ★★★★★



■ フリソデウオの幼魚 *Desmodema polystictum* KAUM-I. 60676, 166.9 mm SL(上), KAUM-I. 20975, 46.5 mm SL(下)

【解説】全長は1 mほどで、体は細長くりボン状。幼魚は体高が高く、背鰭の前部数軟条と腹鰭が著しく伸長するが内之浦漁港で水揚げされた個体(KAUM-I. 60676)では欠損していた。似たオキフリソデウオ(本書未掲載)とは、吻長が眼径より短いことと尾鰭条数8であることにより識別される。沖合の中層域に生息し、立ち泳ぎのような姿勢でいると考えられているが、詳細な生態はよくわかっていない。口がよく伸びる。鹿児島県で採集されるもののほとんどは幼魚であり、成魚の記録はない。内之浦漁港で得られた個体も体長17 cm、5 cmといずれも小さい。国内では北海道釧路～土佐湾の太平洋沿岸、愛媛県深浦、兵庫県大谷～九州北西岸の日本海沿岸、五島列島および鹿児島湾からの記録があり、内之浦漁港で得られた個体は九州太平洋沿岸からの初めての記録となる。(小枝圭太)

ユキフリソデウオ属 *Zu cristatus* (Boelli, 1820)**ユキフリソデウオ** 珍しさ ★★★★★■ 冷凍前のユキフリソデウオ *Zu cristatus* KAUM-I. 38857, 481.6 mm SL

【解説】全長はフリソデウオと同様に最大でも1 mほどだが、成魚の採集例は少ない。頭部が大きく、体は細長いリボン状の極めて珍妙な体つきで、尾鰭が上葉と下葉で分離すること、側線が尾部の腹縁と重なること、腹鰭軟条数が5であること、体側に暗色の鞍状斑をもつことなどが特徴である。本種の属名である *Zu* は日本産魚類として最も短いアルファベット2文字で構成されており、このような例は動物界でも極めて稀である（中坊・平嶋、2015）。この属名の由来は、バビロニア神話に登場する暴風の悪魔“ズウ鳥”で、フリソデウオ科魚類が嵐の後に海岸で打ち上げられた状態で発見されたことが多かったことから与えられた学名である。本種は小枝ほか（2015）により内ノ浦漁港で水揚げされた標本（KAUM-I. 38857、体長48 cm）に基づき、鹿児島県から初めて報告された。（小枝圭太）

■ ユキフリソデウオ *Zu cristatus* KAUM-I. 38857, 481.6 mm SL

チゴダラ属 *Physiculus japonicus* Hilgendorf, 1879

チゴダラ 珍しさ ★★★



■ チゴダラ *Physiculus japonicus* KAUM-I. 83534, 114.4 mm SL

【解説】体長は最大でも 35 cm ほど。チゴダラ科に共通するように下顎にひげがあり、背鰭と臀鰭が欠刻せず外縁は後端まで直線的。よく似たエゾイソアイナメ（本書未掲載）とは体が淡褐色であることや、眼がやや大きく吻長の 2/3 より大きいことなどで識別されるとされるが、これら 2 種が単一種である可能性もあり、分類学的な精査が求められている。水深 75 ~ 1,007 m の砂泥底に生息する。国内では北海道～高知県柏島の太平洋沿岸および内之浦湾、北海道～山口県の日本海沿岸、東シナ海、九州ーパラオ海嶺に分布するとされており、ただし、内之浦では体長 10 cm ほどの小型の個体のみが得られている。北日本では、本種を含めたチゴダラ科の複数種を「ドンコ」と呼び、鍋物、汁、煮つけ、焼き物などで食用とされる。身はスケトウダラ（本書未掲載）などに似てクセがなく、肝である肝臓がとりわけ美味。（小枝圭太）



■ チゴダラ KAUM-I. 4230, 112.5 mm SL (上) , KAUM-I. 29085, 89.4 mm SL (下)

サイウオ属 *Bregmaceros nactabanus* Whitley, 1941

トヤマサイウオ 珍しさ ★★★



■ トヤマサイウオ *Bregmaceros nactabanus* KAUM-I. 73165, 79.0 mm SL

【解説】体は円筒形を呈し、銀白色。体背部には黒色色素胞が密在する。第2背鰭は臀鰭起部よりもわずか後方に位置する。中層遊泳性で、昼間は水深100 m以深に多いが（中坊・甲斐、2013a）、土佐湾においては夜間に表層付近へ浮上する日周鉛直移動をおこなひ、さらにワニギスの重要な餌生物となっていることが知られる（Morohashi and Sasaki, 2003）。内之浦湾においては時折漁獲されるが、これも夜間に浮上してきたものが入網したものである。最大でも体長8 cm程度の小型魚であり、食用とされることはない。（畑 晴陵）

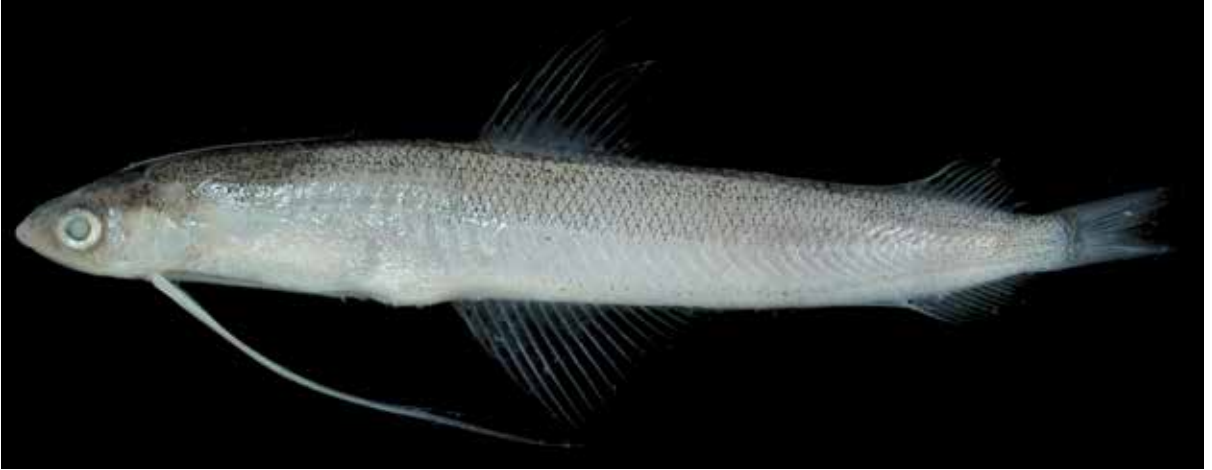


■ トヤマサイウオの頭部
(KAUM-I. 73165, 79.0 mm SL)

サイウオ属 *Bregmaceros* sp. 1

サイウオ属の一種

珍しさ ★★★



■ サイウオ属の一種 *Bregmaceros* sp. 1 KAUM-I. 806, 73.0 mm SL

【解説】本個体は内之浦湾において2006年4月6日に得られている。第2背鰭起部が臀鰭起部よりも後方に位置することや、体側面が一様に銀白色を呈し、体背面には黒色素胞が密在する点などにおいて日本近海から知られているサイウオ科魚類6種のうち（中坊・甲斐、2013）、トヤマサイウオに類似するが、臀鰭基底上方に明瞭な黒色素胞が並ぶこと、体側上部の各鱗が黒色に縁取られること、さらに吻端が突出することなどで識別される。サイウオ科魚類の分類は混乱が著しく、日本近海においても多数の未記録種あるいは未記載種が存在することが想像される。（畑 晴陵）

サイウオ属 *Bregmaceros* sp. 2

サイウオ属の一種

珍しさ ★★★



■ サイウオ属の一種 *Bregmaceros* sp. 2 KAUM-I. 29077, 74.5 mm SL

【解説】内之浦湾において時折得られるサイウオ属魚類の1種。体側上部の黒色素胞が列をなし、複数の縦帯を形成すること、体側下部から体腹面にかけては一様に銀白色であることなどから、本書掲載のサイウオ属2種と識別され、また中坊・甲斐（2013）によって示されたインドサイウオに類似する。しかし、中坊・甲斐（2013）に示されたインドサイウオとは第2背鰭起部が臀鰭起部直上に位置する点において異なり、別種と思われる。内之浦湾においては、他のサイウオ科魚類同様、食用に供されることはない。（畑 晴陵）

イタチウオ属 *Brotula multibarbata* Temminck & Schlegel, 1846

イタチウオ 珍しさ ★★★★★



■ イタチウオ *Brotula multibarbata* KAUM-I. 98090, 457.4 mm SL (上), KAUM-I. 98091, 417.0 mm SL (下)

【解説】吻と下顎に6本のひげがあることで、他種と容易に区別できる。背鰭と臀鰭が尾鰭と連続し、これらの鰭を波うたせるようにして泳ぐ。頭と体は茶褐色。本科としては珍しく浅海性であるが水深 650 m の深い場所から採集された記録もある。成魚は夜行性で日中は岩礁の隙間などに潜み、夜には穴の外でみられる。稚魚は沖合の表層から得られる。国内では千葉県銚子以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島、小笠原諸島に分布する。内之浦漁港ではあまり漁獲されないが、2017年冬には1日に10個体以上がカゴ網により漁獲され、市場に並んでいた。肉は白身で、煮つけなどにして美味。(小枝圭太・畑 晴陵)



■ イタチウオ *Brotula multibarbata* (2009年12月24日撮影)

アンコウ属 *Lophiomus setigerus* (Vahl, 1797)

アンコウ 珍しさ ★★★



■ アンコウ *Lophiomus setigerus* KAUM-I. 86388, 230.4 mm SL

【解説】体長は最大で70 cmほどで、頭部には誘引突起があり、その先端に擬餌状体がある。体は強く縦扁し、口が非常に大きい。本種は砂の中に潜り、隠れたまま誘引突起と擬餌状体を使って甲殻類や魚類などの餌生物をおびき寄せ、口腔を膨らませて水ごと丸呑みにする。水深30～510 mの砂泥底に生息し、国内では北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、東シナ海大陸棚域と広く分布する。可食部が多く、捨てる場所がほとんどない魚で、身は淡白、肝は濃厚、皮はプルプルとそれぞれ美味で、とりわけ旬である冬場に鍋で食することが多い。生食は一般的でない。内之浦漁港では大型個体をあまりみないものの、冬に水揚げ量が多い。(小枝圭太)



■ アンコウの腹面
(KAUM-I. 86388)

キアンコウ属 *Lophius litulon* (Jordan, 1902)

キアンコウ 珍しさ ★★★★★



■ キアンコウ *Lophius litulon* KAUM-I. 98086, 297.2 mm SL

【解説】体長は最大で1 mほどに達し、アンコウより大型に成長する。アンコウに似るが、口腔内に白色斑がないことで識別される。これら2種は市場では区別されずにアンコウとして流通する。幼魚は各鰭が大きく、浮遊生活を送る。北海道から九州沿岸に広く分布する。生息水深や分布域もアンコウとほぼ同じ。体表がぬるぬるでまな板の上では捌きづらいため、吊るしたアンコウに水を入れ、回転させながら捌く「吊るし切り」や雪の上で解体する「雪中切り」といった独特の手法がある。内之浦漁港ではアンコウと比べると水揚げ量がかなり少なく、確認例は2例のみ。(小枝圭太)



■ キアンコウの覆面 (KAUM-I. 98086)



■ 水揚げされたキアンコウ (2007年2月20日撮影)

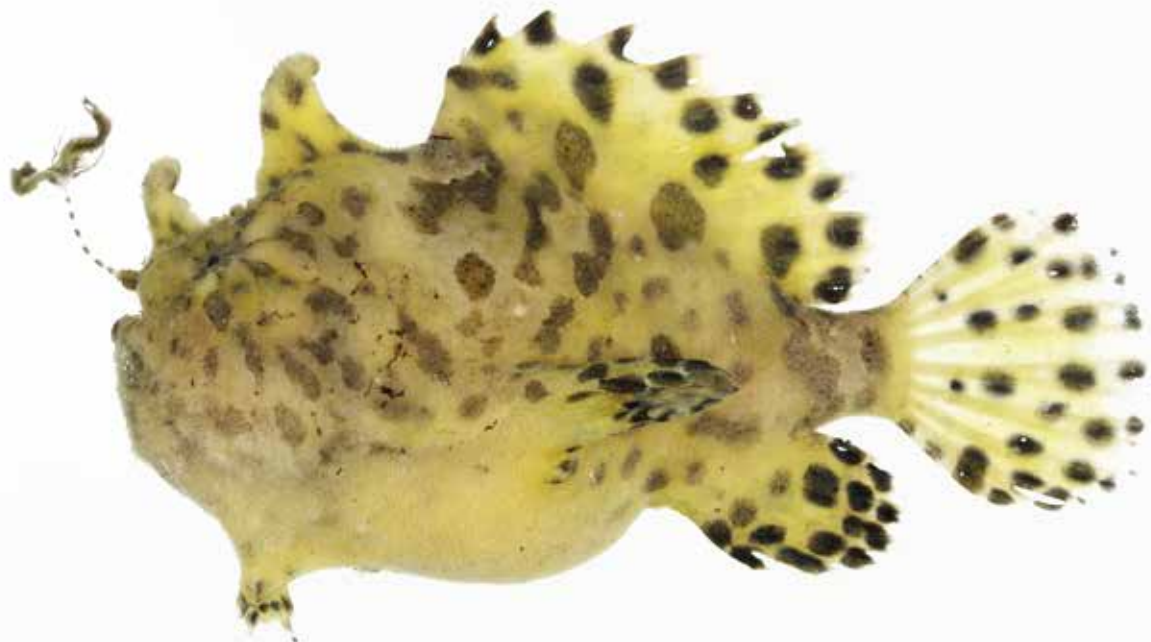


■ キアンコウの口内 (KAUM-I. 98086)

カエルアンコウ属 *Antennarius striatus* (Shaw, 1794)

カエルアンコウ

珍しさ ★★★★★



■ カエルアンコウ *Antennarius striatus* KAUM-I. 78172, 41.0 mm SL

【解説】ポンボリカエルアンコウ（本書未掲載）に似るが、エスカはゴカイ類のような細長い円筒状で、基部で2～7本に分枝することで識別される。体色は全身が糸状突起に被われた黒色の個体から褐色、黄色と変異に富むが、淡い黄色の個体が多い。波に揺られる海藻などの動きに合わせて、体を左右に揺らす姿は愛らしく、ダイバーなどにも人気がある。獲物が近づくと口を大きく開け、自分と同じほどの大きさの魚すら丸呑みにすることができる大食漢な魚である。沿岸の浅い砂底または砂泥底に生息し、北海道から九州南岸、瀬戸内海、奄美諸島などに広く分布する。内之浦漁港では非常に稀で、他の漁獲物に混ざって小型の2個体が得られたのみ。

（小枝圭太）



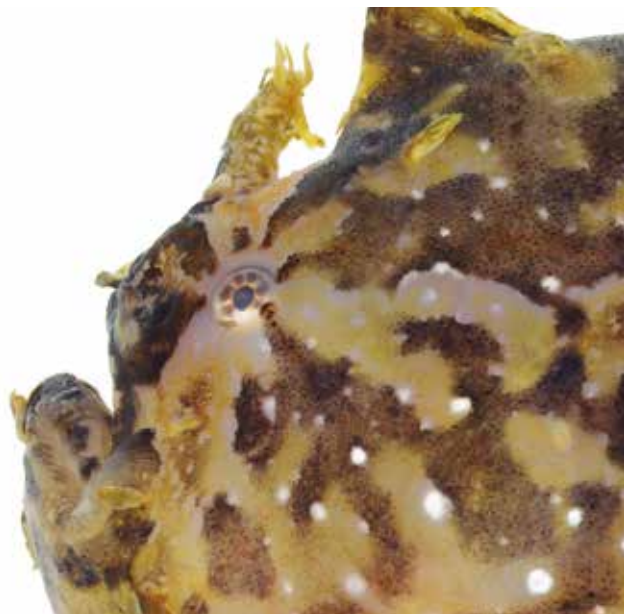
■ カエルアンコウのエスカ (KAUM-I. 78172)



■ カエルアンコウの幼魚
(KAUM-I. 36108, 20.6 mm SL)

ハナオコゼ属 *Histrio histrio* (Linnaeus, 1758)**ハナオコゼ** 珍しさ ★★★■ ハナオコゼ *Histrio histrio* KAUM-I. 86543, 77.6 mm SL

【解説】底生性の種が多いカエルアンコウ科のなかでも特殊な生態をもつ種で、ホンダワラ類などの流れ藻のなかで生活する。周囲の流れ藻に似せるため、体表には細かいひだが多数ある。流れ藻の寿命が短いことから、本種の寿命も短いものと考えられている。カエルアンコウ科は観賞魚としても人気が高いため、本種もペットショップなどで稀に販売されているが、寿命はととても短いので注意が必要。ぼつりとした愛らしい見た目とは裏腹に、すばやい動きで餌を食べる肉食魚である。餌となる小魚や小型甲殻類を見つけると、エスカを小刻みに震わせながらゆっくりと近づいたのち、胸鰭の下方の鰓孔から海水を吹き出し、その勢いで一気に飛びつく。東太平洋を除く全世界に広く分布し、国内でも沿岸全域に広く分布する。(小枝圭太)



■ ハナオコゼの頭部 (KAUM-I. 86543, 77.6 mm SL)



■ ハナオコゼ *Histrio histrio* KAUM-I. 40473, 71.4 mm SL



■ ハナオコゼ *Histrio histrio* (2016年5月25日撮影)

アカグツ属 *Halieutaea fumosa* Alcock, 1894

ヒメアカグツ 珍しさ ★★★★★



■ ヒメアカグツ *Halieutaea fumosa* KAUM-I. 98041, 54.0 mm SL

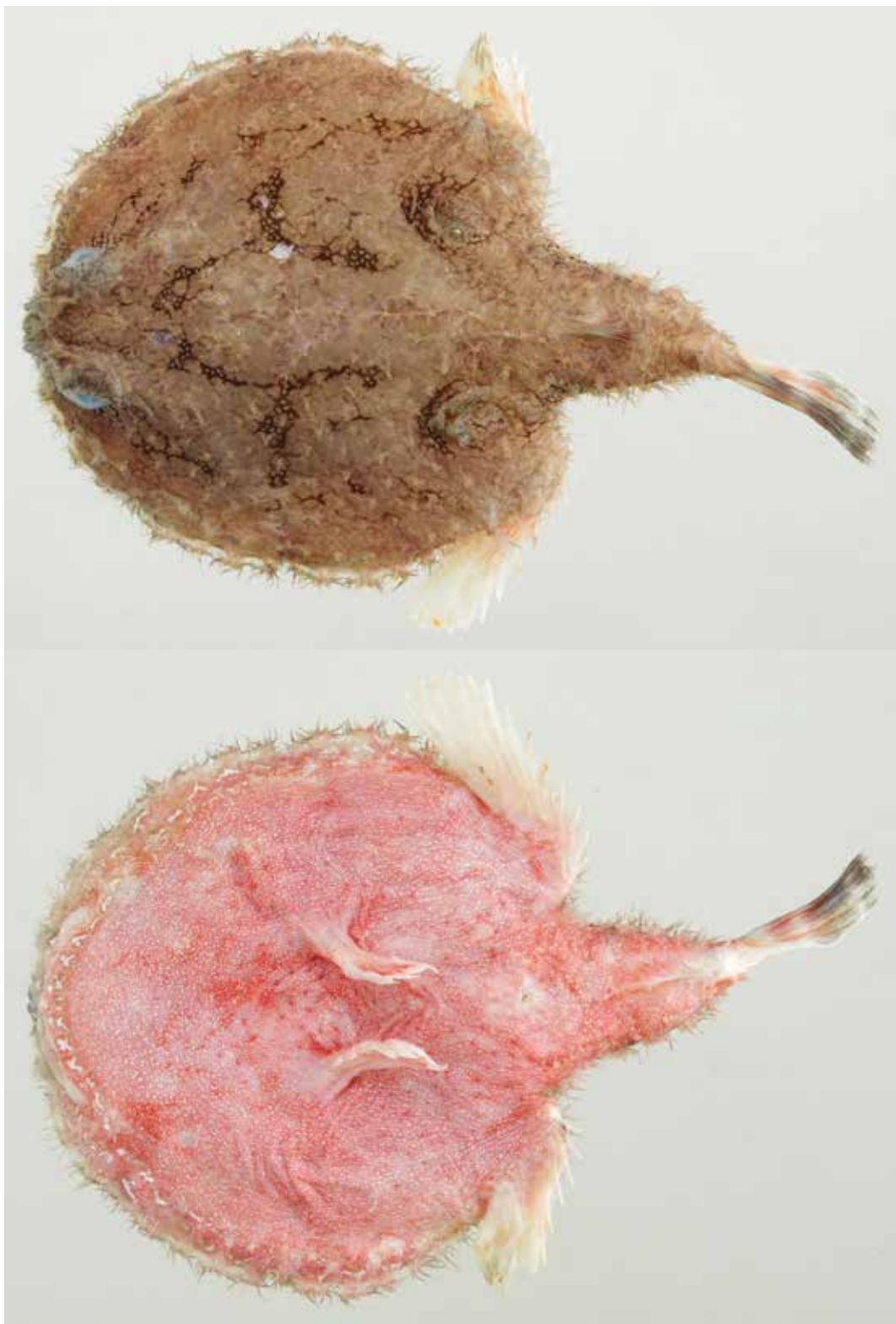
【解説】アカグツ科魚類の多くは体がよく縦扁し、体盤がある。体の背側には硬い骨質小棘が散在し、胸鰭と腹鰭、尾鰭を使って腕立て伏せをするような姿勢で海底に静止している。動きが鈍く、ほとんど泳がないが、ときには胸鰭を使って海底をほふくする。本種は腹面に繊毛状の短棘がなく、ツルツルしていることが特徴である。同じ特徴をもつオキアカグツ（本書未掲載）とは体背面に帯状模様がないことで識別される。水深 95 ~ 458 m の深場に生息し、内之浦湾のような沿岸の内湾環境で採集されることは稀であると考えられる。インド・西太平洋に広く分布するが、国内では従来、千葉県～土佐湾の太平洋沿岸と東シナ海からの記録に限られていた。内之浦から得られた標本は、本種の九州沿岸における初めての記録となる。（小枝圭太）



■ ヒメアカグツの腹面 (KAUM-I. 98041)

アカグツ属 *Halieutaea indica* Annandale & Jenkins, 1910

テンジクアカグツ 珍しさ ★★★



■ テンジクアカグツ *Halieutaea indica* KAUM-I. 83921, 82.0 mm SL

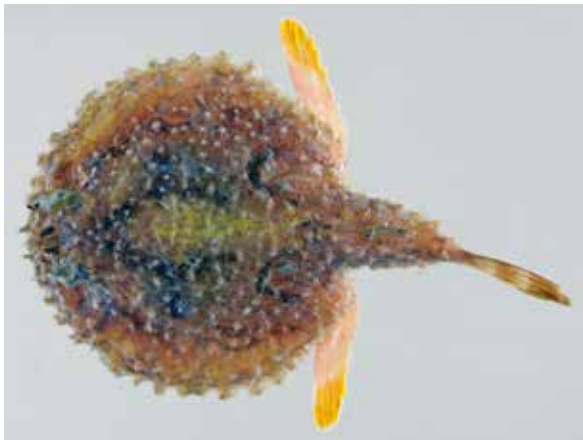


■ テンジクアカグツ *Halieutaea indica* KAUM-I. 29087, 42.1 mm SL, 背面 (左), 腹面 (右)

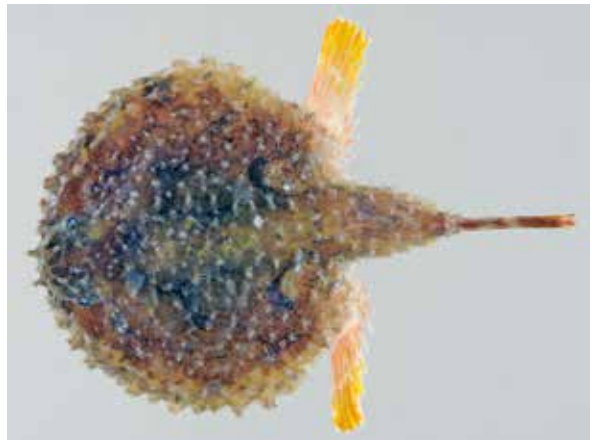


■ テンジクアカグツの側面 *Halieutaea indica* KAUM-I. 29087, 42.1 mm SL

【解説】本種は腹面の棘が大きく、体背面棘の半分の大きさであること、腹面の皮膚がきわめて薄いことが特徴とされるが、この特徴は比較対象がないと判断がとて難しく、小型個体ではさらに困難である。内之浦で得られた標本は、前頁のヒメアカグツ 1 個体 (KAUM-I. 98041) を除き、体背面全体が褐色で中央に「ト」字状の褐色斑がある、鰓孔前縁付近に「C」字状の褐色斑がある、胸鰭と尾鰭の縁辺に淡黄褐色帯があるといった特徴をもっていたことから、テンジクアカグツと判断した。ただし、本科魚類の体色に関する知見は少なく、今後、これらに複数種が含まれることが判明する可能性もある。テンジクアカグツは、水深 60 ~ 150 m の深場に生息する。国内では従来、東シナ海からのみ知られていた。内之浦から標本が得られたことから、本種が九州太平洋沿岸にも分布することが示された。(小枝圭太)



■ テンジクアカグツ KAUM-I. 74770, 56.7 mm SL



■ テンジクアカグツ KAUM-I. 74771, 54.5 mm SL

アカマツカサ属 *Myripristis berndti* Jordan & Evermann, 1903

アカマツカサ

珍しさ ★★★★★



■ アカマツカサ *Myripristis berndti* KAUM-I. 7750, 153.1 mm SL (上), KAUM-I. 65961, 137.5 mm SL (下)

【解説】体長は 20 cm を越えるほどで、ヨゴレマツカサ（本書未掲載）やナミマツカサによく似るが、背鰭棘部の上部が黄色、両眼間隔が狭い、下顎が上顎より前に出ることなどの特徴により識別される。アカマツカサ属の魚は岩礁・サンゴ礁域に生息し、日中は洞窟や岩の割目、消波ブロックの間などの暗がりに隠れており、夜になると外に出て餌を食べる。大きな頭部に巨大棘が発達するリンククチス期（次ページ下の写真）と称される特異な幼期形態をもつことが知られる。インド・太平洋および東太平洋熱帯島嶼域まで広く分布する。国内では琉球列島や小笠原諸島など熱帯の島嶼域では最も普通にみられるアカマツカサ属である。アカマツカサ属魚類は沖縄県では「アカイユ」と呼ばれ、煮つけやあら炊き、塩焼きなどで食用とされる。内之浦湾では非常に稀で、写真の 2 個体が得られているのみ。（小枝圭太）

アカマツカサ属 *Myripristis kochiensis* Randall & Yamakawa, 1996**ナミマツカサ** 珍しさ★★★★■ ナミマツカサ *Myripristis kochiensis* KAUM-I. 65994, 90.5 mm SL

【解説】本種の体長は 15 cm ほどで、ヨゴレマツカサ（本書未掲載）によく似るが、両眼間隔がやや広いこと、吻長が短いこと、背鰭と臀鰭の先端が黒ずむことなどの特徴により識別される。ただし、これら 2 種の識別は非常に難しい。日本固有種で、八丈島、伊豆半島東岸から鹿児島県内之浦にかけての太平洋沿岸、宇治群島、種子島から沖縄島までの琉球列島に分布する（江口・本村、2016）。琉球列島ではアカマツカサと並び個体数の多いヨゴレマツカサと比べると、個体数が少ない。本属魚類は基本的には食用にされないが、煮つけて食べると身に弾力があって美味である。鱗が非常に硬く、剥がしづらいのが難点。（小枝圭太）

■ アカマツカサ属の 1 種 *Myripristis* sp. のリンクチス期稚魚（2003 年 9 月 18 日撮影）

イトウダイ属 *Sargocentron ittodai* (Jordan & Fowler, 1902)

テリエビス 珍しさ ★★★★★



■ テリエビス *Sargocentron ittodai* KAUM-I. 83511, 47.0 mm SL

【解説】背鰭棘部に白色縦帯があり、前端に黒斑があることが特徴。体長は最大でも 17 cm と本科魚類としてはやや小型である。底生性で岩礁、サンゴ礁域に生息する。港内の壁沿いにも多く、港で餌釣りをするとよく釣れる。とりわけ琉球列島では最も個体数が多いイトウダイ科魚類である。イトウダイ属魚類は、釣り上げたときなどに鋭い棘のある鰓蓋を広げて暴れる習性があり、刺されると痛いものの [毒もあるという (Randall et al., 1990)]、強くて長い臀鰭第 3 棘を強く押さえることでおとなしくなる。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸と琉球列島、八丈島から小笠原諸島に分布するが、南日本沿岸では少なく、熱帯域に多い。内之浦湾では 2 個体が得られたのみで個体数は非常に少ない。(小枝圭太)



■ テリエビス *Sargocentron ittodai* (2004 年 2 月 25 日撮影)

イットウダイ属 *Sargocentron rubrum* (Forsskål, 1775)**アヤメエビス** 珍しさ★★■ アヤメエビス *Sargocentron rubrum* KAUM-I. 94350, 169.6 mm SL

【解説】前鰓蓋骨に強く長い1棘があるイットウダイ属の1種で、体背側面に1～2本の暗赤色縦帯があることや、背鰭基部後端に淡い黒色斑をもつことが特徴。アカマツカサ属と同様に岩やサンゴ礁の暗所を好み、夜になると外を泳いで餌を探す。しかし、イットウダイ属魚類はアカマツカサ属ほど高密度の群れを作らず、広くまばらに生息している。国内では神奈川県葉山から九州南岸の太平洋沿岸、三宅島、種子島から西表島までの琉球列島に分布する。内之浦漁港ではいつも水揚げされるほどではないものの、多いときは数十個体のまとまった数が1つの網で漁獲され、市場に出される。(小枝圭太)

■ アヤメエビス
KAUM-I. 94366, 175.6 mm SL

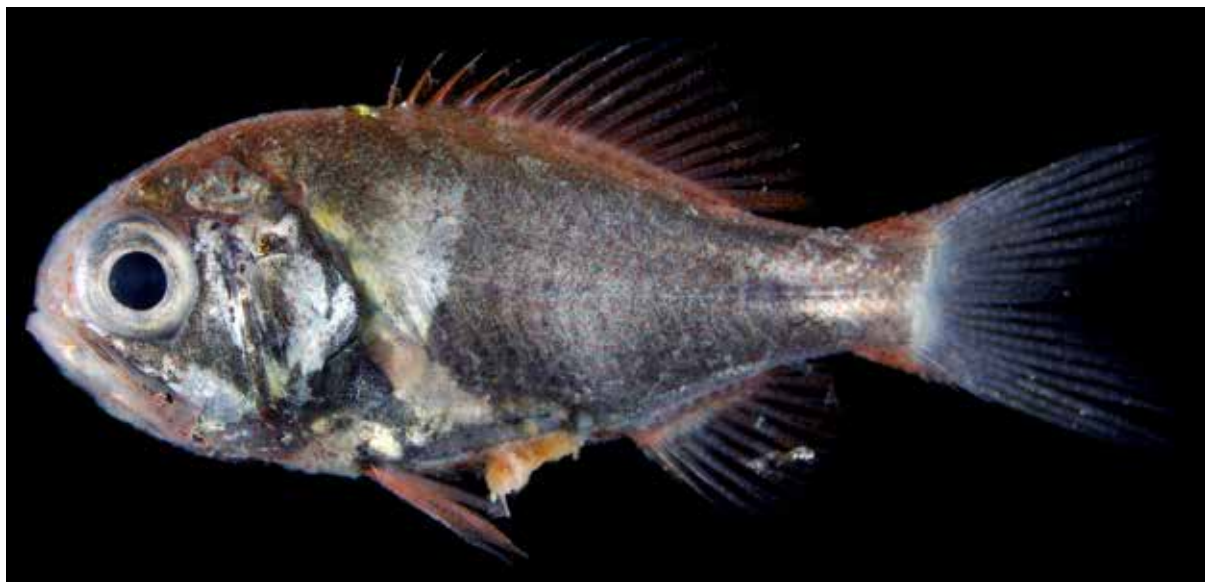
ハリダシエビス属 *Aulotrachichthys prosthemi* (Jordan & Fowler, 1902)

ハリダシエビス 珍しさ★★



■ ハリダシエビス *Aulotrachichthys prosthemi* KAUM-I. 86514, 58.1 mm SL

【解説】共生している発光バクテリアの働きによって生物発光をおこなう魚である。発光器が胸部と両腹鰭の間に位置する肛門のわきから尾鰭の基底部まで長く広がっていることが種の特徴にもなっている。また、発光器を覆う透明の筋肉をもっており、レンズの代わりの働きをしていると考えられている。通常は水深 90 ~ 302 m の亜深海~深海域に生息する。内之浦湾のような浅い湾内で採集されることは稀であると思われるが、ダイバーなどにより比較的浅い水深からも水中写真が撮影されている。国内では伊豆大島、房総半島東岸~大隅半島の太平洋沿岸、および兵庫県浜坂から記録されている。内之浦漁港ではほとんど毎日、水揚げ物に混ざっているほど普通にみられるものの、1日にみる数は多くても数個体。(小枝圭太)



■ ハリダシエビスの幼魚 (KAUM-I. 74750, 25.0 mm SL)

ハシキンメ属 *Gephyroberyx japonicus* (Döderlein, 1883)**ハシキンメ** 珍しさ ★★★★★■ ハシキンメ *Hoplostethus japonicus* KAUM-I. 36097, 33.6 mm SL

【解説】ヒウチダイ科のなかでも大型になる種で、ハリダシエビスと違って発光器をもたない。背鰭に欠刻があり、側線鱗が他の鱗よりわずかに大きいことが特徴。成魚は赤色を呈するものが多いが、写真のように内之浦湾で得られた幼魚は暗褐色であった。水深 150 ~ 700 m の亜深海~深海域に生息し、内之浦湾のような水深 50 m 程度の浅い湾内で採集されることは稀であると思われる。日本のほか、台湾、天皇海山に分布する。国内では茨城県~九州南岸の太平洋沿岸、沖縄舟状海盆に分布しており、内之浦漁港では写真の幼魚 1 個体のみが得られている。ヒウチダイ科魚類は多くが体長 10 cm 前後と小さく、まとまった数が漁獲されないため流通することは少ない。ただし、味は非常に良く、深海魚漁が盛んな静岡県沼津市などでは高級魚として扱われる。(小枝圭太)



■ 冷凍前のハシキンメ (KAUM-I. 36097, 33.6 mm SL)

マツカサウオ属 *Monocentris japonica* (Houttuyn, 1782)

マツカサウオ 珍しさ ★★★★★



■ マツカサウオ *Monocentris japonica* KAUM-I. 74748, 62.8 mm SL

【解説】全身が金色に輝く装甲状の鱗で被われ、強大な背鰭棘と腹鰭棘をもつ非常に特徴的な種。さらに、下顎中央には1対の卵円形の発光器をもつ。発光器には発光バクテリアが共生しており、青色に発光するが、その光はあまり強くない。口を開閉することで光の強さを調整することができる。沿岸浅海の岩礁棚付近から水深約100 mに生息し、日本本土では浅い場所、琉球列島では深い場所に生息している傾向がある。国内では北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、沖縄諸島、東シナ海大陸棚域に広く分布する。幼魚は成魚のような強大な背鰭と腹鰭をもたない。味は良いとされるが、鱗が硬いため一般的には食用とされない。美しく特徴的な見た目から水族館などで鑑賞用として人気が高い。また、昔は乾燥したもの（鱗が硬く、乾燥しても縮まない）を玄関席に吊るし、魔除けにも利用したという。（小枝圭太）



■ マツカサウオの幼魚
(KAUM-I. 82843, 12.7 mm SL)

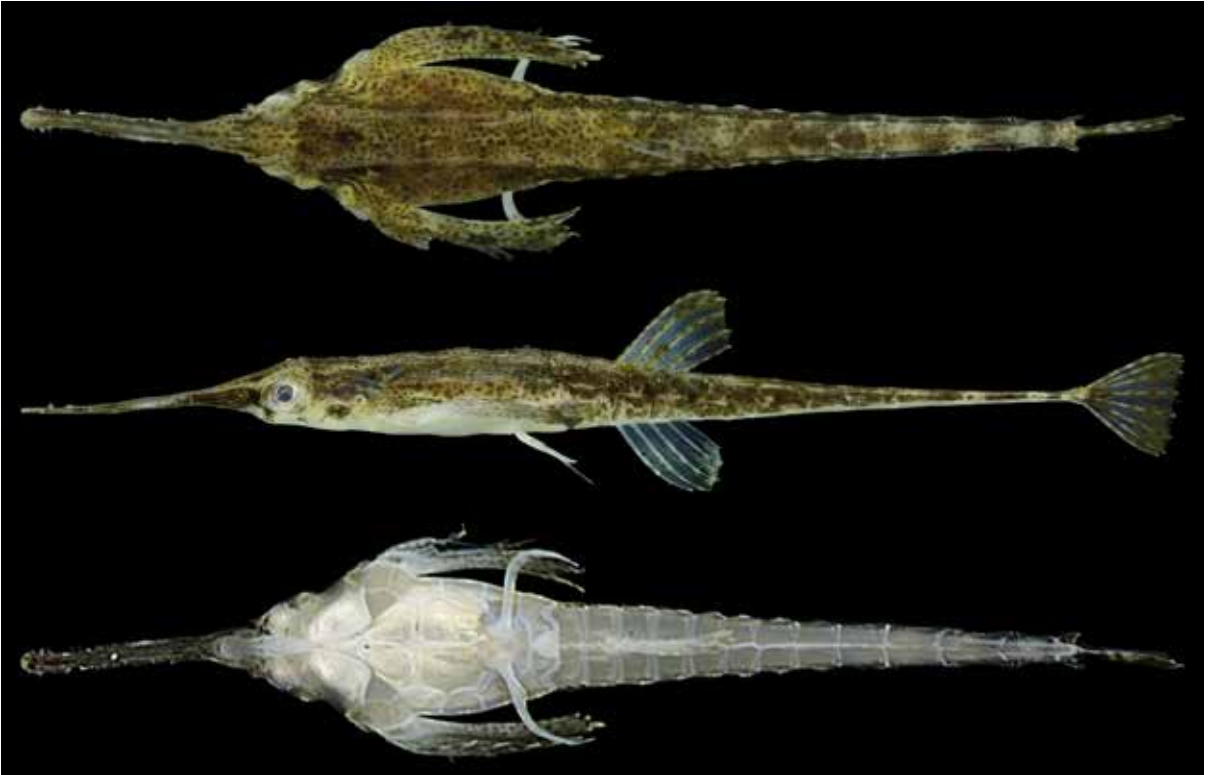
マトウダイ属 *Zeus faber* Linneaus, 1758**マトウダイ** 珍しさ ★

■ マトウダイ *Zeus faber*
KAUM-I. 71439, 97.1 mm SL

【解説】マトウダイ科は体高が高く、著しく側扁し、背鰭と腹鰭が大きい。口は斜め前上方を向き、前方に伸びる。同科のカガミダイ（本書未掲載）とは体側中央に大きく、白で縁どられた明瞭な黒斑があることで容易に識別される。肉食で泳ぎは遅いものの、餌となる小魚や甲殻類にゆっくりと近づき、大きな口を素早く伸ばして丸呑みにする。成魚は水深 30 ~ 400 m の大陸棚～大陸棚斜面上部に多い。幼魚は体色が黄色がかり、沿岸の藻場に棲む。国内では北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、東シナ海大陸棚域に広く分布する。淡白な白身は刺身や鍋物で美味であり、大型で鮮度の良いものは高級魚として扱われる。和名の由来は体側中央の円紋を弓の的とみでの「的鯛」と、この種の顔が馬の頭に似ているとしての「馬頭鯛」の二説がある。（小枝圭太）



■ マトウダイの幼魚 (KAUM-I. 86530, 36.0 mm SL)

テングノオトシゴ属 *Pegasus volitans* Linnaeus, 1758**ヤリテング** 珍しさ ★★★★★

■ ヤリテング *Pegasus volitans* KAUM-I. 82782, 83.1 mm SL, 側面（上）, 背面（中）, 腹面（下）

【解説】ウミテング科魚類は吻が棒状で、体が骨板で覆われ、大きな胸鰭をもつことなどが特徴。なかでもヤリテングは、ウミテングやテングノオトシゴ（いずれも本書未掲載）と比較して体が細長いことや、尾輪数が12であることなどで容易に識別される。また、吻も著しく長く特徴的。沿岸浅所の砂泥底に生息し、大きな胸鰭を広げて海底に静止あるいは、ガニ股の足のような細い腹鰭（1棘3軟条）を使ってほふくする。近年、本種によく似た *Pegasus tetrabelos* Osterhage, Pogonoski, Appleyard & White, 2016 がオーストラリア北部産の標本に基づき新種として記載されたが、日本国内からの報告例はまだない。ヤリテングの国内での分布は限定的で、和歌山県田辺湾、土佐湾、西表島からの記録があったが、写真の標本にも基づき伊東ほか（2016）により内之浦を含む鹿児島県の薩摩半島と大隅半島から初めて記録された。内之浦漁港では1度のみ標本が得られているが、2個体が同時に同じ網で採集されたことから、これらはペアであった可能性が高い。（小枝圭太）



■ ヤリテングの頭部 (KAUM-I. 82782, 83.1 mm SL)

ヘラヤガラ属 *Aulostomus chinensis* (Linnaeus, 1766)**ヘラヤガラ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたヘラヤガラ *Aulostomus chinensis* (2006年7月27日撮影)

【解説】 体は細長く棒状で、吻と頭部は著しく側扁し、長い。下顎前端にひげがある。尾柄は短く、鰭はいずれも小さい。特徴的な体つきから、英名ではトランペットフィッシュと呼ばれる。体長は最大で80 cm程度。体の地色は黄色や茶色で、褐色横帯をもつ個体や体側後半部に縞模様をもつ個体、明瞭な模様のない個体など変異に富む。小さな鰭で滑るように泳ぎ、餌となる小型魚や甲殻類などをみつけると素早く突進する。アオヤガラと違い、体を曲げることはない。ロープや他の魚類に寄り添うように泳ぐ姿もしばしばみられる。大型個体はサンゴ礁域を泳いで餌を探すが、小型個体は擬態して待ち伏せていることが多い。サンゴ礁域の水深30 m以浅に生息し、国内では相模湾～九州南岸の太平洋沿岸（少ない）、若狭湾、伊豆諸島、小笠原諸島、屋久島から与那国島までの琉球列島、南大東島に広く分布する。食用とされることはあまりなく、刺身やみそ汁で食したことがあるが不味であった。内之浦ではアカヤガラやアオヤガラと比べると圧倒的に少なく、写真による記録が1例のみで標本は残っていない。(小枝圭太)

■ ヘラヤガラの頭部 *Aulostomus chinensis* (2006年7月27日撮影)

ヤガラ属 *Fistularia commersonii* Rüppell, 1838

アオヤガラ 珍しさ★★



■ アオヤガラ *Fistularia commersonii* KAUM-I. 6492, 571.0 mm SL

【解説】ヤガラ科の2種はヘラヤガラ科よりさらに体が細長く、尾鰭中央軟条が糸状に伸びる。アオヤガラは体が淡緑色から淡褐色であることが特徴。水中では、幅の広い横帯が体に数本である場合がある。大きい個体は体長が1 mを越え、真上から見ると巨大な棒が浮かんでいるように見える。浅場の底層域から表層域を大型個体は単独で、小型個体は数個体の群れでゆっくりと泳ぐ姿がよくみられる。餌となる小魚の群れをみつけると、体をS字に曲げた状態から一気に伸ばすことで加速して群れに突進する。夜には海底付近をゆっくり泳いでいる姿がみられるが、反応は鈍く、体長1 mを越える個体であっても素手で捕まえることができるほど。国内での分布は北海道から琉球列島、小笠原諸島とほぼ全域である。食用として市場に出回することは稀である。刺身は弾力があり、食感が良いが脂のりが悪く、旨味が少ない。汁や焼きでも食したが、やはり旨味が少なく、アカヤガラと比較すると数段落ちる。(小枝圭太)



■ アオヤガラの頭部 (KAUM-I. 6492, 571.0 mm SL)



■ 水揚げされたアオヤガラ (2012年11月1日撮影)

ヤガラ属 *Fistularia petimba* Lacepède, 1803**アカヤガラ** 珍しさ★■ アカヤガラ *Fistularia petimba* KAUM-I. 73979, 384.0 mm SL

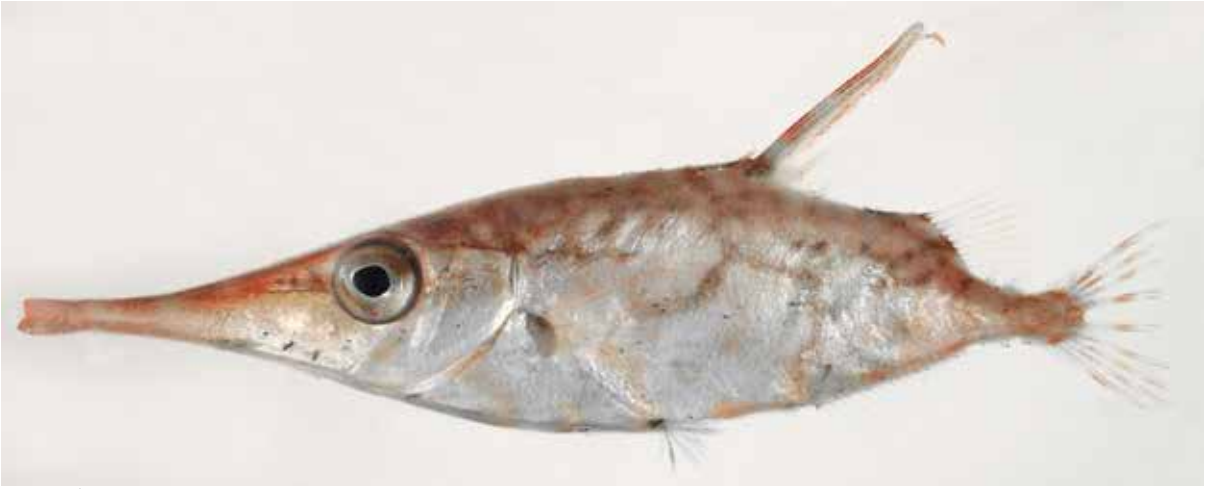
【解説】名のとおり体色が赤色であることでアオヤガラと容易に識別される。体長 2 m にも達し、巨大なものは市場のトロ箱から大きくはみ出すように束になって市場に並ぶ様子がよくみられる。アオヤガラと比較すると沖合の深場に生息し、ダイビングや岸からの釣りで見られることはほとんどないだろう。国内での分布は北海道から琉球列島、小笠原諸島とほぼ全域である。異形の風貌に似合わず、非常に美味しい魚である。弾力のある上質な白身で、独特の旨味があるため、刺身で最も良さが生きる。また、吸い物でも極めて美味。流通量が多くないため、一般家庭で食される食材ではなく、割烹や料亭などでよく利用されている。内之浦漁港では体長 1 m をゆうに越える大型個体から、体長 20 cm 程度の小型個体まで数多く水揚げされており、大型個体のみ市場にだされる。(小枝圭太)



■ アカヤガラの頭部 (KAUM-I. 73979, 384.0 mm SL)



■ 市場に並ぶアカヤガラ (2011年5月12日撮影)

サギフエ属 *Macroramphosus sagifue* Jordan & Starks, 1902**サギフエ** 珍しさ★★★★■ サギフエ *Macroramphosus sagifue* KAUM-I. 71250, 52.2 mm SL

【解説】サギフエ科魚類は細長い楕円形の体に長く伸びた管状の口をもつ。各鱗は小さいが、背鱗に強大な1棘がある。同属のダイコクサギフエとよく似るが、この棘の後縁が鋸歯状であることで識別できるとされる。近年、これらが同種であると考えられることが多いものの、結論はでていない（瀬能、2013a）。大型個体では、この棘が長く尾鰭基底に達することも特徴。体は桃色だが、小型のものでは色が薄く銀色に近い個体もいる。基本的には頭をやや斜め下にして倒立しているが、素早く移動するときや長距離を移動するときは体を水平にして泳ぐ。海底の甲殻類など小動物を捕食する。生息水深は深く、水深500 m以浅の砂底域に生息するが、沿岸域の浅場でみられることもある。国内では北海道～兵庫県浜坂の日本海沿岸、岩手県、相模湾～九州南岸の太平洋沿岸、東シナ海大陸棚縁辺域に広く分布する。食用にされることはなく、内之浦漁港では水揚げも稀で、体長5 cm程度の小型個体に限られる。（小枝圭太）



■ 飼育されたサギフエ（2014年3月29日撮影）



■ サギフエの幼魚（KAUM-I. 86399, 52.5 mm SL）

タツノオトシゴ属 *Hippocampus histrix* Kaup, 1856

イバラタツ 珍しさ ★★★★★

【解説】尾鰭はなく、尾部は長くのびて海草などに巻き付く。頭部は躯幹部の体軸に対してほぼ直角に向き、小さい胸鰭を小刻みに動かしながら頭が上になるようにバランスをとっている。体には多数の鋭い棘状突起があり、眼の上にも大きな棘をもつ。吻も長い。タツノオトシゴ属のなかでも特徴的な種で、全体にシャープな印象をもつ。鮮やかな黄色の体は美しく、体中の棘の先端はやや黒ずむ。和名の「イバラ」はこの棘だらけの体由来するのであろう。水深7～40 mの砂底や岩礁域に生息する。国内では相模湾～屋久島の太平洋沿岸、大分県別府湾、伊豆諸島、琉球列島（稀）での分布が確認されているが、全国的にやや稀種。内之浦漁港でも体長7 cmの個体（KAUM-I. 62299）が採集されたのみ。（小枝圭太）



■ イバラタツの頭部
(KAUM-I. 62299)

■ イバラタツ *Hippocampus histrix* KAUM-I. 62299, 66.0 mm SL

タツノオトシゴ属 *Hippocampus kelloggi* Jordan & Snyder, 1901

オオウミウマ 珍しさ ★★★★★

【解説】タツノオトシゴの仲間でも最大となる種で、最大で高さが25 cmにも達する。クロウミウマ（本書未掲載）によく似るが、尾輪（鱗が変化してできた環状の硬い甲板）数が39～41であることで区別される。吻は太く、全体にずんぐりした印象をもつ。体色は変異に富み、黄色から黒褐色のものがみられるが、黒褐色でやや地味な体色の個体が多い。2013年11月6日に内之浦漁港で得られた個体は薄い茶褐色。水深8～40 mの内湾の浅場に生息し、港の中のロープなどに尾部を使って巻き付いている姿がみられる。国内では相模湾～九州南岸の太平洋沿岸、能登半島～山口県日本海沿岸、八丈島、屋久島～沖縄島の琉球列島に分布する。（小枝圭太）



■ 飼育されたオオウミウマ
(2013年11月6日撮影)

■ オオウミウマ *Hippocampus kelloggi* KAUM-I. 101854, 190.1 mm SL

タツノオトシゴ属 *Hippocampus trimaculatus* Leach, 1814

タカクラタツ 珍しさ ★★★★★



■ タカクラタツ *Hippocampus trimaculatus*

KAUM-I. 77492, 151.7 mm SL, メス (左), KAUM-I. 80379, 183.0 mm SL, オス (右)

【解説】頭頂にある冠状突起が低く、躯幹部の背側に黒色斑が3つ並ぶ（不明瞭な個体もある）ことが特徴。体色は淡色～暗褐色や黒色、黄色と様々で、眼に放射状の模様や頭部に細かい斑点をもつ個体など変異に富む。内之浦漁港で得られた個体は、体が黒褐色のものや黄色に近い褐色のものであった。タツノオトシゴの仲間は、オスが腹部に育児嚢という袋をもち、メスが産んだ卵をここに入れて稚魚になるまで保護することが知られている。育児嚢の表面はなめらかな皮膚に被われているため、雌雄の判別が外見からでも判断できる。写真左のタカクラタツはメスで、右はオスである。タカクラタツはやや温帯よりに分布し、国内では北海道～鹿児島県内之浦湾の太平洋沿岸、山口県～鹿児島県の日本海・東シナ海沿岸、大分県別府湾、沖縄諸島に分布する。（小枝圭太）

ヒフキヨウジ属 *Trachyrhamphus serratus* (Temminck & Schlegel, 1850)

ヒフキヨウジ 珍しさ ★★★★★



■ ヒフキヨウジ *Trachyrhamphus serratus* KAUM-I. 12748, 257.6 mm SL

【解説】タツノオトシゴをまっすぐに伸ばしたような細長い体つきで、尾鰭があるヨウジウオ亜科に属する。躯幹輪数が21～24、尾輪数が41～50、尾鰭が9軟条、吻長が眼の後縁から胸鰭基底中央までの長さより短いことで同属他種と区別される。体は灰褐色。水深15～100mの砂礫底や砂泥底に生息する。底生性で、ヘビのように体をくねらせて海底を這うように泳ぐ。国内では岩手県、千葉県外房～九州南岸の太平洋沿岸、新潟県～天草諸島の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、伊豆大島に分布する。体が細く、小さく、もちろん食用にはならない。内之浦漁港で混獲されることは稀である。（小枝圭太）

ボラ属 *Mugil cephalus cephalus* Linnaeus, 1758
ボラ 珍しさ★★



■ ボラ *Mugil cephalus cephalus* KAUM-I. 98083, 486.0 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、胸鰭基底上半部に青色斑点がある。体側には不明瞭な暗色縦帯が多数はいる。南日本近海では黒潮流域において秋から冬にかけて産卵をおこなっているものと考えられている。産卵群においては、メスの割合が非常に低いことが知られる（藤木・道津、1963；落合・楳田、1969）。沖合の表層付近で発生した仔魚は、全長数 cm ほどに成長すると沿岸海域や河川に現れ、なかには純淡水域に進入するものもある（堀田・小達、1966；瀬能、1988）。内之浦湾においては体長数 cm の稚魚から成魚まで、定置網により多く漁獲される。夜の内之浦港内では大きな群れで水面付近を泳いでいる姿がよく見られる。地域により食味評価が大きく分かれる魚として知られる（西松、2017）。内之浦では食用とされることはほとんどないが、卵巣を塩漬けにして食する。多くの地域において成長に伴い呼称が変わる出世魚であるが、内之浦においてはサイズの大小を問わず一様に「ボラ」と称される。（畑 晴陵）



■ ボラの幼魚 (KAUM-I. 30280, 52.7 mm SL)

ヤクシマイワシ属 *Atherinomorus lacunosus* (Forster, 1801)

ヤクシマイワシ 珍しさ ★★★



■ ヤクシマイワシ *Atherinomorus lacunosus* KAUM-I. 73976(上), 108.3 mm SL, KAUM-I. 83919, 115.3 mm SL(下)

【解説】本種の含まれるトウゴロウイワシ科魚類は「イワシ」と名が付き、体側に銀色縦帯をもつことからマイワシやキビナゴなどの含まれるニシン科魚類と混同されがちであるが、背鰭が2基あることや鱗が硬く、剥がれにくく、ザラザラしていることなどで識別できる。本種は体がやや側扁し、体側中央に幅広い銀色縦帯がはいる。岸近くの浅所を大きな群れで遊泳し、河口に進入することもある。大分県以南に分布し、体長14 cm程度に達する。(畑 晴陵)

ギンイソイワシ属 *Hypoatherina tsurugae* (Jordan & Starks, 1901)

ギンイソイワシ 珍しさ ★★★



■ ギンイソイワシ *Hypoatherina tsurugae* KAUM-I. 30381, 82.1 mm SL

【解説】体背面は暗褐色を呈し、肛門は腹鰭の後端よりも後方に位置する。岸近くを大きな群れを形成して遊泳し、動物プランクトンを餌とする。鹿児島県本土近海には多く、堤防でのサビキ釣りで入れ食い状態となることも多い。内之浦湾においても個体数は多いものと思われるが、岸の近くに多く生息するためか、沖合に設置された定置網に入ることは少ない。(畑 晴陵)

トウゴロウイワシ属 *Hypoatherina valenciennei* (Bleeker, 1854)

トウゴロウイワシ 珍しさ ★★★★★



■ トウゴロウイワシ *Hypoatherina valenciennei* KAUM-I. 98145, 81.4 mm SL



■ トウゴロウイワシ *Hypoatherina valenciennei* KAUM-I. 97884, 73.7 mm SL

【解説】体背面が淡い茶色を呈し、肛門が腹鰭の間に位置する。本州においてはギンイソイワシよりも個体数が多いといわれるが、鹿児島県内においてはギンイソイワシと比較すると稀な魚。新潟県・青森県以南の日本各地に分布するが、琉球列島には分布しない。刺身などにして美味しい魚であるが、鱗が硬く、加工・調理に手間がかかるため、食用とされることはあまりない。(畑 晴陵)

ナミノハナ属 *Iso flosmaris* Jordan & Starks, 1901

ナミノハナ 珍しさ ★★★★★



■ ナミノハナ *Iso flosmaris* KAUM-I. 98060, 49.0 mm SL



■ ナミノハナ *Iso flosmaris* KAUM-I. 98058, 47.8 mm SL

【解説】体は著しく側扁し、体腹縁は隆起する。体高は胸鰭基部付近で最大で、そこから後方に低くなる。体側中央に幅の広い銀色縦帯とその上に細い黒色縦帯がはいる。その名が示す通り、波の華（打ち寄せる波が白い泡状になる現象）が立つような波当たりの強い沿岸の岩礁域に生息する。生態などに関しては不明な点が多い。波の穏やかな内之浦湾に出現することは稀なものと思われ、写真の個体も風が強く、波の高い春先に漁獲された。最大でも体長 5 cm 程度の小型種であり、食用とされることはない。なおナミノハナは、紅藻の 1 種 *Portieria japonica* の和名でもある。（畑 晴陵）



■ ナミノハナ *Iso flosmaris* (2006 年 4 月 6 日撮影)

ホシザヨリ属 *Hemiramphus far* (Forsskål, 1775)

ホシザヨリ 珍しさ ★★★★★



■ ホシザヨリ *Hemiramphus far* KAUM-I. 34309, 239.5 mm SL

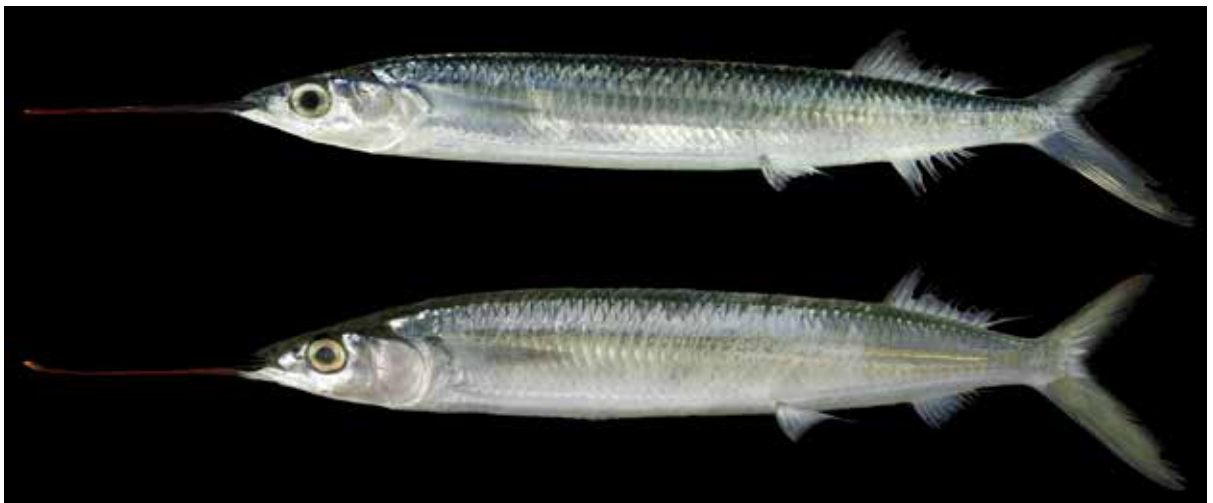
【解説】体に4本から9本の黒色横帯がはいる。長く伸びた下顎はほぼ一様に黒色を呈し、先端付近がわずかに赤みを帯びる。サヨリ科魚類に幅広くみられる、伸長した下顎の用途は、詳しくは分かっていない。静岡県以南の太平洋沿岸に分布し、体長40 cm程度にまで成長する。大型なため肉量が多く、食用に適するものと思われるが、内之浦湾における漁獲は稀であり、ほとんど利用されることはない。(畑 晴陵)



■ ホシザヨリ *Hemiramphus far* (2005年12月14日撮影)

ホシザヨリ属 *Hemiramphus lutkei* Valenciennes, 1847

ナンヨウサヨリ 珍しさ ★★



■ ナンヨウサヨリ *Hemiramphus lutkei* KAUM-I. 98057, 214.0 mm SL(上), KAUM-I. 83499, 213.0 mm SL(下)

【解説】体は銀白色を呈し、体背面は濃青色。下顎は鮮やかな赤色。インド・西太平洋の暖海に広く分布する。体長約30 cm。小型甲殻類や魚類のほか、浮遊藻類なども多く餌とする、雑食性であることが知られている (Tabassum et al., 2014)。東南アジアでは大量に漁獲され、干物などにして食用とされる。内之浦湾では時折漁獲される程度であるが、大きな群れをなすのか、一度に数十個体が入網することもある。食用魚としての利用も少ない。(畑 晴陵)

サヨリ属 *Hyporhamphus sajori* (Temminck & Schlegel, 1846)

サヨリ 珍しさ★★



■ サヨリ *Hyporhamphus sajori* KAUM-I. 80888, 239.0 mm SL



■ サヨリ *Hyporhamphus sajori* KAUM-I. 98028, 241.6 mm SL

【解説】体は伸長し、細長い。下顎は著しく伸長する。生時、体は半透明を呈し、体側中部に銀色縦帯がはいり、その上方に濃青色の細い縦帯がはいる。死後、体背面は黄緑色となる。下顎は赤い。鱗が非常に細かい。北海道から九州南岸にかけて広く分布する。体長約 30 cm。水面近くを群泳し、浮遊する動物・植物プランクトンを下顎で掬うようにして捕食する。寿司ネタなどに用いられ、鹿児島湾などでは受け網などを用いて大量に漁獲されるが、内之浦湾では時折定置網で漁獲される程度で数は多くない。(畑 晴陵)

サヨリ属 *Hyporhamphus yuri* Collette & Parin, 1978

ユリサヨリ 珍しさ★★★★★



■ ユリサヨリ *Hyporhamphus yuri* KAUM-I. 96839, 104.4 mm SL

【解説】体は一樣に銀白色を呈し、下顎先端は赤色。サヨリに似るが、鱗が大きく、背鰭前方鱗数は 42 ~ 46 (サヨリでは 66 ~ 81)。他の内之浦湾産サヨリ科魚類と同様に下顎が伸長するが、上顎も長く、上顎長は上顎幅の 0.85 ~ 1.0 倍。報告数の乏しい種であり、日本と台湾からのみ記録されている (Collette and Parin, 1978, Collette and Su, 1986 ; 藍澤・土居内, 2013)。日本国内における記録も少なく、従来は沖縄島と口永良部島からのみ記録されてきたが (松尾・木村, 2017)、2016 年 10 月 11 日に写真の個体が定置網により漁獲された。内之浦湾は分布の北限となる。標準和名ユリサヨリの「ユリ」は、花のユリではなく、ロシアの魚類研究者 Yuri N. Shcherbachev にちなむ (Collette and Parin, 1978)。(畑 晴陵)



■ ユリサヨリの頭部 *Hyporhamphus yuri* (KAUM-I. 96839, 104.4 mm SL)

ハマトビウオ属 *Cypselurus agoo* (Temminck & Schlegel, 1846)
トビウオ 珍しさ ★★★



■ トビウオ *Cypselurus agoo* KAUM-I. 96837, 243.6 mm SL

【解説】胸鰭は一樣に暗い灰色を呈し、上から3本の胸鰭軟条が不分枝であることにより、日本産同属他種と識別される。日本各地の沿岸に広く分布する。本種を含むトビウオ科魚類の多くは水産重要種であり、脂肪が少なく、刺身にして美味である。加工食品の原料としても重要で、竹輪など練り製品に加工されるほか、伊豆諸島においては“くさや”の原料となる。九州北部においては焼いて干したトビウオから「あごだし」と呼ばれる出汁をとり、当地における重要な調味料である。魚体のみならず卵も食用として人気があり、「とびっこ」と称され寿司ネタなどに供される。トビウオは関東などにおいては多獲され、他のトビウオ科魚類と識別するため「ホントビ」などと称されることもあるが、内之浦においてはホソトビウオやツクシトビウオと比較して漁獲量・頻度共に極めて少ない。他のトビウオと区別されず出荷される。(畑 晴陵)



■ まとめて水揚げされるハマトビウオ属 *Cypselurus* spp.
 (ツクシトビウオとホソトビウオと思われる；2014年6月17日撮影)

ハマトビウオ属 *Cypselurus doederleini* (Steindachner, 1887)

ツクシトビウオ 珍しさ★



■ ツクシトビウオ *Cypselurus doederleini* KAUM-I. 55505, 256.8 mm SL (上), KAUM-I. 42102, 235.6 mm SL (下)

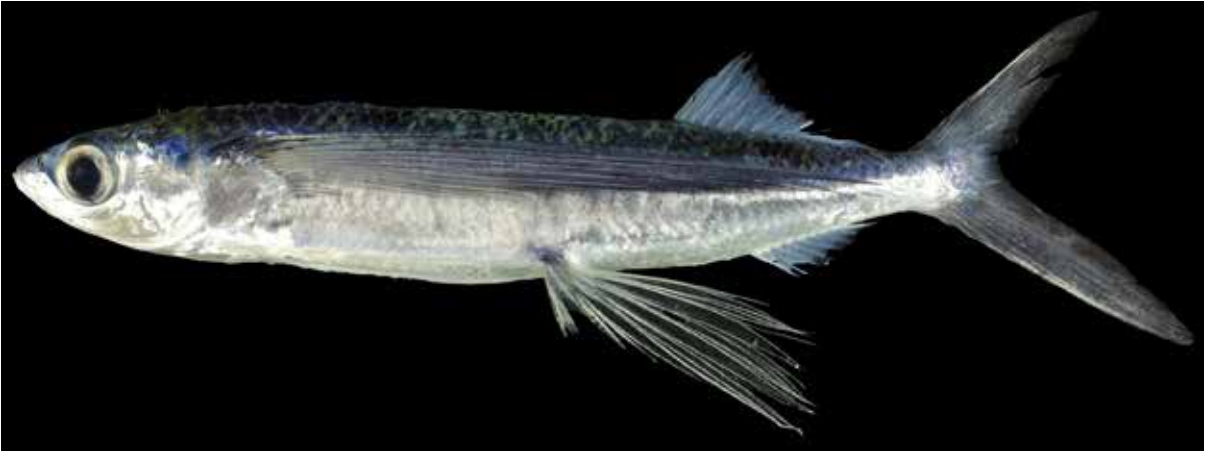
【解説】体背面から体側上部にかけては青みがかった黒色を呈し、体側は銀白色。胸鰭は一様に暗い灰色。胸鰭後端は臀鰭基底後端を越えて伸長する。産卵期は春から夏にかけてであり、産卵期を迎えると岸に近づくことが知られているが、オスの方が接岸が早く、九州北西岸の定置網における漁獲個体は春先ではほとんどオスであるが、夏季には性比が1対1に近くなる（一丸・中園、1999）。産卵は藻類の繁茂した場所で早朝に群れでおこなわれ、卵は藻類に絡みつく（今井、1959）。駿河湾においてはホソトビウオと並んで幼魚が大量に出現することが知られている（岡、2011）。鹿児島県近海における産卵期は5～6月とされ、県本土においては定置網によって、島嶼域においてはおもに曳網または刺網によって多獲される（瀬戸山、2000）。内之浦湾においてはホソトビウオと並び、定置網によって大量に漁獲される。漁獲個体は同時に漁獲されるホソトビウオよりも大きい。ホソトビウオとともに「青トビ」と称され、食用に供される。（畑 晴陵）



■ ツクシトビウオの胸鰭内側
(KAUM-I. 73167, 229.3 mm SL)



■ ツクシトビウオの幼魚（2009年6月18日撮影）



■ ツクシトビウオ *Cypselurus doederleini* KAUM-I. 73167, 229.3 mm SL

ハマトビウオ属 *Cypselurus hiraii* Abe, 1953

ホソトビウオ 珍しさ★



■ ホソトビウオ *Cypselurus hiraii* KAUM-I. 63142, 189.7 mm SL



■ ホソトビウオ *Cypselurus hiraii* KAUM-I. 63143, 193.5 mm SL

【解説】体背面は青みがかった黒色を呈し、体側は銀白色。胸鰭は灰色。ツクシトビウオに類似するが、胸鰭後端が臀鰭基底後端に達しないこと（ツクシトビウオでは胸鰭後端は臀鰭基底後端を越える）などにより識別される。産卵期は初夏であり、この時期になると沿岸浅海域に接岸する。藻場を産卵場所とするツクシトビウオとは異なり、砂地において産卵をおこなうことが知られる（児島、1971）。山口県沿岸においては定置網によるトビウオ類の漁獲の9割を占め、残りの1割近くをツクシトビウオが占めることが報告されている（河野ほか、1995）。ホソトビウオは長崎県平戸においては初秋を中心に多獲され、「あごだし」の原料として重用される。かつては安価に取引されたが、近年の「だしブーム」に伴い、価格の高騰が著しい（西日本新聞、2016）。内之浦湾においてはツクシトビウオと並んで最も多く漁獲されるトビウオ類であるが、トビウオ類漁獲量に占める割合は山陰地域のものほど大きくない。また、内之浦湾においてはホソトビウオ、ツクシトビウオに加え、ハマトビウオも一定の漁獲がある。（畑 晴陵）

ハマトビウオ属 *Cypselurus pinnatibarbatus japonicus* (Franz, 1910)

ハマトビウオ 珍しさ★★



■ ハマトビウオ *Cypselurus pinnatibarbatus japonicus* KAUM-I. 98049, 333.5 mm SL

【解説】トビウオ科の最大種で全長 50 cm に達する。側線鱗数が 61 ~ 68、背鰭前方鱗数が 40 ~ 47 と、鱗が細かいことが特徴。胸鰭は一律に暗灰色。本種の生態に関しては不明な部分も少なくないが、広域な回遊をおこない、八丈島で標識放流をおこなった個体が屋久島で再捕された例が知られる。種子島近海においては 11 月から 4 月にかけてオスが接岸し、メスはそれよりも遅れて、1 月以降に接岸することが知られる（立石、2009）。幼魚は沖合に生息するものと思われ、鹿児島県本土沿岸で漁獲されるもののほとんどは全長 40 cm 以上の大型個体である。内之浦湾においても定置網により、成魚が多数漁獲され、全長 50 cm ほどの大型個体も珍しくない。美味しい魚であり、伊豆諸島においてはアジ科のクサヤモロと並ぶ「高級くさや」の原料として高い人気がある。（畑 晴陵）



■ ハマトビウオの胸鰭内側（KAUM-I. 98049）

ハマトビウオ属 *Cypselurus poecilopterus* (Valenciennes, 1847)**アヤトビウオ** 珍しさ ★★★■ アヤトビウオ *Cypselurus poecilopterus* (2009年7月13日撮影)

【解説】胸鰭は淡い黄色を呈し、茶褐色の斑点が多数はいる。眼が大きく、体高が高い。稚魚期にひげ状器官をもたない。トビウオとしては小型で、最大でも体長 30 cm に満たない。大隅諸島においては 6～8 月に多く出現するが、近年は通年漁獲されるようになりつつある（財団法人鹿児島市水族館公社、2008；立石、2010a）。内之浦湾での漁獲は稀であり、写真の個体の漁獲が確認されているのみ。種子島では大量に漁獲され、「小トビ」と称され食用魚として重要である。しかし、内之浦では小型で肉量に乏しいことや個体数が少ないこともあり、利用されることは少ない。（畑 晴陵）



■ アヤトビウオの胸鰭内側 (2009年7月13日撮影)

ハマトビウオ属 *Cypselurus starksi* Abe, 1953

アリアケトビウオ 珍しさ ★★★



■ アリアケトビウオ *Cypselurus starksi* KAUM-I. 96838, 136.0 mm SL

【解説】胸鰭は下縁の透明域を除いて、一様に青黒色を呈する。幼魚においては、背鰭と腹鰭も黒色を呈する。臀鰭軟条数は8～10。ホソトビウオやツクシトビウオなど、多くのトビウオ科魚類は稚魚期に下顎にひげ状の突起をもつことが知られるが、アリアケトビウオは各成長段階においてひげ状突起を生じない（今井、1959）。最大で体長25 cm以上に成長するが、内之浦湾においては体長12 cm未満の幼魚が稀に定置網で漁獲される程度である。下の写真の個体（KAUM-I. 56768）は畑・本村（2014）によりチャバナトビウオとして報告されたものであるが、アリアケトビウオであることが明らかになっている（藤原ほか、2017）。伊豆諸島から九州南岸にかけての太平洋沿岸と、佐渡ヶ島から九州西岸にかけての日本海・東シナ海沿岸に分布する。アリアケトビウオの仔稚魚が数多く鹿児島県本土近海から得られていることから、同地域において産卵をおこなっているものと思われるが、薩南諸島からの本種の記録はなく（今井、1959）、鹿児島県本土が分布・産卵海域の南限と考えられる。（畑 晴陵）



■ 胸鰭を広げたアリアケトビウオ (KAUM-I. 96838)



■ アリアケトビウオ *Cypselurus starksi* KAUM-I. 56768, 92.0 mm SL



■ アリアケトビウオの幼魚 (KAUM-I. 60160, 83.5 mm SL)

ハマトビウオ属 *Cypselurus unicolor* (Valenciennes, 1847)

オオメナツトビ 珍しさ ★★★★★



■ オオメナツトビ *Cypselurus unicolor* KAUM-I. 42107, 265.2 mm SL (ホルマリン固定標本)

【解説】胸鰭に一切模様がなく、一様に白色半透明を呈することが特徴。トビウオ科魚類の多くは互いに類似し、その種同定が極めて難しいが、その胸鰭の色彩からオオメナツトビの同定は例外的に容易である。春から夏にかけて台湾近海から琉球列島近海に来遊し、産卵をおこなう（立石、2010b）。奄美群島においては追い込み漁などによってある程度まとまって漁獲されるが、内之浦湾においては極めて稀。太平洋の熱帯域に広く分布するが、国内においてはこれまで伊豆諸島、鹿児島湾、屋久島、琉球列島、小笠原諸島、および沖ノ鳥島からのみ記録されており、本報告は本種の標本に基づく九州太平洋沿岸における初記録となる。写真はホルマリンで数週間固定した後、エタノールで保存された標本であるため退色が進んでいる。（畑 晴陵）

ツマリトビウオ属 *Parexocoetus brachypterus* (Richardson, 1846)

ツマリトビウオ 珍しさ ★★★★★



■ ツマリトビウオ *Parexocoetus brachypterus* KAUM-I. 63144, 113.7 mm SL

【解説】背鰭が高く、黒色を呈し、胸鰭が短いことでバショウトビウオに類似するが、胸鰭が淡褐色を呈し、臀鰭軟条数が13～14（バショウトビウオでは胸鰭は黒色を呈し、臀鰭軟条数は11～12）であることにより識別される。幼魚は下顎にひげをそなえる。バショウトビウオ同様、メスはオスよりも大きく、オスと比較して極端に個体数が少ないことが知られる（塚原・塩川、1957；加藤ほか、2008）。内之浦湾においては定置網により時折漁獲されるが、その数はバショウトビウオと比較して著しく少ない。最大でも体長20 cm程度の小型種であり、食用に供されることはほとんどないものと思われるが、出汁の原料などとしての利用も考えられる。（畑 晴陵）

ツマリトビウオ属 *Parexocoetus mento* (Valenciennes, 1847)

バショウトビウオ 珍しさ ★★

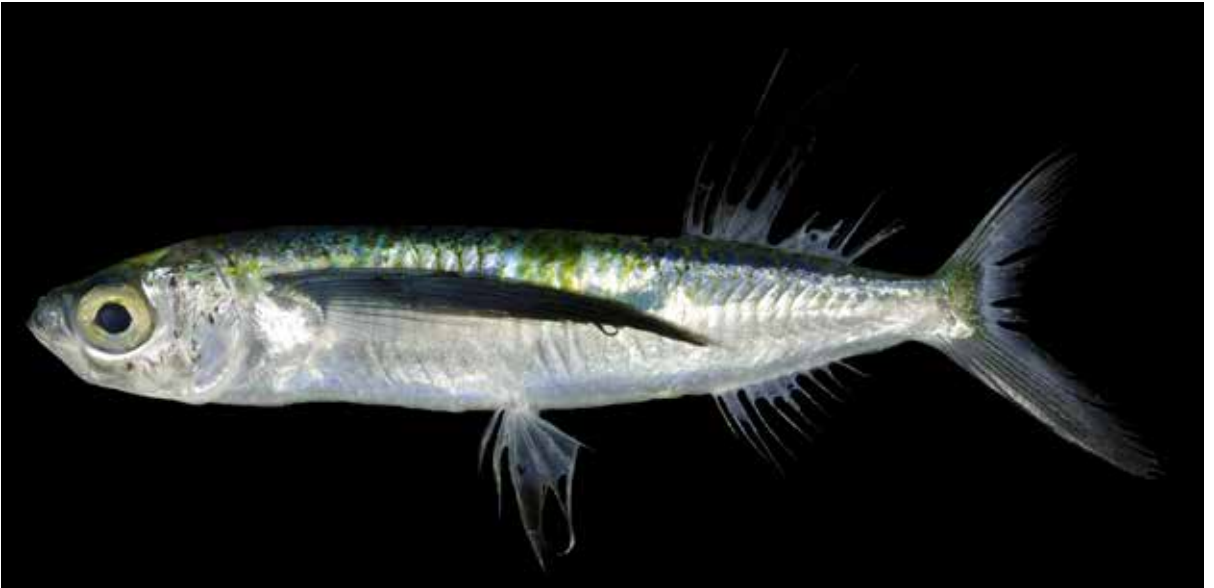


■ バショウトビウオ *Parexocoetus mento* KAUM-I. 52517, 103.1 mm SL

【解説】背鰭は高く、黒色を呈し、胸鰭は短く、臀鰭基底後端に達せず、一様に黒色。鮮度の良い個体では体側上部は一様に鮮やかな緑がかった青色を呈する。ツマリトビウオ属魚類の幼魚の多くは下顎にひげをもつとされているが、本種の幼魚にはひげがなく、下顎がサンマの様に突出することが知られている（塚原・塩川、1957）。天草諸島近海においては5月から9月にかけて成魚が出現し、寿命はほぼ1年であることが報告されているが（塚原・塩川、1957）、内之浦湾においては通年、体長7～10 cm程度の個体が定置網によって得られる。小型甲殻類をおもな餌とする。幼魚は摂餌の際には胸鰭を使って後退することが可能であり、他のトビウオ類には見られない動きである（岡、2011）。最大でも体長20 cmに達しない小型種のため、食用に利用されることはほとんどない。（畑 晴陵）



■ バショウトビウオ *Parexocoetus mento* KAUM-I. 110117, 69.4 mm SL



■ バショウトビウオ *Parexocoetus mento* KAUM-I. 94359, 85.0 mm SL



■ バショウトビウオの胸鰭内側 (KAUM-I. 94359, 85.0 mm SL)

ハマダツ属 *Ablennes hians* (Valenciennes, 1846)

ハマダツ 珍しさ ★



■ ハマダツ *Ablennes hians* KAUM-I. 94415, 529.1 mm SL



■ ハマダツ *Ablennes hians* KAUM-I. 110722, mm SL

【解説】体は細長い、内之浦湾で漁獲される他のダツ科魚類と比較して体高が高い。体側には暗色横帯が多数はいるが、不明瞭な個体も多い。背鰭の後部が黒い。日本各地に広く分布する。全長 1.2 m ほどに成長する。岸近くの水面付近を単独または数個体の群れで遊泳し、魚類をおもな餌とする。内之浦湾では定置網で頻繁に漁獲されるが、他のダツ類と同様、利用されることは少なく、ほとんどが投棄される。(畑 晴陵)

ダツ属 *Strongylura anastomella* (Valenciennes, 1846)

ダツ 珍しさ ★★★



■ ダツ *Strongylura anastomella* KAUM-I. 86397, 795.0 mm SL

【解説】体と両顎は細長く、著しく伸長する。体は一様に銀白色を呈し、体背面は緑色。両顎は赤色。北海道から九州南岸にかけて分布する。最大で全長 1 m に達する。ダツ類は走光性が知られており、ダツが夜間潜水中のダイバーの水中ライトや船から水面を照らした漁師に向かって突進し、突き刺さる事故が日本国内でも多数起きている(名護海上保安署、2014)。内之浦湾ではたまに定置網に入る。(畑 晴陵)

テンジクダツ属 *Tylosurus acus melanotus* (Bleeker, 1850)

テンジクダツ 珍しさ ★★★★★



■ テンジクダツ *Tylosurus acus melanotus* KAUM-I. 1501, 542.0 mm SL



■ 水揚げされたテンジクダツ *Tylosurus acus melanotus* (2006年11月22日撮影)

【解説】背鰭は24～27軟条。尾柄部に青色の隆起線がある。第1鰓弓に鰓耙がない。オキザヨリに酷似するが、テンジクダツの鰓蓋には暗青色の横帯がないことで識別できる。下顎先端に角上突起物があることが多い。インド・太平洋の暖海に広く分布し、日本国内では青森県から屋久島・口永良部島にかけて広く分布することが知られる。内之浦湾では定置網により漁獲されるが、稀である。本調査においては、2007年11月22日に漁獲された個体の写真が確認されたのみ。内之浦においては他のダツ類同様、利用されることはほとんどないが、肉質はよいとされ、東南アジアでは食用に供される (Collette, 1999; Musikasinthorn, 2013)。(畑 晴陵)

テンジクダツ属 *Tylosurus crocodilus crocodilus* (Pèlon & Lesueur, 1821)

オキザヨリ 珍しさ★★



■ オキザヨリ *Tylosurus crocodilus crocodilus* KAUM-I. 77491, 344.1 mm SL



■ オキザヨリ *Tylosurus crocodilus crocodilus* KAUM-I. 56762, 287.8 mm SL

【解説】体は細長く、伸長する。鰓蓋骨前部に暗青色の横帯がはいる。体長60 cm以上の大型個体では上顎後方の歯は前方に湾曲する。尾柄部に青色の隆起線がある。生時、体は一様に銀白色を呈し、体背面は緑色を呈するが、死後、急速に青色を経て黒色へと変化する。世界中の暖海に分布し、日本国内では津軽海峡以南の日本各地に分布する。体長1.3 m程度に成長する。沿岸付近の浅所で水面付近を単独または数個体の群れで泳ぎまわり、小魚を餌とする。釣針にかかるると水面を跳ねながら暴れる。内之浦湾を含む鹿児島県内各地で定置網により漁獲される。不味ではないものの、骨にビリベルジンを多く含み、肉が緑色に見えることから食用魚としての人気が低く、利用されることは稀で、漁獲された個体のほとんどが投棄される。(畑 晴陵)

サンマ属 *Cololabis saira* (Brevoort, 1856)

サンマ 珍しさ ★★★



■ サンマ *Cololabis saira* KAUM-I. 98026, 278.4 mm SL



■ サンマ *Cololabis saira* KAUM-I. 68411, 303.7 mm SL

【解説】 体は側扁し、刀状。体は一様に銀白色を呈し、体背面は濃青色。下顎の先端は黄色。北太平洋に広く分布し、日本では北海道から屋久島にかけて分布する。体長 35 cm。日本においては食用魚として非常に重要で、北海道から東北において大量に漁獲される。しかし近年は、国内における漁獲量の減少が著しく、2016年の国内漁獲量は11万4000トンと過去最低を記録しているが、これの原因には海水温の上昇による魚群の移動や、外国籍船との競合なども理由として挙げられ、資源動向は不明瞭である。焼き魚のほか、新鮮なものは生食も美味である。分布域の南部である三重県や和歌山県などでは干物や燻製、押し寿司などに加工される。鹿児島県では冬から春にかけて時折漁獲されるものの、他の海域で漁獲されたものと比べて脂肪分に乏しく、食用に供されることはほとんどない。(畑 晴陵)



■ 市場に並ぶサンマ (2011年2月22日撮影)

ハチ属 *Apistus carinatus* (Bloch & Schneider, 1801)

ハチ 珍しさ ★

■ ハチ *Apistus carinatus* KAUM-I. 63882, 71.9 mm SL■ ハチ *Apistus carinatus* KAUM-I. 69092, 48.9 mm SL

【解説】背鰭棘部の後半に白く縁取られた大きな黒斑がある。胸鰭は長く、尾柄部に達する。胸鰭の最下部には長い遊離軟条があることや、下顎に2対のひげがあることも特徴。小さい種で、大きくとも体長12 cmほど。背鰭の棘には毒腺があり、体は小さくとも刺されるとかなり痛むので定置網漁獲物の選別者からは毛嫌いされている。この刺されると痛い毒腺をもつことから、「蜂」にちなみハチの和名となったとされる。水深100 m以浅の沿岸の砂底・砂泥底に生息している。温帯性の種で、国内では茨城県～九州南岸の太平洋沿岸、新潟県～九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、屋久島、東シナ海大陸棚域、小笠原諸島（稀）に分布する。刺されると危険なため、内之浦漁港では選別されて投棄される。（小枝圭太）

カサゴ属 *Sebastes albofasciatus* (Lacepède, 1802)

アヤマカサゴ 珍しさ★★



■ アヤマカサゴ *Sebastes albofasciatus* KAUM-I. 98053, 174.2 mm SL

【解説】頬部に棘があること、胸鰭が16～18軟条であること、生鮮時には赤色の地色に黄色の虫食い状の斑紋があることが特徴。背鰭の基底部に数個の白斑がある。水深110～210 m（通常150 m付近）のやや深場に生息するため、釣りで漁獲されたもののほとんどは眼が飛びでた状態で市場に並ぶ。国内では岩手県角ノ浜以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、屋久島沖、口永良部島（木村ほか、2017）、東シナ海大陸棚縁辺域に分布する。内之浦漁港では釣りによる水揚げがあり、後述のウツカリカサゴと一緒に市場に並ぶ。定置網で漁獲されることはない。味は良いとするものも悪いとするものもあり、好みが分かれるようである。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶアヤマカサゴ
（2015年6月17日撮影）

カサゴ属 *Sebastiscus marmoratus* (Cuvier, 1829)**カサゴ** 珍しさ★■ カサゴ *Sebastiscus marmoratus* KAUM-I. 98051, 155.1 mm SL

【解説】体は赤茶、茶色、暗赤色で、体側に不明瞭な小白点が散在する（小白点には縁どりが無い）、胸鰭が17～19軟条であることなどで、似たウツカリカサゴと識別される。卵胎生。なわばりもち、あまり動かずに近寄ってきた甲殻類や小型魚類などを、とりわけ夕刻から夜にかけて捕食する。水深2～43 mのサンゴ・転石帯・砂地・砂泥底の石の周辺、岩礁域に生息する。国内では北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、口永良部島（木村ほか、2017）、八丈島および瀬戸内海に分布する。内之浦漁港では本種を対象とした釣り漁がおこなわれており、周年に渡り水揚げされる。幼魚はやや稀に定置網で得られる。釣り魚として人気の魚で、旬は冬から春とされるが、年中美味で唐揚げ、煮つけ、刺身、鍋物などで食される。武骨な頭部、大きな口、赤い体色など、その豪壮な風貌のため、江戸時代には端午の節句に、武士の家で祝魚に使ったという。

(小枝圭太)



■ カサゴの幼魚 (KAUM-I. 98003, 37.5 mm SL)

■ 市場に並ぶカサゴ
(2017年1月11日撮影)

カサゴ属 *Sebastiscus tertius* (Barsukov & Chen, 1978)

ウツカリカサゴ 珍しさ★★



■ ウツカリカサゴ *Sebastiscus tertius* KAUM-I. 98052, 168.8 mm SL

【解説】前出のアヤマカサゴ、カサゴに似るが、体側に明瞭なふちどりのある白色点が散在すること、胸鰭が18～20軟条であることなどにより両種と識別される。アヤマカサゴと同様に、水深60～940m（通常150mまで）の深場に生息していることから、釣りで漁獲された際は眼が飛び出し、口が大きく開いた状態で市場に並ぶ。国内では従来、青森県津軽海峡～宮崎県の太平洋沿岸、若狭湾、山口県日本海沿岸、長崎県五島列島南西沖から東シナ海中部の大陸棚縁辺域、および口永良部島（木村ほか、2017）に分布するとされており、今回の報告で鹿児島県の太平洋沿岸にも分布していることが示された。最大で体長37cmと、アヤマカサゴやカサゴより大きくなるため、様々な料理に利用される。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶウツカリカサゴの多くは眼が飛び出している（2016年1月22日撮影）

メバル属 *Sebastes* sp.**メバル属の一種**

珍しさ ★★★★★

■ メバル属の一種 *Sebastes* sp. (2004年4月28日撮影)

【解説】2004年4月に1個体のみ採集された写真の個体は、胸鰭に欠刻がなく、頬に棘がないというメバル科の特徴をもつ。また、胸鰭下部軟状は肥厚しない、眼窩下縁に棘がないなどの特徴によりメバル属魚類であると判断した。ただし、体長が3 cm程度と非常に小さく、標本も残っていないため種の同定はできなかった。内之浦から得られている唯一のメバル属魚類である。メバル属は寒い海に生息する種が多く、内之浦のような九州太平洋沿岸の暖かな海からの記録はほとんどない。今後、標本が得られることを期待したい。(小枝圭太)

ノコギリカサゴ属 *Brachyterois serrulata* (Richardson, 1846)

ノコギリカサゴ 珍しさ ★★★★★



■ ノコギリカサゴ *Brachyterois serrulata* KAUM-I. 98164, 65.5 mm SL

【解説】 巨大な胸鰭と毒のある背鰭をもつミノカサゴ亜科の魚である。ノコギリカサゴ属は胸鰭の上部の鰭条が分枝し、鰭膜が切れ込まないことがミノカサゴ属と異なる。本種はこのなかでも比較的、胸鰭が小さい。下顎腹面に鋸歯状の隆起線があることが特徴。Kanayama and Amaoka (1981) により日本国内から初めて報告され、従来は土佐湾および東シナ海北東部大陸棚から記録されていたが、今回、内之浦湾で写真の標本が得られたことにより九州太平洋沿岸にも分布することが確認された。(小枝圭太)

ヒメヤマノカミ属 *Dendrochirus bellus* (Jordan & Hubbs, 1925)

ヒメヤマノカミ 珍しさ ★★★★★



■ ヒメヤマノカミ *Dendrochirus bellus* KAUM-I. 74754, 51.8 mm SL

【解説】ヒメヤマノカミ属は胸鰭の上部の鰭条が分枝し、鰭膜が切れ込まないことがミノカサゴ属と異なる。本種はよく似た同属のシマヒメヤマノカミと、生鮮時に胸鰭と腹鰭に多くの赤色横帯があることや頭部の棘と骨質隆起の縁がなめらかであることにより識別される。背鰭棘に強い毒があるため、扱いには注意が必要。ミノカサゴ亜科の魚の多くは底生性であり、多くの場合、海底や壁、岩の裏側などに張り付くように静止している。稀に餌を捕食するために浮かび上がる。本種は国内において千葉県館山以南の太平洋沿岸、島根県から九州北西岸の日本海沿岸、東シナ海中央部大陸棚域に分布する。内之浦漁港では背鰭の毒のため、選別して投棄されており、市場には出ない。(小枝圭太)

ヒメヤマノカミ属 *Dendrochirus brachypterus* (Cuvier, 1829)

シマヒメヤマノカミ 珍しさ ★★★



■ シマヒメヤマノカミ *Dendrochirus brachypterus* KAUM-I. 69073, 103.1 mm SL

【解説】ヒメヤマノカミによく似るが、生鮮時に腹鰭に茶色に黒点列のある横帯が多くある、頭部の棘と骨質隆起の縁が鋸歯状であることにより識別される。背鰭に強い毒があるため、扱いには注意が必要。水深2～80mの転石帯やその周辺の砂地、あるいは潟湖の岩礁付近に生息している。国内では千葉県館山、高知県柏島、山口県日本海沿岸、瀬戸内海西部、屋久島～宮古諸島の琉球列島からの記録があり、今回の報告により九州太平洋沿岸にも分布していることが確認された。内之浦漁港では背鰭の毒のため、選別して投棄されており、市場に並ぶことはない。内之浦湾で得られる個体の多くが、体の後半部に複数の腫瘍をもつ。これはセトミノカサゴで知られているのと同様に(長澤・上野、2016)、カイアシ類のタマコブムシによる寄生が原因と考えられる。(小枝圭太)



■ シマヒメヤマノカミ KAUM-I. 60882, 51.5 mm SL

ヒメヤマノカミ属 *Dendrochirus zebra* (Cuvier, 1829)

キリンミノ 珍しさ ★★★



■ キリンミノ *Dendrochirus zebra* KAUM-I. 71266, 117.7 mm SL

【解説】本種は、吻端に3本の皮弁があり、眼上皮弁が長くて顕著、臀鰭が6～7軟条であることなどが特徴。琉球列島ではハナミノカサゴと並び最もよくみるミノカサゴ亜科魚類で、岩や塊状サンゴの裏でじっと動かないことが多い。多いときは1つの塊状サンゴに5～6個体が棲みついていることもある。背鰭棘に強い毒があるため、扱いは注意が必要。動かないときは背鰭をたたんでいるが、危機が迫ると大きな胸鰭を広げると同時に背鰭を立てて、棘を相手に向ける。水深73m以浅のサンゴ礁・岩礁域に生息する。国内では従来、千葉県館山～宮崎県の太平洋沿岸、八丈島、小笠原諸島、屋久島～宮古諸島の琉球列島、宇治群島に分布するとされてきたが、今回の報告で鹿児島県の太平洋沿岸にも広く分布していることが確認された。一般的に食用にはされない。背鰭の棘を切り落とし、丸ごと鍋物にして食したところ、身は淡白で悪くないが、やや旨味に欠けていた。内之浦漁港では稀に定置網には入るが他のミノカサゴ亜科と同様に毒のある背鰭棘のために投棄されている。(小枝圭太)

マツバラカサゴ属 *Neomerinthe erostris* (Alcock, 1896)

ヤブサメカサゴ 珍しさ ★★★★★

【解説】本種は森下・本村(2018)により内之浦湾産を含む標本に基づき、日本初記録として報告された。主上顎骨側面中央に1本の隆起線があることが特徴で、和名に含まれる「ヤブサメ」は、この特徴が的を射抜く矢を連想させることに因む。本種はインド・西太平洋に広く分布し、国内からは内之浦湾、薩摩半島西岸野間池沖、西表島南方、沖縄舟状海盆南部(久米島と宮古島の中間、および尖閣諸島東方)のみから記録がある。鹿児島県本土は本種の分布北限。これまで内之浦からは2標本(KAUM-I. 29096、体長39.8mmとKAUM-I. 60141、体長41.6mm)が得られている。(小枝圭太)



■ ヤブサメカサゴ *Neomerinthe erostris* KAUM-I. 60141, 41.6 mm SL

セトミノカサゴ属 *Parapterois heterura* (Bleeker, 1856)

セトミノカサゴ

珍しさ ★

(解説は次ページ)



■ セトミノカサゴ *Parapterois heterura* KAUM-I. 29068, 83.9 mm SL

【解説】内之浦漁港でもっとも頻繁にみられるミノカサゴ亜科で、頭部が大きく、体高がやや低いアンバランスな体形をもつ。眼下骨域や前鰓蓋域に小棘が密に分布することが特徴。成魚では胸鰭上下の1、2本の軟条が糸状にのびる。背鰭棘に強い毒があるため、扱いには注意が必要。生息水深がやや深く、水深20～300mの砂泥底に棲む。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、兵庫県浜坂、山口県下関、長崎県橘湾、瀬戸内海（稀）、東シナ海大陸棚域、沖縄島（稀）に分布する。内之浦漁港では背鰭の毒のため、選別して投棄されており、水産物としての利用はされない。底生性である彼らが頻繁に定置網に入るのは、網に入った小魚を貪欲な食性で追って、浮いてくるからであろうか。内之浦湾で得られる個体の多くが体に複数の腫瘍をもっており、つぶすと黒い液体がでるが、これはカイアシ類であるタマコブムシが寄生しているためという（長澤・上野、2016）。（小枝圭太）

ミノカサゴ属 *Pterois lunulata* Temminck & Schlegel, 1843

ミノカサゴ 珍しさ★★



■ ミノカサゴ *Pterois lunulata* KAUM-I. 10955, 216.0 mm SL

【解説】非常に大きな胸鰭をもつ種で、胸鰭の各鰭条の先端までヒラヒラとした鰭膜がある。体は淡いオレンジ色や桃色で、褐色の横帯が数多くはいる。頭部腹面と胸部は白く、模様がないことでハナミノカサゴと識別される。また、背鰭と臀鰭の軟条部、尾鰭にほとんど斑紋がないこともハナミノカサゴとの識別点のひとつ。観賞魚として人気の高い魚で、胸鰭を広げてゆったりと泳ぐ様は美しいが、背鰭と臀鰭と腹鰭の棘には毒があるので注意が必要。肉食性の強い魚で、眼の前の素早く泳ぐ魚も一気に飛びついて丸呑みにする。内之浦では定置網のなかで暴食したのであろう腹が餌で膨れ上がった個体がしばしば水揚げされる。日本国内では琉球列島と小笠原諸島を除くほぼ全域に分布する。内之浦でもよく定置網で漁獲され、その頻度はハナミノカサゴより多い。

（小枝圭太）



■ 腹が膨れ上がったミノカサゴ
（2006年7月27日撮影）

ミノカサゴ属 *Pterois volitans* (Linnaeus, 1758)

ハナミノカサゴ 珍しさ★★★★

■ ハナミノカサゴ *Pterois volitans* KAUM-I. 98085, 260.0 m SL

【解説】頭部腹面および胸部に茶褐色の縞模様があること、背鰭と臀鰭と軟条部および尾鰭に明瞭な黒褐色斑が散在することが特徴。蝶の羽のような大きな胸鰭をもち、各鰭条にはひらひらと揺れる鰭膜がある。背鰭と臀鰭と腹鰭の棘には強力な毒があり、特に大型個体は刺されると激しく痛むので注意が必要。食欲旺盛で、口に入る魚類なら次々と丸呑みにする。捕食の際、胸鰭を広げ、口から海水を吹きかけながら獲物ににじり寄る行動が報告されている (Albins and Lyons, 2012)。本来はインド・太平洋にのみ分布する本種であるが、アメリカ南東部のフロリダ半島沿岸に持ち込まれて以降、カリブ海において個体数が爆発的に増加している。強力な背鰭の棘と毒により、本種を捕食できる魚類がほとんどいないことや、在来生物を次々と捕食してしまう生態から、同海域における代表的な侵略的外来種となっている。これらはダイバーによる駆除作業に加えて、食用として利用する試みもおこなわれている。浅場の岩礁域やサンゴ礁域に生息するが、漁港など波の静かな人工構造物の周囲でとりわけ多い。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、富山県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島、八丈島、小笠原諸島に広く分布する。内之浦ではかなり稀で、棘の毒が危険なため、利用されずに投棄されている。(小枝圭太)



■ ハナミノカサゴの胸鰭内側 (KAUM-I. 98085)

ミノカサゴ属 *Pterois* sp.

ミノカサゴ属の一種

珍しさ ★★★★★



■ ミノカサゴ属の一種 *Pterois* sp. KAUM-I. 98031, 104.1 mm SL

【解説】頭部の縞模様が腹面に達しないことや、腹鰭に白色斑が散在することから *Pterois russellii* Bennett, 1831 によく似るが精査が必要。単独で沿岸の泥底域や砂底域に生息する。西太平洋に広く分布することが知られるが、国内での分布は不明。本調査においては1個体のみが得られている。(小枝圭太)



■ ミノカサゴ属の一種 *Pterois* sp. の胸鰭内側 (KAUM-I. 98031)

フサカサゴ属 *Scorpaena miostoma* Günther, 1877

コクチフサカサゴ

珍しさ ★★★



■ コクチフサカサゴ *Scorpaena miostoma* KAUM-I. 71449, 83.6 mm SL (上), KAUM-I. 57301, 39.3 mm SL (下)

【解説】最大でも体長 13 cm ほどの小さな種で、体は低く、背鰭棘部前部が盛り上がらない、側線が胸鰭上方でゆるやかに下降する、口がやや小さいことなどが特徴。オスは背鰭棘部に大きな黒斑があることから、写真の2個体はいずれもオスであると考えられる。背鰭棘に毒があるため、扱いには注意が必要。卵生と考えられており、肉食性。水深 45 m より浅い砂地・砂泥域やそこに点在する岩や岩礁域に生息する。国内では従来、千葉県外房～宮崎県の太平洋沿岸、富山湾～山口県の日本海沿岸、大阪湾、瀬戸内海西部に分布するとされてきたが、今回の報告で鹿児島県の太平洋沿岸にも広く分布することが確認された。内之浦漁港では体長 10 cm に満たないやや小型の個体のみが定置網で混獲されており、他の混獲物とともに養殖魚の餌となっている。(小枝圭太)

イソカサゴ属 *Scorpaenodes evides* (Jordan & Thompson, 1914)

イソカサゴ 珍しさ ★★



■ イソカサゴ *Scorpaenodes evides* KAUM-I. 63691, 40.7 mm SL

【解説】最大でも8 cm ほどのかなり小さな種で、頬の縦走隆起に2棘がある、下鰓蓋骨上に暗色斑が1つあることなどで他のイソカサゴ属と区別される。背鰭棘には弱い毒があり、刺されると少し痛い。肉食性で、浅海の岩礁域やサンゴ礁域の岩陰に潜む。潮だまりにも多い。国内では青森県三沢～鹿児島県内之浦湾の太平洋沿岸、秋田県～九州北西岸の日本海沿岸（少ない）、大阪湾、八丈島、小笠原諸島、屋久島～与那国島までの琉球列島、宇治群島にかけて広く分布する。内之浦漁港では体長10 cmに満たないやや小型の個体のみが定置網で混獲されており、他の混獲物とともに養殖魚の餌となっている。（小枝圭太）

オニカサゴ属 *Scorpaenopsis neglecta* Heckel, 1839

サツマカサゴ 珍しさ ★★★★★



■ サツマカサゴ *Scorpaenopsis neglecta* KAUM-I. 1475, 91.5 mm SL



■ サツマカサゴの胸鰭内側 (KAUM-I. 1475)



■ 冷凍前のサツマカサゴ (KAUM-I. 40447)

【解説】 ごつごつした体に頭部の棘がよく発達するオニカサゴ属に含まれる。胸鰭内側は黄色い、胸鰭基部に数個の黒斑がある、その外縁には黒色帯がある、頭部の各棘は普通鋸歯状である、吻が長いなどの特徴をもつ。体色は変異に富む。背鰭棘に強い毒があるため、扱いには注意が必要。浅場の岩礁域、転石帯、砂底域などで静止して待ち伏せ、甲殻類や魚類をひと呑みにする。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、山口県から九州北西岸の日本海沿岸、大阪湾、屋久島から与那国島までの琉球列島に分布する。大きい個体でも体長 20 cm ほどだが、幅が広く、可食部が多いため食用にされる。煮付や刺身で美味という。(小枝圭太)

オニカサゴ属 *Scorpaenopsis venosa* (Cuvier, 1829)

ヒュウガカサゴ 珍しさ ★★★★★



■ ヒュウガカサゴ *Scorpaenopsis venosa* KAUM-I. 43916, 75.1 mm SL

【解説】 オニカサゴ属のなかでも背鰭起部付近の体背縁が盛り上がらないグループで、後頭窩は大きく凹む、その前縁の隆起が背面からみて直線かあるいは前方に湾入することが特徴。体長は最大で 17 cm ほど。背鰭に強い毒があるため、扱いには注意が必要。2004 年に本書の編者の一人である本村浩之氏により標準和名が与えられた種である(本村ほか、2004)。国内では従来、和歌山県串本、土佐湾、宮崎県、屋久島に分布するとされており、内之浦漁港から標本が得られたことにより、九州太平洋沿岸に広く分布していることが確認された。内之浦漁港では体長 7.5 cm ほどの小型個体しか得られていない。(小枝圭太)

ダルマオコゼ属 *Erosa erosa* (Cuvier, 1829)

ダルマオコゼ

珍しさ ★★★★★



■ ダルマオコゼ *Erosa erosa* KAUM-I. 101851, 112.8 mm SL

【解説】 体は丸みを帯び、後頭窩は大きく凹む。体色は赤褐色や茶色、黄色など、変異に富む。背鰭棘には毒があり、刺されると激しく痛む。内之浦湾においては稀であり、写真の個体は2017年1月13日に定置網によって漁獲された。食用として利用されることはないものと思われる。日本からオーストラリア北岸、ニューカレドニアにかけての西太平洋に分布する。日本国内においては千葉県以南の太平洋沿岸、島根県以南の日本海・東シナ海沿岸に広く分布するが、琉球列島からの記録はない。(畑 晴陵)



■ ダルマオコゼの頭部 (KAUM-I. 101851)

オニオコゼ属 *Inimicus japonicus* (Cuvier, 1829)**オニオコゼ** 珍しさ ★★★★★■ オニオコゼ *Inimicus japonicus* KAUM-I. 98025, 175.0 mm SL■ オニオコゼ *Inimicus japonicus* KAUM-I. 65161, 146.9 mm SL

【解説】体は茶色がかかる個体が多いが、赤や紫がかかる個体もあり、全身黄色の個体も稀に出現することが報告されている（太田、2008）。成熟したオスは頭部背面を除いて全身が灰白色に変化するとされる（門村、2001）。背鰭棘には毒があり、刺されると激しく痛む。国内では広島県からのみ記録あるセトオニオコゼ *Inimicus joubini*（本書未掲載）とは胸鰭の下から3と4番目の軟条間の鰭膜が切れ込まない（セトオニオコゼでは切れ込む）、体背縁が背鰭起部付近で盛り上がらない（著しく盛り上がる）ことで識別できる（Eschmeyer, 1979；中坊・甲斐、2013b）。岩礁や砂底に生息し、ニシン科やテンジクダイ科、アジ科などの魚類をおもに捕食する（小川ほか、2012）。天草近海における産卵期は夏であり、分離浮性卵を産む（藤田・中原、1955；小川ほか、2012）。高級魚として知られ、日本各地で盛んに漁獲されるが、瀬戸内海では激減し、沿岸の各府県で養殖が進められている（太田、2006）。内之浦湾における漁獲は稀であり、また漁獲されても利用されることはほとんどない。（畑 晴陵）

ヒメオコゼ属 *Minous pusillus* Temminck & Schlegel, 1843

ヤセオコゼ 珍しさ ★★★★★



■ ヤセオコゼ *Minous pusillus* KAUM-I. 73973, 62.0 mm SL

【解説】 胸鰭下部に1本の遊離軟条がある。尾鰭には小黒色斑が散在し、背鰭軟条数は9～11。日本のほか、朝鮮半島南岸、台湾、中国南岸、フィリピン、およびニューカレドニアから記録がある。体表にはヒドロポリプの1種であるサカナウミヒドラが大量に寄生し、毛が生えたような状態である様子がよく観察される。サカナウミヒドラのポリプには有毒の刺胞があり、これを用いて身を守るためか、ヤセオコゼの鱗には毒腺がないことが知られている(田畑, 2000)。(畑 晴陵)



■ ヤセオコゼ KAUM-I. 89423, 40.8 mm SL



■ 飼育されたヤセオコゼ。全身を被うようにサカナウミヒドラが寄生している(2006年4月6日撮影)



■ ヤセオコゼの胸鰭内側 (KAUM-I. 89423)

ヒメオコゼ属 *Minous quincarinatus* (Fowler, 1943)**イトオコゼ** 珍しさ ★★★★★■ イトオコゼ *Minous quincarinatus* KAUM-I. 29094, 55.9 mm SL

【解説】胸鰭下部に1本の遊離軟条がある。ヤセオコゼに類似するが、イトオコゼは尾鰭に顕著な模様がなく（ヤセオコゼでは小暗色点が散在する）、背鰭軟条数が12～14であることにより（ヤセオコゼでは9～11）識別できる。東アジアの固有種であり、日本のほか、黄海、台湾、中国の広東省、および海南島からのみ記録がある。ヤセオコゼ同様、イトオコゼの体表にもヒドロポリプの1種サカナウミヒドラの寄生が報告されている（裕仁、1988；久保田、2008）。内之浦湾においては稀。（畑 晴陵）



■ イトオコゼの胸鰭内側（KAUM-I. 29094）

オニダルマオコゼ属 *Synanceia verrucosa* Bloch & Schneider, 1801

オニダルマオコゼ 珍しさ ★★★★★



■ 飼育されたオニダルマオコゼ *Synanceia verrucosa* (2007年9月撮影)

【解説】体の前部は縦扁し、尾柄部で側扁する。体全体が厚い皮膚に被われ、一様に瘤状の突起が密生する。体の地色は赤みがかった茶褐色を呈し、その上に不規則な緑がかった茶褐色の斑点が散在する。体表には藻が繁茂していることも多く、動かないと岩と見分けがつかない。突いたり、触れたりともほどの危機を感じても動くことはないが、餌を捕食するときだけはとても素早い。浅いサンゴ礁や岩礁に生息し、水深1mもないような潮だまりに出現することもある。背鰭棘には毒腺があり、ここからタンパク質性毒素を分泌する。この毒素はネオベルコトキシン (Neoverrucotoxin) と呼ばれ、刺毒魚の分泌する毒素の中でも極めて毒性の強いものである (Ueda et al., 2006 ; 永井, 2009)。本種に刺されたとみられる死亡事故が沖縄県内で1983年と2010年に計2件確認されている (日本経済新聞、2010a)。内之浦湾においては極めて稀であり、2007年9月に写真の1個体が確認されたのみ。この個体は生きた状態で捕獲されたため、しばらくの間、いおワールドかごしま水族館で飼育されていた。(畑 晴陵)

ハオコゼ属 *Paracentropogon rubripinnis* (Temminck & Schlegel, 1843)**ハオコゼ** 珍しさ★★■ ハオコゼ *Paracentropogon rubripinnis* KAUM-I. 69104, 42.6 mm SL■ ハオコゼ *Paracentropogon rubripinnis* KAUM-I. 71435, 45.1 mm SL

【解説】体は側扁し、体色は赤みがかかるものから黄色がかかるもの、茶褐色のものまで、変異に富む。背鰭棘部中央に黒色斑がある。体の前部は無鱗であり、後部の小鱗は皮膚下に埋没する。背鰭の棘に強い毒があり、刺されると激しく痛む。長島での産卵期は4月下旬から8月上旬であり、日没前後にペアで水底から上昇し、分離浮性卵を産むことが知られている（櫻井ほか、2003）。内之浦湾においては、定置網にたまに入る程度。最大でも体長10 cmに達せず、利用されることはない。（畑 晴陵）

アブオコゼ属 *Erisphex pottii* (Steindachner, 1896)

アブオコゼ 珍しさ ★★★



■ アブオコゼ *Erisphex pottii* KAUM-I. 98029, 32.3 mm SL



■ アブオコゼ *Erisphex pottii* KAUM-I. 29092, 33.0 mm SL

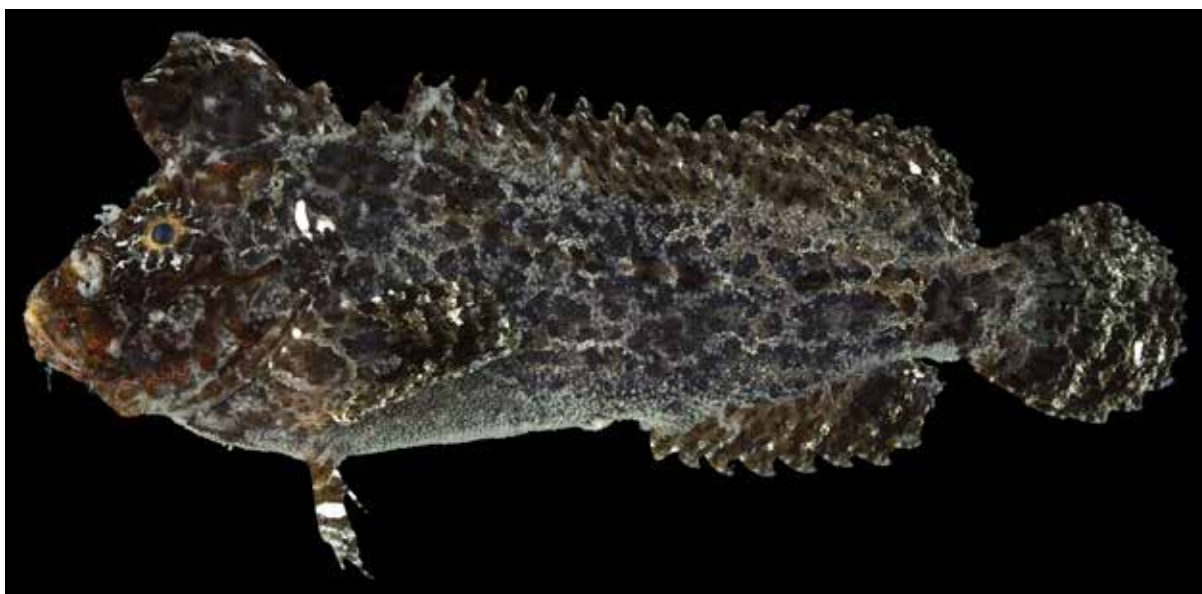
【解説】 最大でも9 cmほどの小型種。体は側扁し、側面は長円形。前鰓蓋骨には4棘がある。背鰭背縁は第3棘後方に深い欠刻がある。体表面に短い絨毛状棘が密生し、触るとザラザラしている。体色には変異があり、黒色素胞が密に分布するもの、一様に淡褐色を呈するもの、淡褐色の地に不規則な茶褐色の斑点が散在するものなどがある。青森県から九州南岸にかけての日本海・東シナ海・太平洋沿岸と、瀬戸内海に分布するが、琉球列島からは記録がない。国外では韓国、台湾、中国、およびニューカレドニアから記録がある。砂底に生息するとされ、内之浦においては稀に定置網で漁獲される。(畑 晴陵)



■ 飼育されたアブオコゼ（2008年4月6日撮影）

カゴシマオコゼ属 *Paraploactis kagoshimensis* (Ishikawa, 1904)

カゴシマオコゼ 珍しさ ★★★★★



■ カゴシマオコゼ *Paraploactis kagoshimensis* KAUM-I. 78171, 60.5 mm SL

【解説】腹鰭は1棘3軟条、背鰭起部は眼の中央上か、後方。体表面にいぼ状突起が密生する。体色には変異があり、黒色のものや、茶褐色のものなどが知られる。日本国外においては台湾、香港からのみ記録されている。国内では八丈島、徳島県、愛媛県、高知県、鹿児島県、および宮古島からのみ報告があり、極めて報告数の少ない魚である。カゴシマオコゼの和名と種小名の *kagoshimensis* は、タイプ産地が鹿児島であることに由来する。内之浦湾においても稀であり、写真の1個体が得られているのみ。（畑 晴陵）

ホウボウ属 *Chelidonichthys spinosus* (McClelland, 1843)

ホウボウ 珍しさ★



■ ホウボウ *Chelidonichthys spinosus* KAUM-I. 94398, 246.6 mm SL

【解説】ホウボウ科は円筒形の体に大きな胸鰭をもち、頭部が骨板で被われる。胸鰭の内面の色彩や模様が種によって異なるものが多い。本種は頬部に顕著な隆起線があり、体長が頭長の3倍程度であることなどが特徴。胸鰭の内面は縁辺部が鮮青色、内部は濃いウグイス色で青色斑が散在し、広げると蝶のようで美しい。体長は最大で40 cmほどになる。胸鰭の下部3軟条が遊離しており、これらを指のように動かして海底を這って餌を探す。オスは鰾（うきぶくろ）をつかってポーポーと鳴くことがあり、和名の由来ともいわれているが、由来には諸説あり詳細は不明。水深5～615 mの泥底や砂泥底に生息し、琉球列島と小笠原諸島を除くほぼ全域に分布している。釣りや定置網で周年漁獲される。上質の白身で味が良く、刺身でも鍋物でも美味。（小枝圭太）



■ ホウボウの胸鰭内側（KAUM-I. 94398）



■ ホウボウの幼魚（KAUM-I. 98077, 35.7 mm SL）

カナガシラ属 *Lepidotrigla guentheri* Hilgendorf, 1879**カナド** 珍しさ ★★★★★■ カナドの幼魚 *Lepidotrigla guentheri* KAUM-I. 69094, 24.4 mm SL

【解説】成魚は胸鰭遊離軟状先端が長く、腹鰭先端付近まで達し、背鰭第2棘が第1棘より著しく長いことが特徴。内之浦漁港で得られた2標本は体長が2～3 cmと小さい幼魚であったことから、背鰭棘の特徴をもたないものの、頭部の形状や長い遊離軟条の特徴から本種に同定された。水深60～350 mの貝殻や泥のまじる砂地に生息する。国内では青森県以南の太平洋沿岸、八丈島、東シナ海大陸棚域に分布する。内之浦漁港では幼魚が定置網で混獲されたのみで、大型個体は採集されていない。(小枝圭太)

カナガシラ属 *Lepidotrigla hime* Matsubara & Hiyama, 1932**ヒメソコカナガシラ** 珍しさ ★★★★★ (解説は次ページ)■ ヒメソコカナガシラ *Lepidotrigla hime* KAUM-I. 98070, 155.4 mm SL

【解説】吻棘が多くの小棘からなり、体に暗色斑点がないことが特徴。ソコカナガシラ（本書未掲載）に似るが、口が大きく、上顎後端が瞳孔前縁の真下に達することや、胸鱗の内側が濃青色で下方3軟条が透明であることなどで識別される。最大でも16 cmほどであり大きくない。水深47～357 mに生息し、国内では石川県能登半島、相模湾～土佐湾の太平洋沿岸、鹿児島湾、東シナ海大陸棚縁辺域から記録されていた。内之浦漁港では3個体が得られており、九州太平洋沿岸からの標本に基づく初めての記録となった。水揚げ量が少ないため、一般的に食用とされることはないものの、あっさりとした白身は味噌汁、煮つけ、唐揚げなどに良いという。（小枝圭太）

■ ヒメソコカナガシラの胸鱗内側（KAUM-I. 98070）



カナガシラ属 *Lepidotrigla japonica* (Bleeker, 1854)

トゲカナガシラ 珍しさ★★



■ トゲカナガシラ *Lepidotrigla japonica* KAUM-I. 98173, 161.2 mm SL

【解説】胸鱗は大きく、その後端が第2背鱗中央下をはるかに越えること、胸鱗内側が青色でふちどられ、その下側半分に大きな黒斑があり、その上方には黄緑色の地に青色の流状紋があることが特徴。甲殻類をおもに食べる。水深30～130 mの貝殻まじりの泥底域や砂底域に生息する。国内では岩手県～九州南岸の日本海・東シナ海沿岸と千葉県外房～九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海、奄美大島近海、東シナ海中部以南の大陸棚域に分布する。内之浦漁港においてホウボウ類は大型の個体のみ市場に並べられ、小型個体は他の混獲物とともに養殖魚の餌料となっている。（小枝圭太）



■ トゲカナガシラの胸鱗内側（KAUM-I. 98173）

カナガシラ属 *Lepidotrigla kishinouyei* Snyder, 1911

オニカナガシラ

珍しさ ★★★★★

■ オニカナガシラ *Lepidotrigla kishinouyei* KAUM-I. 83719, 155.4 mm SL■ オニカナガシラ *Lepidotrigla kishinouyei* KAUM-I. 98069, 155.4 mm SL

【解説】 吻棘が多くの小棘からなり、胸鰭の内側は下方に青白色点が散在する黒斑がある、最長吻棘が長いことなどで後述のカナガシラと区別される。水深 30 ~ 145 m の貝殻・泥まじりの砂底、砂まじりの泥底に生息する。国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県銚子以南の太平洋沿岸、瀬戸内海、東シナ海に広く分布する。本種の種小名 *kishinouyei* は日本における動物分類学の父、岸上鎌吉氏に献名したものであり、鹿児島市から得られた標本に基づき 1911 年に新種として記載された。(小枝圭太)



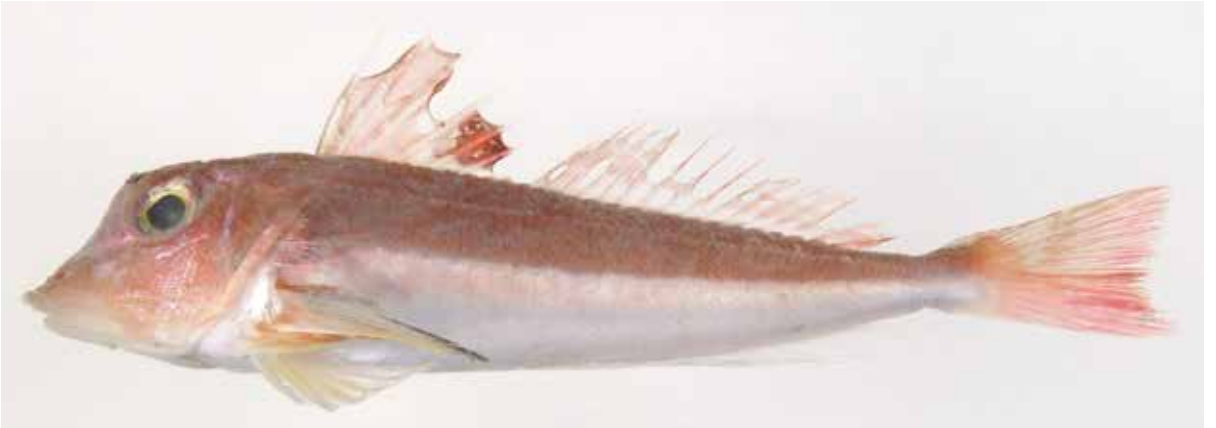
■ オニカナガシラの胸鰭内側 (KAUM-I. 98069)

カナガシラ属 *Lepidotrigla microptera* Günther, 1873

カナガシラ 珍しさ ★★★



■ カナガシラ *Lepidotrigla microptera* KAUM-I. 98068, 146.1 mm SL



■ カナガシラ *Lepidotrigla microptera* KAUM-I. 44874, 114.8 mm SL

【解説】吻棘が多くの小棘からなり、胸鰭の内側が一様に赤橙～赤色であること（変異も多い）が特徴で、吻突起は最外棘も含めてあまり発達しない。カナガシラ属の中では大型で、最大で体長 31 cm に達する。水深 20～340 m の貝殻まじりの泥や砂底域に生息し、国内では北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海に広く分布する。和名のカナガシラは頭部が非常に硬いことから「金頭」に由来する。江戸時代後期、天保の大飢饉に対する江戸幕府の悪政に激しく怒った大阪東町奉行の大塩平八郎が、カナガシラの硬い頭を感情の高ぶりのあまり噛み砕いて食べてしまったという逸話が残っている。（小枝圭太）



■ カナガシラの胸鰭内側（KAUM-I. 98068）

ソコホウボウ属 *Pterygotrigla hemisticta* (Temminck & Schlegel, 1843)**ソコホウボウ** 珍しさ ★★★★★■ 飼育されたソコホウボウ *Pterygotrigla hemisticta* (2004年1月22日撮影)

【解説】ホウボウ科のなかでも第2背鰭基底に骨質板がないグループで、第1背鰭に暗色斑があり、体側上部に暗色斑点が散在することが特徴。吻棘は1本の強大な牛角状の棘からなる。体長は最大で30 cmほど。水深10～600 mに生息し、国内では鹿島灘～土佐湾の太平洋沿岸、九州北岸、鹿児島湾、五島列島、宇治群島、東シナ海大陸棚縁辺～斜面域に分布する。内之浦で生きて得られた個体は、いおワールドかごしま水族館でしばらく飼育されたものの、標本は残っていない。写真による記録であるものの、内之浦湾から得られた個体は九州太平洋沿岸からの初めて記録となる。(小枝圭太)

イネゴチ属 *Cociella crocodilus* (Cuvier, 1829)

イネゴチ 珍しさ★★



■ イネゴチ *Cociella crocodilus* KAUM-I. 98081, 385.0 mm SL

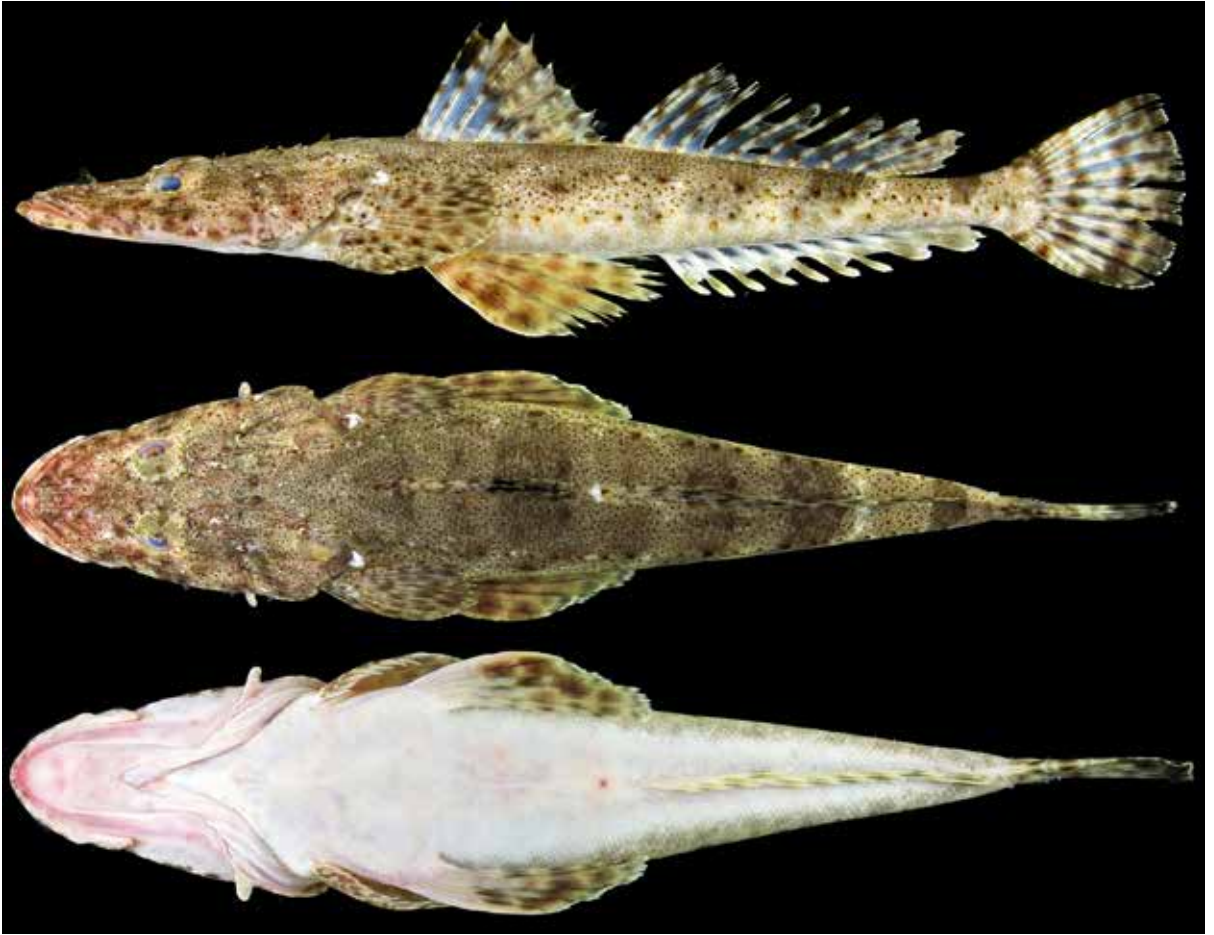
【解説】間鰓蓋部に皮弁を欠き、鰓耙は通常7本。側線前部の鱗には棘がある。体は茶褐色を呈し、焦げ茶色の小斑点が散在する。体側の斑紋にはかなりの変異があり、分類学的に混乱しているものと思われる（中坊・甲斐、2013c）。死後、体背面の色がまだらに抜けることが多い。青森県以南の日本各地に分布するが、琉球列島と小笠原諸島からの記録はない。東アジア固有種であり、日本以外では韓国、台湾から中国南岸にかけて分布する。雄性先熟の性転換をおこなうことが知られる（青山ほか、1963）。内之浦湾においては体長30 cm以上の比較的大きな個体が時折漁獲され、市場に並ぶことも多いが、小型個体の水揚げはみられない。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶイネゴチとマゴチ。上から2個体目と4個体目がイネゴチ。（2013年10月10日撮影）

トカゲゴチ属 *Inegocia ochiaii* Imamura, 2010

ワニゴチ 珍しさ★★★★

■ ワニゴチ *Inegocia ochiaii* KAUM-I. 102454, 304.8 mm SL

【解説】体背面は灰色がかった茶褐色を呈し、数本の焦げ茶色の横帯がはいる。ワニゴチの学名は長らく *Inegocia guttata* とされてきたが、Imamura and Yoshino (2009) により *I. guttata* は現在イネゴチに適用されている *Cociella crocodilus* の新参異名であることが明らかとなった。したがってワニゴチには適用すべき学名がない未記載種であることが判明し、その後、Imamura (2010) により、*I. ochiaii* として新種記載された。本種は千葉県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、福井県から長崎県にかけての日本海・東シナ海、および瀬戸内海から記録されているが、琉球列島からの記録はない。日本から中国の海南島にかけて分布する、東アジア固有種。水深 35 m 以浅の浅海域に生息するが、内之浦湾においては稀。(畑 晴陵)



■ ワニゴチ (2007年3月7日撮影)

アネサゴチ属
オニゴチ

Onigocia spinosa (Temminck & Schlegel, 1843)

珍しさ ★★★



■ オニゴチ *Onigocia spinosa* KAUM-I. 69106, 41.6 mm SL

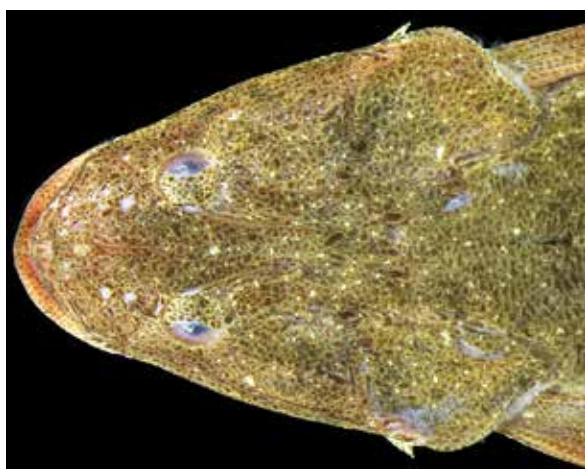
【解説】体には4本の暗色帯があることが特徴。水深120 m以浅に生息する(工藤、2011)。日本・朝鮮半島からオーストラリア北岸にかけての西太平洋に分布する。日本国内においては茨城県と新潟県から九州南岸にかけての太平洋、日本海・東シナ海沿岸、および瀬戸内海から報告されているが、琉球列島と小笠原諸島からは記録されていない。大隅半島においては、内之浦湾のほか、志布志湾からも報告がある(不破、1976)。内之浦湾においては定置網によりやや稀に漁獲されるが、体長10 cm程度の小型種であり、食用となることはない。(畑 晴陵)



■ オニゴチ *Onigocia spinosa* KAUM-I. 98065, 53.6 mm SL

マゴチ属 *Platycephalus* sp.**マゴチ** 珍しさ★★■ マゴチ *Platycephalus* sp. KAUM-I. 102455, 277.7 mm SL

【解説】体は著しく扁平で、体背面は暗い茶褐色を呈し、数本の褐色横帯がはいる。本種は長らく、若齢時はオスとして生殖行動をおこない、その後にメスに性転換をして生殖行動をおこなうものと考えられてきた。しかし、未成熟個体である体長 126 mm のメスの個体が確認されていること、満 1 歳の個体において性比がほぼ 1:1 であることなどから、雌雄異体（未成熟個体において既に性が決定されている）の種であることが確認されつつある（浜田・徳田、1997）。満 1 歳を越えるとメスの成長がオスと比べて著しく速いことが知られ、これが性転換をおこなうと誤解された一因と思われる。なお、「コチ」の名は、本種の扁平な体形が「笏（しゃく）」の異名「こつ」に似ていることに由来するとする説もある（打越、2008）。多数の個体が 1 列に並んで砂に潜ることが多い（京葉銀行、2005）。内之浦湾においては全長 30 cm 程度、あるいはそれよりも大きい個体が漁獲され、小型個体はみられない。高級魚として名高く、刺身や天ぷらなどにして極めて美味。（畑 晴陵）



■ マゴチの頭部（KAUM-I. 102455）



■ マゴチ *Platycephalus* sp. KAUM-I. 78170, 265.9 mm SL



■ マツバゴチ *Rogadius asper* KAUM-I. 55496, 99.9 mm SL

マツバゴチ属 *Rogadius asper* (Cuvier, 1829)**マツバゴチ** 珍しさ ★★★■ マツバゴチ *Rogadius asper* KAUM-I. 80887, 91.5 mm SL

【解説】前鰓蓋骨に前向きの大棘があることが特徴。背鰭、臀鰭、および尾鰭には暗色斑が散在する。胸鰭上部には小黒色斑が散在し、下部は黒色。日本、朝鮮半島から大陸沿いにベトナム南岸までと、オーストラリア北部に分布する。日本国内においては相模湾と秋田県から九州南岸にかけての太平洋、日本海・東シナ海から報告があるが、琉球列島と小笠原諸島には分布しない。雄性先熟の性転換をおこなうものとみられている（青山ほか、1963）。内之浦湾においては定置網により漁獲されるが、最大でも体長 15 cm 程度の小型種であり、食用となることはほとんどない。（畑 晴陵）



■ マツバゴチの頭部（2003年6月11日撮影）

■ 生きた状態で得られたマツバゴチ
（2006年5月25日撮影）

メゴチ属 *Suggrundus meerdervoortii* (Bleeker, 1860)

メゴチ 珍しさ ★



■ メゴチ *Suggrundus meerdervoortii* KAUM-I. 98014, 125.1 mm SL

【解説】体は黄土色を呈し、焦げ茶色の小斑点が散在する。第1背鰭後半部は黒色を呈し、腹鰭は暗褐色。前鰓蓋骨下縁に皮弁がある。後頭部の隆起線は鋸歯状を呈する。東アジアの固有種であり、日本のほか、朝鮮半島西岸・南岸、中国浙江省、および台湾から記録されている。日本国内においては青森から九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸にかけて広く分布し、近年は北海道南部からも記録されているが（小谷・今村、2009）、琉球列島と小笠原諸島からは記録されていない。雄性先熟の性転換をおこなうことが知られる（青山ほか、1963；Okada, 1966；藤井、1970）。内之浦湾においては個体数・頻度共に最も多く定置網に入るコチ科魚類と思われるが、最大でも体長20 cm程度の小型種であり、食用に供されることはほとんどない。釣り人の間では「メゴチ」とはネズップ科魚類に対する呼称であることが多く、混同に注意が必要。（畑 晴陵）



■ メゴチ KAUM-I. 83510, 115.1 mm SL



■ メゴチ *Suggrundus meerdervoortii* KAUM-I. 98055, 151.4 mm SL

クロシマゴチ属 *Thysanophrys celebica* (Bleeker, 1855)

セレベスゴチ 珍しさ★★★★



■ セレベスゴチ *Thysanophrys celebica* KAUM-I. 67755, 83.9 mm SL

【解説】 体背面から体側上部にかけては明るい茶褐色。体腹面は白色。同属のクロシマゴチ(本書未掲載)に類似し、セレベスゴチには眼上皮弁がある(クロシマゴチではない)ことなどにより、識別されるが、この皮弁は成長に伴い退縮することが知られ、体長 13 cm 程度で痕跡的な皮弁を有する個体が報告されている(松沼ほか、2016)。南アフリカからニューカレドニア、オーストラリア北部、日本にかけてのインド・西太平洋に広く分布し、国内では相模湾以南の太平洋沿岸と沖縄諸島伊江島から散発的に報告があるのみ。内之浦湾における漁獲は稀であり、松沼ほか(2016)により詳細に報告された写真の1個体(KAUM-I. 67755)が得られている。(畑 晴陵)

セミホウボウ属 *Dactyloptena gilberti* Snyder, 1909

オキセミホウボウ

珍しさ ★★★

■ オキセミホウボウ *Dactyloptena gilberti* KAUM-I. 21324, 141.3 mm SL

【解説】オキセミホウボウは、たまただ胸鰭は尾鰭基部を越える。体は縦扁し、断面は長方形に近い。頭部は硬い骨板に被われる。大きな胸鰭を水平に広げて海底を這うように移動する様子を真上から見ると、実際の体より何倍も大きい生物に見える。オキセミホウボウはセミホウボウに似るが、吻が比較的短いこと、臀鰭に黒色斑がないことで識別できる。また、オキセミホウボウは最大でも20 cm程度と小さい。国内での記録は散発的で、駿河湾、三重県、高知県上川口、山口県日本海沿岸、福岡県津屋崎、長崎県橘湾、鹿児島県秋目から記録がある。内之浦漁港では2個体（KAUM-I. 21324、体長14 cmとKAUM-I. 44880、体長8 cm）が得られており、九州の太平洋沿岸からの初めての記録である。セミホウボウ科魚類は体表の鱗が厚く、食用にされることはほとんどない。（小枝圭太）



■ オキセミホウボウの広げた胸鰭（KAUM-I. 21324）

■ オキセミホウボウの幼魚
(KAUM-I. 44880, 84.0 mm SL)

セミホウボウ属 *Dactyloptena orientalis* (Cuvier, 1829)

セミホウボウ 珍しさ ★★



■ セミホウボウ *Dactyloptena orientalis* KAUM-I. 71454, 210.6 mm SL

【解説】もっともよくみられるセミホウボウ科魚類で、最大で 35 cm まで成長する。胸鰭が極めて大きく、尾鰭にまで達する。背鰭の前方に 2 本の遊離棘があり、胸鰭を広げて海底を泳ぐ際には、長い第 1 背鰭棘をアンテナのように垂直に立てる。水深 57 ~ 145 m の砂泥底に生息し、北海道南部~九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸と瀬戸内海、東シナ海大陸棚域、小笠原諸島、沖縄島に広く分布している。沖縄島では水深 1 m ほどのごく浅い砂浜などでもみられる。食用になることもあるが、不味という。体が硬く、また胸鰭を広げた姿が美しいことから、剥製として飾られていることがある。(小枝圭太)



■ セミホウボウの背面
(2007 年 10 月 5 日撮影)

アカメ属 *Lates japonicus* Katayama & Taki, 1984

アカメ 珍しさ ★★★★★



■ アカメ *Lates japonicus* KAUM-I. 20658, 347.2 mm SL

【解説】体は銀白色で、光をあてると瞳がルビー色に輝き、美しい。和名はこの赤い瞳に由来する。頭部は眼の上でややくぼみ、尾柄が太く、尾鰭が丸いことが特徴で、河川に生息する魚類としては異様な迫力がある。おもに河口や内湾に生息するが、完全な淡水域にはみられない。魚食性が強く、河口などでボラなどを追う姿が目撃されている。釣りの対象種として釣り人たちの憧れの存在となっているが、分布が狭く、生息数も少ないため、各地で保護活動がおこなわれている。その一環として宮崎県では、2006年より本種の捕獲が禁止されている。日本固有種であり、高知県および宮崎県の沿岸に多く、静岡県、三重県、和歌山県、大阪府淀川河口、徳島県、愛媛県、大分県や鹿児島県でも散発的に確認されている（岩坪・大富、2015）。内之浦漁港では極めて稀で、2008年11月に写真の1個体が得られたのみ。50 cm 前後のものは美味であるが、1 m を越えると味が悪く、硬いとされる。（小枝圭太）



■ 活魚とされる大型のヒラスズキ *Lateolabrax latus* (2010年4月15日撮影；解説は次ページ)

スズキ属 *Lateolabrax japonicus* (Cuvier, 1828)**スズキ** 珍しさ ★★★★★■ 市場に並ぶスズキ *Lateolabrax japonicus* (2017年5月2日撮影)

【解説】体は緑がかった灰色を呈し、体背面は黒色、体腹面は銀白色。体側にはほとんど黒色斑がなく、ある場合も側線よりも上方に限られる。ロシアの沿海州から日本（琉球列島と小笠原諸島からは記録されていない）、朝鮮半島南部に分布する。身は淡泊な白身で、刺身や寿司にして極めて美味である。市場価格も高く、日本各地で養殖がなされている。東アジア固有種とされるスズキがシドニーから得られた記録もあるが、これは船舶のバラスト水に取り込まれて運搬された結果と考えられている (Paxton and Hoese, 1985)。スズキは鹿児島県ではヒラスズキと対比して「マルスズキ」と呼ばれる。成長に伴い呼称が変わる出世魚であり、鹿児島県においては体長 30 cm 程度までのものを「セイゴ」と称し、それよりも大型のものを「スズキ」とする。地方によっては中間サイズのものを「フッコ」と称することもある。スズキは鹿児島湾や薩摩半島においては多く漁獲されるほか、釣りの対象魚としても人気が高い。しかし、内之浦湾における漁獲は極めて稀であり、写真の個体の水揚げが確認されたのみ。(畑 晴陵)

スズキ属 *Lateolabrax latus* Katayama, 1957**ヒラスズキ** 珍しさ ★★★■ ヒラスズキ *Lateolabrax latus* KAUM-I. 94413, 329.2 mm SL

【解説】スズキに似るが、体高、尾柄高が高く、吻部が長く、眼後長が短い、背鰭軟条数が通常 15～16（スズキでは通常 12～14）であること、下顎腹面の鱗列が発達することなどにより識別される。体側は銀白色を呈し、体側上半部では幼魚から若魚にかけては黄緑色がかかる。体長 20 cm 未満の個体では体側に小黒斑が散在するが、それ以上の個体では消失することが知られる (村瀬, 2012)。内之浦湾における個体数は多いようで、おもに釣りによって漁獲され、活魚として市場に並べられることが多い。捨てられた漁獲物を求めて漁港内に現れることもある。村瀬 (2012) は、内湾的な環境においてはスズキが多く生息し、外洋に面した環境においてはヒラスズキが卓越する可能性を示唆した。しかし、内湾環境である内之浦では、スズキよりもヒラスズキがはるかに多く漁獲されている。(畑 晴陵)

ホタルジャコ属 *Acropoma japonicum* Günther, 1859

ホタルジャコ 珍しさ ★

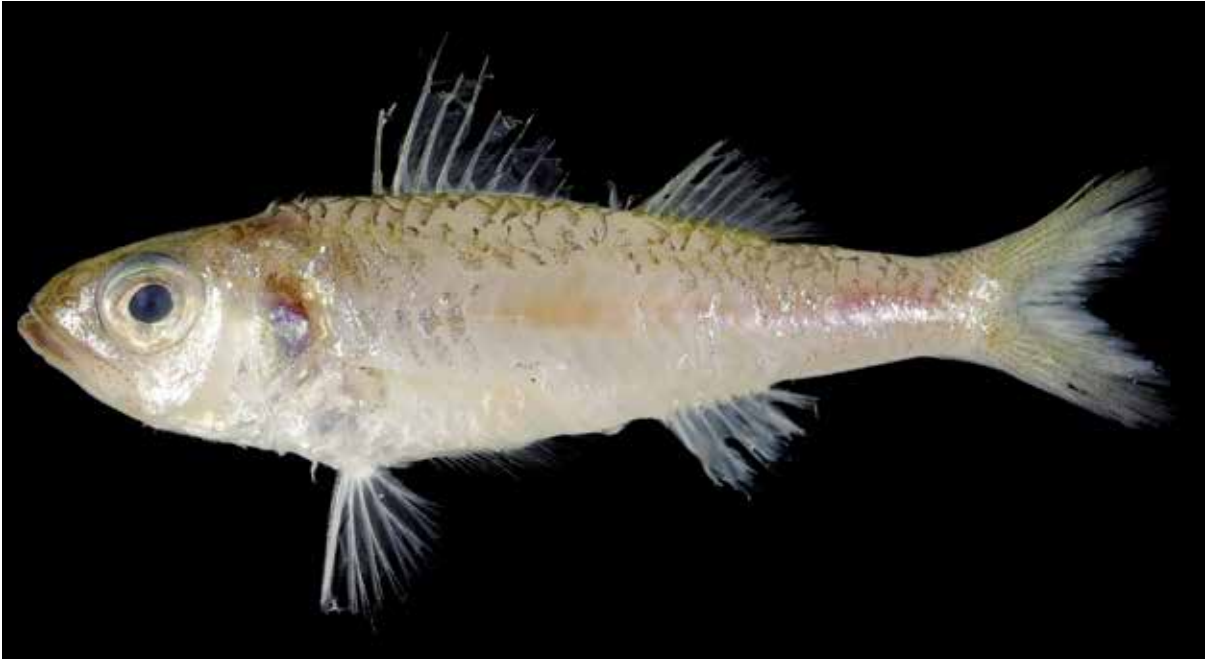


■ ホタルジャコ *Acropoma japonicum* KAUM-I. 98012, 104.1 mm SL

【解説】 臀鰭棘が3棘で、肛門はたたまれた腹鰭の後端より前方にあることが特徴。肛門付近の腹面筋肉中に発光バクテリアが共生している細長いU字型の発光腺をもつ。体長は最大でも15 cmほど。大陸棚域に多く生息しているが、内之浦湾のような内湾環境でも数多く漁獲される。国内では対馬以南の東シナ海、千葉県外房以南の太平洋沿岸、瀬戸内海に分布する。高級魚であるアカムツ（「ノドグロ」と呼ばれることが多い；本書未掲載）と同じ科であるが、すり身の原料になる程度でほとんど利用はされていない。愛媛県西部では本種をすり身にして油で揚げた「じゃこ天」が名産品となっており、美味。内之浦漁港では、ひと網で数千個体が漁獲されることもあるが、大きなくても体長10 cm程度と小さいこともあり、食用にはされずに養殖魚の餌となっている。（小枝圭太）



■ ホタルジャコ *Acropoma japonicum* KAUM-I. 56728, 71.1 mm SL

ヒメスミクイウオ属 *Parascomgrops philippinensis* (Günther, 1880)**ヒメスミクイウオ** 珍しさ★★■ ヒメスミクイウオ *Parascomgrops philippinensis* KAUM-I. 71249, 56.8 mm SL

【解説】 臀鰭が2棘で、腹鰭棘の前縁がノコギリ状で、第1背鰭と臀鰭の第2棘の前縁がなめらかであることが特徴。「スミクイウオ」の名をもつが、同科のスミクイウオ（本書未掲載）のように口内が真っ黒ということはなく淡色。水深30～300mの大陸棚域に生息する。国内では、神奈川県三崎以南の太平洋沿岸、日本海南西海域、長崎県南西沖以南の東シナ海大陸棚域に分布する。体長は最大でも10cmと小型であるため、食用として利用されることはない。本種のように和名の頭に「ヒメ」が付く魚は、ヒメヒイラギやヒメタカサゴのように小型の種が多い。内之浦漁港ではしばしばみられて珍しくはないものの、ホタルジャコのようにまとまった数が一度に得られることはない。

(小枝圭太)

■ ヒメスミクイウオ *Parascomgrops philippinensis* KAUM-I. 63203, 53.6 mm SL

ユカタハタ属 *Cephalopholis boenak* (Bloch, 1790)

ヤミハタ 珍しさ ★★★★★



■ ヤミハタ *Cephalopholis boenak* KAUM-I. 98050, 184.7 mm SL

【解説】体は茶褐色を呈し、細い淡褐色の横帯が多数はいる。生時は暗いこげ茶色をしており、小さいマハタのようにもみえる。鹿児島湾や薩摩半島などにおいては堤防釣りで容易く釣れ、内之浦湾における個体数も少なくないものと思われるが、水深 30 m 以浅の岩礁・サンゴ礁に多く生息するため、沖合に設置された定置網にかかることはかなり稀。最大で体長 20 cm 程度と小さく、釣り漁業の対象となることも少ないが、他のハタ科の例に漏れず味味な魚である。熱帯海域では幼魚が普通にみられるが、日本国内における幼魚の目撃例は少ない。(畑 晴陵)

ユカタハタ属 *Cephalopholis miniata* (Forsskal, 1775)

ユカタハタ 珍しさ ★★★★★



■ ユカタハタ *Cephalopholis miniata* KAUM-I. 80894, 275.5 mm SL

【解説】体は鮮やかな朱色を呈し、瞳孔よりも小さい青色斑点が散在する。体長数 cm の幼魚の体は青色斑点を欠き体色は一様にオレンジ色、各鰭は黄色を呈することから、ハナダイ亜科のキンギョハナダイ（本書未掲載）のようにも見える。全長 40 cm 程度まで成長する。内之浦においては稀な魚であり、写真の個体は釣りによって漁獲され、活魚とされていたものである。水深 10 ~ 20 m 付近に最も多く、同属のアオノメハタやコクハンハタ（いずれも本書未掲載）と比較して開放的な場所には少なく、サンゴ礁の海底近くや斜面に多いことが知られている（Shpigel and Fishelson, 1989）。派手な見た目にして味は非常に良く、沖縄においてはマース煮（塩煮）などにして供される。ハタ科としてはやや小型であること、成長に伴い模様に変化すること、人によく慣れることなどから、観賞魚や水中写真の題材としても人気が高い。（畑 晴陵）

ユカタハタ属 *Cephalopholis sonnerati* (Valenciennes, 1828)

アザハタ 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶアザハタ *Cephalopholis sonnerati* (2006年9月27日撮影)

【解説】体は朱色を呈し、濃赤色の小斑点が密在する（頭部で明瞭）。体長数 cm の幼魚の体は一様に青～藍色を呈し、赤褐色の小斑点が密在する。パッチリーフ（砂底の中に飛び地のように存在する小規模なサンゴ礁）に単独や数個体の群れで生息していることが多く、テンジクダイ科のスカシテンジクダイ類やハタンボ科のキンメモドキ、スズメダイ類など、パッチリーフ周辺に群れる小魚をおもな餌とする。競合相手となるオニカサゴ類やエソ類などの中・大型魚がパッチリーフに近づいた際には猛然と攻撃する。内之浦における水揚げは稀であるが、水揚げ時は釣獲された個体が同時に多数水揚げされていた。オオモンハタと同じく、「いぎす」と称されていた。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶアザハタ
(2009年5月12日撮影)

ヒメコダイ属 *Chelidoperca hirundinacea* (Valenciennes, 1831)

ヒメコダイ 珍しさ★★★★



■ ヒメコダイ *Chelidoperca hirundinacea* KAUM-I. 56874, 163.2 mm SL

【解説】体は赤色を呈し、体側上部に白色点が2列に並ぶ。体側中央に濃赤色斑点があるが、やや不明瞭な個体もいる。尾鰭は上葉後端が糸状に伸長する（幼魚は伸長しない）。雌性先熟（メスからオスへの性転換）をおこなう魚であり、その際には卵巣周辺部の一部に雄性化が生じ、二次精巣へと変化することが知られる（Reinboth, 1967）。水深 100 m 付近の海底付近に多く生息する。内之浦湾における漁獲は少なく、定置網に稀に入る程度。成長しても体長 20 cm 程度の小型魚であり、利用されることはない。（畑 晴陵）



■ ヒメコダイの幼魚（KAUM-I. 98146, 38.2 mm SL）

マハタ属 *Epinephelus akaara* (Temminck & Schlegel, 1843)**キジハタ** 珍しさ ★★★★★■ 市場に並ぶキジハタ *Epinephelus akaara* (2013年10月10日撮影)■ 水揚げされたキジハタ *Epinephelus akaara* (2007年11月8日撮影)

【解説】体は淡い茶色を呈し、淡褐色の斜帯が複数はある。背鰭基底中央に黒色斑が1つあり(不明瞭な個体もいる)、体に小さい橙色斑点が散在する。各鰭は黄色。本種とよく似たノミノクチ(本書未掲載)は背鰭基底部に複数の黒色斑がはいることと体側に赤色斑点が多数はいること容易に識別される。多くのマハタ属魚類と同様に、メスからオスへの性転換をおこなうことが知られるが、本種に関しては飼育下においてオスからメスへの性転換を生じた例も報告されている(田中、1990)。日本海沿岸では多獲され、鹿児島湾においても遊漁の対象となるほど多いものの、内之浦湾では稀な種であり、本調査においても写真によって確認されたのみである。きれいな白身の魚であり、刺身にして美味。姫路市など瀬戸内海沿岸などでは高級魚として名高い一方で、乱獲により激減しており、近年は養殖・種苗の放流が盛んにおこなわれている(丸山、2008; 西松、2017)。(畑 晴陵)

マハタ属 *Epinephelus areolatus* (Forsskål, 1775)

オオモンハタ 珍しさ★★



■ オオモンハタ *Epinephelus areolatus* KAUM-I. 30194, 74.8 mm SL

【解説】体は淡色を呈し、焦げ茶色の斑点が密在し、網目模様を形成する。尾鰭後縁は直線状を呈し、白色に縁取られる。本種とよく似たホウセキハタ（本書未掲載）は尾鰭後縁が白色に縁取られないことで識別できる。最大で全長 50 cm 程度まで成長する。岸近くの岩礁に多く生息し、鹿児島県本土各地では堤防釣りなどで容易に釣れる。内之浦湾においてもおもに釣りにより漁獲され、「いぎす」と称される。食用魚として重要であり、刺身など生食のほか、小型個体は唐揚げにしても美味。（畑 晴陵）



■ 水揚げされたオオモンハタ *Epinephelus areolatus* (2009年6月17日撮影)

マハタ属 *Epinephelus awoara* (Temminck & Schlegel, 1842)**アオハタ** 珍しさ ★★★■ アオハタ *Epinephelus awoara* KAUM-I. 65971, 178.6 mm SL■ アオハタ *Epinephelus awoara* KAUM-I. 56706, 187.2 mm SL

【解説】体は淡褐色を呈し、茶褐色の横帯が複数はある。黄色小斑点が散在する。背鰭、尾鰭、および臀鰭は黄色に縁取られる。本種とよく似たアオハタモドキ（本書未掲載）は体が一様に茶褐色であること、背鰭と尾鰭が黒色に縁取られることで、コクテンアオハタ（本書未掲載）は体側の暗色横帯の外縁に黒色小斑点があることで識別できる。体表にはカイアシ類の1種、イカリムシモドキが寄生していることが多い。内之浦湾を含む鹿児島県本土各地で定置網や釣りによって多獲され、「黄アラ」または「黄ハタ」と称され、流通する。北九州における通称である「アオナ」と称されることもある。寿司ネタとして重宝される。（畑 晴陵）

マハタ属 *Epinephelus coioides* (Hamilton, 1822)

チャイロマルハタ 珍しさ ★★★



■ チャイロマルハタ *Epinephelus coioides* KAUM-I. 200009, 262.6 mm SL

【解説】体は茶色と褐色のまだら模様で、多数の小赤色斑点が入っている。水深 100 m 以浅の沿岸海域に多く、河川河口の汽水域に進入することも多い。熱帯海域に多く、水温 17 度以下では摂餌量が極端に減少し、長期の生存が難しいことが知られている（外園、1993）。近年、内之浦湾における個体数は増加しているようで、大型個体も多く、水揚げされるもののほとんどは全長 50 cm 以上であり、1 m 近い個体が水揚げされることもある。おもに釣りによって漁獲され、活魚として市場に並べられる。（畑 晴陵）

マハタ属 *Epinephelus fasciatus* (Forsskal, 1775)

アカハタ 珍しさ ★★★



■ アカハタ *Epinephelus fasciatus* KAUM-I. 96491, 271.2 mm SL

【解説】体は赤色を呈し、濃赤色の横帯が 5 本ある（不明瞭な個体もいる）。背鰭前部背縁は明瞭に黒色を呈する。体色は変異に富み、地色は橙色に近いものや白色がかかるものなどがある。他のマハタ属魚類の多くと同様に雌性先熟の性転換をおこなうことが知られる。日本国内においては相模湾以南の太平洋沿岸、琉球列島、小笠原諸島などを中心に広く分布する。ハタ科魚類としては小型で、大きくても 30 cm 程度の個体が多いが、佐多岬から体長 39.7 cm の個体が得られている（畑、2017）。奄美群島や薩摩半島においては多獲され、小型個体がパック詰めされて鹿児島市内の食料品店に並ぶことも多いが、内之浦における水揚げは少ない。（畑 晴陵）

マハタ属 *Epinephelus latifasciatus* (Temminck & Schlegel, 1843)**オオスジハタ** 珍しさ ★★★★★■ オオスジハタ *Epinephelus latifasciatus* KAUM-I. 73136, 459.0 mm SL

【解説】若魚や幼魚では体は灰白色を呈し、細い黒色線に縁取られた焦げ茶色の縦帯が2本はいる。成長に伴い色彩は大きく変化し、成魚の体は一様に黒褐色となり、黒色線は細かく途切れ、小黒色点列となる。老成魚では体は一様に暗色を呈し、黒色点列は消失する。最大で全長 1.4 m ほどに成長する大型種。大型個体は水深 100 ~ 200 m ほどのやや深い水域に多いため、内之浦湾においては定置網に入ることはほとんどなく、巻網や釣りによって時折漁獲される。鹿児島県内においては内之浦のほか、根占、いちき串木野市から報告がある（久保、2004；榊、2010；畑ほか、2016c）。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶオオスジハタ(上:2009年1月9日撮影;下:小型個体,2016年11月16日撮影)

マハタ属 *Epinephelus malabaricus* (Bloch & Schneider, 1801)

ヤイトハタ 珍しさ ★★★



■ 活魚とされるヤイトハタ *Epinephelus malabaricus* (2013年1月7日撮影)

【解説】体は焦げ茶色を呈し、単色の斜帯が数本はいる。瞳孔よりも小さい黒色の斑点が多数散在する。全長1 mほどに成長する大型種。内之浦湾では全長60～70 cmほどの個体が時折漁獲され、活魚として扱われる。美味しい魚であり、刺身や鍋物などにむく。ヤイトハタやチャイロマルハタ、オオモンハタなど、茶色の体に小斑点をもつハタ科魚類は内之浦において「ゴマアラ」または「ハマアラ」と称され、クエやマハタに次いで高価に取引される。成長が早く、クエとの交配個体の養殖もなされている。交配個体はクエに似た色彩をもつが、頭部に小斑点が散在する。(畑 晴陵)

マハタ属 *Epinephelus moara* (Temminck & Schlegel, 1842)

クエ 珍しさ ★★★



■ 水揚げされたクエ *Epinephelus moara* (2008年2月9日撮影)

【解説】体に複数の暗色斜帯がはいるが、大型魚では不明瞭となり、体は一様に茶褐色となる。臀鰭軟条数は8。刺身や寿司のほか、鍋物などにして非常に美味しい魚で、超高級魚として名高く、大型個体ほど美味とされる。ただし成長の遅い魚で、全長約30 cmになるのに2年、1 mになるのには20年以上かかることが知られる。最高齢として41歳の個体が報告されている(長崎県総合水産試験場漁業資源部栽培漁業科、2007)。近年は、成長の遅さを補うべく、同じくハタ科で体長2.5 mに達する超大型種タマカイ(本書未掲載)との交配個体も作出されている。交配個体の成長速度はクエよりも非常に早く、「クエタマ」と称されている(中津、2017)。クエは内之浦湾においても時折漁獲され、「アラ」と称され活魚として高値で取引される。(畑 晴陵)



■ 活魚とされるクエ *Epinephelus moara* (2017年1月11日撮影)

マハタ属 *Epinephelus septemfasciatus* (Thunberg, 1793)

マハタ 珍しさ ★★★



■ 活魚とされるマハタ *Epinephelus septemfasciatus* (2010年3月8日撮影)

【解説】体は茶色を呈し、細い白色横帯が多数はいる。尾鰭後縁は白く縁どられる。分子系統樹と形態的特徴などからマハタとマハタモドキ（本書未掲載）は、他のマハタ属魚類とは異なる *Hyporthodus* 属に帰属させる見解があり（Craig and Hastings, 2007）、今後、本科魚類の系統関係がより正確に明らかになるに伴い、各種の帰属や分類体系が大幅に変更される可能性がある。極めて美味しい魚であり、高値で取引される。内之浦湾においては釣りによって漁獲され、活魚として市場に並べられることが多い。（畑 晴陵）

マハタ属 *Epinephelus tukula* Morgans, 1959

カスリハタ 珍しさ ★★★★★



■ 活魚とされるカスリハタ *Epinephelus tukula* (2015年2月18日撮影)

【解説】体は淡い茶色を呈し、眼よりも大きい焦げ茶色の斑点が散在する。体長 1.5 m 以上に成長する超大型種。アフリカ東岸から日本、オーストラリア北岸にかけてのインド・西太平洋に広く分布する。オーストラリアのグレートバリアリーフにおいては個体数も多く、餌付けなどもされ、ダイバーに人気がある。日本国内における記録は極めて少なく、環境省発行のレッドリストにおいても絶滅危惧 IA 類に指定されている。内之浦湾における漁獲も稀であり、他のハタ類と共に「あら」と称される。(畑 晴陵)



■ 活魚とされるカスリハタ *Epinephelus tukula* (2016年11月16日撮影)

イズハナダイ属 *Plectranthias japonicus* (Steindachner, 1883)**カスミサクラダイ** 珍しさ ★★★★★■ カスミサクラダイ *Plectranthias japonicus* KAUM-I. 56875, 145.2 mm SL

【解説】ハタ科のなかでも体が小さいハナダイ亜科の魚で、体は一様に赤色。尾鰭は円形を呈し、背鰭は深く欠刻する。口は大きく、上顎後端は眼の後縁より後方に達し、ハタ類とハナダイ類の中間のような印象の魚である。一般的に水深 70 m 以深に生息し、鹿児島湾などにおいては底曳網により頻繁に漁獲されるが、内之浦湾における漁獲は極めて稀。体長 20 cm 程の小型魚であるが、美味な魚である。(畑 晴陵)

サクラダイ属 *Sacura margaritacea* (Hilgendorf, 1879)**サクラダイ** 珍しさ ★★★★★ (解説は次ページ)■ サクラダイの幼魚 *Sacura margaritacea* KAUM-I. 107723, 39.3 mm SL

【解説】温帯性のハナダイ類の1種。鹿児島県における記録は少なく、本記録以外では鹿児島湾、南さつま市沖、およびトカラ列島中之島からのものに限られる（岩坪ほか、2011；吉田ほか、2017）。琉球列島には分布しないが、小笠原諸島からは1例のみ記録がある（出口、1969）。内之浦湾を含む鹿児島県本土においては水深60 m以浅から報告され、駿河湾においては100 m以浅に生息し、時として水深7 m付近にまで出現するとされるが、鹿児島県の島嶼域においては水深150 m以深に生息し、510 mからの記録もある（吉田ほか、2017）。雌性先熟の性転換をおこない、産卵期は駿河湾においては8～11月であることが知られている。おもに動物プランクトンを捕食する（鈴木ほか、1974）。雌雄で体色が異なり、オスの体は赤く、白色斑が散在するのに対し、メスや幼魚では体がオレンジ色を呈し、背鰭基底中央部に黒色斑がある。雌雄問わず背鰭第3軟条が糸状に伸長し、オスでは背鰭の第3棘も糸状に伸長する。メスはかつてオスと別種であると考えられ、オウゴンサクラダイ *Sacura pulcher* (Steindachner & Döderlein, 1883) とされていた。内之浦湾における漁獲は極めて稀。（畑 晴陵）

トビハタ属 *Triso dermatopus* (Temminck & Schlegel, 1843)

トビハタ 珍しさ★★★★

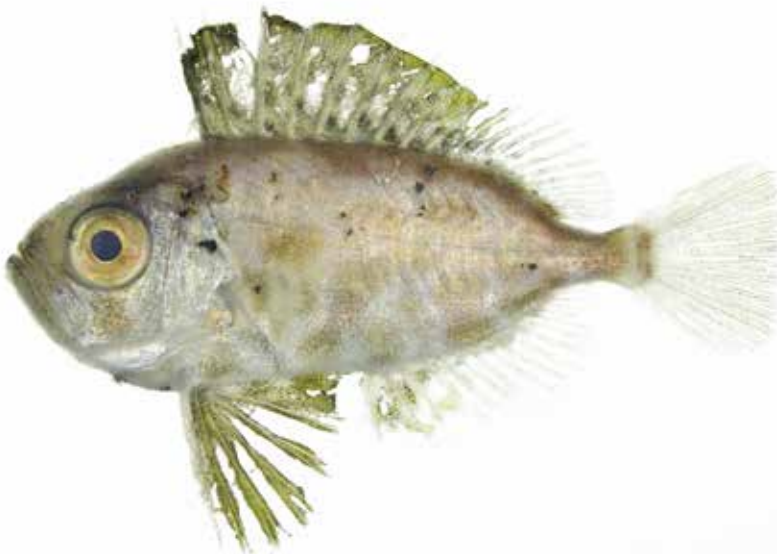


■ トビハタ *Triso dermatopus* KAUM-I. 74753, 131.8 mm SL

【解説】体は各鰭を含めて一様に黒褐色を呈し、目立った模様がない。体長70 cm以上に達する大型種で、大型個体では眼隔域は著しく突出する。日本国内においては新潟県から九州南岸にかけての日本海・東シナ海沿岸と、相模湾から九州南岸にかけての太平洋沿岸、および小笠原諸島に分布する。国外では韓国、台湾、中国広東省、南沙諸島およびオーストラリアから報告されている。内之浦湾を含む鹿児島県本土近海においては稀ではあるものの、定置網や釣りにより散発的に得られる。内之浦では写真の小型個体が得られたのみ。（畑 晴陵）

キントキダイ属 *Priacanthus blochii* Bleeker, 1853**アカネキントキ** 珍しさ ★★★■ アカネキントキ *Priacanthus blochii* KAUM-I. 24323, 135.2 mm SL

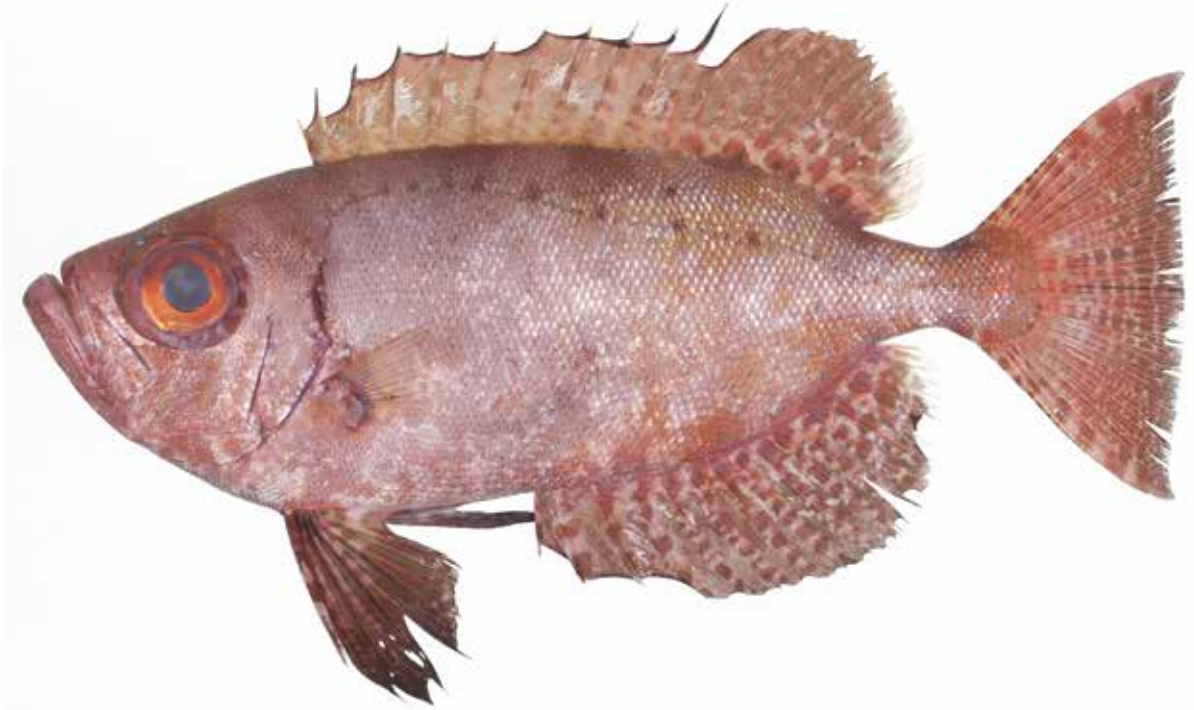
【解説】キントキダイ科は体が卵形で、よく側扁する。眼と口がとても大きい。多くの種は基本的に鮮やかな赤色だが、環境にあわせて色の濃淡や模様を変化させる。夜行性か深海性で、日中は岩陰でじっと動かないことがほとんど。本種は尾鰭が截形で、腹鰭の基部に1つの黒色斑があり、背鰭に黒色斑がないことが特徴。体高が低く、体長の1/2以下であることや、背鰭第1～3棘間の鰭膜に黒斑がないことで似たミナミキントキと区別される。これまで水深50 m以浅から漁獲されており、内之浦湾においてもこれに近い環境で得られている。国内における記録は限定的で、神奈川県藤沢、宮崎県日南、奄美大島、与論島から報告があるのみ。内之浦からは比較的多い4標本が得られており、九州太平洋沿岸では珍しい種ではないことが推察される。内之浦漁港では下の写真のようなキントキダイ属の幼魚が複数得られているが、本属魚類の小型個体は特徴が少なく、種同定が困難なものが多い。(小枝圭太)

■ キントキダイ属の一種の幼魚 *Priacanthus* sp. (KAUM-I. 73142, 27.0 mm SL)

キントキダイ属 *Priacanthus hamrur* (Forsskål, 1775)

ホウセキキントキ

珍しさ★★



■ ホウセキキントキ *Priacanthus hamrur* KAUM-I. 94349, 164.7 mm SL

【解説】尾鰭が湾入形で上下両葉端が成長に伴い伸長する。各鰭に暗色斑がないことが特徴だが、色の明暗によるまだら模様をもつ個体もあり、一見すると間違えやすいので注意が必要。浅海から水深 200 m までに生息し、浅場のサンゴ礁域に生息する。琉球列島では岩陰などの暗がりに単独あるいは数個体の群れでじっと静止している様子がよくみられる。ただし、時に数十から数百個体からなる大群を作り、明るい場所を泳ぎ回る。この時は暗がりにいる時と違ってかわって活動的になり、船から落としたルアーを水面まで追いかけるほど貪欲。相模湾以南の南日本と九州西岸、八丈島、琉球列島、沖縄舟状海盆に分布し、琉球列島では最も普通にみられるキントキダイ科魚類である。煮付や焼きで美味。身質がよく、色も美しいので皮を湯引きした刺身も良い。(小枝圭太)



■ 市場に並ぶホウセキキントキ (2010年10月6日撮影)

キントキダイ属 *Priacanthus macracanthus* Cuvier, 1829**キントキダイ** 珍しさ★■ キントキダイ *Priacanthus macracanthus* KAUM-I. 94352, 180.6 mm SL

【解説】背鰭と臀鰭に黄色斑点が散在することが特徴。よく似たウスベニキントキ（本書未掲載）は鰭に黄色斑点がなく一様に桃色。内之浦漁港で見られる他のキントキダイ科と比べると体の赤色がやや薄く桃色。和名の「キントキ」は坂田金時（いわゆる金太郎）に由来しており、坂田金時が力を入れると肌が真っ赤になることにちなむ。水深 373 m 以浅に生息する。国内では青森県以南の太平洋沿岸と新潟県佐渡島以南の日本海・東シナ海沿岸、東シナ海大陸棚域、瀬戸内海に分布するが、琉球列島からの記録はない。美味。内之浦漁港では最も頻繁にみられるキントキダイ科魚類で、ヘイケと呼ばれて市場に並ぶ。他の中型魚と混じって数個体が漁獲されることもあるが、数十個体がまとめて漁獲されることもある。（小枝圭太）



■ 水揚げされた多量のキントキダイ（2016年2月9日撮影）

キントキダイ属 *Priacanthus sagittarius* Starnes, 1988

ミナミキントキ 珍しさ ★★★



■ ミナミキントキ *Priacanthus sagittarius* KAUM-I. 6872, 169.3 mm SL

【解説】尾鰭は截形で、腹鰭の基部に1つの大きな黒色斑がある。似たアカネキントキと比較すると、体高が高く、背鰭棘部前部に明瞭な黒斑が1つあることなどにより識別される。生息水深がやや深く、水深100～200mの岩礁域から釣りにより漁獲されることが多い。肉食性で魚類や甲殻類を捕食する。インド・太平洋の広域に分布し、国内では神奈川県三浦以南の太平洋沿岸域と鹿児島県薩摩半島から散発的に記録されている。それほど美味でない。本種の口内は独特の生臭さがあることから、沖縄では「イキグサラ」「クサラアカユ」(ユー、イユは魚の意味)などと称される。(小枝圭太)



■ ミナミキントキの幼魚
(KAUM-I. 53439, 57.2 mm SL)

クルマダイ属 *Pristigenys nipponia* (Cuvier, 1829)

クルマダイ 珍しさ ★★★★★



■クルマダイの幼魚 *Pristigenys nipponia* KAUM-I. 43919, 21.5 mm SL

【解説】クルマダイ属はキントキダイ科のなかでも体高が高く（体長の 1/2 以上）、背鰭に欠刻があるなどの特徴があり、体幅もやや広い。本種は真っ赤な体にやや白い横帯が 5 本は入り、背鰭と臀鰭の軟条部と尾鰭の縁辺が黒くないことで、同属のミナミクルマダイ、オキナワクルマダイ（いずれも本書未掲載）と識別される。成長に伴い白色横帯は淡くなる。和名に含まれる「クルマ」は輪を意味しており、白色横帯が輪のごとく体表を回っていることに由来する。水深 200 m 程度の深場に多いが、幼魚は稀に浅い水深にも出現する。幼魚は空き缶など海底の人工構造物に着いていることが多く、美しい色・模様と大きな眼と口をもつ愛らしい姿からダイバーにも人気がある。西太平洋に広く分布し、台湾、中国の南シナ海沿岸、フィリピン、ボルネオ島、スラウェシ島、ジャワ島、オーストラリア北西岸、サモア諸島などから記録がある。国内では相模湾以南の太平洋沿岸と新潟県佐渡ヶ島以南の日本海・東シナ海沿岸、東シナ海大陸棚縁辺域に分布する。非常に美味で刺身、焼き、煮つけにあうが、漁獲量が少ないため一般には流通しない。内之浦漁港で得られた写真の個体は体長 2 cm の幼魚である。このような赤色がなく、真っ黒な小型幼魚はほとんど記録がなく稀少である。（小枝圭太）

カクレテンジクダイ属 *Apogonichthyoides cathetogramma* (Tanaka, 1917)

ヨコスジイシモチ

珍しさ ★★★★★

■ ヨコスジイシモチ *Apogonichthyoides cathetogramma* KAUM-I. 62286, 107.4 mm SL

【解説】テンジクダイ科は背鰭が2基で、眼が大きい。日中は岩の下など暗い場所を好み、夜になると行動が活発になる種が多い。全ての種でオスがメスの産んだ卵塊を口に含み孵化まで育てる口内保育をおこなう。近年、Mabuchi et al. (2006) によるテンジクダイ科全体の遺伝学的系統解析にもとづき、新たな分類体系に整理され、多くの種の属名が変更された（馬淵ほか、2015）。

本種の体は全体が灰褐色～薄灰色で、黒褐色の横帯が2本と尾柄中央に小さい1黒斑がある。腹鰭の前縁が白い。体側の横帯は成魚では不明瞭な場合がある。水中では、体の地色は暗紫褐色。最大体長は12 cmほど。水深5～20 mの岩礁周辺の砂泥底で単独生活を送る。西太平洋に分布し、日本のほか韓国、台湾、中国の広東省・広西省、シンガポール、フィリピンなどから記録されている。国内では伊豆大島から鹿児島県の太平洋沿岸、愛媛県愛南、奄美大島から八重山諸島の琉球列島で分布が確認されている。内之浦漁港では非常に稀で写真の2個体が得られているのみ。（小枝圭太）

■ ヨコスジイシモチの幼魚
(KAUM-I. 44851, 45.7 mm SL)

カクレテンジクダイ属 *Apogonichthyoides niger* (Döderlein, 1883)**クロイシモチ** 珍しさ★★■ クロイシモチ *Apogonichthyoides niger* KAUM-I. 62417, 71.2 mm SL

【解説】体がやや側扁し、体高が著しく高い。また、腹鰭がとて大きいことが特徴。体は灰褐色から暗黒褐色で、個体によっては暗色横帯が2～3本あるものもある。内湾の転石の多い砂泥底に生息する。日本の他に、朝鮮半島南東岸、台湾、中国広東省・広西省、海南島と東アジアに分布する。国内では千葉県館山湾～九州南岸の太平洋沿岸、九州北岸～西岸、瀬戸内海、伊豆大島に分布する。内之浦漁港では一度に多くの個体が採れることはないが、1日に数個体はみられる。(小枝圭太)

■ クロイシモチ
KAUM-I. 98001, 62.5 mm SL

カクレテンジクダイ属 *Apogonichthyoides umbratilis* Fraser & Allen, 2010

マダラテンジクダイ 珍しさ ★★★★★



■ マダラテンジクダイ *Apogonichthyoides umbratilis* KAUM-I. 57298, 45.0 mm SL

【解説】体は黄褐色で、胸鰭が14軟条、体側に2～3本の暗色横帯がある、尾柄部に2～3本の不明瞭な暗色帯があり、最後端部が明瞭であることが特徴。林（2013）により標準和名が与えられた。浅海の岩礁域の岩棚や礫底の陰にひそむ。稀種であり、国内では高知県柏島、愛媛県愛南からの記録に限られていたが、吉田・本村（2016）により薩摩半島西岸や上甕島、種子島、屋久島といった広域から報告された。本報告は九州太平洋沿岸からの初めての記録となる。国外での分布も限定的で、パラオ諸島、インドネシア、ラジャ・アンパット、ブルネイ、オーストラリア西岸からのみ記録がある。内之浦でも写真の1個体のみが得られている。（小枝圭太）



■ サクラテンジクダイ *Cercamia eremia* KAUM-I. 82851, 35.5 mm SL

サクラテンジクダイ属 *Cercamia eremia* (Allen, 1987)**サクラテンジクダイ** 珍しさ ★★★■ サクラテンジクダイ *Cercamia eremia* KAUM-I. 82850, 31.3 mm SL■ サクラテンジクダイ *Cercamia eremia* KAUM-I. 94373, 50.5 mm SL

【解説】体が細長く、尾柄が長い。全体に白色の半透明で、生時や鮮度のよいものは腹腔内が透けて見える。体側各鱗の先端が赤いため、体全体に小赤色斑が点在する。個体によっては赤色斑点と同様に褐色斑点が散在し (KAUM-I. 94373)、褐色斑をもたない個体とかなり印象が異なる。尾鰭は湾入型。側線がなく、あっても鰓蓋上方に数枚の側線有孔鱗があるのみ。後側頭部に顕著な棘があることが特徴。体長は最大でも5 cmと非常に小さい種である。水深5～30 mのサンゴ礁・岩礁域の岩穴や洞窟に棲み、夜間は単独で外に出て、水中を泳ぐ姿がみられる。インド・西太平洋に広く分布し、国内では静岡県富戸～鹿児島県内之浦、八丈島、小笠原諸島、琉球列島に分布している。(小枝圭太)

ヤライイシモチ属 *Cheilodipterus intermedius* Gon, 1993**スダレヤライイシモチ**

珍しさ ★★★★★

■ スダレヤライイシモチ *Cheilodipterus intermedius* KAUM-I. 107715, 131.8 mm SL

【解説】テンジクダイ科のなかでは大型になるヤライイシモチ属に含まれる。ヤライイシモチ属は体がやや細長く、細い縦縞模様があり、両顎に犬歯状の歯がある。この歯は、大型個体になるとかなり鋭い。本種はリュウキュウヤライイシモチ（本書未掲載）に非常によく似ており、様々な文献で混同がみられる。これら2種の識別方法は尾柄部や胸鰭起部の色彩などいくつかあり、現在、鹿児島大学大学院の吉田朋弘氏により研究が進められている。サンゴ礁・岩礁域に生息し、テーブルサンゴの下や枝サンゴの中など比較的明るい場所でもよくみられる。多くの場合、単独で行動しているが、複数個体が同じサンゴや岩の隣り合わせたの穴に棲むこともある。幼魚は群れる。国内では高知県柏島、愛媛県愛南、屋久島から与那国島の琉球列島から記録されている。内之浦では3標本が得られており、これらは九州沿岸からの初めての記録となる。（小枝圭太）

■ スダレヤライイシモチ
(KAUM-I. 63210, 126.0 mm SL)ツマグロイシモチ属 *Jaydia carinata* (Cuvier, 1828)**マトイシモチ**

珍しさ ★★★

【解説】ツマグロイシモチ属は総じて銀白色の体に背側が薄い褐色で、鱗が大きい。サンゴ礁性・岩礁性の種が多いテンジクダイ科としてはやや珍しく、砂泥底に生息する種が多い。本種は第2背鰭に1つの大きな黒色斑があり、臀鰭外縁が黒いことが特徴。テンジクダイ科にはタイワンマトイシモチやナハマトイシモチ（いずれも本書未掲載）など似た和名の種が存在するが、形態が大きく異なり、属すら異なるので注意が必要。水深50m付近の泥底に生息しており、地域によっては底曳網により多獲される。国内では千葉県銚子～九州南岸の太平洋沿岸、若狭湾～熊本県天草の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海（稀）、東シナ海大陸棚域に分布する。やや大型であるため、底曳網で漁獲される地域では稀に食用とされる。とはいえ最大体長は12cmほどと小さいため、煮つけや唐揚げにされることが多いようである。内之浦では食用とされず、他の混獲物とともに養殖魚の餌となっている。（小枝圭太）



■ マトイシモチ *Jaydia carinata* KAUM-I. 86550, 72.5 mm SL

ツマグロイシモチ属 *Jaydia lineatus* (Temminck & Schlegel, 1843)

テンジクダイ 珍しさ★★



■ テンジクダイ *Jaydia lineata* KAUM-I. 68408, 32.1 mm SL

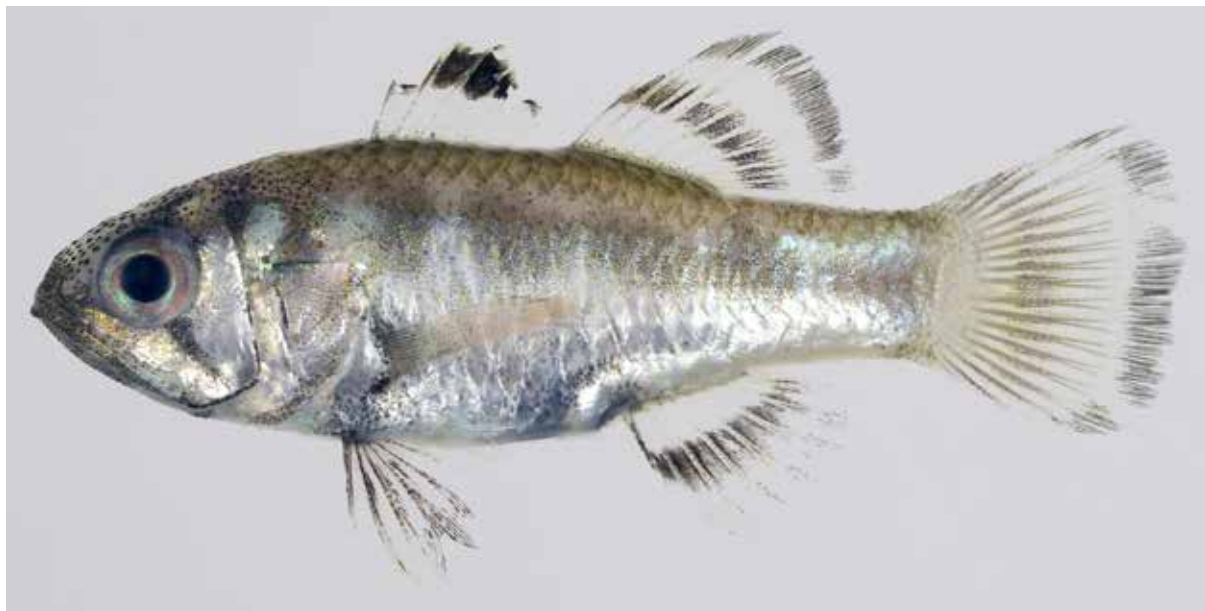
【解説】体側に幅が狭い8～11本の暗色横帯をもち、第1背鰭の先端は暗色であることなどが特徴。最大体長は8 cmとマトイシモチやツマグロイシモチと比較すると小さい。内湾から水深100 m前後の砂泥底に生息する。国内では北海道室蘭、茨城県、千葉県館山湾～宮崎県宮崎の太平洋沿岸と新潟県～天草の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、八重山諸島から記録されてきた。内之浦漁港では体長5 cmに満たない小型個体が4個体得られているが、これにより本種が鹿児島県太平洋沿岸まで広く分布していることが確認された。小さい魚ながらも和歌山県から広島県などの瀬戸内海沿岸の地域では食用とされ、郷土料理になくてはならない魚ともなっている。なお、テンジクとはインドの別称「天竺」であり、古くは外国、舶来品、風変わりなものなどの意に使われた語である。内之浦では食用とされず、他の混獲物とともに養殖魚の餌となっている。(小枝圭太)

ツマグロイシモチ属 *Jaydia truncata* (Bleeker, 1855)

ツマグロイシモチ 珍しさ★★



■ ツマグロイシモチ *Jaydia truncata* KAUM-I. 82755, 86.0 mm SL



■ ツマグロイシモチ *Jaydia truncata* KAUM-I. 68409, 56.6 mm SL

【解説】 体側に幅が広い6～7本の薄い暗色横帯がある、第1背鰭の先端が明瞭に黒いなどの特徴により識別される。水深50～80m付近の泥底に生息する。日本からオーストラリアの西太平洋に分布し、国内では熊本県天草、和歌山県白浜、土佐湾、鹿児島県志布志湾・内之浦湾、慶良間諸島、八重山諸島から記録がある。内之浦漁港では一度に多くの個体が採れることはないが、1日に数個体ずつはみられることから、九州太平洋沿岸にはごく普通に分布しているものと思われる。マトイシモチと同様に地域によっては食用になるようである。なお、テンジクダイ科魚類の和名に多く含まれる「イシモチ」は、本科魚類が総じて大きな耳石をもつことに由来する。ちなみに日本産テンジクダイ科魚類99種のうち和名に「イシモチ」が含まれる種は48種で、科名である「テンジクダイ」が含まれる39種より多い。(小枝圭太)

スジイシモチ属 *Ostorhinchus doederleini* (Jordan & Snyder, 1901)**オオスジイシモチ**

珍しさ ★★★

■ オオスジイシモチ *Ostorhinchus doederleini* KAUM-I. 63888, 97.5 mm SL■ オオスジイシモチ *Ostorhinchus doederleini* KAUM-I. 73967, 68.0 mm SL

【解説】体側全体に複数の縦帯がはしる種で、似た特徴をもつ種が多く、同定が難しいグループである。このグループのなかで本種は南日本で最も頻りにみられる種であり、第1（体側中央をはしる第2縦帯より1本背側）と第3縦帯が尾柄後端に達しない、第2縦帯が尾柄部の黒色円斑に達しない、体側の縦帯が暗赤色で明瞭であることにより識別される。体長は最大で11 cmほど。浅場の岩礁域や内湾の転石帯、港内など幅広い環境に生息し、小型個体は数十個体の群れを成す。大型個体は数個体の群れ、あるいはつがいで行動する。国内ではおもに茨城県～屋久島の太平洋沿岸、島根県～熊本県天草の日本海・東シナ海沿岸に分布し、琉球列島にも稀ながらみられる。内之浦漁港での採集例は意外に少なく、5個体が得られたのみ。（小枝圭太）

スジイシモチ属 *Ostorhinchus endekataenia* (Bleeker, 1852)

コスジイシモチ 珍しさ ★★★★★



■ コスジイシモチ *Ostorhinchus endekataenia* KAUM-I. 82852, 34.3 mm SL

【解説】本種は体側全体に複数の縦帯がはしるグループのなかでも縦帯の本数が7～8本と最も多く、尾柄中央の黒色円斑が大きいことが特徴。体長は最大で11 cmほどで、和名は「コスジ」だがオオスジイシモチと比べて小さいということはない。沿岸の砂泥質の岩礁域に生息し、やや深場を好む傾向がある。小型個体は数十個体の群れを成し、大型個体は数個体の群れ、あるいはペアで行動する。日本、濟州島、台湾、中国の福建省、香港、タイランド湾、シンガポール、ジャワ海に分布する。国内では千葉県館山湾～屋久島の太平洋沿岸、兵庫県香住～五島列島の日本海・東シナ海沿岸、伊豆諸島、小笠原諸島、琉球列島に分布する。(小枝圭太)



■ コンゴウテンジクダイ *Ostorhinchus fleurieu* KAUM-I. 94384, 104.0 mm SL

スジシモチ属 *Ostorhinchus fleurieu* Lacepède, 1802

コンゴウテンジクダイ

珍しさ ★★★



■ コンゴウテンジクダイ *Ostorhinchus fleurieu* KAUM-I. 62418, 104.0 mm SL

【解説】体が金色に輝く美しい魚で、尾柄の黒斑が黒帯にならず黒斑であることで、よく似たアオスジテンジクダイ（本書未掲載）と識別できる。尾柄部の黒色円斑は小型個体や幼魚で特に明瞭。体長は最大でも 11 cm と普通だが、他のスジシモチ属と比較すると体高が高く、体幅も広いため、全体に大きく、ガッシリとした印象をうける。本種は 2015 年に日本初記録種として報告された種であり、この報告には内之浦漁港で得られた標本も数多く用いられた（吉田・本村、2015）。水深 5 ~ 40 m に生息し、屋久島ではアオスジテンジクダイと同所的に生息することが確認されている。インド・西太平洋に広く分布し、日本では静岡県黄金崎～鹿児島県内之浦・笠沙、鹿児島県竹島に分布する。内之浦漁港では珍しくなく、幼魚から成魚まで幅広く得られる。幼魚は体が金色ではなくオレンジ色で、成魚の印象とかなり異なるが、尾柄部の黒色斑が明瞭。なお和名の「コンゴウ」は、本種のがっしりとした体格が筋骨たくましい金剛力士像を彷彿とさせることに因む（吉田・本村、2015）。

（小枝圭太）



■ コンゴウテンジクダイ
(KAUM-I. 62419, 95.6 mm SL)



■ コンゴウテンジクダイの幼魚
(KAUM-I. 98007, 34.0 mm SL)

スジイシモチ属 *Ostorhinchus holotaenia* (Regan, 1905)

スジオテンジクダイ 珍しさ ★



■ スジオテンジクダイ *Ostorhinchus holotaenia* KAUM-I. 62290, 45.5 mm SL



■ スジオテンジクダイ *Ostorhinchus holotaenia* KAUM-I. 98153, 44.0 mm SL

【解説】従来、キンセンイシモチのドット型と呼ばれていた種で、近年、和名が提唱された（林、2013）。白地に金色～オレンジ色の縦帯が5本か6本ある。キンセンイシモチと比較して、第4縦帯と第5縦帯に挟まれる淡輝青色縦帯が斑点状で不連続であること、体側中央の縦帯が尾柄を通過して尾鰭の後縁付近まで伸びることが特徴である。小型種で最大でも6 cmほど。沿岸の岩礁・サンゴ礁域に生息する。国内では千葉県館山湾～屋久島の太平洋沿岸、九州北岸に分布する。琉球列島からの記録はないようだが、ダイバーにより水中写真が撮影された例があるようである。内之浦漁港ではごく普通にみられる。本種によく似たキンセンイシモチは、内之浦湾に分布する可能性があるものの、本調査では確認できなかった。（小枝圭太）

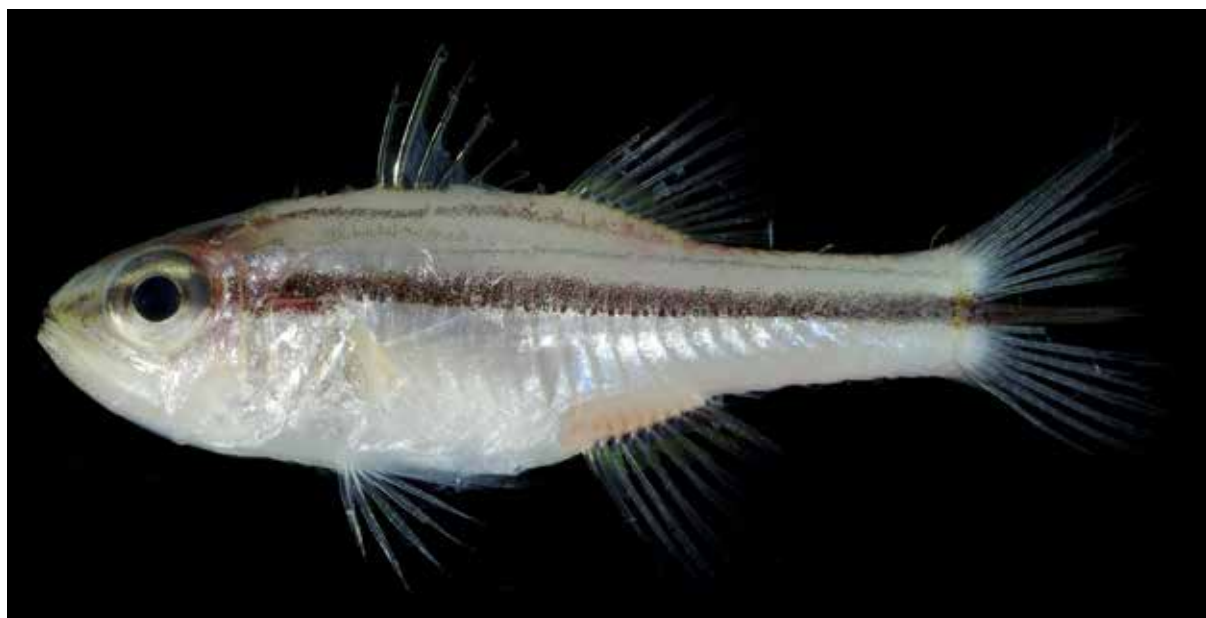
スジイシモチ属 *Ostorhinchus kiensis* (Jordan & Snyder, 1901)**テッポウイシモチ**

珍しさ ★★★

■ テッポウイシモチ *Ostorhinchus kiensis* KAUM-I. 98947, 69.9 mm

【解説】体は白色で体側の中央に1本と背側に2本の黒色縦帯をもつ。第1背鰭が6棘である、中央の黒色縦帯が尾鰭後縁にまで達することで似たフウライイシモチ（本書未掲載）やネンブツダイ、フタスジイシモチ（本書未掲載）などと識別される。内湾のやや深い砂泥底に生息し、底曳網に入ることが多い。国内では千葉県小湊～九州南岸の太平洋沿岸、島根県敬川沖から九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海に分布する。本種の種小名 *kiensis* に含まれる「ki」は紀伊地方を意味し、和歌山県和歌浦で採集された標本をもとに新種として記載されたことに因む。内之浦ではよくみられるテンジクダイ科魚類だが、数多くの個体が1度に得られることはあまりない。

(小枝圭太)



■ テッポウイシモチの幼魚 (KAUM-I. 80891, 30.3 mm SL)

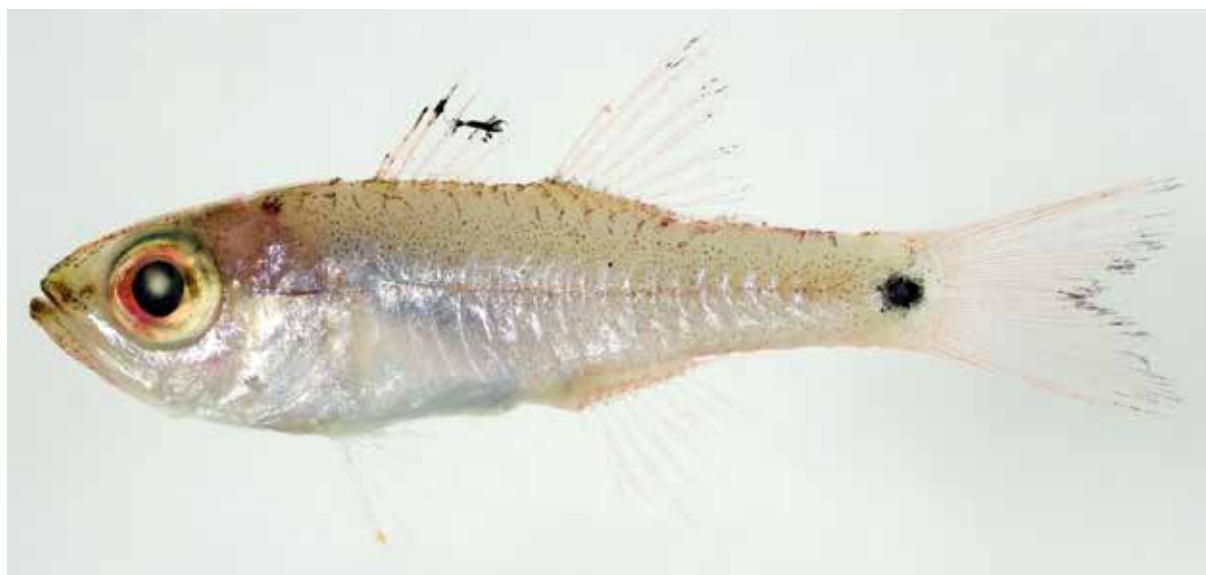
スジイシモチ属 *Ostorhinchus notatus* (Houttuyn, 1782)

クロホシイシモチ 珍しさ★



■ クロホシイシモチ *Ostorhinchus notatus* KAUM-I. 30825, 76.7 mm SL

【解説】 淡いオレンジ色や薄紫色の体に吻から眼にかけて黒色帯があり、頭頂部に左右 1 対の黒色円斑をもつことが特徴。ネンブツダイとならび鹿児島本土沿岸域では最もよくみられるテンジクダイ科魚類である。水深 5 ~ 10 m の岩礁域や港内に多く、大きな群れを作る。内之浦漁港で夜に餌釣りをすると本種ばかりが釣れ続ける。夜に漁港内の水面にライトを照らすと、本種の大群が光を嫌って闇の中へと泳ぎ去る様子を見ることが出来る。日本のほかに韓国の済州島、台湾、フィリピンのセブ島、パラオ、ニューカレドニアに分布する。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、屋久島、口永良部島、宇和海、九州北西岸、伊豆諸島、琉球列島に分布する。内之浦漁港の水揚げ物にも多量に混ざるが、食用とされず、他の混獲物とともに養殖魚の餌となっている。(小枝圭太)



■ クロホシイシモチの幼魚 (KAUM-I. 56777, 30.2 mm SL)

スジイシモチ属 *Ostorhinchus semilineatus* (Temminck & Schlegel, 1843)**ネンブツダイ** 珍しさ ★■ ネンブツダイ *Ostorhinchus semilineatus* KAUM-I. 56775, 74.7 mm SL

【解説】 淡いオレンジ色の体に吻から眼を通り鰓蓋後縁に達する黒色帯とその背側に1本の尾柄付近まで達する黒色帯がある。第1背鰭の上縁が黒く、尾柄には瞳孔より小さい黒色円斑がある。クロホシイシモチとならび鹿児島県本土では最もよくみられるテンジクダイ科魚類であり、浅い場所で大群をなす。幼魚は色彩の特徴が少なく、クロホシイシモチと見分けが難しくなるが、頭頂部に黒色円斑がないことで識別できる。繁殖期になると数千個体という群れのなかでもオスとメスによるペアを形成する。水深3～100mの浅海域の内湾に生息し、岩礁周辺で巨大な群れを作る。国内では本州～九州沿岸、瀬戸内海に広く分布しており、慶良間諸島や宮古島からも記録がある。日本産テンジクダイ科魚類99種のうち、和名にイシモチもテンジクダイも含まない数少ない12種（クダリボウズギス亜科を除くと6種）のうちの1種である。和名の由来は、繁殖期になると水面を群泳しながらブツブツ呟くような音を立てる様子が、仏教徒が集まって念仏講をしているのに似ることによって因むとされる。（小枝圭太）



■ ネンブツダイの幼魚 (KAUM-I. 82855, 32.0 mm SL)

スカシテンジクダイ属 *Rhabdamia gracilis* (Bleeker, 1856)

スカシテンジクダイ 珍しさ★★



■ スカシテンジクダイ *Rhabdamia gracilis* KAUM-I. 86525, 52.2 mm SL



■ スカシテンジクダイ *Rhabdamia gracilis* KAUM-I. 86526, 55.7 mm SL

【解説】体が細長く、鮮時は体が半透明な淡桃色で、吻端のみ暗色。生時、体は半透明だが、死後は白色となる。サンゴ礁から内湾の岩礁に広く生息する。普段はあまり岩陰に隠れることがなく、サンゴの根などの周りで数千個体からなる大群を作る。群れにはキンメドキが混ざること多い。アザハタやユカタハタなどの肉食魚がこれらを狙って同じ根に棲み付いており、これら外敵が近づくと一斉に群れの形を変えて避ける。キラキラと群れる様子が非常に写真映える



■ スカシテンジクダイ KAUM-I. 68422, 47.3 mm SL

構図であることから、水中写真によく登場する種である。国内では三重県～屋久島の太平洋沿岸、小笠原諸島と琉球列島に分布する。内之浦では本種とは異なるスカシテンジクダイ属が得られており、現在、鹿児島大学大学院の吉田朋弘氏により分類学的研究が進められている。(小枝圭太)

ヒカリイシモチ属 *Siphamia tubulata* (Weber, 1909)

イナズマヒカリイシモチ

珍しさ ★★★★★

■ イナズマヒカリイシモチ *Siphamia tubulata* KAUM-I. 83493, 24.9 mm SL

【解説】ヒカリイシモチ属魚類は咽頭部から臀鰭基底にかけて発光腺があり、発光バクテリアによる生物発光をおこなう。ただし光は非常に弱い。総じて小さく、最大でも体長 4 cm ほど。遊泳力が低く、ウニやソフトコーラルといった他の動物の隙間で暮らすものが多い。

本種は体側に暗褐色の不規則な斑紋が明瞭にはいることが特徴で、ヒカリイシモチ（本書未掲載）とは胸鰭軟条数が 11 と少ないことで識別される。イナズマヒカリイシモチはソフトコーラルのなかでもウミカラムツ類やトゲトサカ類、ウミシダ類の周りに群れ、多いときは数百個体の群れを作るようである。ただし、本種に関する記録は少なく、鹿児島県からは吉田ほか（2016）により内之浦漁港と奄美大島から初めて報告されるとともに、国内では高知県から沖縄諸島まで連続的に分布していることが明らかにされた。国外ではインドネシアのスンバラ島・サラヤル島・ニューギニア島西岸からのみ記録されている。内之浦でも極めて稀な種で、写真の 1 個体が得られたのみ。（小枝圭太）



■ 銀色に見える帯がイナズマヒカリイシモチの発光器（KAUM-I. 83493, 24.9 mm SL）

アトヒキテンジクダイ属 *Taeniamia kagoshimanus* (Doderlein, 1883)

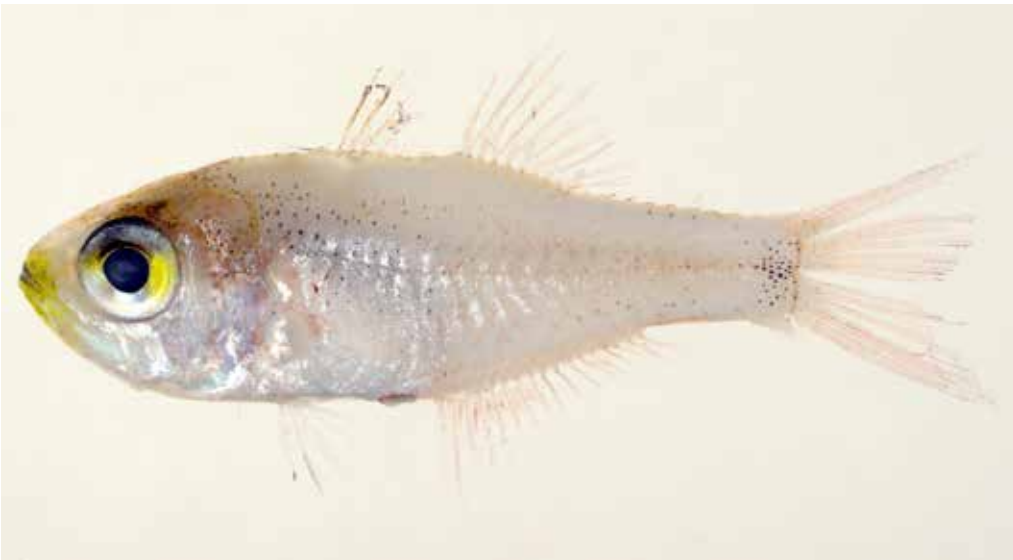
スミツキアトヒキテンジクダイ

珍しさ★★

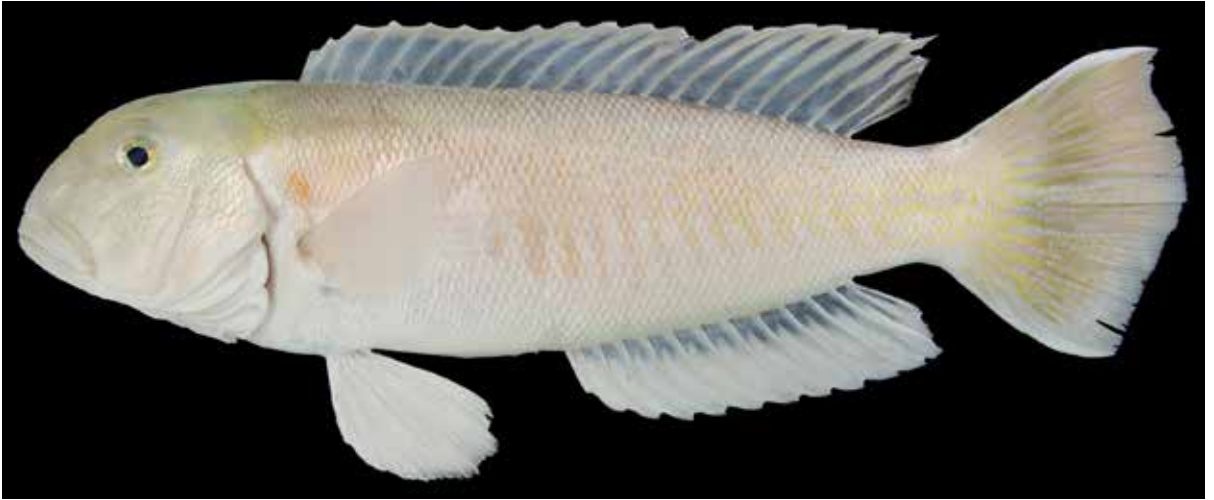


■ スミツキアトヒキテンジクダイ *Taeniamia kagoshimanus* KAUM-I. 30204, 59.9 mm SL

【解説】アトヒキテンジクダイ属はやや体が側扁し、体に薄い横帯が細かくある。同定が難しいグループで、分類学的混乱が多い。本種は臀鰭軟条数が16～18、尾柄部の黒色斑があることでよく似たアトヒキテンジクダイ（本書未掲載）と識別される。和名の「スミツキ」とは鰓蓋の後方付近の体側に暗赤色～暗褐色の楕円斑があることに由来するが、個体によってはないものや不明瞭なものもあるので注意が必要。体長は最大で7 cmほど。サンゴ礁の内湾域や礁湖内で数百から数千個体から成る大群を作ることがある。インド・西太平洋、カロリン諸島、マーシャル諸島、サモア諸島に分布する。国内では静岡県～大隅半島の太平洋沿岸、伊豆諸島、琉球列島、小笠原諸島に分布する。標準和名は14文字で、魚類としてはトップクラスの長さ。（小枝圭太）



■ スミツキアトヒキテンジクダイの幼魚（KAUM-I. 86398, 32.5 mm SL）

アマダイ属 *Branchiostegus albus* Dooley, 1978**シロアマダイ** 珍しさ ★★★■ シロアマダイ *Branchiostegus albus* KAUM-I. 80892, 332.4 mm SL

【解説】南日本近海で多獲されるアマダイ属魚類の間にはアカアマダイ、キアマダイ（いずれも本書未掲載）、シロアマダイの3種があり、それぞれ名の示す通り体色がわずかに異なる。体は側扁してやや長く、吻は尖らずに口は小さい。本種は体が全体に白く、背鰭前方の背中線が黒くない、眼の周辺部に白色斑や白色帯がない、尾鰭に太い黄色縦帯がないことなどが特徴である。鹿児島湾産の標本をもとに記載された種で、国内では鹿児島灘以南の太平洋沿岸、若狭湾～九州西岸の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海に広く分布する。究極の美味で、特に焼き料理は圧倒的。身はふわりとして中は豊潤、呑み込むのが勿体ないほど旨味が強い。皮はさらに旨味が強く、鱗も美味しいため鱗を残したまま調理されることもある。当然ながら超高級魚で、内之浦漁港でも釣りで漁獲されたものが市場価格でキロ単価1万円を超えることもある。内之浦ではやや稀だが、釣りにより一度に十数個体が水揚げされたこともある。定置網に入ることはかなり珍しい。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶシロアマダイ。大きい物は3 kgを越え、非常に高値で取引される（2009年11月24日撮影）



■ シロアマダイの幼魚（KAUM-I. 83913, 154.7 mm SL）

ムツ属 *Scombrops boops* (Houttuyn, 1782)

ムツ 珍しさ★★



■ ムツ *Scombrops boops* KAUM-I. 86546, 192.8 mm SL



■ ムツ *Scombrops boops* KAUM-I. 58683, 194.0 mm SL

【解説】体は紡錘形を呈し、背鰭は2基。眼は大きく、虹彩は金色。口は大きく、両顎には鋭い歯が1列に並ぶ。成魚の体は茶色がかった銀色を呈し、体背面から体側上部にかけては暗い茶褐色。幼魚の体は銀白色を呈し、体背面、体側上部、および各鰭は茶色がかった金色。北海道以南に広く分布する。最大で体長1 mに達する。成魚はおもに水深200～700 mの岩礁域に生息し、産卵期である冬季には100 m程度にも出現する。幼魚は浅所に生息し、流れ藻に随伴するほか、タイドプールにも出現する。鹿児島県内では薩南諸島において延縄漁により成魚が数多く漁獲され、刺身や鍋物などに重宝される高級魚である。内之浦湾においては定置網によって幼魚が頻繁に漁獲されるが、大きくても20 cm程度、多くは10 cm未満の個体のみであり、養殖餌料として利用される。(畑 晴陵)



■ ムツの頭部 (KAUM-I. 86546, 192.8 mm SL)

コバンザメ属 *Echeneis naucrates* Linnaeus, 1758**コバンザメ** 珍しさ★★■ コバンザメ *Echeneis naucrates* KAUM-I. 77490, 597.5 mm SL

【解説】体は細長い。頭部は縦扁し、上部に背鰭の変化した、柔らかい吸盤（俗に小判と呼ばれる）がある。吸盤の内側には板状体が並び、板状体の上縁は細かい鋸歯状を呈していることで、吸盤全体はざらざらしている。体は生時、灰色を呈し、体側中央に太い黒色縦帯がはいる。体背面は一様に黒色。大型個体では黒みが強くなり、死後は一様に黒色となる。全世界の暖海域に広く分布する。最大で体長1 mほどになる。大型魚やクジラ類などの大型生物に随伴することが多く、吸盤を用いて吸着することもある。随伴・吸着する対象は幅広く、ジンベエザメやオニイトマキエイ（本書未掲載）など大型の軟骨魚類のほか、メガネモチノウオ（本書未掲載）、ホシフグやマンボウなどの大型硬骨魚、ジュゴンやクジラ類などの哺乳類、さらにダイバーや船にも随伴・吸着する。水槽内ではガラス面にも頻繁に吸着する。大型個体では他の生物に吸着することは稀で、ほとんど随伴しているほか、単独で遊泳することも多い。内之浦湾では定置網で頻繁に漁獲されるが、利用されることは少なく、ほとんどが投棄される。（畑 晴陵）

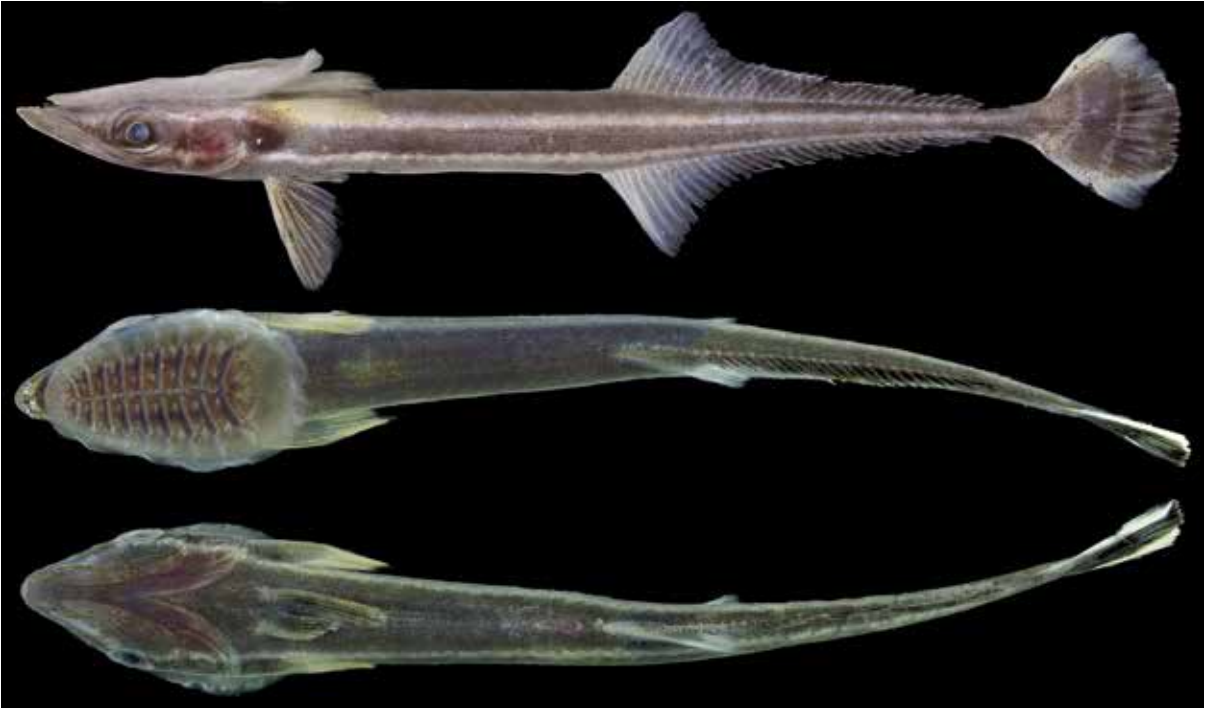


■ コバンザメの吸盤はまさに小判のような形状 (KAUM-I. 77490, 597.5 mm SL)

■ コバンザメ *Echeneis naucrates* KAUM-I. 77495, 314.0 mm SL

スジコバン属 *Phtheichthys lineatus* (Menzies, 1791)

スジコバン 珍しさ ★★★★★



■ スジコバンの幼魚 *Phtheichthys lineatus* KAUM-I. 98061, 60.0 mm SL

【解説】体は細長い。幼魚の体は一様に黒色であるが、成長に伴い2本の細い白色縦帯がはいり、大型個体では体側上部は黒褐色、下部は一様に白色となる。最大で体長 40 cm に達する。吸盤は小さく、吸盤内側の板状体は 9 ~ 11 枚であり、コバンザメ科魚類のなかで最も少ない。吸盤が小さいためか、大型個体は吸着することなく自由遊泳することが多い (Strasburg, 1964)。内之浦湾では稀に体長 10 cm 未満の小型個体が定置網により得られるが、何かの大型生物に吸着したまま入網しているものと思われる。他のコバンザメ類同様、利用されない。(畑 晴陵)



■ スジコバンの幼魚の吸盤 (KAUM-I. 98044, 尾部欠損のため尾部までの体長 99.6 mm)

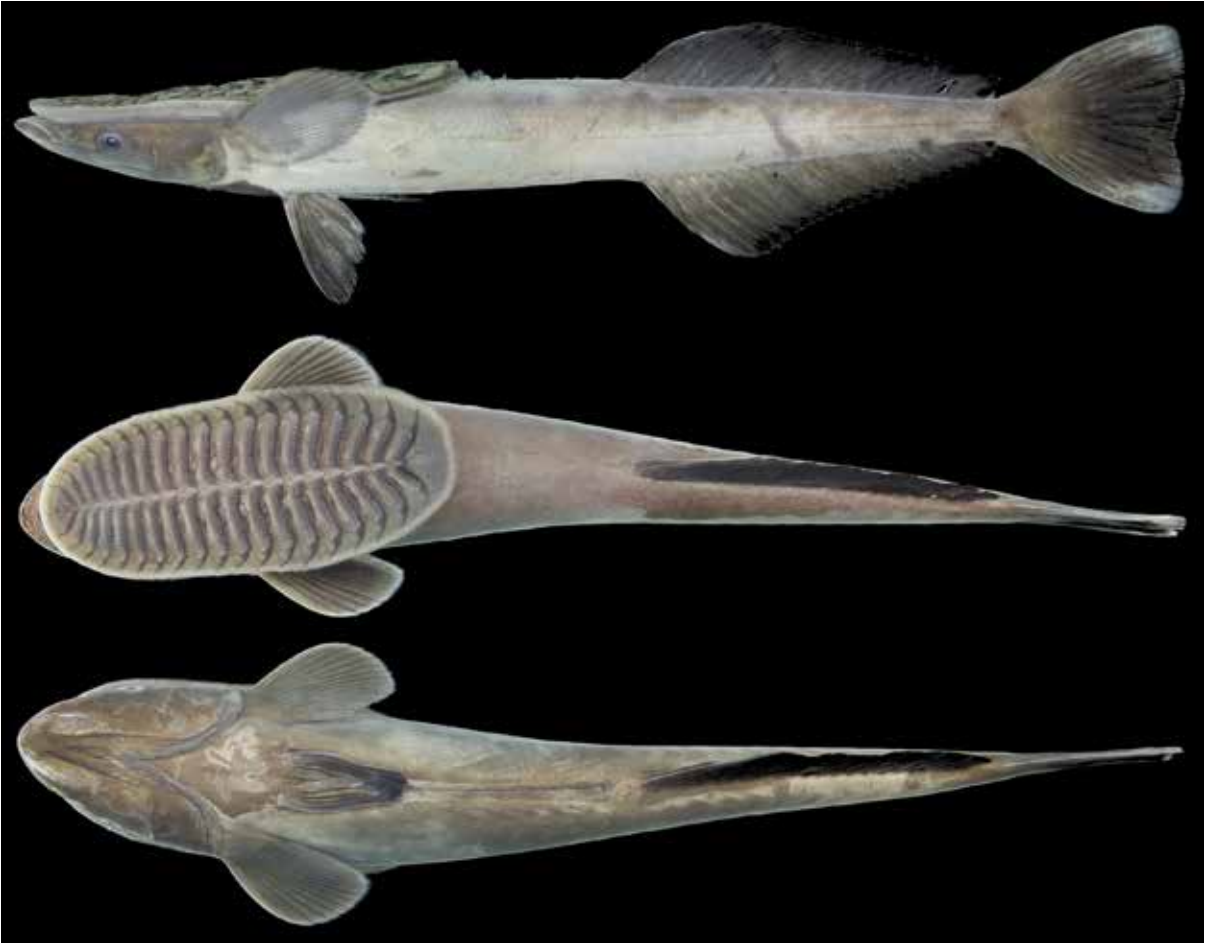
ナガコバン属 *Remora brachyptera* (Lowe, 1839)**クロコバン** 珍しさ ★★★★★■ クロコバン *Remora brachyptera* KAUM-I. 1484, 91.2 mm SL

【解説】体は一様に黒色を呈し、背鰭、臀鰭、および尾鰭の縁辺は白色。時折みられる体が一様に白色の色彩変異個体は、かつてヒナコバン *Remora pallida* と呼ばれ、別種と考えられていたが、同種の変異である。内之浦湾においてはクロコバンそのものが稀であるものの、どちらの色彩の個体も得られている。全世界の暖海に広く分布する。体長約 25 cm。本種はサメ類・カジキ類に吸着することが多く、単独で遊泳することはほとんどない。内之浦湾においても、ニタリやアカシユモクザメなどのサメ類と共に稀に漁獲される。(畑 晴陵)

■ クロコバン（白色の色彩変異個体） *Remora brachyptera* KAUM-I. 28729, 143.5 mm SLナガコバン属 *Remora osteochir* (Cuvier, 1829)**ヒシコバン** 珍しさ ★★★★★

【解説】頭部背面の吸盤の板状体は 15 ~ 19 枚。体は一様に黒褐色を呈し、目立った模様はない。吸盤は非常に大きく、その後端は胸鰭後端より後方に達する。本種はカジキ類に多く吸着することで知られる。ハワイ近海における観察ではフウライカジキ、クロカジキ（2種は本書未掲載）、マカジキ、およびバショウカジキなどに吸着しているのが観察されているが、稀にサメ類やマグロ類にも吸着することが知られる。また、成熟した雌雄がつかいとなって 1 個体のカジキ類に吸着していることが多い（師田・藤田、1995）。内之浦湾においては非常に少なく、写真の個体が確認されたのみ。同個体はカジキ類の入網にともなって得られたものと思われるが、選別時にはすでに宿主から離れていたため何に吸着していたかは不明。(畑 晴陵)

■ ヒシコバン *Remora osteochir* KAUM-I. 94374, 99.5 mm SL（次ページと同じ個体）



■ ヒシコバン *Remora osteochir* KAUM-I. 94374, 99.5 mm SL

ナガコバン属 *Remora remora* (Linnaeus, 1758)

ナガコバン 珍しさ ★★★★★



■ ナガコバン *Remora remora* KAUM-I. 73201, 174.5 mm SL

【解説】頭部背面の吸盤の板状体は16～20枚。体は一様に黒褐色または灰白色を呈し、目立った模様はない。胸鰭は大きく、その後端は吸盤後端よりも後方に達する。大型のサメ・エイ類、およびウミガメ類などに吸着して移動する。世界中の暖海域に分布する。日本国内においても小笠原諸島を除く日本各地から報告があり、近年ではオホーツク海に進入したジンベエザメに吸着していた個体が採集された事例が報告されている（荻本ほか、2014）。コバンザメ類としては大型種であり、最大で体長640 mmの個体がジンベエザメに吸着していた例が知られる（Strasburg, 1964）。内之浦湾においては少なく、稀に定置網に入るが、サメなど何らかの大型魚に吸着したものがそのままにも水揚げされているものと思われる。（畑 晴陵）

スズギ属 *Rachycentron canadum* (Linnaeus, 1766)
スズギ 珍しさ ★★★



■ スズギ *Rachycentron canadum* KAUM-I. 71404, 736.0 mm SL

【解説】体は円筒形を呈し、頭部は縦扁する。頭部と体背面は焦げ茶色。体側中部から体腹面は白色。体側中央に焦げ茶色の幅の広い縦帯がはいる。インド・西太平洋と大西洋の暖海に広く分布し、イスラエルの地中海沿岸からの記録もある。種小名に *canadum* とあるが、カナダからの記録はない。最大で体長 1.5 m に達する。サメやウミガメなどに随伴して泳ぐ性質がある。内之浦湾を含む鹿児島県本土各地で釣りや定置網などで時折漁獲される。肉質は歯ごたえがあり、刺身などで美味である。体サイズが大きい、成長が早いことなどから、近年沖縄県において盛んに養殖されている（牧野ほか、2003）。カンパチとの類縁性は乏しいにもかかわらず、かつては「黒カンパチ」や「トロカンパチ」などの名称で販売されることも多かったが、現在では優良誤認防止の観点から、スズギに対してこうした名称の使用は禁止されている（水産庁、2007）。内之浦漁協では「江口」と称され流通する。（畑 晴陵）



■ スズギ *Rachycentron canadum* KAUM-I. 272, 350.0 mm SL



■ スズギの頭部（KAUM-I. 71404）

シイラ属 *Coryphaena hippurus* Linnaeus, 1758**シイラ** 珍しさ★★■ シイラ *Coryphaena hippurus* KAUM-I. 62420, 284.6 mm SL

【解説】体は著しく側扁して長く、背鰭基底は長い。同科のエビスシイラ（本書未掲載）とは体の背、腹縁が直線状である（エビスシイラは弧状）、体高が腹鰭基部付近で最大であること（腹鰭後方で最大）などによって容易に区別される。生時、水中では青みが強いが、釣り上げると体は美しい緑と黄金を混ぜたような色で輝く。成魚のオスは額が張り出す（写真の個体はいずれも張り出していない小・中型個体）。全世界の暖水海域に分布し、表層近くを遊泳あるいは群泳しながら小魚を捕食する。最大で2 mにも達する大型の回遊魚で、引きが強く、釣りの対象魚としても人気が高い。好奇心旺盛で、ルアーめがけて突進して食いつく。稚魚は流れ藻などの漂流物に着き、体がさらに細い。日本全国どこでもみられ、基本的には沖合性だが沿岸域に現れることも珍しくない。世界中で食用とされる種であり、おもにフライや焼いて食されることが多い。鹿児島では「シイラ」あるいは「マンビキ」と呼ばれる。山陰地方では「マンサク」あるいは「マンビキ」、沖縄では「マンビカー」など共通性はありながらもわずかに異なる。ハワイでは「マヒマヒ」。味についての意見は分かれるが、筆者の沖縄での経験では夏場のシイラは脂乗りが悪く、とりわけ刺身や焼きには向かなかった。ただし、冬のシイラは旨味があり、悪くなかった。あっさりした白身はフライや焼きで食される。文献によっては夏が旬とされ、地域や人によって感想が異なる。内之浦漁港では5～6月によく漁獲される。（小枝圭太）



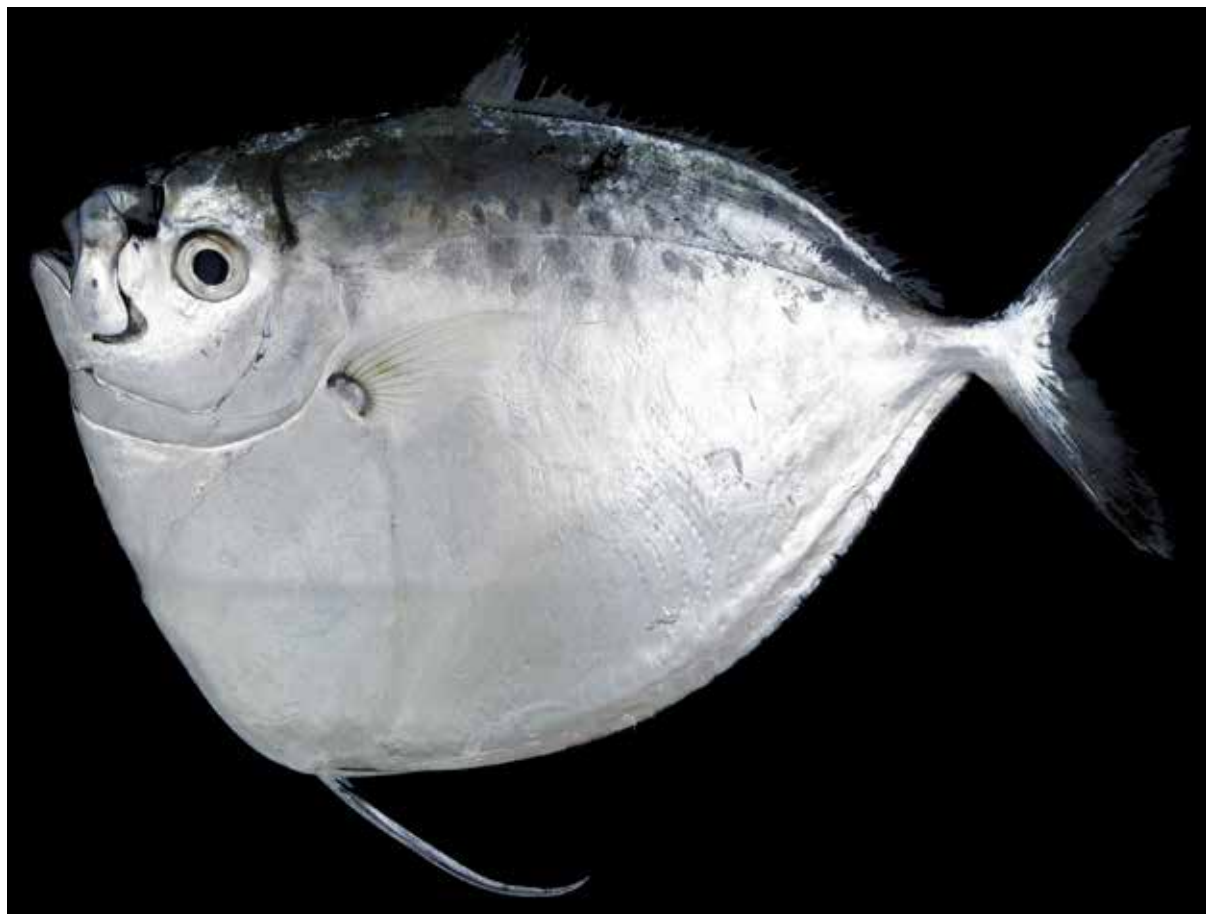
■ シイラの幼魚（KAUM-I. 62416, 78.5 mm SL）



■ 水揚げされた体長 1 m ほどのシイラ (2005 年 5 月 26 日撮影)



■ 大量に水揚げされたシイラはまとめて氷水に漬けられる (2007 年 1 月 9 日撮影)

ギンカガミ属 *Mene maculata* (Bloch & Schneider, 1801)**ギンカガミ** 珍しさ ★★★■ ギンカガミ *Mene maculata* KAUM-I. 56778, 214.9 mm SL

【解説】体は著しく側扁し、円盤状を呈する。一様に銀白色で、体背面は暗色。体側上部に暗色斑が散在する。口は前方に突出させることが出来る。幼魚は腹鰭付近の体腹縁の下方への突出が著しく、三角形に近い体形をしている。体長は 20 cm 程度だが、体高が非常に高いためやや大きくみえる。内之浦では体長数 cm の幼魚から成魚まで幅広く漁獲される。インド・西太平洋に広く分布し、国内では北海道と小笠原諸島を除くほぼ全域に分布する。内之浦湾では定置網によって散発的に漁獲されるが、時折大量に漁獲され、「カッタ」と称される。その独特の体形から三枚におろすことが困難であり、食用となることは少ないが、宮崎県などにおいては干物に加工される。おろさずに塩焼きや煮つけにするとサンマのような身質で美味しい魚である。特徴的な容姿のため、水族館での飼育も試みられているが、長期的な飼育は困難という。(畑 晴陵)



■ ギンカガミの幼魚 (KAUM-I. 63198, 47.4 mm SL)



■ ギンカガミの口は前方によく伸びる (KAUM-I. 96822, 206.7 mm SL)



■ 多量に水揚げされるギンカガミは選別されて出荷される (2008年7月12日撮影)

イトヒキアジ属 *Alectis ciliaris* (Bloch, 1787)

イトヒキアジ 珍しさ★★



■ イトヒキアジ *Alectis ciliaris* KAUM-I. 94396, 257.0 mm SL

【解説】頭部背縁が突出する。体側に「く」の字状の横帯が複数はある。幼魚では体高が著しく高く、背鰭と臀鰭の前部の軟条が糸状に著しく伸長することが特徴。この特徴的な形態は、猛毒をもつハコクラゲ類であるハブクラゲやアンドンクラゲに擬態しているとする説もあるが、詳細は分かっていない。最大体長に関しては、標本に基づくものでは尾叉長 109 cm、体重 16.5 kg の記録があるものの、18.8 kg の個体の記録もあり、より大型になるものと考えられている (Smith-Vaniz, 1999)。小型甲殻類を好んで食べるものと考えられている (Gunn, 1990)。内之浦湾においては、幼魚は夏から秋にかけて定置網により頻繁に漁獲されるが、成魚も時折漁獲される。刺身のほか、焼き物にしても非常に美味しい魚である。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたイトヒキアジの大型個体。背鰭と臀鰭はほとんど伸長していない (2010年1月23日撮影)

イトヒキアジ属 *Alectis indica* (Rüppell, 1830)

ウマツラアジ

珍しさ ★★★★★

■ ウマツラアジ *Alectis indica* KAUM-I. 110099, 390.5 mm SL

【解説】イトヒキアジに類似するが、頭部背縁が凹むことにより識別される。また、幼魚は背鰭と臀鰭の前部の軟条のみならず、腹鰭各軟条も糸状に伸長する。背鰭各棘は尾叉長 18 cm 程度に成長すると皮下に埋没する。アフリカ東岸からオーストラリア、日本にかけて広く分布する。食性については不明な点が多いが、多様な魚類と甲殻類を餌としているらしい (Gunn, 1990)。最大で全長 150 cm、体重 21.4 kg の記録がある (Smith-Vaniz, 1999)。内之浦湾においては稀でイトヒキアジと比べて漁獲された例は少ない。また、本調査では体長 30 cm 以上の個体のみが確認されており、幼魚は観察されなかった。(畑 晴陵)

■ ウマツラアジ *Alectis indica* (2009年9月9日撮影)

マブタシマアジ属 *Alepes djedaba* (Forsskål, 1775)**クロボシヒラアジ** 珍しさ ★★★★★■ クロボシヒラアジ *Alepes djedaba* KAUM-I. 109029, 251.4 mm SL

【解説】上顎歯は1列。体は銀白色を呈し、上半部は青みがかった緑色。胸鰭と尾鰭は明るい黄色。鰓蓋上部に黒色斑を有し、よく似たマブタシマアジではこれがないことにより、識別が可能である。アフリカ東岸からインドネシア、日本にかけてのインド・西太平洋に広く分布する。近年ではスエズ運河を通じて地中海やマルマラ海にも進入して分布を拡大している (Golani et al., 2013; Artüz and Kubanç, 2014)。しかし、日本国内における記録は少なく、内之浦湾のほか、志布志湾 (Iwatsuki and Kimura, 1996)、薩摩半島西岸笠沙からの記録に限られる。しかし、宮崎県沿岸においては頻繁に水揚げされ、食用魚として流通している (三木涼平氏、私信)。内之浦湾においても20個体以上がまとまって漁獲され、さらにそのうち一部の個体においては発達した卵巣がみられたことから、内之浦湾を含む九州東岸においては再生産をおこなっている可能性が高い。身は赤みが強く、脂肪分が少ない。歯ごたえに富み、新鮮なものは刺身にして美味。(畑 晴陵)



■ クロボシヒラアジの成熟した卵巣 (KAUM-I. 109029)

イトヒラアジ属 *Carangichthys oblongus* (Cuvier, 1833)**テンジクアジ** 珍しさ ★★★★★

【解説】本種の成魚は背鰭と臀鰭の前部軟条が糸状に伸長するが、写真の個体のように幼魚ではあまり伸長しない。側線直走部は曲走部よりも長い。側線場の稜鱗(ぜいご)の数は35~45。本種は同属のイトヒラアジ(本書未掲載)に酷似するが、背鰭軟条部基底に沿う黒色斑がない、あるいはあっても極めて不明瞭(イトヒラアジでは1列に並ぶ)、側線直走部が曲走部よりも長いことなどにより識別される。幼魚は橙色を呈し、体側には不明瞭な横帯が多数はある。やや稀な種であり、生態に関しても不明点が多い。日本国内では相模湾以南の太平洋沿岸から散発的に記録がある。内之浦湾においても漁獲されることは極めて稀で、写真の1標本のみが残されている。この幼魚はムラサキクラゲに付随していたことが確認されている。(畑 晴陵)



■ テンジクアジ *Carangichthys oblongus* KAUM-I. 12706, 92.1 mm SL

ヨロイアジ属 *Carangoides chrysophrys* (Cuvier, 1833)

ヒシヨロイアジ 珍しさ ★★★★★



■ ヒシヨロイアジ *Carangoides chrysophrys* KAUM-I. 109941, 391.0 mm SL

【解説】体は側扁し、体背面から体側上部にかけては金色がかった銀白色を呈する。大型個体の体側には金色の小斑点が散在する。鰓蓋後部には黒斑がある。マルヒラアジに類似するが、ヒシヨロイアジは吻部が鈍く、また上顎が下顎よりも突出し、シマアジのような顔つきを呈することにより識別できる。水深 60 m 以浅の浅所に多く生息し、海底付近を数個体の群れで遊泳する。日本近海においては高知県以南から記録されているが、報告数は少なく、内之浦湾においても写真の 1 個体が確認されたのみ。身は歯ごたえに富み、美味。(畑 晴陵)

ヨロイアジ属 *Carangoides coeruleopinnatus* (Rüppell, 1830)

マルヒラアジ 珍しさ ★★



■ マルヒラアジ *Carangoides coeruleopinnatus* KAUM-I. 56710, 221.2 mm SL

【解説】体高が高く、背鰭と臀鰭の前部軟条は糸状に伸長する。糸状に伸長した背鰭軟条は、成長に伴い短くなる。幼魚の体には黄色横帯が複数はいる。内之浦湾においては時折定置網により漁獲されるが、体長 20 cm 未満の小型個体が多く、食用に供されることは少ない。オーストラリア北部における観察によると、サイウオ類やワニギス類を中心に、小型の底生性魚類をおもな餌とすることが知られている (Gunn, 1990)。(畑 晴陵)

ヨロイアジ属 *Carangoides ferdau* (Forsskål, 1775)

クロヒラアジ 珍しさ ★★★



■ クロヒラアジ *Carangoides ferdau* KAUM-I. 78167, 175.5 mm SL

【解説】体側面には楔形の暗色横帯が多数はいる。吻端は丸い。サンゴ礁や砂底域など、沿岸浅所に多く生息する。肉食性で、甲殻類をおもな餌とする。内之浦湾ではやや珍しい魚であり、定置網により漁獲される。最大で全長 50 cm 程度に成長するが、湾内で得られるものは体長 20 cm 程度の個体がほとんどであり、食用にされることは少なく、市場の評価も高くはない。なお、他のアジ類の例に漏れず、刺身にして美味しい魚である。(畑 晴陵)

ヨロイアジ属 *Carangoides hedlandensis* (Whitley, 1934)

リュウキュウヨロイアジ

珍しさ ★★★



■ リュウキュウヨロイアジ *Carangoides hedlandensis* KAUM-I. 80889, 167.5 mm SL

【解説】体高が高く、体形が丸みを帯びること、眼隔域の頭部背縁が張り出すことが特徴。背鰭と臀鰭の前部軟条が糸状に伸長し、成熟したオスではその他数本の軟条も糸状に伸長する。オーストラリア北部の大陸棚上では最も量的に多いアジ科魚類の 1 種とされ (Gunn, 1990)、内之浦湾においてもヨロイアジ属魚類としては多く、定置網により散発的に漁獲されるが、マルヒラアジほどは多獲されない。最大で尾叉長 30 cm に満たない小型種であり、漁獲量も少ないため、内之浦においては食用とされることはあまりない。(畑 晴陵)

ヨロイアジ属 *Carangoides orthogrammus* (Jordan & Gilbert, 1882)**ナンヨウカイワリ** 珍しさ ★★★★★

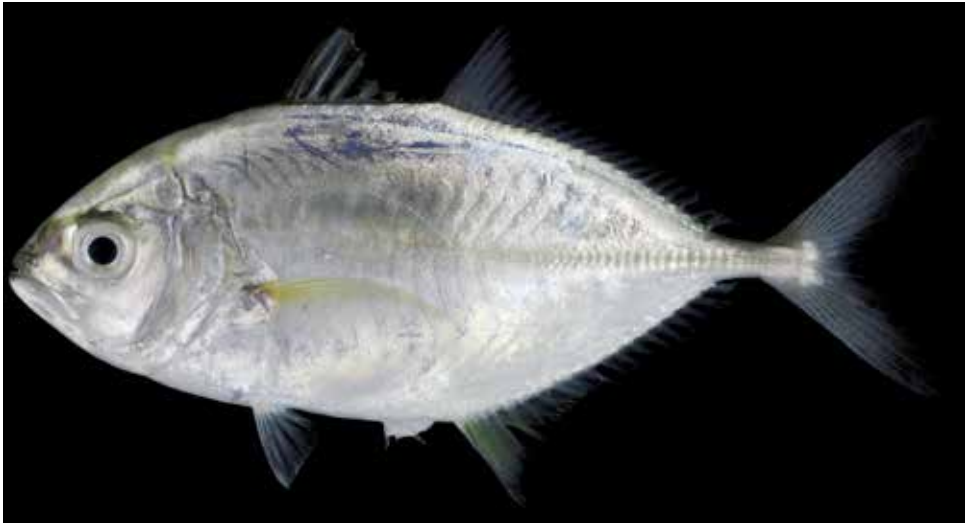
■ ナンヨウカイワリ *Carangoides orthogrammus*
KAUM-I. 110100, 322.4 mm SL

【解説】体側上半部は緑がかかる。背鰭、臀鰭、および尾鰭は青色。体側には黄色斑点が散在する。吻部は尖る。生態に関しては不明な点が多いものの、砂をほじくり返して中に潜む甲殻類をおもに捕食することが知られる。琉球列島など、島嶼域に多く生息し、内湾や淡水の影響のある水域における出現は稀とされる。内之浦湾においても珍しい魚であり、水揚げが2例のみ確認された。最大で全長70 cmに達することが知られるが、一般的には体長40 cm程度。他のヒラアジ類と区別されず、食用にされる。(畑 晴陵)

ギンガメアジ属 *Caranx ignobilis* (Forsskål, 1775)**ロウニンアジ** 珍しさ ★★★★★

■ ロウニンアジ *Caranx ignobilis* KAUM-I. 52174, 261.4 mm SL

【解説】体高が高く、成魚では吻部背縁と体軸のなす角度が60度以上と大きい。幼魚の体は卵型。幼魚から若魚にかけては河川河口にも頻繁に進入し、純淡水域にも現れる (Blaber and Cyrus, 1983)。魚類、頭足類、甲殻類などを幅広く捕食し、大型のイセエビ類を捕食する数少ない魚としても知られる (Sudekum et al., 1991)。通常は単独または数個体で行動するが、産卵時は大きな群れを形成し、そこからつがい飛び出すようにして産卵・放精を行う。また、成熟したオスは体が一様に黒化する (Cayetano, 2000)。奄美・沖縄地方では全長1 m近い大型魚が数多く水揚げされており、巨大な個体はジャイアント・トレパリー (GT) と呼ばれ釣り人たちの憧れとなっている。内之浦湾では大きくても全長50 cm程度の個体が水揚げされる程度で、数十個体の群れで入網することもある。(畑 晴陵)

ギンガメアジ属 *Caranx melampygyus* Cuvier, 1833**カスミアジ** 珍しさ ★★★★★■ カスミアジ *Caranx melampygyus* KAUM-I. 78175, 67.0 mm SL

【解説】成魚では体の上半部は緑色を呈し、体側には小黒色斑が散在し、背鰭、臀鰭、および尾鰭は青色。幼魚では胸鰭が黄色を呈することにより、同属他種と識別される。インド・凡太平洋に広く分布するが、ペルシャ湾からは記録されていない。幼魚は清澄な水域を好み、汽水域にも進入するが、純淡水域にまで進入することはないものと思われる（Cayetano, 2000）。単独または数個体で摂餌をおこない（Potts, 1980）、幼魚は甲殻類をおもな餌とするが、成長に伴い魚類の比率が上昇する（Sudekum et al., 1991）。鹿児島県本土において成魚は稀で、得られるものは幼魚がほとんど。内之浦湾においても、罾網により幼魚が得られたのみ。（畑 晴陵）

ギンガメアジ属 *Caranx papuensis* Alleyne & Macleay, 1877**オニヒラアジ** 珍しさ ★★★★★■ 市場に並ぶオニヒラアジ *Caranx papuensis* (2011年2月22日撮影)

【解説】体側上部は淡褐色で、小黒色斑が散在する。胸鰭、腹鰭、臀鰭、および尾鰭下葉は黄色。鰓蓋上方に大きい白色斑がある。背鰭と臀鰭の軟条数の合計は 37 ~ 41。国内では鹿児島県笠沙町からのみ知られるイトウオニヒラアジ（本書未掲載）は本種に酷似するが、背鰭と臀鰭の軟条数の合計が 34 ~ 37 であること、成魚においては鰓蓋上方に白色斑がないことで識別される。最大で尾叉長 68 cm、体重 6.4 kg に達する（Smith-Vaniz, 1999）。日本国内においては和歌山県以南の太平洋沿岸、琉球列島、および小笠原諸島に分布するが、内之浦においては稀な魚であり、本調査においても、写真の 1 個体の水揚げが確認されたのみ。（畑 晴陵）

ギンガメアジ属 *Caranx sexfasciatus* Quoy & Gaimard, 1825

ギンガメアジ 珍しさ★★



■ ギンガメアジ *Caranx sexfasciatus* KAUM-I. 62288, 504.6 mm SL

【解説】体は長卵形を呈し、稜鱗は黒ずむ。体長数 cm の幼魚の体は長卵形で、金色を呈し、幅広い6本の黒色横帯がはいる。河口域にも頻繁に出現し、幼魚は純淡水域にも進入する（伊藤、1963; Blaber and Cyrus, 1983）。幼魚はエビ類を多く捕食するが、成魚は餌のほぼすべてを魚類に依存する（Blaber and Cyrus, 1983; Cayetano, 2000）。「ギンガメアジ」の名は、銀色の「ガメアジ」の意であり、和歌山県における呼称。内之浦では成魚は「平アジ」、小型個体は「エバ」と称され、大型個体も多く水揚げされる。（畑 晴陵）



■ ギンガメアジ KAUM-I. 56761, 126.6 mm SL (下)



■ 市場に並ぶギンガメアジ
(2013年10月10日撮影)



■ ギンガメアジの幼魚 (KAUM-I. 67752, 54.9 mm SL)

ギンガメアジ属 *Caranx tille* Cuvier, 1833

ミナミギンガメアジ

珍しさ ★★★★★



■ ミナミギンガメアジ *Caranx tille* KAUM-I. 94100, 283.4 mm SL (上), KAUM-I. 200528, 301.6 mm SL (下)

【解説】体は長卵形を呈し、臀鰭と尾鰭は黄色。ギンガメアジに酷似するが、眼の前方の頭部背縁が凸状に張り出し、吻端が鈍いこと、鰓蓋上部の黒斑が成魚では瞳孔よりも大きいこと、稜鱗が黒ずまず、灰色であることなどにより識別される。日本国内においては稀な種であり、山口県下関、沖縄島と、鹿児島県内においては内之浦湾のほか、笠沙と種子島および奄美大島から記録がある（瀬能、2013b；畑・本村、2017d；畑ほか、2017e）。内之浦湾においては近年、個体数が増加しつつあるようで、時折十数個体の群れが漁獲されている。

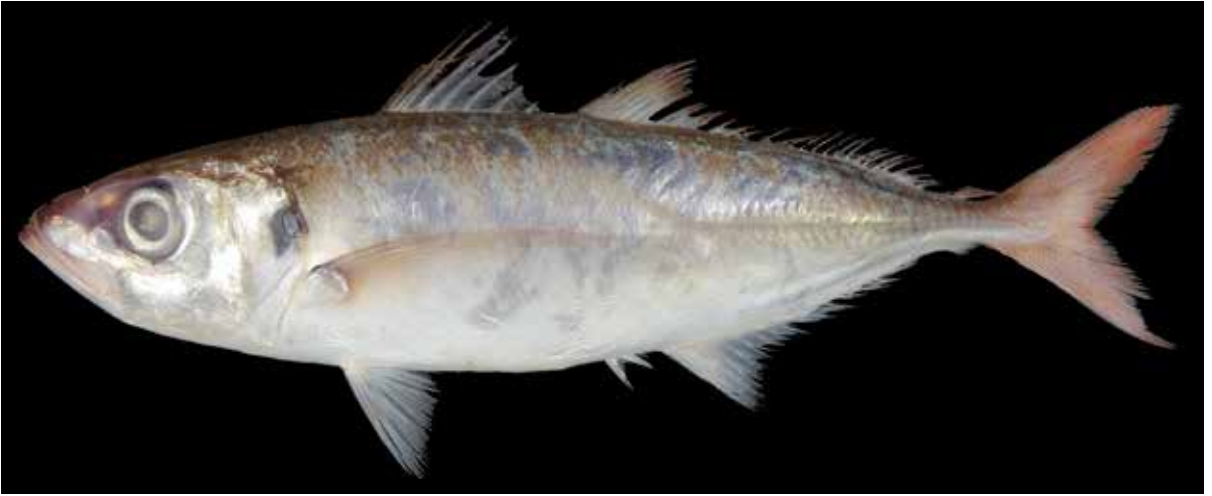
(畑 晴陵)



■ ミナミギンガメアジ KAUM-I. 94101, 286.6 mm SL

ムロアジ属 *Decapterus akaadsi* Abe, 1958

アカアジ 珍しさ ★★★★★



■ アカアジ *Decapterus akaadsi* KAUM-I. 59967, 184.5 mm SL

【解説】体は側扁し、体高が高い。尾鰭は一樣に鮮やかな赤色。体は銀白色を呈し、体側上部は茶色を帯びる。6月から7月にかけて、東シナ海南部において産卵をおこなうものと推定されている。発生後1年で尾叉長19 cm、2年で23 cm、3年で26 cmほどに成長し、10歳の個体も確認されている（白石ほか、2010b）。北海道以南の日本各地に広く分布し、鹿児島県本土や種子島においては巻網や釣りにより時折漁獲される。枕崎近海においてはオアカムロと共に巻網によって頻繁に漁獲されるが（岩坪ほか、2016）、内之浦湾においては稀。本調査においても2013年4月に漁獲された写真の1個体が確認されたのみである。（畑 晴陵）

ムロアジ属 *Decapterus macarellus* (Cuvier, 1833)

クサヤモロ 珍しさ ★★★★★



■ クサヤモロ *Decapterus macarellus* KAUM-I. 98048, 266.0 mm SL

【解説】体は細長い紡錘形。体背面は深緑色。尾鰭は淡黄色。体側上部は緑色を呈するが、鮮度の良い個体では青色縦帯がはいる。九州南部における産卵期は4～7月にかけてであり、最小成熟個体は尾叉長25 cmの2歳魚。発生後1年で尾叉長20 cm、2年で25 cm、3年で30 cmほどに成長し、8歳を越える個体も確認されている（Shiraishi et al., 2010）。暖流の影響の強い島嶼域に多いことが知られ（岸田、1974）、琉球列島においては普通種であるが、内湾環境の内之浦湾においては比較的稀。刺身にして非常に美味な魚であるが、伊豆諸島の名物である「くさや」の原料としても珍重され、本種を用いたものは最高級品として扱われる。（畑 晴陵）



■ クサヤモロ *Decapterus macarellus* (2003年10月9日撮影)

ムロアジ属 *Decapterus macrosoma* Bleeker, 1851

モロ 珍しさ★★★



■ モロ *Decapterus macrosoma* KAUM-I. 67147, 173.1 mm SL

【解説】体は円筒形で細長い。体は銀白色を呈し、上部は青みがかかる。鮮度の良い個体では体側中央に細い黄色縦帯がはいる。尾鰭は一様に黄色。日本では北海道以南に広く分布し、内之浦湾を含む鹿児島県本土各地においても定置網で多数が漁獲される。九州南部における産卵期は5～8月にかけて。発生後1年で尾叉長19 cm、2年で25 cm、3年で28 cmに達し、最小成熟個体は尾叉長23 cmの2歳魚であることが報告されている(Shiraishi et al., 2010a)。最大で体長25 cm程度に達するが、内之浦で見られるものは15 cm未満の小型個体がほとんどである。そのためもあり、食用として利用されることは少なく、餌料に用いられることが多い。(畑 晴陵)



■ モロ *Decapterus macrosoma* (2006年8月25日撮影)

ムロアジ属 *Decapterus maruadsi* (Temminck & Schlegel, 1843)**マルアジ** 珍しさ★■ マルアジ *Decapterus maruadsi* KAUM-I. 68426, 173.1 mm SL

【解説】体側上半部は青みがかった緑色を呈し、体側下部から体腹面にかけては銀白色。マアジに似るが、マルアジは背鰭と臀鰭の後方に小離鰭を有することで識別できる。発生後1年で尾叉長20 cm、2年で26 cm、3年で29 cmに成長し、6歳の個体も報告されている。九州西方における産卵期は春から夏にかけてであり、最小成熟個体は尾叉長24 cmの2歳魚であることが報告されている（Oshimo et al., 2006）。その体色から、鹿児島県本土各地で「青アジ」と呼ばれ、流通する。内之浦湾では定置網や釣りで頻繁に漁獲される。マアジよりも廉価に流通するものの、新鮮なものは刺身などで非常に美味である。本種を含むムロアジ類は南日本各地で多く漁獲され、重要な食用魚であるが、近年、日本近海における資源量の減少が懸念されている（安田・依田、2016）。（畑 晴陵）

ムロアジ属 *Decapterus muroadsi* (Temminck & Schlegel, 1843)**ムロアジ** 珍しさ★★■ ムロアジ *Decapterus muroadsi* KAUM-I. 86529, 207.6 mm SL

【解説】体は細長く、円筒形。体側上部は緑色を呈し、体側下部は銀白色。体側には黄色縦帯がはいる。尾鰭上葉は淡黄色を呈し、下葉は赤色。体長40 cmに達し、北海道以南の日本各地に広く分布する。生態に関しては不明な点が多いが、夏に産卵するものと考えられている（安田・依田、2016）。内之浦湾では、体長20 cm未満の若魚から40 cm程度の大型個体までが得られるが、数は多くなく、定置網にしばしば漁獲される程度。美味しい魚であるが、内之浦における積極的な利用はないものと思われる。（畑 晴陵）

ムロアジ属 *Decapterus smithvanizi* Kimura, Katahira & Kuriwa, 2013**サクラアジ** 珍しさ ★★★★★■ サクラアジ *Decapterus smithvanizi* KAUM-I. 98072, 225.4 mm SL

【解説】体は紡錘形を呈し、尾鰭は鮮やかな赤色。日本のほか、南シナ海、インドネシア、およびタイのプーケット島からのみ報告されている。オアカムロに酷似するが、胸鰭が長く、第2背鰭起部直下に達すること（オアカムロでは達しない）により容易に識別される（Kimura et al., 2013）。アカアジと比較して体高が低い。日本国内における分布は岩坪ほか（2016）により沖縄県久米島沖と鹿児島県枕崎市沖から得られた計2個体に基づき初めて確認された。内之浦湾においては畑・本村（2017b）によって日本3例目の個体として報告された写真の個体（KAUM-I. 98072）のみが得られており、内之浦湾は本種の分布の北限。最大で体長269.5 mmに達する（岩坪ほか、2016）。内之浦では「赤アジ」と称され、オアカムロと区別されずに扱われる。（畑 晴陵）

ムロアジ属 *Decapterus tabl* Berry, 1968**オアカムロ** 珍しさ ★★★★★■ オアカムロ *Decapterus tabl* (2007年4月5日撮影)

【解説】体は細長い紡錘形。尾鰭は赤色。表層付近に多いが、ハダカイワシ類などを追って水深300 m以深にも出現する。発生後1年で尾叉長22 cm、2年で29 cm、3年で33 cmほどに成長し、10歳の個体も確認されている。産卵は東シナ海南部以南において、夏季におこなうことが知られている（Oshimo et al., 2014）。大陸棚縁辺部の水深200 mほどある海域の表層から中層にかけて生息し、沿岸域における出現は稀（岸田、1974）。枕崎近海では巻網によって大量に漁獲されるが（岩坪ほか、2016）、内湾環境の内之浦湾においては極めて稀。本調査においても、2007年4月5日に漁獲された写真の個体が確認されたのみ。大型個体は刺身にして美味。（畑 晴陵）

ツムブリ属 *Elagatis bipinnulata* (Quoy & Gaimard, 1825)

ツムブリ 珍しさ ★★★



■ ツムブリ *Elagatis bipinnulata* (2011年1月27日撮影)

【解説】体は細長い紡錘形。体背面は濃青色を呈し、体腹面は銀白色。体側中央には2本の青色縦帯があり、その間は黄色。尾柄部に上下1対の小離鰭を有する。全長1m以上に成長する。世界中の暖海に広く分布し、日本国内においては青森県以南の広い範囲から報告されている。表層付近を群れで遊泳し、種子島などにおいては数百個体の大きな群れが定置網に入ることもある。漁獲量にばらつきが大きく、一般に流通することは少ない。身は赤みが強く、やや柔らかく、刺身や焼き魚にして美味。食用魚のほか、釣りの対象としても人気が高い。内之浦における漁獲はやや稀であるものの、入網した際には同時に複数個体が水揚げされ、「丁加金（ちょかきん）」と呼ばれて市場に並べられる。(畑 晴陵)

カイワリ属 *Kaiwarinus equula* (Temminck & Schlegel, 1844)

カイワリ 珍しさ ★



■ カイワリ *Kaiwarinus equula* KAUM-I. 71262, 89.5 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体側には不明瞭な横帯が複数ある。腹鰭、臀鰭、および尾鰭は鮮やかな黄色。最大でも全長 30 cm に達しない小型種であるが、ハワイなどのものは 50 cm に達することが知られ、また体高が低く、別種である可能性が指摘されている (Jordan and Snyder, 1907; Smith-Vaniz, 1999; 瀬能, 2013b)。砂底や岩礁に生息し、マダイやヒメジ類、セミホウボウなど、自分よりも大きい様々な魚の陰に隠れて泳ぐ性質 (併泳と呼ばれる) が知られる (小林, 1995)。口腔内に等脚類の 1 種シマアジノエが寄生していることが多い (山内, 2014; 2016)。内之浦湾においては定置網によって幼魚から成魚まで多数が漁獲される。「えば」、「こぜん」などと称される。一般に流通することは少ないものの、淡泊で美味しい魚。(畑 晴陵)



■ カイワリ (2008 年 11 月 18 日撮影)

オニアジ属 *Megalaspis cordyla* (Linnaeus, 1758)

オニアジ 珍しさ★★★★



■ オニアジ *Megalaspis cordyla* KAUM-I. 34312, 287.5 mm SL (上), KAUM-I. 74743, 111.0 mm SL (下)

【解説】体は側扁し、体側中央には幅広く稜鱗 (ぜいご) が発達する。背鰭と臀鰭の後方にそれぞれ約 10 個の小離鰭が並ぶ。体は一様に銀白色を呈し、稜鱗よりも上方では一様に青みがかった黒色。幼魚では体は体腹面を除き一様に黒色。内之浦湾では成魚の漁獲は稀であるが、幼魚は夏から秋にかけて散発的にまとまった数が漁獲される。(畑 晴陵)

ブリモドキ属 *Naucrates ductor* (Linnaeus, 1758)

ブリモドキ 珍しさ★★★★



■ ブリモドキ *Naucrates ductor* KAUM-I. 61527, 151.7 mm SL



■ ブリモドキ *Naucrates ductor* KAUM-I. 38847, 131.9 mm SL

【解説】体は細長く、やや側扁する。体は白色を呈し、黒色横帯が多数はいる。この色彩がブリの幼魚（モジャコと呼ばれる）と類似するため、ブリモドキの名がある。サメなどの大型魚に随伴して泳ぐ性質があり、その様子が大型魚を先導している様に見えることから、「パイロットフィッシュ」の別称がある。内之浦湾では稀に定置網で漁獲されるが、これも大型魚の随伴に伴い入網したものと思われる。

(畑 晴陵)



■ ブリモドキ KAUM-I. 89403, 53.5 mm SL

クロアジモドキ属 *Parastromateus niger* (Bloch, 1795)**クロアジモドキ** 珍しさ ★★★★★

■ 水揚げされたクロアジモドキ *Parastromateus niger* (2003年6月11日撮影)

【解説】体は強く側扁し、一様に黒褐色。背鰭棘は皮下に埋没する。成魚では腹鰭を欠く。幼魚は明瞭な腹鰭をそなえ、体は黄色を呈し、幅広い黒色横帯が多数ある。死後、体は一様に黒色となるが、生時、体は淡い灰白色を呈し、数本の白色横帯があり、背鰭と臀鰭は鈍い黄色と、死後とは全く異なる色彩を呈することが知られている (Tan, 2009)。国内では青森県から九州南岸にかけての太平洋岸、兵庫県浜坂から山口県にかけての日本海沿岸、鹿児島県笠沙、瀬戸内海、および小笠原諸島などから記録があるが、いずれの海域においても多くはないようである。また、琉球列島からは記録されていない。アフリカ東岸から韓国、ニューギニア島、およびオーストラリア北岸にかけてのインド・西太平洋に広く分布する。昼間は底層に多く、夜間は水面付近に浮上する。夜間は、水面付近で体を横倒しにし、胸鰭を立てて泳ぐ、特異的な習性が観察されている。この泳ぎ方の目的は不明であるが、水面付近のプランクトンを食べるためとする説がある (Smith-Vaniz, 1999; Tan, 2009)。尾柄部に鋭い稜鱗 (ぜいご) をそなえるなどアジ科の特徴を有するものの、成魚では第1背鰭と腹鰭が皮下に埋没するなど、本種の分類学的位置づけは長らく混乱があった。原記載では本種はマナガツオ科に帰属されたが、その後、本種1種のみからなるクロアジモドキ科に含められていた時期もある (例えば松原, 1955)。クロアジモドキ属の学名である「*Parastromateus*」も、ラテン語で Para (似た) + Stromateus (大西洋に分布するマナガツオ科魚類: 本書未掲載) からなる語であり、マナガツオに似た魚を意味する。Apsangikar (1953) や篠原 (1966) などにより、クロアジモドキをアジ科に含められており、現在ではこれらに従うことがほとんどである。内之浦湾では稀な魚であり、写真の個体の水揚げが確認されたのみ。(畑 晴陵)

シマアジ属 *Pseudocaranx dentex* (Bloch & Schneider, 1801)

シマアジ 珍しさ★★

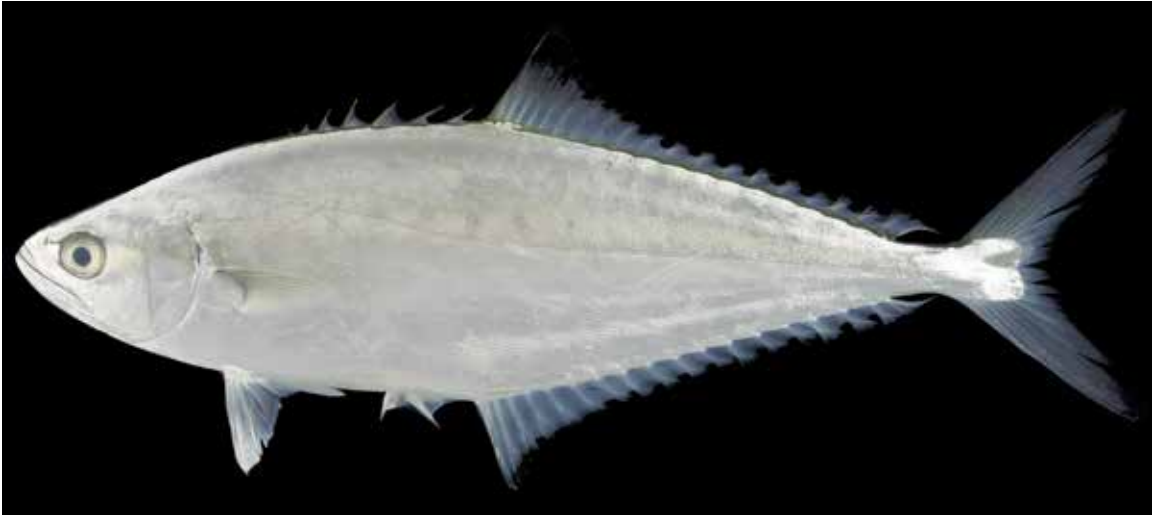


■ シマアジ *Pseudocaranx dentex* KAUM-I. 56709, 223.3 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、上半部は緑がかかる。体側中央には鮮やかな黄色縦帯がはいる。東太平洋を除く世界中の温帯域に広く分布するとされているが（瀬能、2013b）、その中には複数の種が含まれているとする見解もあり（Smith-Vaniz and Jelks, 2006）、さらに、日本近海においても脊椎骨数が24のものと25のもの、少なくとも2種が分布しているとする説もある（Yamaoka et al., 1992）。高級魚として名高く、新鮮なものは歯ごたえに富み、刺身や寿司で美味である。内之浦湾においては体長数 cm の幼魚から成魚まで、幅広い成長段階の個体が多く漁獲される。（畑 晴陵）



■ シマアジの幼魚 *Pseudocaranx dentex* (KAUM-I. 71444, 49.8 mm SL)

イケカツオ属 *Scomberoides lysan* (Forsskål, 1775)**イケカツオ** 珍しさ ★★★■ イケカツオ *Scomberoides lysan* KAUM-I. 94353, 179.2 mm SL

【解説】体は一様に銀白色を呈し、著しく側扁する。体は前後方向に長い針状の鱗に被われる。背鰭各棘間の鰭膜は切れ込む。背鰭各棘は交互に左右を向いて並ぶ。幼魚はボラやカタクチイワシ、トウゴロウイワシ類などの鱗を剥いで食べる習性が知られる (Major, 1973)。最大で体長 50 cm 程度に成長するが、鹿児島県本土における漁獲は体長 20 cm 程度の小型魚が多く、利用されることはほとんどないものと思われる。(畑 晴陵)



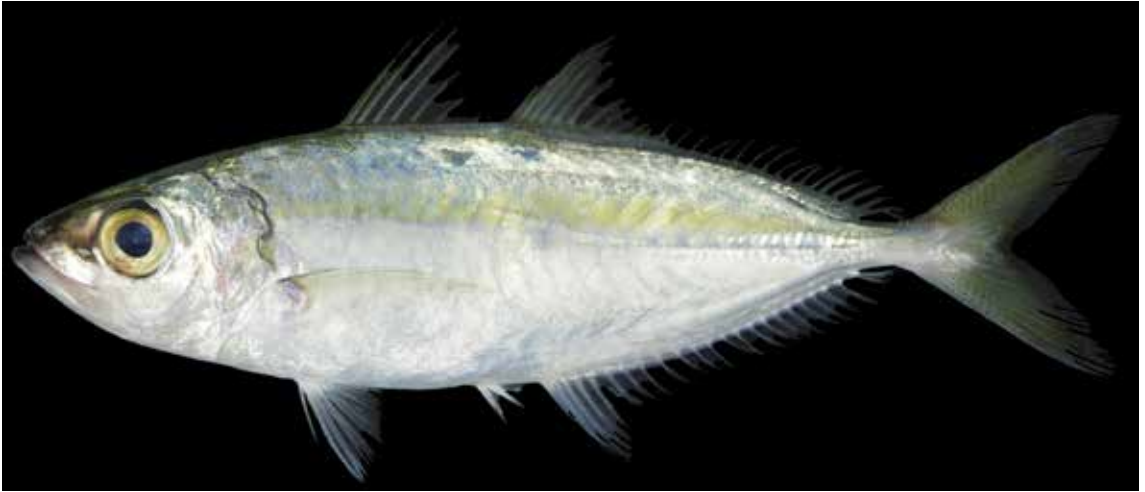
■ イケカツオ KAUM-I. 56779, 163.6 mm SL

イケカツオ属 *Scomberoides tol* (Cuvier, 1832)**ミナミイケカツオ** 珍しさ ★★★■ ミナミイケカツオ *Scomberoides tol* KAUM-I. 51118, 143.6 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、側扁する。口は小さく、上顎後端は瞳孔後端直下に達する。体側上部には 1 列の暗青色斑が並ぶ。体側鱗は前後方向に細長い針状を呈する。成魚は魚類をおもな餌とするが、幼魚は他の魚の鱗を剥がして捕食することもある (Smith-Vaniz, 1999)。背鰭棘は鋭く、また有毒とされ (重田, 2007)、刺されると激しく痛む。内之浦湾においては時折漁獲されるが、小型個体がほとんどであり、利用されることはないものと思われる。(畑 晴陵)

メアジ属 *Selar crumenophthalmus* (Bloch, 1793)

メアジ 珍しさ★★



■ メアジ *Selar crumenophthalmus* KAUM-I. 56763, 121.4 mm SL

【解説】体は側扁し、眼が大きい。体側上部は緑がかった青色を呈し、鮮度の良い個体では眼の後方から尾柄にかけて細い黄色縦帯がはいる。鰓孔下部に突起がある。成魚は種子島において大量に漁獲されるものの、内之浦湾では少ない。しかし、内之浦湾においても幼魚は定置網により多く漁獲される。メアジと比較して脂肪分が少なく、価格は安いものの、美味な魚である。内之浦では「銀アジ」と称される。(畑 晴陵)

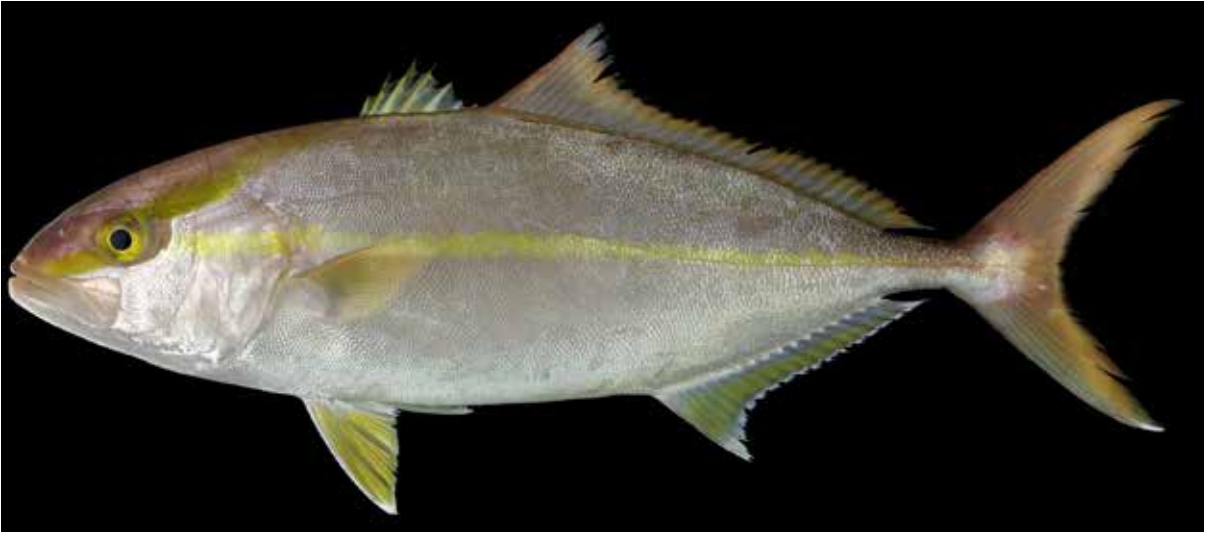
ブリ属 *Seriola aureovittata* Temminck & Schlegel, 1845

ヒラマサ 珍しさ★★★



■ ヒラマサ *Seriola aureovittata* KAUM-I. 98148, 620.0 mm SL

【解説】体側中央に幅広い黄色縦帯がはいる。ブリに酷似するが、上顎後縁が丸く（ブリでは角張る）、胸鰭が腹鰭よりも短い（腹鰭とほぼ同長）ことにより識別される。肉質は脂肪分が少なく歯ごたえに富み、非常に味の良い魚として知られ、高値で取引される。「ブリヒラ」と称されるブリとの交配個体も多く生産されている（近畿大学大学新聞、2000）。交配個体はブリよりも体高が低く、上顎の形態はヒラマサに類似するが、ヒラマサと比較して腹鰭が短いことが知られる。また、カンパチとヒラマサの交配個体も作出されている（村田、1998）。ヒラマサはほとんど毎日多量の水揚げのあるカンパチやブリと比較すると稀で、鹿児島県における漁獲量はカンパチの1/4、ブリの1/15に満たない（宍道、2014）。内之浦湾においては定置網により時折漁獲され、「ヒラス」と称される。(畑 晴陵)

ブリ属 *Seriola dumerili* (Risso, 1810)**カンパチ** 珍しさ★★■ カンパチ *Seriola dumerili* KAUM-I. 110103, 340.8 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、眼を通る暗色帯がはいる。この帯が前から見ると八の字に見えることが名の由来（木村、1997）。刺身にして非常に美味しい魚で、高価に取引される。ブリの養殖量の増加に伴い、県内の養殖業は鹿児島県内ではブリからカンパチへと生産魚種の転換が進んだ。ブリよりも高水温の海域を好み、北薩地域における漁獲量はブリの1/10程度であるが、大隅諸島近海では年による変動はあるものの、ブリの10倍程度が漁獲される。奄美群島においては毎年20トンほどのブリ属魚類の水揚げのほぼ全てをカンパチとヒレナガカンパチの2種が占める（宍道、2014）。内之浦においては「ネイゴ」と称され、50～100 cmほどの大型個体が多く水揚げされる。（畑 晴陵）



■ カンパチの幼魚（KAUM-I. 86515, 92.6 mm SL）



■ カンパチ KAUM-I. 94403, 267.5 mm SL（養殖生簀から逃げだした可能性のある個体）

ブリ属 *Seriola quinqueradiata* Temminck & Schlegel, 1845

ブリ 珍しさ★



■ ブリ *Seriola quinqueradiata* KAUM-I. 94406, 354.1 mm SL



■ ブリ *Seriola quinqueradiata* の幼魚 (KAUM-I. 62421, 148.3 mm SL)

【解説】体は銀白色、体側中央に黄色縦帯がはいり、それよりも上部は緑がかった青色。幼魚の体は黄色を呈し、細い黒色横帯が多数はいり、「モジャコ」と称される。幼魚から成魚にかけて、体サイズを問わず、マイワシやカタクチイワシ、マアジを中心とする小魚やイカをおもな餌とする。若狭湾における調査では、冬季にはマアジを、春から夏にかけてはニシン目魚類をおもな餌とすることが知られている（三谷、1958）。回遊魚であり、鹿児島県太平洋沿岸に春に出現する群れは、その後瀬戸内海や紀伊水道に移動するが、一部で鹿児島近海に滞留する群れの存在も知られている。さらに、鹿児島県近海の個体が能登半島にまで移動する例も知られており、その回遊生態に関しては不明な点が多い（阪地ほか、2010）。内之浦湾においては養殖もさかんにおこなわれている。定置網でも多く漁獲され、10 kg 以上の個体も少なくない。（畑 晴陵）



■ 水揚げされた大型のブリ（2011年2月22日撮影）

ブリ属 *Seriola rivoliana* Valenciennes, 1833**ヒレナガカンパチ**

珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたヒレナガカンパチ *Seriola rivoliana* (2007年10月5日撮影)

【解説】カンパチに酷似するが、第2背鰭と臀鰭の先端が鎌状に伸長すること（カンパチでは伸長しない）、尾鰭が一樣に褐色を呈すること（尾鰭下葉後端が白色を呈する）ことなどにより識別される。県内ではカンパチと比較してかなり稀であり、水揚げ量は本土ではカンパチの1%未満、与論島においても1/3程度であることが報告されている(央道、2014)。内之浦においても稀であり、写真の3個体の水揚げが確認されたのみ。美味しい魚であるものの、カンパチよりもやや安価に取引されることが多い。(畑 晴陵)



■ 市場に並ぶヒレナガカンパチ *Seriola rivoliana* (2017年5月26日撮影)

コバンアジ属 *Trachinotus baillonii* (Lacepède, 1801)

コバンアジ 珍しさ ★★★★★



■ コバンアジ *Trachinotus baillonii* KAUM-I. 96825, 174.0 mm SL



■ コバンアジ *Trachinotus baillonii* KAUM-I. 96826, 147.7 mm SL

【解説】体は著しく側扁し、卵円形を呈する。成魚の体側には数個の眼よりも小さい黒色斑がある。背鰭軟条部前部、臀鰭前部と尾鰭上下両縁は黒色。稚魚はマルコバンとの識別が困難であるが、背鰭と臀鰭の棘部鰭膜に黒色素胞がない（マルコバンでは鰭膜に黒色素胞が密集する）ことで識別される。また、稚魚は流れ藻につかず、水面付近を遊泳することが知られる（小島、1985）。成魚は岸近くの水深1mもない場所に現れることも多い。夜間によく釣れることから、昼夜を問わずに活動的な種であるといえる。本種を含め本属魚類は咽頭歯が発達しており、これを用いて甲殻類や貝類を砕いて食べる。日本国内においては福島県双葉町・新潟県佐渡ヶ島以南に広く分布する（本間、1959；小島、1985）。琉球列島においては普通種であるが、内之浦湾においては極めて稀。（畑 晴陵）

コバンアジ属 *Trachinotus blochii* (Lacepède, 1801)

マルコバン 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたマルコバン *Trachinotus blochii* (2014年9月30日撮影)

【解説】体は著しく側扁し、卵円形を呈する。インド・西太平洋に広く分布し、宮城県から沖縄島にかけての太平洋沿岸から散発的に報告がある。養殖状況下における成長が速く、また丈夫な魚であるため、沖縄県においては養殖がなされている（牧野ほか、2003）。鹿児島県本土では極めて稀な魚であり、標本に基づく記録は南さつま市笠沙町（財団法人鹿児島市水族館公社、2008）と鹿児島市谷山沖（畑・本村、2017c）からのものに限られる。内之浦湾においても2014年9月30日に水揚げされた個体の写真が記録されているのみ。（畑 晴陵）

マアジ属 *Trachurus japonicus* (Temminck & Schlegel, 1844)

マアジ 珍しさ ★



■ マアジ *Trachurus japonicus* KAUM-I. 98175, 347.0 mm SL (黒アジと呼ばれるタイプ)

【解説】体高が高く、背面が黄色がかる、「黄アジ」と呼ばれるものと、体高が低く、全体に黒みがかかる、「黒アジ」と呼ばれる2形が知られる。内之浦湾においては双方が定置網や釣りなどにより多数漁獲され、年間300トンほどが漁獲される。それらのうち「黒アジ」に関しては体長50 cm以上の個体も珍しくない。内之浦湾において漁獲される「黄アジ」のうち、体高が特に高く、黄色みの強いものは「黄金アジ」（こがねあじ）と称され、県内外を問わず極めて高価に取引される。特に5月中旬～6月中旬にかけて漁獲されるものは「梅雨したあじ」と呼ばれ、脂がのり、とろけるような味わいである。内之浦湾産のものは生食のみならず、干物の原料としても非常に高い評価を受けている。「えっがね（イセエビ）」と並ぶ内之浦を代表する生き物である。和名である「アジ」は、古く平安時代中期（900年代）に編纂された格式（法令集）である延喜式に「阿遅」として初めて記されており、この呼称は極めて古くからあったものと考えられている（榮川、1982）。（畑 晴陵）



■ マアジ *Trachurus japonicus* KAUM-I. 58677, 170.5 mm SL (黄アジと呼ばれるタイプ)



■ マアジ *Trachurus japonicus* KAUM-I. 73164, 102.5 mm SL



■ マアジ *Trachurus japonicus* KAUM-I. 65659, 113.6 mm SL



■ 活魚として水槽にいれられた大型のマアジ (左) と水揚げされた大型のマアジ (右)

オキアジ属 *Uraspis helvola* (Forster, 1801)

オキアジ 珍しさ ★★★



■ オキアジ *Uraspis helvola* KAUM-I. 98080, 238.0 mm SL

【解説】体は側扁し、円盤状を呈し、不明瞭な横帯が複数はいる。幼魚は体の黄色みが強い。奄美大島近海においては、水深 20 ~ 50 m から釣獲されている。また、同海域での産卵期は夏と思われ、おもにカワハギ類などの魚類を餌としていることが知られている（徳留・竹下、1977；徳留、1979）。体長 20 ~ 30 cm 程度の若魚は流れ藻などの浮遊物に随伴する性質がある（工藤、1998）。内之浦湾においては定置網で漁獲される。最大で体長 40 cm 程度に成長し、食用にされる。刺身などにして美味しい魚である。（畑 晴陵）



■ オキアジ KAUM-I. 60153, 175.5 mm SL



■ オキアジの幼魚 (KAUM-I. 12737, 53.3 mm SL)

オキアジ属 *Uraspis uraspis* (Günther, 1860)**インドオキアジ** 珍しさ★★★★■ インドオキアジ *Uraspis uraspis* KAUM-I. 30391, 75.5 mm SL

【解説】オキアジに酷似するが、胸部と胸鰭基底部の無鱗域が連続することにより識別される。オキアジほど大きくならず、最大でも尾叉長 28 cm (Smith-Vaniz, 1999)。一般的に水深 50 m 以深に生息するが、内之浦湾においては水深 30 m に設置された定置網によっても得られている。国内では稀な種であり、土佐湾、鹿児島県本土、沖縄島からのみ報告がある。内之浦湾においても稀であるが、漁獲された際にはオキアジと区別されずに扱われており、食用となる。(畑 晴陵)

■ インドオキアジ *Uraspis uraspis* KAUM-I. 10947, 128.6 mm SL

イトヒキヒイラギ属 *Equulites popei* (Whitley, 1932)

ヒメヒイラギ 珍しさ ★★★



■ ヒメヒイラギ *Equulites elongatus* KAUM-I. 71265, 74.1 mm SL

【解説】体高が低く、体が細長いことで近似種と容易に識別される。相模湾から九州南岸にかけての太平洋沿岸、能登半島から九州南岸にかけての日本海・東シナ海沿岸に分布する。内之浦湾においては比較的稀な種であり、定置網によって散発的に漁獲される。最大でも体長 10 cm に達しない小型種であること、また漁獲量が少ないことから、内之浦湾においては漁獲されても食用となることは少ない。(畑 晴陵)

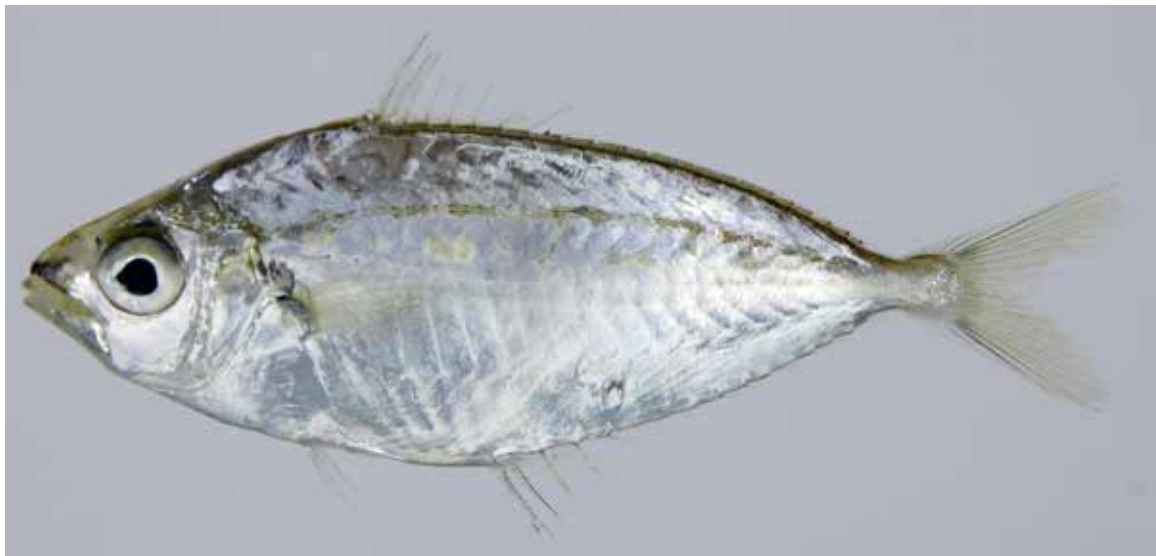
イトヒキヒイラギ属 *Equulites rivulatus* (Temminck & Schlegel, 1845)

オキヒイラギ 珍しさ ★



■ オキヒイラギ *Equulites rivulatus* KAUM-I. 98032, 63.9 mm SL

【解説】本種を含むヒイラギ科魚類は食道を取り巻くように発光器を有し、そこに発光細菌を共生させることによって極めて微弱であるが、発光することが知られる。オキヒイラギにおいてはオスの方がメスのものより遥かに大きい発光器を有することが知られ(末広、1960)、何らかのセックスアピールに用いられることが考えられる。鹿児島県本土における個体数は多く、内之浦湾においても最も多く漁獲されるヒイラギ科魚類である。素揚げなどにして食される。(畑 晴陵)



■ オキヒイラギ *Equulites rivulatus* KAUM-I. 56729, 75.9 mm SL

台湾ヒイラギ属 *Eubleekeria splendens* (Cuvier, 1829)

台湾ヒイラギ 珍しさ ★★★



■ 台湾ヒイラギ *Eubleekeria splendens* KAUM-I. 56764, 106.6 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、不明瞭な体側上半部に波状横線が多数はいる。背鰭前部に黒色斑がある。九州以北における分布記録は少なく、高知県、宮崎県、鹿児島県におけるものに限られる（坂巻、2010；藤原・本村、2016）。内之浦湾においては時折漁獲され、大量に市場に並ぶこともあり、決して稀な魚ではない。（畑 晴陵）

コバンヒイラギ属 *Gazza minuta* (Bloch, 1795)

コバンヒイラギ 珍しさ ★★★



■ コバンヒイラギ *Gazza minuta* KAUM-I. 56765, 67.1 mm SL



■ コバンヒイラギ *Gazza minuta* KAUM-I. 65974, 116.5 mm SL

【解説】 その名の通り、体は小判型を呈し、体側上部には虫食い状斑が多数はいる。口は前方向に伸出し、両顎には鋭い犬歯状歯がある。鹿児島県内においては薩摩半島西岸、内之浦湾、および種子島から報告されており、南さつま市は本種の分布の北限（藤原・本村、2016）。内之浦湾においては定置網により時折得られるが、最大でも体長 15 cm 程度の小型種であり、もっぱら養殖餌料に利用される。（畑 晴陵）

ヒイラギ属 *Nuchequula nuchalis* (Temminck & Schlegel, 1845)**ヒイラギ** 珍しさ★★■ ヒイラギ *Nuchequula nuchalis* KAUM-I. 73171, 97.1 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、背鰭前部と項部に暗色斑を有する。食道付近に発光細菌の一種 *Photobacterium leiognathi* を共生させ、発光することが知られる。体腹縁付近の発光により、自身の影を打ち消すカウンターシェーディングの役割が示唆されているが、浅海性魚類である本種における同機能の有効性に関しては疑問視する向きもある（和田、2007）。内之浦湾においては定置網によって漁獲され、「えば」と称される。煮つけなどにして美味な魚であり、高価に取引される。体表のぬめりが強いが、氷水につけると容易に落ちる。「ヒイラギ」の名は、本種の背鰭棘が鋭く、ヒイラギの葉に似ていることに由来する（西松、2017）。（畑 晴陵）



■ ヒイラギ（KAUM-I. 61523, 104.6 mm SL）



■ ヒイラギ（KAUM-I. 62484, 103.8 mm SL）



■ ヒイラギ（KAUM-I. 107714, 94.2 mm SL）

キビレヒイラギ属 *Photopectoralis bindus* (Valenciennes, 1835)

ネツタイヒイラギ

珍しさ ★★★★★

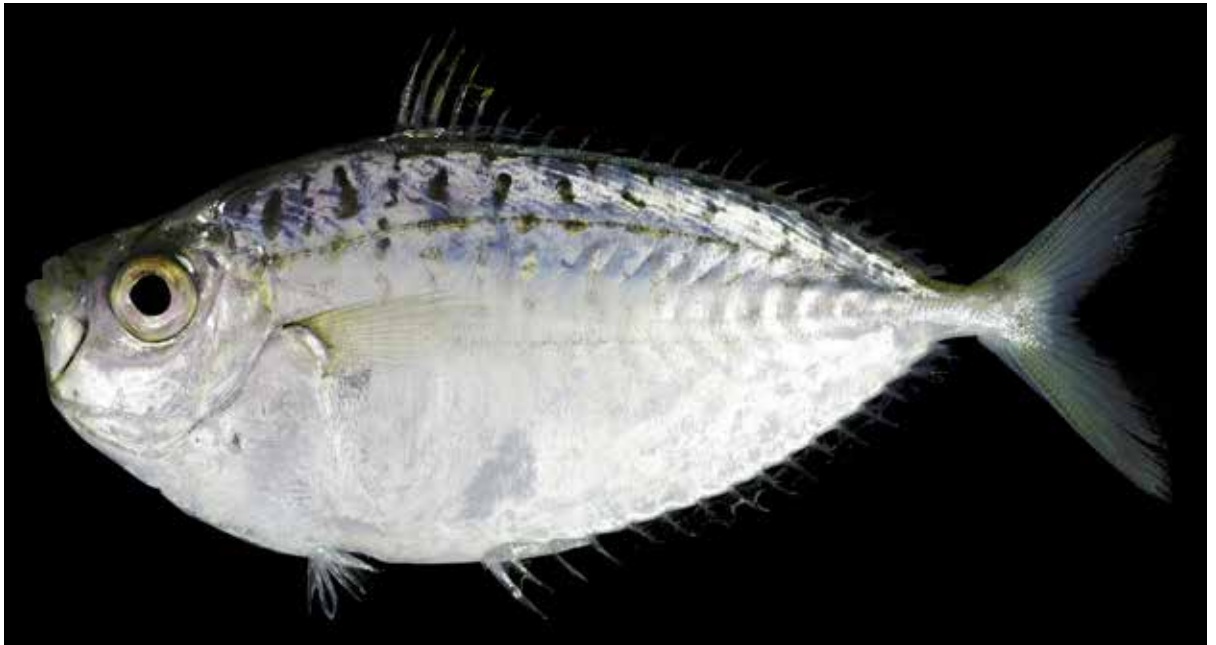
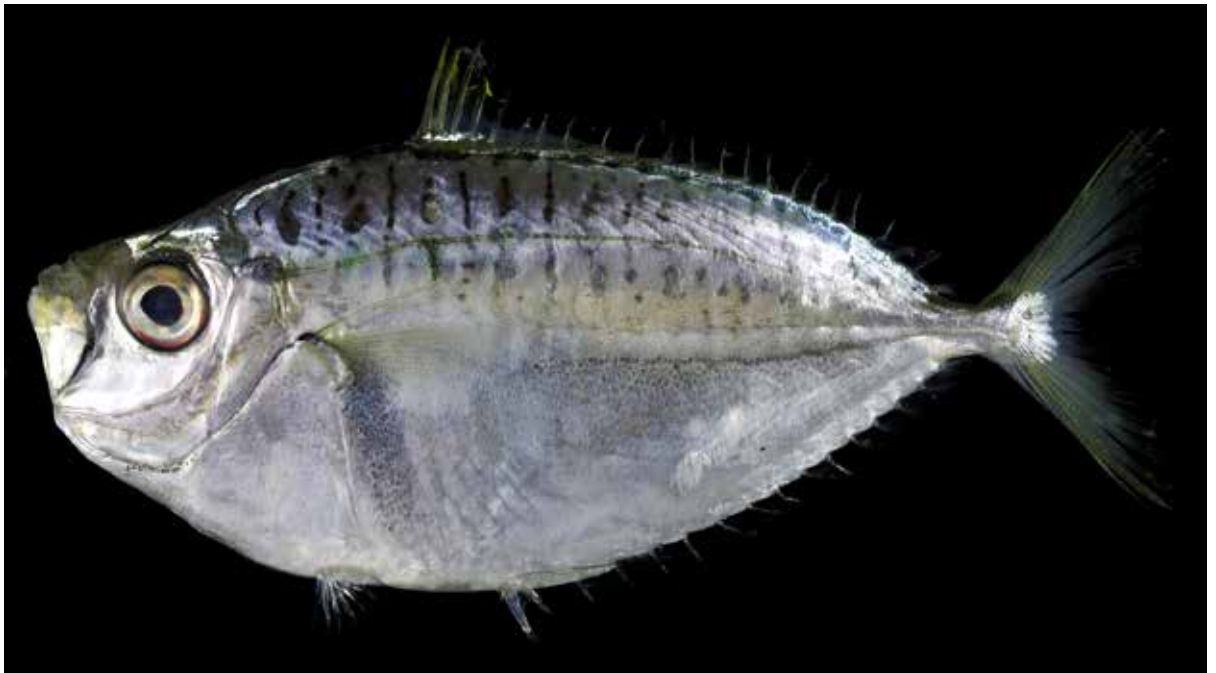


■ ネツタイヒイラギ *Photopectoralis bindus* KAUM-I. 63153, 72.1 mm SL

【解説】口は前方へ伸出する。体側上半部には虫食い模様が入る。背鰭棘部上縁と臀鰭棘部下縁は鮮やかな黄色。日本国内では高知県以布利、大隅半島東岸、薩摩半島東岸、および沖縄島から記録がある（藤原・本村、2016）。内之浦湾においては珍しく、稀に定置網により漁獲される程度。小型で側扁し、肉量も少ないことから、食用になることはほとんどないものと思われる。（畑 晴陵）



■ ホソウケグチヒイラギ *Deveximentus indicium* KAUM-I. 63199, 78.0 mm SL

ウケグチヒイラギ属 *Deveximentum indicium* (Monkolprasit, 1973)**ホソウケグチヒイラギ** 珍しさ ★■ ホソウケグチヒイラギ *Deveximentum indicium* KAUM-I. 56747, 89.1 mm SL■ ホソウケグチヒイラギ *Deveximentum indicium* KAUM-I. 97610, 95.0 mm SL

【解説】体は著しく側扁する。口は前上方に突出し、両顎に鋭い歯がない。体側上部に緑がかった黒色を呈する横帯が多数はいる。日本における分布は木村ほか(2008)により、内之浦湾から得られた標本に基づき初めて確認され、同時に標準和名ホソウケグチヒイラギが提唱された。鹿児島県以外の日本国内においては極めて稀な魚であり、土佐湾からの記録があるにすぎない(遠藤、2012)。内之浦湾においてはごく普通種であり、定置網により頻繁に大量に漁獲される。小型であり、また肉量が少ないことから食用となることはほとんどない。(畑 晴陵)

シマガツオ属 *Brama orcini* Cuvier, 1831

マルバラシマガツオ

珍しさ ★★★★★



■ マルバラシマガツオ *Brama orcini* KAUM-I. 24605, 58.5 mm SL

【解説】体は著しく側扁し、円盤状。体背面から体側上部は紫がかった黒色を呈し、体側中部から体腹面は一様に銀白色。おもに水深 100 m 以浅に生息するが、1229 m から得られた記録もある（波戸岡・甲斐、2013）。シマガツオ科魚類はマグロ類などの重要な餌生物であることが知られており（谷津、1997）、本種もシイラやキハダ、カツオ、およびゴマサバなどの胃から得られた記録がある（Snyder, 1904; Mead, 1972; Last and Moteki, 2001; 畑・本村、2016a）。内之浦湾では極めて稀な魚であり、写真の 1 個体が畑ほか（2015）によって報告されているのみである。（畑 晴陵）

リュウグウノヒメ属 *Pterycombus petersii* (Hilgendorf, 1878)

リュウグウノヒメ

珍しさ ★★★★★

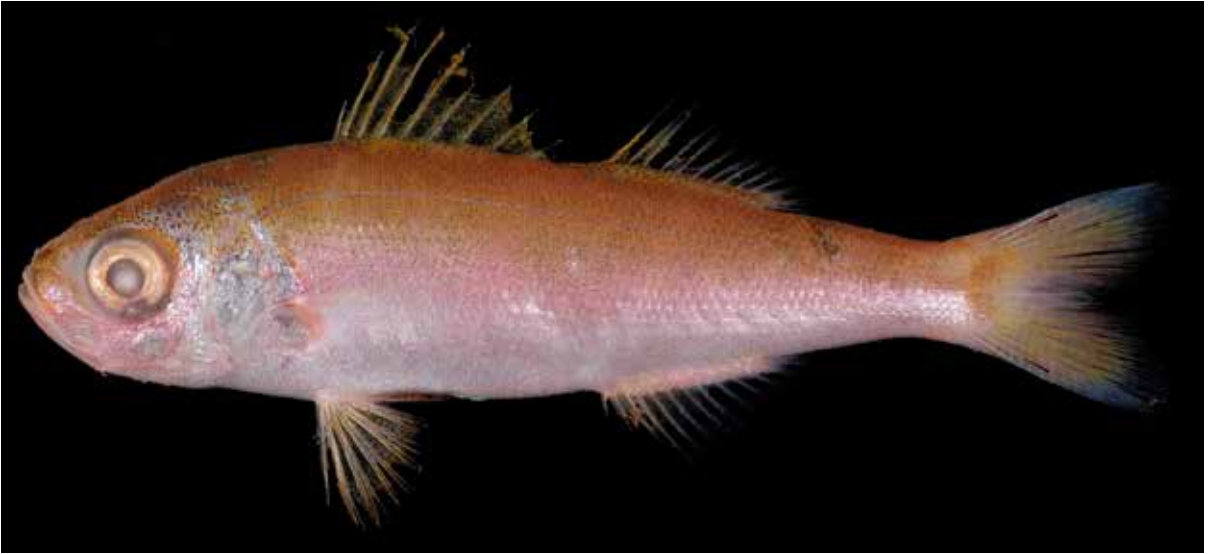
【解説】体は一様に銀白色。背鰭、臀鰭、腹鰭、および胸鰭腋部は漆黒。体は長楕円形で著しく側扁し、幼魚では背鰭と臀鰭は著しく大きい。成魚では低くなり、いずれも体高より低くなる。背鰭と臀鰭は基底部に溝があり、折りたたむことが出来る。体側中央の各鱗は中央部が後ろ向きの棘状に隆起する。鹿児島県においてはこれまで畑ほか（2015）によって笠沙産の個体が報告されているのみであったが、内之浦湾における水揚げが確認された。当初、Jordan et al. (1913) によって本種の和名はリュウグウノツカイとされたが、*Regalecus russelii* (Cuvier, 1816) (リュウグウノツカイ科：現在の標準和名はリュウグウノツカイ；本書未掲載) との混同を回避するため、岡田・松原（1938）により *Pterycombus petersii* に対し新たな和名リュウグウノヒメが提唱された。（畑 晴陵）



■ リュウグウノヒメの頭部 (KAUM-I. 101850)



■ リュウグウノヒメ *Pterycombus petersii* KAUM-I. 101850, 158.1 mm SL

ハチビキ属 *Erythrocles schlegelii* (Richardson, 1846)**ハチビキ** 珍しさ ★★★★★■ ハチビキの幼魚 *Erythrocles schlegelii* KAUM-I. 103583, 54.0 mm SL

【解説】ハチビキ科魚類はフエダイ科のヒメダイ属やイシフエダイ属、タカサゴ科のヒメタカサゴなどに似るが、第1背鰭と第2背鰭がよく離れ、その間に2～3本の遊離小棘があることが特徴。ハチビキは尾柄に隆起線があることで同科他種と識別されるが、不明瞭なこともある。内之浦で得られた幼魚は不明瞭ながら、隆起線がみられた。本種は水深100～350mの深場の岩礁域に生息するため、内之浦湾のような沿岸域の内湾環境で採集されることは稀であろう。最大で70cmほどにまで成長する。本種は国内において青森県下北半島、茨城県～土佐湾の太平洋沿岸、宇和海、新潟県～九州北岸の日本海沿岸、琉球列島、東シナ海および九州一パラオ海嶺から記録されており、近年、鹿児島湾からも報告されている(岩坪、2017)。内之浦からも標本が得られたことにより、これまで記録のなかった九州太平洋沿岸にも広く分布することが示された。内之浦では体長約5cmの写真の幼魚1個体のみが得られている。意外にも身は深い赤色で、サバやカツオのような身の色をしているため、関東では「赤サバ」と呼ばれる。和名に含まれる「チビキ」(血引)は、この身の色が血のように赤いことに因む。歯ごたえのある身質は刺身で食すと美味。白身魚の外見とは裏腹な赤身により、味のわりに市場での価値は低めではあるものの、味は良いので食用魚としての価値が高まることが期待される。(小枝圭太)

■ 冷凍前のハチビキ *Erythrocles schlegelii* (KAUM-I. 103583, 54.0 mm SL)

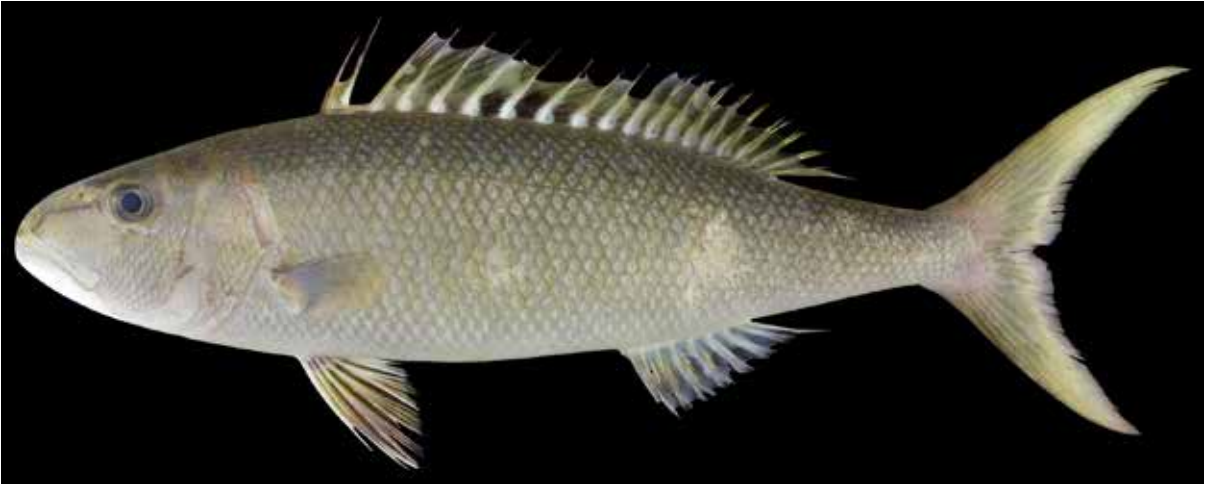
イシフエダイ属 *Aphareus rutilans* Cuvier, 1830**オオグチイシチビキ**

珍しさ ★★★★★

■ オオグチイシチビキ *Aphareus rutilans* KAUM-I. 44860, 190.6 mm SL

【解説】フエダイ科魚類は淡水域から深海まで幅広く生息し、体は側扁し、体高はセンネンダイのように高いものからアオチビキのように低いものまでである。オオグチイシチビキはイシフエダイ属に含まれ、体色は淡褐色。和名のとおり口（特に下顎）が大きく、主上顎骨後端は眼の中央下を越える。口は、開くことでさらに大きくみえる。同属のイシフエダイ（本書未掲載）は浅海性であるのに対し、オオグチイシチビキは 100 m 以深に生息することが多い。最大で 60 cm ほどに成長する。本種はこれまで千葉県館山湾～高知県柏島の太平洋沿岸、長崎県壱岐・五島、八丈島、小笠原諸島、琉球列島、南大東島から記録されており、内之浦漁港から得られた標本は、九州沿岸からの初めての記録である。内之浦漁港では体長 20 cm 以下の小型個体のみが得られている。これらは小型の個体は市場には出ないが、本種は美味であることから、大型個体が漁獲されれば市場に並ぶのであろう。内之浦漁港において採集例が少ない本種であるが、2011 年 12 月に同じ定置網から 3 個体が得られている。このことから、本種の小型個体は小群で行動する可能性がある。（小枝圭太）

■ オオグチイシチビキの幼魚 *Aphareus rutilans* (KAUM-I. 78174, 80.9 mm SL)

アオチビキ属 *Aprion virescens* Valenciennes, 1830**アオチビキ** 珍しさ ★★★★★■ アオチビキ *Aprion virescens* KAUM-I. 110101, 384.0 mm SL

【解説】体高は低くて細長く、体色は濃青色～濃緑色。胸鰭が短い。眼前部の鼻孔の下に溝があることが特徴。最大で体長 70 cm に達する大型種。大型個体の両顎には強力な犬歯状歯が並ぶ。岩礁・サンゴ礁域に生息し、大型の個体は単独で行動する。好奇心が強いためか、ダイバーに寄ってくることもあるが、ある程度の距離より近くには近づかず、付かず離れずの距離を保つ。鹿児島本土沿岸でもこういった姿の成魚が普通にみられる。魚食性が強く、引きも強いいため、釣り人にも人気がある。おもに熱帯～亜熱帯域に多い種で、国内では静岡県富戸以南の太平洋沿岸、琉球列島、南大東島、男女群島、三宅島から小笠原諸島に分布する。生食でも、火を通してても美味。ハチビキと同様に「チビキ」の名をもつが、身は白色。内之浦漁港では成魚と体長 6 cm の小型個体が 1 個体ずつ得られたのみ。(小枝圭太)

■ アオチビキの幼魚 *Aprion virescens* (KAUM-I. 80501, 62.0 mm SL)

フエダイ属 *Lutjanus argentimaculatus* (Forsskål, 1775)**ゴマフエダイ** 珍しさ★★★★■ ゴマフエダイ *Lutjanus argentimaculatus* KAUM-I. 64768, 474.0 mm SL

【解説】体高は高く、体色は一様に茶褐色。幼魚や小型個体では体側に6～8本の暗色横帯がある。体長65 cmに達する大型種。稚魚や体長20 cm程度の小型個体は淡水域・汽水域に生息するが、大型個体は水深150 mの深場からも記録があり、生活史を通じて幅広い環境を利用する種といえる。小型個体は群れで行動する。魚食性が強く、大型個体の両顎には強力な犬歯状歯が並ぶ。熱帯性の種で、和歌山県串本以南の太平洋沿岸、東シナ海中央部、琉球列島に分布する。岩手県宮古からの記録もある。内之浦漁港では「あかせみ」と呼ばれ、活魚としても市場に並ぶ。台風などで海が荒れた際に、3～4 kgの大型個体が数多く漁獲されるという。(小枝圭太)



■ 活魚とされるゴマフエダイ (2010年11月6日撮影)

フエダイ属 *Lutjanus bengalensis* (Bloch, 1790)

ベンガルフエダイ 珍しさ ★★★★★



■ ベンガルフエダイ *Lutjanus bengalensis* KAUM-I. 33931, 102.6 mm SL

【解説】体は黄色く、4本の白色斜帯が頭部から体側背側に走る。ヨスジフエダイ（本書未掲載）によく似るが、眼の下をはしる白色帯が太く、明瞭であることや体色の黄色がやや濃く鮮やかであることなどで識別できる。岩礁、サンゴ礁域に生息し、ヨスジフエダイと混群を形成することもある。国内ではこれまで神奈川県真鶴、静岡県富戸、三重県尾鷲、高知県以布利、愛媛県室手、鹿児島湾、屋久島、種子島、琉球列島から記録されており、内之浦漁港から得られた標本は九州太平洋沿岸からの標本に基づく初めての記録となる。美味であるが、体長が最大でも20 cmとやや小型である。塩焼きやバター焼きがよく合う。（小枝圭太）



■ 冷凍前のベンガルフエダイは白線が青みがかかる（KAUM-I. 33931, 102.6 mm SL）

フエダイ属 *Lutjanus fulviflamma* (Forsskål, 1775)**ニセクロホシフエダイ**

珍しさ ★★★★★



■ 市場に並びニセクロホシフエダイ (2012年10月2日撮影)

【解説】灰色の体に細い黄色縦帯が細かくはしる。体側には眼と同大の黒色斑がある。死後、地色は赤みが強くなる。小型個体は沿岸や河口の汽水域で多くみられる。成魚は岩礁・サンゴ礁域に生息する。沖縄島での最高齢は25歳で、春から初夏にかけて産卵することが報告されている (Shimose and Tachihara, 2005)。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、山口県深川湾から長崎県五島列島・野母崎、琉球列島、南大東島、小笠原諸島から記録がある。小枝 (2017a) により、ニセクロホシフエダイとして鹿児島湾から報告された写真の個体はクロホシフエダイである。美味しい魚で、沖縄県でも他のフエダイ属と比べてやや高値で取引されている。内之浦漁港では極めて稀で、2012年に1個体の水揚げが写真により確認されたのみで、標本は残っていない。(小枝圭太)

フエダイ属 *Lutjanus lutjanus* Bloch, 1790

キンセンフエダイ 珍しさ ★★★



■ キンセンフエダイ *Lutjanus lutjanus* KAUM-I. 94370, 124.6 mm SL



■ キンセンフエダイ *Lutjanus lutjanus* KAUM-I. 98000, 61.4 mm SL

【解説】体高が他のフエダイ属と比較して明らかに低く、眼が大きい。体は銀白色で、体側中央にやや太い黄色縦帯がはしり、その周囲に細い黄色縦帯が多数はしる。最大でも体長 25 cm と小型な種である。沿岸の岩礁・サンゴ礁域に生息し、数十から数百個体による群れをつくる。インド・太平洋に広く分布する熱帯性の種で、国内ではこれまで静岡県沼津、高知県以布利および柏島、鹿児島県笠沙、沖縄諸島以南の琉球列島に分布するとされてきた。内之浦湾からは 4 個体が得られており、これらは九州太平洋沿岸における初めての記録である。沖縄地方や奄美地方では食用にもなるが、最大でも 25 cm ほどと小さいため、積極的に漁獲されない。内之浦での個体数は少ない。

(小枝圭太)

フエダイ属 *Lutjanus ophuysenii* (Bleeker, 1860)

ヨコスジフエダイ

珍しさ★★



■ ヨコスジフエダイ *Lutjanus ophuysenii* KAUM-I. 56708, 201.7 mm SL(上), KAUM-I. 56727, 196.2 mm SL(下)

【解説】体高は比較的高く、体側に吻端から眼を通り尾柄部にいたる幅広い黒色縦帯がある。また、体側中央やや後方の縦帯上には縦帯幅とほぼ同様かやや大きい1黒色斑があることが特徴。タテフエダイ（本書未掲載）によく似ており、この黒色斑が薄い個体は識別が困難な場合がある。岩礁域に生息する。温帯性の種であり、国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、岩手県南三陸および千葉県館山以南の太平洋沿岸から知られ、琉球列島からは記録されていない。反対にタテフエダイは、熱帯性が強く、琉球列島に多いため、ヨコスジフエダイとは分布域がほとんど重複しない。刺身でも火を通して美味である。内之浦漁港において比較的好くみられるフエダイ科魚類であり、まとまった個体数は漁獲されないものの、散発的に得られたものは選別されて市場に並ぶ。（小枝圭太）

フエダイ属 *Lutjanus quinquelineatus* (Bloch, 1790)

ロクセンフエダイ 珍しさ★★★★



■ ロクセンフエダイ *Lutjanus quinquelineatus* KAUM-I. 12709, 148.6 mm SL

【解説】 体高は高く、黄色い体に5本の白色縦帯がはしる。この他に吻端から胸鰭基部に至る同色の縦帯が1本あり、ロクセンの名の由来となっていると考えられる。沿岸の岩礁・サンゴ礁域におもに生息するが、砂泥域の岩やサンゴなどの構造物に群れで付いていることも多い。伊豆半島東岸以南の太平洋沿岸、鹿児島湾、琉球列島、南大東島、小笠原諸島に分布するが、南日本太平洋沿岸では少ない。内之浦漁港では非常に稀で、体長約 15 cm の写真の1個体が得られたのみ。塩焼きやバター焼きがよく合う。(小枝圭太)



■ 冷凍前のロクセンフエダイ (KAUM-I. 12709, 148.6 mm SL)

フエダイ属 *Lutjanus rufolineatus* (Valenciennes, 1830)

キュウセンフエダイ

珍しさ ★★★

■ キュウセンフエダイ *Lutjanus rufolineatus* KAUM-I. 63206, 159.0 mm SL■ キュウセンフエダイ *Lutjanus rufolineatus* KAUM-I. 68815, 123.6 mm SL

【解説】体高はやや高い。生時の体は銀白色で細い金色縦帯が多数はしる。吻部はやや赤い。死後は全体に赤みが強くなり、吻部はとりわけ赤くなる。尾鰭は黄色。岩礁・サンゴ礁域で数十個体からなる群れをつくる。やや深場に多いが、岸際の浅場でも釣れる。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸にも分布するが、琉球列島に多い。内之浦漁港では比較的好くみられるフエダイ科魚類で体長 15 ~ 18 cm の個体がたびたび水揚げされ、市場に並ぶ。

(小枝圭太)

フエダイ属 *Lutjanus russellii* (Bleeker, 1849)

クロホシフエダイ 珍しさ★



■ クロホシフエダイ *Lutjanus russellii* KAUM-I. 94367, 175.4 mm SL

【解説】体高は比較的高い。体はえんじ色がかった銀白色で、体側中央やや後方に眼より大きい黒色斑があることが特徴。また、胸鰭と腹鰭、臀鰭は黄色い。似た黒色斑をもつことから、シガテラ毒をもつイッテンフエダイ（本書未掲載）と間違われることがあるが、本種は無毒。イッテンフエダイは背鰭と尾鰭も黄色いことで、本種と異なる。幼魚は体に複数本の縦線がはしるが、成長に伴い消失する。ただし、台湾では縦線が明瞭に確認できる成魚がみられる。背鰭と尾鰭は体と同じえんじ色で、胸鰭、腹鰭、臀鰭は黄色い。岩礁・サンゴ礁域に生息し、単独か数個体の小群でみられることが多い。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、山口県深川湾、長崎県五島列島・野母崎、琉球列島、南大東島、小笠原諸島に分布する。身は白身で、刺身でも火を通して美味しく、内之浦漁港では最もよくみられるフエダイ科魚類で、選別されて、「赤しび」の名で市場に並ぶ。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶクロホシフエダイ
(2013年10月1日撮影)



■ クロホシフエダイの幼魚
(KAUM-I. 6487, 96.4 mm SL)

フエダイ属 *Lutjanus sebae* (Cuvier, 1816)**センネンダイ** 珍しさ ★★★★★■ センネンダイ *Lutjanus sebae* KAUM-I. 42049, 429.2 mm SL

【解説】体高はかなり高く、白色の地色に大きく「小」の字状の赤色模様があり、非常に特徴的。大型個体では赤色が薄くなり、若魚では赤色が黒色がかかる。最大で体長 70 cm に達する大型種で、美味であるため水産的価値も高い。沿岸の岩礁・サンゴ礁域におもに生息するとされるが、大型個体は深場に多いためかダイビングでみかけることはほとんどない。また大型個体は群れをつくらず単独で行動し、小型個体は数個体からなる小群をつくり、浅場の砂泥底の岩やサンゴ、ガンガゼ類などの構造物についていることが多い。熱帯域に多い魚種で、国内では和歌山県田辺、高知県須崎、愛知県愛南、内之浦湾、鹿児島湾、兵庫県香住、島根県浜田、琉球列島からの記録がある。内之浦漁港から得られた写真の標本 (KAUM-I. 42049、体長 43 cm) は、九州沿岸からの標本に基づく初めての記録として小枝ほか (2017) により報告された。(小枝圭太)



■ 飼育されたセンネンダイ (KAUM-I. 42049)

フエダイ属 *Lutjanus stellatus* Akazaki, 1983**フエダイ** 珍しさ ★★★★★ (写真は次ページ)

【解説】体高はかなり高く、全身は黄色がかったピンク色で、各鱗は鮮やかな黄色。体側上後半部に小さな 1 白色斑がある。ナミフエダイ (本書未掲載) によく似るが、頭部に青白や青色縦線が細かく走らないことや、体側上後半部の白色斑が側線より上に位置していることなどにより識別できる。ナミフエダイが大型に成長するのに対し、本種は最大でも 40 cm 程度の中型種。岩礁・サンゴ礁域に生息する。国内ではナミフエダイが琉球列島などを中心とした熱帯性であるのに対し、本種は温帯性で鹿島灘以南の太平洋沿岸、播磨灘、周防灘、五島列島、屋久島、小笠原諸島、火山列島などから記録がある。琉球列島の沖縄県瀬底島や八重山諸島、南大東島からも記録があるが数は少ない。美味。内之浦漁港ではほとんどみられず、体長約 20 cm の写真の 1 個体が得られたのみ。(小枝圭太)



■ フエダイ *Lutjanus stellatus* KAUM-I. 102450, 215.8 mm SL

アオダイ属 *Paracaesio xanthura* (Bleeker, 1869)

ウメイロ 珍しさ ★★★★★



■ ウメイロ *Paracaesio xanthura* KAUM-I. 101852, 203.3 mm SL

【解説】体は青紫色で、体側上半部から尾鰭にかけて幅広く黄色いことが特徴。同じ科の魚種以上に色彩や名前がタカサゴ科のウメイロモドキ（本書未掲載）によく似るが、本種は背鰭および臀鰭に鱗をもたないことや黄色域が広いことで識別される。生時は青色と黄色が鮮やかで、深い場所でも退色の少ないこれら2色のコントラストはとても美しい。数十から数百の群れで行動し、口にはいる小動物を何でも食べる。ウメイロモドキと比べても深場を好み、大型の個体は水深200 mでもみられる。インド・太平洋に広く分布し、国内では神奈川県以南の太平洋沿岸、山口県萩、五島列島、琉球列島、南大東島からの記録がある。綺麗な白身は刺身や焼き料理で非常に美味。内之浦での漁獲例は極めて稀だが、鹿児島県本土における共通の呼び名である「黄ホタ」で呼ばれていた。（小枝圭太）

タカサゴ属 *Caesio caerulaurea* Lacepède, 1801**ササム口** 珍しさ★★■ ササム口 *Caesio caerulaurea* KAUM-I. 94377, 150.0 mm SL

【解説】後述のいわゆる「ぐるくん」の仲間（クマササハナム口属）と比較すると体高が高く、前上顎骨の後方突起が1つであるグループで、青色の体側の背側を黄色縦帯がはしることや尾鰭の両葉中央に黒色縦帯がはしることが特徴。サンゴ礁・岩礁域の底層から表層までに群れをなす。産卵は1個体のメスと多数のオスによって日没前におこなわれる。相模湾以南の南日本太平洋沿岸にも分布するが、琉球列島や小笠原諸島で多い。美味であり、塩焼きや唐揚げなどで火を通すとホクホクで柔らかい白身に強い旨味がある。最大で35 cmになるが、内之浦漁港では20 cm以下の小型個体しか水揚げされておらず、ほとんどは養殖魚の餌となっているが、まとめて揚がったときは市場に並ぶ。内之浦漁港では最も頻繁にみられるタカサゴ科である。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶササム口(2013年10月10日撮影)



■ 水揚げされたササム口。水揚げの直後は青く輝き美しい(2009年3月11日撮影)

ヒメタカサゴ属 *Dipterygonotus balteatus* (Valenciennes, 1830)**ヒメタカサゴ** 珍しさ ★★★■ ヒメタカサゴ *Dipterygonotus balteatus* KAUM-I. 98172, 66.6 mm SL

【解説】最大体長が 10 cm と小型の種で、体高が低く、背鰭に鱗がないことが特徴。似たホソタカサゴ（本書未掲載）とは背鰭が 14 ～ 15 棘 8 ～ 11 軟条である（ホソタカサゴでは 10 ～ 11 棘 14 ～ 16 軟条）、胸鰭が 16 ～ 19 軟条である（20 ～ 22 軟条）、体側上半部が赤褐色（青緑色）であることなどで識別される。沿岸性である。国内での分布は限定的だが、神奈川県三戸以南の太平洋沿岸と沖縄島でのみ記録されている。小型種であるため、沖縄県を含め全国的に利用されることはほとんどないと思われるが、八重山地方ではカツオ漁の撒き餌とするためにタカサゴ科の稚魚を採集する「ジャコ獲り」が夏前におこなわれており、その対象には本種も含まれていると考えられる。（小枝圭太）

■ ヒメタカサゴ *Dipterygonotus balteatus* KAUM-I. 71423, 66.6 mm SL(上), KAUM-I. 71424, 68.5 mm SL(下)

クマササハナム口属 *Pterocaesio digramma* (Bleeker, 1864)**タカサゴ** 珍しさ ★★★■ タカサゴ *Pterocaesio digramma* KAUM-I. 73960, 175.5 mm SL

【解説】クマササハナム口属は、日本にタカサゴ、ニセタカサゴ、クマササハナム口、およびイッセンタカサゴの4種が分布し、沖縄県では「ぐるくん」、奄美地方では「あかうるめ」と呼ばれて人気が高い魚である。鹿児島県の漁業者の多くが「最近ぐるくんが増えた」と言うように（多くの漁業者が「ぐるくん」と呼ぶ）、近年、鹿児島県本土でも定置網で漁獲されることが多くなっているようである。サンゴ礁域では大型肉食魚の最も好む餌魚のひとつとなっており、「ぐるくん」を生き餌とした流し釣りによって大物を狙う釣り人も多い。生きているときは白みがかかった青色だが、死後は真っ赤～赤紫色に変わるため、市場でみるものは赤色のものが多い。サンゴ礁・岩礁域に数十から数百個体の群れを成し、表層から底層まで餌を求めて移動する。三重県志摩～屋久島の太平洋沿岸、琉球列島、南大東島、小笠原諸島に分布するが、南日本では少ない。最大で30 cmほどになるが、内之浦漁港では20 cmにも満たない小型個体のみ得られているため、現在のところは利用されていない。（小枝圭太）

■ タカサゴ *Pterocaesio digramma* KAUM-I. 86532, 87.2 mm SL

クマササハナム口属 *Pterocaesio marri* Schulz, 1953

ニセタカサゴ 珍しさ ★★★



■ ニセタカサゴ *Pterocaesio marri* KAUM-I. 57294, 133.9 mm SL



■ ニセタカサゴ *Pterocaesio marri* KAUM-I. 19875, 101.2 mm SL

【解説】「ぐるくん」の仲間（クマササハナム口属）で、尾鰭の両葉後端が黒くなることで特にタカサゴに似るが、体側中央をはしる縦帯が側線に重なることで、側線の下方を走るタカサゴと区別できる。「ぐるくん」の仲間は、日中、餌を求めて表層や中層を泳ぎ回るが、夜になると単独になり、底層のサンゴ礁の上で静止したり、ゆっくり泳いだりしながら休んでいる様子がみられる。その時の体色は赤みが強くなり、死後の色に近い。沖縄県の市場に並ぶ際、多くの場合、本種とよく似たタカサゴとは互いに別の山で売られていることから、基本的にそれぞれ別の群を作っている可能性が高い。ただし、琉球列島では両種の交雑個体も報告されており（賀数ほか、2016）、混群が形成されるだけでなく、同所的に産卵することもあるようである。最大で30 cmほどになり、定番の調理法は唐揚げ。骨まで食べることができて、非常に美味。また、塩焼きや刺身でも美味である。内之浦漁港では20 cmにも満たない小型個体のみが得られていることから、現在のところは利用されていない。（小枝圭太）

クマササハナム口属 *Pterocaesio tile* (Cuvier, 1830)**クマササハナム口** 珍しさ ★★★★★■ クマササハナム口 *Pterocaesio tile* KAUM-I. 94357, 132.5 mm SL (上下は同じ個体)

【解説】ぐるくんの仲間(クマササハナム口属)で、尾鰭両葉に黒色縦帯があることで、他種と識別できる。尾鰭の様子はササム口にも似るが、本種はササム口と比べると体高が高いため簡単に区別される。タカサゴやニセタカサゴとは別群を構成していることがほとんどで、死後の赤みが強い。三重県以南の南日本太平洋沿岸でもみられるが、琉球列島や小笠原諸島に多い。ぐるくんの仲間は身質も味も良く、美味。ぐるくんといえば唐揚げが有名だが、鮮度が良いものでは刺身も美味。塩焼きにもよく合う。内之浦では非常に稀で、調査期間を通じて1個体しか確認されていない。

(小枝圭太)



■ クマササハナム口の頭部 (KAUM-I. 94357)

クマササハナム口属 *Pterocaesio trilineata* Carpenter, 1987

イツセンタカサゴ 珍しさ ★★★★★

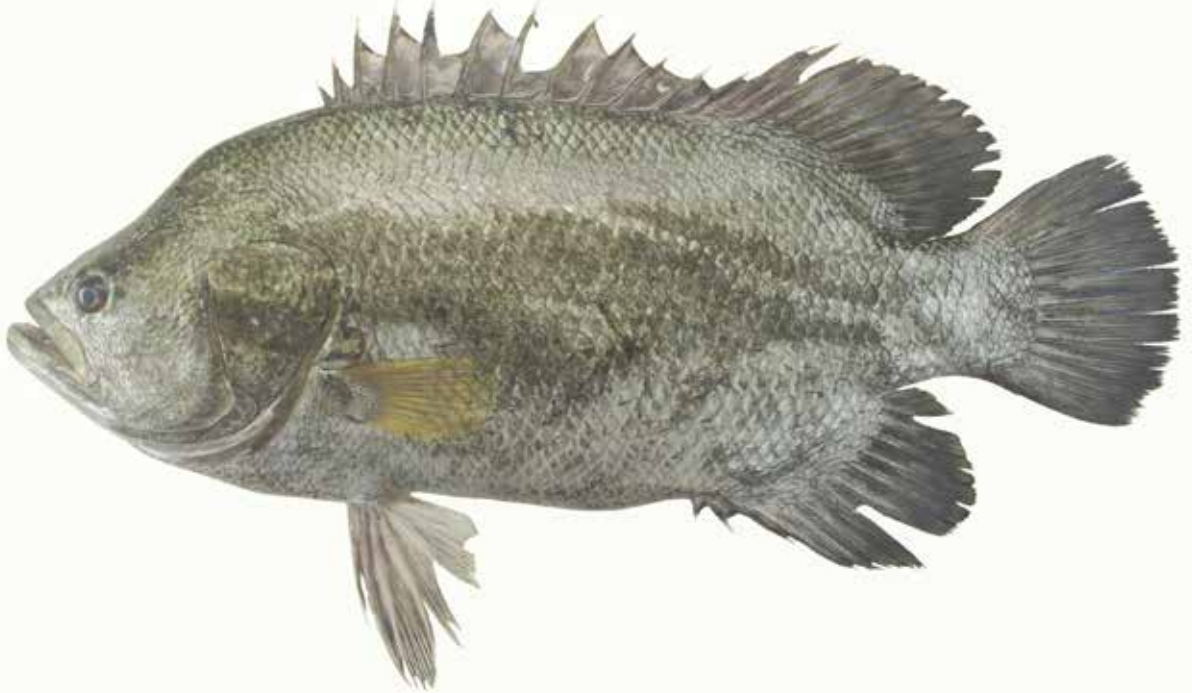


■ イツセンタカサゴ *Pterocaesio trilineata* KAUM-I. 1459, 106.5 mm SL

【解説】ぐるくんの仲間（クマササハナム口属）だが体高が低い。体側上半部に顕著な縦帯がなく、2～3本の淡い緑色縦帯がある（生時は黄色いこともある）。上部尾柄周囲鱗列数が通常11であることなどが特徴だが、ニセタカサゴとの識別が難しい個体もいる。他のぐるくん類と同様にサンゴ礁・岩礁域の底層から表層を泳ぐが、他種と比較してやや底層近くを泳いでいることが多い印象がある。南日本からの記録は稀で、相模湾と鹿児島県笠沙、鹿児島湾、内之浦湾に限られる。琉球列島に多い。体長が最大でも20 cmほどで体高も低いため、他のぐるくんと比べて食用にされることが少ない。内之浦漁港でも食用としては利用されていない。（小枝圭太）



■ イツセンタカサゴ *Pterocaesio trilineata* KAUM-I. 12698, 103.6 mm SL

マツダイ属 *Lobotes surinamensis* (Bloch, 1790)**マツダイ** 珍しさ ★★★■ マツダイ *Lobotes surinamensis* KAUM-I. 94410, 441.0 mm SL

【解説】マツダイ属は世界で1種のみが知られる。体は高く、側扁する、前鰓蓋骨縁辺に強い鋸歯がある、主鰓蓋骨に2棘あることなどが特徴。体は黒褐色から淡褐色で、幼魚・若魚は汽水域や港内などの内湾環境に生息し、枯葉に擬態して水面に横になって浮かんでいることがある。成魚は外洋に生息している。筆者が沖縄島沖合で夜間に煌々と船の光をたいて釣りをしていたところ、本種の大型個体が表層を横になって漂いながら釣り船に寄ってきたことがあった。本種の成魚には光に集まる習性があるのかもしれない。日本中に分布している。美味であり、ムニエルなど火を通した食べ方が好まれる。内之浦漁港では、大型個体が水揚げされることもあり、これらは「こしょう」と呼ばれて市場に並ぶ。(小枝圭太)



■ 水揚げされたマツダイ (2003年6月11日撮影)



■ 水揚げされたマツダイ (2011年5月21日撮影)

クロサギ属 *Gerres equulus* Temminck & Schlegel, 1844

クロサギ 珍しさ ★



■ クロサギ *Gerres equulus* KAUM-I. 38786, 204.5 mm SL (上下は同じ個体)

【解説】体は楕円形を呈し、一様に銀白色。腹鰭は鮮やかな黄色。口を前方に延ばすことができる。沿岸浅所の海底付近に生息し、底質中の小動物を、口を伸ばして捕食する。危険を感じると一瞬のうちに砂に潜り、姿を隠す。日本国内では佐渡ヶ島以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県以南の太平洋沿岸にかけて広く分布する。内之浦湾においても定置網で頻繁に漁獲され、「あめいお」、「あめ」と呼ばれる。岸近くにも多く生息し、堤防からの釣りでも釣れる。体長 25 cm 程度に成長し、大型個体は市場にも並べられ、食用となる。味は淡泊。なお、小枝 (2017b) により、クロサギとして鹿児島湾から報告された写真の個体はダイミヨウサギ (本書未掲載) である。(畑 晴陵)

クロサギ属 *Gerres macracanthus* Bleeker, 1854

ホソイトヒキサギ

珍しさ ★★★★★

■ ホソイトヒキサギ *Gerres macracanthus* KAUM-I. 94386, 99.6 mm SL

【解説】背鰭第2棘が糸状に伸長し、体側に細い横帯が複数はある。沿岸の砂底域に生息し、最大で体長 17 cm ほどになる。本種は長らくイトヒキサギ *Gerres filamentosus* の新参異名とされてきたが、Iwatsuki et al. (1996) により、有効種とされた。日本においては極めて稀な魚であり、和歌山県南部（竹内ほか、2011）、鹿児島県薩摩半島西岸・内之浦湾（畑ほか、2014a）、種子島（畑ほか、2016d）、沖縄島（宮本・岡、2014）、西表島（Iwatsuki et al., 1996）から計 6 個体のみが報告されている。写真の個体のうち、KAUM-I. 94386 は本種の日本における 7 個体目の記録となる。（畑 晴陵）



■ ホソイトヒキサギ (KAUM-I. 56720, 120.8 mm SL)

クロサギ属 *Gerres microphthalmus* Iwatsuki, Kimura & Yoshino, 2002

ヤマトイトヒキサギ

珍しさ★★



■ ヤマトイトヒキサギ *Gerres microphthalmus* KAUM-I. 38792, 183.0 mm SL

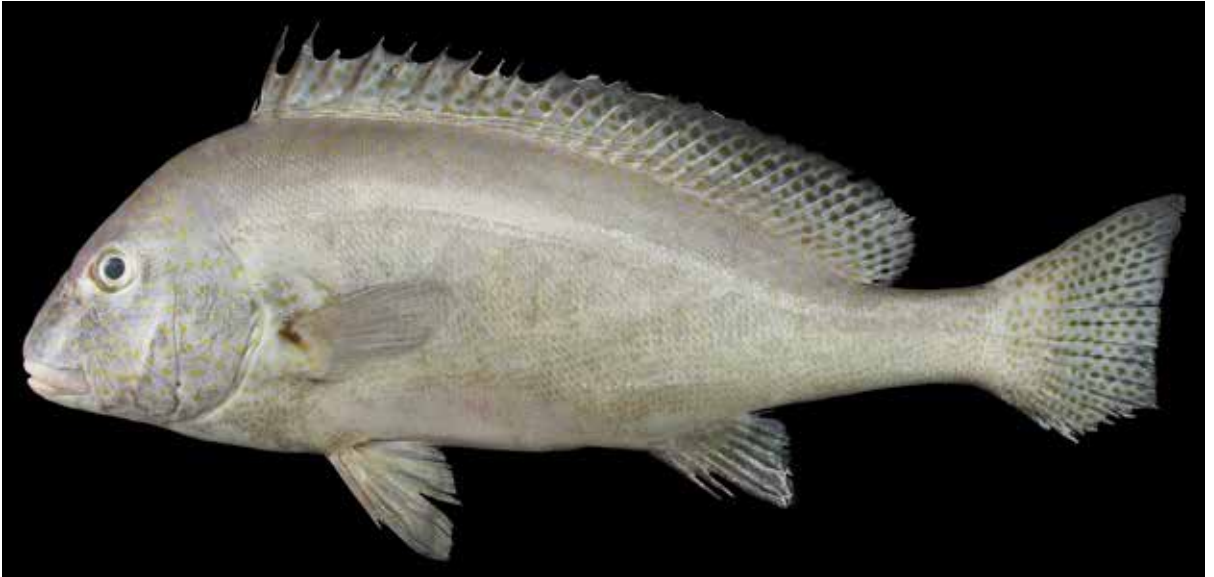
【解説】背鰭第2棘が糸状に伸長する。体は銀色を呈し、体側には濃青色斑からなる横帯が複数ある。イトヒキサギ(本書未掲載)と酷似するが、側線有孔鱗数が40～43(ヤマトイトヒキサギでは43～46)であること、主上顎骨後端が虹彩前縁に達する(達しない)ことなどにより識別される。海水魚としては数少ない日本固有種であり、和歌山県白浜から種子島にかけての太平洋沿岸からのみ記録されている。内之浦湾においては春から秋にかけて多く漁獲され、食用に供される。(畑 晴陵)



■ 市場に並ぶヤマトイトヒキサギ (2013年10月10日撮影)



■ ヤマトイトヒキサギ (KAUM-I. 38800, 184.0 mm SL)

コロダイ属 *Diagramma pictum pictum* (Thunberg, 1792)**コロダイ** 珍しさ★★■ コロダイ *Diagramma pictum pictum* KAUM-I. 94414, 484.0 mm SL

【解説】体は淡い紫がかった灰色を呈し、小黄色斑点が散在する。多くのイサキ科魚類と同様に、成長に伴い著しく色彩が変化することが知られる。幼魚の体は明るい黄色を呈し、幅広い黒色縦帯がはいる。また、背鰭の第2～4棘が伸長する。体の地色は成長に伴い徐々に淡くなり、黒色縦帯は細くなり、本数が増加し、その後、細かく途切れ、小斑点となる。内之浦湾では、定置網や刺網などにより、成魚が頻繁に漁獲され、幼魚も時折定置網に入る。流通量は少ないものの、美味な魚として知られる。鹿児島県内においては「カワコダイ」、「コウコダイ」、「カワコデ」などと称される。(畑 晴陵)

■ コロダイの幼魚 *Diagramma pictum pictum* (KAUM-I. 56782, 86.3 mm SL)

ヒゲダイ属 *Hapalogenys analis* Richardson, 1845

セトダイ 珍しさ ★★★★★



■ セトダイ *Hapalogenys analis* KAUM-I. 73139, 168.8 mm SL

【解説】体は焦げ茶色を呈し、細い淡褐色の横帯が約5本はいる。背鰭、臀鰭、および尾鰭は黄緑色を呈し、軟条部の後縁は黒色。下顎には短いひげが密生する。成長は遅く、3年間で体長110 mm程度に成長し、最大で体長25 cmに達する(山田、1986)。国内では富山湾～鹿児島県長島にかけての日本海・東シナ海沿岸、男女群島、有明海、瀬戸内海、三陸地方、和歌山県白浜、土佐湾、豊後水道、宮崎県延岡、内之浦湾、および小笠原諸島からの記録がある。鹿児島県における分布記録は乏しく、長島においては夏季に漁獲されることが並田(1977)によって報告されているほかは、写真の個体(KAUM-I. 73139)が畑・本村(2016b)によって報告されたのみ。内之浦湾においては極めて希少なため利用されないが、瀬戸内海沿岸では多く漁獲され、マダイに比肩するほどの価格が付くこともある(鎌田ほか、2002；萱野、2010)。刺身のほか、焼き魚で美味。(畑 晴陵)

ヒゲダイ属 *Hapalogenys kishinouyei* Smith & Pope, 1906

シマセトダイ 珍しさ ★★★★★

【解説】体は鈍い銀色を呈し、体側には暗褐色縦帯が数本はいる。後述のヒゲダイと同属の魚であるが、下顎腹面のひげは痕跡的。国内では青森県から南日本にかけて分布し、鹿児島県内においても内之浦のほか志布志湾、鹿児島湾、薩摩半島南岸、および種子島の幅広い地域から報告されているが、いずれの地域においても多くはないものと思われる。生態学的な知見もほとんど得られていないが、鹿児島湾口では水深80 m、志布志湾や開聞岳西方では水深120 m付近から得られている(徳留・竹下、1978；畑ほか、2012b)。内之浦湾における調査では、写真の個体が2017年4月26日に漁獲され、活魚として市場に並べられていたのが確認された。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたシマセトダイ *Hapalogenys kishinouyei* (2017年4月26日撮影)

ヒゲダイ属 *Hapalogenys sennin* Iwatsuki & Nakabo, 2005

ヒゲダイ 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたヒゲダイ *Hapalogenys sennin* (2006年12月29日撮影)

【解説】体は各鰭を含めて一様に暗褐色を呈し、目立った模様がない。下顎の先端に短いひげが密生する。主上顎骨に鱗がない。体形がよく似たヒゲソリダイ（本書未掲載）は体側に2本の暗色斜帯がはいり、下顎のひげは痕跡的で、主上顎骨に鱗をそなえることによりヒゲダイと識別できる。ヒゲダイの学名は長らく *Hapalogenys nigripinnis* (Temminck & Schlegel, 1843) とされてきたが、Iwatsuki and Nakabo (2005) により、*H. nigripinnis* はヒゲソリダイに適用すべき学名であり、同時にヒゲダイには適用すべき学名が提唱されていない未記載種であることが明らかになり、*Hapalogenys sennin* として新種記載された。現在までのところ、日本以外における分布は確認されておらず、海産魚においては数少ない日本固有種である。福島県以南の太平洋沿岸、山形県鶴岡以南の日本海・東シナ海沿岸、小笠原諸島、および種子島から記録があり、トカラ列島以南の琉球列島からは記録されていない（畑ほか、2017g）。なお畑ほか（2012b）は、KAUM-I. 8589（体長68mm）を奄美大島産として報告したが、同標本は宮城県広瀬村産の個体である。内之浦湾においては稀であり、写真による確認が1例のみ。（畑 晴陵）

イサキ属 *Parapristipoma trilineatum* (Thunberg, 1793)

イサキ 珍しさ ★



■ イサキ *Parapristipoma trilineatum* KAUM-I. 56724, 151.1 mm SL



■ イサキ *Parapristipoma trilineatum* KAUM-I. 56871, 144.3 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体側上部は焦げ茶色。尾鰭は赤色を呈し、その他の各鰭は黄色。幼魚では体側上部に複数の白色縦帯がはいり、地域によっては「いのこ」、「うりぼう」などと称される（海洋生物環境研究所、2008）。茶色の色素をもたず、全身が黄色の個体や、黄色と茶色のまだら模様を呈する白色変異個体（パイポールドと思われる）が現れることが報告されている（伊東、2007）。成魚においてはキビナゴやマイワシ、カタクチイワシなどのニシン目を中心とした魚類とカイアシ類やヨコエビ類を中心とした甲殻類をおもな餌とする（木村、1981；松宮・高橋、1983）。日本の温帯域を中心に分布するが、朝鮮半島南岸、済州島、台湾や中国の福建省・広東省にも分布する。国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、伊豆諸島、宮城県以南の太平洋沿岸、屋久島、東シナ海大陸棚域に分布し、琉球列島や小笠原諸島からの記録はない。内之浦湾においては幼魚から成魚まで幅広くみられるが、小型個体は定置網により多獲され、全長 30 cm 以上の大型個体は釣りによって漁獲されることが多い。焼き魚、寿司などにして美味な魚であり、高値で取引される。（畑 晴陵）



■ イサキ *Parapristipoma trilineatum* KAUM-I. 98067, 166.1 mm SL



■ イサキの幼魚 (KAUM-I. 56771, 50.6 mm SL)



■ イサキ *Parapristipoma trilineatum* KAUM-I. 1473, 105.2 mm SL

コショウダイ属 *Plectorhinchus cinctus* (Temminck & Schlegel, 1843)

コショウダイ 珍しさ★★



■ コショウダイ *Plectorhinchus cinctus* KAUM-I. 94412, 207.1 mm SL

【解説】体は灰白色を呈し、体側には2本の幅広い斜帯がある。体側上部から後部にかけてと背鰭、臀鰭、および尾鰭には黒色斑が散在する。コロダイやムスジコショウダイなど、イサキ科魚類には成長に伴い著しく色彩を変える種が多いが、コショウダイに関しては成長に伴う色彩の変化はあまり大きくなく、幼魚は一様に黒色であり、興奮時に斜帯を現すことが知られている（小林・岩本、1984；松沼ほか、2009；畑ほか、2012b）。流通量が少なく、また知名度も高いとは言えないため安価ではあるが、刺身、焼き魚、煮魚など幅広い調理法にむく味な魚である。内之浦湾においては定置網や刺網によって漁獲され、イサキ、コロダイに次いで多くみられるイサキ科魚類である。

(畑 晴陵)



■ コショウダイ KAUM-I. 63693, 146.9 mm SL

コショウダイ属 *Plectorhinchus flavomaculatus* (Cuvier, 1830)**オシャレコショウダイ**

珍しさ ★★★★★



■ オシャレコショウダイ *Plectorhinchus flavomaculatus* KAUM-I. 98089, 324.0 mm SL

【解説】体に橙色の小斑点が密にはいる。ニジコショウダイ（本書未掲載）は本種に類似するが、体側に橙色の縦帯が多数はいることで識別できる。日本国内では浜名湖以南の太平洋沿岸に分布する（飯田・鈴木、2009；島田、2013）。種子島など大隅諸島においては珍しい魚ではないものの、鹿児島県本土における記録は極めて少なく、標本に基づく記録は畑ほか（2012b）によって笠沙産の1個体（KAUM-I. 17744、体長 386.0 mm）が報告されたものと、畑ほか（2017g）が内之浦湾から得られた写真の個体（KAUM-I. 98089、体長 324.0 mm）を報告したものに限られる。蒲原（1937）は高知県から得られたイサキ科魚類に対し *Plectorhinchus griseus*、Kamohara and Yamakawa（1967）は沖縄島から得られたイサキ科魚類に対し *P. schotaf* をそれぞれナンヨウコタイの和名を付して報告したが、これらは色彩の記述からいずれもオシャレコショウダイであると思われる（島田、2013；畑ほか、2014b）。非常に美味な魚とされる（鍋木、2016）。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶオシャレコショウダイ *Plectorhinchus flavomaculatus*（2012年1月24日撮影）

コショウダイ属 *Plectorhinchus gibbosus* (Lacepède, 1802)

クロコショウダイ 珍しさ ★★★★★



■ クロコショウダイ *Plectorhinchus gibbosus* KAUM-I. 56716, 350.4 mm SL

【解説】体は深緑色を呈し、体側下部から体腹面にかけては白色がかかる。後述のエリアカコショウダイに類似するが、クロコショウダイは背鰭棘数は14(エリアカコショウダイでは12～13)、背鰭背縁は棘部後部において深く欠刻する(欠刻しない)ことで識別できる。成魚の尾鰭は体色と同様であるが、幼魚の尾鰭は透明。幼魚は汽水域に多くみられ、枯れ葉などに擬態していると考えられている(Randall, 2005; 松沼ほか, 2009)。内之浦湾においては珍しい種であり、体長30 cm以上の成魚が稀に漁獲される。生食のほか、焼き魚などにして美味。(畑 晴陵)

コショウダイ属 *Plectorhinchus picus* (Cuvier, 1828)

アジアコショウダイ 珍しさ ★★★★★

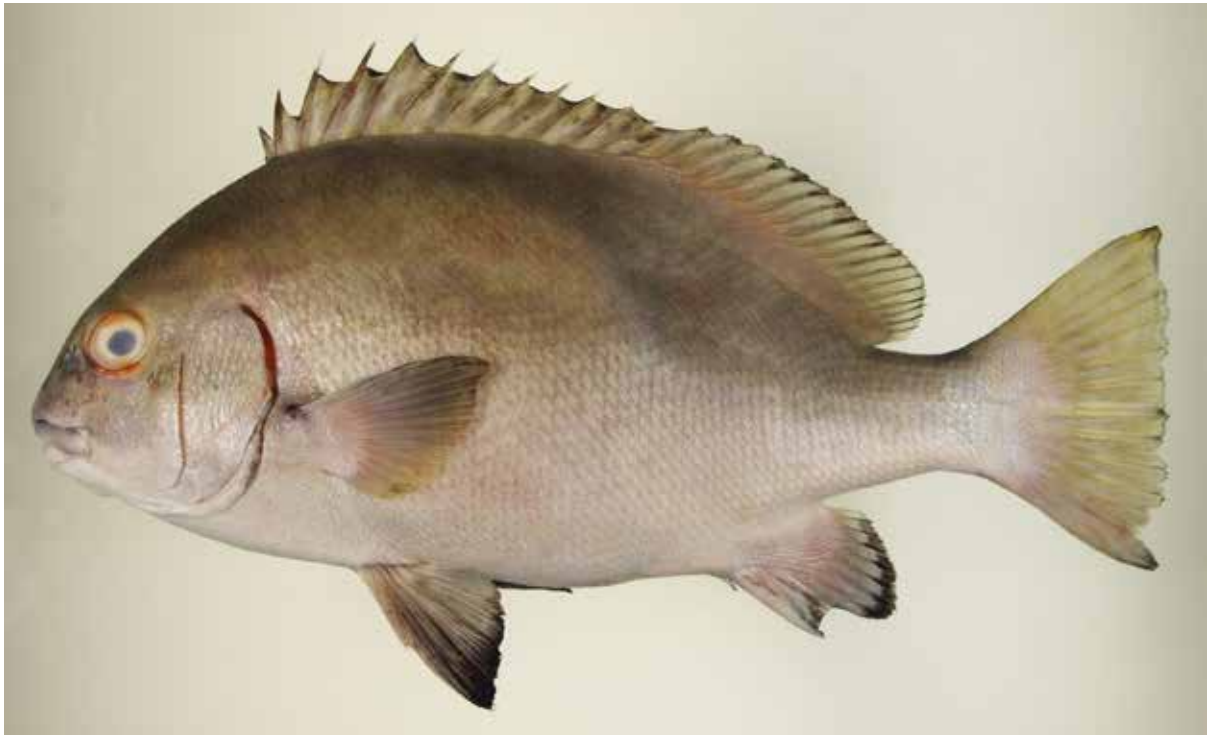


■ 水揚げされたアジアコショウダイ *Plectorhinchus picus* (2007年6月7日撮影)

【解説】成魚の体は紫がかった灰色を呈し、体側下部を除いて小黒色斑が密にはいる。成長に伴い色彩が大きく変化することで知られる。幼魚の体は白色で、体側上部は黒色、体背縁に2～3個の白色斑がある。サンゴ礁域の浅所に生息する。薩南諸島においては普通にみられる程度であるが、小笠原諸島では大型個体の群れが極めて多くみられる。内之浦湾では非常に稀な魚であり、1個体の水揚げが写真により確認されたのみである。美味しい魚であり、刺身のほか、煮つけなどにしても美味。(畑 晴陵)

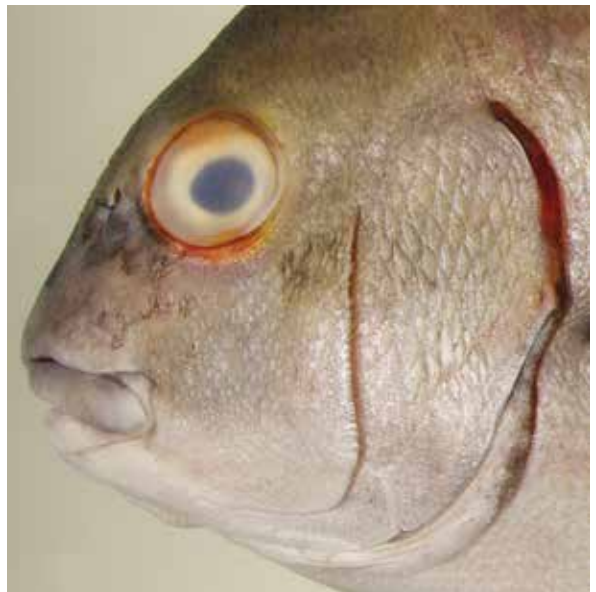
コショウダイ属 *Plectorhinchus unicolor* (Macleay, 1883)

エリアカコショウダイ 珍しさ ★★★★★



■ エリアカコショウダイ *Plectorhinchus unicolor* KAUM-I. 71796, 291.0 mm SL

【解説】体は一様に暗緑色。背鰭と尾鰭は淡黄色を呈し、鰓蓋後縁は暗赤色に縁取られる。鹿児島県においては内之浦湾のほか、笠沙、種子島、馬毛島、および奄美大島から記録がある(畑ほか、2014b、2016e、2017f; 鍋木、2016)。従来、これらの地域においては極めて稀な魚であったが、近年、散発的な水揚げが確認されており、個体数が増加しているのかもしれない。内之浦湾においてはおもに釣りで漁獲され、活魚として市場に並ぶことが多い。エリアカコショウダイに適用すべき学名は従来 *Plectorhinchus schotaf* (Forsskal, 1775) とされてきたが、Johnson and Wilmer (2015) により北西太平洋において *P. schotaf* の学名が適用されていたものは *P. unicolor* であるとされた。極めて美味かつ、高価な魚とされる(鍋木、2016)。(畑 晴陵)



■ エリアカコショウダイの頭部 (KAUM-I. 71796)

コショウダイ属 *Plectorhinchus vittatus* (Linnaeus, 1758)

ムスジコショウダイ

珍しさ ★★★★★



■ ムスジコショウダイ *Plectorhinchus vittatus* KAUM-I. 30167, 273.5 mm SL



■ ムスジコショウダイ *Plectorhinchus vittatus* KAUM-I. 40477, 256.4 mm SL

【解説】成魚では体が白色で、体背面から体腹面にかけて細い黒色縦帯が多数はいり、各鰭と吻部は鮮やかな黄色を呈する。腹鰭基底部に赤色斑がある。幼魚の体は橙色を帯びた暗色で、不規則な白色斑が多数はいる。成長に伴う大きな色彩の変化は、本種のほかヒレグロコショウダイやアヤコショウダイ（いずれも本書未掲載）など、多くのコショウダイ属魚類において知られている。内之浦湾においては珍しい魚であり、成魚が稀に定置網により漁獲される。派手な見た目に反して食味はよく、刺身などでも美味。観賞魚としても流通し、幼魚の人気の高いが、成魚も人懐こく、人気がある。（畑 晴陵）

ミゾイサキ属 *Pomadasys quadrilineatus* Shen & Lin, 1984

スジミゾイサキ

珍しさ ★★★★★

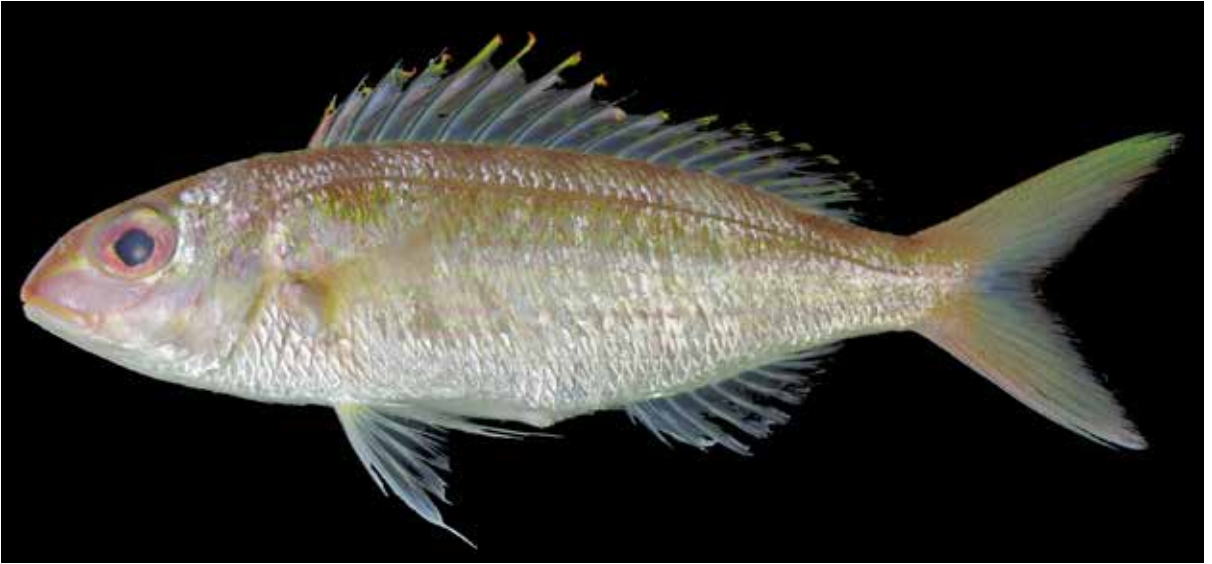


■ スジミゾイサキ *Pomadasys quadrilineatus* KAUM-I. 1458, 94.1 mm SL

【解説】 体は銀色で、体側上部に数本の黄色縦帯がはいる。本属魚類は下顎の正中線上に縦長の溝があり、これが「ミゾイサキ」の名称の由来である。日本と台湾からのみ記録のある東アジアの固有種。日本国内では神奈川県、高知県、宮崎県、鹿児島県本土、種子島、屋久島、口永良部島（木村ほか、2017）および沖縄島から記録があり、内之浦湾を含め、日本近海では稀な魚であると思われてきたが、大隅諸島近海においては若魚から成魚まで多数の個体が生息し、再生産している可能性が高いことが示唆されている（松沼ほか、2009；三木、2017）。本種は長らくインド、南アフリカ、紅海、および地中海東部から知られる *P. stridens* (Forsskal, 1775)、または南アフリカ、紅海、およびスエズ湾から知られる *P. striatum* (Gilchrist & Thompson, 1908) の新参異名とされることが多かったが、Iwatsuki et al. (1995) により、有効種であることが確認された。（畑 晴陵）

イトヨリダイ属 *Nemipterus peronii* (Valenciennes, 1830)

シャムイトヨリ 珍しさ ★★★★★



■ シャムイトヨリ *Nemipterus peronii* KAUM-I. 83711, 96.4 mm SL

【解説】体は桃色を呈し、体側中部から体腹面にかけては銀白色。体側中部に細い黄色縦帯が多数はいる。体背面に暗色の鞍状斑が複数はいる。背鰭各棘間の鰭膜が深く切れ込むことで、同属他種と容易に識別される。水深30～100 mの砂泥底に生息する。沖縄島東岸では多く漁獲されるが（益田ほか、1975；赤崎、1984）、内之浦湾では極めて稀な魚であり、畑ほか（2016f）によって報告された写真の1個体（KAUM-I. 83711）が得られているのみ。また、内之浦湾は本種の分布の北限である。かつては本種に *Nemipterus mulloides* または *N. tolu* が適用されることが多かったが（例えば松原、1955；益田ほか、1975；赤崎、1984）、これらはいずれも *N. peronii* の新参異名とされている（Russell, 1986, 1990, 1993）。また、現在の標準和名「シャムイトヨリ」は赤崎（1962）によって提唱されたものであるが、過去には「バラダイ」の和名が当てられたこともあった（岡田・松原、1938；松原、1955）。（畑 晴陵）



■ イトヨリダイの大型個体 *Nemipterus virgatus*（2014年9月30日撮影）

イトヨリダイ属 *Nemipterus virgatus* (Houttuyn, 1782)**イトヨリダイ** 珍しさ ★■ イトヨリダイ *Nemipterus virgatus* KAUM-I. 80898, 81.2 mm SL■ イトヨリダイ *Nemipterus virgatus* KAUM-I. 73172, 98.5 mm SL

【解説】体側上部は淡い桃色を呈し、体側中央より下方は銀白色。体側には約5本の細い黄色縦帯がはいる。鰓蓋上方に赤色斑がある。腹鰭第1軟条と尾鰭の上端は糸状に伸長する。ただし、幼魚の尾鰭は伸長しない。おもに水深250m以浅の泥底に生息する。日本近海においてはおもに春から夏にかけて産卵する(岩崎、1999)。内之浦湾では定置網や釣りでも獲られ、頻りに市場に並ぶ。非常に美味しい魚であり、煮つけや刺身などに重宝される高級魚である。(畑 晴陵)



■ イトヨリダイの幼魚 (KAUM-I. 56739, 60.3 mm SL)

タマガシラ属 *Parascolopsis inermis* (Temminck & Schlegel, 1843)

タマガシラ 珍しさ ★★★



■ タマガシラ *Parascolopsis inermis* KAUM-I. 73149, 156.4 mm SL

【解説】体背面から体側上部は赤色を呈し、体側下部から体腹面は白色。体側に4本の赤色横帯がはいる。鹿児島県北部各地において釣りや定置網、刺網などによって頻繁に漁獲され、内之浦湾のほか、笠沙や鹿児島湾、志布志湾、および種子島などから記録がある（藤原ほか、2014）。しかし、トカラ列島以南の薩南諸島では稀であり、奄美大島から散発的に報告があるのみ（Yamakawa, 1979；藤山、2004；畑ほか、2016g）。美味しい魚である。内之浦においても大型個体は市場に水揚げされるが、漁獲される個体の多くは体長15 cm以下の小型個体であり、それらは餌料として利用されるに過ぎない。（畑 晴陵）



■ タマガシラ *Parascolopsis inermis* KAUM-I. 69101, 69.6 mm SL



■ タマガシラの幼魚
(KAUM-I. 56736, 44.4 mm SL)

キツネウオ属 *Pentapodus nagasakiensis* (Tanaka, 1915)

イトタマガシラ 珍しさ ★★★★★



■ 冷凍前のイトタマガシラ *Pentapodus nagasakiensis* KAUM-I. 7777, 146.3 mm SL

【解説】体は円筒形。体背面は茶褐色を呈し、体側中央に白色の縦帯がはいる。尾鰭は橙色。本種によく似たヤクシマキツネウオ（本書未掲載）は、尾鰭が赤く、体側の縦帯が黄色を呈することで、容易に識別される。日本国内においては千葉県以南の太平洋沿岸に広く分布し、内之浦湾においても個体数は少なくないものと思われるが、定置網での漁獲は稀。岩礁域や砂底域に多く生息し、釣りで得られることが多い。最大でも体長 20 cm 程度の小型魚であり、まとまった漁獲もないため、内之浦において食用となることはほとんどない。なお、写真の個体は藤原ほか（2014）により内之浦湾産のヤクシマキツネウオとして示された標本（KAUM-I. 7777）であり、イトタマガシラであることが明らかとなっている（畑ほか、2016h）。（畑 晴陵）



■ イトタマガシラ (KAUM-I. 7777, 146.3 mm SL)

クロダイ属 *Acanthopagrus latus* (Houttuyn, 1782)

キチヌ 珍しさ ★★★

■ キチヌ *Acanthopagrus latus* KAUM-I. 94416, 302.7 mm SL

【解説】体は黒みの強い灰色を呈し、体腹面は白色。腹鰭、臀鰭、および尾鰭下葉は黄色。若魚では体側上部に横帯が複数あるが、成魚では不明瞭。日本国内においては岩手県以南の太平洋沿岸、兵庫県以南の日本海・東シナ海の沿岸に広く分布するが、琉球列島には分布しない。内之浦湾においては定置網や釣りによって漁獲される。性転換をおこなう魚であり、体長9 cm 程度までは性的に未分化であり、その後、27 cm 程度まで雌雄同体期を経る。雌雄同体期はおもにオスとして生殖活動をおこなう。さらに体長30 cm 程度に達すると、ほとんどの個体がメスとなる。熊本県や宮崎県などで養殖がなされている。(畑 晴陵)



■ キチヌの頭部 (KAUM-I. 94416, 302.7 mm SL)

クロダイ属 *Acanthopagrus schlegelii* (Bleeker, 1854)**クロダイ** 珍しさ★★■ クロダイ *Acanthopagrus schlegelii* KAUM-I. 86396, 290.0 mm SL

【解説】体は緑がかった黒色で、体腹面は白色。体側上部には黒色横帯が多数はいる。生時の体は全体に銀白色を呈するが、死後、黒みが強くなる。日本近海においては北海道以南に広く分布するものの、大隅諸島を除く琉球列島や小笠原諸島には分布しない。琉球列島固有の同属種であるミナミクロダイ（本書未掲載）はクロダイに酷似するものの、背鰭棘部中央下の横列鱗数が5であること（クロダイでは6～7）で識別できる。岸近くに多く生息し、棧橋や漁港の堤防から目視できることも多い。河口にも頻繁に進入する。キチヌと同様に性転換をおこなう。美味しい魚であり、内之浦湾では釣りなどによって多獲される。鹿児島県内においては多く「チヌ」と称され、「黒鯛」の呼称はメジナに対して充てられる。（畑 晴陵）

■ 水揚げされたクロダイ *Acanthopagrus schlegelii* (2011年7月13日撮影)

キダイ属 *Dentex hypselosomus* Bleeker, 1854

キダイ 珍しさ ★★★



■ 市場に並ぶキダイ *Dentex hypselosomus* (2008年7月12日撮影)

【解説】体側上部は赤色を呈し、鮮度の良い個体では背部に瞳孔とほぼ同じ大きさの黄色斑が3つある。各鰭は赤色。両顎側部には鋭い円錐歯が並ぶ。雌性先熟の性転換をおこない、年齢とともにメスの割合が低下することが知られる。しかし、両性生殖巣をもつ個体は極めて少なく、性転換発生のメカニズムは不明な点が多い（青山、1955；山田ほか、2007）。東シナ海における産卵期は春と秋の2回であるとされてきたが、冬でも毎日産卵する個体が確認されており、通年産卵をおこなう種である可能性が指摘されている（米田・依田、2006）。東シナ海においては底曳網によって大量に漁獲されるものの、内之浦湾では稀に定置網に入る程度であり、標本は残されていない。内之浦はじめ、日本各地で「レンコダイ（連子鯛）」と称されるが、これは本種が延縄によって漁獲される際に、複数個体が連なって得られることに由来する（時村、2007）。内之浦においても「れんこ」を称される。食用魚として重要であり、焼き魚にして美味。本種の学名は長らく *Dentex tumifrons* (Temminck & Schlegel, 1843) とされてきたが、本学名はチダイに適用すべき学名であり、キダイには *D. hypselosomus* Bleeker, 1854 を適用すべきであることが明らかにされている（Iwatsuki et al., 2007）。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶチダイ *Evynnis tumifrons*
(解説は次ページに掲載；2013年10月10日撮影)

チダイ属 *Evynnis tumifrons* (Temminck & Schlegel, 1843)

チダイ 珍しさ★

■ チダイ *Evynnis tumifrons* KAUM-I. 68440, 284.3 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、上部は桃色がかかる。鰓蓋後縁は赤色に縁取られる。背鰭第3・4棘は特に小型個体でよく伸長する。体側上部には青色斑点が散在する。大型個体では額が張り出す。鹿児島県本土で多く、「コダイ」と称される。内之浦湾においても定置網によって大量に漁獲される。マダイほど大型に成長せず、最大で体長40 cm程度。美味しい魚であるが、内之浦湾において漁獲される個体のほとんどが体長15 cm未満の小型個体である。そのため、漁獲された多くが市場に出荷されることなく餌料として消費される。本種に適用すべき学名は長らく *Evynnis japonica* Tanaka, 1931とされてきたが、Iwatsuki et al. (2007)により、本学名は *Chrysophrys tumifrons* Temminck & Schlegel, 1843の新参異名であることが明らかとなっている。

(畑 晴陵)

■ チダイ *Evynnis tumifrons* KAUM-I. 56758, 122.7 mm SL

マダイ属 *Pagrus major* (Temminck & Schlegel, 1843)

マダイ 珍しさ★★



■ マダイ *Pagrus major* KAUM-I. 94331, 183.6 mm SL

【解説】体は赤みがかった桃色を呈し、体側上部に小青色斑点が散在する。尾鰭後縁は黒色。幼魚の体には5本の濃赤色横帯がある。甲殻類やイカ、魚類など幅広い生物を餌とする。稚魚は生息環境や分布域によって食性が大きく変化することが知られる（島本・渡辺、1994；富岡ほか、2011）。成長に伴い深所に移動し、水深200 m付近にも生息する。食用魚として重要であり、鹿児島県内においても盛んに漁獲されるほか、養殖も多くおこなわれている。内之浦湾においてはチダイほどではないものの、定置網によって多獲され、大型個体は活魚として市場に並べられる。（畑 晴陵）



■ マダイの幼魚 (KAUM-I. 45413, 45.8 mm SL)



■ 活魚とされる大型のマダイ
(2012年1月24日撮影)

ヘダイ属 *Rhabdosargus sarba* (Forsskål, 1775)

ヘダイ 珍しさ★



■ ヘダイ *Rhabdosargus sarba* KAUM-I. 94332, 216.7 mm SL

【解説】体は強く側扁し、円盤状。吻端は丸い。胸鰭、腹鰭、臀鰭、および尾鰭は黄色。両顎の先端に犬歯状歯、側部に3列の臼歯がある。最大で体長40 cm程度に達する。北海道以南の日本各地に分布し、クロダイと比較して沖合に生息する。内之浦湾を含む鹿児島県本土各地において釣りや定置網、刺網などによって多獲される。クロダイと比較して体色の白みが強いことや強く側扁することから、地域によっては「シロチヌ」、「ヒラチヌ」などと称されるが、内之浦では「へだい」と呼ばれる。淡泊な味で、非常に美味しい魚として知られ、クロダイよりも美味とする向きもある。

(畑 晴陵)



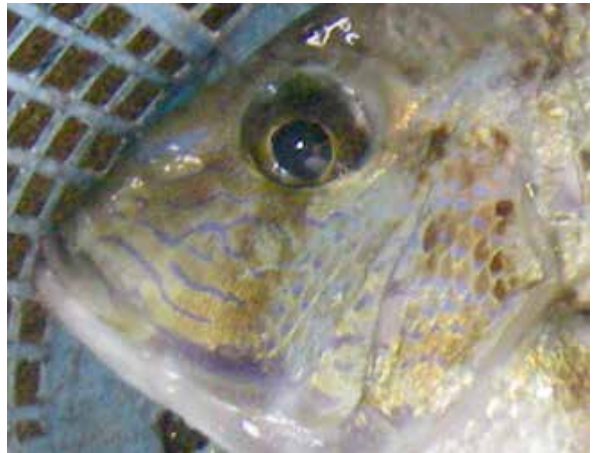
■ ヘダイ *Rhabdosargus sarba* KAUM-I. 94391, 253.3 mm SL



■ 市場に並ぶヘダイ (2013年10月10日撮影)

メイチダイ属 *Gymnocranius grandoculis* (Valenciennes, 1830)**サザナミダイ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたサザナミダイ *Gymnocranius grandoculis* (2009年5月12日撮影)

【解説】メイチダイ属魚類は分類学的に混乱しており、同定が非常に困難な種が多い。そのなかでサザナミダイは比較的特徴がはっきりした種であり、吻部から頬部にかけて数本の青紫縦線がはしることで他種と区別できる。水深50m以深の砂礫・岩礁域に生息する。国内では愛媛県深浦、鹿児島県本土、琉球列島に分布しているが、南日本では珍しい。内之浦漁港においても非常に稀で、2009年5月に体長50cm程度と推定される2個体の写真が撮られたのみで、標本は残っていない。最大で65cmにもなる大型の種であり、味も良いため奄美・沖縄地方では釣りによって数多く漁獲され、高値で流通している。癖がなく味も良い。刺身はもちろん、マース煮（塩煮）や揚げ料理にもよくあう。（小枝圭太）



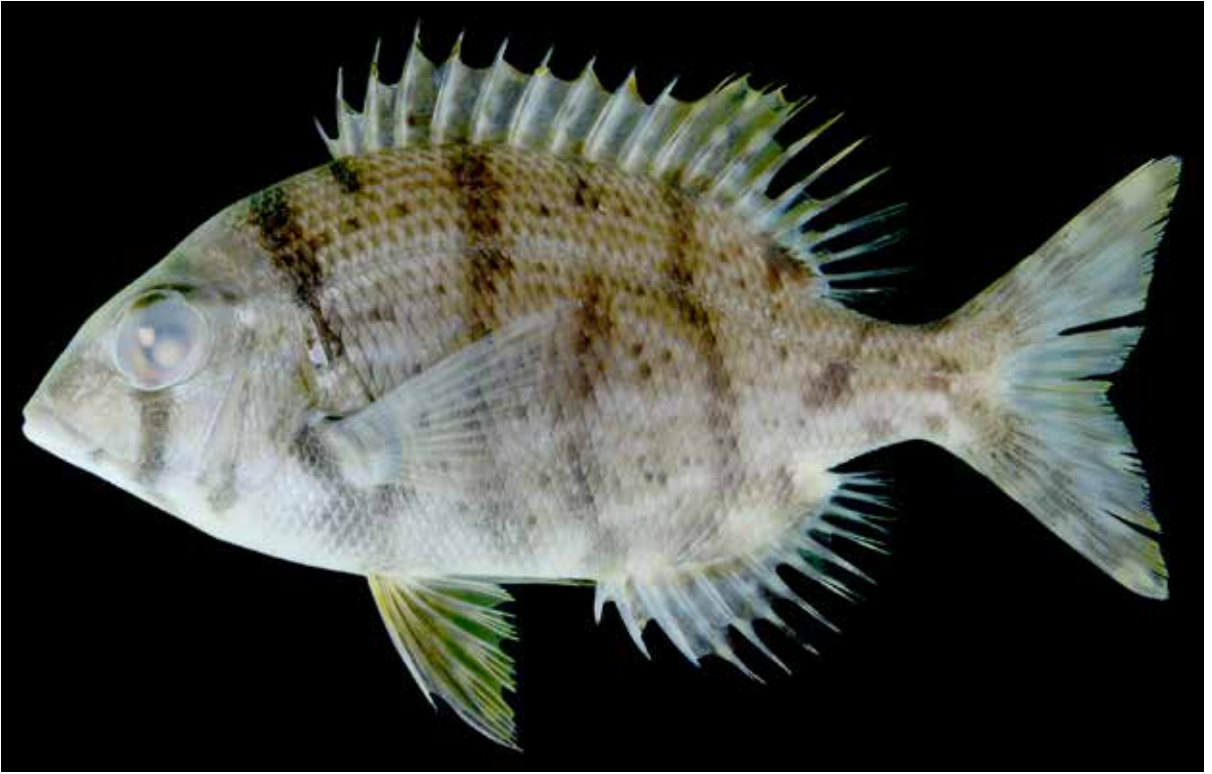
■ サザナミダイの頬部。青紫色の縦帯は輝くような青色のこともある (2009年5月12日撮影)



■ 活魚とされるサザナミダイ (2009年5月12日撮影)

メイチダイ属 *Gymnocranius griseus* (Temmick & Schlegel, 1843)

メイチダイ 珍しさ ★★★



■ メイチダイ *Gymnocranius griseus* KAUM-I. 12734, 134.1 mm SL

【解説】体高がやや高く、尾鰭両葉が尖る、側線上方横列鱗数が6であることなどが特徴。体は銀灰色。メイチダイ属共通の特徴として環境やストレスによって体側に数条の暗色横帯か網状模様が明瞭になる。この模様は幼魚ほど明瞭であることが多い。最大で体長30 cmほどまで成長する。南日本沿岸での産卵期は夏から秋で、分離浮性卵を産む。おもに100 m以浅の砂礫・岩礁域に生息する。本属魚類のうち最も北まで分布する種で、青森県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島に分布するが、南日本太平洋沿岸域に多い。美味であり、高級食用魚となっている。(小枝圭太)



■ メイチダイの幼魚 (KAUM-I. 4227, 59.8 mm SL)



■ メイチダイの頭部 (KAUM-I. 12734, 134.1 mm SL)

フエフキダイ属 *Lethrinus genivittatus* Valenciennes, 1830**イトフエフキ** 珍しさ★★■ イトフエフキ *Lethrinus genivittatus* KAUM-I. 73156, 164.3 mm SL

【解説】体はやや細長く、体側に数本の黄色縦帯をもつことが多い。背鰭第2棘が最も長く、伸長することで他のフエフキダイ属と容易に識別できる。ただし、この棘が折れている個体もあるので注意が必要。本属のなかでも小さい種で、体長は最大でも20 cmほど。藻場や砂礫域の沿岸の比較的浅い場所で群れをつくる。サンゴ礁域では少ない。南日本での産卵期は夏から秋。新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県以南の太平洋沿岸、琉球列島に分布する。味は悪くないが、フエフキダイ科魚類としては小型であるため積極的には漁獲されない。内之浦漁港においても、似た大きさの他の雑魚と一緒に市場に並ぶ程度である。(小枝圭太)

■ イトフエフキの幼魚 *Lethrinus genivittatus* (KAUM-I. 63689, 54.4 mm SL)

フエフキダイ属 *Lethrinus haematopterus* Temminck & Schlegel, 1844

フエフキダイ 珍しさ★★★★



■ フエフキダイ *Lethrinus haematopterus* KAUM-I. 83508, 224.8 mm SL

【解説】側線上方横列鱗が5で、体高が頭長より著しく大きいことが特徴。体は黄色みを、背鰭は淡く赤みを帯びることが多い。体長40 cmほどに成長する。岩礁域に生息する。国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、三浦半島以南の太平洋沿岸、琉球列島、小笠原諸島に分布するが、日本本土沿岸に多く、本属のなかでも最も北まで普通に分布する種である。ただし、どの場所においても大量に漁獲されるということはない。ハマフエフキほどの大型種ではないが、美味であるため食用となることが多い。内之浦漁港においても単独で市場にならんでいるところが2度確認されている。(小枝圭太)



■ 市場に並ぶフエフキダイ *Lethrinus haematopterus* (2014年9月30日撮影)

フエフキダイ属 *Lethrinus nebulosus* (Forsskål, 1775)**ハマフエフキ** 珍しさ★★■ ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus* KAUM-I. 94409, 415.0 mm SL

【解説】側線上方横列鱗が6で、吻部と頬部に2～3本の淡青色斜帯があることが特徴。吻がやや尖る。体は黄色みを帯びることが多いが、水中でみると白色に近い。好奇心が強く、海底の砂を撒き上げたり、岩を裏返したりすると近くに寄ってくることもある。砂礫・岩礁・サンゴ礁域に生息する。相模湾以南の太平洋沿岸と琉球列島、小笠原諸島に分布する。数は少ないが、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸にもみられる。もともとは琉球列島で多い種であったが、タカサゴ類などと同じく、近年、日本本土沿岸においても多く漁獲されるようになってきている。体長65 cmにもなる大型種で、刺身、塩焼き、バター焼き、マース煮（塩煮）などで美味であるが、日本本土沿岸においては未だ評価は高くなく、やや安価で取引されている傾向にある。内之浦漁港では「たばめ」と呼ばれる。沖縄県では「たまん」と呼ばれ、体表に寄生虫のないものは高級魚として扱われる。寄生虫のあるものは刺身にできないため「ムシ」と呼ばれ極めて安価。ぶっこみ釣りでも非常に人気の高い魚である。とりわけ冬の「たまん」は脂がのって刺身で美味。（小枝圭太）

■ 市場に並ぶ大型のハマフエフキ
(2013年10月10日撮影)

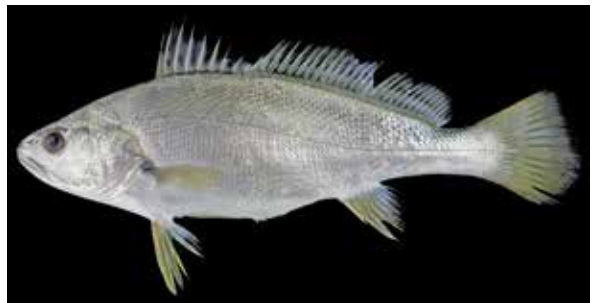
オオニベ属 *Argyrosomus japonicus* (Temminck & Schlegel, 1843)

オオニベ 珍しさ★★



■ オオニベ *Argyrosomus japonicus* KAUM-I. 81475, 351.9 mm SL

【解説】最大で体長 1.5 m に達するニベ科の超大型種。尾鰭は二重湾入型で、大型個体は側線上にダイヤモンドのように輝く鱗がある。水深 150 m 以浅の沿岸浅所に生息し、砂底に多い。宮崎県においては釣りの対象魚としても人気。生態なども詳細に研究されている。産卵期は冬、3 歳でほぼ全ての個体が成熟し、生後 7 年で全長 1.3 m、体重 20 kg 以上に成長することが知られている。内之浦湾においても 1 m 以上の大型個体が多数漁獲される。20 cm 程度の個体も時折定置網により水揚げされる。肉は水分が多く、粘り気が強いいため、練り製品の原料となる。(畑 晴陵)



■ オオニベ KAUM-I. 78169, 208.5 mm SL

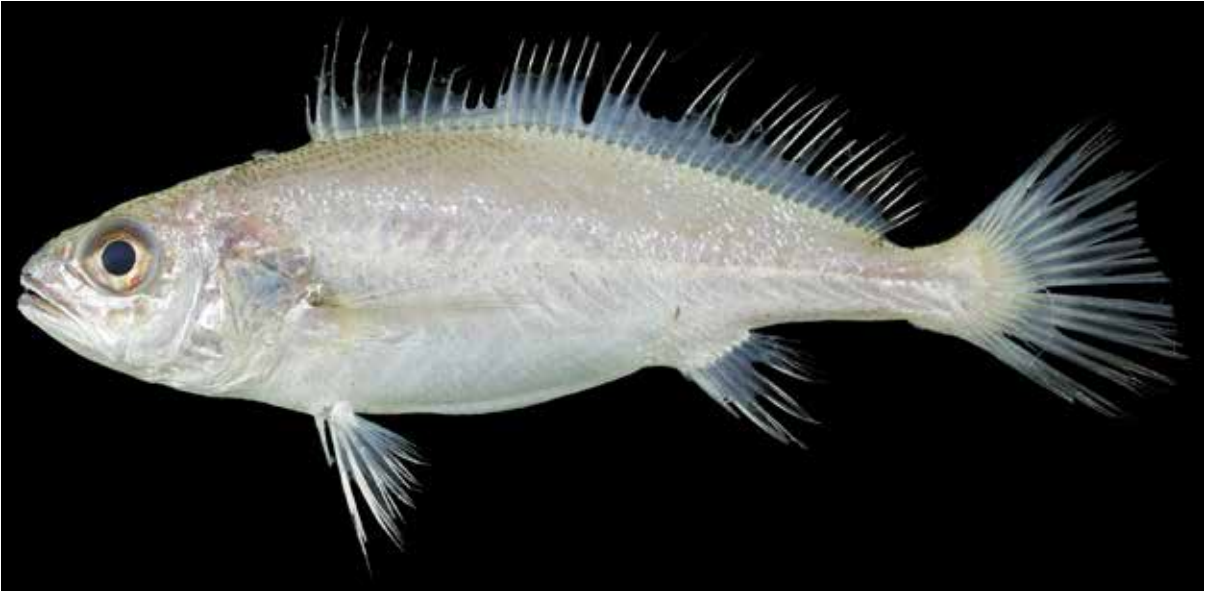
■ 水揚げされたオオニベの大型個体 (2011 年 2 月 22 日撮影)



クログチ属 *Atrubucca nibe* (Jordan & Thompson, 1911)

クログチ 珍しさ★★★★★

【解説】口腔内が黒く、胸鰭上半分が黒色を呈する。内之浦湾では極めて稀であり、本調査では上城ほか (2016) によって詳細に報告された写真の個体 (KAUM-I. 82765) が得られたのみ。美味な魚として知られ、豊後水道などでは数多く漁獲されるため、高価に取引される。*Atrubucca nibe* は *Pseudotolithus brunneolus* Jordan & Richardson, 1909 の新参異名であることが確認されているが (Trewavas, 1977)、*P. brunneolus* が原記載以降一度も有効種として扱われなかったことなどから Trewavas (1979) は *P. brunneolus* を遺失名とし、*A. nibe* を有効とする裁定を求め、Melville (1983) により認められたという特殊な経緯をもつ。(畑 晴陵)



■ クログチ *Atrobucca nibe* KAUM-I. 82765, 118.3 mm SL

ニベ属 *Nibea albiflora* (Richardson, 1846)

コイチ 珍しさ ★★★★★



■ コイチ *Nibea albiflora* (2003年10月9日撮影)

【解説】体は黄色みがかった灰色を呈し、体側には細い黒色縦帯が多数はいる。同属のニベ（本書未掲載）と酷似するが、体側下部と胸鰭、腹鰭、および臀鰭は黄色がかかること（ニベでは白色）、側線よりも上方の体側の黒色縦帯が中断し、乱れること（中断せず、乱れない）などで識別できる。内之浦湾においては比較的稀な魚であるが、群れで出現するとみられ、漁獲時は複数個体がまとめて水揚げされる。美味な魚であり、刺身や煮つけにされるほか、練り製品の原料となる。（畑 晴陵）



■ 水揚げされたコイチ (2003年6月11日撮影)

シログチ属 *Pennahia argentata* (Houttuyn, 1782)

シログチ 珍しさ★★



■ シログチ *Pennahia argentata* KAUM-I. 82751, 157.6 mm SL (上)、KAUM-I. 80896, 146.2 mm SL (下)

【解説】口腔内は一律に白色で、模様がない。臀鰭の第2棘は眼径とほぼ同長。鰓蓋に黒色斑がある。産卵期は大阪湾においては7～8月、数回に分けて産卵することが知られ、生後5年で全長約30 cmに達する（吉田ほか、1997）。甲殻類をおもに、魚類なども餌とする肉食魚。内之浦湾では時折漁獲される。相模湾などでは大量に漁獲され、食用として重要である。塩焼きなどにして美味。東京近郊では本種を「イシモチ」と称するが、これは本種を含むニベ科魚類が大きい耳石を有することに由来する。（畑 晴陵）



■ 複数個体がまとめて市場に並ぶシログチ。一番上の大型の個体はオオニベ（2013年10月10日撮影）

キス属 *Sillago japonica* Temminck & Schlegel, 1843**シロギス** 珍しさ ★■ シロギス *Sillago japonica* KAUM-I. 98018, 117.7 mm SL■ シロギス *Sillago japonica* KAUM-I. 89415, 173.9 mm SL

【解説】体側上半部は黄褐色を呈し、下部は銀白色。鮮度の良い個体では、体側中央に青紫の縦帯がはいる。沿岸砂底域の底層に生息する。成魚ではエビ類と多毛類（ゴカイなど）をおもな餌とするが、未成魚では端脚類（ヨコエビなど）と多毛類を多く捕食する（角田、1970）。産卵期は夏。多回産卵魚であり、生後4年の魚では産卵期を通じての総産卵数は5～8万と推定され、毎日約1万粒の卵を産卵し続けることが知られている（角田、1970；粕谷、2007）。釣りの対象魚として人気があるほか、食用魚としても重要。テンプラなどにして多く賞味されるが、鮮度の良い個体では刺身でも美味。釣りのほか、刺網や流し網などにより漁獲されるが、内之浦では定置網により小型個体が漁獲される。（畑 晴陵）

■ シロギス *Sillago japonica* KAUM-I. 56744, 167.0 mm SL■ シロギス *Sillago japonica* KAUM-I. 86390, 131.5 mm SL

アカヒメジ属 *Mulloidichthys vanicolensis* (Valenciennes, 1831)**アカヒメジ** 珍しさ ★★★★★■ アカヒメジ *Mulloidichthys vanicolensis* KAUM-I. 98084, 291.0 mm SL

【解説】ヒメジ科魚類はすべて下顎にひげをもつことから「おじさん」と呼ばれることが多い。アカヒメジ属は鋤骨・口蓋骨に歯がない、顎歯が絨毛状である、第2背鰭が鱗に覆われないことなどが特徴。本種はモンツキアカヒメジ(本書未掲載)と混同されることがあるが、体高が高く、体側に黒色斑がない(モンツキアカヒメジにも不明瞭な個体がいる)ことなどにより識別できる。同属のリウキュウアカヒメジ(本書未掲載)は生時に縦帯がないことで本種と識別されるが、興奮時や夜間など個体の状態によっては薄くもつものもいることが報告されている(Koeda et al., 2016c)。本種は腹腔内臓が黒いため、これが白色のリウキュウアカヒメジと識別することができる。おもに岩礁・サンゴ礁域に生息し、数~数十個体の群れでゆっくりと泳ぐ姿がよくみられる。また、夜間によく釣れることから、本種は夜行性であるのであろう。夜間や興奮状態のとき、死後は体色が赤くなるが、生時の日中は赤色がまったくなく全体に黄色が鮮やか。房総半島以南の太平洋沿岸と琉球列島、小笠原諸島に分布するが、南日本では少ない。臭みはないものの、身が柔らかく、味が薄いため、他のヒメジ科魚類と比較すると食用としての価値はやや低い。南蛮漬けなどにすると身の軟らかさが程良く、美味に食することができる。(小枝圭太)



■ アカヒメジの腹腔内臓(お腹の内側)は黒い(KAUM-I. 98084)

ウミヒゴイ属 *Parupeneus biaculeatus* (Richardson, 1846)**ミナベヒメジ** 珍しさ ★★★★★■ ミナベヒメジ *Parupeneus biaculeatus* KAUM-I. 80893, 350.0 mm SL

【解説】2015年に和歌山県産標本に基づき日本で初めて記録され（池田・中坊、2015）、その後、鹿児島県からも記録された（田代ほか、2015）。ホウライヒメジ、オキナヒメジとよく似るが、これら2種のひげが黄色であるのに対し、ミナベヒメジではひげが白色であること、第2背鰭と臀鰭に白色斑をもたない、尾柄部に黒色鞍状斑がないことにより識別される。本種は国内において和歌山県南部と鹿児島県から記録があり、和歌山県南部では水深30～90mの岩礁域で延縄や刺網により漁獲される（池田・中坊、2015）。鹿児島県では水深20～30mで定置網、水深40～80mで釣りにより漁獲されている。小型個体は港湾内外の砂泥底の浅場でもみられる。味は不明だが、ホウライヒメジやオキナヒメジと同様に、ヒメジ科のなかでも美味である可能性が高い。内之浦漁港ではこれら2種と同様に「ひめ」と呼ばれる。（小枝圭太）

ウミヒゴイ属 *Parupeneus chrysopleuron* (Temminck & Schlegel, 1843)**ウミヒゴイ** 珍しさ ★★★★★ (解説は次ページ)■ 水揚げされたウミヒゴイ *Parupeneus chrysopleuron* (2008年11月5日撮影)

【解説】体側に1本の黄色縦帯がはいるほかは、明瞭な斑紋はない。大型個体は他のウミヒゴイ属と比較して頭部が大きい。ウミヒゴイ属のなかでウミヒゴイの名をもつ唯一の種である（他種はオジサンを除きすべて〇〇ヒメジ）。やや深い岩礁域に生息し、幼魚は水深10m前後の砂底域で小さな群れをつくる。本属のなかでも北に分布する種で、青森県六ヶ所、千葉県以南の太平洋沿岸、山口県から長崎県の日本海沿岸などから知られる。琉球列島や小笠原諸島にも分布するが稀。冬に美味であるとされる。体長50cmまで成長する。内之浦漁港では大型個体の採集例は少ないが、他のヒメジ科と同様に大型個体が漁獲された場合は、市場に並ぶと思われる。（小枝圭太）

ウミヒゴイ属 *Parupeneus ciliatus* (Lacepède, 1802)

ホウライヒメジ 珍しさ★★



■ ホウライヒメジ *Parupeneus ciliatus* KAUM-I. 63208, 208.9 mm SL

【解説】オキナヒメジに似ており、生態や利用法などもほぼ同じ。ひげは黄色い。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸に分布するが、ホウライヒメジはより琉球列島で多い。山形県から福岡県にかけての日本海沿岸からも記録がある。小型個体は海藻繁茂域や浅場の砂底域でもみられるが、大型個体は水深30～40mのやや深いサンゴ礁の外縁で単独から複数個体の小さな群れを作る。夜間は体が赤くなり、岩に寄り添うようにして寝ていることがある。内之浦漁港では「ひめ」と呼ばれ、選別されて市場に並ぶ。沖縄では他のヒメジ類が「カタカシ」と称されるのに対し、本種のみ「ジンバー」と呼ばれ高値で取引される。ヒメジ科魚類のなかでは美味であるうえ、大型の個体も安定して漁獲されるため、水産的価値が高い。（小枝圭太）



■ ホウライヒメジの幼魚 (KAUM-I. 67146, 42.3 mm SL)



■ 市場に並ぶホウライヒメジ (2013年10月10日撮影)

ウミヒゴイ属 *Parupeneus heptacanthus* (Lacepède, 1802)**タカサゴヒメジ** 珍しさ★★■ タカサゴヒメジ *Parupeneus heptacanthus* KAUM-I. 82762, 154.3 mm SL

【解説】体は全体にピンク色で、体側後半から尾鰭にかけて淡く黄色い。体側中央に小さな暗赤色斑が1つある。この暗赤色斑は生時、非常に明瞭だが、死後には薄くなることもある。水深 88 m までの砂泥底や海藻繁茂域に生息し、ひげを使って表層の砂をかき分けている姿がみられる。国内では琉球列島に多く分布する。宮城県、千葉県館山湾から高知県柏島の太平洋沿岸、鹿児島湾、山口県日本海沿岸や天草諸島からも記録があるが、多くは死滅回遊である。本報告で内之浦漁港から得られた標本は鹿児島県太平洋沿岸からの初めての記録である。体長 23 cm 程度まで成長し、沖縄・奄美などの琉球列島では食用にされるが、日本本土沿岸では小型個体が多く、多くは利用されない。内之浦漁港では体長 15 cm 以下の個体が多く採集されている。(小枝圭太)

■ タカサゴヒメジの幼魚 *Parupeneus heptacanthus* (KAUM-I. 6873, 82.5 mm SL)

ウミヒゴイ属 *Parupeneus janseni* (Bleeker, 1856)

ロケットヒメジ (新称)

珍しさ ★★★★★

■ ロケットヒメジ *Parupeneus janseni* KAUM-I. 56723, 117.7 mm SL

【標本】KAUM-I. 56723、117.7 mm SL、鹿児島県肝属郡肝付町内之浦湾（内之浦漁協自営定置網で漁獲され内之浦漁港で水揚げ）、水深40 m以浅、2013年10月10日、目黒昌利・小枝圭太・畑 晴陵・三澤 遼；KAUM-I. 110110、134.5 mm SL、内之浦湾（内之浦漁協自営定置網で漁獲され内之浦漁港で水揚げ）、水深40 m以浅、2017年11月23日、畑 晴陵・三木涼平。

【形態】Uiblein et al. (2017)にしたがって計数・計測した内之浦産標本の形態を以下に示す。2標本の計数・計測値に違いがみられた場合は、KAUM-I. 110110の値を括弧内に示した。

第1背鰭8棘；第2背鰭9軟条（最前のもののみ不分枝）；臀鰭1棘7軟条（最前のもののみ不分枝）；胸鰭15（16）軟条；腹鰭1棘5軟条；尾鰭8+7軟条；側線有孔鱗数27；側線上方横列鱗数2.5；側線下方横列鱗数6；鰓耙数6+20（すべて発達する）。

体各部の標準体長に対する割合（%）は以下の通り：第1背鰭起部における体高27.7（24.8）；臀鰭起部における体高23.5（21.4）；背鰭起部における腹縁から側線までの高さ20.7（20.6）；臀鰭起部における腹縁から側線までの高さ17.0（16.0）；尾柄高8.9（8.8）；尾柄幅4.0；頭部背縁から前鰓蓋骨下縁までの最大距離23.1（23.5）；眼を通る頭部背縁から前鰓蓋骨下縁までの最大距離20.5（20.2）；眼の下縁から前鰓蓋骨後角までの高さ12.2（13.2）；両眼間隔8.4；頭長32.6（32.5）；吻長15.3；眼後長12.1（12.7）；眼窩長6.6（5.8）；眼窩高6.0（5.2）；上顎長13.1（13.2）；下顎長11.3（12.0）；上顎高6.7（6.4）；吻幅8.1（9.2）；ひげ長23.2（22.0）；

ひげ幅1.0（1.3）；第1背鰭前長40.2（38.8）；第2背鰭前長66.3（65.2）；背鰭間長13.9（14.3）；尾柄長24.0（24.3）；臀鰭前長63.5；腹鰭前長31.8（32.8）；胸鰭前長32.0（32.8）；第2背鰭起部から臀鰭起部までの長さ23.8（22.0）；第2背鰭起部から腹鰭起部までの長さ27.9（25.2）；第1背鰭起部から胸鰭基底上端までの長さ17.8（16.3）；第1背鰭基底長15.6（15.1）；第2背鰭基底長15.4（15.2）；尾鰭長27.0（27.2）；臀鰭基底長11.6（12.6）；臀鰭高12.3（12.1）；臀鰭棘長0.9（1.5）；臀鰭第1軟条長7.4（7.3）；臀鰭第7軟条長8.5（8.2）；腹鰭棘長14.2（13.2）；腹鰭長20.5（20.0）；胸鰭長23.7（24.2）；胸鰭基底長5.7；背鰭第1棘長1.9；背鰭第2棘長17.6（17.7）；背鰭第3棘長19.7（20.4）；背鰭第4棘長18.9（19.7）；背鰭第1軟条長6.8（7.2）；背鰭第2軟条長12.1（11.3）；背鰭第8軟条長7.6（7.7）；背鰭第9軟条長8.0（8.1）；第2背鰭高11.6（12.5）。

体は細長い楕円形で、側扁する。体高は全体に低く、第1背鰭起部で最大となる。吻は丸みをおび、やや突出する。頭部背縁と頭部腹縁はほぼ対照的で、吻から背鰭起部および腹鰭起部までゆるやかに丸みをおびる。眼は体側中線より上方に位置し、頭部背縁に近い。眼隔域はわずかに膨出する。鼻孔は2対で、後鼻孔は眼の直前に、前鼻孔は後鼻孔の前下方にそれぞれ位置する。口裂はやや大きく、上唇がわずかに突出する。両顎には大きな歯が1列に並ぶ。鋤骨、口蓋骨に歯がない。ひげはやや長く、前鰓蓋骨後縁直下に達する。側線は完全に鰓蓋上後方から始まり、体背縁と並行にはしり、尾柄に達する。頭部と体は弱い櫛鱗で覆われる。尾鰭を除く各鰭と両顎には鱗がない。尾鰭は中央部の基部から1/3が鱗で覆われる。



■ ロケットヒメジ (KAUM-I. 110110, 134.5 mm SL)

第1背鰭起部は胸鰭基底上端や腹鰭起部よりわずかに後方、第4側線有孔鱗の直上に位置する。第1背鰭は第1棘が最短、第3棘が最長で、それより後方のものは徐々に短くなる。背鰭棘間の鰭膜は、欠刻しない。第1背鰭基底後端は、腹鰭起部と臀鰭起部の中央直上に位置する。広げた第1背鰭と腹鰭はほぼ同大。第2背鰭起部は臀鰭起部の直上。第2軟条が最長で、それより後方のものは徐々に短くなる。第2背鰭基底後端は臀鰭基底後端の直上。広げた第2背鰭と臀鰭はほぼ同大。臀鰭起部は第2背鰭第2軟条基底の直下に位置する。臀鰭棘は1本で、極めて短く、軟条は第1軟条が最長で、それより後方のものは徐々に短くなり、最後軟条はわずかに伸長する。胸鰭起部上端は腹鰭起部の直上。胸鰭後端はやや尖り、第3軟条が最長で、それより下方の軟条は徐々に短くなる。胸鰭後端は背鰭基底後端のほぼ真下。腹鰭は第1軟条が最長で、それより後方のものは徐々に短くなる。尾鰭は二叉し、後縁は深く湾入する。

【鮮時の色彩】体の地色はピンク色で腹側は白い。側線に重なって幅の広い黄色縦帯がはしり、それより背側は赤色。各鱗の外縁はやや色が濃い。頭部は赤色で頬部は黄色。眼から放射状に薄紫色の破線が伸びる(背面を除く)。虹彩は赤色。ひげは白色。第1背鰭は乳白色でまだらに赤色。第2背鰭は半透明で、細いピンク色と黄色の縦帯が交互に3~4列はしる。臀鰭は乳白色で、細い黄色縦帯が3列はしる。胸鰭は赤みがかった半透明。腹鰭は白色で、細い黄色縦帯が7列はしる。前部はわずかに赤みがかかる。尾鰭は全体に黄土色で、上葉と下葉の先端付近外側はピンク色。上葉と下葉の中央やや外側の鰭膜には眼と同大の赤色円斑がある。

【分布、生息水深および体長】本種はインド・西太平洋に広く分布し、ベトナム中南部、フィリピン、インドネシア南西部、オーストラリア東部からの記録があり(Uiblein et al., 2017)、内之浦湾(本研究)から得られた2標本は、本種の日本からの初記録となると同時に、分布の北限を更新するものである。これまで採集された水深は24~100 mで、最大体長は159 mm。

【備考】内之浦湾から得られた2標本は、第2背鰭が鱗で覆われない、鋤骨・口蓋骨に歯がない、側線有孔鱗数が27、顎歯が大きく1列に並ぶなどの特徴がRandall (2004)で示されたウミヒゴイ属の特徴に一致した。また、胸鰭軟条数が15、側線有孔鱗数が27といっ

た計数形質、さらに体がピンク色で側線に沿って幅の広い黄色縦帯がある、ひげが白いといった色彩の特徴がUiblein et al. (2017)が示した*Parupeneus jansanii*の特徴によく一致した。彼らはシントタイプを含めた本種の再記載をおこなっており、体長110 mm以下の小型個体とそれ以上の大型個体を区別して計測形質を示している。内之浦産の標本は、尾柄高が8.9 (8.8)%、頭部背縁から前鰓蓋骨下縁までの最大距離が23.1 (23.5)%、吻長が15.3%、ひげ長が23.2 (22.0)%、臀鰭基底長が11.6 (12.6)%、腹鰭長が20.5 (20.0)%、背鰭第8軟条長が7.6 (7.7)%、尾鰭長が27.0 (27.2)%と、計測形質においてもUiblein et al. (2017)が示した*P. jansanii*の大型個体の特徴によく一致したため、本種に同定された。内之浦産は第1背鰭起部における体高が体長の27.7 (24.8)%、臀鰭起部における体高が23.5 (21.4)%とUiblein et al. (2017)が示した大型個体の範囲(23~26%と19~21%)よりわずかに高い値を示した。ただし、本種の計測形質には3~4%程度の変異が普通にみられ、地域による変異も示されていることに加え(Uiblein et al., 2017)、他の形質が本種の特徴によく一致してしていることから、本報告ではこれらを種内変異とみなした。

*Parupeneus jansanii*はタカサゴヒメジ*P. heptacanthus* (p. 327に掲載)にもっとも似た形態をもつが、*P. jansanii*はタカサゴヒメジと比較してひげが短い、腹鰭と尾鰭が短い、臀鰭基底が長い、体側中央に1赤褐色紋を欠く、幅広い黄色縦帯があるなどにより識別できる。*P. jansanii*に似た黄色縦帯をもつ種としてウミヒゴイ*P. chrysopleuron* (p. 325に掲載)が挙げられるが、*P. jansanii*は体高が全体に低いことと黄色縦帯が側線の上をはしることで、体高が高く、黄色縦帯が尾柄部で背縁付近をはしるウミヒゴイと識別することができる。

内之浦においては、形態を記載した2標本の他に、2006年8月25日に体長8 cm程度の小型個体が写真によって記録されているが(下図)、標本は残っていない。この個体はウミヒゴイ属としては体高がかなり低い、体側中央に暗赤色斑がない、黄色縦帯が体側をはしるといった特徴をもちあわせていたことから、*P. jansanii*の小型個体であると判断された。なお、他のウミヒゴイ属の小型個体と同様に、食用としては利用されていない。

本種は体高が低いために体が細長く、また背腹にほぼ均等に開く鰭はロケットを連想させる。また、採集地である内之浦には日本国内に2ヵ所しかないロケット打ち上げ施設が立地することに因み、内之浦産の標本(KAUM-I. 56723)に基づき新標準和名ロケットヒメジを提唱する。

(小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之)



■ ロケットヒメジの幼魚 (2006年8月25日撮影)

ウミヒゴイ属 *Parupeneus indicus* (Shaw, 1803)

コバンヒメジ 珍しさ ★★★★★



■ コバンヒメジ *Parupeneus indicus* KAUM-I. 77502, 276.1 mm SL

【解説】 尾柄部に大きな黒褐色斑紋があり、体側に前後方向に長い楕円形の黄色斑があることが特徴。和名にある「コバン」もこの黄色斑に由来する。サンゴ礁域の砂底に生息し、他のヒメジ科魚類やベラ類、ブダイ類、アイゴ類、ニザダイ類などとともに、異種混合群をつくっていることがある。千葉県館山以南の太平洋沿岸、山口県から九州西岸にかけても記録はあるが、琉球列島ではごく普通にみられることから、南日本ではかなり少ないといえる。体長 40 cm に達することから、沖縄では食用とされるが、日本本土ではあまり利用されないか、極めて安価で取引されるにとどまる。不味ではないが、身がやや柔らかいためホウライヒメジなどの上質で高値が付くヒメジ科魚類と比較すると評価が低い。(小枝圭太)



■ 他のヒメジ科魚類とともに市場に並びコバンヒメジ（中央・右）（2009年6月17日）

ウミヒゴイ属 *Parupeneus multifasciatus* (Quoy & Gaimard, 1825)**オジサン** 珍しさ ★★★★★■ オジサン *Parupeneus multifasciatus* KAUM-I. 12712, 124.6 mm SL

【解説】白色の体に第2背鰭下と尾柄背側にやや濃い暗色鞍状斑がある。興奮したり、死ぬと赤色になる。ヒメジ科魚類はすべて下顎にひげをもつことから「おじさん」と呼ばれることが多いが、標準和名としてのオジサンは本種を指すので注意が必要。琉球列島では最もよくみられるヒメジ科魚類のひとつで、サンゴ礁域で単独あるいは数個体で群れながら餌を探して泳ぎ回る。小さな石を吻とひげを使ってひっくり返し、餌を探す。釣りでよく釣れる。千葉県外房以南の太平洋沿岸や山口県から九州西岸にかけても記録はあるが、琉球列島や小笠原諸島と比較すると極めて少ない。大きくても体長 20 cm 程度と小型で、味も悪いため食用とされることはほとんどない。鹿児島県本土では普通にみられるものの、内之浦漁港では 2007 年 11 月に漁獲された1個体のみ記録されている。(小枝圭太)

ウミヒゴイ属 *Parupeneus spilurus* (Bleeker, 1854)**オキナヒメジ** 珍しさ ★★★

(解説は次ページ)

■ オキナヒメジ *Parupeneus spilurus* KAUM-I. 12731, 104.6 mm SL



■ オキナヒメジ *Parupeneus spilurus* KAUM-I. 74778, 117.3 mm SL

【解説】ホウライヒメジによく似るが、臀鰭が低く、基底が長いことで、長方形に見える。この特徴によって、臀鰭が正方形に近い形のホウライヒメジと識別できる。多くの文献に書かれている尾柄部の黒斑は、両種ともに不明瞭な個体が多く、識別には不適切な場合が多い。浅場の岩礁域に単独あるいは数個体の小さな群れで生活する。本属魚類のなかでも北に分布する種で、青森県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸では普通にみられる。琉球列島や小笠原諸島にも分布するがその数はホウライヒメジと比べて少ない。淡白で味が良く、煮物などで食されるほか、鯛の代用品として祝い事にも用いられるという。体長 30 cm を越え、薩摩半島ではしばしば水揚げされているが、内之浦では大型個体の水揚げは少ない。(小枝圭太)

ヒメジ属 *Upeneus guttatus* (Day, 1868)

アカネヒメジ 珍しさ★★



■ アカネヒメジ *Upeneus guttatus* KAUM-I. 73966, 92.3 mm SL

【解説】ヒメジ属は鋤骨・口蓋骨に絨毛状の歯があり、第2背鰭基底前半が鱗でおおわれることが特徴で、尾鰭の模様と同定形質として重要である。本種は、2012年に内之浦漁港と薩摩半島笠沙産の標本に基づき国内から初めて報告された種であり、その体色にちなみアカネヒメジの和名が与えられた (Motomura et al., 2012)。ヒメジとよく似ており、尾鰭下葉の模様で識別が可能である。国内においては鹿児島県の薩摩半島と大隅半島に分布している。南日本ではヒメジと区別されず食用魚として扱われている可能性もあるが、内之浦漁港ではヒメジと同様に積極的に利用されず、養殖魚の餌料になっていることがほとんどである。(小枝圭太)

ヒメジ属 *Upeneus itoui* Yamashita, Golani & Motomura, 2011**サクヤヒメジ** 珍しさ★★■ サクヤヒメジ *Upeneus itoui* KAUM-I. 86533, 138.3 mm SL■ サクヤヒメジ *Upeneus itoui* KAUM-I. 68416, 102.8 mm SL

【解説】2011年に内之浦を含む鹿児島県産の標本をもとに記載された種である (Yamashita et al., 2011)。ヨメヒメジによく似ており、混群も形成するが、ひげが白いことで容易に識別できる。幼魚もヨメヒメジと混群を形成することもあり、この識別は非常に難しい。本種は愛媛県、高知県、宮崎県から鹿児島県本土、沖縄島から記録があり、その後、種子島と台湾にも分布することが確認された (田代ほか、2014)。本種の標準和名である「サクヤ」は本種が多く生息する鹿児島県笠沙町で結婚したと伝えられる日本神話の女神、木花咲耶姫 (コノハナノサクヤヒメ) に由来する (田代ほか、2014)。ちなみに木花咲耶姫のひ孫が神武天皇とされる。内之浦ではよくみられるヒメジ科魚類で、よく似たヨメヒメジとほぼ同じ頻度で見られる。一般的に、「新種」というと珍しい種であるように思われがちであるが、本種のように、ごく普通にみられる種に混じって実はよく似た新種がいた、という例は意外に多い。(小枝圭太)



■ サクヤヒメジ KAUM-I. 56749, 117.6 mm SL



■ サクヤヒメジ KAUM-I. 44870, 121.4 mm SL

ヒメジ属 *Upeneus japonicus* (Houttuyn, 1782)

ヒメジ 珍しさ★



■ ヒメジ *Upeneus japonicus* KAUM-I. 73965, 126.6 mm SL

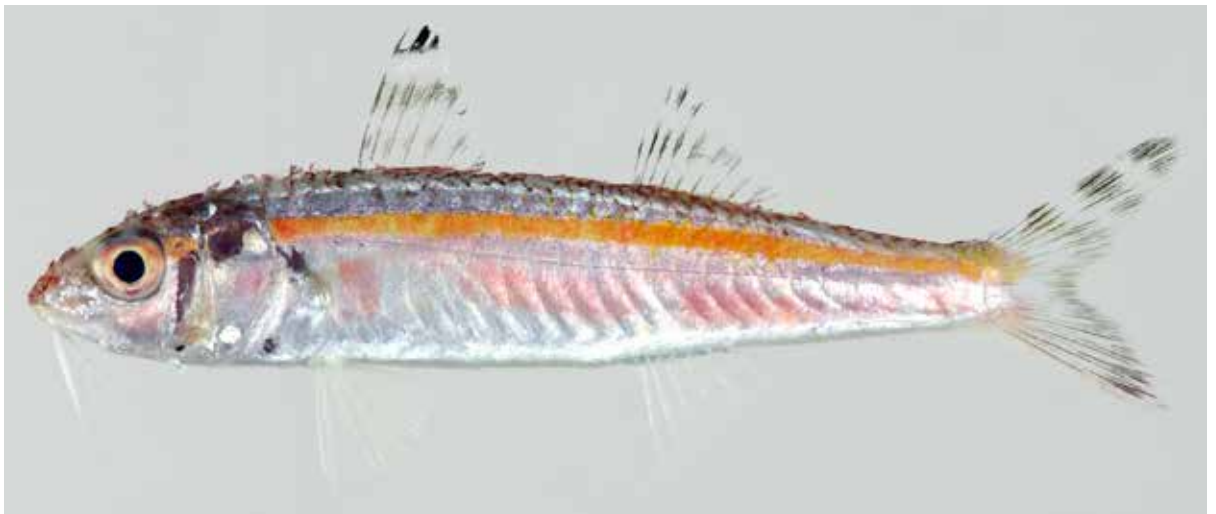


■ ヒメジ *Upeneus japonicus* KAUM-I. 86393, 93.7 mm SL

【解説】内之浦では最もよくみられるヒメジ科魚類で、尾鰭上葉に2～4本の赤色帯がある、体側に縦帯がない、第1背鰭が7棘であることが特徴。ひげは黄色い。よく似るアカネヒメジとは、尾鰭下葉が一様に赤色である（アカネヒメジでは複数の赤色帯がある）ことなどで識別される（Motomura et al., 2012）。水深35～160mの砂泥底で普通にみられる。本科魚類のなかでは小型な種だが、南日本の各地で食用とされる。魚類、エビ類、ヨコエビ類などをおもな餌としている。東シナ海における本種の産卵期は4～9月で最小成熟尾叉長が12cm。大部分は尾叉長14cm以上で成熟すると推定されている。国内において北海道～九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、東シナ海大陸棚域、琉球列島、小笠原諸島とほぼ全域に分布している。琉球列島や小笠原諸島では少ない。南日本では地域によっては干物など食用魚として価値が高く、汁物や干物にして食され美味であるが、内之浦では積極的に利用されず、養殖魚の餌料になっている。（小枝圭太）

ヒメジ属 *Upeneus moluccensis* (Bleeker, 1855)**キスジヒメジ** 珍しさ★★■ キスジヒメジ *Upeneus moluccensis* KAUM-I. 56721, 130.0 mm SL

【解説】尾鰭上葉に6～7本の暗色帯があり、体側に蛍光マーカを引いたような鮮やかな蛍光黄色の縦帯があることで同属他種と簡単に区別できる。ただし、幼魚では黄色帯がオレンジ色がかかり、細いものが多い。水深10～80mの内湾の砂泥底に生息し、東南アジアでは底曳網などによりよく混獲される。国内では三重県尾鷲から九州南岸、琉球列島に分布する。ヒメジ属魚類は一部の種を除き、小型であることが多く、水産資源としての利用は少ない傾向がある。(小枝圭太)

■ キスジヒメジの幼魚 *Upeneus moluccensis* (KAUM-I. 82846, 46.9 mm SL)

ヒメジ属 *Upeneus subvittatus* (Temminck & Schlegel, 1843)

ヨコヒメジ 珍しさ★★★★



■ ヨコヒメジ *Upeneus subvittatus* KAUM-I. 78163, 108.5 mm SL

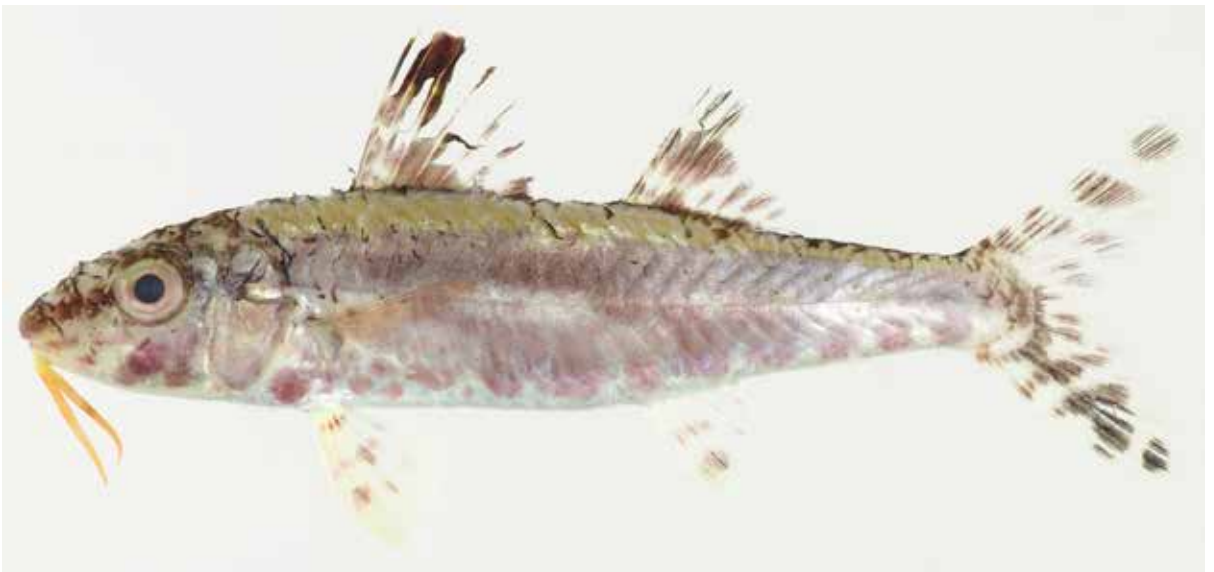


■ ヨコヒメジ *Upeneus subvittatus* KAUM-I. 78164, 104.7 mm SL

【解説】ミナミヒメジに似るが、体側に明瞭な縦帯がなく、尾鰭下葉の暗色帯の幅がどれも同じであることなどにより識別できる。体に目立った模様はないものの、全体は桃色に輝き美しい種である。沿岸の砂泥底域に分布する。国内での分布記録は限定的で、土佐湾、有明海、沖縄島からのみ記録があった。内之浦漁港では3標本が得られており、九州太平洋沿岸からの標本に基づく初めての記録となった。他のヒメジ属魚類と同様に、大きくとも体長は20 cmほどと小さいため、食用としての利用は少ないと思われる。(小枝圭太)

ヒメジ属 *Upeneus tragula* Richardson, 1846**ヨメヒメジ** 珍しさ★★■ ヨメヒメジ *Upeneus tragula* KAUM-I. 56781, 145.8 mm SL

【解説】尾鰭両葉に暗色帯が複数あり、体側に黒褐色斑点が散在することが特徴。またひげが黄色いことでよく似たサクヤヒメジと識別される。水深 30 m 付近までのサンゴ礁域や内湾の砂底や泥底、スロープ状に水深が深くなる斜面に多い。単独あるいは 2 個体で、海底に静止していることが多い。茨城県以南の太平洋沿岸、福井県以南の日本海・東シナ海、琉球列島に分布する。琉球列島でも日本本土沿岸でも普通にみられる。体長は 30 cm ほどに成長するが、体高が低く、身がやや少ない。また、他のヒメジ科魚類と比較して身が柔らかく、味も乏しいため、食用魚としての評価は高くない。(小枝圭太)



■ ヨメヒメジの幼魚 (KAUM-I. 82845, 61.8 mm SL)

ヒメジ属 *Upeneus vittatus* (Forsskål, 1775)

ミナミヒメジ 珍しさ ★★★



■ ミナミヒメジ *Upeneus vittatus* KAUM-I. 83509, 163.4 mm SL

【解説】ヒメジ属のなかではやや体高が高く、第1背鰭の先端が黒いこと、尾鰭下葉中央部の暗色帯の幅が広いこと、体側に複数本の縦帯がはしることが特徴。礁湖の砂底域や水深 100 m までの沿岸域に分布するが、やや濁りの強い場所を好むためか、水中で生体のみることはなかなかない。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸と琉球列島に分布する。いずれの地域においても大量に漁獲されることは少なく、水産資源としての利用も少ない。(小枝圭太)



■ 様々な雑魚と一緒にトロ箱で扱われるキンメモドキ *Parapriacanthus ransonneti*

キンメモドキ属 *Parapriacanthus ransonneti* Steindachner, 1870**キンメモドキ** 珍しさ★■ キンメモドキ *Parapriacanthus ransonneti* KAUM-I. 82848, 57.9 mm SL■ キンメモドキ *Parapriacanthus ransonneti* KAUM-I. 62298, 55.5 mm SL

【解説】 体は長卵形でハタンポ属に比べて体高は低く、臀鰭基底が短い。鱗は細かく、ツマグロハタンポの鱗によく似る。胸部筋肉内にY字状の発光腺とI字状の肛門発光器をもっているが、外から光がみえることはない。幼魚は体が半透明で、テンジクダイ科のスカシテンジクダイ属魚類などとサンゴ礁域の枝状サンゴの周辺で大群を形成する。さらにそれらを狙って、その周囲でアザハタやハナミノカサゴなどのハンターたちがそれらを狙いに集まる。このようなシーンは、非常に美しく、水中写真の題材となることも多い。体が半透明で同じ場所で群れることからスカシテンジクダイ属と間違えられることもあるが、背鰭が1基であることや、体がオレンジ色がかかることにより簡単に識別できる。成魚は岩やサンゴの下、穴の中で密度の高い群れを形成する。日本では千葉県以南の太平洋沿岸と九州北岸・北西岸、琉球列島、小笠原諸島に分布する。内之浦漁港では大量に混獲され、見かけない日はないほど。「きんぎょ」と呼ばれるが、市場に出ることはなく、養殖魚の餌料となっている。(小枝圭太)

ハタンポ属 *Pempheris adusta* Bleeker, 1877

リュウキュウハタンポ

珍しさ ★★★★★

■ リュウキュウハタンポ *Pempheris adusta* KAUM-I. 80506, 138.0 mm SL

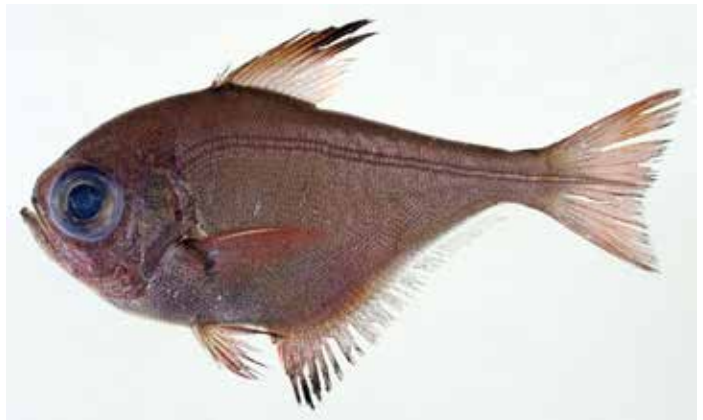
【解説】ハタンポ属は体が縦に長い菱形で、臀鰭基部が長い。ツマグロハタンポを除き、軟らかく剥がれやすい鱗をもつ。夜になると日中の隠れ家から出て、餌となる動物プランクトンを求めて泳ぎ回るといふ夜行性魚類としての特徴をもつ。夜になると体色が日中より薄くなり、銀白色に近づく。胸鰭を使って羽ばたくように泳ぎ、尾鰭をほとんど使わない泳ぎ方をするが、このような泳ぎ方はブダイ類やベラ類などでよくみられる。

本種は体が濃い茶色から赤褐色で、吻が丸い。胸鰭基部の半分程度を占める淡い黒色斑があることが特徴。インド・太平洋の広域で最も一般的にみられるハタンポ属であるが、近年、小枝ほか（2014）により本種に適用すべき学名が決定されるまで長きにわたって分類学的な混乱がみられた。サンゴ礁域の岩の割れ目や水中洞窟に棲み、夜は外を徘徊する。沖縄島における本種の生活史が明らかにされており、周年産卵（1年中産卵する）をおこない、最高で16歳まで成長することが示されている（Koeda et al., 2013, 2016d）。国内では琉球列島や小笠原諸島に多く（小枝, 2017c）、南日本沿岸では非常に稀で、内之浦湾のほか、静岡県焼津（稚魚）、高知県伊布利、三宅島からのみ記録がある。琉球列島においてはごく普通種であるが、ミナミハタンポと比べると個体数は少ない。これら2種は混群を形成することもあるが、リュウキュウハタンポが12 cm程度の大型のものが多いため（ミナミハタンポは10 cm程度が多い）、同じ水中洞窟のなかでも、別群を形成している様子もたびたびみられる。内之浦漁港からは小枝・本村（2015）により1個体（KAUM-I. 66699）が九州沿岸からの初記録として報告され、その後さらに1個体（KAUM-I. 80506）が採集された。内之浦で得られた個体は、耳石による年齢査定から3歳であると推定され、鹿児島県本土で越冬している可能性が高い。これらは産卵可能な体サイズでもあるものの、KAUM-I. 66699の卵巣が過熟状態であったことから、本種が鹿児島県本土において再生産をおこなっているのか、それとも死滅回遊であるかは現在のところ不明である。（小枝圭太）

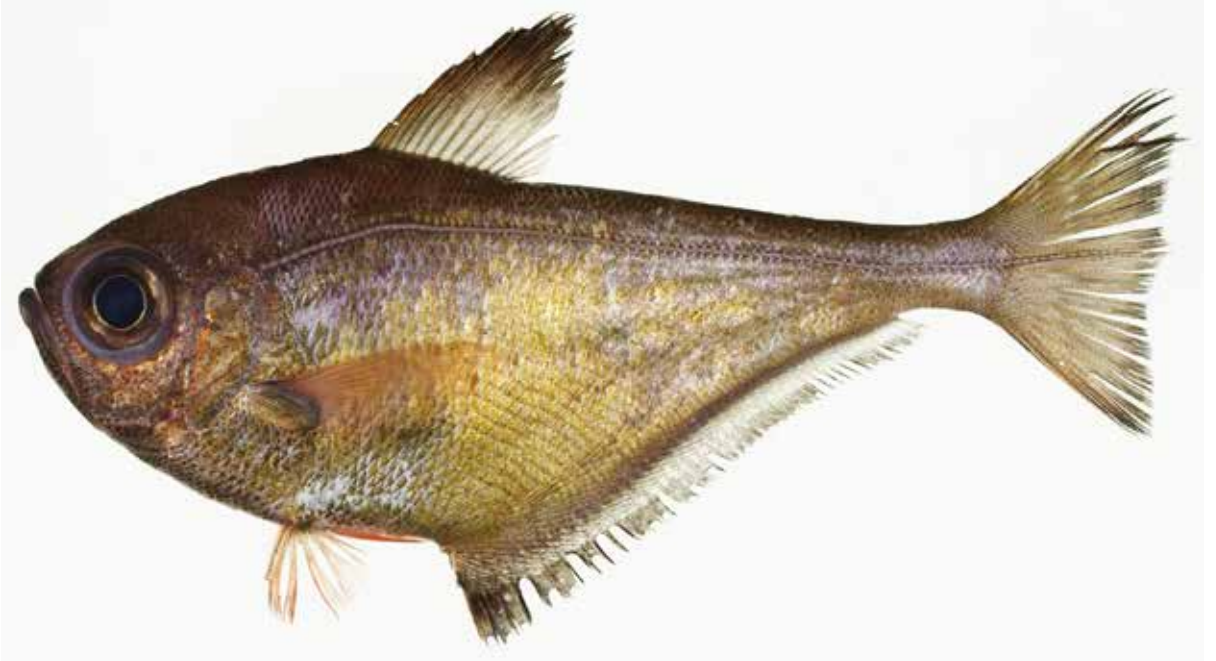
■ リュウキュウハタンポ
(KAUM-I. 66699, 159.5 mm SL)

ハタンポ属 *Pempheris japonica* Döderlein, 1883**ツマグロハタンポ** 珍しさ ★★★■ ツマグロハタンポ *Pempheris japonica* KAUM-I. 80507, 87.1 mm SL

【解説】硬く、剥がれにくい鱗をもつ種であり、体は赤褐色で体高が高く、吻は丸みをおびる。腹鰭前方の断面に隆起線がなく、平坦。体全体が強い櫛鱗で覆われ、表層の下の小鱗をもたないことが特徴。本種のように硬く剥がれにくい鱗をもつハタンポ属魚類は、北半球においてツマグロハタンポとポニンハタンポ *Pempheris familia* Koeda & Motomura, 2017（本書の著者らにより新種として記載された；本著未掲載）の2種のみが知られる（Koeda and Motomura, 2017）。ポニンハタンポはツマグロハタンポによく似るものの、鱗がより細かい（例えば側線上方横列鱗数が14～15；ツマグロハタンポでは12～13）、胸鰭基部に明瞭な黒色斑がある（ツマグロハタンポにはない、あるいは薄い）ことなどで区別される。また現在のところ、ポニンハタンポは小笠原群島の固有種であると考えられている。ツマグロハタンポは他のハタンポ属と比較するとやや動きが鈍く、岩の下や消波ブロックの隙間で多くても十数個体の群れを成す程度であり大きな群れは作らない（伊豆半島沿岸では大きな群れを作ることもある）。本科魚類のなかでも北に分布する種で、茨城県鹿島灘から九州南岸の太平洋沿岸に多く、九州北岸・北西岸、鹿児島県硫黄島、沖縄島からの記録もある。ただし、沖縄島では極めて稀。海外では韓国にのみ分布し、台湾には分布しない（小枝ほか、2010）。内之浦では、たまに1、2個体が混獲される程度で、数はかなり少ない。関東地方では比較的好まれるハタンポ科魚類であることから、日本の古い文献では本種を「ツマグロハタンポ」ではなく「ハタンポ」とのみ記しているものが多い（例えば松原、1955）。なお和名の「ハタンポ」は「アタンポ」の転訛（本来の発音がなまって変わること）で、頭部が大きいことを意味すると考えられている（榮川、1982）。和歌山県では頭でっかちの子供を「アタンポ」といい、高知県ではオタマジャクシを「アタン」というが、いずれも頭が大きいことに因む。本科魚類は地域によって呼び名の由来が異なり、沖縄県では身が薄いことから「カタジラー」（片身の魚）、高知県室戸では眼が大きいことから「ハルメ」、高知県・和歌山県では下顎が薄く短いことから「アゴナシ」などと呼ばれる。（小枝圭太）



■ ツマグロハタンポ KAUM-I. 111338, 90.8 mm SL

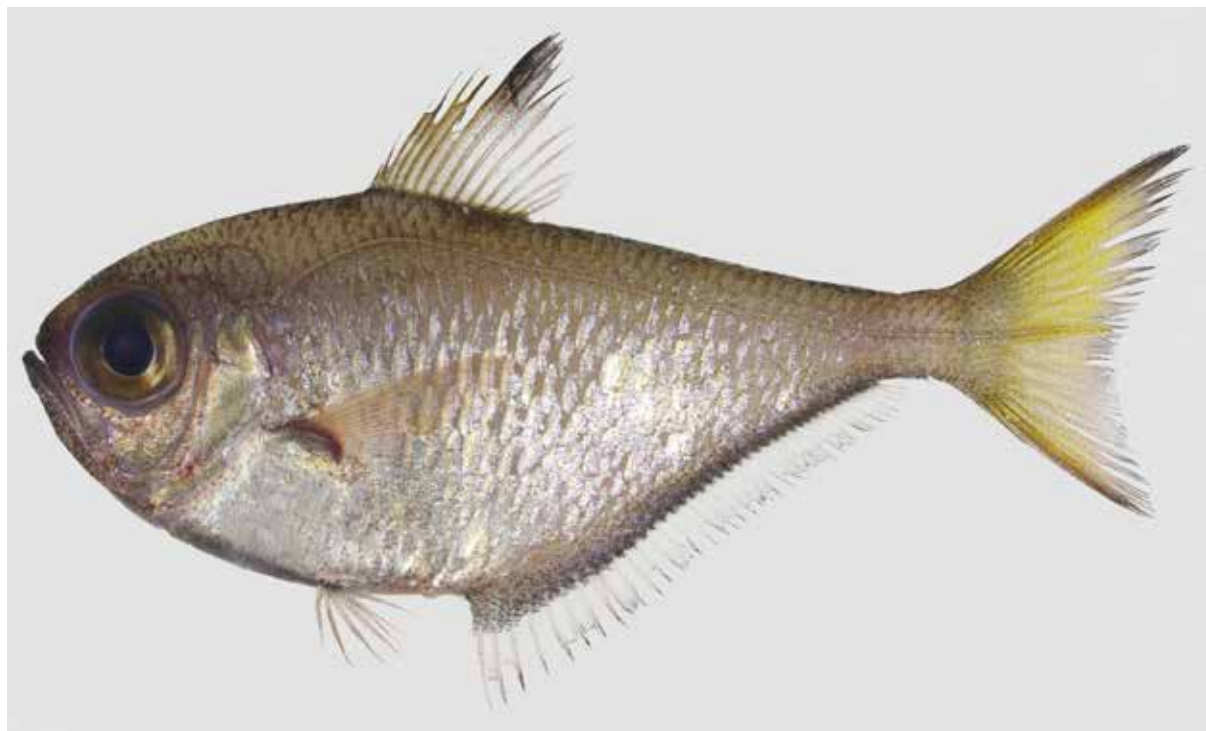
ハタンポ属 *Pempheris nyctereutes* Jordan & Evermann, 1902**ミエハタンポ** 珍しさ★★■ ミエハタンポ *Pempheris nyctereutes* KAUM-I. 94368, 126.7 mm SL

【解説】体は茶色から金色で、吻は尖る。腹鰭前方の断面に隆起線がある個体が多い。鱗は細かく、軟らかく、やや剥がれやすい。体側の鱗の形は弱い楕鱗で、くびれがない。表層の鱗の下に小鱗をもつが、その数は多くはない。水中でみると金色に輝く姿は美しい。側線の白色がよく目立ち、とりわけ水中では明瞭。最大で体長 16.5 cm まで成長する。あまり大きな群れは作らず、岩の下や消波ブロックの隙間で多くても数十個体程度の群れを成す。ハタンポ科としてはやや深い場所にも生息しており、水深 50 m 付近で採集されることもある。相模湾～九州南岸の太平洋沿岸および種子島、口永良部島（木村ほか、2017）、台湾およびベトナム沿岸に分布するが、琉球列島には分布しない。日本の個体群と台湾・ベトナムの個体群が別種であるかについては、現在、筆者を含むグループにより研究が進められている。内之浦漁港ではミナミハタンポに次いで多く漁獲され、ひと網で数十個体が得られることもあるが、食用とはされず養殖魚の餌料となっている。ミナミハタンポを食用とする地域においても、より大型であるはずの本種は選別され投棄されるというので、よほど味が落ちるのかもしれない。ちなみに学名（種小名）の *nyctereutes* はラテン語で「夜を徘徊する者」を意味し、ハタンポ科魚類の生態の特徴に由来する。（小枝圭太）

■ ミエハタンポ *Pempheris nyctereutes* KAUM-I. 65972, 124.5 mm SL

ハタンポ属 *Pempheris schwenkii* Bleeker, 1855

ミナミハタンポ 珍しさ★

■ ミナミハタンポ *Pempheris schwenkii* KAUM-I. 94369, 90.8 mm SL

【解説】体は薄い茶色から金色で、吻はやや尖る。腹鰭前方の断面に隆起線がある個体が多い。鱗は大きく、軟らかく、非常に剥がれやすい。鱗の形は楕円形で、くびれがない。体全体を弱い櫛鱗が覆い、表層の鱗の下に円形の小鱗を多数もつ。胸鰭基部に黒斑がない（腋部は黒いため注意）。沖縄島での産卵期は1～6月で、寿命は最大で6歳、多くは1～2歳の間に死亡する（Koeda et al., 2012, 2016d）。さまざまな肉食魚の胃から得られており、上位捕食者の重要な餌生物となっている可能性がある（小枝・本村, 2017）。日本では南日本から琉球列島にかけて最も一般的にみられるハタンポ属魚類。福島県から大隅諸島までの太平洋沿岸および小笠原諸島の個体は尾鰭が黄色く、大隅諸島以南の太平洋広域の個体は茶色からピンクである。これら両タイプが別種であるかについては、現在、筆者を含むグループにより研究が進められている。内之浦では尾鰭が黄色い個体のみが漁獲されている。小型種で骨が硬いため、水産資源としての利用価値は低いが、味は良いため高知県や種子島、喜界島では食用として重宝される。とりわけ喜界島ではユメハタンポ（本書未掲載）など大型のハタンポ類を「シラー」、ミナミハタンポなど小型のハタンポ類を「ウフミ」と呼び分け、前者を刺身や煮物、後者を唐揚げや味噌汁などで食す（喜界島町役場, 2017）。南蛮漬けや塩煮などでも美味。内之浦漁港では「はりめ」「ヒウチ」「ヒウチザツ」と呼ばれ、大量に漁獲されるが、ほとんどの場合は食用として利用されない。ただし、型の良い個体がまとまって漁獲されると選別され、市場に並ぶこともある（小枝圭太）



■ ミナミハタンポ KAUM-I. 56786, 49.1 mm SL

■ 選別されるミナミハタンポ
(2012年6月29日撮影)

チョウチョウウオ属 *Chaetodon auripes* Jordan & Snyder, 1901**チョウチョウウオ** 珍しさ★★■ チョウチョウウオ *Chaetodon auripes* KAUM-I. 77503, 127.1 mm SL

【解説】チョウチョウウオ科は円盤形に近く、著しく側扁した体をもつ。仔魚後期から稚魚期はトリクテス期幼生とよばれ、頭にかぶとを被ったような形をしている。本種は体が黄色で頭部に1本の黒色横帯、体側に多くの暗色縦線がはしる。夜間は色が黒ずみ、岩やサンゴの陰でじっと動かない。岩礁やサンゴ礁に生息し、多くはペアだが、5～10個体程度の群れでもみられる。稀に数十個体からなる大群を形成することもある。約10℃の低水温に耐えることが知られ、国内では津軽海峡以南の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、琉球列島、小笠原諸島に分布する。最も北まで分布するチョウチョウウオ科魚類のひとつであり、どの場所でも成魚が普通にみられることから北方にも南方にも適応した種であると考えられる。全国的にあまり食用にされることはないが、意外に旨味もあり、塩焼きやみそ汁で美味（小山内、2017）。内之浦では柵網で漁獲されることが多い。（小枝圭太）



■ チョウチョウウオ KAUM-I. 12713, 74.2 mm SL

チョウウオ属 *Chaetodon lunula* (Lacepède, 1802)

チョウハン

珍しさ ★★★★★

■ チョウハン *Chaetodon lunula* KAUM-I. 12705, 130.8 mm SL

【解説】体色は黄色で頭頂部から眼の下方向かう黒色帯と胸鰭上方に幅の広い黒色斜帯があり、その間は白色帯で隔てられる。夜間は色が黒ずみ、岩やサンゴの陰でじっと動かない。岩礁やサンゴ礁に生息し、多くはペアだが、5～10個体程度の群れでもみられる。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、琉球列島、尖閣諸島、南大東島、八丈島～小笠原諸島に分布する。南日本太平洋沿岸でみられるもののほとんどは幼魚であり、成魚は稀。これらの個体は海流などによって卵や仔魚期に熱帯・亜熱帯域から流されてきた個体で、水温が低下する冬期には繁殖することなく死亡しているものと思われる。こうした再生産に至らない分布の拡大は、チョウウオ科やスズメダイ科などの熱帯性魚種に多く見られ、「死滅回遊」や「無効分散」と称される。内之浦漁港では体長13cmのやや小さい成魚1個体のみが得られている。(小枝圭太)



■ 冷凍前のチョウハン (KAUM-I. 12705)

チョウチョウウオ属 *Chaetodon nippon* Steindachner & Döderlein, 1883

シラコダイ 珍しさ ★★★★★

■ シラコダイ *Chaetodon nippon* KAUM-I. 40450, 130.0 mm SL

【解説】淡黄色の体で後部に褐色帯がある、眼上部に暗色横帯がないことが特徴。幼魚は浅場、成魚は水深 10～20 m の岩場に生息する。伊豆での産卵期は春～秋、産卵は日没後に 1 個体のメスと最も優位なオスのペアでおこなわれるが、そこに複数のオスが一斉に侵入して放精することが報告されている。卵は分離浮遊卵で、卵径は約 0.7 mm。国内での分布は房総半島～九州南岸の太平洋沿岸、屋久島、伊豆諸島および小笠原諸島で、国外では台湾とフィリピン諸島北部にのみ分布する。熱帯性種の多い本科魚類としては北方に適応した種である。内之浦漁港では 13 cm の成魚 (KAUM-I. 40450) と 2 cm の幼魚 (KAUM-I. 42690) の 2 個体のみが得られている。(小枝圭太)



■ シラコダイの稚魚 (KAUM-I. 42690, 22.7 mm SL)

チョウチョウウオ属 *Chaetodon vagabundus* Linnaeus, 1758

フウライチョウチョウウオ

珍しさ ★★★★★

■ フウライチョウチョウウオ *Chaetodon vagabundus* KAUM-I. 1463, 95.8 mm SL

【解説】体は白色で、後方が黄色い。頭部後方に斜め後上方に向かう黒色斜線が多数あり、また体側中央から臀鰭基部にかけても斜め後下方に向かう黒色斜線が多数ある。サンゴ礁・岩礁域でペアを作っており、相手がいなくなっても数か月以上は単独でいる。夜になると、摂餌のためのなわばりから、遠く離れた隠れ家まで帰り、岩やサンゴの陰でじっと動かない。その際は色が全体に黒ずむ。国内では三浦半島西岸以南の太平洋沿岸、琉球列島、南大東島、尖閣諸島、八丈島～小笠原諸島に分布し、琉球列島ではトゲチョウチョウウオ（本書未掲載）やチョウチョウウオと並び、最も良くみられる種のひとつである。南日本の太平洋沿岸で見られるものの、そのほとんどは幼魚であり成魚は稀であることから、死滅回遊であると考えられている。内之浦漁港では体長 10 cm のやや小さい成魚（KAUM-I. 1463）が 1 個体のみ得られている。（小枝圭太）



■ 冷凍前のフウライチョウチョウウオ（KAUM-I. 1463, 95.8 mm SL）

チョウチョウウオ属 *Chaetodon wiebeli* Kaup, 1863

ツキチョウチョウウオ

珍しさ ★★★★★



■ ツキチョウチョウウオ *Chaetodon wiebeli* (2012年1月24日撮影)

【解説】チョウチョウウオに似るが、体側に斜線がはしること、背鰭前方に大きい黒色斑があること、尾鰭に暗色横帯があることなどで識別される。水深 25 m 以浅の岩礁・サンゴ礁域に生息し、岩礁表面の付着藻類などを食べる。国内での報告例は少なく、三浦半島東岸以南の太平洋沿岸域、大阪湾、姫路、山口県以南の日本海・東シナ海沿岸、屋久島、奄美大島、沖縄諸島、尖閣諸島から散発的に報告があるのみ。国内における分布からも、本種がやや温帯性が強いことがうかがえる。内之浦漁港では 2012 年 1 月に約 15 cm ほどの成魚が 2 個体漁獲されたのみ。このうち 1 個体は、採集から 6 年近くが経過した 2017 年末現在もおワールド鹿児島水族館で飼育されている。(小枝圭太)



■ いおワールドかごしま水族館で飼育されているツキチョウチョウウオ (写真中央；2017年10月17日撮影)。

ハタタテダイ属 *Heniochus acuminatus* (Linnaeus, 1758)**ハタタテダイ** 珍しさ★★

■ ハタタテダイの背鰭は長く伸びる
(KAUM-I. 74752, 144.1 mm SL)



■ ハタタテダイの幼魚
(KAUM-I. 94346, 24.9 mm SL)

■ ハタタテダイ *Heniochus acuminatus* KAUM-I. 74752, 144.1 mm SL

【解説】ハタタテダイ属は側線が尾鰭基底まで達することが特徴。本種は白地に太い黒色横帯が2本はしり、2本目の後方は黄色い。背鰭第4棘が著しく伸長することも特徴（幼魚では伸長しない）。岩礁・サンゴ礁域に生息し、単独かペアもしくは数個体の群れでみられ、後出のムレハタタテダイのように数百個体による大群を作ることはない（似た環境に生息するため、両種が一時的に混じることはある）。岩礁域では付着藻類を、砂泥底では小動物を食べる。国内では青森県牛滝以南の太平洋沿岸、富山県新湊以南の日本海・東シナ海沿岸、大阪湾、伊予灘、琉球列島、南大東島、小笠原諸島に広く分布する。最も北まで分布するチョウチョウウオ科魚類のひとつである。内之浦漁港では柵網で漁獲されることが多いが、体長2～3cmの稚魚が定置網に入ることもある。（小枝圭太）

ハタタテダイ属 *Heniochus diphreutes* Jordan, 1903

ムレハタタテダイ 珍しさ ★★★



■ ムレハタタテダイ *Heniochus diphreutes*
KAUM-I. 65985, 97.0 mm SL



■ ムレハタタテダイの稚魚
(KAUM-I. 56785, 32.9 mm SL)



■ ムレハタタテダイの稚魚
(KAUM-I. 94376, 11.4 mm SL)

【解説】ハタタテダイに非常に良く似るが、ハタタテダイの背鰭棘数が 11 であるのに対し、ムレハタタテダイでは 12 であることで識別できる。水中では棘数による識別は出来ないが、ムレハタタテダイは胸部腹縁が膨らみ“ハト胸”であることで、膨らまないハタタテダイと識別可能。また、ハタタテダイが群れても数個体であるのに対し、ムレハタタテダイは名のとおり数十～数百個体の大きな群れを形成することも特徴といえる。ハタタテダイと比べると、やや潮通しの良い場所を好むが、同所的にも生息する。中底層を泳ぎ、動物プランクトンを食べる。白、黒、黄色のコントラストが美しい魚で、大群で泳ぐ姿は青い海にも良く映えるため、ダイバーからの人気が高い。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、山口県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島、八丈島～小笠原諸島に分布する。チョウチョウウオ科魚類のなかではやや北に分布する種で、南日本沿岸でも成魚の群れが普通にみられる。(小枝圭太)

ゲンロクダイ属 *Roa modesta* (Temminck & Schlegel, 1844)**ゲンロクダイ** 珍しさ ★★★■ ゲンロクダイ *Roa modesta* KAUM-I. 71448, 87.6 mm SL

【解説】体は白色で頭部に1本、体に3本の黄色横帯がある。稚魚にはこれら明瞭な縞模様はない。体高が高く、背鰭第3～4棘が長いことが特徴。ながくチヨウチヨウウオ属に含まれていたが、近年では別属であるゲンロクダイ属に含まれている。水深50～200mの岩礁域に生息するが、鹿児島湾では水深10mほどの浅海でみられた。津軽海峡以南の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、東シナ海南部大陸棚域、沖縄島に分布。国外では、韓国、中国、台湾などに分布し、東アジアに固有の種といえる。本科魚類のなかでも最も北に分布する種のひとつである。内之浦湾では成魚だけでなく、写真のようなトリクテス期の稚魚も稀に定置網に入る。(小枝圭太)

■ ゲンロクダイの稚魚 (KAUM-I. 51119, 12.9 mm SL)



キンチャクダイ属 *Chaetodontoplus septentrionalis* (Temminck & Schlegel, 1844)

キンチャクダイ

珍しさ ★★★★★

■ キンチャクダイ *Chaetodontoplus septentrionalis* KAUM-I. 7552, 128.2 mm SL

【解説】キンチャクダイ科は成魚と幼魚で色彩が大きく異なる種が多い。本種も成魚は体が黄色で体側全体に青色縦帯があるが、幼魚では地色が黒色で、頭部から腹部にかけて明瞭な黄色横帯が1本はしる。岩礁域に生息する。本科魚類のなかで最も北方に適応した種で、国内では宮城県石巻以南の太平洋沿岸、山形県以南の日本海・東シナ海沿岸、播磨灘、口永良部島、小笠原諸島に分布する。国外では韓国の済州島や台湾、中国の広東省、ベトナムから知られる。キンチャクダイ科の多くは臭みが強く不味であるとされ、本種も食用にされることはない。内之浦漁港では成魚も幼魚も漁獲されるが、いずれも数は多くない。

(小枝圭太)



■ キンチャクダイの幼魚 (KAUM-I. 56950, 34.5 mm SL)

サザナミヤッコ属 *Pomacanthus imperator* (Bloch, 1787)

タテジマキンチャクダイ

珍しさ ★★★★★

■ タテジマキンチャクダイ *Pomacanthus imperator* KAUM-I. 74769, 252.9 mm SL

【解説】成魚の体は黄色と青色の斜め縞模様で、頭部には眼を通る黒色横帯がある。幼魚はサザナミヤッコの幼魚に似るが、白色と青色のラインが輪状であることで輪状にならないサザナミヤッコの幼魚と識別できる。成魚、幼魚ともに特徴的かつ美しい体色のため、観賞魚としての人気が高く、ペットショップや水族館でよくみられる。華やかな外見に似合わず、前鰓蓋には強大な棘をもつ。サンゴ礁・岩礁域に分布し、サザナミヤッコと比べるとやや深く、潮通しの良い場所に多い傾向がある。危険を察知すると岩の下やサンゴの陰に逃げ込み、その場で反転して隠れ場所から様子を窺う習性がある。国内では茨城県鹿島灘以南の太平洋沿岸と琉球列島、南大東島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布している。琉球列島ではごく普通にみられるが、南日本では少ない。内之浦漁港では大型個体の成魚2個体が得られており、幼魚は採集されていない。(小枝圭太)



■ 飼育されたタテジマキンチャクダイ (2008年5月12日撮影)

サザナミヤッコ属 *Pomacanthus semicirculatus* (Cuvier, 1831)**サザナミヤッコ** 珍しさ ★★★★★■ サザナミヤッコ *Pomacanthus semicirculatus* KAUM-I. 65656, 277.4 mm SL

【解説】成魚は体が黄緑色で細かい暗色斑が散在する。鰓蓋骨や前鰓蓋骨、背鰭、臀鰭の後縁が鮮やかな青色で縁どられる。とりわけ鰓蓋の青色は生時、水中で輝くように美しい。幼魚は黒色の体に青色と白色の細い横帯が縞模様を形成して美しいため、観賞魚としての人気が高い。和名の「サザナミ」はこの幼魚期の色彩に由来する。サンゴ礁・岩礁域に生息する。タテジマキンチャクダイと同様に危険を感じると岩陰に入り、危険の対象の動きを見る習性があるようである。サンゴ礁域では、幼魚がごく浅いタイドプール（潮だまり）に取り残されていることがある。鰓蓋の棘が意外に強力なので、生体を扱う際は注意が必要。インド・太平洋に広く分布し、国内では茨城県鹿島灘以南の太平洋沿岸、長崎県壱岐、五島列島、鹿児島県薩摩川内、琉球列島、尖閣諸島、南大東島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布する。琉球列島ではごく一般的にみられるが、南日本沿岸では少ない。内之浦漁港では、体長 27 cm の成魚（KAUM-I. 65656）が 1 個体のみ得られている。沖縄県ではごく稀に市場に並ぶが、基本的には食用にしない。身は軟らかく、臭みが強く、不味であった。（小枝圭太）



■ サザナミヤッコの鰓蓋の棘は鋭い (KAUM-I. 65656)

テングダイ属 *Evistias acutirostris* (Temminck & Schlegel, 1844)**テングダイ** 珍しさ ★★★■ テングダイ *Evistias acutirostris* (2005年4月7日撮影)

【解説】カワビシヤ科魚類は体高が非常に高く、大きい背鰭をもつことが特徴。本種は背鰭棘と臀鰭棘が短いことで似たカワビシヤ（本書未掲載）と区別される。成魚は黄色い体に褐色横帯が複数はしるが、幼魚の体側には虫食い模様や斑点が散在する。「テング」の名の通り、吻が突出する。水深 18 ~ 250 m の砂底や岩礁域に生息し、岩の下などで動かずじっとしていることが多い。日本、朝鮮半島南岸、済州島、台湾南部、オーストラリアのロードハウ島、ニュージーランド、ハワイ諸島から知られる。国内では北海道から九州南岸、沖縄県伊江島、八丈島～小笠原諸島に広く分布する。科名であるカワビシヤの「カワ」は皮が厚いことに由来するとされ、「ビシヤ」は菱型あるいは縞模様由来するとする説がある。内之浦において成魚は非常に稀で、1 個体のみ写真による記録がある。幼魚は時折みられる。（小枝圭太）



■ テングダイの幼魚 (KAUM-I. 89499, 61.8 mm SL)

オキゴンベ属 *Cirrhichthys aureus* (Temminck & Schlegel, 1843)

オキゴンベ 珍しさ ★★★★★



■ オキゴンベ *Cirrhichthys aureus* KAUM-I. 83918, 59.1 mm SL(上), KAUM-I. 57302, 89.1 mm SL(下)

【解説】体色は一様に黄色で、体側に不明瞭な暗色斑がある、背鰭に斑紋はない、体高が高いことが特徴。水深 40 m より浅いサンゴ礁や岩礁域に生息する。岩やサンゴの上に乗れ、数十 cm から数 m 移動しては止まり、また移動しては止まりを繰り返す。産卵期は夏で、日没直後に抱卵・放精することが知られている。国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県館山以南の太平洋沿岸、屋久島に分布する。本科魚類としては、温帯域に多くみられる限られた種である。最大でも体長 12 cm ほどで食用にはならない。(小枝圭太)

タカノハダイ属 *Goniistius zebra* (Döderlein, 1883)

ミギマキ 珍しさ★★



■ ミギマキ *Goniistius zebra* KAUM-I. 82777, 247.2 mm SL (上), KAUM-I. 71421, 200.8 mm SL (下)

【解説】黄色の体に紺色横帯が複数はしる。尾鰭の下葉は紺色。唇は赤い。胸鰭下部の各軟条は伸長する。浅場の岩礁域や港内などやや穏やかな場所に生息する。動きは遅く、海底や岩の下でじっとしていることが多い。小型の底生動物を食べる。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸域と琉球列島、小笠原諸島に分布するが、温帯域で多く、熱帯の島嶼域では少ない。内之浦漁港を含め、鹿児島ではタカノハダイなどと総称して「ひだりまき」と呼ばれることが多い。やや臭みがあることと、タカノハダイと比較してやや小型であることから食用としての価値は低く、小型のものは投棄されている。(小枝圭太)

タカノハダイ属 *Goniistius zonatus* (Cuvier, 1830)**タカノハダイ** 珍しさ★■ タカノハダイ *Goniistius zonatus* KAUM-I. 94404, 310.1 mm SL

【解説】ミギマキと似た体形と模様をもつが、縞模様が紺色ではなく黄土色。また、尾鰭が2色で塗り分けられておらず、茶色に白色小斑が散在していることで容易に識別される。海藻が生えている岩場に生息し、消波ブロックの周囲やそのなかの暗がりですっと動かない姿がよくみられる。日本、朝鮮半島南岸、台湾、香港に分布し、国内では津軽海峡以南の広い範囲でごく普通にみられるが、琉球列島ではやや数が少ない。臭みが強いので不味であるとの意見が多いが、冬に採れた鮮度が良いものはしっかりとした身質に旨味があり美味であった。内之浦漁港では定置網より、釣りで漁獲されることが多く、活かした状態で市場にでることも珍しくない。定置網では成魚だけでなく、体色が一樣に銀色の稚魚や成魚と同じ色彩が現れて間もない幼魚も得られる。鹿児島県では同属のミギマキと区別するためか、本種を「ひだりまき」と呼ぶことが多い。(小枝圭太)



■ タカノハダイの幼魚 (KAUM-I. 86548, 44.5 mm SL)



■ タカノハダイの稚魚 (KAUM-I. 29071, 33.3 mm SL)

アカタチ属 *Acanthocepola indica* (Day, 1888)

インドアカタチ 珍しさ ★★★★★



■ インドアカタチ *Acanthocepola indica* KAUM-I. 74747, 183.8 mm SL

【解説】アカタチ属魚類は体高が著しく低く、リボン状に強く側扁し、細長い体をもつ。背鰭・臀鰭基底が長く、尾鰭と連続する。本種は背鰭前部に不明瞭な黒斑があり、体にはオレンジ色の細長い横帯が多数あることが特徴だが、写真の個体のように横帯が不明瞭なものもある。背鰭軟条数が85程度であることも特徴。本科魚類の多くは、軟泥底に穴を掘り、その中から伸びるように立ち泳ぎをしながら餌を食べる習性がある。水深約3～300 mと幅広い水深帯に生息している。日本や台湾、中国の広東省、海南島、インドのマドラスから知られ、国内ではこれまで土佐湾、東シナ海と非常に限られた場所からのみ記録されていた。内之浦漁港から得られた写真の標本は九州沿岸域からの標本に基づく初めての記録である。体高が低く、著しく側扁しているため身は少ないものの、塩焼きや煮付で美味とされる。

(小枝圭太)

■ インドアカタチの頭部 (KAUM-I. 74747)



オヤビツチャ属 *Abudefduf vaigiensis* (Quoy & Gaimard, 1825)**オヤビツチャ** 珍しさ★★■ オヤビツチャ *Abudefduf vaigiensis* KAUM-I. 63205, 151.7 mm SL

【解説】スズメダイ科としてはやや大型で体長は 17 cm に達する。白い体に 5 本の黒色帯がはしり、尾鰭に模様がないことが特徴。また、体背部は黄色い。水深 1 ~ 12 m でみられ、内湾、サンゴ礁域、岩礁域と浅海域であれば基本的にどこでもみられる。国内では青森県以南の全域に分布するとされていたが、近年では北海道沿岸からの報告も散見されるという。ただし、東北地方などにみられる個体は、冬季の低水温のために死亡する死滅回遊であることが示されている（木村、2017）。琉球列島の北中部（特に口永良部島や奄美地方）では「ヘキ」や「ヒキ」、「ピキ」、「アヤビキ」などと呼ばれ、釣りや追い込み漁により漁獲され、食用として重宝されている。唐揚げや塩焼きで食する。内之浦漁港では定置網の周りでは数多くみられるものの、網に入ることは多くない。近年、本種に非常に類似するシリテンスズメダイ *Abudefduf caudobimaculatus*（本書未掲載）の有効性が Wibowo et al. (2017) により示された。これ以外にもオヤビツチャ属魚類には隠蔽種（形態での区別が難しく、これまで同種として扱われてきたが、実際には別種として分けられるべき種）が数多く含まれると考えられており、現在、鹿児島大学大学院の Kunto Wibowo 氏により研究が進められている。（小枝圭太）



■ オヤビツチャの幼魚 (KAUM-I. 82778, 31.2 mm SL)

獲られ、食用として重宝されている。唐揚げや塩焼きで食する。内之浦漁港では定置網の周りでは数多くみられるものの、網に入ることは多くない。近年、本種に非常に類似するシリテンスズメダイ *Abudefduf caudobimaculatus*（本書未掲載）の有効性が Wibowo et al. (2017) により示された。これ以外にもオヤビツチャ属魚類には隠蔽種（形態での区別が難しく、これまで同種として扱われてきたが、実際には別種として分けられるべき種）が数多く含まれると考えられており、現在、鹿児島大学大学院の Kunto Wibowo 氏により研究が進められている。（小枝圭太）

スズメダイ属 *Chromis fumea* (Tanaka, 1917)**マツバスズメダイ** 珍しさ ★★★

■ マツバスズメダイ *Chromis fumea* KAUM-I. 82783, 32.4 mm SL (上), KAUM-I. 44864, 40.1 mm SL (下)

【解説】背鰭の先端が黒ずみ、尾鰭にはっきりとした八の字ラインがあることが特徴。水深 15 m 以浅の岩礁域の中層で小さな群れを作る。伊豆半島での産卵期は初夏から夏で、オスはこの時期になると全体が青く輝く婚姻色を呈する。温帯域に適応した種であり、国内では秋田県以南の日本海・東シナ海沿岸と千葉県外房以南の太平洋沿岸、沖縄諸島の伊江島、石垣島で分布が確認されている。体長 10 cm と小型であり食用にはならない。(小枝圭太)

ミスジリュウキュウスズメダイ属 *Dascyllus trimaculatus* (Rüppell, 1829)

ミツボシクロスズメダイ

珍しさ ★★★★★



■ ミツボシクロスズメダイ *Dascyllus trimaculatus* KAUM-I. 61528, 90.7 mm SL

【解説】体高が非常に高く、全体に丸い。体はほぼ一様に黒く、背部に明瞭な白色斑が1つある。大型個体では黒色がやや淡くなり、鱗にそった黒色域が目立つようになる。水深1mの浅場から55mまでのサンゴ礁域、岩礁域に生息する。幼魚はクマノミ類と共にイソギンチャク類と共生することが多いが、枝状サンゴなどの近くに棲み、イソギンチャク類と共生しない個体も普通にみられる。成魚は気が強く、ダイバーに果敢に噛みついてくることもある。Koeda et al. (2016b) は、与那国島から本種の白色変異個体（パイボールド）の水中写真を報告した。国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、琉球列島、八丈島から小笠原諸島に分布する。体高が高いため比較的大型のスズメダイ科魚類といえるものの、オヤビッチャなどと違い群れで大量に採ることがないため、食用とはならない。内之浦では極めて稀で、調査を通じて写真の1標本が得られたのみ。（小枝圭太）

スジスズメダイ属 *Teixeirichthys jordani* (Rutter, 1897)**スジスズメダイ** 珍しさ ★★★★★■ スジスズメダイ *Teixeirichthys jordani* KAUM-I. 56780, 134.5 mm SL

【解説】体高は低く、やや細長い。体は薄青色で、体側にやや濃い青色の縦帯が複数はしる。縦列鱗数が44～45であることが特徴。水深4～20 mの開けた砂底域や砂礫底域、藻場などに生息し、海底に沈んだ人工物や流木などの構造物を隠れ場所として、その周囲に群れで生活する(加藤、2011)。一見すると地味な体色だが、水中でみると青紫色の小斑点がキラキラと輝き、綺麗な魚である。国内では、伊豆半島西岸、土佐湾、鹿児島県内之浦、屋久島から分布が記録されている。(小枝圭太)

■ スジスズメダイ *Teixeirichthys jordani* (2007年2月20日撮影)

シマイサキ属 *Rhynchopelates oxyrhynchus* (Temminck & Schlegel, 1843)

シマイサキ 珍しさ ★★★★★



■ シマイサキ *Rhynchopelates oxyrhynchus* (2007年6月7日撮影)

【解説】体はやや細長く、吻がよく尖り、口が小さい。体側に3本の暗色縦帯が直線的にはしり（大型個体ではこの間にさらに複数本の暗色縦帯がある）、うち体側中央の1本が尾鰭基部に達する。体は櫛鱗で覆われ、ざらざらしている。鰾（うきぶくろ）を使って鳴くことができ、漁獲された際にはググウと音を出す。日本、韓国、中国、台湾、フィリピンのルソン島などに分布する。国内では津軽海峡以南の日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海に分布するが、沖縄諸島の久米島からの記録もある。美味な魚で、全国的に食用魚として知られるが、九州とくに鹿児島県では個体数が少なく、あまり馴染みのない魚といえる。内之浦でも個体数は非常に少なく、標本は残っていない。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶコトヒキ *Terapon jarbua* (2013年10月10日撮影；解説は次のページ)

コトヒキ属 *Terapon jarbua* (Forsskål, 1775)**コトヒキ** 珍しさ★

■ コトヒキ *Terapon jarbua* KAUM-I. 82754, 143.5 mm SL (上), KAUM-I. 78165, 125.1 mm SL (下)

【解説】銀白色の体に頭後部、背鰭起部から尾柄にむかって弓なりの黒色帯がある。また、尾鰭には3～5本の幅広い黒色帯がある。シマイサキと同様に、鰾（うきぶくろ）をつかって音をたてることができる。沿岸浅場や河川汽水域の水深数cmの場所にも出現し、驚くと砂に潜る。小型の甲殻類などを捕食する。また、自分より大きな魚に体当たりし、剥がれた鱗を食べる「鱗食」という独特な生態をもつ（Whitfield and Blaber, 1978）。国内ほぼ全域に分布し、南ほど多い傾向がある。熱帯域を中心に食用とされているが、身はやや淡白で脂ののりが少ない印象。内之浦漁港では大型個体のみ選別される、あるいは他種とまとめられ、「雑魚」として市場に並ぶ。（小枝圭太）

コトヒキ属 *Terapon theraps* Cuvier, 1829

ヒメコトヒキ 珍しさ ★★★★★



■ ヒメコトヒキ *Terapon theraps* KAUM-I. 14712, 111.5 mm SL

【解説】体形はコトヒキによく似るが、体側の3本の黒色縦帯が直線状であることで簡単に区別できる。内湾など沿岸の浅場に生息し、幼魚は漂流物に付く。国内では秋田県男鹿半島以南の日本海沿岸と茨城県以南の太平洋沿岸、沖縄島、西表島、小笠原諸島に分布するとされるが、いずれの場所でもコトヒキと比べると圧倒的に個体数が少ない。味はコトヒキと似ているとされるが、不明。内之浦漁港でも稀で、小型の個体が多い。漁獲される際は数個体がまとめて入網することから、コトヒキと同様に数個体の小群で行動していると考えられる。(小枝圭太)



■ ヒメコトヒキの幼魚 (KAUM-I. 63688, 63.9 mm SL)

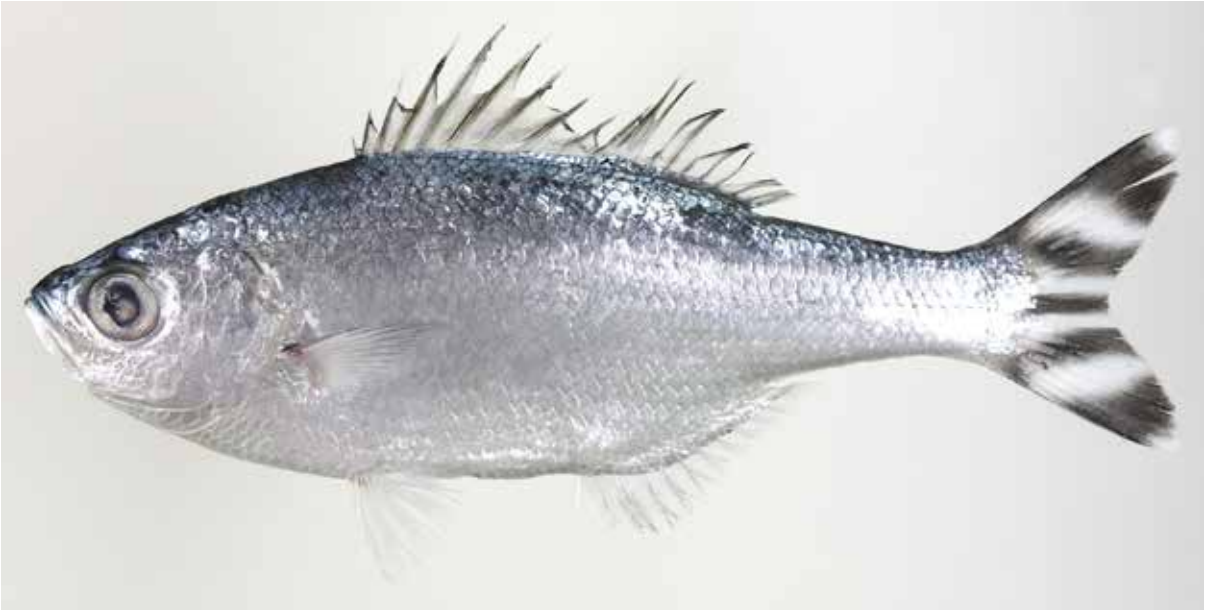
タカベ属 *Labracoglossa argentiventris* Peters, 1866**タカベ** 珍しさ★★■ タカベ *Labracoglossa argentiventris* KAUM-I. 98054, 141.3 mm SL■ タカベ *Labracoglossa argentiventris* KAUM-I. 62428, 97.1 mm SL

【解説】 一見するとフエダイ科のウメイロ、タカサゴ科のウメイロモドキ（本書未掲載）、ササムロなどの小型個体に似るが、体側に細長い縦線が複数はしることで識別される。また、背鰭や臀鰭の軟条数も多い。沿岸の岩礁域の表層から中層に群泳し、動物プランクトンを食べる。国内では茨城県以南の太平洋沿岸、若狭湾以南の日本海沿岸、八丈島から小笠原諸島に分布する。本種は体長 20 cm を越えるが、内之浦漁港では体長 10 cm 前後の小型個体のみが網に入る。また、港内を小型個体が群泳している姿もみることができる。関東地方や和歌山県などの紀伊地方では食用とされるが、内之浦漁港では大型個体があまり採れないためか食用とされることはない。（小枝圭太）

■ タカベの幼魚
(KAUM-I. 83760, 54.4 mm SL)

ユゴイ属 *Kuhlia mugil* (Forster, 1801)

ギンユゴイ 珍しさ★★★★



■ ギンユゴイ *Kuhlia mugil* KAUM-I. 80377, 188.0 mm SL



■ ギンユゴイ *Kuhlia mugil* KAUM-I. 57286, 132.9 mm SL

【解説】体はよく側扁し、体は銀白色に輝き、尾鰭の上下葉に黒色斜帯があることが特徴。ユゴイ科魚類の多くは生活史の大部分を淡水域で過ごすすが、本種は一生を通じて海水域で過ごすことが知られる。幼魚はタイドプール（潮だまり）に出現する代表的な種で、成魚は波が打ち付ける潮通しの良い場所の表層付近で群れを作る。大型個体の群れは稀に数百個体にもなる。夜にも釣れることから、昼夜ともに活動的であると推察される。インド・汎太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布し、国内では茨城県以南の太平洋沿岸、対馬、九州北岸・西岸、琉球列島、小笠原諸島から知られる。体長 20 cm ほどの大型の個体は引きもそれなりで、釣れ始めると次々と釣れることから、沖縄県の離島などでは釣り魚として親しまれ、食用とされている。内之浦漁港では非常に稀で、体長 13 cm と 18 cm の 2 個体が得られたのみ。他の南日本沿岸地域でも大型個体が大量に漁獲されることはあまりないため、食用として利用されることは稀であろう。（小枝圭太）

イシダイ属 *Oplegnathus fasciatus* (Temminck & Schlegel, 1844)**イシダイ** 珍しさ★★■ イシダイ *Oplegnathus fasciatus* KAUM-I. 86395, 288.5 mm SL

【解説】体は灰白色を呈し、細い黒色横帯が多数はいる（写真は中型個体）。幼魚は地色の白色と黒色横帯のコントラストが強い。老成魚では体は一様に暗い灰色となり、口の周辺のみが黒色となる。幼魚は流れ藻などに随伴する性質が知られ（小林、1995）、浮遊期から流れ藻に随伴する時期にかけては橈脚類やカイアシ類をおもな餌とする。着底後、体長 10 cm を越えるとゴカイ類も餌とし、その後成長に伴いヒザラガイや貝類、ウニなどの定着性動物を幅広く餌とするようになる（塩屋・原田、1975）。肉質は歯ごたえに富み、非常に美味なため高級魚として知られ、高価に取引される。成長が遅く、市場価値の高くなる体長 30 cm に達するまでに 3 年以上を要するため、養殖はほとんどおこなわれておらず、市場流通する個体のほとんどは天然個体である（平本、1981）。内之浦湾においては成魚が多く釣獲され、活魚として市場にだされることが多い。内之浦湾において幼魚が漁獲されることはほとんどない。非常に力の強い魚で、釣り魚として高い人気を誇るが、大型個体は並みの竿では太刀打ちできない。（畑 晴陵）



■ 活魚とされるイシダイとイシガキダイ(2014年3月29日撮影)

イシダイ属 *Oplegnathus punctatus* (Temminck & Schlegel, 1844)

イシガキダイ 珍しさ ★★★



■ イシガキダイ *Oplegnathus punctatus* KAUM-I. 98046, 179.3 mm SL

【解説】体形はイシダイに類似するが、体には横帯ではなく黒色斑が密にはいり、石垣模様を為す。また、老成魚の体は青みがかった黒色となり、口の周辺のみが白色となる。イシダイと同様に、幼魚期は流れ藻に随伴する性質があり、成長に伴いおもな餌を動物プランクトンからウニや貝類などの底生性生物に変化させる（塩屋・原田、1975）。イシダイとの天然交雑個体が多く報告されており、交雑個体の体側には細い黒色横帯が多数はいり、その間に黒色斑が散在する、両種の間のような模様をもつことが知られている（亀井・高間、1981；川崎、2009；末吉ほか、2009；読売新聞、2010）。

交雑個体は養殖状況下においてイシダイよりも成長が速く、生存率が高く、またイシガキダイよりも生殖能力に富むことから、養殖対象として有力視されている（亀井・高間、1981；村田、1998）。交雑個体は「イシガキイシダイ」などと称されることがあるが（鈴木、2003；読売新聞、2010）、2種間の人工交配技術は近畿大学が特許権を取得しており、交配個体は「キンダイ」と名付けられている。イシガキダイの食味はイシダイに比肩する美味なものであり、高級魚として扱われる。内之浦湾においてはイシダイ同様に多くが釣獲され、活魚として市場に並ぶことが多く、幼魚の漁獲は少ない。イシダイ同様、釣り魚として非常に人気が高い。（畑 晴陵）



■ イシガキダイ KAUM-I. 98047, 207.1 mm SL

イスズミ属 *Kyphosus bigibbus* Lacepède, 1801**ノトイスズミ** 珍しさ ★★★★★■ ノトイスズミ *Kyphosus bigibbus* KAUM-I. 94407, 331.0 mm SL

【解説】 イスズミとよく似るが、イスズミと比較して体色が暗く、茶色がかかること、背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ12と11であることにより識別される。南日本においては稀な魚ではないものの、長らくイスズミと混同されてきた。能登半島で大量に水揚げされるイスズミの中に形態的に異なる2型が含まれることをきっかけに研究が開始され（坂井、2004）、坂井（1991）によってイスズミとの識別点を示されると同時に和名ノトイスズミが提唱された。その後 Sakai and Nakabo (2004) によってノトイスズミに適用すべき学名が *K. bigibbus* であることが示された。内之浦湾においては、おもに定置網によって漁獲され、イスズミと区別なく扱われる。（畑 晴陵）

イスズミ属 *Kyphosus cinerascens* (Forsskål, 1775)**テンジクイサキ** 珍しさ ★★★★★

【解説】 背鰭軟条部前部が高く、最長背鰭棘よりも長い。また、体背縁が背鰭基底中央で急に下降し、体腹縁が臀鰭起部付近で急に上昇する独特の体型により、日本産同科他種と容易に識別される（Sakai and Nakabo, 2006）。北海道以南の日本各地に広く分布する。琉球列島においては珍しい魚ではないが、内之浦湾においては極めて稀な種であり、写真の個体の水揚げが確認されたのみである。イスズミ類に共通して言えることであるが、藻類をおもな餌とし、腸内は藻類に満たされていることが多い。これが非常に腐りやすく、標本作成の際には防腐処理に注意が必要な類の魚である。奄美群島においては他のイスズミ科魚類との区別なく扱われており、内之浦においてもイスズミと同様に消費されるものと思われる。（畑 晴陵）

■ テンジクイサキ *Kyphosus cinerascens*
(2014年1月25日撮影)

イスズミ属 *Kyphosus pacificus* Sakai & Nakabo, 2004

ミナミスズミ

珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶミナミスズミ *Kyphosus pacificus* (2013年10月10日撮影)

【解説】イスズミやノミスズミに似るが吻端が突出することで識別される。通常、体は一様に銀色であるが、時折、全身が黄色の個体が出現することが知られる。黄化個体の出現はイスズミ科魚類において本種にのみ報告される現象であるが、黄化個体の黄色域は変異が大きく、黄色と黒のまだら模様の個体や、体は黒色で、頭部のみ黄色の個体が出現することもある。さらに、黄色ではなく白色個体の存在も知られる（荒賀、1997; Kuriwa et al., 2014）。黄色個体は小笠原群島において多く観察され、その南方に位置する火山列島においてはさらに高い割合で観察される（吉田朋弘氏、私信）。琉球列島において黄色個体はほとんど観察されない。ミナミスズミは Zama (1976) によって口永良部島、八丈島、および小笠原諸島から得られた個体に基づき、*Kyphosus bigibbus* Lacepède, 1801（この学名は現在ノミスズミに適用されている）として日本から初めて記録された。その後、ミナミスズミに適用すべき学名は長らく不明であったが、Sakai and Nakabo (2004) によって新種として記載された。ミナミスズミは伊豆諸島近海では珍しく、イスズミよりも数が少ないが、その南に位置する豆南諸島や小笠原諸島においては普通種であり、イスズミ類の中で最も個体数が多い（Kuriwa et al., 2014）。イスズミが多獲される内之浦湾においては極めて稀であり、2013年10月10日に市場に並んだ個体の写真が確認されたのみ。（畑 晴陵）

イスズミ属 *Kyphosus vaigiensis* (Quoy & Gaimard, 1825)

イスズミ 珍しさ★★

■ イスズミ *Kyphosus vaigiensis* KAUM-I. 94408, 323.0 mm SL

【解説】背鰭軟条数が 14、臀鰭軟条数が 13 と多いことで、インド・太平洋産の同属他種と識別できる (Sakai and Nakabo, 1995)。体は一様に銀白色を呈し、細い金色縦帯が多数ある。幼魚の体には白色斑が散在する。本属魚類は時としてメジナ科魚類と混同されることがあるが、イスズミ属では両顎の外列歯が単尖頭であるのに対し、メジナ科では三尖頭であることにより識別される。イスズミ科魚類は互いに似通っており識別が難しく、分類学的に著しく混乱してきた。イスズミに対しては長らく *Kyphosus lembus* という学名が適用されてきたが、Sakai and Nakabo (1995) により、*K. lembus* は *K. vaigiensis* の新参異名であることが示された。イスズミは内之浦湾においてはおもに定置網によって、幼魚から体長 50 cm 程度の大型個体まで、様々な体サイズの個体が頻繁に得られる。「ひつお」などと称される。味は典型的な熱帯性草食性魚類のものであり、刺身などにして賞味される。(畑 晴陵)



■ イスズミの幼魚 (KAUM-I. 60154, 114.1 mm SL)

カゴカキダイ属 *Microcanthus strigatus* (Cuvier, 1831)**カゴカキダイ** 珍しさ ★■ カゴカキダイ *Microcanthus strigatus* KAUM-I. 94336, 132.5 mm SL

【解説】 チョウチョウウオ科のような体の形をしているが、仔稚魚期にトリクチス期幼生（チョウチョウウオ科を参照）を経ない。体は黄色で5本の黒色縦帯がある。成魚は潮通しのよい岩礁域でみられ、幼魚は潮だまりや穏やかな波打ち際に多い。国内では青森県～九州南岸のほぼ全域、琉球列島に分布する。琉球列島では水深 100 m 付近の深場に多いが、数 m の浅場にも出現する。内之浦漁港では定置網や柵網によって数多く漁獲される。これらは選別されて「かごかき」の名で市場に並ぶ。「年中脂がのっていて旨い」と多くの漁業関係者が口を揃える通り、塩焼きなどでとても美味しい魚である。しかし、あまり大きくならないためか、高くとも 1 kg あたり 200 円程度と市場での価値は低い。（小枝圭太）



■ カゴカキダイ KAUM-I. 97491, 116.4 mm SL



■ 市場に並ぶカゴカキダイ (2017年1月11日撮影)



■ 市場に並ぶカゴカキダイ (2013年10月10日撮影)

メジナ属 *Girella leonina* (Richardson, 1846)

クロメジナ 珍しさ★★



■ クロメジナ *Girella leonina* KAUM-I. 73971, 55.4 mm SL



■ クロメジナ *Girella leonina* KAUM-I. 62424, 50.9 mm SL

【解説】体は緑がかった黒色。鰓蓋後縁は黒く縁どられ、成魚では尾鰭は長く、その後縁は切れ込む（写真はいずれも幼魚）。本科魚類に共通の特徴として、両顎の外列歯の先端は三尖頭を呈し、岩などに生えた海藻をついばむのに適した形となっている。産卵期は冬。稚魚・幼魚は内湾に多く生息し、冬から春にかけては潮だまりにも多く出現するが、成長に伴い外洋に面した磯へと移動することが知られている（荒賀、1997；紀伊民報、2008）。日本の他に韓国、台湾、香港、ミッドウェー諸島（稀）に分布する。国内では青森県以南に広く分布するが、琉球列島や小笠原諸島など亜熱帯の島嶼域では稀。内之浦湾においても出現するものの多くは体長数 cm の幼魚がほとんどで、成魚の漁獲は少なく、成長に伴い湾外へと移動しているものと思われる。釣りの対象魚として人気が高く、釣り人の間では「尾長グレ」などと称されるが、内之浦においてはメジナと同様に「クリ」と称される。（畑 晴陵）

メジナ属 *Girella punctata* Gray, 1835**メジナ** 珍しさ★■ メジナ *Girella punctata* KAUM-I. 98079, 233.4 mm SL

【解説】体は緑がかった黒色。鰓蓋後縁は黒く縁どられない。体長 20 mm 未満では甲殻類や魚卵など動物性餌生物が餌のほぼ全てを占めるが、成長に伴い植物食性が強まり、体長 140 mm では餌のほぼ全てを海藻や附着性ケイ藻類などの植物性餌生物に依存することが知られる。成長に伴い腸の屈曲が増え、体長 5 mm 未満の個体では直腸であるものが、体長 70 mm の個体では 5 屈曲点を生じ、複雑な形状となる（三郎丸・塚原、1984）。クロメジナと同様に日本国内の広域に分布する。本種は北海道からも知られるが稀。内之浦湾においては定置網、刺網、釣りなど多様な漁法により多獲され、「クリ」と称される。脂肪分に富み、美味な魚である。（畑 晴陵）

■ 水揚げされたメジナ
(2016年1月22日撮影)

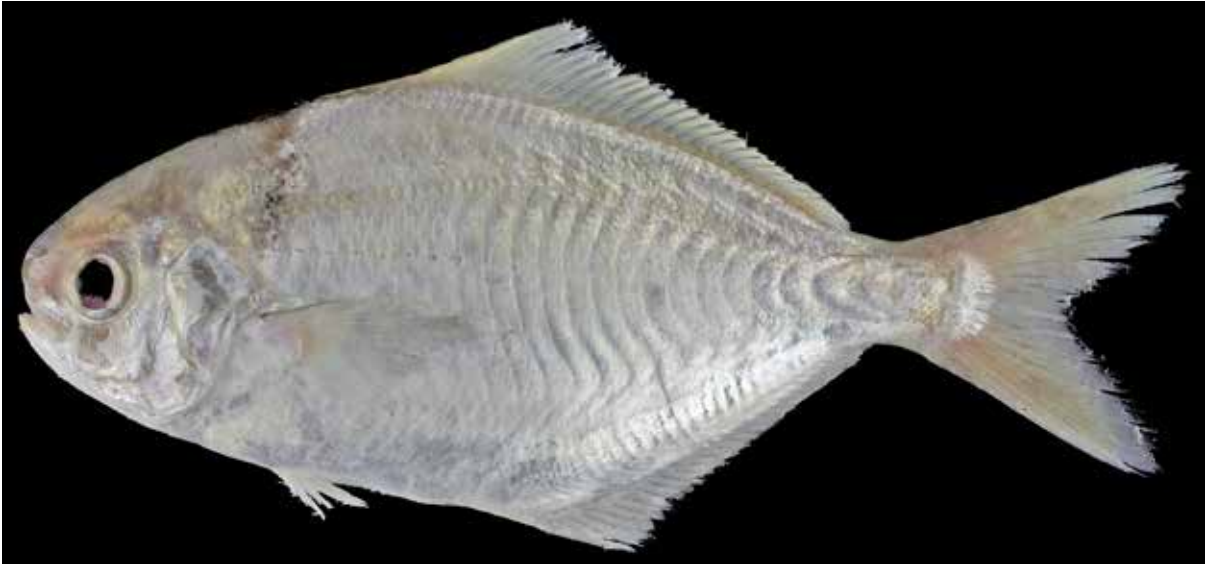
メダイ属 *Hyperoglyphe japonica* (Döderlein, 1884)

メダイ 珍しさ ★★★★★



■ メダイ *Hyperoglyphe japonica* KAUM-I. 40476, 152.5mm SL (上), KAUM-I. 38833, 84.2 mm SL (下)

【解説】最大で体長 1 m に達する。成魚の体側上部は黒色、体側面から体腹面にかけては一様に灰白色を呈する。幼魚の体側には細かなうねりを伴う細い黒色縦帯が多数はいる。成魚は水温 21 度以下を好み、水深 100 m 以深におもに生息する（上野・山口、1998；河野ほか、2010）。薩南群島では多数が延縄や深海釣りによって漁獲され、「タルメ」と称される。1990 年代以降、能登半島や山口県日本海側でも大量の出現が観察されるようになった（河野ほか、2010；辻ほか、2010）。大型個体は食用魚として取引され、刺身や煮つけなどにして美味しい魚である。幼魚は流れ藻などの浮遊物に随伴する。内之浦湾の定置網には幼魚が稀に入る程度であるが、外洋に出る釣り船によって漁獲された成魚が水揚げされることもある。写真の個体はいずれも幼魚。（畑 晴陵）

イボダイ属 *Psenopsis anomala* (Temminck & Schlegel, 1844)**イボダイ** 珍しさ★★■ イボダイ *Psenopsis anomala* KAUM-I. 73138, 173.0 mm SL

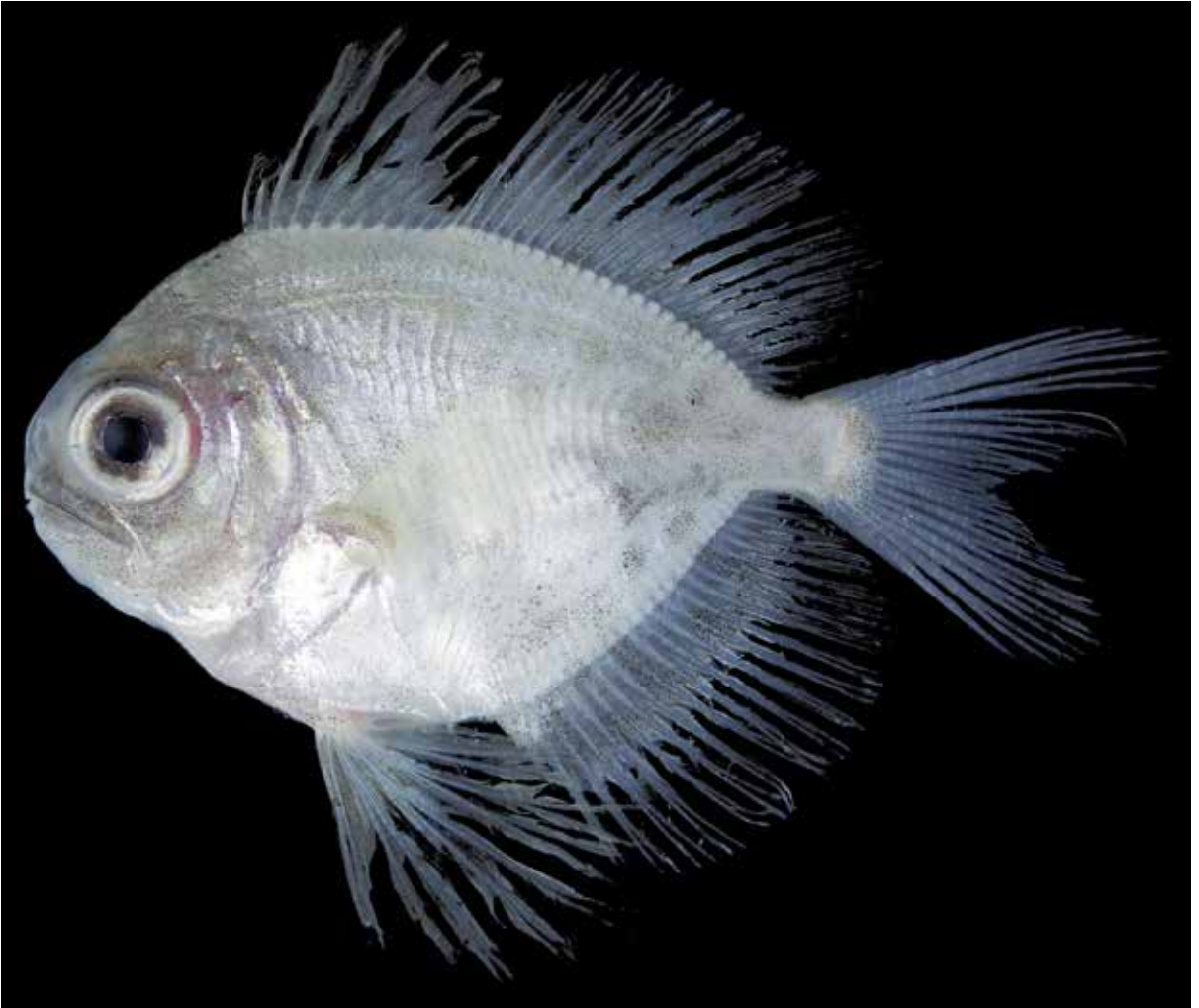
【解説】体は銀白色を呈し、背鰭は1基。鰓蓋とその上方に黒色斑がある。体長20 cm程度に成長する。体長数cm程度の幼魚はクラゲ類に随伴する習性があり、刺胞をもつクラゲに隠れて身を守るほか、クラゲの捉えた餌を横取りしたり、時にはクラゲ自体を餌とすることもある。近年、京都府近海において大型クラゲの1種であるエチゼンクラゲが大量発生したことがあるが、この年にはイボダイも数多く漁獲されたことが報告されている（京都府立海洋センター、2008）。内之浦湾においては定置網により漁獲される。稀ではないものの、その量は少ない。身は脂肪分に富み、焼き物や干物にして美味。（畑 晴陵）

■ イボダイの幼魚 *Psenopsis anomala* (KAUM-I. 73989, 59.3 mm SL)

スジハナビラウオ属 *Psenes arafurensis* Günther, 1889

クラゲウオ

珍しさ ★★★★★



■ クラゲウオ *Psenes arafurensis* KAUM-I. 73961, 43.4 mm SL

【解説】吻は短く、鰓蓋上方に顕著な無鱗域がある。幼魚の体は正円形に近く、白色半透明を呈し、黒褐色斑が散在する。成長に伴い体形・体色が大きく変化することで知られ、成魚では体は前後方向に卵型、一様に黒褐色となり、尾鰭が伸長する。幼魚は水面近くに多く生息し、クラゲ類や流れ藻などの浮遊物に随伴する習性がある。成魚は底生性と思われ、水深 100 m 以深から得られることが多い。最大で体長 20 cm 程度。全世界の熱帯から温帯にかけて広く分布することが知られるが、内之浦湾では稀であり、幼魚が得られているのみ。

(畑 晴陵)



■ クラゲウオの幼魚の眼はかなり大きい
(KAUM-I. 73961, 43.4 mm SL)

スジハナビラウオ属 *Psenes cyanophrys* Valenciennes, 1833**スジハナビラウオ** 珍しさ ★★★★★■ スジハナビラウオ *Psenes cyanophrys* KAUM-I. 86541, 79.7 mm SL

【解説】体は側扁し、円盤状を呈する。体には多数の細い黒色縦帯がはいる。幼魚の体は黄色がかるが、成魚では黒褐色。幼魚は流れ藻やクラゲ類などに多く随伴し、表層域に多いが、成魚は中層から底層に生息し、生態はよくわかっていない。世界中の暖海域に広く分布し、日本国内では千葉県以南の太平洋沿岸と石川県以南の日本海・東シナ海沿岸から知られ、小笠原諸島や琉球列島からも報告されている。内之浦湾では稀であり、幼魚が定置網により得られている。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたスジハナビラウオ（2009年5月12日撮影）

スジハナビラウオ属 *Psenes maculatus* Lütken, 1880

シマハナビラウオ 珍しさ ★★★★★



■ シマハナビラウオ *Psenes maculatus* (2005年5月26日撮影)

【解説】体は前後方向に長い楕円形を呈し、一様に黒色。幼魚の体は白色で、体側には「くの字」の黒色斜帯が数本ある。太平洋の北半球側、インド洋、および大西洋の温帯域に広く分布する。日本国内においても千島列島から九州南岸にかけて記録があるが、小笠原諸島と琉球列島からの記録はない。幼魚は表層性でクラゲ類に随伴する習性がある。成魚は深海性で水深 600 m 以深に生息し、漁獲されることは極めて稀。内之浦湾においては極めて稀であり、2005年5月26日に写真の小型個体の漁獲が確認されたのみ。内之浦湾に入った経緯は不明であるが、クラゲ類に随伴したものであると思われる。(畑 晴陵)

スジハナビラウオ属 *Psenes pellucidus* Lütken, 1880

ハナビラウオ 珍しさ ★★★★★



■ ハナビラウオ *Psenes pellucidus* KAUM-I. 29874, 107.3 mm SL

【解説】体は成魚では前後方向に長い楕円形を呈し、一様に黒褐色。幼魚の体は円盤状であり、体色は白みが強い。成魚と幼魚で形態が大きく異なるため、幼魚は「コンニャクアジ」と称されて別種とされていたこともあった。成魚は深海に生息すると考えられているが、極めて稀であり、詳しい生態は不明。幼魚は、有毒な刺胞をそなえるクラゲ類に随伴する習性が知られる。外敵から身を守るためと考えられるが、クラゲ類の触手を、麺をすするようにして捕食する様子も観察されている(米田、2013)。内之浦湾では極めて稀に定置網により漁獲される。(畑 晴陵)

ツバメコノシロ属 *Polydactylus plebeius* (Broussonet, 1782)**ツバメコノシロ** 珍しさ ★★★■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 94334, 187.0 mm SL■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 94335, 154.4 mm SL

【解説】体は黄緑がかった銀白色を呈し、細い黒縦帯が多数ある。胸鰭は黒色。吻部は突出し、口は大きく裂け、カタクチイワシ類に似た顔つきをしている。胸鰭下部の5軟条は遊離する。普段はこれらの遊離軟条をたたみ、体に密着させて遊泳するが、索餌際にはこれらを広げながら水底付近を遊泳し、触れた餌を捕食する（本村ほか、2002）。南アフリカから日本、フレンチポリネシアにかけて広く分布するが、紅海とペルシャ湾における記録はない。砂底または泥底の浅瀬に多く生息し、幼魚は河口の汽水域にも多数出現する。宮崎県においては6, 7, 9, 10月に多く得られることが知られるが（Motomura et al., 2001b）、内之浦湾においては秋から冬において（標本は10～12月に得られている）時折漁獲され、「アゴナシ」と称される。漁獲個体は体長20 cmほどのものがほとんどであり、食用とされることはあまりない。（畑 晴陵）



■ ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* KAUM-I. 82753, 171.2 mm SL



■ ツバメコノシロの胸鰭遊離軟条は糸状に伸びる (KAUM-I. 94334, 187.0 mm SL)

ツバメコノシロ属 *Polydactylus sextarius* (Bloch & Schneider, 1801)**カタグロアゴナシ**

珍しさ ★★★★★

■ カタグロアゴナシ *Polydactylus sextarius* KAUM-I. 6490, 166.1 mm SL■ カタグロアゴナシ *Polydactylus sextarius* KAUM-I. 10948, 124.4 mm SL

【解説】側線始部に明瞭な黒色斑があり、胸鰭下部の遊離軟条が6本であることで、日本産同科他種と容易に識別される。国外ではインド南西岸からニューギニア島、朝鮮半島にかけて広く分布する。日本国内においては稀な種であり、宮崎県南郷町、鹿児島県志布志湾、および内之浦湾の南九州太平洋沿岸からのみ記録がある。内之浦湾においても稀な魚であり、獲れる時も単独で入網する。(畑 晴陵)

スズキベラ属 *Anampses caeruleopunctatus* Rüppell, 1829

ブチスズキベラ 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶブチスズキベラ *Anampses caeruleopunctatus*, オス (2007年11月8日撮影)

【解説】本種のオスは全身が青緑色で、両眼の間に青色帯があることが特徴。スズキベラ属のなかでは大型で体長 30 cm に達する。ベラ科魚類の一部の種は雌雄によって体色が異なる。本種の場合、メスは全体にやや茶色で、各鱗の中央に白色斑点があり、青緑色のオスとは明瞭に異なる。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、琉球列島、尖閣諸島、南大東島、伊豆諸島～小笠原諸島に分布する。内之浦漁港においては体長約 30 cm の大型個体の 1 例のみ写真で確認されており、体色が青いことからオスであることがうかがえる。内之浦では極めて稀であるものの、大型であったためか、市場に並べられていた。(小枝圭太)



■ 水揚げされたイラ *Choerodon azurio* の大型のオス個体 (2011年5月21日撮影)

イラ属 *Choerodon azurio* (Jordan & Snyder, 1901)

イラ 珍しさ ★

■ イラ *Choerodon azurio* KAUM-I. 63207, 148.0 mm SL

【解説】雌雄の色彩の違いはないが、大型のオスは頭部が張り出す。体色は全体に桃色で、体側前半部に太い黒色斜帯と白色斜帯が1本ずつあることが特徴。体長は最大で40 cmに達し、ベラ科魚類としてはやや大型の種である。大型個体は単独で泳ぎ回り、小・中型個体は数個体の群れで行動する。岩礁域におもに生息するが、藻場や砂礫底でもみられる。日本、韓国、台湾、中国の福建省、南シナ海沿岸、南沙諸島に分布し、国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、瀬戸内海、奄美大島から知られる。内之浦漁港では15～20 cm前後の中型個体が時折まとまった数で水揚げされ、単独あるいはまとめて市場に並ぶ。2017年3月には定置網により体長4 cm程度の幼魚も得られた。(小枝圭太)

■ イラ *Choerodon azurio* の幼魚 (KAUM-I. 98141, 37.5 mm SL)

ササノハベラ属 *Pseudolabrus sieboldi* Mabuchi & Nakabo, 1997

ホシササノハベラ 珍しさ ★★★★★



■ ホシササノハベラ *Pseudolabrus sieboldi* KAUM-I. 98143, 47.6 mm SL

【解説】体は全体にオレンジ色やピンク色で、背鰭と臀鰭が黄色い。頭部に暗色縦線が複数はあるが、その最も下をはする縦線が胸鰭基部に向かず、鰓蓋後端で止まることでよく似るアカササノハベラ（胸鰭基部に向かってのびる；本書未掲載）と識別される。浅い岩礁域で見られる普通種だが、鹿児島ではアカササノハベラよりは個体数が少ない。幼魚は色彩の変異に富み、識別が困難。日本の他には済州島と台湾に分布する。国内では津軽海峡以南の日本海・東シナ海沿岸および、千葉県以南の太平洋沿岸、屋久島、瀬戸内海、八丈島、小笠原諸島から知られる。内之浦湾にも普通に生息しているものと思われるが、定置網に入ることはほとんどない。（小枝圭太）

カミナリベラ属 *Stethojulis interrupta terina* Jordan & Snyder, 1902

カミナリベラ 珍しさ ★★★★★



■ カミナリベラ *Stethojulis interrupta terina*, メス（2004年3月25日撮影）

【解説】本種は雌雄で体色が異なる。オスは体が緑色で頭部から背縁付近を通って尾柄に達する鮮青色の縦線がはする。一方、メスは体が白色で頭部から体側中央にかけて黒色の縦帯がはする。また、体側下半部には点状の斑点が並ぶことが特徴。岩礁域やサンゴ礁域の浅場でごく普通にみられる。日本、韓国、台湾、中国の広東省、香港、海南島、東沙諸島から知られ、国内では新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、千葉県館山以南の太平洋沿岸、琉球列島、伊豆諸島～小笠原諸島に分布する。温帯域でも普通種であるため、内之浦湾にも多数生息するものと思われるが、定置網などで混獲されるのはかなり稀。2004年3月にみられたメスの1個体のみで標本は残っていない。（小枝圭太）

ブダイ属 *Calotomus japonicus* (Valenciennes, 1840)**ブダイ** 珍しさ★★■ ブダイ *Calotomus japonicus* KAUM-I. 98087, 356.0 mm SL, オス■ ブダイ *Calotomus japonicus* KAUM-I. 73160, 256.7 mm SL, メス

【解説】ブダイ科はほぼすべての種でオスが青色や緑色、メスが赤色や茶色と体色に顕著な違いがみられる。また、多くの種で顎歯が癒合して板状になっているが、本種は両顎歯の癒合が不完全で、歯が覆瓦状に並ぶことが特徴。オスは濃い緑色の体で、頭部はまだらに赤色。尾鰭も鮮やかな赤色。メスは全体に茶色と黄色がまだらにまじったような体色をもつ。熱帯域におもに分布する本科魚類のなかでは温帯域に適応した種であり、国内では千葉県千倉以南の太平洋沿岸、兵庫県香住以南の日本海・東シナ海沿岸、奄美大島、南大東島、伊豆諸島～小笠原諸島から知られ、三浦（2012）により沖縄島からも記録されている。藻場や礫域に生息し、海藻を食べることから「もはみ」と呼ばれることが多いが、内之浦では「もはめ」と呼ばれる。大型個体は単独で市場に並び、活魚とされることもあるが、小型個体や幼魚は得られていない。（小枝圭太）

アオブダイ属 *Scarus ghobban* Forsskål, 1775

ヒブダイ 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶヒブダイ *Scarus ghobban*, オス (2012年2月22日撮影)

【解説】本種のオスの体は緑色で、尾柄部の各鱗に大きな青色斑がある。メスは黄色の体に青色の横帯が5本あり、尾鰭両葉の外縁部に青色縦帯があることが特徴。同定が困難なブダイ科のメスとしては特徴的で同定が容易な種である。岩礁・サンゴ礁域に生息し、普段はオスがメスと比較して深場で生息している。メスは水深数mの浅場でも普通にみられる。国内では東京湾以南の太平洋沿岸、琉球列島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布する。ブダイ科のなかで最も美味な種のひとつで、沖縄県では他のブダイ類を「いらぶちゃー」が呼ばれるのに対し、本種だけは「あーがい」と呼ばれ、別格の扱いを受ける。内之浦ではおもに立て網により漁獲される。「はち」と呼ばれ約5kgにもなる大型のオスが市場に並んだ例があるが、標本は残っておらず、メスが得られた例もない。(小枝圭太)



■ 市場に並ぶヒブダイ *Scarus ghobban*, オス (2014年6月撮影)

アオブダイ属 *Scarus ovifrons* Temminck & Schlegel, 1846**アオブダイ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたアオブダイ *Scarus ovifrons*, オス (2015年6月12日撮影)

【解説】本種のオスは鮮やかな青色が美しく、とりわけ大型個体は下顎後方がエメラルドグリーンとなる。また、オスの大型個体は吻端を越えるほど頭部が著しく突出する。メスはやや黒っぽいが、各鰭の外縁は鮮やかな青色。岩礁域に生息し、大型個体は単独でみかけることが多いが、中型から小型個体は10個体前後の群れをつくることが多い。ブダイと並び温帯域に適応した種であり、国内では東京湾以南の太平洋沿岸、九州北・西岸、屋久島、トカラ列島から記録されている。内臓に猛毒のパリトキシンをもつことがあるため、市場での流通・販売が自粛されている。

(小枝圭太)



■ オスのアオブダイの頭部は著しく突出する



■ アオブダイの小型個体 (KAUM-I. 82769, 297.1 mm SL)

アオブダイ属 *Scarus rivulatus* Valenciennes, 1840

スジブダイ 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶスジブダイ *Scarus rivulatus*, オス (2010年11月6日撮影)

【解説】オスの体は全体に緑色で、頬部はオレンジ色、吻部に唐草模様があることが特徴。メスは緑がかった茶色で尾部から尾鰭が淡い紫色。岩礁・サンゴ礁域に生息し、オスは単独、メスは複数個体の小群で見られる。熱帯性であり、国内では高知県柏島、愛媛県愛南、琉球列島、南大東島から記録されている。内之浦漁港において2010年11月に確認された個体は体長30～40cm程度のオスで、これは九州沿岸域からの初めての記録である。ただし、標本は残っていない。ブダイ科魚類は好みがかかるものの、本種はあまり美味でない種といえる。

(小枝圭太)



■ トラギス *Parapercis pulchella* KAUM-I. 73968, 122.7 mm SL (解説は次のページ)

トラギス属 *Parapercis pulchella* (Temminck & Schlegel, 1843)**トラギス** 珍しさ ★★★■ トラギス *Parapercis pulchella* KAUM-I. 73969, 102.0 mm SL

【解説】トラギス科は円筒形の体で、背鰭と臀鰭の基底が長い。底生性で、腹鰭をつかって海底にじっと静止し、泳いでは静止するのを繰り返す。浅場から深場まで生息するが、深場に生息する種ほど赤色やオレンジ色といった鮮やかな色彩の種が多い。本種は背鰭棘部と軟条部の間に欠刻がある、尾鰭の上葉が伸長する、体側に幅の広い6本の褐色横帯があることなどが特徴。肉食性で甲殻類、多毛類、小型魚類を捕食する。カワハギ類やキス類を狙った釣りの外道として知られる。沿岸浅場の砂礫底域に生息し、千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸に分布する。体長は最大でも18 cmほどで食用になることはほとんどない。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis randalli* Ho & Shao, 2010**ホムラトラギス** 珍しさ ★★★★★■ ホムラトラギス *Parapercis randalli* KAUM-I. 60142, 52.5 mm SL

【解説】体側背側に5つの赤褐色鞍状斑があること、腹側面に8つの赤色斑があること、尾鰭中央付近に2つの黒色斑が垂直に並ぶことが特徴。本種は2013年に日比野ほか(2013)により与論島から得られた標本に基づき日本で初めて記録された。その後、松沼ほか(2017)により内之浦湾から種の分布北限記録として報告されている。本種は水深100 mや150 mなど比較的深い場所から採集された例が多い。内之浦では水深40 mに設置された定置網によって得られており、本種の採集水深としては比較的浅いといえる。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis sexfasciata* (Temminck & Schlegel, 1843)

クラカケトラギス

珍しさ ★★★



■ クラカケトラギス *Parapercis sexfasciata* KAUM-I. 83535, 129.7 mm SL

【解説】体の背側部は赤褐色で、4個のV字型の暗色斑があり、胸鰭基部と眼下部にそれぞれ暗色帯があることが特徴。体長は最大で20 cmほど。浅海域～大陸棚砂泥域に生息し、国内では本州・四国・九州沿岸と東シナ海中部以南の大陸棚域に分布する。底曳網によってよく混獲され、カワハギ類やキス類を狙った釣りの外道としても知られる。練り製品の原料や塩焼きにも利用されることもあるが、内之浦漁港では食用とされていない。(小枝圭太)

トラギス属 *Parapercis snyderi* Jordan & Starks, 1905

コウライトラギス

珍しさ ★★★



■ コウライトラギス *Parapercis snyderi* KAUM-I. 57295, 76.4 mm SL

【解説】体色はやや変異に富むが、体側に複数の暗色鞍状斑が並び、尾鰭基底に2つの暗色斑がある。背鰭が5棘で、側線有孔鱗数が38～44であることなどが特徴。オスはなわばりもち、そのなかに1～5個体のメスを取り囲み、ハーレム型産卵をおこなうことが知られる。産卵に割り込んで放精するストリーキングオスがいるため、産卵とよく似た行動を繰り返しおこない、ストリーキングオスをだます「シグナルジャンプ」と呼ばれる行動をおこなう。沿岸の浅い砂礫域や砂泥域にごく普通にみられるが、30 m以深のやや深い場所にも生息する。千葉県以南の太平洋沿岸と島根県隠岐から九州北岸の日本海沿岸、屋久島、慶良間諸島に分布する。(小枝圭太)

ワニギス属 *Champsodon snyderi* Franz, 1910**ワニギス** 珍しさ★★■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 69105, 71.4 mm SL■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 68429, 52.4 mm SL

【解説】体はやや側扁し、腹部には鱗がない。甲殻類や魚類をおもな餌とし、共食いを多くおこなうことが知られている。昼間は海底付近に多く、夜間になると海面付近へ浮上する日周鉛直運動をおこなうことが知られている（Morohashi and Sasaki, 2003）。鹿児島湾や志布志湾などにおいては底曳網によって大量に漁獲される。内之浦湾においては、底曳網漁業は展開されていないものの、定置網によって体長数 cm の小型個体が漁獲されている。これは夜間に浮上した個体が入網したものであると思われる。食用とされることはなく、利用は養殖餌料になるにとどまる。（畑 晴陵）

■ ワニギス *Champsodon snyderi* KAUM-I. 29079, 46.0 mm SL

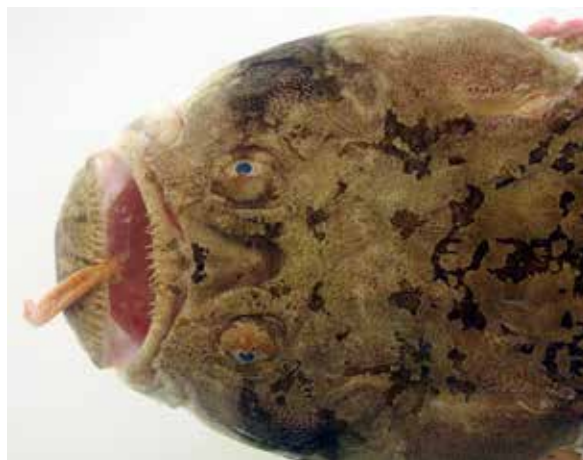
ミシマオコゼ属 *Uranoscopus bicinctus* Temminck & Schlegel, 1843

メガネウオ 珍しさ ★★★★★



■ メガネウオ *Uranoscopus bicinctus* KAUM-I. 94397, 223.1 mm SL

【解説】体は茶褐色を呈し、体の前半部と後半部に1つずつ、焦げ茶色の鞍状斑を有する。背鰭は2基。各体側鱗は斜め後下方に向かって整然と並ぶ。口内に細長い肉質突起を有しており、これをゴカイの様に動かして餌となる小魚を誘引するものと思われる。内之浦湾においては最も多く漁獲されるミシマオコゼ類である。ミシマオコゼ科魚類は日本国内において利用されることは多くない。しかし、近年では日本各地で本科魚類の有効利用が試みられており（日本経済新聞、2010b）、鹿児島県においてもスーパーマーケットなどに鍋物用などとして切り身が並ぶことが増えてきている。（畑 晴陵）



■ ゴカイのようなメガネウオの肉質突起 (KAUM-I. 94397)

ミシマオコゼ属 *Uranoscopus chinensis* Guichenot, 1882**キビレミシマ** 珍しさ ★★★★★■ キビレミシマ *Uranoscopus chinensis* KAUM-I. 67756, 187.3 mm SL■ キビレミシマ *Uranoscopus chinensis* KAUM-I. 71453, 153.9 mm SL

【解説】背鰭を2基そなえ、体背面は茶褐色を呈し、虫食い状の白色斑があり、ミシマオコゼに類似するが、前鰓蓋骨下縁に4本の棘をそなえること（ミシマオコゼでは3本）、両眼間隔域にあるくぼみが後方に伸長し、両眼の後縁を結んだ線に達すること（達しない）で識別される。また、キビレミシマの胸鰭は鮮やかな黄色を呈する。日本国内においては千葉県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、青森県から九州西岸にかけての日本海・東シナ海から報告されており、小笠原諸島と琉球列島には分布しないものと思われる。東アジア固有種であり、日本のほか、朝鮮半島南岸、台湾、および黄海南部から南シナ海沿岸にかけての中国沿岸から知られている。（畑 晴陵）



■ キビレミシマの頭部背面（KAUM-I. 71453）

ミシマオコゼ属 *Uranoscopus japonicus* Houttuyn, 1782**ミシマオコゼ** 珍しさ ★★★★★■ ミシマオコゼ *Uranoscopus japonicus* KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL

【解説】背鰭が2基あること、体背面に虫食い状の白色斑があること、前鰓蓋骨下縁に3本の棘をそなえることにより、日本産同科他種と識別される。北西太平洋固有種であり、日本のほか、朝鮮半島南岸・西岸、中国の東シナ海沿岸、および台湾から報告されている。日本国内においては北海道から九州南岸にかけての太平洋沿岸、青森県から九州南岸にかけての日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海に広く分布するが、小笠原諸島においては稀であり、また琉球列島における記録はない。メガネウオ以外のミシマオコゼ類に共通するが、内之浦湾における漁獲は少ない。ミシマオコゼ科魚類は、眼が頭部背側についており、海底で常に上をみていることから英名で「スターゲイザー」（星をみる者・天文学者を意味する）と呼ばれる。（畑 晴陵）



■ ミシマオコゼの眼は頭部背側にある（KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL）

■ 冷凍前のミシマオコゼ *Uranoscopus japonicus* (KAUM-I. 40443, 215.0 mm SL)

イソギンポ属 *Parablennius yatabei* (Jordan & Snyder, 1900)**イソギンポ** 珍しさ ★★★■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 97488, 56.6 mm SL■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 68817, 30.4 mm SL

【解説】イソギンポ科は細長い体をもち、唇が厚く、眼の上や頭部に皮弁をもつ種が多い。本種は尾鰭軟条の大部分が分枝し、上顎に犬歯状歯があることが特徴。温帯に適応した種であり、国内では北海道から九州までの日本海・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、奄美大島に広く分布する。内之浦湾内には数多く生息するものと考えられるが、定置網に入ることは少ない。イソギンポ科魚類は総じて小さく、食用にされることはない。(小枝圭太)

■ イソギンポ *Parablennius yatabei* KAUM-I. 98167, 45.2 mm SL

ハタタテギンポ属 *Petroscirtes breviceps* (Valenciennes, 1836)

ニジギンポ 珍しさ★★



■ ニジギンポ *Petroscirtes breviceps* KAUM-I. 62439, 59.7 mm SL



■ ニジギンポ *Petroscirtes breviceps* KAUM-I. 68428, 37.0 mm SL

【解説】 鰓蓋や尾鰭基底に暗色斑がなく、下顎の皮弁が分枝しない、頭後部に皮弁がないことなどが特徴。岩礁性で内湾の藻場に生息する普通種。ホンダワラやアマモなどの海藻や海草に付くが、ロープやブイなどの人工物に大小 10 個体ほどが付いていることをみかけることの方が多い。ロープの上をチョコチョコと泳ぎ回り、これらから離れることはほとんどない。産卵はカキ殻や岩穴、空き缶などを利用する。インド・西太平洋の熱帯・温帯域に広く分布しており、国内では北海道から沖縄までほぼ全域に分布している。内之浦湾でも定置網のロープに付いている姿がよく普通にみられるが、網にはいることは多くない。(小枝圭太)



■ ニジギンポの頭部 (KAUM-I. 62439, 59.7 mm SL)

ウナギギンポ属 *Xiphasia setifer* Swainson, 1839**ウナギギンポ** 珍しさ ★★★★★■ ウナギギンポ *Xiphasia setifer* KAUM-I. 71455, 592.3 mm SL

■ ウナギギンポの頭部 (KAUM-I. 71455, 592.3 mm SL)

【解説】名の通りウナギのように体が細長く、一見するとイソギンポ科とは思えないほどだが、顔立ちはたしかにイソギンポ科のそれである。背鰭起部は眼の中央より前にあり、基底の非常に長い背鰭が尾部まで続く。体は全体に黄緑色で褐色の横帯が背鰭から臀鰭まで横断するように数多くはしる。本種とよく似たヒメウナギギンポ（本著未掲載）とは、胸鰭軟状、背鰭棘および軟条、臀鰭軟条が多いことで識別される。内湾や浅海の水深約 30 ~ 50 m の砂泥底に生息し、驚くと砂泥中に潜る。北海道から九州南岸の太平洋沿岸まで散発的に記録されており、島根県敬川沖、石垣島などからも記録がある。内之浦漁港では 3 個体が得られており、稀種である。（小枝圭太）

■ ウナギギンポ *Xiphasia setifer* KAUM-I. 107724, 262.2 mm SL

■ ウナギギンポの頭部 (KAUM-I. 107724, 262.2 mm SL)

ヨメゴチ属 *Calliurichthys japonicus* (Houttuyn, 1782)

ヨメゴチ 珍しさ ★★★★★



■ ヨメゴチ *Calliurichthys japonicus* KAUM-I. 98147, 63.0 mm SL, メス

【解説】ネズツポ科は体が細長く、縦扁する。オスがメスより大きな背鳍もち、鮮やかな色彩である種が多い。底生性で、背鳍を立てて砂地を滑るように泳ぐ。ネズツポ科というグループだが、「ネズツポ」という和名をもつ種はおらず、「ヌメリ」や「テグリ」などがつく種が多い。

ヨメゴチは後頭部に1対の骨質隆起がある、前鰓蓋骨棘が槍状で長く、内側が鋸歯状である、第1背鳍の第3棘と第4棘の間に黒色斑があることが特徴。水深20～200mの砂泥底に生息する。日本と朝鮮半島、済州島、台湾、中国の広東省、



■ ヨメゴチのオス(2006年5月25日撮影)

オーストラリア北西岸に分布し、国内では千葉県外房以南の太平洋沿岸、新潟県柏崎以南の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海(稀)、東シナ海大陸棚から縁辺域に分布する。内之浦漁港では2個体が得られたのみで、稀である。

(小枝圭太)

ネズツポ属 *Repomucenus curvicornis* (Valenciennes, 1837)

ネズミゴチ 珍しさ ★★★★★



■ ネズミゴチ *Repomucenus curvicornis* KAUM-I. 71252, 63.2 mm SL, オス

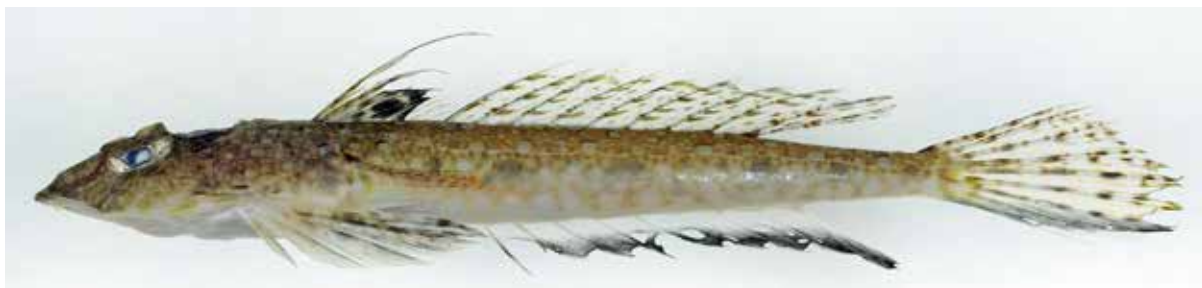
【解説】雌雄ともに糸状に伸長する背鳍鳍条がなく、オスでは第1背鳍の上縁が黒く縁どられ、メスと未成熟個体では第1背鳍の後半に白く縁どられた大きな黒斑があることなどが特徴。岸近くの浅い砂底域に多く、春から夏は水深数mの浅場へ、秋から冬にはやや深みへ移動することが知られている。国内では北海道から九州の日本本土全域に広く分布する。体長は最大で17cmほどの小さな魚だが、東京や大阪などでは天ぷらなどで食される。骨までサクサクと食べることができ、美味。内湾環境の消失や汚染により漁獲量が減少しており、高級魚となりつつある。内之浦湾にも数多く分布していると思われるが、底生性であるからか定置網での採集例は少なく、また漁獲されるものも総じて小型であるため利用もされていない。(小枝圭太)

ネズツポ属 *Repomucenus huguenini* (Bleeker, 1858)**ヤリヌメリ** 珍しさ★★■ ヤリヌメリ *Repomucenus huguenini* KAUM-I. 55509, 135.3 mm SL, オス

【解説】前鰓蓋骨棘が槍状で、内側が鋸歯状となることが特徴。雌雄ともに第1背鰭の棘が伸長するが、オスがより長い。ネズミゴチと同じく、海底から水面近くまで寄り添うようにして上昇する求愛行動をおこなう。求愛中に他のオスに出会うと体当たりして追い払う。産卵期は10～12月で、多くの個体が2歳での産後に死亡することが知られる。水深30～80mの砂泥域に生息し、国内では北海道から九州の日本本土沿岸全域に広く分布する。体長は最大でも16cmほどと小さいが、近年の水産種として需要のあるネズミゴチの漁獲量減少に伴い、代替品として天ぷらなどで食されるようになった。ただし、本種には身に刺激臭・辛みをもつ個体があり、こうした個体は毒性があるので食べてはいけない。(小枝圭太)



■ ヤリヌメリの背面 (KAUM-I. 98015, 93.1 mm SL)

■ ヤリヌメリ *Repomucenus huguenini* KAUM-I. 59969, 79.8 mm SL, メス

ユカタハゼ属 *Hazeus otakii* Jordan & Snyder, 1901

ユカタハゼ 珍しさ ★★★★★

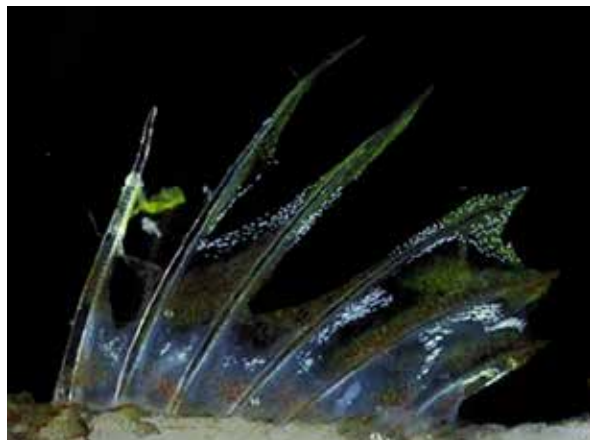


■ ユカタハゼ *Hazeus otakii* KAUM-I. 73959, 43.5 mm SL (上下は同じ個体)

【解説】ハゼ科魚類は魚類のなかで最も多様性が高く、近年にも新種や日本初記録種が次々と報告されているグループである。内之浦湾にも様々なハゼ科魚類が数多く生息していることは想像に容易いが、本科魚類のほとんどが体長数 cm と非常に小型種であることに加え、底生性であるため、定置網によって漁獲されることは極めて少ない。

ユカタハゼは第1背鰭第1棘が他の棘より太い、前鰓蓋部に棘がない、頬と鰓蓋部に鱗があることが特徴。水深 15 ~ 30 m の内湾域の砂泥や軟泥底に生息する。国内では千葉県館山湾以南の太平洋沿岸、九州北西岸、五島列島に分布する。写真の個体は、本調査を通じて定置網によって唯一得られたハゼ科魚類である。

(小枝圭太)



■ ユカタハゼの第1背鰭第1棘は太い (KAUM-I. 73959)

ツバメウオ属 *Platax teira* (Forsskål, 1775)

ツバメウオ

珍しさ ★★

(解説は次ページ)



■ ツバメウオ *Platax teira* KAUM-I. 94417, 219.7mm SL



■ 水揚げされたツバメウオ *Platex teira* の若魚（2009年2月3日撮影）

【解説】体高が極めて高く、よく側扁する。背鰭と臀鰭をひろげると三角形に近い。体は全体に濃い灰色で、頭部後方と体側中央に太い淡灰色横帯がある。腹鰭は黄色い。幼魚は胸鰭と尾鰭を除く各鰭がさらに長い。腹鰭基部の後方に黒色斑が1つあることで同属他種と区別される。成魚は沿岸域の中層に生息し、数個体から多いときは100個体ほどの群れを作る。好奇心が強いいためか、自然下でも人に慣れやすく、餌付くと人を追って泳ぎ回る。夜でも餌を探して活発に遊泳する姿がみられる。幼魚は沖合に生息するとされるが、成魚に比べて国内での目撃例は極めて少ない。インド・太平洋に広く分布し、国内では北海道から沖縄までの全域に分布している。内之浦漁港でも最大体長である60 cmに近い成魚がたびたび入網するが、食用としては利用されない。稀に若魚も得られる。（小枝圭太）

アイゴ属 *Siganus fuscescens* (Houttuyn, 1782)**アイゴ** 珍しさ★★■ アイゴ *Siganus fuscescens* KAUM-I. 71417, 309.3 mm SL

【解説】体は卵形でよく側扁する。背鰭の棘部と軟条部の間に欠刻があり、尾鰭がわずかに湾入する。体色はオリーブ色から茶褐色で、体側に多数の白色点があることが特徴。夜はサンゴや岩に寄り添うように眠り、色が白みがかり、全身にまだら模様ができる。背鰭の棘には毒があり、刺されると数十分にわたりジンジンと痛むので取り扱いには注意が必要。和名であるアイゴの「アイ」は触れると肌を刺すイラクサの古称である「アイ」を語源としており、棘をもつ魚を意味すると考えられている（榮川、1982）。藻場で大きな群れをなし、そこに繁茂した藻類を食べながら泳ぎ回る。国内では北海道以外のほぼ全域に分布する。磯臭さがあるが、内臓を傷付けないように丁寧に取り出すことで、嫌な臭いはなくなり美味しく食べることができる。沖縄では塩水で似たマース煮で好まれる。刺身も美味。内之浦漁港でも普通に水揚げされるがやや小型のことが多い。また、上の写真のように、アザのような黒褐色斑が全身にできる個体がたびたびみられる。大きい個体は市場に並ぶが、小型のものは多くの場合、投棄されている。鹿児島県本土では本種は「バリ」と呼ばれることが多い。（小枝圭太）



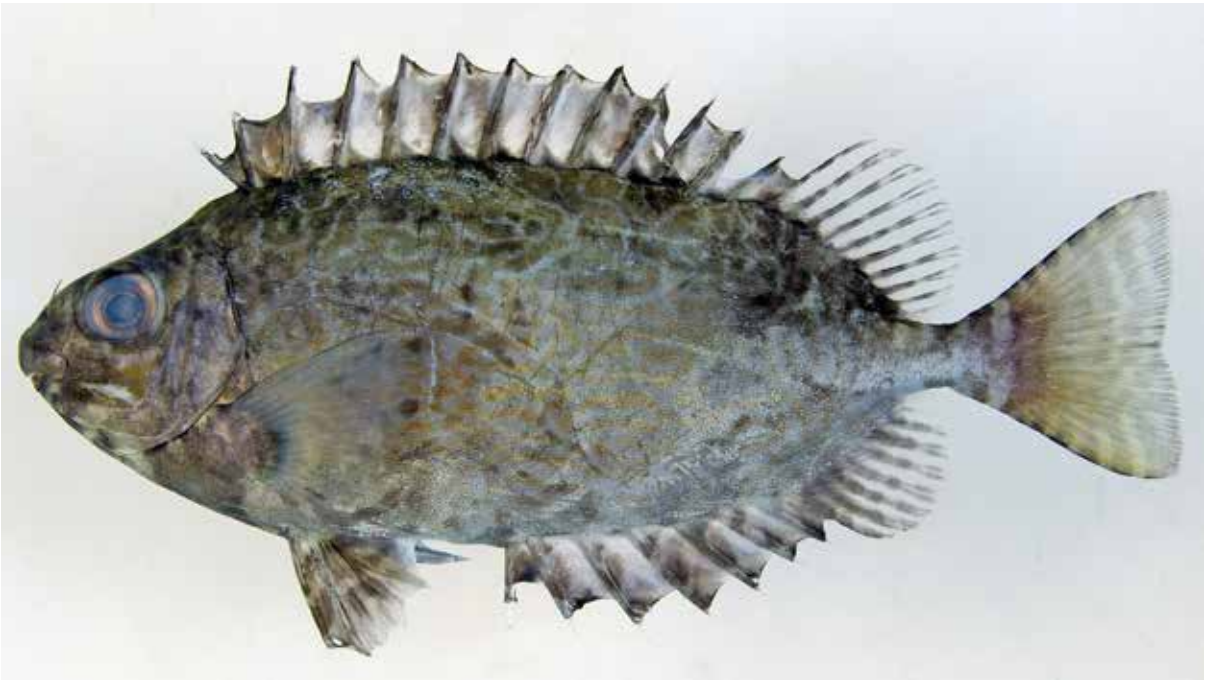
■ アイゴ（2005年1月12日撮影）



■ 水揚げされた大型のアイゴ（2007年6月7日撮影）

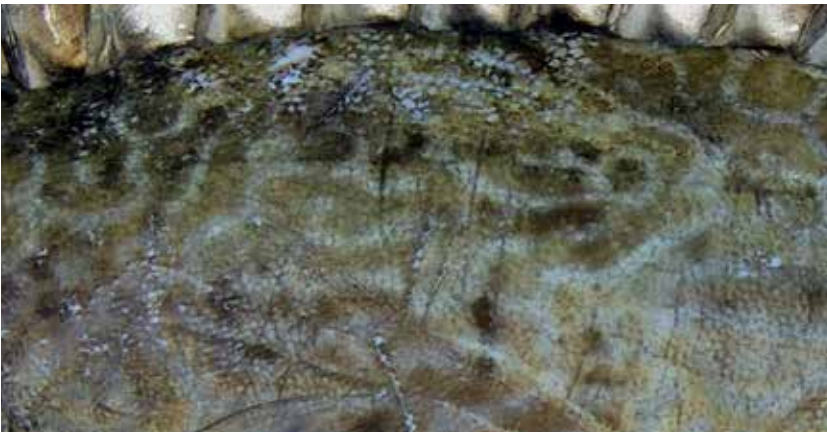
アイゴ属 *Siganus spinus* (Linnaeus, 1758)

アミアイゴ 珍しさ ★★★★★



■ アミアイゴ *Siganus spinus* KAUM-I. 6483, 113.2 mm SL

【解説】アイゴに似るが、体側全体に虫食い模様があることで識別される。アミアイゴの幼魚は春先に大群で接岸し、プランクトン食から藻類食へと移行する。その際は、海岸からみても海の色が黒っぽくみえるほど大量の魚影で海が埋め尽くされる。藻類食に移行する前は臭みがなく美味であるため、沖縄ではこれらを「スク」と呼び、塩漬け（スクガラス）にするために大量に漁獲される。アイゴと同様に背鰭棘に毒があるので、取り扱いには注意が必要。国内では、静岡県以南の太平洋沿岸にも分布するが、琉球列島で多い。内之浦漁港では非常に稀で、写真の小型個体（KAUM-I. 6483）が採集されたのみ。（小枝圭太）



■ アミアイゴの体側には虫食い模様はいる（KAUM-I. 6483）



■ ツノダシの幼魚 *Zanclus cornutus*
(KAUM-I. 94381, 57.0 mm SL; 解説は次のページ)

ツノダシ属 *Zanclus cornutus* (Linnaeus, 1758)

ツノダシ 珍しさ ★★★★★

■ ツノダシ *Zanclus cornutus* KAUM-I. 38853, 136.0 mm SL

【解説】ツノダシ科は1属1種のみから構成され、インド・太平洋の温帯から熱帯域まで非常に広く分布する。体高は著しく高く、強く側扁する。背鰭第3棘が著しく長く伸長し、吻は突出する。歯はブラシ状。体は白色で、黒色と黄色の横帯が交互にはしる。岩礁・サンゴ礁域で普通にみられ、水深180 mからも採集された例がある。日中は数個体、時に数百個体の大群で海底をつついてはいるが、夜になるとサンゴや岩に寄り添うように眠り、色が黒っぽくなる(小枝、2017d)。体長6 cmほどまで着底せず、着底直後は体が半透明。体長25 cmほどまで成長するが、内之浦漁港からは体長15 cmに満たない小型個体と半透明の幼魚が1個体ずつ得られている。(小枝圭太)

クロハギ属 *Acanthurus dussumieri* Valenciennes, 1835

ニセカンランハギ 珍しさ★★★★



■ ニセカンランハギ *Acanthurus dussumieri* KAUM-I. 65986, 193.8 mm SL

【解説】ニザダイ科は体がよく側扁し、口が小さい。色彩が多様で、色鮮やかな種も多い。本種はクロハギ、オスジクロハギ（いずれも本著未掲載）に似るが、尾柄棘を覆う被膜が白色である、背鰭は黄色で顕著な縞模様がない、尾鰭後半に多数の暗色斑点があることなどで識別できる。サンゴ礁・岩礁域に生息し、単独か数個体の群れでみられる。胸鰭を羽ばたかせながら泳ぎ、尾鰭を使うことはあまりない。夜は岩などに寄り添うようにして眠っている。茨城県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海沿岸でもみられるが、琉球列島や小笠原諸島などで多い。沖縄県では「トカジャー」と呼ばれて電灯潜り（潜水漁）により漁獲され、マース煮（塩煮）や唐揚げなどで食べられるが、独特の臭みがあるため値は安い。（小枝圭太）



■ ニセカンランハギ
KAUM-I. 6489, 179.1 mm SL

クロハギ属 *Acanthurus mata* (Cuvier, 1829)**ヒラニザ** 珍しさ ★★★★★■ ヒラニザ *Acanthurus mata* KAUM-I. 6484, 96.7 mm SL

【解説】同属他種と比較して、やや体高が低く、吻が短い。体と頭部には多数の青色縦帯がはしる。サンゴ礁域の浅場や外縁周辺で単独か数個体の小群でみられる。ニセカンランハギやクロハギ（本書未掲載）に似るが、これらと混群でみられることはあまりない。千葉県館山湾～高知県柏島の太平洋沿岸にも分布するが数は少なく、琉球列島や小笠原諸島で多い。内之浦漁港から得られた写真の標本は、財団法人鹿児島市水族館公社（2008）により報告されており、これは九州沿岸からの初めての記録である。奄美・沖縄地域では釣りや追い込み漁、刺網などで漁獲される。ニセカンランハギとよく似ているが、ヒラニザはニザダイ科のなかでもっとも味が良いといわれるほど美味である。刺身でも美味で、煮付にもあう。似た環境に生息する同属他種でこれほど食味の評価に差があるのは、食性など両種の生態に何かしら大きな違いがあることが、その理由として考えられる。（小枝圭太）

■ 冷凍前のヒラニザ
(KAUM-I. 6484, 96.7 mm SL)

クロハギ属 *Acanthurus nigrofuscus* (Forsskål, 1775)

ナガニザ 珍しさ ★★★★★



■ ナガニザ *Acanthurus nigrofuscus* KAUM-I. 98149, 90.8 mm SL

【解説】赤紫色から茶色の体で、背鰭と臀鰭の基底後端に淡い黒色斑があることが特徴。頭部と胸部には橙色斑点が散在するが、不明瞭な個体もいる。サンゴ礁の斜面や波打ち際のごく浅い場所に生息する。本種のみによる数個体の群れもみられるが、他のニザダイ科やブダイ科、ベラ科魚類などと混群を形成する姿もよくみられる。神奈川県三浦半島～高知県柏島の太平洋沿岸にも分布するが数は少なく、琉球列島や小笠原諸島で多い。内之浦漁港から得られた写真の標本（KAUM-I. 6488）は、財団法人鹿児島市水族館公社（2008）により報告されており、これは九州沿岸からの初めての記録であった。本種は最大でも体長 18 cm 程度とニザダイ科魚類としては比較的小型であり、食用とされることは少ない。（小枝圭太）



■ ナガニザ KAUM-I. 6488, 117.5 mm SL

テングハギ属 *Naso lituratus* (Forster, 1801)

ミヤコテングハギ

珍しさ ★★★★★

■ ミヤコテングハギ *Naso lituratus* KAUM-I. 19876, 64.0 mm SL

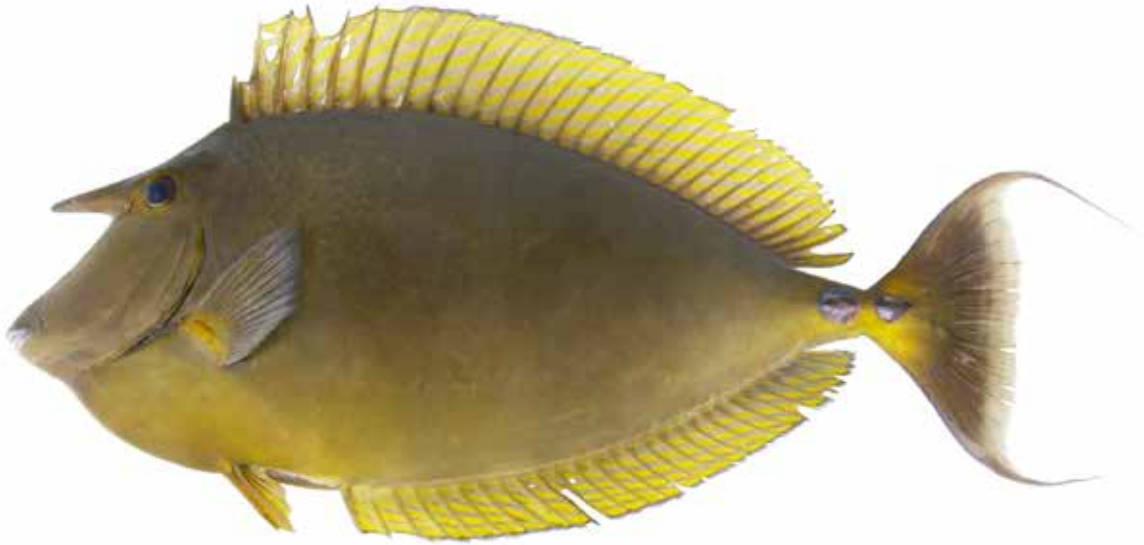
【解説】テングハギ属には、テングハギのように名の通り前頭部に角状突起をもつ種がいるが、本種には角がない。体は黒色～墨色で、唇や背鰭、臀鰭、尾柄棘が黄色く、一見して忘れられない色彩の魚である。尾柄の骨質板は個体によっては非常に鋭く、切れ味がよい（筆者はこれで手を切り、4針縫ったことがある）、とりわけ生体の取り扱いには注意が必要。サンゴ礁域に単独か数個体、あるいはモンツキハギ（本書未掲載）やテングハギ、キンチャクダイ類、ブダイ類などの混群で見られる。これまで国内において本種の稚魚に関する知見はなく、形態の詳細は不明である。内之浦湾で得られた標本は、色彩の特徴が成魚のそれとは大きく異なったものの、鰭条の数などが日本産テングハギ属のなかで唯一ミヤコテングハギに一致したため、本種に同定された。ミヤコテングハギはインド・太平洋に広く分布し、国内では琉球列島や小笠原諸島で多い。南日本沿岸域では、これまで神奈川県横須賀、伊豆半島西岸、和歌山県白浜・串本、高知県柏島などの太平洋沿岸、瀬戸内海から記録されていたが数は少ない。本報告により内之浦漁港から得られた写真の1標本は、九州沿岸からの初めての記録である。沖縄県では市場に並ぶこともあるが、積極的に漁獲される種ではない。（小枝圭太）



■ ミヤコテングハギの頭部（KAUM-I. 19876）

テングハギ属 *Naso unicornis* (Forsskål, 1775)

テングハギ 珍しさ ★★★★★



■ テングハギ *Naso unicornis* KAUM-I. 30190, 375.2 mm SL

【解説】前頭部の吻から離れた位置に角状突起があることが特徴。体はオリーブ色で、大型個体では体側にあざのような濃緑色斑をもつものもいる。小型個体は角状突起が小さく、幼魚はもたない。尾柄の骨質板は個体によっては鋭いため（特にオスは鋭い）、生体の取り扱いには注意が必要。岩礁・サンゴ礁域に単独か数個体、あるいは同じような大きさの他の魚種との混群で見られる。テングハギ属のなかでは北方に分布する種であり、青森県下北半島以南の太平洋・日本海・東シナ海沿岸にも分布する。ただし、これらの場所での個体数は少なく、琉球列島や小笠原諸島に多い。沖縄県では「ちぬまん」と呼ばれ食用となる。個体により脂ののりに差があり、脂の多い個体は刺身で美味。内臓は臭いが、肝を入れた「ちぬまん汁」をあえて好む人もいる（臭いが強く苦手な人が多い）。（小枝圭太）

テングハギ属 *Naso* sp.

テングハギ属の一種 珍しさ ★★★★★

【解説】ニザダイ科魚類の幼魚は特徴が少なく、同定が困難である。内之浦漁港で採集された個体は体に黒色斑点が散在することや、体側後部と尾柄部に黒色横帯があるなどの特徴がみられたものの、種の特定は困難であった。ただし、鰭条数などの特徴からほかに内之浦から記録のあるテングハギ属であるミヤコテングハギとテングハギとは異なる種であることが分かる。

（小枝圭太）



■ テングハギ属の一種 *Naso* sp.
KAUM-I. 63204, 31.4 mm SL

ニザダイ属 *Prionurus scalprum* Valenciennes, 1835**ニザダイ** 珍しさ★■ ニザダイ *Prionurus scalprum* KAUM-I. 96817, 341.0 mm SL

【解説】体は灰色。尾柄部に3～5個の不可動な骨質板があり、この板上に黒斑が並ぶ。尾柄の骨質板はテングハギ属ほどには鋭く尖らないものの、扱いには注意が必要。磯場を代表する魚で、南日本沿岸で多いが、琉球列島でも岩礁域や消波ブロックの周辺で見られる普通種。数個体による群れをつくる。おもに石灰藻類を餌とする。国内では、北海道以外のほぼ全域に分布している。尾柄部の黒斑のうち3つが特に明瞭であることから、釣り人などからは「さんのじ」と呼ばれることが多い。内之浦漁港では「こめ」と呼ばれる。食用にはされているものの、やや磯臭さが強いいため、安価に取引されている。ただし口永良部島など地域によっては磯臭さがないため、刺身だけでなく、胃袋や生殖腺さえも美味という（小山内、2017）。（小枝圭太）

■ 市場に並ぶニザダイ *Prionurus scalprum* (2013年10月10日撮影)

シロカジキ属 *Istiompax indica* (Cuvier, 1832)

シロカジキ 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたシロカジキ *Istiompax indica* (2009年11月24日撮影)

【解説】生時、体背部の黒みが強いいため、英名は「ブラックマーリン」。和名は、死後に体色が淡くなり、白みを帯びることに由来するものと思われる。体背縁は著しく隆起する。胸鰭が関節により固定されており、動かすことが出来ない。全長約4.5 m、体重700 kgに達する(Nakamura, 1983, 2001)。生態に関しては不明な点が多いが、北西太平洋においては、中国海南島の近海で5～6月に産卵するものと考えられている(Nakamura, 1941, 1942)。マカジキ類としてはバショウカジキに次いで沿岸性が強い。内之浦には定置網に吻が刺さったまま死亡した個体の頭部骨格標本が残されている。(畑 晴陵)



■ シロカジキ *Istiompax indica* の頭部骨格（2015年12月9日撮影）

バショウカジキ属 *Istiophorus platypterus* (Shaw, 1792)

バショウカジキ 珍しさ★★



■ 水揚げされたバショウカジキ *Istiophorus platypterus*（2007年11月8日撮影）

【解説】 芭蕉の葉のような大きい第1背鰭が特徴。鹿児島県内においては秋季に定置網や流し刺網により多獲され、「秋太郎」と称される。産卵は夏季に台湾近海でおこなわれ、オスは通年台湾周辺にとどまり、日本近海まで回遊する個体はほぼメスと考えられている（奥原、2004）。内之浦湾においても、1 m以上の個体が秋季には頻繁に水揚げされる。鹿児島県内では刺身などにして盛んに消費されるが、県外では積極的に食用に供されることは少なく、県内独特の食文化であるといえる。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena barracuda* (Edwards, 1771)

オニカマス 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたオニカマス *Sphyraena arabiansis* (2012年7月31日撮影)

【解説】体に横帯が多数はいり、尾鰭は黒色を呈し、両葉の後端は白色。両顎には鋭い犬歯状歯を多数そなえる。幼魚は河川の河口やマングローブ域、藻場などに多く出現する。幼魚の体はオリーブ色や茶色を呈し、茶褐色の黒色斑が並ぶ。この色彩はヒルギ類の種子などの植物片に擬態するものと考えられている（瀬能、2014）。稀にはあるが、日本国内における本種のシガテラ中毒が報告されており（野口、2004）、厚生労働省により、注意喚起がなされている（厚生省、1953）。内之浦湾では極めて稀に漁獲されるものの、利用されない。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena forsteri* Cuvier, 1829

オオメカマス 珍しさ ★★★★★

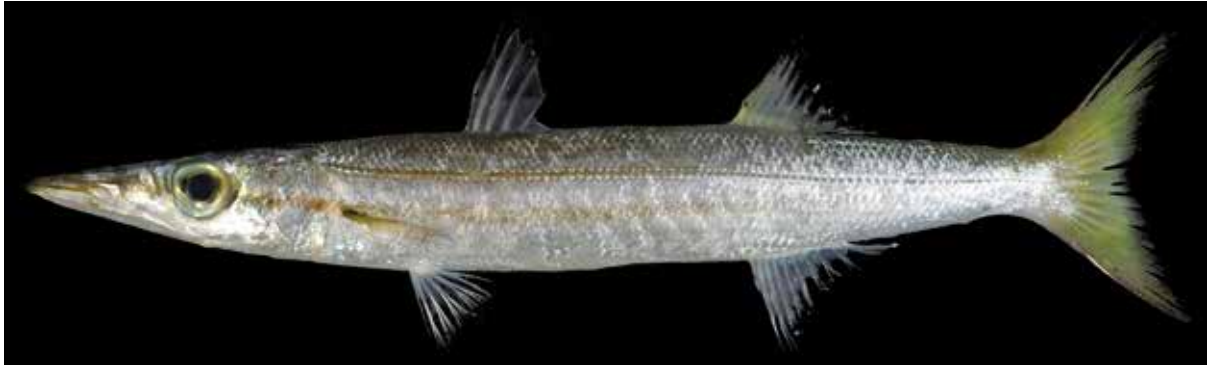


■ オオメカマス *Sphyraena forsteri* KAUM-I. 300054, 424.0 mm SL

【解説】体は円筒形で、体側上部は青みがかり、体腹面にかけては銀白色。胸鰭腋部後方に黒色斑がある。第1鰓弓にはコブ状の鰓耙が多数並び、それぞれの鰓耙の上に小棘が複数ある。他の日本産カマス科魚類において、鰓耙は細長いものが1～2本あるか、または鰓耙が全くないことから、本種の識別は容易である。日本における記録は少なく、鹿児島県においてはこれまで薩摩半島西岸に位置する野間池と屋久島からのみ記録されていた。本報告は本種の九州太平洋沿岸における初めての記録である。内之浦湾においても極めて稀な魚であり、写真の個体が確認されたのみ。（畑 晴陵）



■ オオメカマスの頭部 (KAUM-I. 300054)

カマス属 *Sphyraena iburiensis* Doiuchi & Nakabo, 2005**イブリカマス** 珍しさ ★★★■ イブリカマス *Sphyraena iburiensis* KAUM-I. 98040, 195.7 mm SL

【解説】体は円筒形。体背面から体側上部にかけては青みがかった緑色。体側に2本の茶褐色縦帯がはいる。土居内（2001）により台湾カマスに類似した未記載種として報告され、高知県以布利から得られた個体に基づき、和名イブリカマスが提唱された。その後、Doiuchi and Nakabo (2005)により新種記載され、日本国内ではこれまでに以布利のほか、静岡県伊東市川奈、和歌山県串本、白浜、愛媛県愛南町深浦、鹿児島県本土、種子島、奄美大島、竹富島、および八丈島から記録されており、国外においてはエジプトの紅海沿岸からのみ報告されている（池田・中坊、2015； 鍋木、2016； Hata et al., 2017）。以布利においては台湾カマスに交じって頻繁に漁獲されるが（土居内、2001）、内之浦湾では台湾カマスは数多く漁獲されるものの、イブリカマスは稀。台湾カマスと区別されずに消費される。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena japonica* Bloch & Schneider, 1801**ヤマトカマス** 珍しさ ★■ ヤマトカマス *Sphyraena japonica* KAUM-I. 94372, 245.2 mm SL

【解説】体は円筒形。腹鰭起部は背鰭起部よりもわずかに後方に位置する。側線よりも下方に不明瞭な1縦帯がはいる。稚魚期から餌生物のほとんどを魚に依存する（伊東、2009）。日本、朝鮮半島、中国、および台湾からのみ記録されている東アジア固有種。日本国内では北海道から九州南岸にかけての日本海・太平洋沿岸に分布し、大隅諸島を除く琉球列島からは記録されていない。季節的な消長はあるものの、内之浦湾においてはアカカマスに次いで多く漁獲されるカマス科魚類であり、食用に供される。また、他のカマス類と異なり、小型個体も定置網に多く入る。干物に加工されることが多い。（畑 晴陵）



■ 大量に水揚げされたヤマトカマス（2010年10月6日撮影）

カマス属 *Sphyraena obtusata* Cuvier, 1829

台湾カマス 珍しさ★★



■ 台湾カマス *Sphyraena obtusata* KAUM-I. 98939, 339.1 mm SL



■ 台湾カマス *Sphyraena obtusata* KAUM-I. 98938, 317.9 mm SL

【解説】体背面は茶色がかった深緑色。体側に不明瞭な2本の黄褐色の縦帯がはいり、上方のものは側線上に、下方のものは側線に並行し、尾鰭基底中央に達する。同属のイブリカマスは本種に酷似するが、体側縦帯の下方のものが、尾鰭基底中央よりも下に達することにより台湾カマスと識別される (Doiuchi and Nakabo, 2005)。インド・西太平洋に広く分布し、黒海や地中海への移入も確認されている。日本国内においては相模湾以南の太平洋沿岸に分布し、沖縄県で定置網により得られるカマス科魚類のほとんどは本種であるが (本永、1991)、内之浦湾における漁獲量はアカカマス、ヤマトカマスに次ぐ程度と思われる。食味はよく、刺身のほか、焼き物や干物などにして美味である。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたアカカマス *Sphyraena pinguis* (2017年1月11日撮影)

カマス属 *Sphyraena pinguis* Günther, 1874**アカカマス** 珍しさ ★■ アカカマス *Sphyraena pinguis* KAUM-I. 19873, 282.2 mm SL

【解説】体背面は茶色。主鰓蓋骨後縁は尖り、体側に胸鰭基底上端を通る1本の暗色縦帯がはいる。従来、北西太平洋に固有の種と考えられてきたが、これまで別種とされてきたダルマカマスがアカカマスと同種とみなされ、インド・西太平洋に広く分布することが明らかとなっている（Doiuchi and Nakabo, 2005）。鹿児島湾における研究では、産卵期は5～8月、幼期の成長は極めて速く、発生後約半年で尾叉長25 cmにまで成長し、最高齢は9歳魚が確認されている（増田ほか、2003）。内之浦湾において最も多く漁獲されるカマス類である。（畑 晴陵）

■ アカカマス
KAUM-I. 94337, 213.7 mm SLカマス属 *Sphyraena putnamae* Jordan & Seale, 1905**オオカマス** 珍しさ ★★★★★■ オオカマス *Sphyraena putnamae* KAUM-I. 94393, 344.0 mm SL

【解説】体背面は緑がかった暗色を呈し、体側面は銀白色。体には多数のくの字型の横帯がはいる。第2背鰭と臀鰭の最後軟条はわずかに伸長する。最大で全長87 cmに達する大型種。夜行性であるとされ、昼間は大きな群れで遊泳することが知られる（Senou, 2001）。インド・西太平洋に広く分布し、東南アジアでは大型個体が大量に水揚げされるが、日本においては少なく、これまで相模湾、和歌山県、土佐湾、喜界島、奄美大島、瀬底島、および沖縄島から記録されている。本報告はオオカマスの九州沿岸における標本に基づく初めての記録である。内之浦湾においても稀な種であり、本調査を通じて写真の個体を含めた2例が確認されたのみ。（畑 晴陵）

カマス属 *Sphyraena* sp.

カマス属の一種

珍しさ ★★★★★



■ カマス属の一種 *Sphyraena* sp. KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL

【解説】体は銀白色を呈し、体背面は緑がかった茶褐色。背鰭の最後軟条が伸長しない。尾鰭は湾入型で、大部分は黄色がる。体側面には多数の暗緑色の「くの字」状横帯がある。鰓耙はない。これらの特徴が Senou (2001) によって示された *Sphyraena jello* (日本における正式な記録がない) に似るが精査が必要。本種の国内からの報告については、三木涼平氏 (宮崎大学大学院) ほかにより近く発表される予定である。内之浦湾における調査では写真の1個体 (KAUM-I. 52534) のみを得られた。(畑 晴陵)



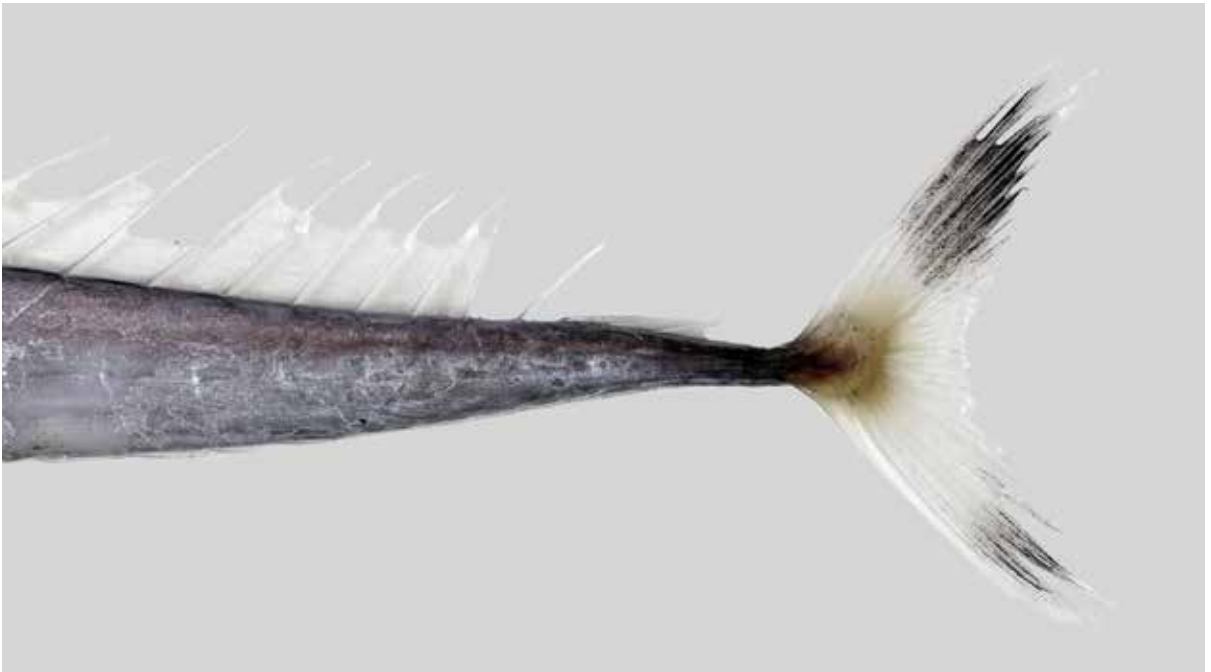
■ 冷凍前のカマス属の一種 *Sphyraena* sp. KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL



■ カマス属の一種 *Sphyraena* sp. の頭部 (KAUM-I. 52534, 583.2 mm SL)

ナガユメタチモドキ属 *Assurger anzac* (Alexander, 1917)**ナガユメタチモドキ** 珍しさ ★★★★★■ ナガユメタチモドキ *Assurger anzac* KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL

■ ナガユメタチモドキの頭部 (KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL)



■ ナガユメタチモドキの尾部 (KAUM-I. 98082, 966.0 mm SL)

【解説】タチウオ科の体はリボン状で、著しく長い。本種はそのなかでも特に長い。尾鰭があること、両眼間隔に隆起縁があり、眼が前部背縁に接近しないことが特徴。背鰭鰭条数（棘＋軟条）は116～123。底層遊泳性で、通常は150～400 mに生息するため、内之浦湾のような浅い場所に出現することは極めて稀であるといえる。幼魚は表層から中層遊泳性といわれており、写真の個体は湾内に迷入したものと考えられる。世界中の温帯域に分布し、国内では青森県津軽海峡沿岸、岩手県岩泉、相模湾、静岡県石廊崎、熊野灘、紀伊水道、土佐湾、山口県日本海沿岸から記録がある。本種の記録の多くは体長2 m近い大型個体であり、体長1 mほどの本標本は稀少である。タチウオ科は漁獲量が多く、味も良いため水産的な価値が高いものが多いものの、本種を含む尾鰭をもつタチウオの仲間は総じて稀種であるため、食用となることは稀であろう。（小枝圭太）

タチウオ属 *Trichiurus japonicus* Temminck & Schlegel, 1844**タチウオ** 珍しさ ★■ タチウオ *Trichiurus japonicus* KAUM-I. 94387, 585.0 mm SL

■ タチウオの頭部 (KAUM-I. 94387, 585.0 mm SL)

【解説】タチウオ属魚類は世界中で利用され、水産重要種を多く含む。本種の体は著しく長く、リボン状。生時、全身は銀白色で光を反射する。背鰭は白色。尾鰭はない。上顎には強大な犬歯状歯があり、口床は暗色。最大で1.5 mにもなるが、多くは1 m程度。大陸棚域に生息し、沿岸でもみられる。群れをつくり、基本的に立ち泳ぎをしている。和名の「タチ」はこの立ち泳ぎに由来する説もあるが、本種の細長く銀白色の体が太刀に似るためとする説が通説である。昼夜で表層から深場まで鉛直運動をくりかえす。魚食性が強く、鋭い歯で噛みつき、時には獲物を切断する。国内では北海道から九州南岸の日本海・東シナ海・太平洋沿岸に分布するが、琉球列島や小笠原諸島には分布しない。内之浦漁港では一年中まとまった数が漁獲され、春先には40 cm以下の小型個体も大量に入網する。本種の体表はグアニン色素に被われており、過去にはこれを模造真珠の光彩に用いていた(榮川、1982)。その銀色に輝く体表の状態によって値段が上下することから、漁獲後の丁寧な取り扱いが求められている。美味しい魚で、刺身、焼き、ムニエルなどで食される。(小枝圭太)



■ 水揚げされたタチウオ (2017年1月11日撮影)

タチウオ属 *Trichiurus* sp.**テンジクタチ**

珍しさ★★

■ テンジクタチ *Trichiurus* sp. KAUM-I. 69075, 965.0 mm SL

■ テンジクタチの頭部 (KAUM-I. 69075, 965.0 mm SL)

【解説】タチウオに似るが、背鰭が黄色いことおよび口床が淡色であることで容易に識別される。タチウオより大型になり、大きいものは1.5 mを越えるものがある。タチウオ科魚類には分類学的混乱が著しいため、世界中で多く漁獲されている重要なグループであるにもかかわらず、未だ学名が定まっていない種が複数いる。本種もそのうちの1種。国内には本種の他に、オキナワオオタチ（本著未掲載）と呼ばれる全長2 m近くにまで成長する大型種も分布する。テンジクタチは琉球列島では沖合よりも沿岸域に多く、釣りの対象種でもある。タチウオと同じく、魚食性が強い。国内では和歌山県以南の太平洋沿岸や琉球列島に分布し、沖縄島では水揚げが多い。内之浦漁港では近年、漁獲量が増えている熱帯種の代表であり、タチウオほどではないものの、一年を通して一定量の水揚げがある。4 kgにもなる大型個体が漁獲された例もあるという。タチウオよりも美味と



■ 水揚げされたタチウオとテンジクタチ。テンジクタチは大型のものが多い（2015年6月12日撮影）

とされる。刺身でも美味だが、きめ細かくジューシーな身は塩焼きや蒸し料理にもよく合う。ぶつ切りにして焼いたものをご飯と一緒に炊きこんだ「タチウオ飯」は、本種のふわりとした食感に良くあい非常に美味。（小枝圭太）

カマスサワラ属 *Acanthocybium solandri* (Cuvier, 1832)

カマスサワラ 珍しさ★★



■ 水揚げされたカマスサワラ *Acanthocybium solandri* (2006年10月26日撮影)

【解説】体は円筒形を呈し、多数の黒色横帯がはいる。極めて遊泳力が強く、最大遊泳速度は77.05 kmの記録がある (Walters and Fiersteine, 1964)。カマスサワラ属の現世種は世界で本種のみが知られるが (Collette and Nauen, 1983)、岐阜県瑞浪市の瑞浪層群や岡山県新見市の備北層群から本属魚類のものと思われる化石が得られている (大江ほか, 1981; 松島, 2016)。世界中の熱帯・温帯域に分布し、日本国内においては青森県以南に広く分布する。最大尾叉長210 cm、体重83 kgに達する大型種 (Collette and Nauen, 1983; Collette, 2001)。内之浦湾においては定置網などにより多く漁獲され、全長1 m以上の大型個体も珍しくない。「沖さら」や「沖ざーら」と称される。刺身や焼き魚にして非常に美味しい魚である。(畑 晴陵)



■ 水揚げされたカマスサワラ (2004年9月15日撮影)

ソウダガツオ属 *Auxis rochei rochei* (Risso, 1810)**マルソウダ** 珍しさ ★■ マルソウダ *Auxis rochei rochei* KAUM-I. 77493, 288.0 mm SL

【解説】体は紡錘形で、体高は低い。体側上部は青色。体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。鰓蓋上部の黒色斑は、体背面の黒色域と連続する。東太平洋を除く全世界の暖海域に広く分布する。体長 55 cm 程度に成長する。内之浦では定置網で頻繁に漁獲され、その量はヒラソウダよりも多い。身は血合筋が多く、傷みやすく、また生臭さが強いいため、市場価値はヒラソウダよりも低い。宗田節の原料となる。(畑 晴陵)

ソウダガツオ属 *Auxis thazard* (Lacepède, 1800)**ヒラソウダ** 珍しさ ★■ ヒラソウダ *Auxis thazard* KAUM-I. 82760, 221.2 mm SL

【解説】体は紡錘形で、やや側扁する。体背面は黒く、体側上部は青色。体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。鰓蓋上部に黒色斑がある。東太平洋を除く全世界の暖海域に広く分布する。体長 60 cm 程度に成長する。内之浦湾では定置網で頻繁に漁獲される。マルソウダと比較して血合筋が少ないため、傷みにくく、また味も良いとされる。刺身などにして食される。(畑 晴陵)



■ ヒラソウダ *Auxis thazard* KAUM-I. 77494, 245.0 mm SL

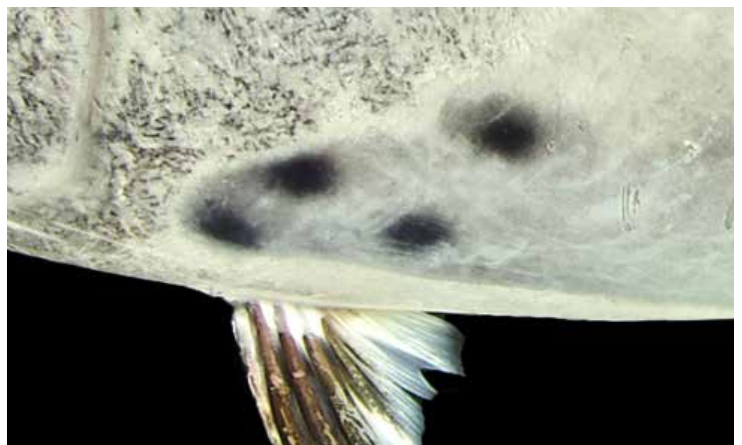
スマ属 *Euthynnus affinis* (Cantor, 1849)

スマ 珍しさ★★

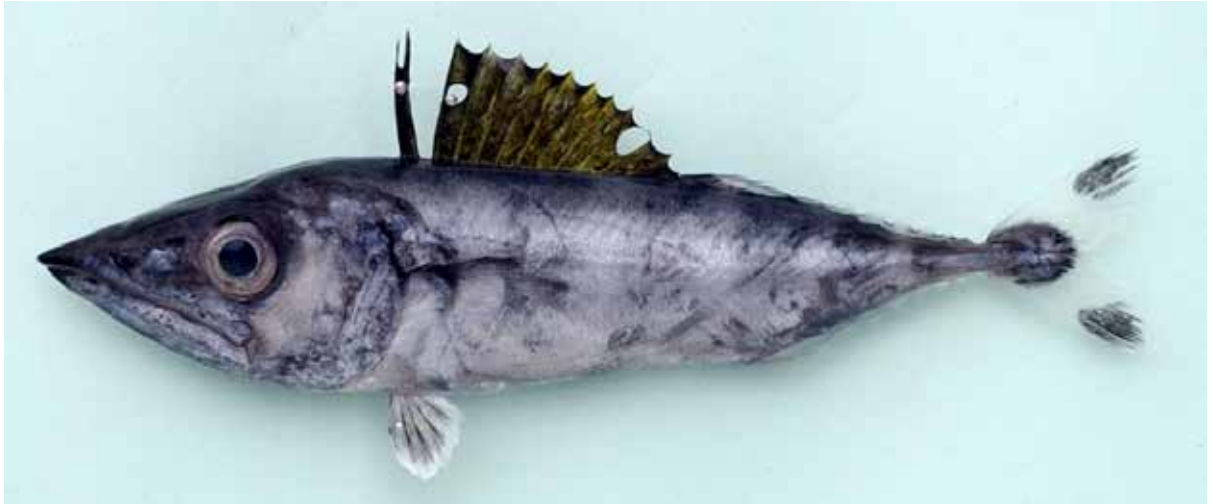


■ スマ *Euthynnus affinis* KAUM-I. 95095, 354.9 mm SL

【解説】体はやや側扁した紡錘形。体背面は黒色を呈し、体側後部の上部には波状斑が多数はいる。胸鰭下方に黒色斑がはいるが、その個数には変異がある。幼魚は体高が低く、胸鰭下方の黒色斑も数が少ない。内之浦湾においては定置網によって時折漁獲され、「ホシガツオ」と称される。身は淡い桃色を呈し、脂肪分に富み、極めて美味。流通することは多くないが、その味の良さからマグロの代替魚としても期待されており、和歌山県や愛媛県においては養殖もなされている(稲生・橘、2016；清家、2017)。(畑 晴陵)



■ スマの黒色斑の数は個体によって異なる (KAUM-I. 95095)

イソマグロ属 *Gymnosarda unicolor* (Rüppell, 1836)**イソマグロ** 珍しさ ★★★★★■ イソマグロの幼魚 *Gymnosarda unicolor* (2007年6月7日撮影)

【解説】体は紡錘形を呈し、吻がやや長い。体背面は青みがかった黒色を呈し、体側は銀白色。目立った模様はない。両顎に発達した円錐歯が1列に並ぶ。幼魚は吻端が尖り、第1背鰭が黄色を呈する。マグロ属魚類の幼魚は吻端が丸いため、本種とは容易に識別が可能である。沿岸海域の表層付近を数個体の群れで遊泳する。最大で尾叉長2 m、体重131 kgの個体が韓国で釣獲された記録がある (Collette and Nauen, 1983)。肉は淡い桃色を呈し、刺身などで食される。薩南諸島においては延縄などによって尾叉長1 m以上の大型個体が多数漁獲され、「トカキン」などと称され取引される。しかし、内之浦湾を含む鹿児島県本土においては稀な魚であり、2007年6月7日に混獲された写真の幼魚が確認されたのみ。(畑 晴陵)

カツオ属 *Katsuwonus pelamis* (Linnaeus, 1758)**カツオ** 珍しさ ★★★★★■ 水揚げされたカツオ *Katsuwonus pelamis* (2009年11月24日撮影)

【解説】体背面は青みがかった黒色を呈し、体側は生時、一様に銀色。死後、腹部に細い黒色縦帯が数本現れる。また、漁獲直後など、強い興奮時には、体全体に不明瞭な黒色横帯が数本現れる (写真の個体にはない)。世界中の暖海に分布し、広範な海域を回遊することが知られるが、その経路に関しては不明な点が多い。カツオが日本に現れる経路は、東シナ海から黒潮流路に沿うもの、太平洋から九州・パラオ海嶺に沿うもの、伊豆諸島・小笠原列島に沿うものの3経路があり、また20度以下の冷水塊を避けて回遊することが知られる (清藤、2014)。食用魚として極めて重要であり、刺身やたたきなどにされるほか、多くが鰹節に加工される。トカラ列島や奄美群島においては延縄によって多数が漁獲され、枕崎など県内各地に水揚げされる。内湾環境にある内之浦湾に進入することは少ないと思われ、極めて稀に定置網に入る程度であり、内之浦漁港に水揚げされることも少ない。(畑 晴陵)

グルクマ属 *Rastrelliger kanagurta* (Cuvier, 1816)

グルクマ 珍しさ ★★★★★

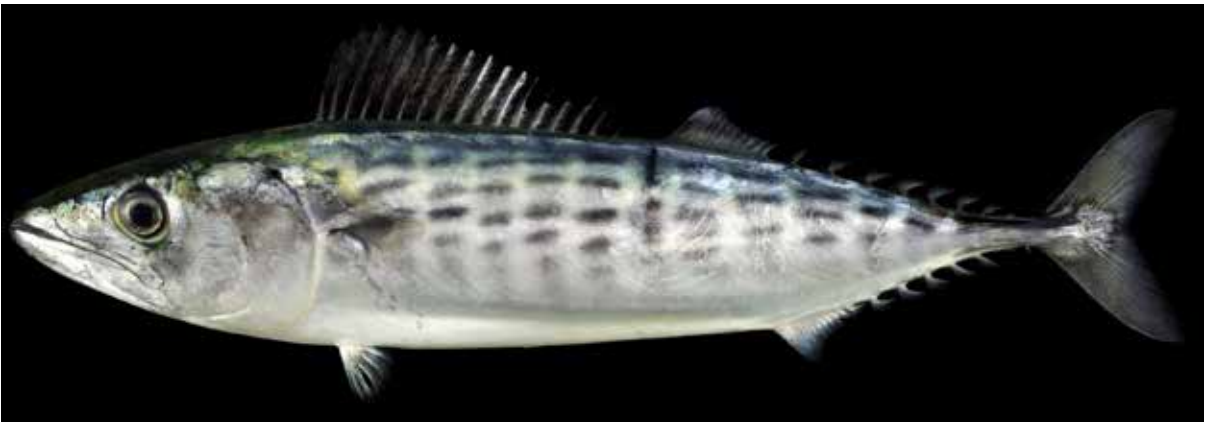


■ グルクマ *Rastrelliger kanagurta* KAUM-I. 82835, 252.6 mm SL

【解説】体は楕円形で、側扁する。体側上部は青緑色を呈し、体側中部から体腹面にかけては一様に銀白色。口は非常に大きく、開けたまま泳ぐことで浮遊するプランクトンを捕食する。インド・西太平洋に広く分布し、全長 40 cm 程度に達する。内之浦湾においては極めて稀少で、本調査においても畑・本村（2016c）によって詳細に報告された写真の個体 1 個体（KAUM-I. 82835）が得られたのみ。鹿児島県においては希少な魚とされてきたが、近年、県北部における頻繁な出現が報告されている（畑ほか、2015；畑・本村、2016c）。なお、和名である「グルクマ」はもともと沖縄県における呼称であり、同県においては数多く漁獲され、食用に供される。足が早く、サバ科魚類としては体が柔らかいものの、鮮度のいいものの刺身は非常に美味である。（畑 晴陵）

ハガツオ属 *Sarda orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)

ハガツオ 珍しさ ★★★



■ ハガツオ *Sarda orientalis* KAUM-I. 86538, 142.9 mm SL

【解説】体はやや細長く、側扁する。両顎には 1 列の鋭く尖った円錐歯をそなえる。体は一様に銀白色で、体背面は青みがかった黒色。体側上部には細い濃青色縦帯が多数はいる。幼魚では、体側に多数の黒色横帯がはいる。成長に伴い横帯が破線状となり、次第に縦帯を形成する。インド・太平洋の広域に分布する。鹿児島県においては吻部が長いことから「キツネ」、あるいは縞模様があることから「シマガツオ」と称されることが多いが、シマガツオ科魚類との類縁性はない。内之浦湾では定置網により漁獲され、「ハガツ」と称される。身は淡いピンク色で、刺身にして美味である。写真の標本は幼魚であり、大型個体は市場に並ぶ。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶハガツオ。成魚の体には黒色縦帯が多数ある（2011年12月17日撮影）

サバ属 *Scomber australasicus* Cuvier, 1832

ゴマサバ 珍しさ★



■ ゴマサバ *Scomber australasicus* KAUM-I. 73988, 171.4 mm SL

【解説】体はあまり側扁せず、円筒形に近い。体背面は青みがかり、体側中央から体腹面にかけては銀白色。背面には虫食い模様のはいる。大型個体では体側下部に細かい小黑点のはいるが、小型個体ではこれらの黒点は不明瞭またはみられない。マサバと比較して第1背鰭と第2背鰭の間隔が大きい。全長50 cm程度に成長し、日本各地に広く分布する。マサバと比較して温暖な海域に多い傾向がある。内之浦湾では幼魚から成魚まで定置網や巻網によって大量に漁獲され、大型個体は漁獲直後に脊椎を折り、鮮度の良い状態を保ったまま出荷される。小型個体は「サバ子」と称され、養殖餌料や釣り餌に用いられる。（畑 晴陵）



■ ゴマサバ KAUM-I. 31351, 204.0 mm SL

サバ属 *Scomber japonicus* Houttuyn, 1782

マサバ 珍しさ★★



■ マサバ *Scomber japonicus* KAUM-I. 98176, 277.5 mm SL

【解説】体はやや側扁する。体背面は青みがかり、体側中央から体腹面にかけては銀白色。背面には虫食い模様がはいる。体サイズを問わず、体側下部に小黑点がない。フィリピン以北の西太平洋、ハワイ諸島、およびアメリカ・カリフォルニア州沿岸に分布し、ゴマサバよりも低水温を好む（中村、1997a）。内之浦湾においても大量に漁獲されるものの、その量はゴマサバと比較してやや少ない。「平サバ」、「本サバ」と称される。大型個体、小型個体共にゴマサバと同様に利用される。ゴマサバと共に刺身や酢締めで極めて美味。（畑 晴陵）



■ マサバ *Scomber japonicus* KAUM-I. 74766, 204.1 mm SL (上), KAUM-I. 43928, 188.7 mm SL (下)



■ 市場に並ぶ多量のマサバ
(2017年1月11日撮影)

サワラ属 *Scomberomorus niphonius* (Cuvier, 1832)

サワラ 珍しさ ★



■ サワラ *Scomberomorus niphonius* KAUM-I. 93899, 378.0 mm SL

【解説】体は細長く、側扁する。体背面は暗い青緑色を呈し、体側から体腹面にかけて銀色を呈する。体側中央に2～3列の水玉模様が並ぶ。和名は体が薄いことにちなみ、小型個体は「サゴシ（狭腰）」、大型個体は「サワラ（狭腹）」と称される。日本近海においては1980年代までは東シナ海がおもな漁場であったが、1990年代以降減少し、日本海における漁獲がおもとなっている。日本海においては発生後3年で尾叉長約80 cm、体重3.8 kgに達し、尾叉長60 cm程度で成熟、東シナ海に移動して産卵するとされている（京都府農林水産技術センター海洋センター、2012）。内之浦湾においては定置網によって「サゴシ」、「サワラ」ともに多数が頻繁に漁獲される。関西や山陽地域では九州以上に盛んに消費され、西京焼きなどでおもに賞味されるが、鮮度の良いものは刺身でも極めて美味である。（畑 晴陵）

マグロ属 *Thunnus albacares* (Bonnaterre, 1788)

キハダ 珍しさ ★★★★★



■ 市場に並ぶキハダ *Thunnus albacares* (2007年2月20日撮影)

【解説】体側中部と胸鰭を除く各鰭が金色を呈し、成魚では第2背鰭と臀鰭が伸長する。腹部には白色の細い斜帯が多数ある。昼間は水深50 m付近に多く、稀に200 m以深にも現れるが、夜間は表層に多く出現することが知られる(太田ほか、2002)。キュウリエソやハダカイワシ類など、遊泳性深海魚を多く餌とすることが知られる(近藤、2008)。世界中の暖海に広く分布し、トカラ列島や奄美群島においては延縄により多数が漁獲されるが、内之浦湾における漁獲は少なく、稀に定置網による漁獲が確認される程度。「キハダマグロ」の名で流通することが多いために勘違いされることもあるが、標準和名はキハダ。(畑 晴陵)



■ 市場に並ぶキハダ
(2011年5月21日撮影)

マグロ属 *Thunnus orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)**クロマグロ** 珍しさ★★★★■ 市場に並ぶクロマグロ *Thunnus orientalis* (2005年12月14日撮影)

【解説】胸鰭が短く、その後端は第2背鰭起部直下に達しないことにより、日本産同属他種と容易に識別される。幼魚の体側下部には細い多数の白色横帯がはいる。北緯5～40度にかけての太平洋に広く分布する。日本近海から太平洋を横断してカリフォルニア近海まで回遊したのち、再び日本近海に戻る、という広範な回遊をおこなう個体の存在が知られる（岩井ほか、1965；中村、1997b）。言わずと知れた高級魚であり、トロや赤身と称される筋肉部のほか、内臓や眼球なども食される。鮮度が良いものは血合いも美味。大型個体の皮を湯引きにしたものも極めて美味である。乱獲による資源量の低下が懸念されており、近年では養殖も進められている。内之浦湾における漁獲は少なく、またその多くが体長1m未満の幼魚（鹿児島県内では一般に10kg未満のマグロ類を「シビ」と総称するが、クロマグロの幼魚に関しては「メジ」、「メジマグロ」、「ヨコワ」と称する）であるが、時として10kg以上のやや大きめの個体が水揚げされることもある。ただし、本種は200kgをゆうに越える大型種であり、400kgを越える個体も記録されているため、内之浦で水揚げされる個体は本種としてはまだ小型魚といえる。ちなみに日本産マグロ属5種のなかで本種は唯一和名に「マグロ」が含まれる種である。（畑 晴陵）

■ 水揚げされたクロマグロ *Thunnus orientalis* の小型個体(2012年10月2日撮影)



■ 水揚げされたクロマグロ *Thunnus orientalis* の小型個体(2004年11月18日撮影)

マグロ属 *Thunnus tonggol* (Bleeker, 1851)

コシナガ 珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたコシナガ *Thunnus tonggol* (2009年11月24日撮影)

【解説】体背面は青みがかった黒色を呈し、クロマグロに似るが、胸鰭が長く、その後端が第2背鰭起部直下に達する(クロマグロでは達しない)こと、体側下部に前後方向に長い楕円形白色斑が多数散在する(幼魚の体側下部に背腹方向に長い白色斑がはいる)ことなどにより識別される。また、マグロ属の中では唯一、鰹(うきぶくろ)をもたない。最大でも全長1 m程度の小型種で、60 cm程度で成熟することが知られる(Griffiths et al., 2011)。吸水卵を含む卵巣をもつ個体が漁獲されていること、発生後33~132日とみられる個体が得られていることから、日本近海における産卵の可能性が指摘されている(伊藤ほか、1999)。近年は日本海西部において多数が漁獲されているが(小林、2004; Mohri, 2014)、太平洋に面した内之浦湾における漁獲は極めて稀。味は良いものの、他のマグロ属と比較して流通量は極めて少なく、また小型種のためマグロ属としては安価に扱われる。(畑 晴陵)



■ コシナガの特徴である腹部の白色斑(2009年11月24日撮影)

ヒラメ属 *Paralichthys olivaceus* (Temminck & Schlegel, 1846)**ヒラメ** 珍しさ★★■ ヒラメ *Paralichthys olivaceus* KAUM-I. 74768, 159.2 mm SL

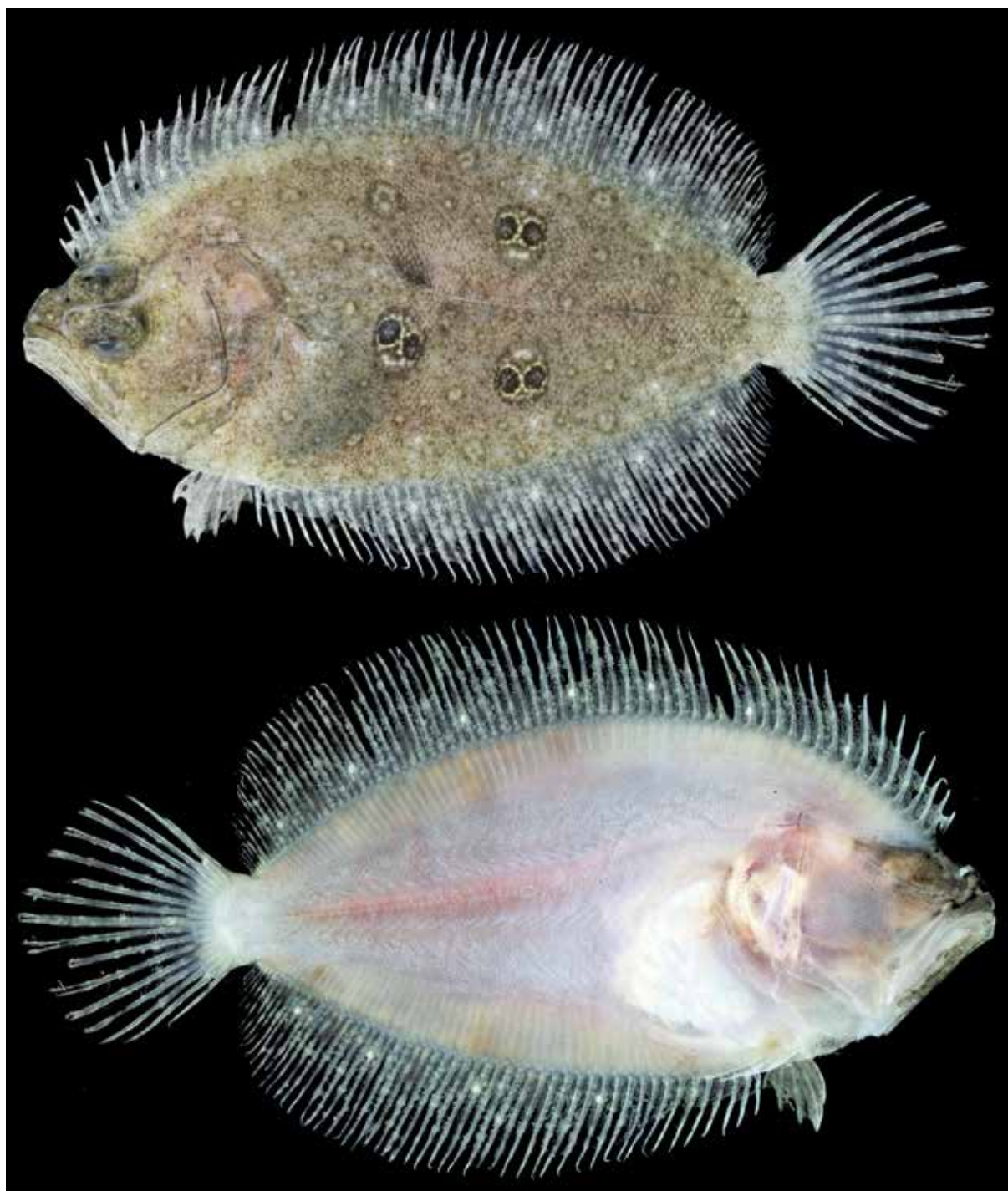
【解説】体は著しく側扁し、口は大きい。体は前後方向に長い楕円形に近い形状を呈する。仔魚は水深 25 m 付近に多く、動物プランクトンをおもな餌とする。着底後、全長 110 mm 以下の個体ではアミ類を、その後 140 mm 未滿にかけてはアミ類に加えカタクチイワシなどの小型魚類を餌とするようになり、その後はさらに魚食性が強くなることが知られている（石田ほか、1977；桑原・鈴木、1982；山田ほか、1998）。天然魚の漁獲は北海道や青森県において盛んであるが、養殖個体に関しては、鹿児島県は大分県と並ぶ日本でも有数の生産県である。内之浦湾においては釣りなどによって漁獲され、活魚として市場にだされることが多い。いわずとした高級魚で、生食でも火を通して美味。（畑 晴陵）



■ ヒラメの大型個体（2006年2月8日撮影）

ガンゾウビラメ属 *Pseudorhombus dupliciocellatus* Regan, 1905

メガレイ 珍しさ ★★★★★



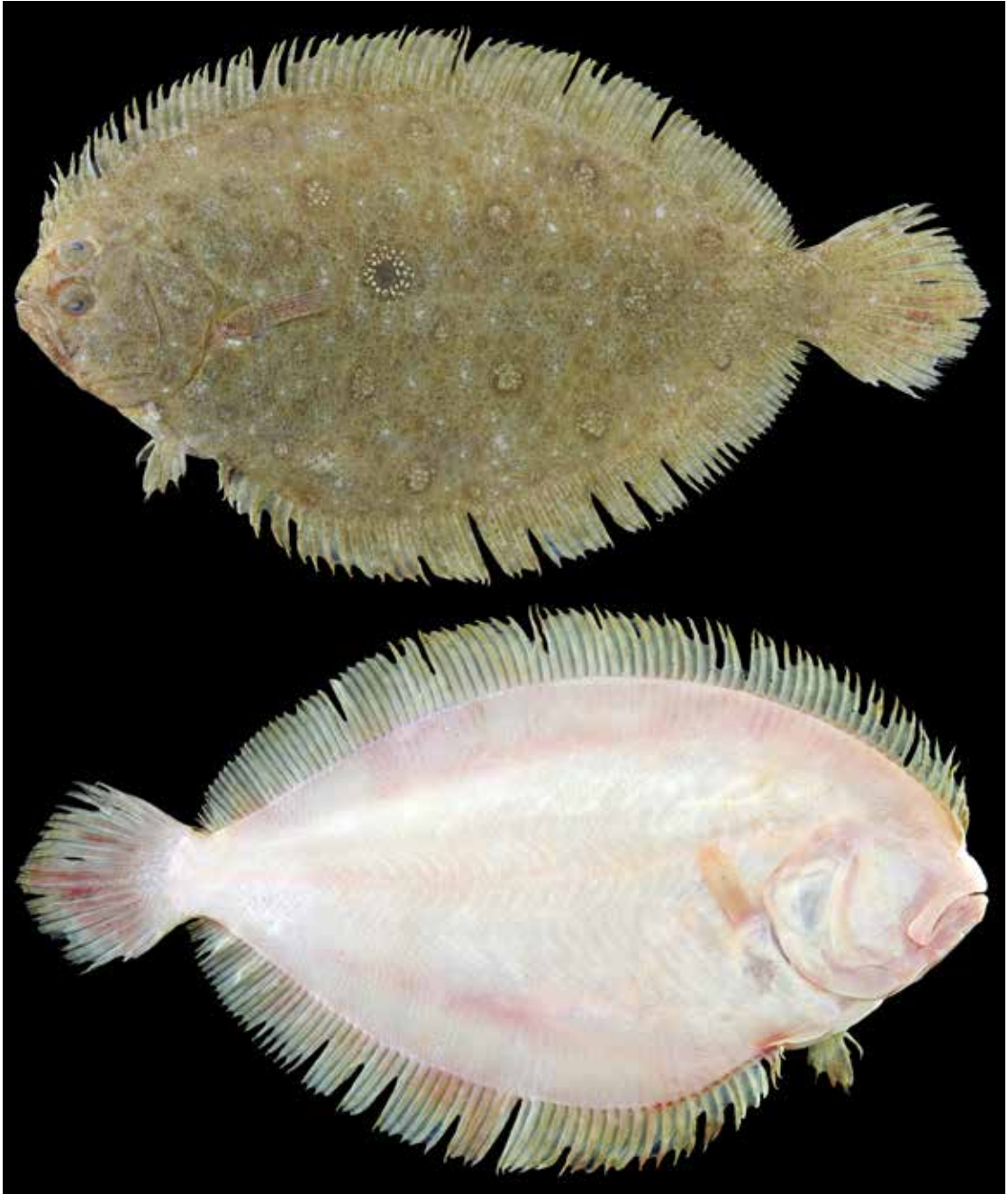
■ メガレイ *Pseudorhombus dupliciocellatus* KAUM-I. 82784, 37.9 mm SL

【解説】有眼側の体側に、2個の褐色斑が1つになった眼状斑が複数ある（写真の個体では3つ）。鰓耙は他の多くの同属他種と異なり櫛状ではなく、掌状。その独特の色彩から、同属他種とは容易に識別される。国内では静岡県から鹿児島県にかけての太平洋沿岸と、山口県から鹿児島県にかけての日本海・東シナ海沿岸から報告されている。内之浦湾においては非常に稀な種と思われ、本調査でも写真の個体のみが確認された。（畑 晴陵）

ガンゾウビラメ属 *Pseudorhombus levisquamis* (Oshima, 1927)

台湾ガンゾウビラメ

珍しさ ★★★★★



■ 台湾ガンゾウビラメ *Pseudorhombus levisquamis* KAUM-I. 98088, 309.5 mm SL

【解説】有眼側の側線屈曲部に白色に縁取られた黒色斑がある。有眼側の体側鱗のほとんどは円鱗であるが、体背縁と体腹縁の付近のもののみ弱い楕鱗。無眼側の体側鱗は一様に円鱗。有眼側の体側に1眼状斑を有することで本種に酷似するガンゾウビラメ（本書未掲載）は、有眼側の体側鱗が一様に楕鱗であることにより本種と識別される。水深30 m以浅に生息し、日本国外では台湾、中国南部から記録がある。日本国内においては内之浦湾のほか、これまで相模湾、和歌山県と高知県、鹿児島県志布志湾から記録があるのみ（大橋・本村、2011；尼岡、2016）。内之浦湾においては稀な種であり、上記個体が確認されたのみ。本種を含めて、ガンゾウビラメ属各種は内之浦において、「かり」と称され、大型個体は食用に供され、活魚として流通することが多い。（畑 晴陵）

ガンゾウビラメ属 *Pseudorhombus pentophthalmus* Günther, 1862

タマガンゾウビラメ 珍しさ ★★★

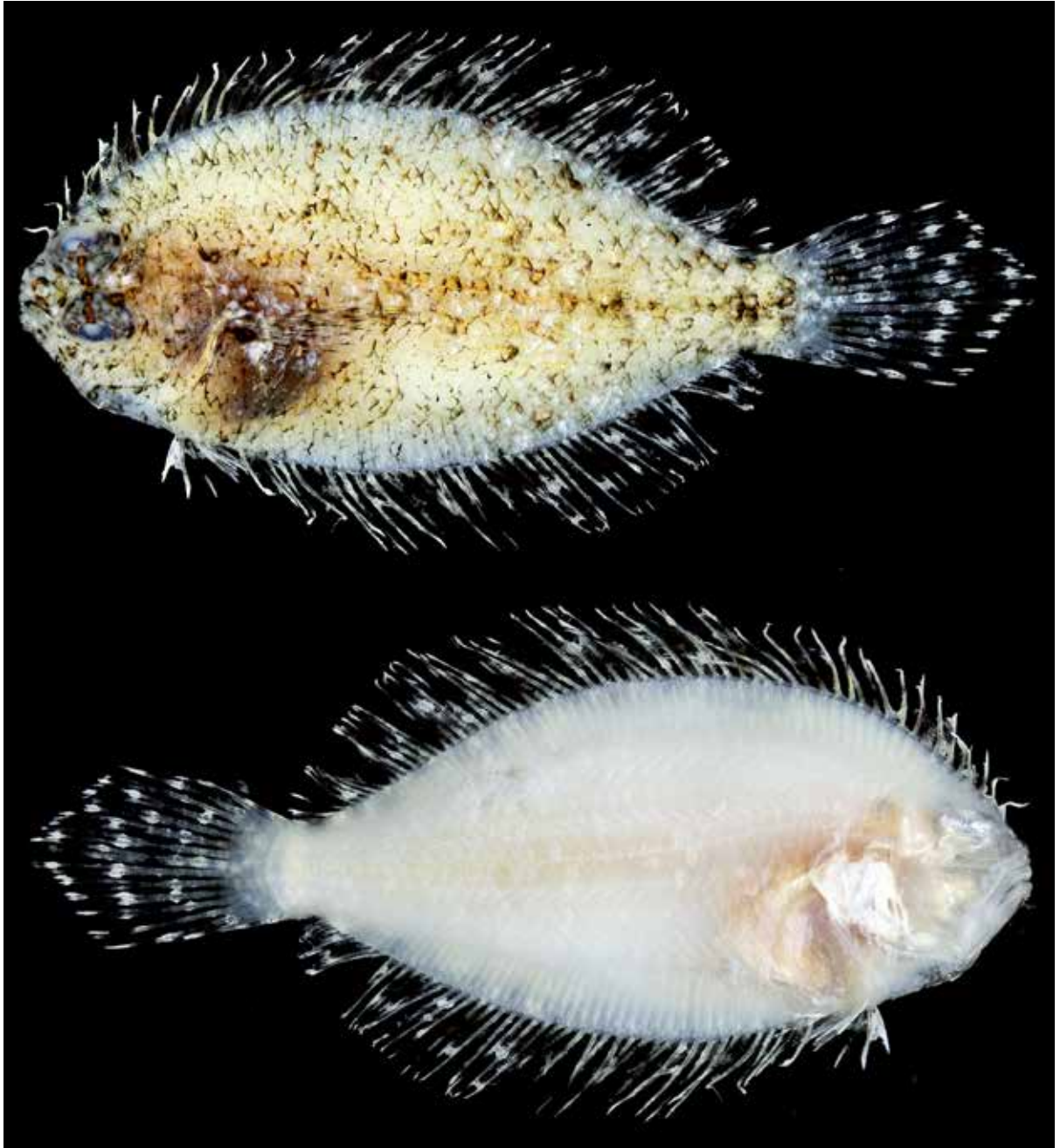


■ タマガンゾウビラメ *Pseudorhombus pentophthalmus* KAUM-I. 14724, 93.6 mm SL

【解説】有眼側の体側の側線上方に3個、下方に2個の黒色斑があるが、斑紋が不明瞭な個体や欠如した個体など様々なタイプが認められている（尼岡、2016）。よく似たヘラガンゾウビラメ（本書未掲載）の有眼側の体側には眼状斑や輪状斑が多数散在することにより識別される。北海道から九州南岸にかけての太平洋沿岸、日本海・東シナ海沿岸、および瀬戸内海に分布する。国外では朝鮮半島、台湾、中国、インドネシアのジャワ島・スマトラ島に分布する。内之浦湾では稀に定置網により漁獲されるが、最大でも体長15 cm程度の小型種であり、食用となることはない。（畑 晴陵）



■ タマガンゾウビラメの頭部
(KAUM-I. 14724, 93.6 mm SL)

アラメガレイ属 *Tarphops oligolepis* (Bleeker, 1858)**アラメガレイ** 珍しさ ★★★■ アラメガレイ *Tarphops oligolepis* KAUM-I. 55506, 40.0 mm SL

【解説】有眼側の体側には淡褐色斑が散在し、体側鱗は剥がれにくい。同属のユメアラメガレイ（本書未掲載）は体側が一様に茶褐色を呈し、体側鱗が剥がれやすいことなどにより、アラメガレイと識別される。口は小さく、上顎後端は眼の中央に達しない。国内における分布は広く、茨城県以南の太平洋沿岸、北海道から九州南岸にかけての日本海・東シナ海沿岸、および瀬戸内海に分布する。内之浦湾では定置網により散発的に得られるが、最大でも体長6 cm程度の小型種であり、食用となることはあまりない。岡山県では10個体ほど並べて1枚の干物にし、この製品を「ツンコガレイ」と呼び、炙って食すという（尼岡、2016）。（畑 晴陵）

ホシダルマガレイ属 *Bothus myriaster* (Temminck & Schlegel, 1846)

ホシダルマガレイ

珍しさ ★★★★★



■ ホシダルマガレイ *Bothus myriaster* KAUM-I. 98030, 58.9 mm SL, メス

【解説】体側有眼側は淡い黄土色を呈し、側線直走部に暗色斑がある。両眼は大きく離れ、大型個体ほど顕著。有眼側の体側鱗は縁辺部のものを除いて円鱗。胸鰭は著しく伸長する。オスは無眼側の体側に非常に細かい暗色帯が多数はいる。最大で体長 27 cm に達し（尼岡、2016）、幼魚や若魚の体は円形に近いが、成長に伴い楕円形となる。若魚は水深 30 m ほどの浅所に多く生息するが、成魚では 150 m 以深にも現れる（尼岡、1997）。日本国外では韓国、台湾、ベトナム、フィリピン、インドネシアのスマトラ島、オーストラリアのロードハウ島、およびアフリカ東岸から知られる。国内においては島根県沖、山口県日本海沿岸、相模湾から宮崎県にかけての太平洋沿岸、および屋久島南東沖から報告されており、本報告が鹿児島県本土における本種の初めての記録となる。（畑 晴陵）



■ ホシダルマガレイの無眼側（KAUM-I. 98030, メス）

コウベダルマガレイ属 *Crossorhombus kobensis* (Jordan & Starks, 1906)

コウベダルマガレイ

珍しさ ★★★★★

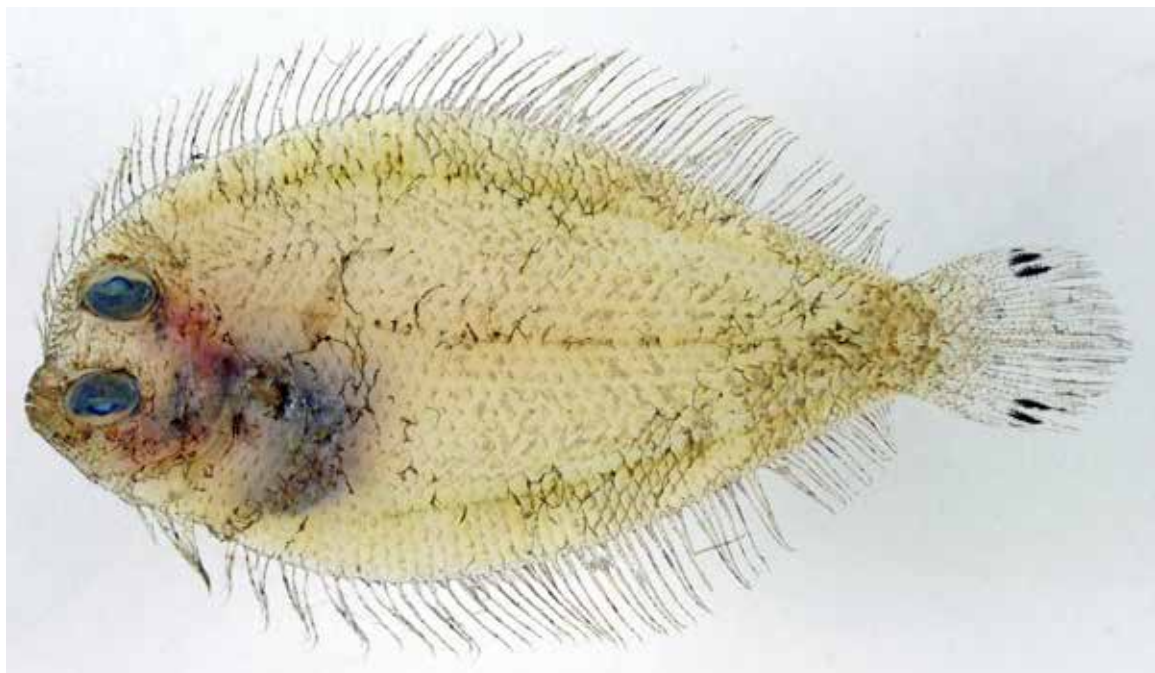


■ コウベダルマガレイ *Crossorhombus kobensis* KAUM-I. 74767, 55.6 mm SL, オス

【解説】有眼側の体側は暗褐色。胸鰭最上部の軟条は糸状に伸長する。オスの眼隔域には小青色斑が散在する。オスの無眼側には濃紫色斑がある。この濃紫色斑の大きさ・形状は種によって異なり、本種では鰓蓋よりも後方全ての無眼側体側を覆うが、カネコダルマガレイ（本書未掲載）では小さく、無眼側の一部のみを覆う。また、カチドキダルマガレイ（本書未掲載）においては、濃紫色斑がV字状を呈する。房総半島以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海沿岸・東シナ海沿岸、大隅諸島、伊豆諸島、八丈島から記録がある。なお、コウベダルマガレイは内之浦湾においては極めて稀な種とみられ、本研究においても写真の1個体のみが得られた。（畑 晴陵）

ダルマガレイ属 *Engyprosopon grandisquama* (Temminck & Schlegel, 1846)

ダルマガレイ 珍しさ★★

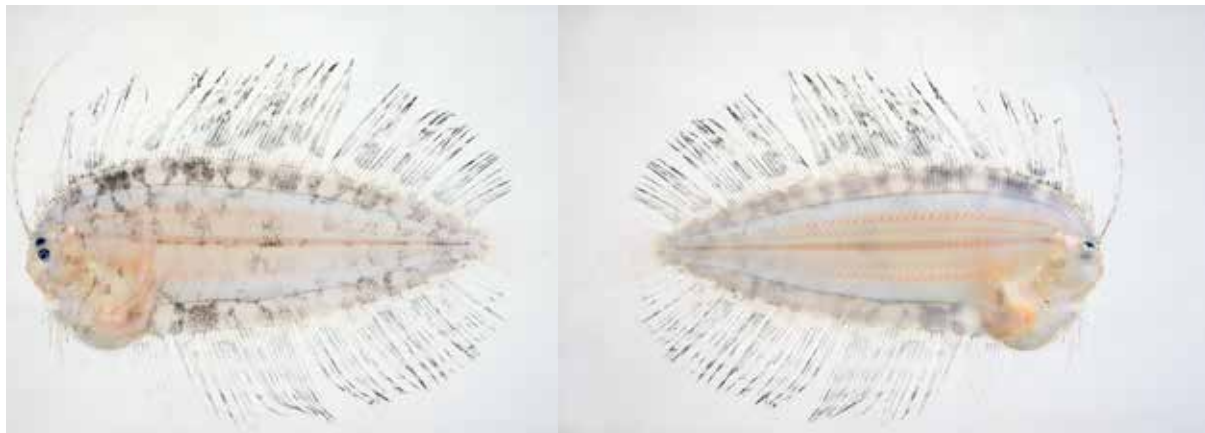


■ ダルマガレイ *Engyprosopon grandisquama* KAUM-I. 44854, 63.1 mm SL, メス

【解説】尾鰭に1対の黒色斑がある。有眼側は淡褐色を呈し、鱗は剥がれやすい。両眼間隔域は平坦で、広い（オスがより広い）。体高が高く、体長の50%を越え、体形は丸みを帯びる。よく似たチカメダルマガレイ（本書未掲載）は体高が低く、体高が体長の50%未満であるほか、両眼間隔が狭いことなどにより識別される。国内では兵庫県香住以南の日本海・東シナ海沿岸と、相模湾以南の太平洋沿岸に分布する。水深30 m以浅の砂泥底に生息し、内之浦湾においても頻繁に定置網に入る。最大でも体長11 cm程度の小型種であり、練り物の原料や、乾物とされる程度（尼岡、2016）。（畑 晴陵）

ヤリガレイ属 *Laeops kitaharae* (Smith & Pope, 1906)**ヤリガレイ** 珍しさ★★■ ヤリガレイ *Laeops kitaharae* KAUM-I. 89498, 74.3 mm SL

【解説】成魚の体は前後方向に細長い楕円形を呈し、有眼側の体色は一律に茶褐色。両顎歯は無眼側にのみそなえる。側線鱗数は93～105。前鰓蓋骨は後方に膨出せず、直角に近い角度で屈曲する。ホシヤリガレイ（本書未掲載）は体側に小黑斑が散在すること、前鰓蓋骨下縁が膨出することなどにより識別される。仔魚の体は白色半透明で、不規則な黒色斑が散在する。背鰭と臀鰭の軟条が成魚と比較して著しく長い。内之浦湾においては幼魚が定置網に数多く得られているが、成魚は確認されていない。成魚は水深70 m以深に多く生息することから、成長に伴い志布志湾やさらに沖合などの深場へと移動しているものと思われる。内之浦における利用はない。得られた7.5 cmの個体では無眼側から有眼側へと眼が移動していたが、6.9 cmの個体（写真は次ページ）では移動していなかった（畑 晴陵）



■ ヤリガレイ *Laeops kitaharae* KAUM-I. 86542, 69.4 mm SL

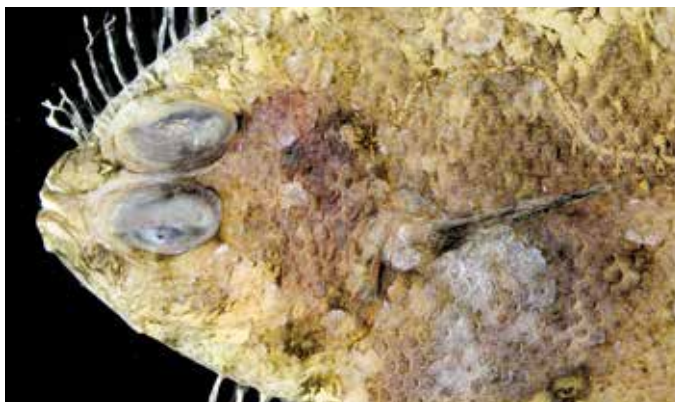
イイジマダルマガレイ属 *Psettina ijimae* (Jordan & Starks, 1904)

イイジマダルマガレイ 珍しさ ★★★★★



■ イイジマダルマガレイ *Psettina ijimae* KAUM-I. 60806, 53.5 mm SL

【解説】有眼側の体側は淡褐色を呈し、輪郭の不明瞭な白色斑と黒色斑が散在する。体背縁と体腹縁の黒色斑は背鰭と臀鰭に及ぶ。尾鰭に暗色横帯がある。その特徴的な色彩から、近縁種との識別は容易。国外では韓国、台湾、中国の広東省・海南島、およびインドネシアから記録がある。これまで国内からは駿河湾以南の太平洋沿岸、新潟県から長崎県橋湾までの日本海・東シナ海沿岸、鹿児島湾からの記録がある。内之浦湾においては稀な種と思われる、本調査でも写真の個体のみが確認された。(畑 晴陵)



■ イイジマダルマガレイの頭部 (KAUM-I. 60806)

メイタガレイ属 *Pleuronichthys cornutus* (Temminck & Schlegel, 1846)**ナガレメイタガレイ** 珍しさ ★★★■ ナガレメイタガレイ *Pleuronichthys cornutus* KAUM-I. 98019, 119.2 mm SL

【解説】体は一様に茶褐色を呈し、焦げ茶色の小斑点が散在する。メイタガレイ *Pleuronichthys lighti* Wu, 1929（本書未掲載）とは形態的に非常によく似ており、識別が困難であるが、体側中央に並ぶ縦列鱗数と側線下方横列鱗数がメイタガレイではそれぞれ 88 以上と 59 以上であるのに対し、ナガレメイタガレイではそれぞれ 87 以下と 57 以下であること、有眼側の黒斑がメイタガレイでは不定形であるのに対し、ナガレメイタガレイでは小円形を呈するものが多いことなどによって識別される（Suzuki et al., 2009; Yokogawa et al., 2014; 尼岡, 2016）。メイタガレイとナガレメイタガレイに適用すべき学名は長らく不明であったが、Suzuki et al. (2009) はメイタガレイに対しては *P. cornutus* を適用する一方で、ナガレメイタガレイは適用すべき学名のない未記載種であり、*P. japonicus* Suzuki, Kawashima & Nakabo, 2009 として新種記載をおこなった。しかしその後、Yokogawa et al. (2014) によって、*P. cornutus* はナガレメイタガレイに適用すべき学名であり、メイタガレイには Suzuki et al. (2009) において *P. cornutus* の新参異名とされた *P. lighti* を適用すべきことが明らかにされた。内之浦湾においては定置網により普通に得られるものの、最大でも体長 20 cm 程の小型種で肉量に乏しいことから、内之浦では食用となることはほとんどない。（畑 晴陵）

ツノウシノシタ属 *Aesopia cornuta* Kaup, 1858

ツノウシノシタ 珍しさ ★★★



■ ツノウシノシタ *Aesopia cornuta* KAUM-I. 74758, 149.5 mm SL

【解説】有眼側の体側には黒色横帯が多数はいる。背鰭第1軟条は太く、伸長する。また、両眼間隔域は隆起し、無鱗。背鰭と尾鰭、臀鰭と尾鰭はどちらも連続する。インド・西太平洋に広く分布し、国内では千葉県以南の太平洋沿岸と、山口県以南の日本海・東シナ海沿岸から記録がある。一般的に水深100 m前後の砂泥底に多く生息するとされるが、内之浦湾では水深30～40 mに設置された定置網に頻繁に得られる。最大でも体長20 cm程度の小型種であることから、食用にされることはほとんどないと思われる。(畑 晴陵)



■ ツノウシノシタの無眼側 (KAUM-I. 73962)



■ ツノウシノシタ *Aesopia cornuta* KAUM-I. 73962, 118.1 mm SL

トビササウシノシタ属 *Aseraggodes kobensis* (Steindachner, 1896)

トビササウシノシタ

珍しさ ★★★★★



■ トビササウシノシタ *Aseraggodes kobensis* (2007年2月15日撮影)

【解説】有眼側は一様に茶色を呈し、不明瞭な濃褐色斑が散在する。有眼側の前鼻管は短く、下眼の前縁に達しない。無眼側は一様に乳白色。体形などはモヨウウシノシタ(本書未掲載)に類似するが、有眼側に網目状の斑紋がない(モヨウウシノシタでは有眼側体側縁辺部に網目模様がある)ことで識別できる。水深 100 m 近くの砂泥底に多く生息し、水深の浅い内之浦湾において漁獲されることは極めて稀。最大でも体長 10 cm 程度の小型種であり、食用となることはないものと思われる。(畑 晴陵)

ササウシノシタ属 *Heteromycteris japonica* (Temminck & Schlegel, 1846)

ササウシノシタ 珍しさ ★★★



■ ササウシノシタ *Heteromycteris japonica* KAUM-I. 74755, 63.9 mm SL

【解説】口が鉤状に著しく湾曲し、有眼側の体側には黒色と白色の小斑点が散在する。本種と同様に口が著しく湾曲するモンツキウシノシタ（本書未掲載）は有眼側体側に馬蹄状の暗色斑が3対あることで、本種と識別される。青森県から九州南岸にかけての太平洋・日本海・東シナ海沿岸、および瀬戸内海に広く分布する。国外では韓国、中国の広西省、および海南島から記録がある。内之浦湾においては定置網によって時折得られるものの、最大でも体長 15 cm 程度の小型種であることから、食用魚として扱われることはほとんどないものと思われる。（畑 晴陵）



■ ササウシノシタ *Heteromycteris japonica* KAUM-I. 83539, 61.9 mm SL

セトウシノシタ属 *Pseudaesopia japonica* (Bleeker, 1860)

セトウシノシタ 珍しさ ★★★★★



■ セトウシノシタ *Pseudaesopia japonica* (2013年7月23日撮影)

【解説】有眼側の体側の地色は淡褐色で焦げ茶色の横帯が多数ある。各横帯の中央部の色は淡い褐色。尾鰭後縁は黒色。尾鰭は背鰭・臀鰭と基底部付近でのみ連続する。有眼側の前鼻管は長く、下眼の前縁よりも後方に達する。日本のほか朝鮮半島南岸、および台湾に分布する。国内では北海道から九州南岸にかけての日本・東シナ海・太平洋沿岸、瀬戸内海、および東シナ海大陸棚域に広く分布する。水深 100 m 前後の砂泥底におもに生息し、水深の浅い内之浦湾において漁獲されることは極めて稀。体長 15 cm 程度の小型種であり、市場に並ぶことはないものと思われる。(畑 晴陵)

シマウシノシタ属 *Zebrias zebrinus* (Temminck & Schlegel, 1846)

シマウシノシタ 珍しさ★★



■ シマウシノシタ *Zebrias zebrinus* KAUM-I. 83536, 143.7 mm SL

【解説】有眼側の体側には黒色横帯が多数はいる。背鰭軟条数は68～82、臀鰭軟条数は56～70。青森県から九州南岸にかけての日本海・東シナ海・太平洋沿岸、および瀬戸内海に広く分布する。内之浦湾においても定置網により頻繁に漁獲されるものの、ツノウシノシタと同様、最大でも体長20 cm程度の小型種であることから、食用にされることはなく、もっぱら養殖餌料となる。(畑 晴陵)

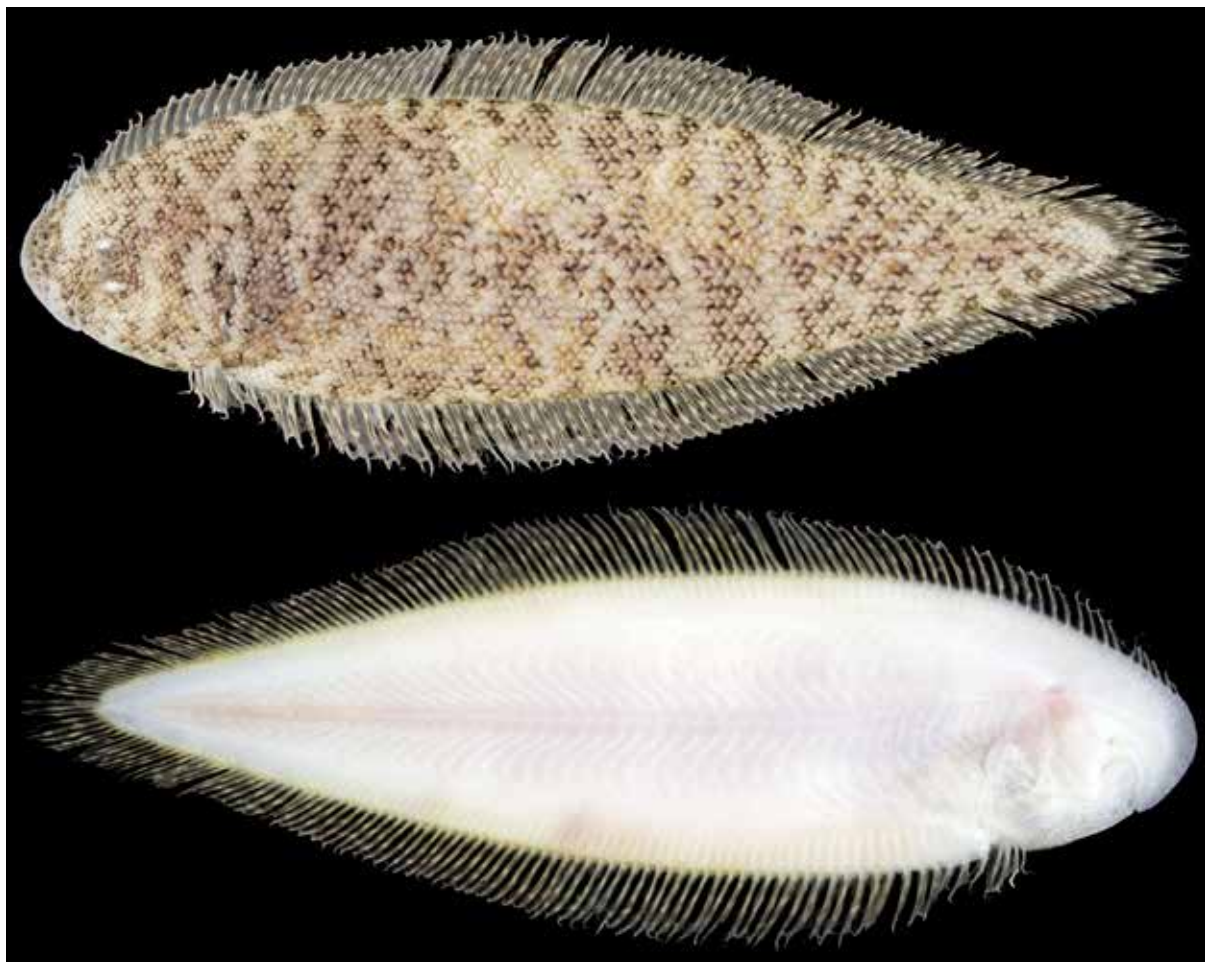
イヌノシタ属 *Cynoglossus bilineatus* (Lacepède, 1802)**オオシタビラメ** 珍しさ ★★★■ オオシタビラメ *Cynoglossus bilineatus* KAUM-I. 24326, 354.5 mm SL

【解説】有眼側は黒みを帯びた茶褐色。口は著しく湾曲し、口唇に皮弁を欠き、無眼側にも有孔側線を有することにより、日本産同科他種と容易に識別される。オーストラリア北東岸とソロモン諸島を東限としてインド・西太平洋に広く分布し、日本国内においては神奈川県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、広島県尾道、福岡県津屋崎、および東シナ海から記録がある。体長 40 cm に達し、本科魚類としては比較的大型の部類であるため、内之浦漁港では単独で市場に並んでいた。(畑 晴陵)

■ 市場に並ぶオオシタビラメ *Cynoglossus bilineatus* (2014年6月19日撮影)

イヌノシタ属 *Cynoglossus ochiaii* Yokogawa, Endo & Sakaji, 2008

オキゲンコ 珍しさ ★★★



■ オキゲンコ *Cynoglossus ochiaii* KAUM-I. 89433, 92.6 mm SL

【解説】有眼側の体側に3本の側線を有し、胸鰭を除く各鰭の鰭条に褐色斑がはいる。よく似たゲンコ（本書未掲載）は側線が2本しかないので識別できる。オキゲンコは長らくゲンコの種内変異として扱われてきたが、Yokogawa et al. (2008a) のアイソザイム分析の結果によりこれら2種が別種であることが明らかにされ、Yokogawa et al. (2008b) によりオキゲンコが新種として記載された。内之浦湾において水揚げされることは稀であるが、鹿児島湾や志布志湾においては底曳網により多く漁獲されることから、内之浦湾にも一定の個体数があるものと思われる。

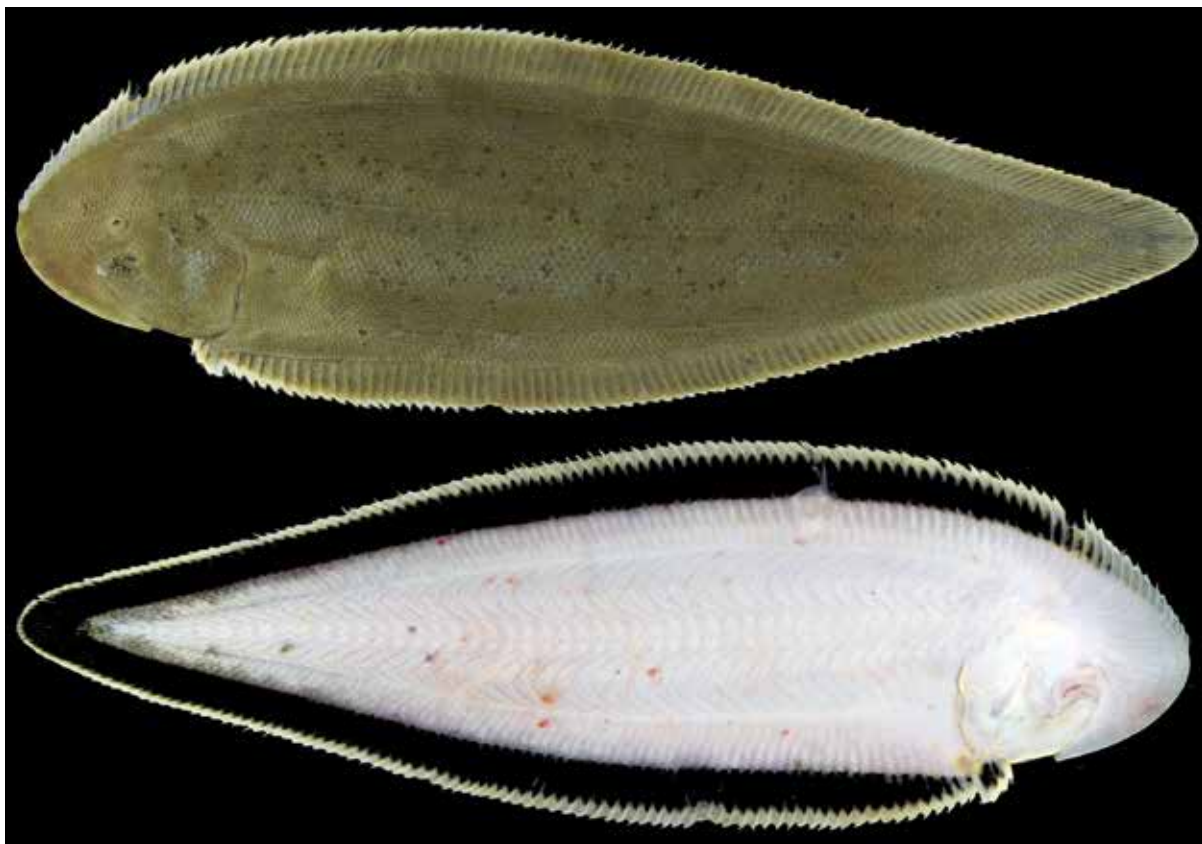
(畑 晴陵)



■ 鰭立て前のオキゲンコ *Cynoglossus ochiaii* (KAUM-I. 89433, 92.6 mm SL)

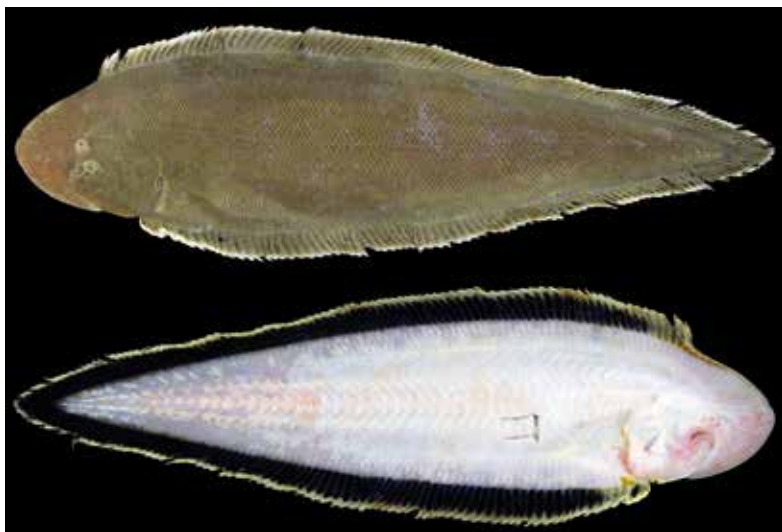
台湾シタビラメ属 *Paraplagusia japonica* (Temminck & Schlegel, 1846)

クロウシノシタ 珍しさ★★



■ クロウシノシタ *Paraplagusia japonica* KAUM-I. 62295, 309.8 mm SL

【解説】体は有眼側では各鰭を含めて一様に緑がかった茶褐色を呈するが、無眼側の背鰭と臀鰭は黒色を呈し、外縁は白色に縁取られる。口は著しく湾曲し、唇に髭状の細かい皮弁をそなえる。有眼側の側線は3本。北海道から九州南岸にかけての日本海・東シナ海・太平洋沿岸、および瀬戸内海に広く分布する。国外では朝鮮半島、台湾、および中国東シナ海。南シナ海沿岸に分布する。内之浦湾においては定置網で頻繁に漁獲される。体長30 cm以上に成長する中型種であり、食用魚として取引される。(畑 晴陵)



■ クロウシノシタ
KAUM-I. 56725, 261.8 mm SL

モンガラカワハギ属 *Balistoides viridescens* (Bloch & Schneider, 1801)**ゴマモンガラ** 珍しさ★★★★■ ゴマモンガラ *Balistoides viridescens* (2015年11月12日撮影)

【解説】モンガラカワハギ科は腹鰭がなく、腰骨後端に痕跡的な1棘がある。背鰭棘は3棘で、体には鱗が瓦のように並び体表は硬い。本種は体が明瞭な鱗模様の墨色で、頬部と各鰭が黄色い。幼魚はキヘリモンガラ（本書未掲載）の幼魚に似るが、眼から胸鰭基部へと向かう暗色帯がある（キヘリモンガラではない）、背鰭起部から臀鰭基部後端へと繋がる暗色帯をもつ（繋がらない）ことで識別される。ゴマモンガラの成魚はサンゴ礁域に生息し、大きい個体は単独でみられる。小型個体は砂底・砂泥底域に点在するサンゴの近くでみられ、危険を感じるとサンゴの隙間に逃げ込み、背鰭をたてて入った穴に体を固定する。大型個体は夜になると狭いサンゴの隙間に入り込んで眠る。産卵床に卵を産み、オスが守るため、卵を守るオスは気性が荒く、近くを通るダイバーに対して歯をカチカチと鳴らして威嚇をしたり、時には攻撃することもあるというものの、国内においては産卵床をみることは稀である。ただし、顎の力は非常に強いので、生体の取り扱いには注意が必要。国内では神奈川県三浦半島以南の太平洋沿岸に分布するが、琉球列島や小笠原諸島でより多い。とりわけ、成魚は南日本太平洋沿岸域において稀。内之浦では成魚1個体と幼魚2個体のみが得られており、やはり稀である。食用としては利用されていないものと思われる。皮が非常に厚く、強固であるため捌くのに苦労するが、沖縄・奄美地方では食用とされている。身は意外にも赤い。喜界島で肝臓を炙ったものを醤油で解いたタレを付けて刺身を食したが、こりこりとした食感で美味であった。（小枝圭太）

■ ゴマモンガラの幼魚
(KAUM-I. 43913, 27.2 mm SL)

メガネハギ属 *Sufflamen fraenatum* (Latreille, 1804)**メガネハギ** 珍しさ ★★★★★■ メガネハギ *Sufflamen fraenatum* KAUM-I. 96493, 236.7 mm SL, オス

【解説】体は暗褐色で、下顎下部は黄色。性的二型（オスとメスで体色や形態が異なる）があり、オスは下顎部から胸鰭基部にむかって細い白色斜帯が伸びる。水深 50 m 以浅のサンゴ礁域に単独で生息する。危険を感じるとサンゴや岩の隙間に逃げ込み、太くて強固な背鰭棘を使って穴の中で突っ張る。モンガラカワハギ科魚類は、この特徴的な背鰭棘を銃の引き金に例えて英名では「トリガーフィッシュ」と呼ばれる。強力な顎でウニ類、カニ類、貝類の他に小さな無脊椎動物を食べ、サンゴ礁域で餌釣りをすると同じモンガラカワハギ科であるツマジロモンガラやクマドリ（いずれも本書未掲載）とともに貪欲に食いついてくる。釣り上げると「グブグブ」と音を鳴らす。国内では小笠原諸島や琉球列島に多い。千葉県館山以南の太平洋沿岸や山口県日本海沿岸にも分布するが、多くは幼魚であり稀である。内之浦漁港では写真の成魚 1 個体のみ得られており、極めて稀。モンガラカワハギ科の魚は意外にも身が赤味がかっている。食感がしっかりとっていて、それなりに美味だがカワハギ科が食用魚として重宝されているの比べると、その価値は総じて低い。（小枝圭太）



■ メガネハギをはじめとするモンガラカワハギ科魚類の背鰭棘はとても太い（KAUM-I. 96493）

ウスバハギ属 *Aluterus monoceros* (Linnaeus, 1758)

ウスバハギ 珍しさ ★



■ ウスバハギ *Aluterus monoceros* KAUM-I. 96816, 477.5 mm SL

【解説】カワハギ科はモンガラカワハギ科と同様に腹鰭がない。背鰭棘は2棘で、微小な鱗で体表が被われるためやや皮膚は軟らかい。体は卵型で、体高が高く、著しく側扁する。本種は体が灰白色で明瞭な模様がなく、尾鰭が截形。浅海に生活し、群れを作る。小型個体は港内の流れのない場所の水面付近に浮かんでいる姿がみられる。国内では北海道から九州南岸の太平洋・日本海・東シナ海沿岸に多く分布する。瀬戸内海や琉球列島、小笠原諸島でもみられるがその数は少ない。美味な魚で、体長50 cm以上の個体が定置網で数多く漁獲される。鹿児島県本土においては本種のことを「カワハギ」や「ウマヅラハギ」と呼称する。内之浦漁港では漁師と市場で呼び名が異なる稀有な種で、漁業者たちは「ジャンボ」と呼び、市場では「ハゲ」と呼ばれる。2009年には体長数cmの幼魚が生きたまま得られており、しばらくのあいだ、いおワールドかごしま水族館で飼育されていた。(小枝圭太)



■ 市場に並ぶウスバハギ *Aluterus monoceros* (2017年1月11日撮影)



■ 活魚とされるウスバハギ *Aluterus monoceros* (2017年1月11日撮影)



■ 飼育されたウスバハギの幼魚 (2009年6月18日撮影)

ウスバハギ属 *Aluterus scriptus* (Osbeck, 1765)**ソウシハギ** 珍しさ ★★★★★■ 飼育されたソウシハギ *Aluterus scriptus* (2008年5月12日撮影)

【解説】体形はウスバハギに似るが、尾鰭が長く、体が緑色で体側に青色の虫食い模様があることで容易に識別される。全世界の熱帯域に分布し、おもにサンゴ礁域で悠々と泳ぐ姿が単独で見られる。夜間でもゆっくりと泳いでいるが、反応がさらに鈍い。国内では北海道から九州南岸では散発的にみられ、琉球列島や小笠原諸島で多い。それなりに美味しい魚だが、個体によっては腸にバリトキシンという猛毒をもつことがあるため、食べる際は内臓を傷つけないよう細心の注意が必要（そもそも食べないことが強く推奨されている）。琉球列島では、毒をもつ危険な魚としてある程度は認識されているものの、南日本沿岸では出現が稀なためかその認識が薄い。とりわけ、近年は出現例が増加している傾向があり、実際に本種を食べたことによる被害もでている。尾鰭を含めると1 m 近くまで成長するため、肉の量はそれなりに多いが、食感がやや柔らかく、味が薄いいため、カワハギやウマヅラハギなどと比べて食用としての評価ははるかに低い。内之浦漁港では2008年5月に漁獲され、しばらくのあいだ、いおワールドかごしま水族館で飼育されていた。（小枝圭太）

センウマヅラハギ属 *Cantherhines dumerilii* (Hollard, 1854)

ハクセイハギ

珍しさ ★★★★★

■ ハクセイハギ *Cantherhines dumerilii* KAUM-I. 89404, 170.0 mm SL

【解説】体は著しく側扁し、菱形。尾柄部に上下2対の鈍い棘があることが特徴。サンゴ礁性のカワハギ科魚類のなかでも大型で、体長30 cmほどの個体が単独かペアで普通にみられる。夜間は動きが鈍くなり、岩やサンゴの上で静止していることが多い。国内では北海道から沖縄までほぼ全域で見られるが、南ほど多く、北では少ないと考えられる。内之浦漁港では、体長17 cmの個体（KAUM-I. 89404）が1個体得られたのみ。まとまった数が漁獲されないため、食用となることも少ない。（小枝圭太）

■ 冷凍前のハクセイハギ
(KAUM-I. 89404, 170.0 mm SL)

センウマヅラハギ属 *Cantherhines pardalis* (Rüppell, 1837)

アミメウマヅラハギ

珍しさ ★★★★★



■ アミメウマヅラハギ *Cantherhines pardalis* KAUM-I. 89405, 65.9 mm SL

【解説】体は茶褐色を呈し多数の褐色斑がはいり、網目模様を形成することが特徴。サンゴ礁外縁を単独で泳いでいることが多い。危険を感じるとサンゴや岩の穴に逃げ込む。小型甲殻類やゴカイ類、貝類などを食べる。国内では茨城県以南の太平洋沿岸、琉球列島、小笠原諸島に分布する。沖縄県では食用にもなるが、最大でも約15 cmと小型で、まとまった数も水揚げされない。内之浦漁港では体長6～7 cmの小型個体が3個体得られているのみ。(小枝圭太)



■ アミメウマヅラハギ KAUM-I. 38832, 70.4 mm SL

ヒゲハギ属 *Chaetodermis penicilligera* (Cuvier, 1816)**ヒゲハギ** 珍しさ ★★★★★■ ヒゲハギ *Chaetodermis penicilligera* KAUM-I. 73178, 179.5 mm SL

【解説】体や背鰭棘に多数の皮弁があることが非常に特徴的。体は褐色で、体側に多数の黒色縦帯がはしる。また、胸鰭を除く各鰭には暗色斑が散在する。幼魚は地色がより淡色や白色だが、体側にはしる縦帯や多数の皮弁は成魚とほぼ同様。特徴的な姿からダイバーや観賞魚としての人気が高い。水深 200 m 以浅の沿岸の砂泥底や岩礁域に生息する。小型甲殻類やゴカイ類、貝類などを食べる。国内では千葉県鴨川以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、鹿児島湾、東シナ海北部から散発的に記録されている。食用にできると思われるが、稀種であるため、味は不明。

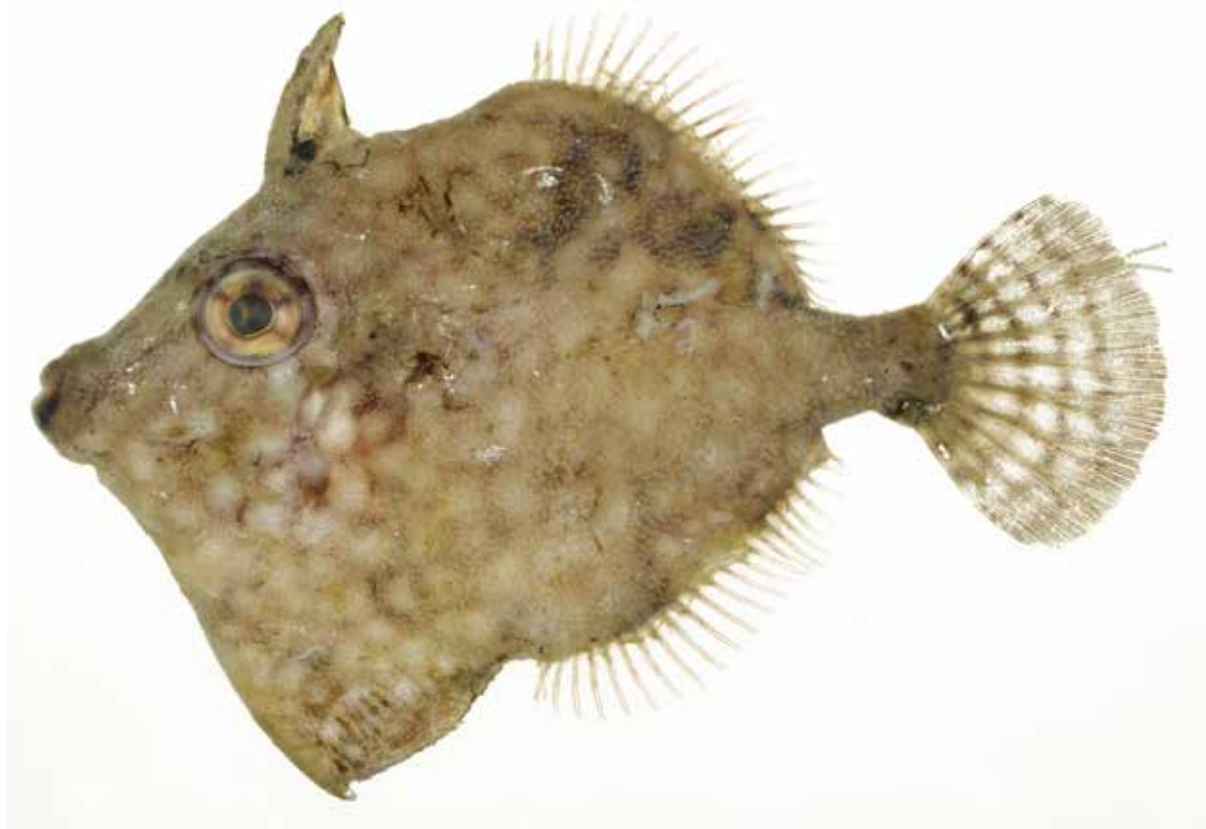
(小枝圭太)



■ ヒゲハギの頭部 (KAUM-I. 73178, 179.5 mm SL)

アミメハギ属 *Rudarius ercodes* Jordan & Fowler, 1902

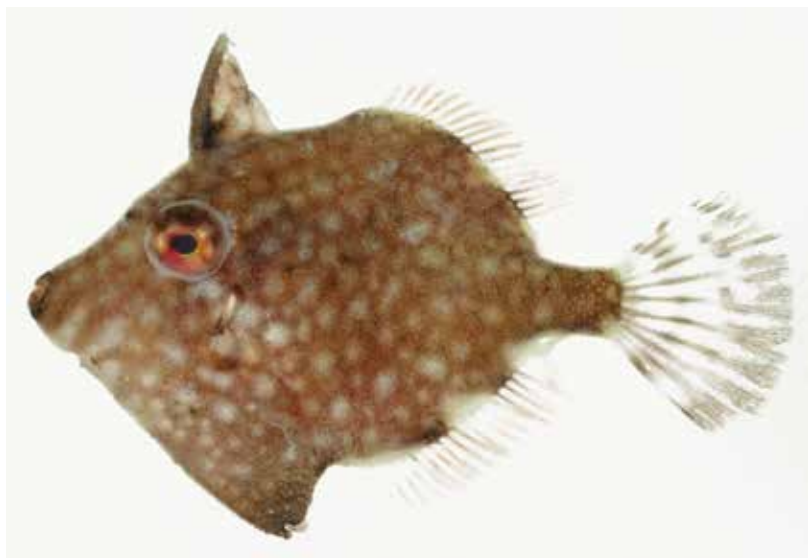
アミメハギ 珍しさ★★



■ アミメハギ *Rudarius ercodes* KAUM-I. 86552, 40.8 mm SL

【解説】体は茶色で、白色斑が密にはいり網目模様を形成する。腰骨後端の鞘状鱗が2節に分かれて不動性、鰓孔下端が胸鰭基部より上方にある、オスの尾柄には剛毛があることなどが特徴。水深20 m以浅の岩礁域の藻場、内湾のアマモ場に生息する。国内では北海道の日本海・オホーツク海沿岸と琉球列島、小笠原諸島を除くほぼ全域に分布する。最大でも6 cm程度と小型であるため、食用には適さない。内之浦漁港では体長3 cm以下の小型個体がよく混獲される。

(小枝圭太)



■ アミメハギ *Rudarius ercodes* KAUM-I. 35939, 26.9 mm SL

カワハギ属 *Stephanolepis cirrhifer* (Temminck & Schlegel, 1850)**カワハギ** 珍しさ ★■ カワハギ *Stephanolepis cirrhifer* KAUM-I. 94333, 109.0 mm SL

【解説】体は菱形で、強く側扁する。体は灰白色で、暗色のまだら模様が体側中央にある。模様は個体の状態により変化する。オスは背鰭前部の軟条が糸状に伸長し、尾柄側面中央に小さな剛毛帯がある。水深 100 m 以浅の砂泥域や岩礁域で普通にみられ、小型甲殻類、ゴカイ類、貝類などを食べる。国内では青森県から九州の日本海・東シナ海・太平洋沿岸に分布する。非常に美味しい魚で、薄く切った刺身と肝臓を青ネギと共にポン酢で食すと絶品。本種はおもに底生生物を食べるため、以前は落ちた餌の掃除役とカワハギの養殖を兼ねてマダイ（底に落ちた餌を食べない）などの養殖水槽に混養されていた。現在は、養殖個体は肝臓が肥大して高値が付くことからカワハギ単独での養殖（単養）が主流である。体皮がクルリと剥げることが「カワハギ」の名の由来となった。内之浦では大きいものは「マルハゲ」や「つのご」と称されて市場に並ぶが、小型のものは食用にはされない。（小枝圭太）



■ 市場に並ぶカワハギ
(2013年10月10日撮影)

ウマツラハギ属 *Thamnaconus modestus* (Günther, 1877)

ウマツラハギ 珍しさ ★★★



■ ウマツラハギ *Thamnaconus modestus* KAUM-I. 24325, 155.4 mm SL

【解説】本種はカワハギ科としてはやや体高が低い。体色は灰色で、個体によっては体側に不規則な雲状斑がある。背鰭、臀鰭、尾鰭は青色。水深 100 m 以浅の砂泥底や岩礁域に多く生息し、小型の甲殻類や底生動物を食べる。国内では琉球列島と小笠原諸島を除くほぼ全域に分布する。カワハギと並びとても美味しい魚で、もともとはカワハギの代用魚であったが、現在ではほぼ同価値で扱われる。内之浦ではカワハギと比較して、漁獲されることは少ない。1 個体のみ幼魚も得られているが、この個体の鰭は青色ではなく淡色であった。(小枝圭太)



■ ウマツラハギの幼魚 *Thamnaconus modestus* (KAUM-I. 30260, 36.5 mm SL)

コンゴウフグ属 *Lactoria cornuta* (Linnaeus, 1758)**コンゴウフグ** 珍しさ★★★★■ コンゴウフグ *Lactoria cornuta* KAUM-I. 82764, 172.1 mm SL■ コンゴウフグ *Lactoria cornuta* KAUM-I. 12744, 144.5 mm SL

【解説】ハコフグ科は硬い体甲に被われ、和名のとおりに箱に鱗がついたような姿の魚である。コンゴウフグの体の横断面は四角形で、眼上部と背部中央、臀鰭基部にそれぞれ巨大な棘があることが特徴。また、成魚の尾鰭は著しく長い。体長数 cm の幼魚は、眼上棘が著しく長く、背部中央の棘が鈍く、臀鰭基部の棘が長い。さらに小型の 1 cm 程度の個体では棘が小さい。棘の長い幼魚は、その特徴的で可愛い体形とひょうきんな顔、小さな胸鰭をパタパタとしながら泳ぐ仕草から観賞魚としての人気が高い。水深 50 m 以内の浅場の浅場に生息し、群れは作らない。国内では青森県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島に分布し、紀伊半島以北では幼魚のみがみられる。内之浦で見られるハコフグ科魚類としては、かなり稀な種で、体長とほぼ同程度になるほど巨大な尾鰭をもつ大型個体が得られている。(小枝圭太)



■ コンゴウフグの頭部 (KAUM-I. 82764)

コンゴウフグ属 *Lactoria diaphana* (Bloch & Schneider, 1801)

ウミスズメ 珍しさ ★★★



■ ウミスズメ *Lactoria diaphana* KAUM-I. 94348, 169.0 mm SL



■ ウミスズメ *Lactoria diaphana* KAUM-I. 276, 89.9 mm SL

【解説】体の横断面は四角形で、眼上部と、背部中央、臀鰭基部に棘がある。小型個体ほど腹部は丸く、半透明。稚魚期には棘がとても大きい。成魚は体が茶色で、やや長く、腹面はほぼ平坦。サンゴ礁や岩礁域に生息し、単独あるいはペアで見られる。夏の日没後にペアで産卵する。国内では青森県以南の太平洋沿岸、新潟県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島に分布する。皮膚に粘液毒をもつ、筋肉や内臓の毒の有無には個体差があり、食用としない方が良くであろう。内之浦漁港では体長9～16 cmの幅広い成長段階の個体が採集された。(小枝圭太)



■ ウミスズメの眼上棘 (KAUM-I. 276, 89.9 mm SL)

コンゴウフグ属 *Lactoria fornasini* (Bianconi, 1846)

シマウミスズメ

珍しさ ★★

■ シマウミスズメ *Lactoria fornasini* KAUM-I. 68412, 76.4 mm SL■ シマウミスズメ *Lactoria fornasini* KAUM-I. 71452, 76.9 mm SL

【解説】ウミスズメに似るが、背部中央の棘が高く、体に青色の虫食い模様をもつことが特徴。沿岸のサンゴ礁・岩礁域に生息し、単独あるいはペアで行動する。夏の日没後にペアで産卵する。水中では岩陰などで尾部を丸めて、静止していることが多い。国内では千葉県館山以南の太平洋沿岸、長崎県以南の東シナ海沿岸、琉球列島、伊豆諸島から小笠原諸島に分布する。身の毒の有無には個体差があり、食用としない方が良くあろう。体長は最大で19 cmに達するが、内之浦漁港では体長10 cm以下の小型個体が混獲されることが多く、選別して投棄されている。(小枝圭太)



■ シマウミスズメの幼魚 (KAUM-I. 55515, 13.1 mm SL)

ハコフグ属 *Ostracion immaculatus* Temminck & Schlegel, 1850

ハコフグ 珍しさ ★

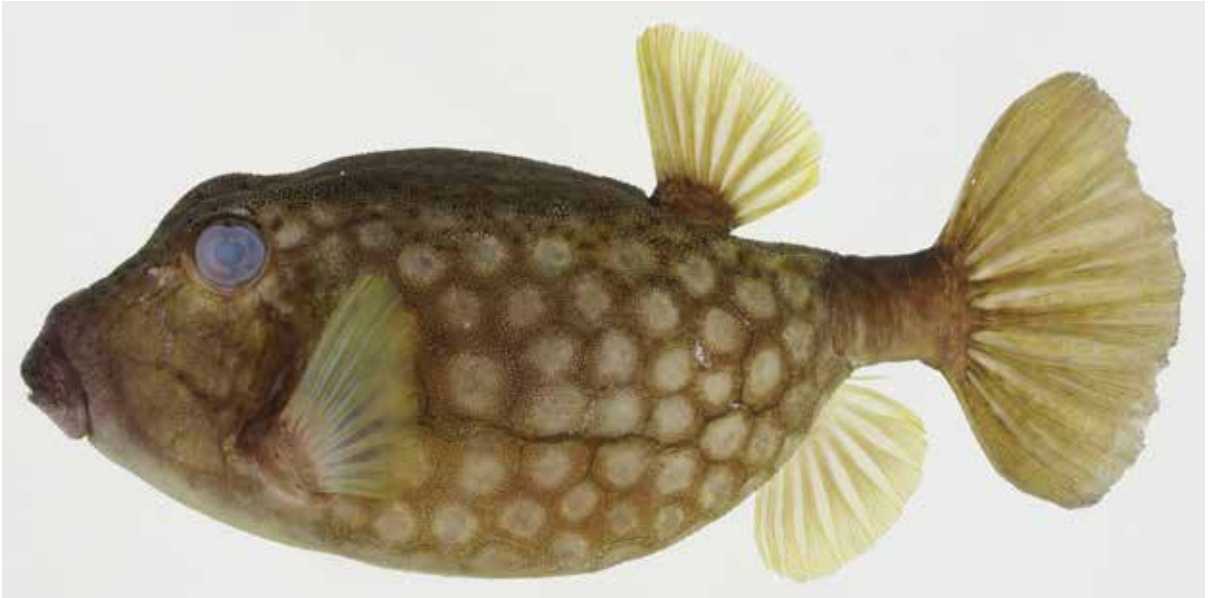


■ ハコフグ *Ostracion immaculatus* KAUM-I. 94347, 137.7 mm SL, オス



■ ハコフグ *Ostracion immaculatus* KAUM-I. 94355, 128.9 mm SL, メス

【解説】体の横断面は四角形で眼の上と腹部に目立った棘がない。オスは体が黄色で背部が青色、メスは全体に黄色から褐色で、淡色斑が散在することが特徴。浅海のあまり潮の流れない場所に単独かペアでいることが多く、敵に追われると穴の中へと逃げ込むが、泳ぎは遅いため素手で捕まえることができる。似たミナミハコフグ（本書未掲載）が熱帯性であるのに対し、本種は温帯性。国内では北海道から大隅諸島までは普通に分布するが、琉球列島や小笠原諸島では極めて稀に記録される程度。大隅諸島のなかでは種子島ではハコフグが多く、屋久島・口永良部島ではミナミハコフグが多い傾向がみられる。硬い体を器としてそのまま焼いて食べる手法が広く知られていたが、2011年に本種の肝臓によるパリトキシン中毒症状が報告されて以降、無免許で本種の肝臓や皮を食用として取り扱うことが禁止されている。内之浦漁港でみられるハコフグのほとんどは横断面が四角いものの、稀に体全体が膨張し、円形に近い個体が混じる（KAUM-I. 82614）。2017年には本種と思われる幼魚が得られているが、本種の幼魚とミナミハコフグの幼魚は形態や色彩が極めて類似しており、標本も残されていなかったため、識別が困難であった。内之浦では今のところミナミハコフグが得られていないことから、本書ではこれを暫定的にハコフグの幼魚として扱った。内之浦漁港では漁獲物の選別の過程で投棄されている。甲羅が硬いため鳥も食べられずにいるが、フォークリフトなどに踏みつぶされることで殻が割れたものは食べられている。（小枝圭太）



■ ハコフグ *Ostracion immaculatus* KAUM-I. 82614, 160.0 mm SL, メス



■ ハコフグと思われる幼魚 *Ostracion immaculatus* (2017年撮影)



■ 水揚げされたオスのハコフグ。水揚げ直後は背部の青紫色が鮮やか（2004年11月18日撮影）

ラクダハコフグ属 *Tetrosomus reipublicae* (Whitley, 1930)

ハマフグ 珍しさ★★★★



■ ハマフグ *Tetrosomus reipublicae* KAUM-I. 82763, 180.4 mm SL

【解説】体の横断面はほぼ正三角形に近く、背隆起の中央に2棘と眼の上に2棘があることが特徴。幼魚は棘がより大きく、金平糖のような姿をしている。水深50 m以浅の沿岸域の砂泥底に生息する。国内では北海道釧路以南の太平洋沿岸、山口県以南の日本海・東シナ海沿岸、鹿児島湾、沖縄舟状海盆に分布する。食用にされることはほとんどないが、皮膚には毒がある。内之浦漁港では他のハコフグ科魚類と同様に利用されず、投棄されている。内之浦漁港ではかなり稀で、2個体が得られたのみ。(小枝圭太)



■ ハマフグ *Tetrosomus reipublicae* (2007年2月15日撮影)

モヨウフグ属 *Arothron firmamentum* (Temminck & Schlegel, 1850)

ホシフグ 珍しさ ★★★



■ ホシフグ *Arothron firmamentum* KAUM-I. 40470, 277.2 mm SL (上), KAUM-I. 96823, 159.2 mm SL (下)

【解説】体は青みがかった黒色を呈し、体腹面は白色。体側には多数の小白色斑が散在する。毒性に関しては長らく不明であったが、卵巣が有毒であることが報告されている（淵ほか、1991；照屋ほか、2006）。生態に関しては不明な点が多いが、外洋を大きな群れで遊泳しているものと思われ、時折大量に定置網に入った、海岸に漂着したりすることが知られている（松原、1955；松浦、1984、1997a；久保田ほか、2012）。鹿児島



■ ホシフグ (KAUM-I. 98038, 223.1 mm SL)

県内においては笠沙や屋久島において大量に出現した例が報告されているほか、トカラ列島臥蛇島近海において数百個体が海面付近に集まり、一斉に産卵・放精をおこなう様子が観察されている（福井・本村、2017）。内之浦湾における出現は稀であるものの、一度だけ大量に入網したことがある。全長 30 cm 以上に達するが、毒性に関して不明な点が多いため、漁獲個体は利用されていない。（畑 晴陵）

モヨウフグ属 *Arothron hispidus* (Linnaeus, 1758)

サザナミフグ 珍しさ ★★★★★

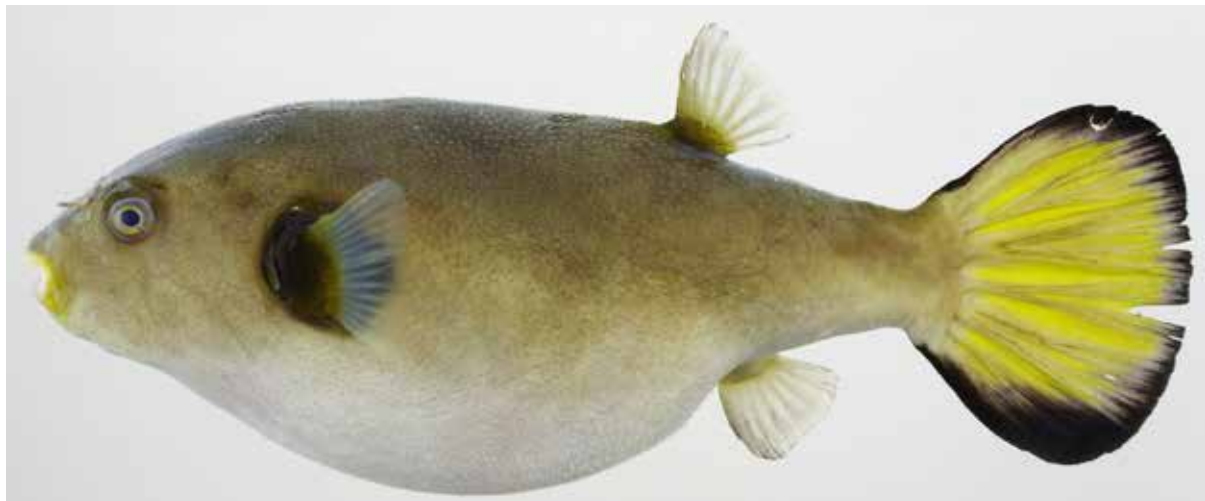


■ サザナミフグ *Arothron hispidus* KAUM-I. 6493, 204.7 mm SL

【解説】体は茶褐色。体背面から体側上部にかけては小白色斑が散在し、体腹面には細い白色帯が胸鰭基底を中心に渦を巻くように並ぶ。筋肉、肝臓、生殖巣が有毒であることが報告されているが、毒性の有無や強弱は個体差が大きい（照屋ほか、2006；山田・柳下、2013b）。日本国内においては、青森県以南の太平洋沿岸、福岡県以南の東シナ海沿岸に広く分布する。内之浦湾においては比較的多く漁獲されるモヨウフグ属魚類と思われ、全長40 cm 程の成魚が時折定置網に入るが、その毒性から利用されることはない。（畑 晴陵）

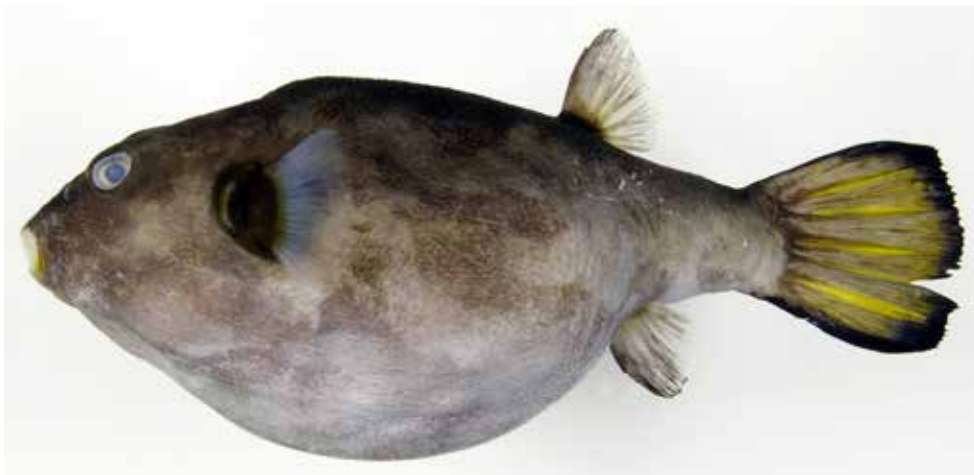
モヨウフグ属 *Arothron immaculatus* (Bloch & Schneider, 1801)

カスミフグ 珍しさ ★★★★★



■ カスミフグ *Arothron immaculatus* KAUM-I. 110109, 168.6 mm SL

【解説】種小名が「斑紋のない」を意味する通り、体は一様に褐色を呈し、目立った模様がなない。尾鰭は黄色を呈し、後縁が黒色に縁取られる。この色彩により、同属他種と容易に識別される。アフリカ東岸からフィリピン、日本にかけてのインド・西太平洋に広く分布する。琉球列島においては比較的多く観察されるが、鹿児島県本土より北においては、高知県黒潮町、静岡県浜名湖から記録があるのみ（伊佐ほか、2007；山田・柳下、2013b；下村、2013）。内之浦湾においては非常に稀な種であり、Matsuura (2016) によって報告された写真の1個体（KAUM-I. 43918）を含めて2個体が得られたのみ。（畑 晴陵）



■ カスミフグ *Arothron immaculatus* KAUM-I. 43918, 163.0 mm SL

モヨウフグ属 *Arothron manilensis* (Marion de Procé, 1822)

スジモヨウフグ 珍しさ ★★★★★

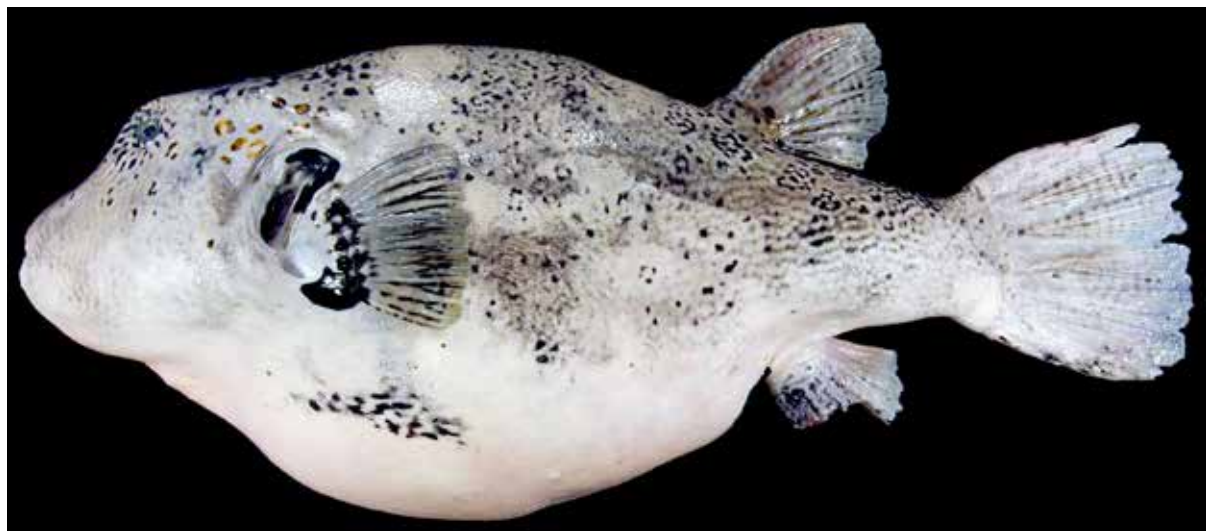


■ スジモヨウフグ *Arothron manilensis* KAUM-I. 65995, 233.1 mm SL

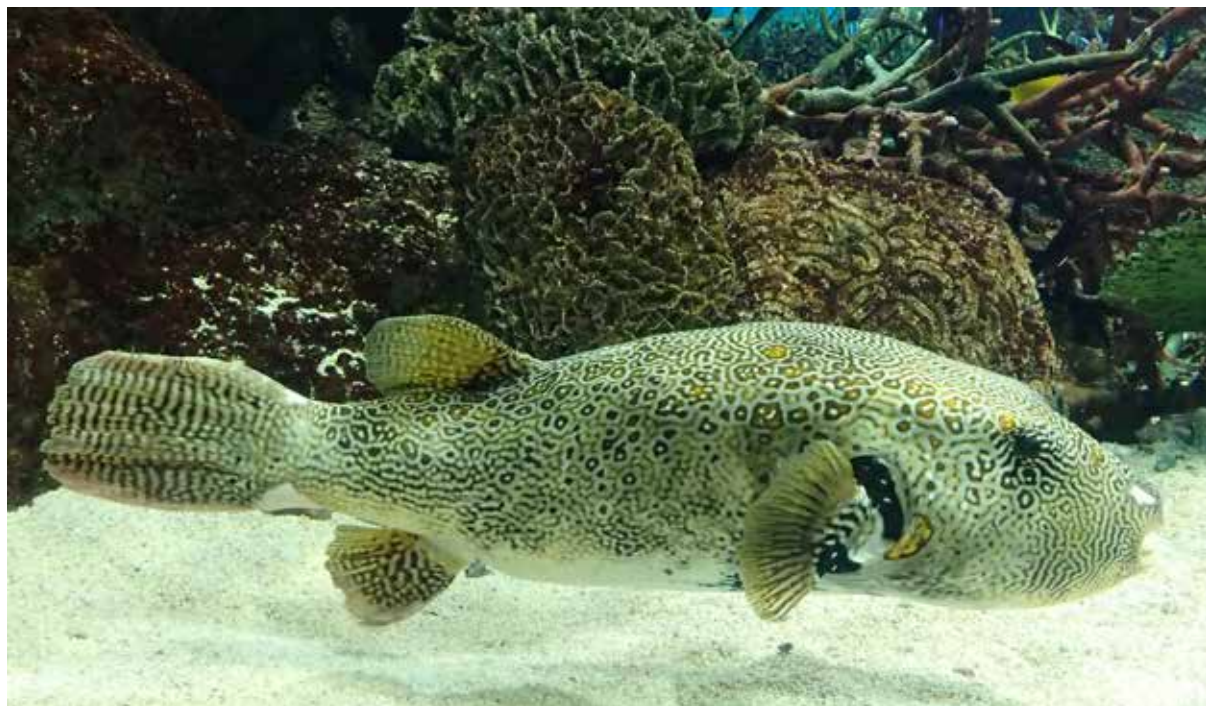
【解説】体背面と体側面には多数の暗色縦帯がはいるが、尾鰭には模様がない。汽水域にも頻繁に進入する。スジモヨウフグの学名と和名の関係には混乱がみられ、スジモヨウフグの和名が、現在カスミフグに対して与えられている *Arothron immaculatus* に与えられることがあった（例えば Kamohara and Yamakawa, 1967；益田ほか、1975）。学名と和名の対応関係の混乱に関しては、松浦（1984）が *A. immaculatus* に対し和名カスミフグを、*A. manilensis* に対して和名スジモヨウフグを与えることにより解消され、その後、両種の識別法が Randall（1985）によって明示された。国内においてはこれまで琉球列島からのみ報告されており、内之浦湾は分布の北限となる。筋肉、肝臓、および卵巣に毒性が確認されており（照屋ほか、2006）、漁獲されても利用されることはない。（畑 晴陵）



■ スジモヨウフグ KAUM-I. 68404, 144.7 mm SL

モヨウフグ属 *Arothron mappa* (Lesson, 1831)**ケシヨウフグ** 珍しさ ★★★★★■ ケシヨウフグ *Arothron mappa* KAUM-I. 97605, 616.0 mm SL

【解説】体は黄色がかった白または灰褐色を呈し、各鰭を含めて黒色から茶褐色の複雑な模様が密にはいる。模様は個体により変異に富むが、眼の周囲に放射状の斑紋がはいることが特徴。インド・西太平洋に広く分布する。ダイビングで目立つ魚のため、沖縄県においては珍しい魚ではないが、それ以外の国内地域では稀な種であり、これまで八丈島、相模湾および和歌山県からのみ記録されていた。内之浦湾においても極めて稀であり、写真の個体が得られているのみ。写真の個体は内之浦湾で漁獲され、いおワールドかごしま水族館において飼育されたのち、標本（KAUM-I. 97605）として収蔵された。本標本は鹿児島県における本種の初めての記録となる。毒性に関しては個体差・地域差が大きいと思われ、詳細は分かっていない。ただし、卵巣の有毒性が報告されている（照屋ほか、2006）。（畑 晴陵）



■ 水族館の水槽で飼育されるケシヨウフグ（KAUM-I. 97605, 616.0 mm SL; 2016年3月22日撮影）

モヨウフグ属 *Arothron stellatus* (Anonymous, 1798)**モヨウフグ** 珍しさ ★★★★★■ モヨウフグ *Arothron stellatus* KAUM-I. 65996, 265.5 mm SL

【解説】体は灰色を呈し、小黒色斑が密在する。幼魚の体はオレンジ色で、体側下部に多数の斜帯がはいる。ケショウフグによく似るが、眼の周囲の黒斑が放射状に並ばないことで識別できる。肝臓や卵巣の有毒性が報告されており（照屋ほか、2006）、沖縄県においては本種を食べたことによる食中毒も報告されている（大城ほか、2003）。サンゴ礁に生息し、貝類、ウニ類、甲殻類などのほか、サンゴ類や海藻類も餌とする。内之浦湾においては定置網により大型個体が稀に漁獲されるが、利用されることはない。（畑 晴陵）

■ モヨウフグ *Arothron stellatus* (2005年2月17日撮影)

キタマクラ属 *Canthigaster axiologa* Whitley, 1931

ハナキンチャクフグ 珍しさ ★★★



■ ハナキンチャクフグ *Canthigaster axiologa* KAUM-I. 63692, 70.4 mm SL



■ ハナキンチャクフグ *Canthigaster axiologa* KAUM-I. 62287, 91.6 mm SL

【解説】体は白色。体背面には複数の黒色鞍状斑があり、それらは橙色に縁取られる。幼魚は一様に金色で目立った斑紋がない。日本国内では千葉県以南の太平洋沿岸に広く分布する。内之浦湾においても幼魚から成魚まで定置網に得られるが、有毒のため、利用されことなく投棄される。本種をはじめとするキタマクラ属のフグ類は色彩に富んだ種が多く、観賞魚として人気がある。しかし、フグ科魚類全般に関して言えることであるが、気性が荒く、鋭い歯で他の魚の鰭をかじることが多いので、混泳させる際には注意を要する。(畑 晴陵)



■ ハナキンチャクフグの幼魚 (KAUM-I. 71430, 20.4 mm SL)



■ ハナキンチャクフグの幼魚 *Canthigaster axiologa* (KAUM-I. 71441, 22.9 mm SL)

キタマクラ属 *Canthigaster rivulata* (Temminck & Schlegel, 1850)

キタマクラ 珍しさ★



■ キタマクラ *Canthigaster rivulata* KAUM-I. 63890, 104.6 mm SL, オス

【解説】体背部は茶褐色を呈し、体側下部は白色。体側中央に2本の焦げ茶色の縦帯がある。成熟したオスでは眼の周囲から吻部にかけて多数の黄色帯と黄色斑点があり、腹部に青色小斑が多数散在し、背中線と腹中線の皮褶が著しく隆起する。産卵は雌雄が一对でおこない、卵の保護はおこなわないことが知られている（新井・藤田、1988）。内之浦湾においては定置網によって幼魚から成魚まで、頻繁に漁獲される。有毒のため、養殖餌料にも利用されず、選別され投棄されている。

(畑 晴陵)



■ キタマクラ KAUM-I. 83754, 77.8 mm SL, メス

サバフグ属 *Lagocephalus cheesemanii* (Clarke, 1897)**クロサバフグ** 珍しさ★■ クロサバフグ *Lagocephalus cheesemanii* KAUM-I. 94102, 288.9 mm SL

【解説】 シロサバフグ、ドクサバフグ（本書未掲載）と類似するが、尾鰭が二重湾入型で、上下両葉後端が白色を呈することにより識別される。本種の学名は長らく *Lagocephalus gloveri* Abe & Tabeta, 1983 とされてきたが（例えば松浦、1997b；山田・柳下、2013b）、Matsuura and Sato (2016) により *L. gloveri* は *L. cheesmani* (Clarke, 1897) の新参異名であり、クロサバフグに適用すべき学名は後者であることが明らかとされた。食用フグ類としては日本で最大の漁獲量を誇る（宮木・道津、1988）。内之浦湾においては夏から秋にかけて多く漁獲され、シロサバフグと区別されず扱われ、食用に供される。一時的に限られた海域に、大量出現をすることで好漁場が形成されることが報告されており、過去には屋久島近海や九州北部、長崎県小値賀島、および五島列島などにおける大量出現が報告されている（宮木・道津、1988）。しかし、漁獲の対象となる一方で、強靱な歯で延縄漁具などを破損するなどの事例も多く、紀伊水道や八重山諸島においては、本種の大量発生に伴う漁業被害も報告されている（山田ほか、2007；上田、2015）。内之浦ではシロサバフグとともに普通に水揚げがあり、まとめて市場に並ぶ。（畑 晴陵）



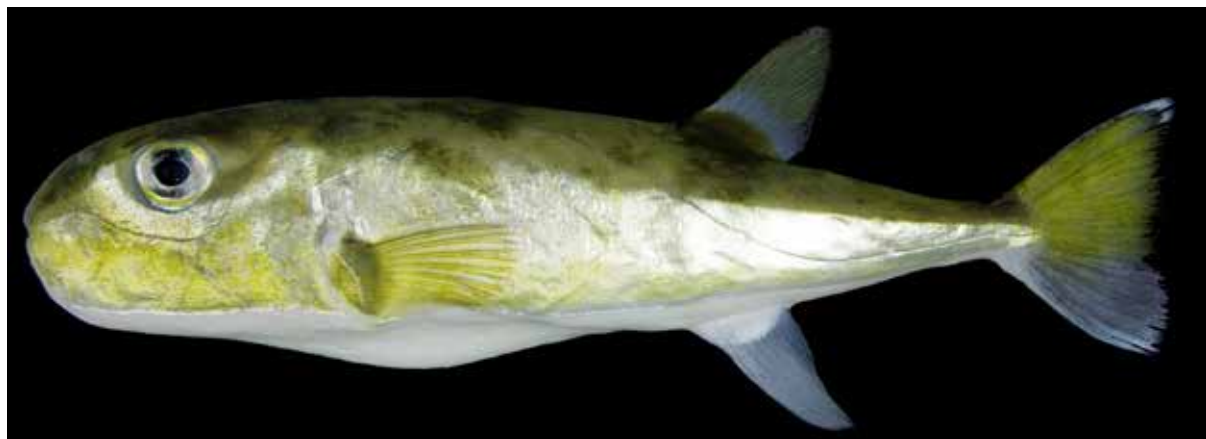
■ シロサバフグ（上）とクロサバフグ（下）はよく似るが尾鰭の様相が異なる（2011年5月21日撮影）

サバフグ属 *Lagocephalus inermis* (Temminck & Schlegel, 1850)**カナフグ** 珍しさ ★★★★★■ カナフグ *Lagocephalus inermis* KAUM-I. 45420, 249.4 mm SL

【解説】体はあまり側扁せず、丸みを帯びる。尾鰭は截形を呈し、ほとんど湾入しない。体背面は黒色、体側は黄色がかった褐色。体腹面は白色。鰓孔は黒色。最大で体長 70 cm に達する大型種。毒性に関する研究は少ないものの、肝臓、精巣の毒性が報告されている（照屋ほか、2006）。南シナ海産の本種に関しては、筋肉の毒性も報告されている（山田・柳下、2013b）。インド・西太平洋に広く分布し、日本国内においては東北地方以南から報告がある。内之浦湾においては稀に定置網により漁獲されるが、大型個体はみられない。（畑 晴陵）

サバフグ属 *Lagocephalus sceleratus* (Gmelin, 1789)**センニンフグ** 珍しさ ★★★★★■ センニンフグ *Lagocephalus sceleratus* (2011年1月27日撮影)

【解説】体は円筒形で伸長する。カイユウセンニンフグに類似するが、センニンフグは体背面に小黒色斑のみが散在するのに対し、カイユウセンニンフグでは茶褐色の虫食い状斑が密在することで識別できる。また、センニンフグが最大で体長 1 m に達する大型種である一方、カイユウセンニンフグは最大でも体長 18 cm 程度にしかならない。本種の毒性は長らく不明であったが、近年、筋肉を含む各部位の有毒性が明らかにされており、特に卵巣は猛毒であることが判明した（照屋ほか、2006; Nader et al., 2012; 山田・柳下、2013b）。水中では警戒心が強く、なかなか近づくことができない。北海道以南の日本各地に広く分布するが、内之浦湾においては稀。（畑 晴陵）

サバフグ属 *Lagocephalus spadiceus* (Richardson, 1845)**シロサバフグ** 珍しさ★■ シロサバフグ *Lagocephalus spadiceus* KAUM-I. 56767, 100.8 mm SL

【解説】体は光沢のある黄緑色を呈し、体腹面は白色。本種の学名は長らく *Lagocephalus wheeleri* Abe, Tabeta & Kitahara, 1984 とされてきたが（例えば松浦、1997c）、Matsuura (2010) により *L. wheeleri* はこれまでモトサバフグと呼ばれてきた *L. spadiceus* の新参異名であることが明らかとなり、シロサバフグに適用すべき学名は後者であるとされた。内之浦湾においては定置網により大量に漁獲され、食用に供される。本種に類似したドクサバフグ（本書未掲載）はその名の通り有毒であり、注意が必要であるが、ドクサバフグでは体背面に密生する小棘域が背鰭起部にまで達する（シロサバフグでは胸鰭後端直上に達しない程度）ことにより、識別される。シロサバフグは福岡県玄界灘においては沿岸では夏から秋にかけて全長 16 cm 未満の小型個体が漁獲され、冬季にはほとんど漁獲されない一方で、沖合では通年漁獲され、冬季も大型個体が得られることが報告されている。成長に伴い、冬季を前に沖合に移動しているものと考えられている（福岡県水産海洋技術センター研究部漁業資源課、2012）。内之浦湾においても夏から秋にかけて多く漁獲されることから、玄界灘におけるものと同様の移動をおこなっている可能性が高い。（畑 晴陵）

■ 他の雑魚と市場に並ぶシロサバフグ *Lagocephalus spadiceus* (2013年10月10日撮影)

サバフグ属 *Lagocephalus suezensis* Clark & Gohar, 1953

カイユウセンニンフグ

珍しさ ★★★★★

■ カイユウセンニンフグ *Lagocephalus suezensis* KAUM-I. 96840, 107.7 mm SL■ カイユウセンニンフグ *Lagocephalus suezensis* KAUM-I. 73991, 43.5 mm SL

【解説】体背面は緑がかった茶色を呈し、茶褐色の虫食い状斑が密にはいる。台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、紅海から記録されており、紅海からスエズ運河を通じて地中海にも移入している。国内では高知県、宮崎県、鹿児島県本土、および沖縄島から報告されている。大阪海遊館、高知大学、京都大学の共同調査の過程で日本における分布が確認された（中坊、2001）。生態や毒性など、不明な点が少なくないが、飼育下の観察では、昼夜を問わず潜砂行動をとることが報告されている（岩坪ほか、2009）。内之浦湾では稀に定置網に入るが、毒性不明であることと、最大でも20 cmと小型であることから、利用されることはない。（畑 晴陵）

■ 生きて採集されたカイユウセンニンフグ
(2014年9月30日撮影)

トラフグ属 *Takifugu alboplumbeus* (Richardson, 1845)

クサフグ 珍しさ ★★★



■ クサフグ *Takifugu niphobles* KAUM-I. 99007, 115.4 mm SL

【解説】体側上半部は緑色を呈し、白色斑が散在する。体側下半部は白色。胸鰭付近に黒色斑がある。本種には長らく学名 *Takifugu niphobles* (Jordan & Snyder, 1901) が適用されてきたが、Matsuura (2017) によって *T. alboplumbeus* を適用すべきであることが明らかにされた。夏季に大群で波打ち際に押し寄せ、産卵をおこなうことが知られる。体長 10 cm 程度の小型種であるが毒性は極めて強く、特に卵巣、肝臓、および腸は猛毒（谷、1945）。山口県周防灘において、体背面が明るい淡黄色を示すクサフグと思われる個体が報告されており、フグ科では唯一となるアルビノ個体とみられている（重田ほか、2012）。しかし、彼らの報告した個体は瞳孔に黒色素がみられることからアルビノ（黒色素を全くもたない）ではなく、体の一部が部分的に白い色彩変異（パイボールド）のひとつであると考えられる。クサフグの鹿児島県本土各地における個体数は多く、内之浦湾においても多く生息するものと思われるが、おもな生息環境が岸近くの岩礁であり、定置網の設置海域と異なるためか、漁獲されることは少ない。（畑 晴陵・小枝圭太）



■ クサフグ *Takifugu niphobles* (2006年3月23日撮影)

トラフグ属 *Takifugu flavipterus* Matsuura, 2017**コモフグ** 珍しさ★■ コモフグ *Takifugu flavipterus* KAUM-I. 73200, 144.3 mm SL■ コモフグ *Takifugu flavipterus* KAUM-I. 99010, 149.5 mm SL

【解説】体背面は茶褐色を呈し、小白色斑点が密在する。体側中央に細い黄色縦帯がはいり、体腹面は白色。体表面には小棘が密生し、ざらざらしている。各鰭は黄色。コモフグの学名は長らく *Takifugu poecilonotus* (Temminck & Schlegel, 1850) とされてきたが、それはクサフグ *T. alboplumbeus* (Richardson, 1845) の新参異名であることが判明し、同時にコモフグに適用すべき学名がないことが明らかとなり、Matsuura (2017) によって新種として記載された。コモフグに酷似するものの、体表面の小棘を欠くナシフグ（本書未掲載）との交雑事例が報告されている。交雑個体の体表には極めて微小な棘が認められ、2種の中間的な形態を有することが知られる（横川・浦山、2000）。コモフグの鹿児島県本土近海における個体数は非常に多く、内之浦湾においても定置網により頻繁に漁獲される。（畑 晴陵）

■ コモフグ *Takifugu flavipterus*, 約 15 cm SL (2007 年 2 月 15 日撮影)

トラフグ属 *Takifugu pardalis* (Temminck & Schlegel, 1850)**ヒガンフグ** 珍しさ ★★★★★■ ヒガンフグ *Takifugu pardalis* KAUM-I. 71795, 238.1 mm SL

【解説】体側上部は茶褐色を呈し、焦げ茶色の小斑点が密在する。体腹面は白色。体表面にはイボ状突起が密在する。体長 40 mm 未満の小型個体ではココエビなどの小型甲殻類をおもな餌とするが、成長により歯が形成されてくると固いものを餌とするようになり、体長 121 mm 以上では餌の 90% 以上を貝類に依存するようになる (Horinouchi et al., 1996)。アマモ場に多く生息するが、汽水域にも頻繁に進入する (Horinouchi et al., 1996 ; 北九州市立水環境館、2015)。内之浦湾では非常に稀で、1 標本が残っているのみ。肝臓と卵巣が猛毒であることが報告されているほか、毒性に個体差が大きいことが知られている (谷、1945 ; 淵ほか、1999)。

フグ類の毒はテトロドトキシンという成分から成り、これは海洋細菌が生産し、それを食べた貝類などをフグが捕食することにより、食物連鎖を通じて低次消費者から高次消費者であるフグに蓄積すると考えられてきた。しかし、この説ではフグのもつ多量のテトロドトキシンを海洋細菌の生産量では賄いきれないとの指摘もあった。近年、ヒガンフグが産んだ卵 (猛毒) を同属のクサフグが積極的に餌としていることが報告されたことで、フグ毒をフグ類間で融通し、高濃度なテトロドトキシンを維持している可能性が指摘されている (Itoi et al., 2015)。(畑 晴陵)

■ 冷凍前のヒガンフグ *Takifugu pardalis* KAUM-I. 71795, 238.1 mm SL

トラフグ属 *Takifugu rubripes* (Temminck & Schlegel, 1850)**トラフグ** 珍しさ ★★★■ トラフグ *Takifugu rubripes* KAUM-I. 98174, 240.0 mm SL

【解説】体背面から体側上部にかけては薄墨色を呈し、胸鰭の後方に複数の黒色斑が散在する。体腹面は白色。よく似たカラス（本書未掲載）とは、臀鰭が白色であること（カラスでは黒色）、体背面後部に黒色斑が散在すること（黒色斑がなく、一様に黒色）により識別される。卵巣、肝臓、および腸に有毒性が確認されている（谷、1945）。フグ類の中でも最高級品とされ、特に1 kg以上の大型個体はきわめて高価に取引される。「てっさ」と称される薄造りや、「てっちり」と呼ばれる鍋物のほか、皮の刺身、鰭酒など、その食用法は多岐にわたる。かねてより下関産の個体が最高級とされてきたが、近年では各産地で独自のブランド化を推進する動きがある。内之浦湾における漁獲は少なく、採れても小型のものがほとんどである。（畑 晴陵）



■ 市場に並ぶトラフグ（2006年5月25日撮影）



■ 市場に並ぶトラフグ（2011年4月19日撮影）

トラフグ属 *Takifugu snyderi* (Abe, 1988)

ショウサイフグ 珍しさ ★★★



■ ショウサイフグ *Takifugu snyderi* KAUM-I. 74780, 186.6 mm SL



■ ショウサイフグ *Takifugu snyderi* KAUM-I. 86391, 99.4 mm SL

【解説】体背面には小褐色斑が密在し、体表は滑らか。卵巣と肝臓は猛毒であり、東京湾産のものは北九州産のものよりも毒性が強く、さらに肝臓の毒性に関しては、フグ類としては珍しく、オスの方がメスよりも強いことが知られている（谷、1945；加納ほか、1985）。また、一般にフグ類は産卵期である春に毒性が強くなり、夏から秋にかけて減少する傾向が知られているが（谷、1945）、本種では秋季にも強い毒性を保ったままであることが報告されている（加納ほか、1985）。生後1年で全長132 mm、2年で194 mmに成長する（松井ほか、1987b）。福岡県玄界灘においては5～7月にかけて多く出現することが知られており（松井ほか、1987a）、内之浦湾においても定置網によって春から夏にかけて体長20 cm未満の個体が時折漁獲される。（畑 晴陵）

トラフグ属 *Takifugu xanthopterus* (Temminck & Schlegel, 1850)**シマフグ** 珍しさ ★★★★★■ シマフグ *Takifugu xanthopterus* KAUM-I. 71427, 368.9 mm SL

【解説】体は暗い灰色を呈し、黒色斜帯が多数はいる。各鰭は鮮やかな黄色を呈し、種小名もラテン語で xantho（黄色い）+ pterus（鰭）を意味する。卵巣、肝臓、および腸における毒性が確認されている（谷、1945；山田・柳下、2013b）。トラフグ属魚類は多くの種で自然交雑をおこなうことが知られ、シマフグに関してもナシフグ（本書未掲載；Masuda et al., 1991）やトラフグ（山田ほか、2007；高谷ほか、2016）などとの自然交雑個体が報告されている。属内で核型が互いによく類似し、遺伝的にも非常に近縁な関係にあることが知られており、このことが本属魚類の自然交雑が頻繁に発生する一因とみられている（Miyaki et al., 1995）。交雑個体は外見のみならず、毒の強度や毒性の分布が両親種の間間的な性質を示すことが知られている（Masuda et al., 1991；高谷ほか、2016）。シマフグは瀬戸内海や有明海には多いものの、内之浦湾における漁獲は極めて少なく、1個体が得られたのみ。ほとんど利用されていないものと思われる。（畑 晴陵）



■ シマフグの頭部（KAUM-I. 71427, 368.9 mm SL）

シッポウフグ属 *Torquigener brevipinnis* (Regan, 1902)

シッポウフグ 珍しさ ★★★



■ シッポウフグ *Torquigener brevipinnis* KAUM-I. 68436, 92.1 mm SL



■ シッポウフグ *Torquigener brevipinnis* KAUM-I. 24607, 48.1 mm SL

【解説】体は白色を呈し、体背面には茶褐色の複雑な模様がある。体側面には黄色縦帯が（不連続なこともある）、頭部側面には5本の黄褐色の横帯がそれぞれはある。同属のナミダフグ（本書未掲載）とは色彩のほか、胸鰭軟条数が14～17であること（ナミダフグでは13～15）により識別される。南日本からパプアニューギニアにかけての西太平洋に広く分布する。日本国内においては、これまで八丈島、相模湾から土佐湾にかけての太平洋沿岸、鹿児島県笠沙、鹿児島湾から記録されており、内之浦湾から得られた標本は九州太平洋沿岸からの初記録である。なお、原口（2007）により鹿児島県笠沙からナミダフグの分布の北限記録として報告された標本はシッポウフグである（松浦、2016）。内之浦湾では稀に定置網により漁獲される。毒性に関しては不明な点が多く、内之浦においても利用されていない。奄美大島からのみ報告されている同属種アマミホシゾラフグ（本書未掲載）はオスが海底に放射状に並んだ砂山（通称ミステリーサークル）を作り、メスの産卵床とすることが報告されており、その際には本属に特徴的な下顎の突出部をシャベルの様に利用することが知られているが（Matsuura, 2015）。ただし、その他のシッポウフグの産卵生態に関しては不明な点が多い。（畑 晴陵）

イシガキフグ属 *Chilomycterus reticulatus* (Linnaeus, 1758)**イシガキフグ** 珍しさ★★■ イシガキフグ *Chilomycterus reticulatus* KAUM-I. 82780, 287.3 mm SL■ イシガキフグ *Chilomycterus reticulatus* KAUM-I. 73993, 296.3 mm SL

【解説】ハリセンボン科魚類は体が棘で被われることが特徴だが、本種の棘はやや鈍く、不動性である。また、全ての鰭に小黑斑をもつことも本種の特徴。体に黒色斑が散在する個体とない個体がいる。無毒。最大で 55 cm に達する大型種で、体長 40 cm を越える大型個体が多く、むしろ 20 cm 以下の小型個体をみることはほとんどない。棘はするどくはないが、40 cm を越える大型個体ともなると非常に重いため、抱えようと腕や手に喰い込んで痛い。水深 40 m 以浅のサンゴ礁・岩礁域



■ 水揚げされたイシガキフグの約 50 cm SL の大型個体 (2006 年 5 月 25 日撮影)

に生息し、悠々と泳いでいるか岩やテーブルサンゴの下でじっとしていることが多く、目があっても逃げようとしなことから、大型個体はその大きさゆえ自然下においてほとんど天敵がないことが推察される。全世界の暖海域に分布し、国内でもほぼ全域に分布する。皮が厚く、そのほとんどが硬い棘の基部で被われているため、調理に多大な手間がかかるうえ、体のわりに身が極めて小さく、可食部が少ないことから、全国的にも内之浦漁港においても食用とされることはほとんどないであろう。(小枝圭太)

メイタイシガキフグ属 *Cylichthys orbicularis* (Bloch, 1785)

メイタイシガキフグ

珍しさ ★★★★★



■ 水揚げされたメイタイシガキフグ *Cylichthys orbicularis* (2014年7月21日撮影)

【解説】ハリセンボン科のなかでも体の棘が動かないグループで、尾柄部背面に棘がない、体の背面と側面に多数の暗褐色斑をもつが、腹面にはないことなどが特徴。あまり大きくならない種で、最大でも体長は15 cmほど。1993年に Matsuura et al. (1993)により日本から初めて記録された。水深5～30 m 沿岸の砂礫底に生息する(松浦、2016)。インド・西太平洋の熱帯～温帯域に分布する。国内では佐渡島、能登半島、兵庫県浜坂、山口県日本海沿岸、伊豆半島、紀伊半島、高知県以布利・柏島、沖縄本島から散発的に記録されている。内之浦では2014年に写真の体長10～15 cm程度の個体が写真により確認されており、これは九州沿岸からの初めての記録といえる。ただし、標本は残っていない。(小枝圭太)



■ 正面からみたメイタイシガキフグ (2014年7月21日撮影)



■ 大量に入網したハリセンボン *Diodon holocanthus* (2003年6月11日撮影)

ハリセンボン属 *Diodon holocanthus* Linnaeus, 1758**ハリセンボン** 珍しさ ★■ ハリセンボン *Diodon holocanthus* KAUM-I. 71428, 134.6 mm SL

【解説】全身を被う棘は可動性で、危険を感じると胃に大量の水や空気を吸い込んで体を膨らませ、棘を立てることができる。この状態になるとよほどの大型魚でない限りは本種を捕食することは困難と思われる。鰓孔の前方に黒色斑がなく、体の黒色斑に白い縁どりがなくてヒトヅラハリセンボン（本書未掲載）と識別できる。棘の本数は257～354本で和名である「針千本」には遠く及ばない（松浦、2016）。浅海のサンゴ礁や岩礁域で単独あるいは数個体の小群で行動するが、数年に1度、個体数が劇的に増加することがあり、この際は数百、数千個体という大群がみられる。内之浦においても2003年に大量発生し、網にかかったり、棘で他の魚に傷がつき値崩れを起こすなど甚大な被害がでた。港の壁沿いを泳ぐ姿もよくみられる。国内のほぼ全域に分布する。沖縄では汁物（アバサー汁）で食するため、冬場には高値で取引される。唐揚げなど揚げ料理も美味であり、弾力と旨味が強い身は上質の鶏肉のようであるが、体に対して可食部がかなり小さい。内之浦では利用されずに、選別して投棄されている。（小枝圭太）



■ 大量に入網したハリセンボンを取り除く作業（2003年6月11日撮影）

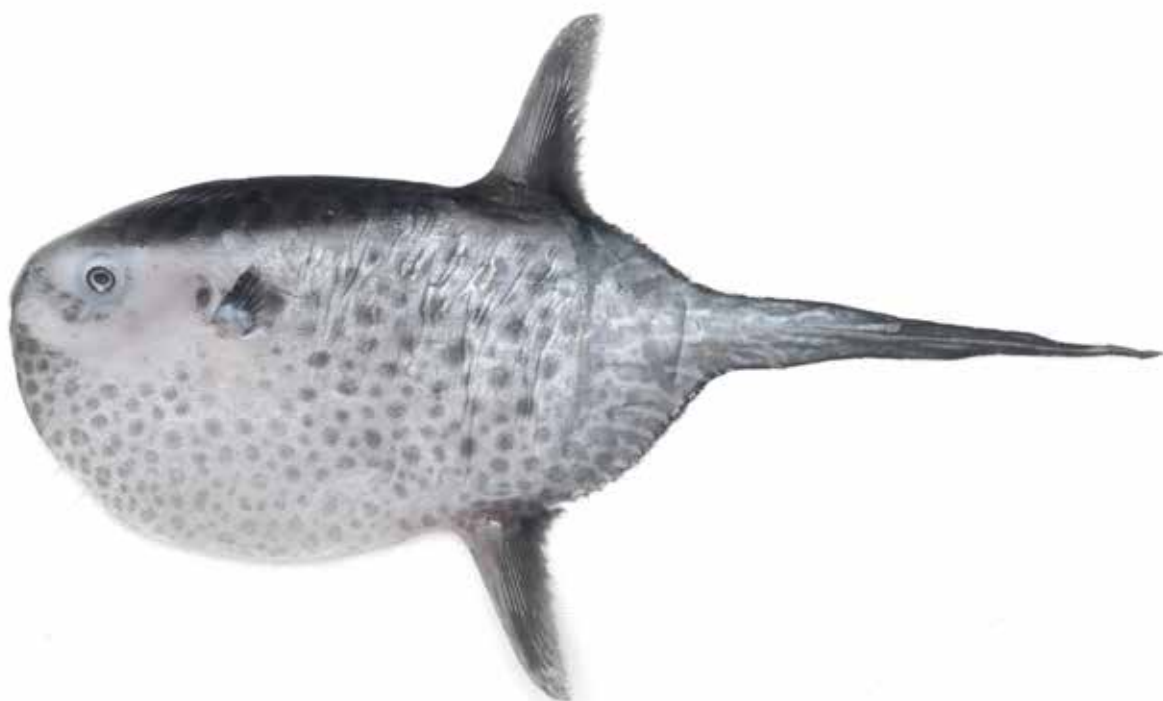
ヤリマンボウ属 *Masturus lanceolatus* (Liénard, 1840)

ヤリマンボウ 珍しさ ★★★★★

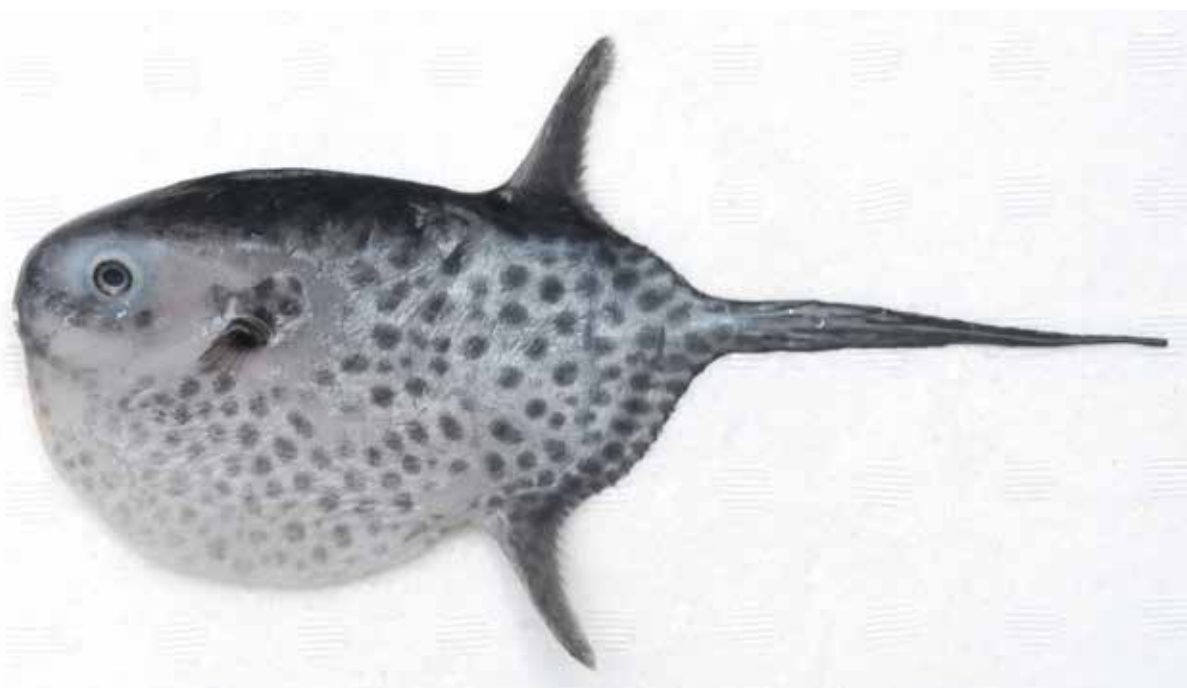


■ ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus* KAUM-I. 98257, 362.1 mm SL

【解説】マンボウ科は尾鰭がなく、尾部には舵鰭をもつ。体は著しく側扁し、体の後端を切り落としたような姿をしている。本種は舵鰭の後縁中央が突出することが特徴で、とりわけ小型個体の舵鰭は非常に長く、体長の同程度にもなる。台湾東部における研究で、本種が最高で23歳まで生きることが確認されている (Liu et al., 2009)。国内では宮城県以南の太平洋沿岸域、秋田県以南の日本海・東シナ海沿岸、琉球列島から散発的に記録されており、2016年には奄美大島からも報告された (小枝ほか, 2016)。内之浦漁港では体長40 cm程度の小型個体 (KAUM-I. 98257) の標本が得られており、10 ~ 15 cmのさらに小型の2個体も記録されている。これらの2個体の小型標本は澤井・山田 (2017) により鹿児島県本土沿岸からの初めての記録として報告された。 (小枝圭太)



■ ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus*, 約 20 cm SL (2016 年 5 月 14 日撮影)



■ ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus*, 約 12 cm SL (2016 年 5 月 14 日撮影)

マンボウ属 *Mola mola* (Linnaeus, 1758)

マンボウ 珍しさ★★★★



■ 水揚げされたマンボウ *Mola mola* (2011年2月22日撮影)

【解説】本種は舵鰭がまるく、舵鰭軟条数が10～13、全長2m以上の個体では舵鰭の後縁が波型になることが特徴。非常に大型の種で、体高も高い。マンボウ属魚類には分類学的な混乱がみられ、学名や和名の問題など数多くの問題が散見されたが、Sawai et al. (2017)によりマンボウには *Mola mora* が、ウシマンボウ（本書未掲載）には *Mola alexandrini* (Ranzani, 1839) の学名がそれぞれ対応することが明らかにされた。マンボウは躯幹部の鱗が真上から見ると点状で、その先端が細かく分枝することによりウシマンボウと識別される（ウシマンボウでは真上から見ると線状で、先端は分枝しない）。また大型個体では、マンボウは頭部の背縁と腹縁が顕著に膨らまないことや（顕著に膨らむ）、舵鰭後縁が波打つ（波打たない）ことなどによっても識別できる。本種は外洋性でおもに表層を遊泳するが、水深844mからの記録もあり、その生態のほとんどはまだ謎に包まれている。国内のほぼ全域に分布するが、琉球列島での報告例は少ない。特徴的な形、ゆったりとした動き、覚えやすい名前により水族館の人気者である。食用にもなり、身と肝臓を酢味噌に和えて食する。漁獲量は年により異なり、安定した漁獲はない。（小枝圭太）



■ 複数で入網したマンボウ (2016年4月15日撮影)



引用文献

- 藍澤正宏・土居内 龍. 2013. サヨリ科. Pp.651-654, 1927-1928. 中坊徹次(編). 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 赤崎正人. 1962. タイ型魚類の研究 形態・系統・分類および生態. 京大みさき臨海研究所特別報告, 1: 1-368.
- 赤崎正人. 1984. シナムイトヨリ *Nemipterus tolu* (Valenciennes). P. 170, pl. 165-A. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫(編). 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 秋山誠二・本村大地・下村友季子・内田圭一・黒木洋明・片山知史. 2015. 東京湾におけるクロアナゴとダイナンアナゴの食性. 日本水産学会誌, 81 (1): 130-132.
- Albins, M. A. and Lyons, R. J. 2012. Invasive red lionfish *Pterois volitans* blow directed jets of water at prey fish. *Marine Ecology Progress Series*, 448: 1-5.
- 尼岡邦夫. 2016. 日本産ヒラメ・カレイ類. 東海大学出版部, 平塚. x + 229 pp.
- 尼岡邦夫. 1997. ホシダルマガレイ *Bothus myriaster*. Pp. 668-669. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- Andamari, R., Milton, D. and Zubaidi, T. 2002. Reproductive biology of five species of anchovies (Engraulidae) from Bima Bay, Sumatra, Nusa Tenggara. *Indonesian Journal of Agricultural Science*, 3 (2): 37-42.
- 青沼佳方・柳下直己. 2013. ニシン科. Pp. 297-301, 1811-1812. 中坊徹次(編). 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 青山恒雄. 1955. レンコダイ *T. tumifrons* にみられた両性生殖巣. 魚類学雑誌, 4 (4, 5, 6): 119-129.
- 青山恒雄・北島忠弘・水江一弘. 1963. イネゴチ *Cociella crocodile* (Tilesius) の性転換. 西海区水産研究所研究報告, 29: 11-33.
- Apsangikar, D. K. 1953. The systematic position of *Stromateus niger*. *Journal of University of Bombay*, 21 (5): 41-50.
- 荒賀忠一. 1997. ミナミイソズミ *Kyphosus* sp. Pp. 416-417. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 荒井 寛・藤田矢郎. 1988. キタマクラの水槽内産卵と卵発生・仔魚. 魚類学雑誌, 35 (2): 194-202.
- Artüz, M. L. and Kubanç, N. 2014. First record of shrimp scad *Alepes djedaba* (Calangidae) from the Sea of Marmara, Turkey. *Cybius*, 38 (4): 319-320.
- 厚地 進. 2003. かごしま夏の旬のさかな! きびなご. うしお, 297: 3-4.
- Baldwin, W. J. 1977. A review on the use of live baitfishes to capture skipjack tuna, *Katsuwonus pelamis*, in the tropical Pacific Ocean with emphasis on their behavior, survival and availability. NOAA Technical Report, NMFS Circular, 408: 8-35.
- 萬代あゆみ・松沼瑞樹・本村浩之. 2017. 日本初記録の日本初記録のヤマトシビレイ科魚類ツキミシビレイ(新称) *Tetronarce formosa* と本種の標徴に関する新知見. および近縁種との形態比較. 魚類学雑誌, 64 (2): 157-170.
- Blaber, S. J. M. and Cyrus, D. P. 1983. The biology of Carangidae (Teleostei) in Natal estuaries. *Journal of Fish Biology*, 22: 173-188.
- Cayetano, B. J. 2000. A review of the biology of the family Carangidae, with emphasis on species found in Hawaiian waters. DAR Technical Report 20-01, Division of Aquatic Resources, Honolulu. 37 pp.
- Chapman, D. D., Firchau, B. and Shivji, M. S. 2008. Parthenogenesis in a large-bodied requiem shark, the blacktip *Carcharhinus limbatus*. *Journal of Fish Biology*, 73: 1473-1477.
- Collette, B. B. 1999. Belonidae, needlefishes. Pp. 215-216 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 5. Bony fishes part 2 (Mugilidae to Carangidae). FAO, Rome.
- Collette, B. B. 2001. Scombridae. Pp. 3721-3756 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific, vol. 6, no. 4. FAO, Rome.
- Collette, B. B. and Nauen, C. E. 1983. FAO species catalogue. Vol. 2. Scombrids of the world. An annotated and illustrated catalogue of tunas, mackerels, bonitos and related species known to date. FAO Fisheries Synopsis, 2 (125): 1-137.
- Collette, B. B. and Parin, N. V. 1978. Five new species of halfbeaks (Hemiramphidae) from the Indo-west Pacific. *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 91 (3): 731-747.
- Collette, B. B. and Su, J. 1986. The halfbeaks (Pisces, Beloniformes, Hemiramphidae) of Far East. *Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, 138 (1): 250-301.
- Craig, M. T. and Hastings, P. A. 2007. A molecular phylogeny of the groupers of the subfamily Epinephelinae (Serranidae) with a revised classification of the Epinephelini. *Ichthyological Research*, 54 (1): 1-17.
- 出口吉昭. 1969. 小笠原沿岸の魚類. 東京獣医学畜産学雑誌, 17: 25-27.
- 土居内 龍. 2001. イブリカマス(新称). P. 254. 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳(編). 以布利 黒潮の魚. 海遊館, 大阪.
- Doiuchi, R., Bogorodsky, S. and Nakabo, T. 2011. An underwater photograph of *Sphyaena iburiensis* (Perciformes: Sphyaenidae) from the Red Sea: first record outside Japanese waters. *Ichthyological Research*, 58: 99-100.
- Doiuchi, R. and Nakabo, T. 2005. The *Sphyaena obtusata* group (Perciformes: Sphyaenidae) with a description of a new species from southern Japan. *Ichthyological Research*, 52: 132-151.
- 榮川省造. 1982. 新釈 魚名考. 青銅企画出版, 箕面. 606 pp.
- 江口慶輔・本村浩之. 2016. 琉球列島におけるイトウダ科魚類相. *Nature of Kagoshima*, 42: 57-112.
- 遠藤広光. 2012. 黒潮と高知県の浅海魚類相. Pp. 47-62. 松浦啓一(編). 黒潮の魚たち. 東海大学出版会, 秦野.
- Eschmeyer, W. N., Rama-Rao, K. V. and Hallacher, L. E. 1979. Fishes of the scorpionfish subfamily Choriactylinae from the western Pacific and the Indian Ocean. *Proceedings of the California Academy of Sciences, Fourth Series*, 41 (21): 475-500.
- 淵 祐一・帆足喜久雄・赤枝 宏・牧野芳大・野口玉雄. 1999. 大分県国東沿岸産ヒガンフグ及びコモンフグの毒性. *食品衛生学雑誌*, 40 (1): 80-89.
- 淵 祐一・成松浩志・仲摩 聡・寿 久文・平川英敏・鳥島嘉明・野口玉雄・大友信也. 1991. ホシフグの部位別毒性. *食品衛生学雑誌*, 32 (6): 520-524.
- 藤井武人. 1970. コチ科魚類における雌雄同体性と性転換現象-I. アネサゴチの性転換. *魚類学雑誌*, 17 (1): 14-21.
- 藤木哲夫・道津喜衛. 1963. 日本産ボラ科魚類の研究-I 長崎県野母崎町樺島および五島列島富江で獲れた成熟ボラ群の生態. 長崎大学水産学部研究報告, 14: 1-13.
- 藤田矢郎・中原官太郎. 1955. オニオコゼの卵発生と仔魚前期. *学藝雑誌*, 15 (2): 223-228.
- 藤原恭司・畑 晴陵・本村浩之. 2014. 標本に基づく鹿児島県のイトヨリダイ科魚類相. *Nature of Kagoshima*, 40: 59-67.
- 藤原恭司・伊東正英・岩坪洗樹・本村浩之. 2017. トビウオ科魚類シロフチビウオとチャバネトビウオの鹿児島県本土からの初記録. *Nature of Kagoshima*, 43: 81-87.

- 藤原恭司・本村浩之. 2016. 標本に基づく鹿児島県のヒイラギ科魚類相. *Nature of Kagoshima*, 42: 187-202.
- 藤山萬太. 2004. 私本 奄美の釣り魚. 藤山萬太, 奄美. 179 pp.
- 福井美乃・本村浩之. 2017. トカラ列島臥蛇島沖で観察されたホシフグの繁殖行動. *Nature of Kagoshima*, 43: 243-247.
- 福岡県水産海洋技術センター研究部漁業資源課. 2012. 筑前海におけるシロサバフグの成長と移動. *なみなみ通信*, 51: 4.
- 古川あさひ・古満啓介・伊藤毅史・柳下直己・山口敦子. 2014. 日本産スミツギザメの学名の検討. *板鯧類研究会報*, 50: 27-31.
- 古満啓介・山口敦子. 2010. 日本産アカエイ属魚類 1 新種に対する新和名の提唱. *長崎大学水産学部研究報告*, 91: 61-63.
- Furumitsu, K., Zhang, J. and Yamaguchi, A. 2010. Redescription of a poorly known stingray, *Dasyatis laevigata* (Chondrichthyes: Dasyatidae), with notes on some biological aspects in Ariake Sea, Japan. *Species Diversity*, 15: 139-154.
- 不破 茂. 1976. 志布志湾の小型底びき網漁業について漁場及び漁獲物. *鹿児島大学水産学部紀要*, 25 (1): 125-135.
- Golani, D., Appelbaum-Golani, B. and Peristeraki, P. 2013. Westward range extension of the Lessepsian migrant the shrimp scud *Alepes djedaba* (Forsskal, 1775) in the Mediterranean. *Annales, Series Historia Naturalis*, 23 (2): 115-118.
- Griffiths, S. P., Fry, G. C., Manson, F. J., Lou, M. D. 2011. Age and growth of longtail tuna (*Thunnus tonggol*) in tropical and temperate waters of the central Indo-Pacific. *ICES Journal of Marine Science*, 67 (1): 125-134.
- Gunn, J. S. 1990. A revision of selected genera of the family Carangidae (Pisces) from Australian waters. *Record of the Australian Museum Supplement*, 12: 1-77.
- Gushiken, S. 1983. Revision of the carangid fishes of Japan. *Galaxea*, 2: 135-264.
- 具志堅宗弘. 1984. ミナミギンガメアジ. P. 151, pl. 139-D, E. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編). *日本産魚類大図鑑*. 東海大学出版会, 東京.
- 荻本啓介・河合俊郎・松原 創・久原悠生・長田隆一・桑原尚司・片倉靖次. 2014. オホーツク海から初めて記録されたナガコバン *Remora remora*. *日本生物地理学会会報*, 69: 197-201.
- 浜田豊市・徳田真孝. 1997. マゴチの雌雄の出現と成長 (予報). *福岡県水産海洋技術センター研究報告*, 7: 15-18.
- 浜口哲一. 1991. *動物資料目録 I*. 平塚市博物館資料, (38): 106-140.
- 原口百合子. 2007. ナミダフグ. *鹿児島大学総合研究博物館 News letter*, 16: 14.
- 畑 晴陵. 2014. ミズン *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Rüppell, 1837). P. 46. 本村浩之・松浦啓一 (編). *奄美群島最南端の島 与論島の魚類*. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 畑 晴陵. 2017. ハタ科. Pp. 116-125. 岩坪洗樹・本村浩之 (編). *火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類*. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 畑 晴陵・藤原恭司・高山真由美・本村浩之. 2014b. 鹿児島県から得られたイサキ科エリアカコショウダイ *Plectorhynchus schotaf* の記録. *Nature of Kagoshima*, 40: 53-57.
- 畑 晴陵・原口百合子・本村浩之. 2012b. 標本に基づく鹿児島県のイサキ科とシマイサキ科魚類相. *Nature of Kagoshima*, 38: 19-38.
- 畑 晴陵・伊東正英・錦木紘一・本村浩之. 2015. 鹿児島県北部から得られたサバ科魚類グルクマ *Rastrelliger kanagurta* の記録. *Nature of Kagoshima*, 41: 161-166.
- 畑 晴陵・伊東正英・原口百合子・本村浩之. 2016b. クサジ科魚類ヒメクサアジの鹿児島県からの初記録および成長に伴う形態変化の記載. *Nature of Kagoshima*, 42: 39-43.
- 畑 晴陵・伊東正英・本村浩之. 2014a. 鹿児島県から得られたクロサギ科ホソイトヒキサギ *Gerres macracanthus* の記録. *Nature of Kagoshima*, 40: 47-52.
- 畑 晴陵・伊東正英・本村浩之. 2017c. カタクチイワシ科魚類シロガネアキノコイワシ *Encrasicholina heteroloba* の国内における分布状況. *日本生物地理学会会報*, 71: 281-288.
- 畑 晴陵・伊東正英・本村浩之. 2017g. 鹿児島県から得られたイサキ科魚類 2 種: オシヤレコショウダイおよびエリアカコショウダイ. *Nature of Kagoshima*, 43: 141-148.
- Hata, H., Iwatsubo, H., Yamada, M., Maekawa, T. and Motomura, H. 2017. *Sphyræna iburiensis* (Perciformes: Sphyræniidae) from the Amami Islands and southern Kyushu, Japan. *Biogeography*, 19: 10-16.
- 畑 晴陵・錦木紘一・本村浩之. 2016a. 鹿児島県から得られたニシン科オグロイワシ *Sardinella melanura* の大隅諸島からの初めての記録. *Nature of Kagoshima*, 42: 27-32.
- 畑 晴陵・錦木紘一・本村浩之. 2016d. クロサギ科魚類ホソイトヒキサギの日本沿岸からの 6 番目の記録. *Nature of Kagoshima*, 42: 231-235.
- 畑 晴陵・小枝圭太・錦木紘一・高山真由美・本村浩之. 2016c. 鹿児島県から得られたハタ科魚類 3 種: サラサハタ, アカマダラハタ, およびオオスジハタ. *Nature of Kagoshima*, 42: 147-156.
- 畑 晴陵・小枝圭太・本村浩之. 2017a. 鹿児島県内之浦から得られたハモ科魚類ハシナガアナゴ. *Nature of Kagoshima*, 43: 27-30.
- 畑 晴陵・前川隆則・中江雅典・本村浩之. 2017e. 奄美大島から得られたアジ科魚類 3 種: ミナミギンガメアジ, オニアジ, およびホソヒラアジ. *Nature of Kagoshima*, 44: 27-35.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2011. 標本に基づく鹿児島県のニシン目魚類相. *Nature of Kagoshima*, 37: 49-62.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2014. 鹿児島県本土から得られたトビウオ科チャバネトビウオ *Cypselurus spilopterus* の記録. *Nature of Kagoshima*, 40: 25-28.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2016a. トカラ列島から得られたゴマサバの胃内容物からみつかったマルバラシマガツオ (シマガツオ科). *Nature of Kagoshima*, 42: 203-206.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2016b. 鹿児島県内之浦湾から得られたイサキ科魚類セトダイ *Hapalogenys analis*. *Nature of Kagoshima*, 42: 243-248.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2016c. 鹿児島県北部から得られたサバ科魚類グルクマ. *Nature of Kagoshima*, 42: 327-332.
- Hata, H. and Motomura, H. 2016b. Two new species of the genus *Encrasicholina* (Clupeiformes: Engraulidae): *E. intermedia* from the western Indian Ocean and *E. gloria* from the Persian Gulf, Red Sea and Mediterranean. *Raffles Bulletin of Zoology*, 64: 79-88.
- Hata, H. and Motomura, H. 2016a. Validity of *Encrasicholina pseudoheteroloba* (Hardenberg 1933) and redescription of *Encrasicholina heteroloba* (Rüppell 1837), a senior synonym of *Encrasicholina devisi* (Whitley 1940) (Clupeiformes: Engraulidae). *Ichthyological Research*, 64 (1): 18-28.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2017a. 高知県から得られたニシン科魚類カタバシイワシ *Sardinella lemuru* の記録および本種の日本における出現状況. *四国自然史科学研究*, 10: 41-45.

引用文献

- 畑 晴陵・本村浩之. 2017b. 内之浦湾から得られたサクラアジ *Decapterus smithvanizi*. Nature of Kagoshima, 43: 123–126.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2017c. 鹿児島湾から得られたアジ科魚類マルコパンの記録. Nature of Kagoshima, 43: 127–130.
- 畑 晴陵・本村浩之. 2017d. 内之浦湾から得られたミナミギンガメアジ *Caranx tille* の記録. Nature of Kagoshima, 43: 131–136.
- 畑 晴陵・本村浩之・石森博雄. 2012a. 鹿児島県から採集された日本初記録のカタクチイワシ科魚類シロガネアイノコイワシ (新称). *Encrasicholina devisi* および近縁種との比較. 魚類学雑誌, 59: 125–134.
- 畑 晴陵・中江雅典・本村浩之. 2016g. 奄美大島から得られたイトヨリダイ科魚類タマガシラ *Parascolopsis inermis*. Nature of Kagoshima, 42: 249–254.
- Hata, H., Takayama, M. and Motomura, H. 2015. Distributional range extension of *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Clupeiformes: Clupeidae) in southern Japan. South Pacific Studies, 36: 39–48.
- 畑 晴陵・高山真由美・本村浩之. 2017e. 種子島から得られたイサキ科魚類ヒゲダイ. Nature of Kagoshima, 43: 149–153.
- 畑 晴陵・山田守彦・本村浩之. 2016h. 奄美大島から得られたイトヨリダイ科魚類ヤクシマキツネウオ *Pentapodus aureofasciatus*. Nature of Kagoshima, 42: 255–258.
- 畑 晴陵・山田守彦・本村浩之. 2016d. 鹿児島県から得られたイトヨリダイ科魚類シャムイトヨリ *Nemipterus peronii*. 南紀生物, 58 (2): 215–218.
- 畑 晴陵・山田守彦・本村浩之. 2017b. 内之浦から得られたニシン科魚類ミズン. Nature of Kagoshima, 43: 31–36.
- 畑 晴陵・山田守彦・本村浩之. 2017d. 内之浦湾から得られたオグロエソ. Nature of Kagoshima, 43: 49–52.
- 畑 晴陵・山田守彦・前川隆則・本村浩之. 2016e. 鹿児島県大隅半島東岸と奄美大島から得られたイサキ科魚類エリアカコンウダイ *Plectorhinchus unicolor*. Nature of Kagoshima, 42: 237–241.
- 波戸岡清峰. 2013a. ウツボ科. Pp. 244–261, 1786–1792. 中坊徹次 (編). 日本産 魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 波戸岡清峰. 2013b. ウミヘビ科. Pp. 266–277, 1794–1802. 中坊徹次 (編). 日本産 魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 波戸岡清峰. 2013c. アナゴ科. Pp. 275–287, 1802–1806. 中坊徹次 (編). 日本産 魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 波戸岡清峰. 2013d. クズアナゴ科. Pp. 292–293, 1809–1810. 中坊徹次 (編). 日本産 魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 波戸岡清峰・甲斐嘉晃. 2013. シマガツオ科. Pp. 905–909, 1998–1999. 中坊徹次 (編). 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 林 公義. 2013. テンジクダイ科. Pp. 826–864, 1979–1986. 中坊徹次 (編). 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 林 公義・西山喜徳郎. 1980. 西湘定置網で漁獲された魚類. 神奈川自然誌資料, 1: 15–27.
- Hayashi, S. and Tadokoro, A. 1962a. Occurrence of the Taiwan-Ainoko, *Stolephorus zollingeri* (Bleeker), in Japan. Bulletin of the Japanese Society of Scientific Fisheries, 28 (1): 26–29.
- 林 繁一・田所 瑛. 1962b. カタクチイワシ漁場におけるタイワンアイノコの漁獲量. 日本水産学会誌, 28 (1): 30–33.
- 日比野友亮. 2014. ダイナンアナゴ *Conger erebennus* (Jordan & Snyder, 1901). P. 43. 本村浩之・松浦啓一 (編). 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島県・国立科学博物館, つくば.
- 日比野友亮・本村浩之・木村清志. 2013. 鹿児島県与論島から得られた日本初記録のホームトラギス (新称) *Parapercis randalli*. 魚類学雑誌, 60: 129–134.
- 平本義春. 1981. イシダイの室内水槽における飼育と満4才魚の自然産卵について. 鳥取県水産試験場報告, 23: 17–20.
- 平坂 寛. 2017. 喰ったらヤバイいきもの. 主婦と生活社. 162 pp.
- 裕仁. 1988. 相模湾産ヒドロ虫類. 皇居内生物学研究所, 東京. 179 pp. + 110 pp., 4 pls., 2 maps.
- Ho, H.-C., Smith, D. G., McCosker, J. E., Hibino, Y. Loh, K.-H., Tighe, K. A. and Shao, K.-T. 2015. Annotated checklist of eels (orders Anguilliformes and Saccopharyngiformes) from Taiwan. Zootaxa, 4060 (1): 140–189.
- 外蘭博人. 1993. ハタの夏バテ温度は? うしお, 257: 1–2. 本間義治. 1959. 新潟県魚類目録補訂 (VI). 魚類学雑誌, 7 (5): 139–144.
- Horinouchi, M., Sano, M., Taniuchi, T., and Shimizu, M. 1996. Stomach contents of the tetraodontid fish, *Takifugu pardalis*, in *Zostera* beds at Aburatsubo, central Japan. Ichthyological Research, 43: 455–458.
- 堀田秀之・小達 繁. 1966. 東北海区南部におけるボラ稚仔の分布. 魚類学雑誌, 14 (1): 67–73.
- Hussey, N. E., Cocks, D. T., Dudley, S. F. J., McCarthy, I. D. and Wintner, S. P. 2009. The condition conundrum: application of multiple condition indices to the dusky shark *Carcharhinus obscurus*. Marine Ecology Progress Series, 380: 199–212.
- 一丸俊雄・中国明信. 1999. 九州北西岸におけるツクシトビウオの成熟と産卵. 日本水産学会誌, 65 (4): 680–688.
- 飯田益生・鈴木邦弘. 2009. 浜名湖で新たに記録された魚たち. はまな, 526: 15.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. 597 pp.
- 今井貞彦. 1959. 日本近海産トビウオ類生活史の研究 I. 鹿児島大学水産学部紀要, 7: 1–85.
- Imamura, H. 1996. Phylogeny of the family Platycephalidae and related taxa (Pisces: Scorpaeniformes). Species Diversity, 1 (2): 123–233.
- Imamura, H. 2010. A new species of the flathead genus *Inegocia* (Teleostei: Platycephalidae) from East Asia. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), Supplement, 4: 21–29.
- Imamura, H. and Yoshino, T. 2009. Authorship and validity of two flatheads, *Platycephalus japonicus* and *Platycephalus crocodiles* (Teleostei: Platycephalidae). Ichthyological Research, 30 (1): 293–300.
- 稲生 陽・橘 建吾. 2016. 「本家は我が県」スマ対決 和歌山「出荷は先」、愛媛「重さは倍」高級養殖魚 大阪・梅田で同じ日販売. 毎日新聞. 2016年1月16日.
- Inoue, T. and Nakabo, T. 2006. The *Saurida undosquamis* group (Aulopiformes: Synodontidae), with description on a new species from southern Japan. Ichthyological Research, 53 (4): 379–397.
- 伊佐正樹・石川晃寛・加藤正洋・町田吉彦. 2007. カスミフグの北限記録. 四国自然史科学研究, 4: 51–53.
- 石田 修・田中邦三・佐藤秀一・庄司泰雅. 1977. ヒラメの資源生態調査 II. 千葉県水産試験場研究報告, 36: 23–31.

- Itoi, S., Kozaki, A., Komori, K., Tsunashima, T., Noguchi, S., Kawane, M. and Sugita, H. 2015. Toxic *Takifugu pardalis* eggs found in *Takifugu niphobleus* gut: Implications for TTX accumulation in the pufferfish. *Toxicon*, 108: 141–146.
- 伊東 宏. 2009. 駿河湾湾奥におけるシラス地曳網で採集された稚仔魚の食性. *水産海洋研究*, 73 (3): 181–189.
- 伊東正英. 2007. イサキ (色彩変異). 鹿児島大学総合研究博物館 News letter, 16: 13–14.
- 伊東正英・小枝圭太・本村浩之. 2016. 九州初記録のウミテング科魚類ヤリテング *Pegasus volitans*. *Nature of Kagoshima*, 42: 113–117.
- 伊藤猛夫. 1963. 河川におけるナガエバ *Caranx sexfasciatus* Quoy et Gaimard (アジ科) の生息について. *水産増殖*, 11 (4): 229–242.
- 伊藤智幸・由木雄一・辻 祥子. 1999. 日本周辺海域におけるコンナガ *Thunnus tonggol* の産卵の可能性と成長. 遠洋水産研究所研究報告, 36: 47–53.
- 岩井 保・中村 泉・松原喜代松. 1965. マグロ類の分類学的研究. 京都大学みさき臨海研究所特別報告, 2: 1–51.
- 岩崎行伸. 1999. 駿河湾沿岸域のイトヨリダイの魚体組成と産卵期. 東海大学海洋研究所研究報告, 20: 187–195.
- 岩坪洗樹. 2017. ハチビキ科. P. 162. 岩坪洗樹・本村浩之 (編) 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 岩坪洗樹・出羽慎一・崎向幸和・伊東正英・古田和彦・本村浩之. 2011. 鹿児島県から得られたハナダイ亜科2種コウリンハナダイ *Pseudanthias parvirostris* とサクラダイ *Sacura margaritacea* の記録. *Nature of Kagoshima*, 37: 17–22.
- 岩坪洗樹・伊東正英・中尾和成・目黒昌利・松沼瑞樹・本村浩之. 2009. 南九州から得られたカイユウセンニンフグ *Lagocephalus suzuensis* (フグ目フグ科). 生物地理学会会報, 64: 21–27.
- 岩坪洗樹・加藤 紳・本村浩之 (編). 2016. 南九州顕娃の海水魚. シーホースウェイズ, 南九州. 78 pp.
- 岩坪洗樹・木村清志・本村浩之. 2016. 東シナ海と鹿児島県枕崎市沖から得られた日本初記録のアジ科魚類 *Decapterus smithvanizi* サクラアジ (新称). *Nature of Kagoshima*, 42: 179–182.
- 岩坪洗樹・本村浩之 (編). 2017. 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 302 pp., 618 figs.
- 岩坪洗樹・大富 潤. 2015. 鹿児島湾初記録ならびに西限記録のアカメ *Lates japonicus*. 日本生物地理学会会報, 70: 239–243.
- Iwatsuki, Y. Akasaki, M. and Taniguchi, N. 2007. Review of the species of the genus *Dentex* (Perciformes: Sparidae) in the western Pacific Defined as the *D. hepselesomes* complex with the description of a new species, *Dentex abei* and a Redescription of *Evynnis tumifrons*. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology)*, Supplement, 1: 29–49.
- Iwatsuki, Y. and Kimura, S. 1996. First record of the carangid fish, *Alepes djedaba* (Forsskål) from Japanese waters. *Ichthyological Research*, 43 (2): 182–185.
- Iwatsuki, Y., Kimura, S., Kishimoto, H. and Yoshino, T. 1996. Validity of the gerreid fish, *Gerres macracanthus* Bleeker, 1854, with designation of a lectotype, and designation of a neotype for *G. filamentosus* Cuvier, 1829. *Ichthyological Research*, 43 (4): 417–429.
- Iwatsuki, Y. and T. Nakabo. 2005. Redescription of *Haplogenyus nigripinnis* (Schlegel in Temminck and Schlegel, 1843), a senior synonym of *H. nitens* Richardson, 1844, and a new species from Japan. *Copeia*, 2005 (4): 854–867.
- Iwatsuki, Y., Yoshino, T., Golani, D. and Kanda, T. 1995. The validity of the haemulid fish *Pomadasyus quadrilineatus* Shen and Lin, 1984 with the designation of the neotype of *Pomadasyus stridens* (Forsskål, 1775). *Japanese Journal of Ichthyology*, 41 (4): 455–461.
- Johnson, J. W. and Wilmer, J. W. 2015. *Plectorhinchus caeruleonothus*, a new species of sweetlips (Perciformes: Haemulidae) from northern Australia and the resurrection of *P. unicolor* (Macleay, 1883), species previously confused with *P. schotaf* (Forsskål, 1775). *Zootaxa*, 3985: 491–522.
- Jordan, D. S. and Snyder, J. O. 1901. A review of the apodal fishes or eels of Japan, with descriptions of nineteen new species. *Proceedings of the United States National Museum*, 23 (1239): 837–890.
- Jordan, D. S. and Snyder, J. O. 1907. Notes on fishes of Hawaii, with descriptions of new species. *Bulletin of the Bureau of Fisheries*, 26: 205–218, pls. 1–2.
- Jordan, D. S., Tanaka, S. and Snyder, J. O. 1913. A catalog of fishes of Japan. *Journal of the College of Science. Imperial University, Tokyo*, 33 (1): 1–497.
- 鏑木 紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たまたか舎, 西之表. 157 pp.
- 門村和志. 2001. 「オニオコゼ」について. 漁連だより, 73: 1–2.
- 門脇慧史・山口陽介・長田信人. 2015. 佐世保市黒島の定置網に入網した魚類. 長崎県生物学会誌, 76: 57–61.
- 海洋生物環境研究所. 2008. 魚のことわざ その34 イサキ. かいせいけん海の豆知識, 36: 1–2.
- 賀数大吾・佐久本孟寿・立原一憲・今井秀行. 2015. 西太平洋域で発見されたタカサゴとニセタカサゴの雑種. 日本生物地理学会会報, 70: 55–63.
- 角田俊平. 1970. 底流網によるキスの生態とその資源に関する研究. 広島大学水畜産学部紀要, 9: 1–55.
- 鎌田崇史・坂井陽一・橋本博明・具島健二. 2002. 瀬戸内海燧灘におけるセトダイ *Haplogenyus mucronatus* の生殖について. *生物圏科学*, 41: 13–21.
- 亀井正法・高間 浩. 1981. 相模湾で採集したイシダイとイシガキダイの天然交雑種について. 神奈川県水産試験場研究報告, 3: 15–17, pl. 1.
- 蒲原稔治. 1937. 土佐産魚類の9稀種. *動物学雑誌*, 49 (12): 424–429.
- Kamohara, T. 1952. Additions to the fish fauna of Prov. Tosa, Japan. *Reports of the Kochi University Natural Science*, 2: 1–10.
- Kamohara, T. and T. Yamakawa. 1967. On some fishes from the waters of Okinawa and Yaeyama. *Reports of the Usa Marine Biological Station*, 14 (1): 1–17.
- Kanayama, T. and Amaoka, K. 1980. First record of the scorpaenid fish *Brachyptrois serrulatus* from Japan, with a key to Japanese genera of the Pteroinae. *Japanese Journal of Ichthyology*, 28 (2): 181–183.
- Kanazawa, R. H. 1958. A revision of the eels of the genus *Conger* with descriptions of four new species. *Proceedings of the United States National Museum*, 108 (3400): 219–267, pls. 1–4.
- 加納碩雄・銭重 均・佐藤之紀・丸山純一・野口玉雄・橋本周久. 1985. 東京湾産シヨウサイフグの毒性. *食品衛生学雑誌*, 26: 489–495.
- 粕谷和寿. 2007. キスの飼育レポート. *水試の何でも魚ツチング*, 53: 1.
- 片山知史・秋山誠二・下村友季子・黒木洋明. 2015. 東京湾におけるクロアナゴとダイナンアナゴの成長様式と性比. *日本水産学会誌*, 81 (4): 688–693.
- 加藤昌一. 2011. ネイチャーウォッチングガイドブック スズメダイ ～ひと目で特徴がわかる図解付き～. 誠文堂新光社, 東京. 239 pp.

引用文献

- 加藤昌一. 2016. ネイチャーウォッチングガイドブック ベラ&ブダイ 日本で見られる192種+幼魚、成魚、雌雄、婚姻色のバリエーション. 誠文堂新光社, 東京. 319 pp.
- 加藤憲司・川辺勝俊・岡村陽一・木村ジョンソン. 2008. 小笠原諸島海域におけるトビウオ科魚類の生態と漁業. 東京都水産海洋研究報告, 2: 1-27.
- 河野光久・阿部 寧・田中伸和・手島和之. 1995. 目視観察に基づく日本海におけるトビウオ類の分布と移動. 水産海洋研究, 59 (2): 123-129.
- 河野光久・石田祐司・繁永裕司. 2010. 山口県日本海沿岸域におけるメダイの分布. 山口県水産研究センター研究報告, 8: 23-26.
- 川崎崇史. 2009. イシダイ? イシガキダイ? 交雑の珍魚を捕獲. 山口・田布施沖. 中国新聞. 2009年11月5日.
- 萱野泰久. 2010. 近年増加傾向にある魚類—セトダイとヒゲソリダイ—. 岡山県農林水産総合センター水産研究所だより, 371: 2.
- 萱野泰久. 2011. 播磨灘北西部海域で漁獲されるサツパ及びコノシロの外部形態と体成分の季節変化. 岡山水産研究報告, 26: 1-5.
- 京葉銀行. 2005. ちば魚〜きんぐ No. 23 マゴチ. 京葉銀行, 千葉. 3 pp.
- 紀伊民報. 2008. 水族館に行こう! 京都大学白浜水族館メジナ類. 紀伊民報. 2008年2月5日.
- 喜界島町役場. 2017. 伝統の島魚 ウフミ. 広報きかい, 604: 4-6.
- 木村基文・森井康宏・久野俊行・西田英明・吉村 浩・秋重祐章・千田哲資. 1998. 西部太平洋熱帯水域の漂流物に伴う魚類. 長崎大学水産学部研究報告, 79: 9-20.
- 木村清志. 1981. 熊野灘におけるイサキの食性. 日本水産学会誌, 47 (12): 1551-1558.
- 木村清志. 1997. カンパチ *Seriola dumerili*. Pp. 316-317. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 木村清志・伯耆匠二・山田守彦・本村浩之. 2008. 鹿児島県で採集された日本初記録のヒラギ科魚類ホソウケグチヒラギ(新称) *Secutor indicus*. 魚類学雑誌, 55 (2): 111-114.
- Kimura, S., Katahira, K. and Kuriwa, K. 2013. The red-fin *Decapterus* group (Perciformes: Carangidae) with the description of a new species, *Decapterus smithvanizi*. Ichthyological Research, 60: 363-379.
- 木村祐貴. 2017. えらぶのさかな、オヤビッチャ. Pp. 24-25. 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苦 健・小枝圭太(編). 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苦 健・小枝圭太. 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島市. 200 pp.
- 近畿大学大学新聞. 2000. 水産研究所 プリヒラを商標登録研究所の財産に. 近畿大学大学新聞. 2000年8月1日.
- 岸田周三. 1974. 東シナ海産ムロアジ属魚類の漁業生物学的研究—II—まき網漁獲物から見た魚種別分布と漁獲量. 西海区水産研究所研究報告, 45: 1-14.
- 北 奈美. 2007. ミナミギンガメアジ. 鹿児島大学総合研究博物館 News letter, 16: 13.
- 北九州市立水環境館. 2015. フグの仲間3種類. 水環境館だより, 62: 1.
- 清藤秀理. 2014. 最新の標識でカツオの行動が見えてきました—カツオは冷たい水が嫌い—. FRANEWS, 40: 18-19.
- Knapp, L. W. 1996. Review of the genus *Cociella* Whitley (Teleostei; Platycephalidae) with the description of three new species. Proceedings of the Biological Society of Washington, 109 (1): 17-33.
- 小林知吉. 2004. コシナガ *Thunnus tonggol* とクロマグロ *Thunnus thynnus* の幼魚期における形態的差異. 山口県水産研究センター研究報告, 2: 15-18.
- 小林知吉・岩本哲二. 1984. コシウダイの初期生活史. 魚類学雑誌, 30 (4): 412-418.
- 小林安雅. 1995. 海中記. 福音館書店, 東京. 190 pp.
- 児玉 修・大河俊之・杉本昌彦・稲葉太郎・山下慶太郎・猪原 亮. 2017. 高知県海域における漁況と主要魚種の資源生態. 高知県水産試験場, 須崎. 141 pp.
- 小枝圭太. 2017a. フェダイ科. Pp. 163-167. 岩坪洗樹・本村浩之(編). 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 小枝圭太. 2017b. クロサギ科. Pp. 169-170. 岩坪洗樹・本村浩之(編). 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 小枝圭太. 2017c. 小笠原諸島のハタンボ科魚類相. 日本生物地理学会会報, 71: 137-149.
- 小枝圭太. 2017d. 闇夜に生きる魚たち、夜の海はちょっと凄い. Pp. 46-47. 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苦 健・小枝圭太(編). 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- Koeda, K., Fujii, T., Koeda, S. and Motomura, H. 2016a. Fishes of Yoro-jima and Uke-jima islands in the Amami Islands: 89 new specimen-based records. Memoirs of Faculty of Fisheries Kagoshima University, 65: 1-20.
- Koeda K., Fukagawa, T., Ishihara, T. and Tachihara, K. 2013. Reproductive biology of nocturnal reef fish *Pempheris adusta* (Pempheridae) in Okinawa Island, Japan. Proceedings of 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium, Galaxea, 15: 221-228.
- 小枝圭太・畑 晴陵・本村浩之. 2015. 鹿児島県内之浦湾から得られたユキフリソデウオ *Zu cristatus*. Nature of Kagoshima, 41: 31-35.
- Koeda, K., Hibino, Y., Yoshida, T., Kimura, Y., Miki, R., Kunishima, T., Sasaki, D., Furukawa, T., Sakurai, M., Eguchi, K., Suzuki, H., Inaba, T., Uejo, T., Tanaka, S., Fujisawa, M., Wada, H. and Uchiyama, T. 2016b. Annotated checklist of fishes of Yonaguni-jima island, the westernmost island in Japan. The Kagoshima University Museum, Kagoshima. v + 120 pp.
- Koeda, K., Ishihara, T., Fukagawa, T. and Tachihara, K. 2016d. Life cycle differences between two species of genus *Pempheris* based on age determination. Ichthyological Research, 63: 519-528.
- Koeda, K., Ishihara, T. and Tachihara, K. 2012. The Reproductive biology of *Pempheris schwenkii* (Pempheridae) on Okinawa Island, southwestern Japan. Zoological Studies, 51 (7): 1086-1093.
- Koeda, K., Maekawa, T., Wada, H. and Motomura, H. 2016c. Records of the Orange Goatfish, *Mulloidichthys pflugeri* (Teleostei: Mullidae), from Amami-oshima and Yonaguni-jima islands in the Ryukyu Archipelago, southern Japan. South Pacific Studies, 37 (1): 1-8.
- 小枝圭太・本村浩之. 2015. 鹿児島県本土と薩南諸島3島から得られたリュウキュウハタンボ *Pempheris adusta* の記録と生物学的知見. Nature of Kagoshima, 41: 163-167.
- 小枝圭太・本村浩之. 2017. 鹿児島大学総合研究博物館に所蔵されている胃内容物魚類標本. Nature of Kagoshima, 43: 257-269.
- Koeda, K. and Motomura, H. 2017. A new species of *Pempheris* (Perciformes: Pempheridae) endemic to the Ogasawara Islands, Japan. Ichthyological Research. DOI: 10.1007/s10228-017-0586-3
- 小枝圭太・興 克樹・本村浩之. 2016. 奄美大島から得られたマンボウ科の稀種ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus*. Nature of Kagoshima, 42: 339-342.

- 小枝圭太・山田守彦・本村浩之. 2017. 内之浦湾から得られた九州沿岸初記録のセンネンダイ. *Nature of Kagoshima*, 43: 137-140.
- 小枝圭太・吉野哲夫・立原一憲. 2012. 沖縄島から採集されたツマグロハタンポ *Pempheris japonica* の初記録および南限記録とその稚魚の成長過程. *日本生物地理学会会報*, 67: 67-73.
- 小枝圭太・吉野哲夫・立原一憲. 2013. リュウキュウハタンポの識別的特徴と用いるべき学名. *魚類学雑誌*, 60 (2): 123-128.
- 小島純一. 1985. コバンアジおよびマルコバンの稚魚期の形態と南日本沿岸域における出現. *海洋生物環境研究所研究報告*, (85102): 1-32.
- 児島俊平. 1971. ホソビの回遊と産卵生態に関する研究 - IV, 産卵場における卵の分布状況. *水産学会誌*, 37: 284-288.
- 近藤 忍. 2008. パヤオ周辺の音波散乱層の分布特性 (パヤオ周辺でのマグロ類の飼料環境調査). *沖縄県水産海洋研究センター事業報告書*, 69: 31-41.
- 厚生省. 1953. 「毒かます」について. *衛環発*, 20: 21.
- 久保 満. 2004. 漁場環境調査. P. 19. 鹿児島県水産試験場(編). 平成15年度鹿児島県水産試験場事業報告書. 鹿児島県水産試験場, 鹿児島.
- 久保田 信. 2008. タツノオトシゴ類 (ヨウジウオ目, タツノオトシゴ亜科) とヒドロ虫類の共生の日本初記録. *Kuroshio Biosphere*, 4: 25-28, pls. 1-2.
- 久保田 信・田名瀬英明・中坊徹次. 2012. 和歌山県田辺湾にホシフグが大量漂着 (2例). *漂着物学会誌*, 10: 41-42.
- 久保田 正・佐藤 武. 2014a. 駿河湾の深海魚 (9) キュウリエソ (その1). *自然史しずおか*, 43: 9.
- 久保田 正・佐藤 武. 2014b. 駿河湾の深海魚 (9) キュウリエソ (その2). *自然史しずおか*, 44: 9.
- 工藤孝浩. 1998. 相模湾のパヤオ (表層式浮魚礁) において潜水観察された魚類群集. *神奈川県水産研究所研究報告*, 3: 1-18.
- 工藤孝浩. 2011. 横浜, 川崎および中の瀬海域から初記録の魚類 - V. *神奈川自然誌資料*, 32: 127-133.
- Kuriwa, K., Arihara, H., Chiba, S. N., Kato, S., Senou, H. and Matsuura, K. 2014. Checklist of marine fishes of the Zunan Islands, located between the Izu and Ogasawara (Bonin) islands, Japan, with zoogeographical comments. *Checklist*, 10 (6): 1479-1501.
- 黒田一紀・孔 立波・川崎将義・藤田 清. 2002. 漁獲量資料から見た日本近海産コノシロの長期変動. *水産海洋研究*, 66 (4): 239-246.
- 桑原昭彦・鈴木重喜. 1982. ヒラメ仔魚の鉛直分布と食性. *日本水産学会誌*, 48 (10): 1375-1381.
- 桑谷幸正・古旗喜太夫・船田秀之助. 1956. コノシロの生態学的研究 - 1, 産卵期と人工受精による卵発生について. *水産増殖*, 4 (3): 31-37.
- 京都府農林水産技術センター海洋センター. 2008. 季報第93号. 京都府海洋センター, 宮津. 17 pp.
- 京都府農林水産技術センター海洋センター. 2012. 季報第104号. 京都府農林水産技術センター海洋センター, 宮津. 14 pp.
- Last, P. R. and Moteki, M. 2001. Bramidae. Pp. 2824-2835 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific, volume 5: Bony fishes part 3 (Menidae to Pomacentridae)*. FAO, Rome.
- 馬淵浩司・林 公義・Fraser, T. H. 2015. テンジクダイ科の新分類体系にもとづく亜科・族・属の標準と名の提唱. *魚類学雑誌*, 62 (1): 29-49.
- Mabuchi, K., Okuda, N. and Nishida, M. 2006. Molecular phylogeny and stripe pattern evolution in the cardinalfish. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 38: 90-99.
- 前田洋志・小埜田 明・土屋光太郎. 2006. 表中層トロールにより沖ノ島島および伊豆・小笠原諸島周辺海域から採集された魚類および無脊椎動物. *東京都水産海洋研究報告*, 1: 31-49.
- Major, P. F. 1973. Scale feeding behavior of the leatherjacket, *Scomberoides lysan* and two species of the genus *Oligoplites* (Pisces: Carangidae). *Copeia*, 1973 (1): 151-154.
- 牧野清人・山田真之・安井里奈. 2003. 平成14年度魚類養殖実態調査. Pp. 39-45. 平成14年度水産海洋技術センター事業報告書. 沖縄県水産業改良普及センター, 糸満.
- 丸山敬悟. 2008. シリーズ: 瀬戸内海の魚たち第4回 キジハタ. おさかな瓦版, 24: 1.
- 益田 一・荒賀忠一・吉野哲夫. 1975. 魚類図鑑 南日本の沿岸魚. 東海大学出版会, 東京. 378 pp.
- 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編). 1984. *日本産魚類大図鑑*. 東海大学出版会, 東京. xx + 451 pp., 370 pls.
- 増田育司・酒匂貴文・松下 剛・白石哲郎・切通淳一郎・神村祐司・小澤貴和. 2003. 鹿児島湾産アカカマスの年齢, 成長及び年級群組成. *日本水産学会誌*, 69 (5): 709-716.
- Masuda, Y., Shinohara, N., Takahashi, Y., Tabeta, O. and Matsuura, K. 1991. Occurrence of natural hybrid between pufferfishes, *Takifugu xanthopterus* and *T. vermicularis*, in Ariake Bay, Kyushu, Japan. *Nippon Suisan Gakkaishi*, 57 (7): 1247-1255.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索. I-III. 石崎書店, 東京. xi + v + 1605 pp., 135 pls.
- 松井誠一・福元勝志・塚原 博. 1987a. 沿岸域に出現するフグ類の生態学的研究. I. 筑前沿岸部におけるフグの出現時間と成熟について. *九州大学大学院農学研究院学芸雑誌*, 41 (3-4): 97-104.
- 松井誠一・福元勝志・塚原 博. 1987b. 沿岸域に出現するフグ類の生態学的研究 II. ショウサイフグの年齢と成長. *九州大学大学院農学研究院学芸雑誌*, 41 (3-4): 105-110.
- 松宮義晴・高橋勝宏. 1983. 平戸島志々伎湾におけるイサキの食性. *西海区水産研究所研究報告*, 59: 23-32.
- 松沼瑞樹・福井美乃・山田守彦・本村浩之. 2016. 大隅半島東岸と鹿児島湾から得られたコチ科セレベスコ *Thysanophrys celebica*. *Nature of Kagoshima*, 42: 123-128.
- 松沼瑞樹・原崎 森・目黒昌利・荻原豪太・本村浩之. 2009. イサキ科魚類2種クロコショウダイとスジミゾイサキの鹿児島県における記録およびクロコショウダイとコショウダイ幼魚期の形態比較. *日本生物地理学会会報*, 64: 57-67.
- 松沼瑞樹・山田守彦・本村浩之. 2017. 鹿児島県内之浦湾から得られたトラギス科ホムトラギス *Parapercis randalli* の分布北限記録および成長にともなう形態変化. *日本生物地理学会会報*, 71: 15-24.
- 松尾 怜・木村清志. 2017. 口永良部島から得られたトウゴロウイワシ科魚類オオスジイソイワシ *Hypoatherina barnesi*. *Nature of Kagoshima*, 43: 77-80.
- 松岡正信. 2008. 日本産マイワシの初期発育と産卵生態に関する研究. *水産総合研究センター研究報告*, 22: 87-183.
- 松岡正信・宮地邦明・加藤 修. 2002. 薩南海域におけるマイワシとカタクチイワシの産卵水深に関する観察例. *水産総合研究センター研究報告*, 2: 15-23.
- 松島 健. 2016. 新見でカマスサワラ属の上顎化石. 岡山理科大学の石垣教授ら鑑定. *山陽新聞*. 2016年6月23日.
- 松浦啓一. 1984. フグ科. Pp. 348-351. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編). *日本産魚類大図鑑*. 東海大学出版会, 東京.

引用文献

- 松浦啓一. 1996. ナミダフグの学名. 魚類学雑誌, 43 (1): 41-42.
- 松浦啓一. 1997a. ホシフグ *Arothron firmamentum*. Pp. 706-707. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 松浦啓一. 1997b. クロサバフグ *Lagocephalus gloveri*. P. 713. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 松浦啓一. 1997c. シロサバフグ *Lagocephalus wheeleri*. P. 716. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- Matsuura, K. 2010. *Lagocephalus wheeleri* Abe, Tabeta & Kitahama, 1984, a junior synonym of *Tetraodon spadiceus* Richardson, 1845 (Actinopterygii, Tetraodontiformes, Tetraodontidae). Memoirs of the Natural Museum of Natural Sciences, Tokyo, 46: 39-46.
- Matsuura, K. 2015. A new pufferfish of the genus *Torquigaster* that builds "mystery circles" on sandy bottoms in the Ryukyu Islands, Japan (Actinopterygii: Tetraodontiformes: Tetraodontidae). Ichthyological Research, 62: 207-212.
- Matsuura, K. 2016. A new pufferfish, *Arothron multilineatus* (Actenopterygii: Tetraodontiformes: Tetraodontidae), from the Indo-West Pacific. Ichthyological Research, 63 (4): 480-486.
- 松浦啓一. 2016. 日本産フグ類図鑑. 東海大学出版部, 平塚市. 127 pp.
- Matsuura, K. 2017. Taxonomic and nomenclatural comments on two puffers of the genus *Takifugu* with description of a new species, *Takifugu flavipterus*, from Japan (Actinopterygii, Tetraodontiformes, Tetraodontidae). Bulletin of National Museum of Nature and Science, Series A, 43 (1): 71-80.
- Matsuura, K., Sakai, K. and Yoshino, T. 1993. Records of two diodontid fishes, *Cylichthys orbicularis* and *C. spilostylus*, from Japan. Japanese Journal of Ichthyology, 40 (3): 372-376.
- Matsuura, K. and Satoh, T. P. 2016. Redescription of *Lagocephalus cheesemani* (Clarke 1897), a senior synonym of *Lagocephalus gloveri* Abe and Tabeta 1983, based on morphological and genetic comparisons (Actinopterygii: Tetraodontiformes: Tetraodontidae). Ichthyological Research, 64 (1): 104-110.
- McCosker, J. E., Ide, S. and H. Endo, H. 2012. Three new species of ophichthid eels (Anguilliformes: Ophichthidae) from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science (Series A) Supplement, 6: 1-16.
- Mead, G. W. 1972. Bramidae. Dana Report, 81: 1-166, pls. 1-9.
- Melville, R. 1983. Opinion 1272. *Sciaena nibe* Jordan & Thompson, 1911 (Pisces): specific name *nibe* conserved under the plenary powers. Bulletin of Zoological Nomenclature, 41: 26-27.
- 三木涼平. 2017. 大隅諸島を代表する魚. P.42. 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯吉 健・小枝圭太 (編). 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- みなと新聞. 2015. 「カタボシイワシ」さつま揚げに. みなと新聞. 2015年11月25日.
- 三谷文夫. 1958. 胃の内容物から見たブリの食性-I. 日本水産学会誌, 24 (3): 176-181.
- 三浦信男. 2012. 美ら海市場図鑑 知念市場の魚たち. ウェブ企画, 与那原. 140 pp.
- 宮木廉夫・道津喜衛. 1988. 1983年秋の長崎県小値賀島西沖のクロサバフグすくい網漁について. 長崎大学水産学部研究報告, 63: 5-9.
- Miyaki, K., Tabeta, O. and Kayano, H. 1995. Karyotypes in six species of pufferfishes genus *Takifugu* (Tetraodontidae, Tetraodontiformes). Fisheries Science, 61 (4): 594-598.
- 宮本 圭・岡 慎一郎. 2014. ホソイトヒキサギ *Gerres macracanthus* (スズキ目: クロサギ科) の沖縄島からの記録. Fauna Ryukyuna, 17: 1-6.
- 宮崎里帆・宮崎真美子・梁 佳・曹 俊傑・平坂勝也・橋勝康・谷山茂人. 2015. ワニエソかまぼこの火戻り現象に及ぼす緑豆トリブシンインヒター添加の効果. 日本食品化学学会誌, 22 (3): 175-180.
- 水田浩二. 2001. キビナゴの生態について. 漁連だより, 76: 9-10.
- Mohri, M., Sasaki, T., Ohgaki, R., Kamano, T., Enoshima, T., Gotoh, H. and Satoh, S. 2014. Biodiversity as observed from catch size differences between longtail tuna and other commercial fish species caught with set net off Futaoi Island (western Sea of Japan). Fisheries Engineering, 50 (3): 213-218.
- 森下悟至・本村浩之. 2018. フサカサゴ科マツバラカサゴ属魚類 *Neomerinthe erostris* ヤブサメカサゴ (新称) の日本からの初記録. タクサ.
- 森脇晋平・堀 玲子・吉田太輔. 2012. 沿岸漁業の複合経営に関する研究-IV 島根半島沿岸海域におけるアカアマガダイはえ縄漁業の実態. 島根県水産技術センター研究報告, 4: 23-32.
- Morohashi, Y. and Sasaki, K. 2003. Intensive cannibalism and feeding on bregmatocerotids in *Champsodon snyderi* (Champsodontidae): evidence for pelagic predation. Ichthyological Research, 50: 387-390.
- 師田彰子・藤田 清. 1995. ハワイ近海におけるコバンザメ類の寄主およびヒシコバンの繁殖生態. 魚類学雑誌, 42 (2): 203-207.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 本村浩之・出羽慎一・古田和彦・松浦啓一 (編). 鹿児島県三島村一硫黄島と竹島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば. 390 pp., 883 figs.
- Motomura, H., Habano, A., Arita, Y., Matsuoka, M., Furuta, K., Koeda, K., Yoshida, T., Hibino, Y., Jeong, B., Tashiro, S., Hata, H., Fukui, Y., Eguchi, K., Inaba, T., Uejo, T., Yoshiura, A., Ando, Y., Haraguchi, Y., Senou, H. and Kuriwa, K. 2016. The ichthyofauna of the Uji Islands, East China Sea: 148 new records of fishes with notes on biogeographical implications. Memoirs of Faculty of Fisheries Kagoshima University, 64: 10-34.
- Motomura, H., Iwatsuki, Y. and Yoshino, T. 2001b. A new species, *Polydactylus siamensis*, from Thailand and redescription of *P. plebeius* (Broussonet, 1782) with designation of a neotype (Perciformes: Polynemidae). Ichthyological Research, 48 (2): 117-126.
- Motomura, H., Kimura, S. and Iwatsuki, Y. 2001a. Distributional range extension of a clupeoid fish, *Sardinella melanura* (Cuvier, 1829), in southern Japan (Teleostei: Clupeiformes). Biogeography, 3: 83-87.
- Motomura, H. and Matsuura, K. (eds.) 2013. Fishes of Yakushima Island - A world heritage island in the Osumi group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo. vii + 264 pp., 704 figs.
- 本村浩之・松浦啓一 (編). 2014. 奄美群島最南端の島 - 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば. 648 pp., 1808 figs.
- 本村浩之・佐土哲也・木村清志. 2002. ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* の摂餌行動. 魚類学雑誌, 49: 156-157.
- Motomura, H., Yamashita, M., Itou, M., Haraguchi, Y. and Iwatsuki, Y. 2012. First records of the Two-tone Goatfish, *Upeneus guttatus*, from Japan, and comparisons with *U. japonicus* (Perciformes: Mullidae). Species Diversity, 17 (1): 7-14.

- 本村浩之・吉野哲夫・高村直人. 2004. 日本産フサカサゴ科オニカサゴ属魚類 (Scorpaenidae: *Scorpaenopsis*) の分類学的検討. 魚類学雑誌, 51 (2): 89-115.
- 本永文彦. 1991. 沖縄島における定置網漁業調査. Pp. 94-102. 沖縄県水産試験場(編). 平成元年度沖縄県水産試験場事業報告書. 沖縄県水産試験場, 那覇.
- Moyer, J. T. and Sano, M. 1985. First record of the lizardfish *Synodus jaculum* from Japan. Japanese Journal of Ichthyology, 32 (1): 90-92.
- 村瀬敦直・宮崎佑介・瀬根 宏. 2012. 屋久島産標本に基づくヒラスズキ *Lateolabrax latus* の再記載と河川における生息状況. 魚類学雑誌, 59 (1): 11-20.
- 村田 修. 1998. 海水養殖魚の品種改良に関する研究. 近畿大学水産研究所報告, 6: 1-101.
- Musikasinthorn, P. 2013. *Tylosurus acus melanotus* (Bleeker, 1850), P. 64 in Yoshida, T., Motomura, H., Musikasinthorn, P. and Matsuura, K., eds. Fishes of northern Gulf of Thailand. National Museum of Nature and Science, Tsukuba, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto and the Kagoshima University Museum, Kagoshima.
- Myers, R. F. 1989. Micronesian reef fishes. A practical guide to the identification of the coral reef fishes of the tropical central and Western Pacific. 2nd edition, Coral Graphics, Territory of Guam. vi + 299 pp., 144 pls.
- Nader, M., Indary, S., and Boustany, L. 2012. The puffer fish *Lagocephalus sceleratus* (Gmelin, 1789) in the Eastern Mediterranean. EastMed Technical Documents 10. 39 pp. FAO - EastMed Project, Athens.
- 永井宏史. 2009. 海洋危険生物に由来する蛋白質毒素の性状と機能. 蛋白質 核酸 酵素, 54 (5): 621-627.
- 長崎県総合水産試験場漁業資源部栽培漁業科. 2007. クエ(地方名アラ)の年齢と成長について. 漁連だより, 151: 1-2.
- 長澤和也・上野大輔. 2016. 日本産魚類に日本産魚類に寄生するカクレムシ科(新称) Philichthyidae カイアン類の目録(1924-2016年). 生物圏科学, 55: 71-84.
- 名護海上保安署. 2014. ダツによる死傷事例. 名護海上保安署通信, 9: 1.
- 中坊徹次. 2001. カユウセンニンフグ. P. 278. 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳(編). 以布利 黒潮の魚. 海遊館, 大阪.
- 中坊徹次(編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野. 2428 pp.
- 中坊徹次・平嶋義宏. 2015. 日本産魚類全種の学名 語源と解説. 東海大学出版部, 秦野. xv + 372 pp.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013a. サイウオ科, Pp. 491-492, 1870-1872. 中坊徹次(編). 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013b. オニオコゼ科, Pp. 710-712, 1948. 中坊徹次(編). 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013c. コチ科, Pp. 734-740, 1953-1955. 中坊徹次(編). 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- Nakamura, H. 1941. On the habits of the istiophorid fishes, particularly the spawning of the black marlin, *Makaira mazara*. Zoological Magazine, 53 (1): 17-21.
- Nakamura, H. 1942. On the ecology of the istiophorid fishes of Taiwan waters. Proceedings of the Science Fisheries Association, 9 (1): 45-51.
- Nakamura, I. 1983. Systematics of the billfishes (Xiphiidae and Istiophoridae). Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 28 (5/6): 255-396.
- 中村 泉. 1997a. ゴマサバ. P. 657. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 中村 泉. 1997b. クロマグロ. P. 660. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- Nakamura, I. 2001. Istiophoridae. Pp. 3759-3764 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific, vol. 6, no. 4. FAO, Rome.
- 中村潤平・小枝圭太・畑 晴陵・本村浩之. 2017. 鹿児島県本土初記録のニセゴイシウツボ. Nature of Kagoshima, 43: 17-21.
- 中津成美. 2017. 近代水産研「クエタマ」養殖成功 クエの4倍速で成長. 毎日新聞. 2017年4月2日.
- 仲谷一宏. 2016. サメー海の王者たち一改訂版. ブックマン社, 東京. 248 pp.
- 並田正和. 1977. 長島水産実験所周辺の魚類相. 鹿児島大学水産学部修士論文, 鹿児島県. 250 pp., 12 pls.
- 日本経済新聞. 2010b. 未利用の魚, すり身加工. マルハニチロなど開発. 日本経済新聞. 2010年5月12日.
- 日本経済新聞. 2010a. オコゼに刺され男性死亡. 日本経済新聞. 2010年8月6日.
- 西田高志・乾 隆帝・鬼倉徳雄・及川 信. 2008. 北部九州岩礁域における磯魚群集と環境構造の関連性. 応用生体工学, 11 (1): 51-62.
- 西松洋一郎. 2017. はりまの海水魚. 姫路市立水族館. 姫路. 58 pp.
- 西村三郎. 1959. 1955年春季能登半島近海におけるキウリエソの産卵ならびに卵・仔魚の生態. 日本海区水産研究所研究年報, 5: 61-75.
- 西日本新聞. 1992. 人食いザメ!? 捕らえられた 瀬戸内のホオジロザメと同種 定置網にかかる 鹿児島・内之浦町沖. 西日本新聞. 1992年5月15日.
- 西日本新聞. 2016. 食の力 だし素材 あごだしブーム 戸惑う地元 平戸ブランド化の戦略も. 西日本新聞. 2016年9月21日.
- Nishishimamoto, S. 1963. Anchovies from the Ryukyu Islands. Bulletin of Arts and Science Division, University of Ryukyus. Mathematics and Natural Sciences, 6: 54-63.
- 野口玉雄. 2004. マリトギシン(魚介毒)によるこれまでは異なる食中毒. 冷凍食品技術研究, 62: 1-10.
- 落合 明・煤田 晋. 1969. 高知県沿岸におけるボラの産卵生態について. 魚類学雑誌, 16 (2): 50-54.
- 小谷健二・今村 央. 2009. 北海道渡島半島沿岸から記録された2種の魚類. メゴチとヒゲセジロハゼ. 北海道大学水産化学研究彙報, 59 (2): 43-46.
- 大江文雄・西本博行・奥村好次・東 好昭. 1981. 瑞浪層群産「カマスサワラ」属魚類化石. 瑞浪市化石博物館研究報告, 8: 25-46, pls. 6-10.
- 小川佳久・片山真基・井上弘之・田平雄二・福島築廣・伊藤 靖. 2012. 貝殻漁礁におけるオニオコゼの蝟集事例. Pp. 19-22. 日本水産工学会(編). 日本水産工学会学術講演論文集. 日本水産工学会
- 荻原豪太. 2007. オグロイワシ. 鹿児島大学総合研究博物館 News letter, 16: 9.
- 荻原豪太・吉田朋弘・本村浩之. 2009. 鹿児島湾から得られたイズビメイエ *Dasyatis izuensis* (エイ目: アカエイ科). Nature of Kagoshima, 35: 63-66.
- 大橋祐太・本村浩之. 2011. 大隅諸島以北の鹿児島県におけるカレイ目魚類相. Nature of Kagoshima, 37: 71-118.
- Oka, S. and Miyamoto, K. 2015. Reproductive biology and growth of bluestripe herring *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Rüppell, 1837) in the northernmost waters. Journal of Applied Ichthyology, 31: 709-713.
- 岡 有作. 2011. 特集 駿河湾産トビウオ類稚魚図鑑. 海のはくぶつかん, 41 (2): 4-6.
- 岡田弥一郎・松原喜代松. 1938. 日本産魚類検索. 三省堂, 東京. xi + 584 pp.
- Okada, Yo K. 1966. Sex reversal in *Inegocia mederdervoortii* with special reference to repetition of hermaphroditic state. Proceedings of Japan Academy, 42 (5): 497-502.

引用文献

- 岡村 収. 1997. メクラアナゴ *Dysomma anguillare*. P. 80. 岡村 収・尼岡邦夫(編). 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 岡村 収・尼岡邦夫(編). 1997. 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京. 784 pp.
- 奥原 誠. 2004. パシフィックカジキについて. うしお, 303: 1-2.
- 大森純子. 2007. カタバシイワシ. 鹿児島大学総合研究博物館 Newsletter, 16: 8.
- 小山内泉帆. 2017. 口永良部島, ふるさとの味. Pp. 39-41. 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太(編). 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 大下誠二. 2009. 九州北西岸におけるカタクチイワシの生物特性に関する研究. 日本海ブロッコ試験研究集録, 44: 51-60.
- Oshimo, S., Shiraiishi, T., Tanaka, H., Yasuda, T., Yoda, M., Ishida, H. and Tomiyasu, S. 2014. Growth and reproductive characters of the roughear scad *Decapterus tabl* in the East China Sea. JARQ, 48: 245-252.
- Oshimo, S., Yoda, M., Itasaka, N., Morinaga, N. and Ichimaru, T. 2006. Age, growth and reproductive characteristics of round scad *Decapterus maruadsi* in the waters off west Kyushu, the East China Sea. Fisheries Science, 72: 855-859.
- 大城直雅・照屋奈津子・古謝あゆ子・玉那覇康二. 2003. 沖縄県における化学物質及び自然毒による食中毒及び苦情事例 平成 14 年度. 沖縄県衛生環境研究所報, 37: 95-97.
- Osterhage, D., Pogonoski, J. J., Appleyard, S. A. and White, W. T. 2016. Integrated taxonomy reveals hidden diversity in northern Australian fishes: A new species of seamoth (genus *Pegasus*). PLoS ONE, 11 (3): e0149415.
- 太田 裕・下條 武・福田将数・松本隆之. 2002. パヤオ周辺でのキハダ, メバチの遊泳行動生理. Pp. 41-51. 沖縄県水産試験場(編). 平成 13 年度沖縄県水産試験場事業報告書. 沖縄県水産試験場, 那覇.
- 太田健吾. 2006. シリーズ: 瀬戸内海のさかなたち第 6 回. オニオコゼ. おさかな瓦版, 26: 1.
- 小澤貴和・角 輝秀・増田育司・松浦修平. 1989. 甌列島産キビナゴの個体群構造. 日本水産学会誌, 55 (6): 985-988.
- Paxton, J. R. and Hoese, D. F. 1985. The Japanese sea bass, *Lateorabrax japonicus* (Pisces, Percichthyidae), an apparent marine introduction in to eastern Australia. Japanese Journal of Ichthyology, 31 (4): 369-372.
- Pots, G. W. 1980. The predatory behavior of *Caranx melampygus* in the channel environment of Aldabra Atoll. Journal of Zoology Society, London, 192: 323-350.
- Randall, J. E. 1985. On the validity of the tetraodontid fish *Arothron manilensis* (Procé). Japanese Journal of Ichthyology, 32 (3): 347-354.
- Randall, J. E. 2004. Revision of the goatfish genus *Parupeneus* (Perciformes: Mullidae), with descriptions of two new species. Indo-Pacific Fishes, 36: 1-64.
- Randall, J. E. 2005. Reef and shore fishes of the South Pacific: New Caledonia to Tahiti and the Pitcairn Islands. xii + 707 pp. University of Hawai'i Press, Honolulu.
- Randall, J. E., Allen, G. R. and Steene, R. C. 1990. Fishes of the Great Barrier Reef and Coral Sea. University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii. 506 pp.
- Randall, J. E. and DiBattista, J. 2012. *Etrumeus makiawa*, a new species of round herring (Clupeidae: Dussumierinae) from the Hawaiian Islands. Pacific Science, 66 (1): 97-110.
- Reardon, M., Márquez, F., Trejo, T. and Clarke, S. C. 2009. *Alopias pelagicus*. In IUCN 2011 ed. IUCN Red List of Threatened Species. Electric Version 2017. www.iucnredlist.org
- Reinboth, R. 1967. Protogynie bei *Chelidoperca hirundinacea* (Cuv. et Val.) (Serranidae). Ein Diskussionsbeitrag zur Stammesgeschichte amphisexueller Fische. Annotationes Zoologicae Japonensis, 40 (4): 181-186.
- Ribot-Carballal, M. C., Galván-Magaña, F. and Quiñónez-Velázquez, C. 2005. Age and growth of the shortfin mako shark, *Isurus oxyrinchus*, from the western coast of Baja California Sur, Mexico. Fisheries Research, 76: 14-21.
- Russell, B. C. 1986. Review of the western Indian Ocean species of *Nemipterus* Swainson 1839, with description of a new species. Senckenbergiana Biologica, 67: 19-35.
- Russell, B. C. 1990. FAO species catalogue. Vol. 12. Nemipterid fishes of the world (thread fin breams, whiptail breams, monocle breams, dwarf monocle breams and coral breams). Family nemipteridae. An annotated and illustrated catalogue of the nemipterid species known to date. FAO Fisheries Synopsis, 12: i-v + 1-149, pls. I-VIII.
- Russell, B. C. 1993. A review of the threadfin breams of the genus *Nemipterus* (Nemipteridae) from Japan and Taiwan, with description of a new species. Japanese Journal of Ichthyology, 39: 295-310.
- Russell, B. C. and Cressey, R. F. 1979. Three new species of Indo-west Pacific lizardfish (Synodontidae). Proceedings of the Biological Society of Washington, 92 (1): 166-175.
- 三郎丸 隆・塚原 博. 1984. 福岡北部沿岸におけるメジナの生活史. 九州大学農学部学藝雑誌, 39 (2): 35-48.
- 坂井恵一. 1991. 日本のイソズミ属魚類は 4 種. 伊豆海洋公園通信, 2 (8): 2-5.
- 坂井恵一. 2004. 日本のイソズミ属魚類. のと海洋ふれあいセンターだより 能登の海中林, 20: 2-5.
- Sakai, K. and Nakabo, T. 2004. Two new species of *Kyphosus* (Kyphosidae) and a taxonomic review of *Kyphosus bigibbus* Lacepède from the Indo-Pacific. Ichthyological Research, 51 (1): 20-32.
- Sakai, K. and Nakabo, T. 2006. Taxonomic reviews of two Indo-Pacific sea chubs, *Kyphosus cinerascens* (Forsskal, 1775) and *Kyphosus sydneyanus* (Günther, 1886). Ichthyological Research, 53 (4): 337-356.
- 阪地英男・久野正博・梶 達也・青野怜史・福田博文. 2010. 太平洋における成長段階別の回遊様式の把握. 水産総合研究センター研究報告, 30: 36-73.
- 榎 純一郎. 2010. 沿岸・近海漁業資源調査—II. P. 74. 鹿児島県水産技術センター(編). 平成 21 年度鹿児島県水産技術センター事業報告書. 鹿児島県水産技術センター, 指宿.
- 坂巻陽平. 2010. 本県初タイワンヒイラギ. 高知新聞. 2010 年 10 月 16 日.
- 櫻井 真. 2007. 美味しい魚の不思議な生態. 鹿児島大学総合研究博物館 News letter, 17: 12.
- 櫻井 真・広瀬 純・四宮明彦. 2003. ハオコゼの求愛・産卵行動. 魚類学雑誌, 50 (2): 165-168.
- 真田康広・藤田正夫・石田 実. 1994. 太平洋南部におけるウルメイワシの耳石日周鱗に基づく年齢と成長. 南西外海の資源・海洋研究, 10: 55.
- 佐藤友康. 2001. エソ科. Pp. 152-153. 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳(編). 以布利 黒潮の魚. 海遊館, 大阪.
- 佐藤友康・町田吉彦・山本藍子. 2007. 浦ノ内湾の潮間帯の砂泥中から得られたミナモトテウミヘビの若魚(ウナギ目ウミヘビ科). 四国自然史科学研究, 4: 41-44.

- 澤井悦郎・山田守彦. 2017. 鹿児島県産ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus* 若魚の外部形態. *Nature of Kagoshima*, 43: 249–252.
- Sawai, E., Yamanoue, Y., Nyegaard, M. and Sakai, Y. 2017. Redescription of the bump-head sunfish *Mola alexandrini* (Ranzani 1839), senior synonym of *Mola ramsayi* (Giglioli 1883), with designation of a neotype for *Mola mola* (Linnaeus 1758) (Tetraodontiformes: Molidae). *Ichthyological Research*. DOI: 10.1007/s10228-017-0603-6
- 清家康尊. 2017. 完全養殖「スマ」初出荷 愛南. 愛媛新聞, 2017年5月10日.
- 瀬能 宏. 1988. ボラ *Mugil cephalus*. Pp. 458–461. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海 (編). 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京.
- Senou, H. 2001. Sphyrænidae. Pp. 3685–3697 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific*, vol. 6, no. 4. FAO, Rome.
- 瀬能 宏. 2013a. サギフエ科. Pp. 610, 1907–1908. 中坊徹次 (編). *日本産魚類検索 全種の同定*, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 瀬能 宏. 2013b. アジ科. Pp. 878–899, 1991–1995. 中坊徹次 (編). *日本産魚類検索 全種の同定*, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 瀬能 宏. 2014. オニカマス *Sphyræna barracuda* (Edwards, 1771). P. 577. 本村浩之・松浦啓一 (編). 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 瀬戸山公義. 2000. 第6節 とびうお漁業. Pp. 96–113. 鹿児島県 (編). *鹿児島県水産技術のあゆみ*. 鹿児島県, 鹿児島.
- 洪野拓郎・重田利拓・阿部 寧・藤田 轟・橋本博明・具島健二. 1996. 口永良部島におけるトラギス科・エソ科魚類の食性. *生物生産学*研究, 35 (2): 105–111.
- 重田利拓. 2007. 瀬戸内海の魚類にみられる異変 — 熱帯・段階性魚類の出現と人的被害. *瀬戸内通信*, 6: 7–8.
- 重田利拓・小畑泰弘・星野浩一・岡本裕之・正岡哲治・清水則雄. 2012. 瀬戸内海で採集されたアルビノのクサフグ *Takifugu niphobes* (フグ科). *広島大学総合博物館研究報告*, 4: 13–21.
- 島田和彦. 2013. イサキ科. Pp. 940–945, 2008–2011. 中坊徹次 (編). *日本産魚類検索 全種の同定* 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- 島本信夫・渡辺 淳. 1994. 瀬戸内海東部海域におけるマダイの食性とその季節変化. *日本水産学会誌*, 60 (1): 65–71.
- 霜村胤日人. 2013. 浜名湖で新たに記録された魚たち. *はまな*, 544: 6.
- Shimose, T. and Tachihara, K. 2005. Age, growth and maturation of the blackspot snapper *Lutjanus gulviflammus* around Okinawa Island, Japan. *Fisheries Science*, 71: 48–55.
- 篠原士郎. 1966. クロアジモドキ (*Stromateus niger* Bloch) の分類学的位置について. *琉球大学文理学部紀要理学篇*, 10, 46–49.
- 塩屋照雄・原田 学. 1975. イシダイ・イシガキダイに関する調査. Pp. 37–57. 東京都水産試験場技術管理部 (編). 昭和49年度太平洋中区栽培漁業漁場資源生態調査 (マダイ・イシダイ・イシガキダイ). 東京都水産試験場, 東京.
- Shiraishi, T., Tanaka, H., Oshimo, S., Ishida, H. and Morinaga, N. 2010. Age, growth and reproduction of two species of scad, *Decapterus macrosoma* and *D. macarellus* in the waters off southern Kyushu. *JARQ*, 44 (2): 197–206.
- 白石哲郎・由上龍嗣・田中寛繁・依田真里・大下誠二. 2010. 東シナ海におけるアジ科魚類の生物特性に関する最新知見. *西海ブロック漁海況研報*, 18: 33–48.
- 宍道弘敏. 2014. 鹿児島県海域におけるブリ類の魚種別漁獲量. 鹿児島水銀センター研究報告, 5: 1–6.
- Shpigel, M. and Fishelson, L. 1989. Habitat partitioning between species of the genus *Cephalopholis* (Pisces, Serranidae) across the fringing reef of the Gulf of Aqaba (Red Sea). *Marine Ecology Progress Series*, 58: 17–22.
- Smith, D. G. 1989. Family Congridae. Pp. 460–567 in Böhlke, E. B., ed. *Fishes of the western north Atlantic*, part nine. Volume one. *Memoirs of the Sears Foundation of Marine Research*. Allen Press, Kansas.
- Smith-Vaniz, W. F. 1999. Carangidae jacks and scads (also trevallies, queenfishes, runners, amberjacks, pilotfishes, pampanos, etc.). Pp. 2659–2756 in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific*. Vol. 5. *Bony fishes part 2 (Mugilidae to Carangidae)*. FAO, Rome.
- Smith-Vaniz, W. F. and Jelks, H. L. 2006. Australian trevallies of the genus *Pseudocaranx* (Teleostei: Carangidae), with description of a new species from Western Australia. *Memoirs of Museum Victoria*, 63 (1): 97–106.
- Snyder, J. O. 1912. Japanese shore fishes collected by the United States Bureau of fisheries steamer “Albatross” expedition of 1906. *Proceedings of U. S. National Museum*, 42 (1909): 399–450, pls. 51–61.
- Snyder, J. O. 1904. A catalogue of the shore fishes collected by the steamer “Albatross” about the Hawaiian Islands in 1902. *Bulletin of the U. S. Fish Commission*, 22: 513–538, pls., 1–13.
- Strasburg, D. W. 1964. Further notes on the identification and biology of echeineid fishes. *Pacific Science*, 18: 51–57.
- Sudekum, A. E., Parrish, J. D., Radtke, R. L. and Ralston, S. 1991. Life history and ecology of large jacks in undisturbed, shallow, oceanic communities. *Fisheries Bulletin*, 89: 493–513.
- 末広澄夫. 1960. オキヒイラギの発光細菌に関する研究 I: 発光の持続性について. *九州大学農学部学藝雑誌*, 18 (1): 103–108.
- 末吉摩耶子・幸塚久典・甲斐宗一郎. 2009. 長崎県長崎半島沿岸で捕獲したイシダイとイシガキダイの天然交雑種. *長崎県生物学会誌*, 65: 57–60.
- 水産庁. 2007. 魚介類の名称のガイドラインについて. 水産庁, 東京. 16 pp.
- 水産総合研究センター西海区水産研究所. 2004. 東シナ海・日本海のいわし類の現在. 水産総合研究センター西海区水産研究所, 長崎. 16 pp.
- Suzuki, K. 1962. Anatomical and taxonomical studies on the carangid fishes of Japan. *Report of Faculty of Fisheries, Prefectural University of Mie*, 4 (2): 43–232.
- 鈴木克美. 2003. ハーフのイシガキイシダイ. *海のはくぶつ* かん, 33 (3): 4–5.
- 鈴木克美・小林弘治・日置勝三・坂本隆志. 1974. 駿河湾におけるサクラダイ *Sacura margaritacea* の生態. *魚類学雑誌*, 21 (1): 21–33.
- Suzuki, S., Kawashima, T. and Nakabo, T. 2009. Taxonomic review of East Asian *Pleuronichthys* (Pleuronectiformes: Pleuronectidae), with description of a new species. *Ichthyological Research*, 56: 276–291.
- 鈴木寿之・瀬能 宏・花崎勝司. 1995. 日本における分布が確認されたウチウミマダラエソ (新称) について. *伊豆海洋公園通信*, 6 (9): 2–3.

引用文献

- Tabassum, S., Yousof, F., Elahi, N., Rahman, Md. M., and Hossain, Md. Y. 2014. Diets of halfbeak *Hemiramphus lutkei* (Valenciennes, 1847) from Karachi coast, Pakistan. *Journal of Coastal Life Medicine*, 2 (2): 85–88.
- 田畑道広. 2000. 錦江湾のなかもたち 11. サカナウミヒドラ. さくらじまの海, 4 (3): 5.
- 高須賀明典・梨田一也・入路光雄・亘 真吾. 2016. 平成 27 (2015) 年度ウルメイワシ太平洋系群の資源評価. Pp. 731–751. 国立研究開発法人水産総合研究センター研究推進部 (編). 平成 27 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 (魚種別系群別資源評価・TAC 種) 第 1 分冊. 国立研究開発法人水産総合研究センター研究推進部, 横浜.
- 高谷智裕・荒川 修・鈴木重則・望岡典隆. 2016. ミニシンプジウム記録 フグ食の安全確保—日本沿岸フグ類の分類と毒性の見直し 2. 交雑フグの毒性. *日本水産学会誌*, 82 (2): 167.
- 竹内啓明・朝井俊亘・内山りゅう・細谷和海. 2011. 近畿大学農学部所蔵の内山りゅう魚類標本コレクション. *近畿大学農学部紀要*, 44: 63–87.
- 田北 徹. 1966. 有明海産サツパの産卵, 卵発生および仔魚について. *長崎大学水産学部研究報告*, 21: 171–179.
- Tan, H.-H. 2009. Observations on the black pomfret, *Parastromateus niger* (Teleostei: Perciformes: Carangidae). *Nature in Singapore*, 2: 167–169.
- 田中秀樹. 1990. キジハタの性成熟と性転換. *養殖研究所研究報告*, 17: 1–15.
- 田中玲子・小澤貴和. 2000. 2000 年 1 月の西太平洋熱帯・亜熱帯域における仔魚の分布. *鹿児島大学水産学部紀要*, 52: 33–42.
- 谷 巖. 1945. 日本産フグの中毒学的研究. 帝國図書, 東京. 103 pp.
- 田代郷国・本村浩之. 2015. 鹿児島県初記録のヒメジ科魚類ミナベヒメジ *Parupeneus biaculeatus* およびホウライヒメジ *Parupeneus ciliatus* との形態学的比較. *Nature of Kagoshima*, 41: 133–137.
- 田代郷国・高山真由美・本村浩之. 2014. サクヤヒメジ *Upeneus itoui* (ヒメジ科) の種子島からの初記録を含む東アジアにおける分布状況と種子島から得られたヒメジ属の未同定個体. *Nature of Kagoshima*, 40: 69–74.
- 立石章治. 2009. 熊本海域のハマトビウオについて. *うしお*, 321: 1–2.
- 立石章治. 2010a. 200 カイリ水域内漁業資源総合調査—II (トビウオ資源動向調査). Pp. 33–40. 鹿児島県水産技術開発センター (編). 平成 23 年度鹿児島県水産技術開発センター事業報告書. 鹿児島県水産技術開発センター, 指宿.
- 立石章治. 2010b. 屋久島の“中トビ”3種の見分け方. *うしお*, 325: 1–2.
- 時村春春. 2007. シリーズ: 東シナ海のさかなたち 第 1 回 キダイ〜昔も今も以西の主役〜. おさかな瓦版, 15: 1.
- 徳留陽一郎. 1976. 底魚あれこれ (2) エソ類 オオメハタ. *うしお*, 189: 4–5.
- 徳留陽一郎. 1979. 漁場開発調査 III. P. 8. 鹿児島県水産試験場 (編). 昭和 53 年度鹿児島県水産試験場事業報告書. 鹿児島県水産試験場, 鹿児島.
- 徳留陽一郎・竹下克一. 1977. 漁場開発調査 IV. P. 9. 鹿児島県水産試験場 (編). 昭和 51 年度鹿児島県水産試験場事業報告書. 鹿児島県水産試験場, 鹿児島.
- 徳留陽一郎・竹下克一. 1978. 漁場開発調査 III. P. 8. 鹿児島県水産試験場 (編). 昭和 52 年度鹿児島県水産試験場事業報告書. 鹿児島県水産試験場, 鹿児島.
- 富岡健太・大前信輔・阿部文彦・山岡耕作. 2011. 汀線付近転石域に出現するマダイ稚魚のなわばりと摂食生態. *黒潮圏科学*, 4 (2): 159–167.
- 富山晋一. 2013. お正月特別展示 海にすむ「巳」. 海のはくぶつかん, 43 (1): 4–5.
- Trewavas, E. 1977. The sciaenid fishes (croakers or drums) of the Indo-West-Pacific. *Transactions of the Zoological Society of London*, 33 (4): 253–541.
- Trewavas, E. 1979. *Sciaena nibe* Jordan and Thompson, 1911 (Pisces). Proposed conservation of the specific name *nibe* by use of the plenary powers. *Bulletin of Zoological Nomenclature*, 36 (3): 155–157.
- 辻 俊宏・坂井恵一・木本昭紀・奥野充一. 2010. 能登半島周辺海域で新たに確認された魚類. 石川県水産総合センター研究報告, 5: 35–39.
- 塚原 博・塩川 司. 1957. 天草におけるトビウオ類の研究: 第 2 報バシヨウトビウオ *Parexocoetus mento* (Cuvier et Valenciennes) の生態・生活史. *九州大学農学部学芸雑誌*, 16 (2): 275–286.
- 津野健太郎・柳川晋一. 2010a. 宿毛湾産のキビナゴについて その 1. しまきり, 1: 1–2.
- 津野健太郎・柳川晋一. 2010b. 宿毛湾産のキビナゴについて その 2. しまきり, 1: 3–4.
- 内田和良・濱野 明・武田靖明・巽 重夫. 1992. 日本海南北海域におけるキュウリエソの分布と日周鉛直移動. *The Journal of Shimonoseki University of Fisheries*, 40 (4): 163–172.
- 打越聡子. 2008. なぎさの小さなサカナ便り 12 性転換する「高級魚」・マゴチ. *なぎさ通信*, 27: 2.
- Ueda, A. Suzuki, M., Homma, T., Nagai, H., Nagashima, Y. and Shiomi, K. 2006. Purification, properties and cDNA cloning of neoverrucotoxin (neoVTX), a hemolytic lethal factor from the stonefish *Synanceia verrucosa* venom. *Biochim Biophys Acta*, 1760 (11): 1713–1722.
- 上田幸男. 2015. 好まざるクロサバフグの紀伊水道への来襲. *徳島水研だより*, 96: 8–10.
- 上田幸男・守岡佐保. 2007. 南方系魚類リュウキュウヨロイアジとタイワンアイノコイワシの来遊. *徳島水研だより*, 60: 1–3.
- 上城拓也・小枝圭太・本村浩之. 2016. 鹿児島県初記録のニベ科魚類クログチ. *Nature of Kagoshima*, 42: 265–268.
- Uematsu, K., Otake, T., Kurokura, H., Tsukamoto, K., Oya, M. and Go, A. 1990. Anguilliformes leptocephali from the Tosa Bay and the waters off Shikoku Island. *Journal of the Faculty of Applied Biological Science, Hiroshima University*, 29 (1): 11–18.
- 上野幸徳・山口光明. 1998. 海洋深層水によるメダイの飼育について. *高知県海洋深層水研究所報*, 3: 11–17.
- Uiblein, F., Hoang, T. A. and Gledhill, D. 2017. Redescription and new records of Jansen's goatfish, *Parupeneus janseni* (Mullidae), from the Western Pacific and Eastern Indian Ocean. *Zootaxa*, 4344 (3): 541–559.
- von Westernhagen, H. 1974. Observations on the natural spawning of *Alectis indicus* (Rüppell) and *Caranx ignobilis* (Forsk.) (Carangidae). *Journal of Fish Biology*, 6: 513–516.
- Walters, V. and Fiersteine, H. L. 1964. Measurements of swimming speeds of yellowfin tuna and wahoo. *Nature*, 202: 208–209.
- Whitehead, P. J. P. 1985. *FAO species catalogue. Vol. 7. Clupeoid fishes of the world (suborder Clupeoidei)*. An annotated and illustrated catalogue of the herrings, sardines, pilchards, sprats, anchovies and wolf-herrings. Part 1 – Chirocentridae, Clupeidae and Pristigasteridae. *FAO Fisheries Synopsis*, 7 (pt. 1): 1–303.
- Whitehead, P. J. P., Nelson, G. J. and Wongratana, T. 1988. *FAO species catalogue Vol. 7. Clupeoid fishes of the world (Suborder Clupeoidei)*. An annotated and illustrated catalogue of the herrings, sardines, pilchards, sprats, shads, anchovies and wolf-herrings. Part 2 Engraulidae. *FAO Fisheries Synopsis*, No. 125, 7 (pt. 2): i–viii + 305–579.

- Whitfield, A. K. and Blaber, S. J. M. 1978. Scale-eating habits of the marine teleost *Terapon jarbua* (Forskål). *Journal of Fish Biology*, 12 (1): 61–70.
- Wibowo, K., Toda, M. and Motomura, H. 2017. Validity of *Abudefduf caudobimaculatus* Okada and Ikeda 1939 and synonyms of *Abudefduf vaigiensis* (Quoy and Gaimard 1825) (Perciformes: Pomacentridae). *Ichthyological Research*. DOI: 10.1007/s10228-017-0594-3
- Williams, V. R. and Clarke, T. A. 1983. Reproduction, growth, and other aspects of the biology of the gold spot herring, *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Clupeidae), a recent introduction to Hawaii. *Fishery Bulletin*, 81 (3): 587–597.
- Wongratana, T., Munroe, T. A. and Nizinski, M. S. 1999. Engraulidae, anchovies. Pp. 1698–1753, in Carpenter, K. E. and Niem, V. H., eds. *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 3. Batoid fishes, chimaeras and bony fishes part 1 (Elopidae to Linophrynidae)*. FAO, Rome.
- 山田梅芳. 1986. セトダイ. Pp. 224–225. 岡村 収 (編). 東シナ海・黄海のさかな. 水産庁晴海区水産研究所, 長崎.
- 山田梅芳. 1997a. マエソ *Saurida* sp. P. 111. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). *山溪カラー名鑑 日本の海水魚*. 山と溪谷社, 東京.
- 山田梅芳. 1997b. ワニエソ *Saurida wanieso*. P. 115. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). *山溪カラー名鑑 日本の海水魚*. 山と溪谷社, 東京.
- 山田和彦・工藤孝浩. 2011. 三崎魚市場に水揚げされた魚類—XVI. 神奈川自然誌資料, 32: 123–126.
- 山田秀秋・佐藤啓一・長洞幸夫・熊谷厚志・山下 洋. 1998. 東北太平洋沿岸域におけるヒラメの摂餌生態. *日本水産学会誌*, 64 (2): 249–258.
- 山田梅芳・高柳 進. 1997. カタバシイワシ *Sardinella lemuru* Bleeker. 西海区水産研究所ニュース, 88: 1.
- 山田梅芳・時村宗治・堀川博史・中坊徹次. 2007. 東シナ海・黄海の魚類誌. 東海大学出版会, 秦野. 1262 pp.
- 山田梅芳・柳下直己. 2013a. エソ科. Pp. 412–420, 1846–1847. 中坊徹次 (編). *日本産魚類検索 全種の同定, 第三版*. 東海大学出版会, 秦野.
- 山田梅芳・柳下直己. 2013b. フグ科. Pp. 1728–1742, 2239–2241. 中坊徹次 (編). *日本産魚類検索 全種の同定, 第三版*. 東海大学出版会, 秦野.
- Yamakawa, T. 1979. Studies of the fish fauna around the Nansei Islands, Japan. 1. Check list of fishes collected by Toshiji Kamohara and Takeshi Yamakawa from 1954 to 1971. *Reports of the Usa Marine Biology Institute, Supplement*, 1: 1–47.
- Yamaoka, K., Han, H.-S. and Taniguchi, N. 1992. Genetic dimorphism in *Pseudocaranx dentex* from Tosa Bay, Japan. *Nippon Suisan Gakkaishi*, 58 (1): 39–44.
- Yamashita, M., Golani, D. and Motomura, H. 2011. A new species of *Upeneus* (Perciformes: Mullidae) from southern Japan. *Zootaxa*, 3107: 47–58.
- 山下真弘・吉田朋弘・本村浩之. 2012. 鹿児島県産軟骨魚類標本目録. *Nature of Kagoshima*, 38: 119–138.
- 山内健生. 2014. ウオノエは「魚の餌」? . ひとはく通信, 87: 2.
- 山内健生. 2016. 日本産魚類に寄生するウオノエ科等脚類. *Cancer*, 25: 113–119.
- 安田十也・依田真里. 2016. 平成 27 (2015) 年度ムロアジ類 (東シナ海) の資源評価. Pp. 1184–1199. 国立研究開発法人水産総合研究センター研究推進部 (編). 平成 27 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 (魚種別系群別資源評価・TAC 種) 第 1 分冊. 国立研究開発法人水産総合研究センター研究推進部, 横浜.
- 谷津明彦. 1997. シマガツオ科 Bramidae. P. 328. 岡村 収・尼岡邦夫 (編). *山溪カラー名鑑 日本の海水魚*. 山と溪谷社, 東京.
- 横川浩治. 2002. 東アジアのスズキ属. Pp. 114–126. 田中克・木下 泉 (編). *スズキと生物多様性*. 恒星社厚生閣, 東京.
- Yokogawa, K., Endo, H. and Sakaji, H. 2008b. *Cynoglossus ochiaii*, a new tongue sole from Japan (Pleuronectiformes: Cynoglossidae). *Bulletin of the National Museum of Natural Science, Series A, Zoology (Supplement)*, 2: 115–127.
- Yokogawa, K., Sakaji, H., Endo, H. and Yamaguchi, A. 2008a. Genetic divergence between two forms of a tongue sole *Cynoglossus interruptus*. *Ichthyological Research*, 55 (1): 78–81.
- Yokogawa, K., Ogihara, G. and Watanabe, K. 2014. Identity of the lectotype of the East Asian flatfish *Pleuronichthys cornutus* (Temminck and Schlegel 1846) and reinstatement of *Pleuronichthys lighti* Wu 1929. *Ichthyological Research*, 61: 385–392.
- 横川浩治・浦山公治. 2000. 瀬戸内海から得られたナシフグとコモフグの天然雑種. *魚類学雑誌*, 47 (1): 67–73.
- 読売新聞. 2010. イシガキシダイ知ってる? . 読売新聞. 2010 年 11 月 17 日.
- 米田道夫・依田真理. 2006. キダイの生殖生態. *水産総合研究センター研究報告*, 4: 125–129.
- 米田泰亮. 2013. 浜からのたより 共同生活者は殺し屋. 姫路市立水族館だより 山のうえの魚たち, 60: 8.
- 吉田俊一・林 凱夫・辻野耕實. 1978. 大阪湾におけるコノシロの漁業生物学的研究. *大阪水試研究*, 5: 85–98.
- 吉田俊一・坪田憲夫・辻野實. 1997. 大阪湾産シログチの漁業生物学的研究. *大阪府立水産試験場研究報告*, 10: 51–58.
- 吉田朋弘・山田守彦・前川隆則・本村浩之. 2016. 標本に基づく鹿児島県初記録のイナズマヒカリイシモチ *Siphamia argentea* (スズキ目: テンジクダイ科). *Nature of Kagoshima*, 42: 169–172.
- 吉田朋弘・本村浩之. 2015. 鹿児島県から得られた日本初記録のテンジクダイ科魚類コゴウテンジクダイ (新称) *Ostorhinchus fleurieu*. *タクサ*, 39: 17–24.
- 吉田朋弘・本村浩之. 2016. 鹿児島県におけるマダラテンジクダイ *Apogonichthys umbratilis* の分布状況. *Nature of Kagoshima*, 42: 163–167.
- 吉田朋弘・高山真由美・本村浩之. 2017. トカラ列島中之島から得られた琉球列島初記録のハタ科サクラダイ. *Nature of Kagoshima*, 43: 111–116.
- 吉野雄輔. 2008. *山溪ハンディ図鑑 13 図鑑日本の海水魚*. 山と溪谷社, 東京. 543 pp.
- Yoshino, T. and Kishimoto, H. 2008. *Plotosus japonicus*, a new eel tail catfish (Siluriformes: Plotosidae) from Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science (Series A) Supplement*, 2: 1–11.
- 由木雄一. 1982. 日本海南西海域におけるキュウリエソの産卵と成熟. *日本水産学会誌*, 48 (6): 749–753.
- 財団法人鹿児島市水族館公社. 2008. 鹿児島水族館が確認した一鹿児島島の定置網の魚たち. 260 pp. 財団法人鹿児島市水族館公社, 鹿児島.
- Zama, A. 1976. A sea chub, *Kyphosus biggibus*, found in the southern waters of Japan. *Japanese Journal of Ichthyology*, 23 (2): 100–104.

標準和名索引

ア

アイゴ	407
アオザメ	18
アオチビキ	272
アオハタ	191
アオブダイ	391
アオヤガラ	120
アカアジ	242
アカエイ	39
アカエソ	93
アカカマス	421
アカシユモクザメ	33
アカネキントキ	199
アカネヒメジ	332
アカハタ	192
アカヒメジ	324
アカマツカサ	110
アカメ	182
アカヤガラ	121
アザハタ	187
アサバホラアナゴ	58
アジアカシヨウダイ	300
アブオコゼ	164
アミアイゴ	408
アミウツボ	54
アミメウツボ	55
アミメウマヅラハギ	462
アミメハギ	464
アヤトビウオ	135
アヤマエビス	113
アヤマカサゴ	144
アラメガレイ	441
アリアケアカエイ	42
アリアケトビウオ	136
アンコウ	102

イ

イイジマダルマガレイ	446
イケカツオ	251
イサキ	296
イシガキダイ	370
イシガキフグ	491
イシダイ	369
イスズミ	373
イズヒメエイ	40
イソカサゴ	156
イソギンポ	399
イソマグロ	429
イタチウオ	101
イタチザメ	32
イッセンタカサゴ	288

イトアナゴ	71
イトオコゼ	161
イトタマガシラ	307
イトヒキアジ	232
イトフエフキ	317
イトマキエイ	49
イトヨリダイ	305
イナズマヒカリイシモチ	219
イネゴチ	172
イバラタツ	123
イブリカマス	419
イボダイ	379
イラ	387
イワハダカ	94
インドアイノコイワシ	84
インドアカタチ	359
インドオキアジ	261

ウ

ウスバハギ	458
ウチウミマダラエソ	90
ウチワザメ	37
ウツカリカサゴ	146
ウツボ	53
ウナギギンポ	401
ウマヅラアジ	233
ウマヅラハギ	466
ウミスズメ	468
ウミヒゴイ	325
ウメイロ	282
ウルメイワシ	72

エ

エイラブカ	23
エリアカシヨウダイ	301

オ

オアカムロ	245
オオウミウマ	123
オオカマス	421
オオグチイシチビキ	271
オオシタビラメ	453
オオシロアナゴ	64
オオスジイシモチ	211
オオスジハタ	193
オオセ	14
オオニベ	320
オオメカマス	418
オオメナツトビ	137
オオモンハタ	190
オキアジ	260

オキエソ	93
オキゲンコ	454
オキゴンベ	356
オキザヨリ	141
オキセミホウボウ	180
オキナヒメジ	331
オキヒイラギ	262
オグロイワシ	76
オグロエソ	92
オジサン	331
オシヤレコシヨウダイ	299
オナガウツボ	56
オニアジ	247
オニオコゼ	159
オニカナガシラ	169
オニカマス	418
オニゴチ	174
オニダルマオコゼ	162
オニヒラアジ	239
オヤビツチャ	360

カ

カイユウセンニンフグ	483
カイワリ	246
カエルアンコウ	104
カゴカキダイ	374
カゴシマオコゼ	165
カサゴ	145
カスザメ	36
カスミアジ	239
カスミサクラダイ	197
カスミフグ	474
カスリハタ	196
カタクチイワシ	83
カタグロアゴナシ	385
カタボシイワシ	75
カツオ	429
カナガシラ	170
カナド	167
カナフグ	481
カマスサワラ	426
カマス属の一種	422
カマストガリザメ	27
カミナリベラ	388
カラスエイ	43
カワハギ	465
カンパチ	253

キ

キアンコウ	103
キジハタ	189

キスジヒメジ	335
キダイ	310
キタマクラ	479
キチヌ	308
キハダ	434
キビナゴ	79
キビレミシマ	397
キュウセンフエダイ	279
キュウリエソ	87
キリンミノ	150
ギンアナゴ	67
ギンイソイワシ	126
ギンカガミ	230
ギンガメアジ	240
キンセンフエダイ	276
キンチャクダイ	352
キントキダイ	201
キンメモドキ	339
ギンユゴイ	368

ク

クエ	194
クサフグ	484
クサヤモロ	242
クマササハナムロ	287
クラカケトラギス	394
クラゲウオ	380
グルクマ	430
クルマダイ	203
クロアジモドキ	249
クロアナゴ	66
クロイシモチ	205
クロウシノシタ	455
クログチ	320
クロコショウダイ	300
クロコバン	225
クロサギ	290
クロサバフグ	480
クロダイ	309
クロヒラアジ	236
クロヘリメジロザメ	25
クロホシイシモチ	216
クロボシヒラアジ	234
クロホシフエダイ	280
クロマグロ	435
クロメジナ	376

ケ

ケショウフグ	476
ゲンロクダイ	351

コ

コイチ	321
コウベダルマガレイ	443
コウライトラギス	394
コクチフサカサゴ	155
コシナガ	436
コショウダイ	298
コスジイシモチ	212
ゴテンアナゴ	65
コトヒキ	365
コノシロ	74
コバンアジ	256
コバンザメ	223
コバンヒイラギ	264
コバンヒメジ	330
ゴマサバ	431
ゴマフエダイ	273
ゴマモンガラ	456
コモンフグ	485
コロダイ	293
コンゴウテンジクダイ	213
コンゴウフグ	467
ゴンズイ	86

サ

サイウオ属の一種	100
サイウオ属の一種	100
サギフエ	122
サクヤヒメジ	333
サクラアジ	245
サクラダイ	197
サクラテンジクダイ	207
ササウシノシタ	450
サザナミダイ	315
サザナミフグ	474
サザナミヤッコ	354
ササムロ	283
サツパ	77
サツマカサゴ	156
サヨリ	130
サワラ	433
サンマ	142

シ

シイラ	228
シッポウフグ	490
シビレエイ	38
シマアジ	250
シマイサキ	364
シマウシノシタ	452
シマウミスズメ	469

シマセトダイ	294
シマハナヒラウオ	382
シマヒメヤマネカミ	149
シマフグ	489
シャチブリ属の一種	88
シャムイトヨリ	304
ショウサイフグ	488
シラコダイ	346
シロアマダイ	221
シロエイ	41
シロカジキ	416
シロガネアイノコイワシ	80
シロギス	323
シログチ	322
シロサバフグ	482
シロザメ	24
シロシュモクザメ	34
ジンベエザメ	15

ス

スカシテンジクダイ	218
スギ	227
ズグエイ	45
スジオテンジクダイ	214
スジコバン	224
スジスズメダイ	363
スジハナヒラウオ	381
スジブダイ	392
スジミゾイサキ	303
スジモヨウフグ	475
スズキ	183
スズハモ	68
スタレヤライイシモチ	208
スナエソ	92
スマ	428
スミツキアヒキテンジクダイ	220
スミツキザメ	31

セ

セトウシノシタ	451
セトダイ	294
セトミノカサゴ	151
セミホウボウ	181
セレベスゴチ	179
センニンフグ	481
センネンダイ	281

ソ

ソウシハギ	460
ソコホウボウ	171
ソトイワシ	51

標準和名索引

タ

ダイナンアナゴ	66
ダイナンウミヘビ	62
タイワンアイノコイワシ	82
タイワンカマス	420
タイワンガンゾウビラメ	439
タイワンザメ	22
タイワンヒイラギ	263
タカクラタツ	124
タカサゴ	285
タカサゴヒメジ	327
タカノハダイ	358
タカベ	367
タケウツボ	57
タチウオ	424
ダツ	140
タテジマキンチャクダイ	353
タマガシラ	306
タマガンゾウビラメ	440
ダルマオコゼ	158
ダルマガレイ	444

チ

チゴダラ	98
チダイ	311
チャイロマルハタ	192
チョウチョウウオ	344
チョウハン	345

ツ

ツキチョウチョウウオ	348
ツクシトビウオ	132
ツノウシノシタ	448
ツノダシ	409
ツバクロエイ	46
ツバメウオ	405
ツバメコノシロ	383
ツماغロイシモチ	210
ツماغロハタンポ	341
ツマリツノザメ	35
ツマリトビウオ	138
ツムブリ	246

テ

テッポウイシモチ	215
テリエビス	112
テングダイ	355
テングハギ	414
テングハギ属の一種	414
テンジクアカグツ	108
テンジクアジ	234

テンジクイサキ	371
テンジクダイ	209
テンジクタチ	425
テンジクダツ	140

ト

トウゴロイワシ	127
トゲカナガシラ	168
ドタブカ	29
トビウオ	131
トビエイ	50
トビササウシノシタ	449
トビハタ	198
トヤマサイウオ	99
トラギス	393
トラフグ	487
トラフザメ	16

ナ

ナガコバン	226
ナガサキトラザメ	21
ナガニザ	412
ナガユメタチモドキ	423
ナガレメイタガレイ	447
ナミノハナ	128
ナミマツカサ	111
ナルトビエイ	48
ナンヨウカイワリ	238
ナンヨウサヨリ	129

ニ

ニザダイ	415
ニジギンポ	400
ニセカンランハギ	410
ニセクロホシフエダイ	275
ニセゴイシウツボ	52
ニセタカサゴ	286
ニタリ	20

ヌ

ヌタウナギ	11
-------	----

ネ

ネコザメ	12
ネズミギス	85
ネズミゴチ	402
ネツタイヒイラギ	266
ネンブツダイ	217

ノ

ノコギリカサゴ	148
ノイスズミ	371

ハ

ハオコゼ	163
ハガツオ	430
ハクセイハギ	461
ハコフグ	470
ハシキンメ	115
ハシナガアナゴ	70
バショウカジキ	417
バショウトビウオ	138
ハタタテダイ	349
ハチ	143
ハチビキ	270
ハナアナゴ	64
ハナオコゼ	105
ハナキンチャクフグ	478
ハナザメ	26
ハナビラウオ	382
ハナミノカサゴ	153
ハマダツ	140
ハマトビウオ	134
ハマフエフキ	319
ハマフグ	472
ハモ	69
ハリセンボン	493
ハリダシエビス	114

ヒ

ヒイラギ	265
ヒガンフグ	486
ヒゲダイ	295
ヒゲハギ	463
ヒシコバン	225
ヒシヨロイアジ	235
ヒフキヨウジ	124
ヒブダイ	390
ヒメアカグツ	107
ヒメクサアジ	95
ヒメコダイ	188
ヒメコトヒキ	366
ヒメジ	334
ヒメスミクイウオ	185
ヒメソコカナガシラ	167
ヒメタカサゴ	284
ヒメヒイラギ	262
ヒメヤマノカミ	148
ヒュウガカサゴ	157
ヒラスズキ	183

ヒラソウダ	427
ヒラニザ	411
ヒラマサ	252
ヒラメ	437
ヒレナガカンパチ	255

フ

フウライチョウチョウウオ	347
フエダイ	281
フエフキダイ	318
ブダイ	389
ブチススキベラ	386
ブリ	254
ブリソデウオ	96
ブリモドキ	248

へ

へダイ	313
へらヤガラ	119
ベンガルフエダイ	274

ホ

ホウセキキントキ	200
ホウボウ	166
ホウライヒメジ	326
ホコサキ	28
ホシササノハベラ	388
ホシザメ	24
ホシザヨリ	129
ホシダルマガレイ	442
ホシフグ	473
ホソイトヒキサギ	291
ホソウケグチヒイラギ	267
ホソトビウオ	133
ホタテウミヘビ	60
ホタルジャコ	184
ホホジロザメ	17
ホムラトラギス	393
ボラ	125

マ

マアジ	258
マイワシ	78
マエソ	89
マゴチ	175
マサバ	432
マダイ	312
マダラエイ	44
マダラエソ	89
マダラテンジクダイ	206
マダラトビエイ	47

マチダウミヘビ	61
マツカサウオ	116
マツダイ	289
マツバゴチ	177
マツバスズメダイ	361
マトイシモチ	208
マトウダイ	117
マハタ	195
マルアジ	244
マルコバン	257
マルソウダ	427
マルバラシマガツオ	268
マルヒラアジ	236
マンボウ	496

ミ

ミエハタンポ	342
ミギマキ	357
ミシマオコゼ	398
ミズン	73
ミツボシクロスズメダイ	362
ミナベヒメジ	325
ミナミイケカツオ	251
ミナミイズミ	372
ミナミギンガメアジ	241
ミナミキントキ	202
ミナミハタンポ	343
ミナミヒメジ	338
ミナミホタテウミヘビ	63
ミノカサゴ	152
ミノカサゴ属の一種	154
ミヤコテングハギ	413

ム

ムスジコショウダイ	302
ムツ	222
ムレハタタテダイ	350
ムロアジ	244

メ

メアジ	252
メイタイシガキフグ	492
メイチダイ	316
メガネウオ	396
メガネハギ	457
メガレイ	438
メゴチ	178
メジナ	377
メジロザメ	30
メダイ	378
メバル属の一種	147

モ

モヨウタツウミヘビ	59
モヨウフグ	477
モロ	243

ヤ

ヤイトハタ	194
ヤクシマイワシ	126
ヤジブカ	30
ヤセオコゼ	160
ヤブサメカサゴ	150
ヤマトイトヒキサギ	292
ヤマトカマス	419
ヤミハタ	186
ヤリガレイ	445
ヤリテング	118
ヤリヌメリ	403
ヤリマンボウ	494

ユ

ユカタハタ	186
ユカタハゼ	404
ユキブリソデウオ	97

ヨ

ヨコスジイシモチ	204
ヨコスジフエダイ	277
ヨコヒメジ	336
ヨメゴチ	402
ヨメヒメジ	337

リ

リュウキュウハタンポ	340
リュウキュウヨロイアジ	237
リュウグウノヒメ	268

ロ

ロウニンアジ	238
ロクセンフエダイ	278
ロケットヒメジ	328

ワ

ワニエソ	91
ワニギス	395
ワニゴチ	173

学名索引

- A**
- Ablennes hians* 140
Abudefduf vaigiensis 360
Acanthocephala indica 359
Acanthocybium solandri 426
Acanthopagrus latus 308
Acanthopagrus schlegelii 309
Acanthurus dussumieri 410
Acanthurus mata 411
Acanthurus nigrofuscus 412
Acropoma japonicum 184
Aesopia cornuta 448
Aetobatus narinari 47
Aetobatus narutobiei 48
Albula koreana 51
Alectis ciliaris 232
Alectis indica 233
Alepes djedaba 234
Alopias pelagicus 20
Aluterus monoceros 458
Aluterus scriptus 460
Anampses caeruleopunctatus 386
Antennarius striatus 104
Aphareus rutilans 271
Apistus carinatus 143
Apogonichthyoides cathetogramma 204
Apogonichthyoides niger 205
Apogonichthyoides umbratilis 206
Aprion virescens 272
Argyrosomus japonicus 320
Ariosoma anago 64
Ariosoma majus 64
Ariosoma meeki 65
Arothron firmamentum 473
Arothron hispidus 474
Arothron immaculatus 474
Arothron manilensis 475
Arothron mappa 476
Arothron stellatus 477
Aseraggodes kobensis 449
Assurger anzac 423
Ateleopus sp. 88
Atherinomorus lacunosus 126
Atrobucca nibe 320
Aulostomus chinensis 119
Aulotrachichthys prosthemus 114
Auxis rochei rochei 427
Auxis thazard 427
- B**
- Balistoides viridescens* 456
Benthoosema pterotum 94
Bothus myriaster 442
Brachyterois serrulata 148
Brachysomophis cirrocheilos 59
Brama orcinii 268
Branchiostegus albus 221
Bregmaceros nactabanus 99
Bregmaceros sp. 1 100
Bregmaceros sp. 2 100
Brotula multibarbata 101
- C**
- Caesio caerulea* 283
Calliurichthys japonicus 402
Calotomus japonicus 389
Cantherhines dumerilii 461
Cantherhines pardalis 462
Canthigaster axiologa 478
Canthigaster rivulata 479
Carangichthys oblongus 234
Carangoides chrysophrys 235
Carangoides coeruleopinnatus 236
Carangoides ferdau 236
Carangoides hedlandensis 237
Carangoides orthogrammus 238
Caranx ignobilis 238
Caranx melampygus 239
Caranx papuensis 239
Caranx sexfasciatus 240
Caranx tille 241
Carcharhinus brachyurus 25
Carcharhinus brevipinna 26
Carcharhinus limbatus 27
Carcharhinus macloti 28
Carcharhinus obscurus 29
Carcharhinus plumbeus 30
Carcharhinus tjujot 31
Carcharodon carcharias 17
Cephalopholis boenak 186
Cephalopholis miniata 186
Cephalopholis sonnerati 187
Cercamia eremia 207
Chaetodermis penicilligera 463
Chaetodon auripes 344
Chaetodon lunula 345
Chaetodon nippon 346
Chaetodon vagabundus 347
Chaetodon wiebeli 348
Chaetodontoplus septentrionalis 352
Champsodon snyderi 395
Chelidopterus intermedius 208
Chelidonichthys spinosus 166
Chelidoperca hirundinacea 188
Chilomycterus reticulatus 491
Choerodon azurio 387
Chromis fumea 361
Cirrhitichthys aureus 356
Cociella crocodilus 172
Cololabis saira 142
Conger erebennus 66
Conger jordani 66
Coryphaena hippurus 228
Crossorhombus kobensis 443
Cyclichthys orbicularis 492
Cynoglossus bilineatus 453
Cynoglossus ochiaii 454
Cypselurus agoo 131
Cypselurus doederleini 132
Cypselurus hiraii 133
Cypselurus pinnatibarbus 134
Cypselurus poecilopterus 135
Cypselurus starksi 136
Cypselurus unicolor 137
- D**
- Dactyloptena gilberti* 180
Dactyloptena orientalis 181
Dascyllus trimaculatus 362
Decapterus akaadsi 242
Decapterus macarellus 242
Decapterus macrosoma 243
Decapterus maruadsi 244
Decapterus muroadsi 244
Decapterus smithvanizi 245
Decapterus tabl 245
Dendrochirus bellus 148
Dendrochirus brachypterus 149
Dendrochirus zebra 150
Dentex hypselosomus 310
Desmodema polystictum 96
Deveximentum indicum 267
Diagramma pictum pictum 293
Diodon holocanthus 493
Dipterygonotus balteatus 284
Dysomma anguillare 58
- E**
- Echeneis naucrates* 223
Elagatis bipinnulata 246
Encrasicholina heteroloba 80
Encrasicholina punctifer 82
Engraulis japonica 83
Engyprosopon grandisquama 444
Epinephelus akaara 189
Epinephelus areolatus 190
Epinephelus awoara 191
Epinephelus coioides 192
Epinephelus fasciatus 192
Epinephelus latifasciatus 193
Epinephelus malabaricus 194
Epinephelus moara 194

<i>Epinephelus septemfasciatus</i>	195
<i>Epinephelus tukula</i>	196
<i>Eptatretus burgeri</i>	11
<i>Equulites popei</i>	262
<i>Equulites rivulatus</i>	262
<i>Erispex pottii</i>	164
<i>Erosa erosa</i>	158
<i>Erythrocles schlegelii</i>	270
<i>Etrumeus micropus</i>	72
<i>Eubleekeria splendens</i>	263
<i>Euthynnus affinis</i>	428
<i>Evistias acutirostris</i>	355
<i>Evynnis tumifrons</i>	311

F

<i>Fistularia commersonii</i>	120
<i>Fistularia petimba</i>	121

G

<i>Galeocerdo cuvier</i>	32
<i>Gazza minuta</i>	264
<i>Gephyroberyx japonicus</i>	115
<i>Gerres equulus</i>	290
<i>Gerres macracanthus</i>	291
<i>Gerres microphthalmus</i>	292
<i>Girella leonina</i>	376
<i>Girella punctata</i>	377
<i>Gnathophis heterognathos</i>	67
<i>Goniistius zebra</i>	357
<i>Goniistius zonatus</i>	358
<i>Gonorynchus abbreviatus</i>	85
<i>Gymnocranius grandoculis</i>	315
<i>Gymnocranius griseus</i>	316
<i>Gymnosarda unicolor</i>	429
<i>Gymnothorax isingteena</i>	52
<i>Gymnothorax kidako</i>	53
<i>Gymnothorax minor</i>	54
<i>Gymnothorax pseudothyrsoides</i>	55
<i>Gymnura japonica</i>	46

H

<i>Halaelurus buergeri</i>	21
<i>Halietaea fumosa</i>	107
<i>Halietaea indica</i>	108
<i>Hapalogenys analis</i>	294
<i>Hapalogenys kishinouyei</i>	295
<i>Hapalogenys sennin</i>	295
<i>Hazeus otakii</i>	404
<i>Hemiramphus far</i>	129
<i>Hemiramphus lutkei</i>	129
<i>Hemitriakis japonica</i>	23
<i>Hemitrygon akajei</i>	39
<i>Hemitrygon izuensis</i>	40
<i>Hemitrygon laevigata</i>	41

<i>Hemitrygon</i> sp.	42
<i>Heniochus acuminatus</i>	349
<i>Heniochus diphreutes</i>	350
<i>Herklotsichthys quadrimaculatus</i>	73
<i>Heterodontus japonicus</i>	12
<i>Heteromycteris japonica</i>	450
<i>Hippocampus histrix</i>	123
<i>Hippocampus kelloggi</i>	123
<i>Hippocampus trimaculatus</i>	124
<i>Histrio histrio</i>	105
<i>Hyperoglyphe japonica</i>	378
<i>Hypoatherina tsurugae</i>	126
<i>Hypoatherina valenciennei</i>	127
<i>Hyporhamphus sajori</i>	130

I

<i>Inegocia ochiaii</i>	173
<i>Inimicus japonicus</i>	159
<i>Iso flosmaris</i>	128
<i>Istiompax indica</i>	416
<i>Istiophorus platypterus</i>	417
<i>Isurus oxyrinchus</i>	18

J

<i>Jaydia carinata</i>	208
<i>Jaydia lineatus</i>	209
<i>Jaydia truncata</i>	210

K

<i>Kaiwarinus equula</i>	246
<i>Katsuwonus pelamis</i>	429
<i>Konosirus punctatus</i>	74
<i>Kuhlia mugil</i>	368
<i>Kyphosus bigibbus</i>	371
<i>Kyphosus cinerascens</i>	371
<i>Kyphosus pacificus</i>	372
<i>Kyphosus vaigiensis</i>	373

L

<i>Labracoglossa argentiventris</i>	367
<i>Lactoria cornuta</i>	467
<i>Lactoria diaphana</i>	468
<i>Lactoria fornasini</i>	469
<i>Laeops kitaharae</i>	445
<i>Lagocephalus cheesemani</i>	480
<i>Lagocephalus inermis</i>	481
<i>Lagocephalus scleratus</i>	481
<i>Lagocephalus spadiceus</i>	482
<i>Lagocephalus suezensis</i>	483
<i>Lateolabrax japonicus</i>	183
<i>Lateolabrax latus</i>	183
<i>Lates japonicus</i>	182
<i>Lepidotrigla guentheri</i>	167
<i>Lepidotrigla hime</i>	167

<i>Lepidotrigla japonica</i>	168
<i>Lepidotrigla kishinouyei</i>	169
<i>Lepidotrigla microptera</i>	170
<i>Lethrinus genivittatus</i>	317
<i>Lethrinus haematopterus</i>	318
<i>Lethrinus nebulosus</i>	319
<i>Lobotes surinamensis</i>	289
<i>Lophiomus setigerus</i>	102
<i>Lophius litulon</i>	103
<i>Lutjanus argentimaculatus</i>	273
<i>Lutjanus bengalensis</i>	274
<i>Lutjanus fulviflamma</i>	275
<i>Lutjanus lutjanus</i>	276
<i>Lutjanus ophuysenii</i>	277
<i>Lutjanus quinquelineatus</i>	278
<i>Lutjanus rufolineatus</i>	279
<i>Lutjanus russellii</i>	280
<i>Lutjanus sebae</i>	281
<i>Lutjanus stellatus</i>	281

M

<i>Macroramphosus sagifue</i>	122
<i>Masturus lanceolatus</i>	494
<i>Maurolucus japonicus</i>	87
<i>Megalaspis cordyla</i>	247
<i>Mene maculata</i>	230
<i>Metavelifer multiradiatus</i>	95
<i>Microcanthus strigatus</i>	374
<i>Minous pusillus</i>	160
<i>Minous quincarinatus</i>	161
<i>Mobula mobular</i>	49
<i>Mola mola</i>	496
<i>Monocentris japonica</i>	116
<i>Mugil cephalus cephalus</i>	125
<i>Mulloidichthys vanicolensis</i>	324
<i>Muraenesox bagio</i>	68
<i>Muraenesox cinereus</i>	69
<i>Mustelus griseus</i>	24
<i>Mustelus manazo</i>	24
<i>Myliobatis tobijei</i>	50
<i>Myripristis berndti</i>	110
<i>Myripristis kochiensis</i>	111

N

<i>Narke japonica</i>	38
<i>Naso lituratus</i>	413
<i>Naso</i> sp.	414
<i>Naso unicornis</i>	414
<i>Naucreus ductor</i>	248
<i>Nemipterus peronii</i>	304
<i>Nemipterus virgatus</i>	305
<i>Neomerinthe erostris</i>	150
<i>Nibea albiflora</i>	321
<i>Nuclequula nuchalis</i>	265

学名索引

- O**
- Onigocia spinosa* 174
Ophichthus altipennis 60
Ophichthus machidai 61
Ophisurus macrorhynchus 62
Oplegnathus fasciatus 369
Oplegnathus punctatus 370
Orectolobus japonicus 14
Ostorhinchus doederleini 211
Ostorhinchus endekataenia 212
Ostorhinchus fleurieu 213
Ostorhinchus holotaenia 214
Ostorhinchus kiensis 215
Ostorhinchus notatus 216
Ostorhinchus semilineatus 217
Ostracion immaculatus 470
Oxyconger leptognathus 70
- P**
- Pagrus major* 312
Parablennius yatabei 399
Paracaesio xanthura 282
Paracentropogon rubripinnis 163
Paralichthys olivaceus 437
Parapercis pulchella 393
Parapercis randalli 393
Parapercis sexfasciata 394
Paraplagusia japonica 455
Paraploactis kagoshimensis 165
Parapriacanthus ransonneti 339
Parapristipoma trilineatum 296
Parapterois heterura 151
Parasclopsis inermis 306
Parascomgrops philippinensis 185
Parastromateus niger 249
Parexocoetus brachypterus 138
Parexocoetus mento 138
Parupeneus biaculeatus 325
Parupeneus chrysopleuron 325
Parupeneus ciliatus 326
Parupeneus heptacanthus 327
Parupeneus janseni 328
Parupeneus indicus 330
Parupeneus multifasciatus 331
Parupeneus spilurus 331
Parupeneus indicus 330
Parupeneus janseni 328
Pegasus volitans 118
Pempheris adusta 340
Pempheris japonica 341
Pempheris nyctereutes 342
Pempheris schwenkii 343
Pennahia argentata 322
Pentapodus nagasakiensis 307
- Petrosciartes breviceps* 400
Photopectoralis bindus 266
Phtheirichthys lineatus 224
Physiculus japonicus 98
Pisodonophis cancrivorus 63
Platax teira 405
Platycephalus sp. 175
Platyrrhina tangi 37
Plectorhinchus cinctus 298
Plectorhinchus flavomaculatus 299
Plectorhinchus gibbosus 300
Plectorhinchus picus 300
Plectorhinchus unicolor 301
Plectorhinchus vittatus 302
Plectranthias japonicus 197
Pleuronichthys cornutus 447
Plotosus japonicus 86
Polydactylus plebeius 383
Polydactylus sextarius 385
Pomacanthus imperator 353
Pomacanthus semicirculatus 354
Pomadasyus quadrilineatus 303
Priacanthus blochii 199
Priacanthus hamrur 200
Priacanthus macracanthus 201
Priacanthus sagittarius 202
Prionurus scalprum 415
Pristigenys nipponia 203
Proscyllium habereri 22
Psenes arafurensis 380
Psenes cyanophrys 381
Psenes maculatus 382
Psenes pellucidus 382
Psenopsis anomala 379
Psettina iijimae 446
Pseudaesopia japonica 451
Pseudocaranx dentex 250
Pseudolabrus sieboldi 388
Pseudorhombus dupliciocellatus 438
Pseudorhombus levisquamis 439
Pseudorhombus pentophthalmus 440
Pterocaesio digramma 285
Pterocaesio marri 286
Pterocaesio tile 287
Pterocaesio trilineata 288
Pterois lunulata 152
Pterois sp. 154
Pterois volitans 153
Pteroplatytrygon violacea 43
Pterycombus petersii 268
Pterygotrigla hemisticta 171
- R**
- Rachycentron canadum* 227
Rastrelliger kanagurta 430
Remora brachyptera 225
Remora osteochir 225
Remora remora 226
Repomucenus curvicornis 402
Repomucenus huguenin 403
Rhabdamia gracilis 218
Rhabdosargus sarba 313
Rhincodon typus 15
Rhynchopelates oxyrhynchus 364
Roa modesta 351
Rogadius asper 177
Rudarius ercodes 464
- S**
- Sacura margaritacea* 197
Sarda orientalis 430
Sardinella lemuru 75
Sardinella melanura 76
Sardinella zunasi 77
Sardinops melanostictus 78
Sargocentron ittodai 112
Sargocentron rubrum 113
Saurenhelys cancrivora 71
Saurida gracilis 89
Saurida macrolepis 89
Saurida nebulosa 90
Saurida wanieso 91
Scarus ghobban 390
Scarus ovifrons 391
Scarus rivulatus 392
Scomber australasicus 431
Scomber japonicus 432
Scomberoides lysan 251
Scomberoides tol 251
Scomberomorus nipponius 433
Scombrops boops 222
Scorpaena miostoma 155
Scorpaenodes evides 156
Scorpaenopsis neglecta 156
Scorpaenopsis venosa 157
Sebastes sp. 147
Sebastiscus albofasciatus 144
Sebastiscus marmoratus 145
Sebastiscus tertius 146
Selar crumenophthalmus 252
Seriola aureovittata 252
Seriola dumerili 253
Seriola quinqueradiata 254
Seriola rivoliana 255
Siganus fuscescens 407
Siganus spinus 408
Sillago japonica 323
Siphamia tubulata 219

<i>Sphyraena barracuda</i>	418	<i>Trichiurus</i> sp.	425
<i>Sphyraena forsteri</i>	418	<i>Triso dermatopterus</i>	198
<i>Sphyraena iburiensis</i>	419	<i>Tylosurus acus melanotus</i>	140
<i>Sphyraena japonica</i>	419	<i>Tylosurus crocodilus crocodilus</i>	141
<i>Sphyraena obtusata</i>	420		
<i>Sphyraena pinguis</i>	421	U	
<i>Sphyraena putnamae</i>	421	<i>Upeneus guttatus</i>	332
<i>Sphyraena</i> sp.	422	<i>Upeneus itoui</i>	333
<i>Sphyrna lewini</i>	33	<i>Upeneus japonicus</i>	334
<i>Sphyrna zygaena</i>	34	<i>Upeneus moluccensis</i>	335
<i>Spratelloides gracilis</i>	79	<i>Upeneus subvittatus</i>	336
<i>Squalus brevirostris</i>	35	<i>Upeneus tragula</i>	337
<i>Squatina japonica</i>	36	<i>Upeneus vittatus</i>	338
<i>Stegostoma fasciatum</i>	16	<i>Uranoscopus bicinctus</i>	396
<i>Stephanolepis cirrhifer</i>	465	<i>Uranoscopus chinensis</i>	397
<i>Stethojulis interrupta terina</i>	388	<i>Uranoscopus japonicus</i>	398
<i>Stolephorus indicus</i>	84	<i>Uraspis helvola</i>	260
<i>Strongylura anastomella</i>	140	<i>Uraspis uraspis</i>	261
<i>Strophidon sathete</i>	56		
<i>Strophidon ui</i>	57	X	
<i>Sufflamen fraenatum</i>	457	<i>Xiphasia setifer</i>	401
<i>Suggrundus meerdervoortii</i>	178		
<i>Synanceia verrucosa</i>	162	Z	
<i>Synodus fuscus</i>	92	<i>Zanclus cornutus</i>	409
<i>Synodus jaculum</i>	92	<i>Zebrias zebrinus</i>	452
<i>Synodus ulae</i>	93	<i>Zeus faber</i>	117
		<i>Zu cristatus</i>	97
T			
<i>Taeniamia kagoshimanus</i>	220		
<i>Taeniurops meyeri</i>	44		
<i>Takifugu alboplumbeus</i>	484		
<i>Takifugu flavipterus</i>	485		
<i>Takifugu pardalis</i>	486		
<i>Takifugu rubripes</i>	487		
<i>Takifugu snyderi</i>	488		
<i>Takifugu xanthopterus</i>	489		
<i>Tarphops oligolepis</i>	441		
<i>Teixeirichthys jordani</i>	363		
<i>Telatrygon zugei</i>	45		
<i>Terapon jarbua</i>	365		
<i>Terapon theraps</i>	366		
<i>Tetrosomus reipublicae</i>	472		
<i>Thamnaconus modestus</i>	466		
<i>Thunnus albacares</i>	434		
<i>Thunnus orientalis</i>	435		
<i>Thunnus tonggol</i>	436		
<i>Thysanophrys celebica</i>	179		
<i>Torquigener brevipinnis</i>	490		
<i>Trachinocephalus trachinus</i>	93		
<i>Trachinotus baillonii</i>	256		
<i>Trachinotus blochii</i>	257		
<i>Trachurus japonicus</i>	258		
<i>Trachyrhamphus serratus</i>	124		
<i>Trichiurus japonicus</i>	424		

謝辞

内之浦漁港の柳川拓哉氏（有限会社 昌徳丸）には標本と写真を提供していただいたうえ、珍しさの判断にご助言を賜った。また、恵隆丸（個人）の皆さま、正栄丸（吐合水産）の皆さま、三代丸（個人）の皆さま、第三千鳥丸（自営定置）の皆さま、昌徳丸（有限会社 昌徳丸）の皆さま、潮路丸（株式会社 潮路）の皆さま、岸良の第3海福丸の皆さま、船間の第3漁福丸（深井水産）の皆さま、内之浦漁業協同組合長の柳川良則氏をはじめとする漁協の皆さま、江川 剛氏（有限会社 江川水産）、荒武一廣氏、荒武良子氏（ひろ水産）、白坂直道氏（潮騒荘）をはじめとする内之浦漁港の関係者の皆さまには標本の収集に多大なご協力をいただいた。

元北海道大学の尼岡邦夫氏にはカレイ目、仲谷一宏氏にはメジロザメ科、国立科学博物館の松浦啓一氏にはフグ目、神奈川県立生命の星・地球博物館の瀬能 宏氏にはハゼ亜目ほか、神戸高校の矢頭卓児氏にはホウボウ科、国立海洋生物博物館の H.-C. Ho 氏にはウナギ目、タラ目、およびアンコウ目、西海区水産研究所の下瀬 環氏にはマカジキ科、宮崎大学大学院の三木涼平氏にはフエフキダイ科とカマス科の同定に関する助言を賜った。元琉球大学大学院の櫻井もも子氏にはサメ類に関する助言を賜った。Monster Pro Shop の平坂 寛氏には食味に関する助言を賜った。

田中水産の田中 積氏をはじめとする鹿児島市中央卸売市場魚類市場の関係者の皆さま、いおワールドかごしま水族館館長の荻野洸太郎氏ならびに展示課の皆さま、ならびに鹿児島水圏生物博物館の岩坪洸樹氏には標本と写真の収集にご協力いただいた。鹿児島大学総合研究博物館の学生あるいは OB・OG である目黒昌利氏、吉田朋弘氏、田代郷国氏、ジョン ビョル氏、江口慶輔氏、金出侑佳氏、稲葉智樹氏、吉浦 藍氏、川間公達氏、森下悟至氏、中村潤平氏、およびボランティアの上城拓也氏、立川日奈子氏には標本の収集を手伝っていただいた。同博物館の学生あるいは OB・OG である福井美乃氏、シリカンヤ チュンタナウォン氏、安藤ゆきの氏、大澤洋太氏、クント ウィボウ氏、藤原恭司氏、萬代あゆみ氏、川路由人氏、ならびにボランティアの原口百合子氏、大西聡子氏、伊東正英氏、高山真由美氏、内村公大氏をはじめとする方々には標本の作製・登録作業などにご協力いただいた。国立海洋生物博物館ボランティアの小枝あゆみ氏および東京都豊島区の畑 貴史朗氏には標本写真の画像処理にご協力いただいた。これらの方々に感謝する。

本書の出版にあたり、JSPS 研究奨励費 (PD: 26-477; DC2: 29-6652)、JSPS 海外特別研究員制度 (29-304)、笹川科学研究助成金 (28-745)、JSPS 科研費 (19770067, 23580259, 24370041, 26241027, 26450265)、JSPS 研究拠点形成事業－B アジア・アフリカ学術基盤形成型、国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」、文部科学省特別経費「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」、および鹿児島大学重点領域研究環境（生物多様性・島嶼プロジェクト）学長裁量経費の援助を受けた。

編者一同



編者・著者紹介

小枝圭太 Keita KOEDA

1986年、京都府生まれ。博士（理学）。学位取得後、鹿児島大学総合研究博物館でのJSPS特別研究員-PDを経て、現在はJSPS海外特別研究員として台湾の国立海洋生物博物館に赴任。専門は魚類学で、ハタネボ科魚類を中心に分類、生物地理、生活史、行動、魚類相などを研究。2015年に若手魚類研究者間のネットワーク構築と技術交流を目的として「よなぐにプロジェクト」を発起。翌2016年に『Annotated checklist of fishes of Yonaguni-jima island, the westernmost island in Japan』（日本最西端の島：与那国島の魚類リスト）を出版した。2017年12月には同じプロジェクトシリーズとして『緑の火山島 口永良部島の魚類』を出版した。



畑 晴陵 Harutaka HATA

1991年、ドイツ生まれ。鹿児島大学大学院連合農学研究科・博士課程2年、日本学術振興会特別研究員（DC2）。専門はカタクチイワシ科を中心としたニシン目魚類の分類学。ニシン目のほか、ハシナガアナゴからミナミメダイまで、様々な魚類に関する研究論文を執筆している。2017年12月までに出版した論文は110本以上。鉄道とアメリカ車にも精通する。これまでに『硫黄島と竹島の魚類』や『与論島の魚類』、『鹿児島湾の魚類』、『Market fishes of Panay Island』などの書籍に著者として参加。趣味は鉄道で、休日には1日中鉄道に乗り続けることも。鉄道だけでなくアメリカ車にも造詣が深く、すれ違うだけで車種（鉄道であれば車両）の同定が可能。



山田守彦 Morihiko YAMADA

1973年、福岡県生まれ。鹿児島大学大学院水産学研究科修了後、沖縄座間味島のダイビングサービスでの丁稚奉公を経験し、1999年4月からかごしま水族館勤務。現在、展示課魚類展示係所属。鹿児島周辺の生きものを中心にいろいろな水の生きものの飼育を担当。ライフワークであるダイビングを活かし、実際に見てきた海の環境を紹介することを心がけている。かごしま水族館がおこなっている、県本土周辺の定置網漁船への定期的な乗船で、2003年から現在まで内之浦を担当している。2008年にかごしま水族館が出版した「～かごしま水族館が確認した～鹿児島島の定置網の魚たち」の編集を担当。現在、さらに10年分のデータを補足した改訂版を作成中。



本村浩之 Hiroyuki MOTOMURA

1973年、静岡県生まれ。博士（農学）。国立科学博物館、オーストラリア博物館を経て、現在、鹿児島大学総合研究博物館、教授（水産学研究科と大学院連合農学研究科を兼任）。日本魚類学会代議員、鹿児島県自然環境保全協会理事、国際自然保護連種の保存専門委員。専門は魚類分類学で、フサカサゴ科を中心に熱帯性魚類の分類と生物地理を研究。最近では南日本や東南アジア諸国の魚類相解明を目指して日夜研究をおこなっている。主な編著・監修書に『Threadfins of the world (family Polynemidae)』、『Fishes of Yakushima Island』、『硫黄島・竹島の魚類』、『与論島の魚類』、『日本のベラ大図鑑』、『学研の図鑑 LIVE・魚』、『Market fishes of Panay』、『鹿児島湾の魚類』などがある。





黒潮あたる鹿児島 内之浦漁港に水揚げされる魚たち

発行日 2018年3月1日
編集者 小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之
DTP 小枝圭太
発行所 鹿児島大学総合研究博物館
〒890-0065
鹿児島市郡元1-21-30
Tel: 099-285-8141; fax: 099-285-7267
<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/>
印刷所 株式会社朝日印刷
〒890-0055
鹿児島市上荒田5-5-1
Tel: 099-251-2191; fax: 099-253-7331

©2018 The Kagoshima University Museum
Printed in Japan ISBN 978-4-905464-12-9

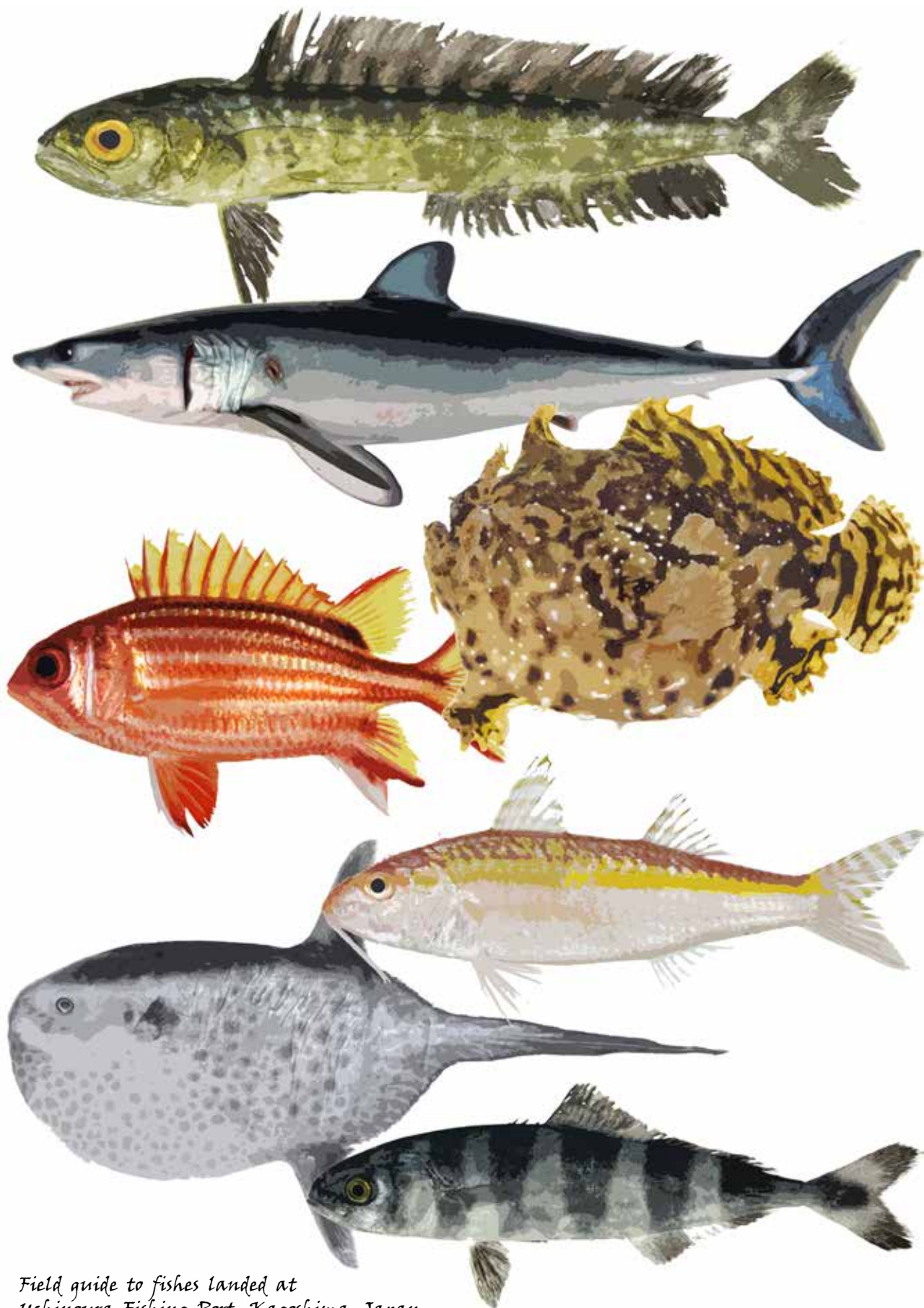
Citation:

小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之（編）. 2018. 黒潮あたる
鹿児島海 内之浦漁港に水揚げされる魚たち. 鹿児島大学総合研
究博物館, 鹿児島市. 520 pp., 1059 figs.

Koeda, K., Hata, H., Yamada, M. and Motomura, H. (eds.) 2018. Field
guide to fishes landed at Uchinoura Fishing Port, Kagoshima, Japan.
The Kagoshima University Museum, Kagoshima. 520 pp., 1059 figs.







*Field guide to fishes landed at
uchinoura Fishing Port, Kagoshima, Japan*